

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第286集

熊谷市

北島遺跡Ⅵ

熊谷スポーツ文化公園建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

—Ⅱ—

〈第2分冊〉

2 0 0 3

埼玉県
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

〈第1分冊〉

口絵

発刊に寄せて

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘調査と報告書作成の経過	2
3.	発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3
II	遺跡の立地と環境	4
1.	地理的環境	4
2.	歴史的環境	6
III	遺跡の概要	12
IV	発見された遺構と遺物	13
1.	竪穴住居跡	22
2.	掘立柱建物跡	303
3.	土壌	305

〈第2分冊〉

4.	堰	344
5.	水路・溝・河川跡・窪地	406
6.	グリッド出土遺物	437
V	調査のまとめ	483
附編		
写真図版		
付図		

4. 堰

調査区北側を西側から東側へ蛇行して流れていた河川跡から、南東方向にほぼ直線方向に開削された水路との分岐点に築かれていた。位置は、C・D・E・F-20グリッドにまたがっていた。本堰跡は複数回数による構築及び補強が行われていた。また、構造材を用いた構築は二回行われていた。

最初の構築は河道流水方向に対して、北側に位置する起点で47°、南側終点部分で58°の角度で湾曲する形で行われていた。構築された堰の構造材及び堤盛土の大部分は河川の氾濫による堰の決壊によって失われていた。

北側の杭列は2列あるうちの西側の列が該当する。杭は長さ40cm以下で上端部が欠損し、部分的に乾燥による収縮及び腐朽が認められた。各杭は東西方向に交差する形で打ち込まれていた。従って杭列上には横木がかませてあった可能性がある。また、各杭の欠損レベルがほぼ同一であることから、堤盛土の流失に伴い欠失したと考えられる。

南側に残る構造材から堰の水路取り付け側約三分の一は、合掌形の造りであったと考えられる。構造材の主幹材にあたる横木は支保5周辺の一部のみ検出された。横木を支える支保工は、支保5、支保6の2本が検出された。いずれも、横木から外れ堤基盤土に落下した状態であった。

支保5は横木に持たせ掛けて、堤前面の杭が打ち込まれていた他、材の後部に杓を切って流れ止めの杭を打ち込んでいた。支保6は材の後部に杓を切らずに角材を斜めに打ち込んで流れ止めとし、その脇に横ずれ防止用の杭を打ち込んでいた。

支保5と支保6の間には三箇所支保工流れ止めの杭が打ち込まれていたことから、本来は支保工が三箇所設けられていたと考えられる。支保工の材の大きさは二回目における堰構築時の用材使用状況から大型材と小型材の交互の施工が想定される。

支保5より南側前面の堤盛土は失われていたが、盛土流失防止用に用いられた杭列及び敷物が検出さ

れていた。杭は同一樹種（ヤマグワ）と考えられる割材をやや斜めに打ち込んでいた。また、1.2m前面（西側）にやや小形の杭を垂直に打ち込んでいた。この2本の杭間には材を薄く板状に裂いた物を丁寧に敷並べ、さらにその上に葦類の茎を直交させて敷いていた。

堰南端で検出された倒木（ムクノキ）は、根が第2回目の堰構築材の下に入り込んでいた事、構築材を壊していないことから、最初の堰構築時以降における河川の氾濫によって倒れた可能性が高い。

尚、土層断面からは、最初の堰構築に伴う盛土は認められなかった。

出土遺物は、土器破片及び石器が堰周囲から散在して出土した他、鹿の頭骨及び鹿角、下顎骨が支保6周辺で纏まって出土した。

2回目の構築は河道流水方向に対して、北側に位置する起点で47°、南側終点部分で64°の角度で湾曲する形で行われていた。構築された堰の北側は最初の堰構築時の杭列東側に併行して、同様に杭列のみ検出された。杭の長さは、10cmから30cm前後で上端部が欠損していた。各杭の間隔は最初の堰の杭列よりもやや広く、ほぼ垂直に打ち込まれていた。各杭の欠損レベルがほぼ同一であることから、堤盛土の一部流失によって欠失したと考えられる。

南側に残る構造材から堰の水路取り付け側約半分は、合掌形の造りであったと考えられる。構造材の主幹材にあたる横木は、倒木に隣接する部分から10mにわたって検出された。長さ5m及び5.5mのヤマグワの枝を払った幹木を、支保3部分で一部重ね合わせて直線に掛け渡していた。横木を支える支保工は合計4本が検出されたいずれも横木と組まれた状態で出土した。使用材の配置は大型材と小型材の交互配置であった。

支保1は大型の幹木（ヤマグワ）の両端を切断し、上方の湾曲した枝分かれ部分に、横木を噛ませていた。横木前面にはやや細い杭が斜めに打ち込まれて

いた。横木の後方には、ずれ止めの杭が打ち込まれていた。後端部は柄を切って丸木の杭を斜めに深く打ち込んでいた。丸木杭の先端部は基盤となる硬砂層に入り込んでいるため潰れていた。支保工の設置角度は基盤層に対して20°の角度であった。

支保2は枝木（ヤマグワ）の両端を切断し、上方の枝分かれ部分に、横木を噛ませていた。横木前面にはミカン割材を用いた杭が斜めに打ち込まれていた。この杭の中央付近を折り曲げて横木に持たせかけていた。後端部は柄を切って丸木の杭を斜めに深く打ち込んでいた。丸木杭の先端部は基盤となる硬砂層に入り込んでいるため潰れていた。支保工の設置角度は基盤層に対して10°の角度であった。

支保3は大型の幹木（ヤマグワ）の両端を切断し、上方の枝分かれ部分に、2本に重なった横木を噛ませていた。横木前面には丸木を用いた杭が斜めに打ち込まれていた。この杭の中央付近を折り曲げて横木に持たせかけていた。後端部は柄を切って丸木の杭を垂直に打ち込んでいた。丸木杭の先端部は基盤となる硬砂層に入り込んでいるため潰れていた。支保工の設置角度は基盤層に対して7°の角度であった。

支保4は枝木（ヤマグワ）の両端を切断し、上方の枝分かれ部分に、横木を噛ませていた。横木前面には丸木を用いた杭が斜めに打ち込まれていた。この杭の中央付近を折り曲げて横木に持たせかけていた。後端部は柄を切って丸木の杭を垂直に打ち込んでいた。丸木杭の先端部は基盤となる硬砂層に入り込んでいるため潰れていた。支保工の設置角度は基盤層に対して11°の角度であった。

支保4より北側に横木が延びていたが支保工は検出されなかった。

横木の前面には、盛土流失防止用に用いられた杭列及び敷物が検出されていた。杭はヤマグワをはじめ各樹種の丸木及び割り材が用いられていた。各杭は当初、ほぼ均等の間隔に打ち込まれていたと考えられるが、その後に補強用に交差させて打ち込まれ

た杭があった。当初打ち込まれた杭はやや斜めに打ち込み、途中で折り曲げて横木に持たせ掛けていた。杭の先端部は基盤層である硬砂層に入り込み潰れていた。杭列の前面及び杭列を覆うように葦類の茎が縦横に重ねられて敷かれていた。敷物の最下層はやや大型の茎を荒く敷き上層に細い茎を丁寧に重ねていた。また、敷物の間には流失防止用に細い杭が無作為に打ち込まれていた。

横木の背後には支保工とは別に、ずれ止めの杭が垂直に打ち込まれていた。

堰南端で検出された倒木（ムクノキ）は、根の部分を堤前面として利用されたと考えられる。

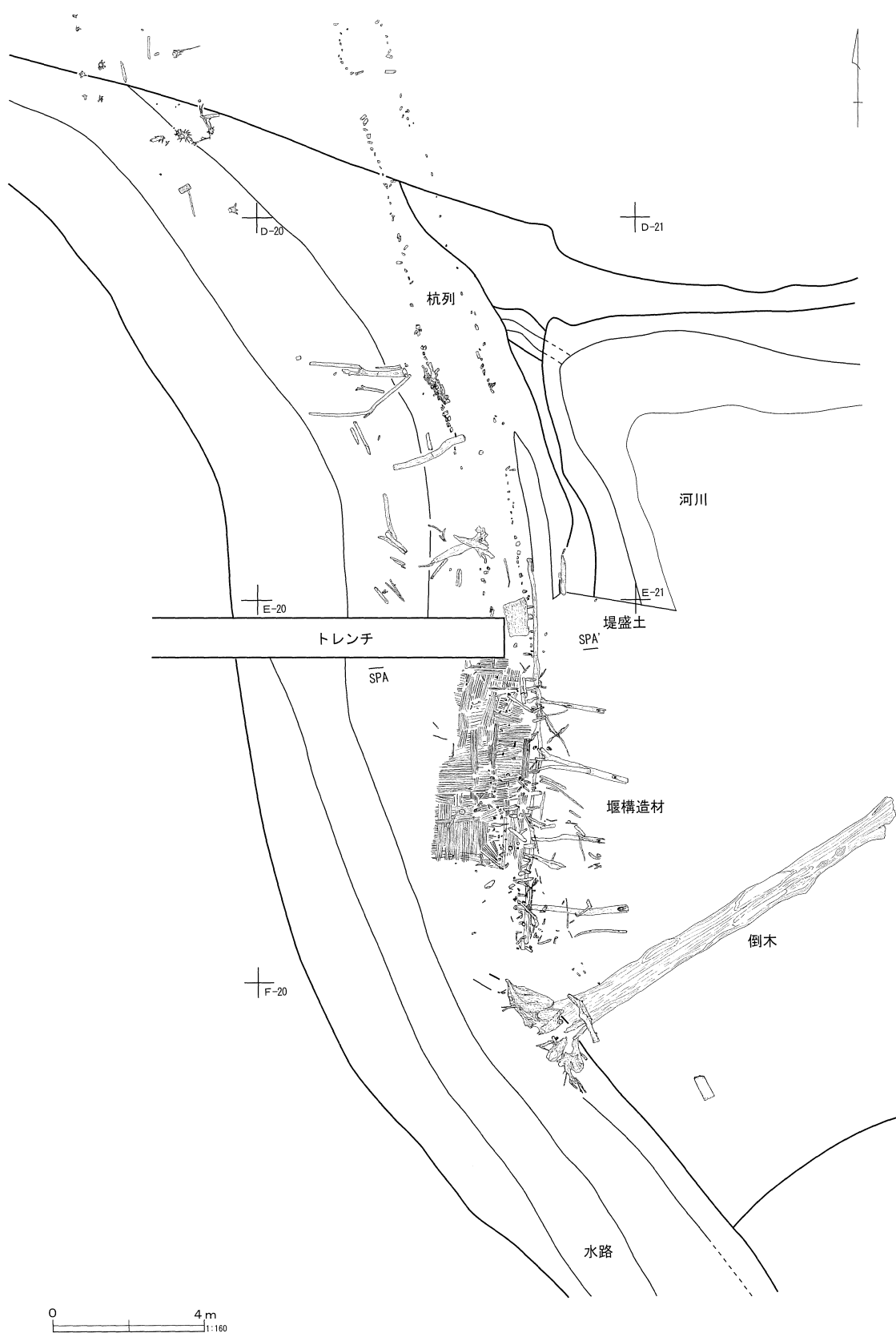
土層断面からは、二回目の堰構築に伴う盛土は基底幅3.8m、盛土最上部幅2.0m、残存高0.7mの台形状であった。堰中央付近には盤に高い位置に横木と杭の一部が検出されたが、全体の状況は把握できなかった。土層断面からその後に2乃至3回の盛土が行われたと考えられる。

このうち弥生時代中期に構築された盛土は第17層に伴う盛土までが該当すると考えられる。この場合盛土高は、1.2mとなる。

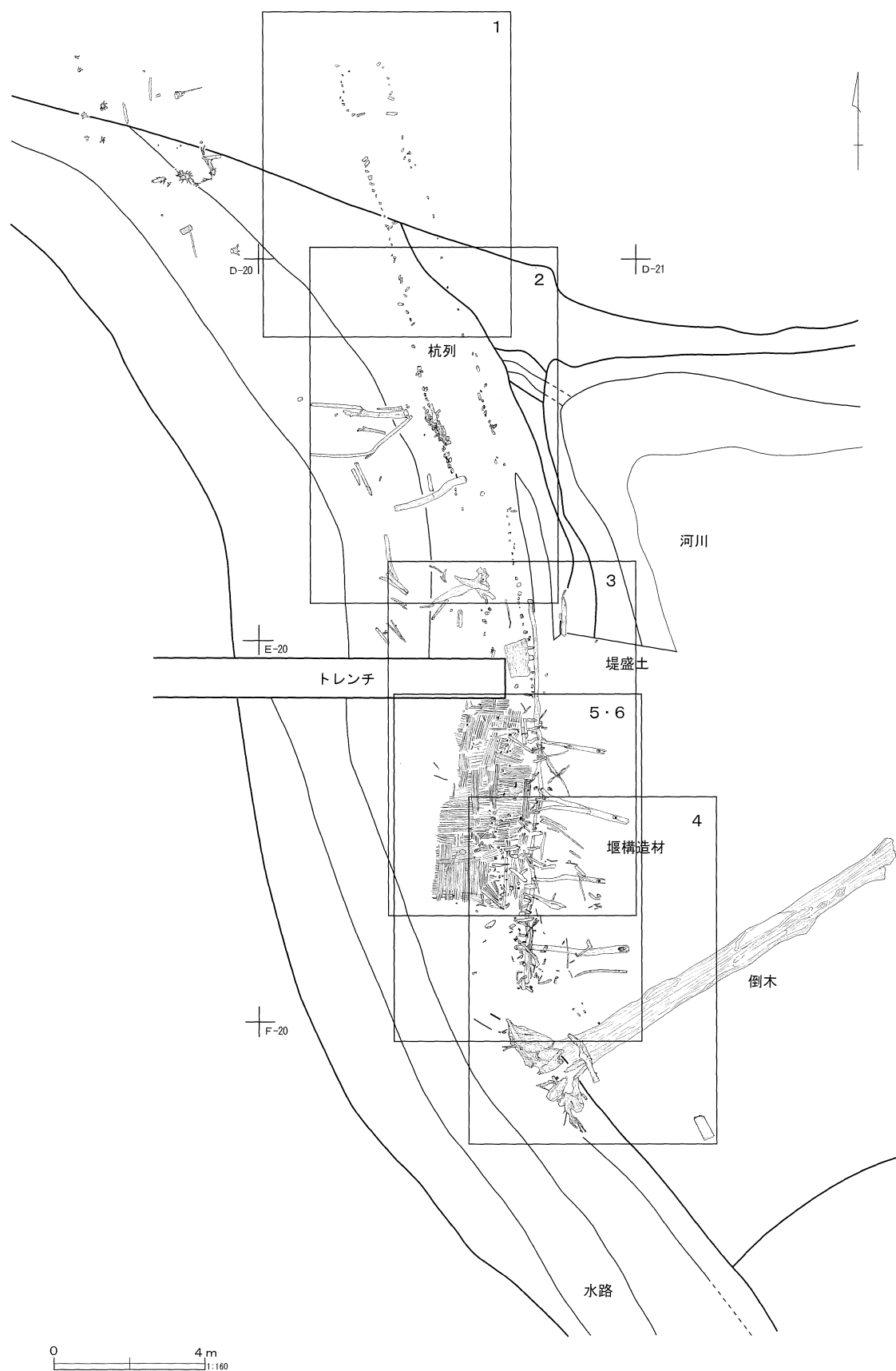
図示した盛土残存部分等高線図は、土層断面第12層にあたり、この上層に堆積する第9層を切り込んで古墳時代前期の方形周溝墓が構築されていることからそれ以前に構築されたものと考えられる。

出土遺物は、堰南側、葦類が敷かれた窪地状の部分から纏まって出土した。窪地状の部分は泥炭層が堆積しており、水位が低い時期には停滞もしくは乾燥していたものと考えられる。この泥炭層中から、煤及び有機物が付着して黒色化した甕、台付甕など多量の土器片が出土した。また、石器は大型の砥石などと伴に多量の剥片が纏まって出土した。

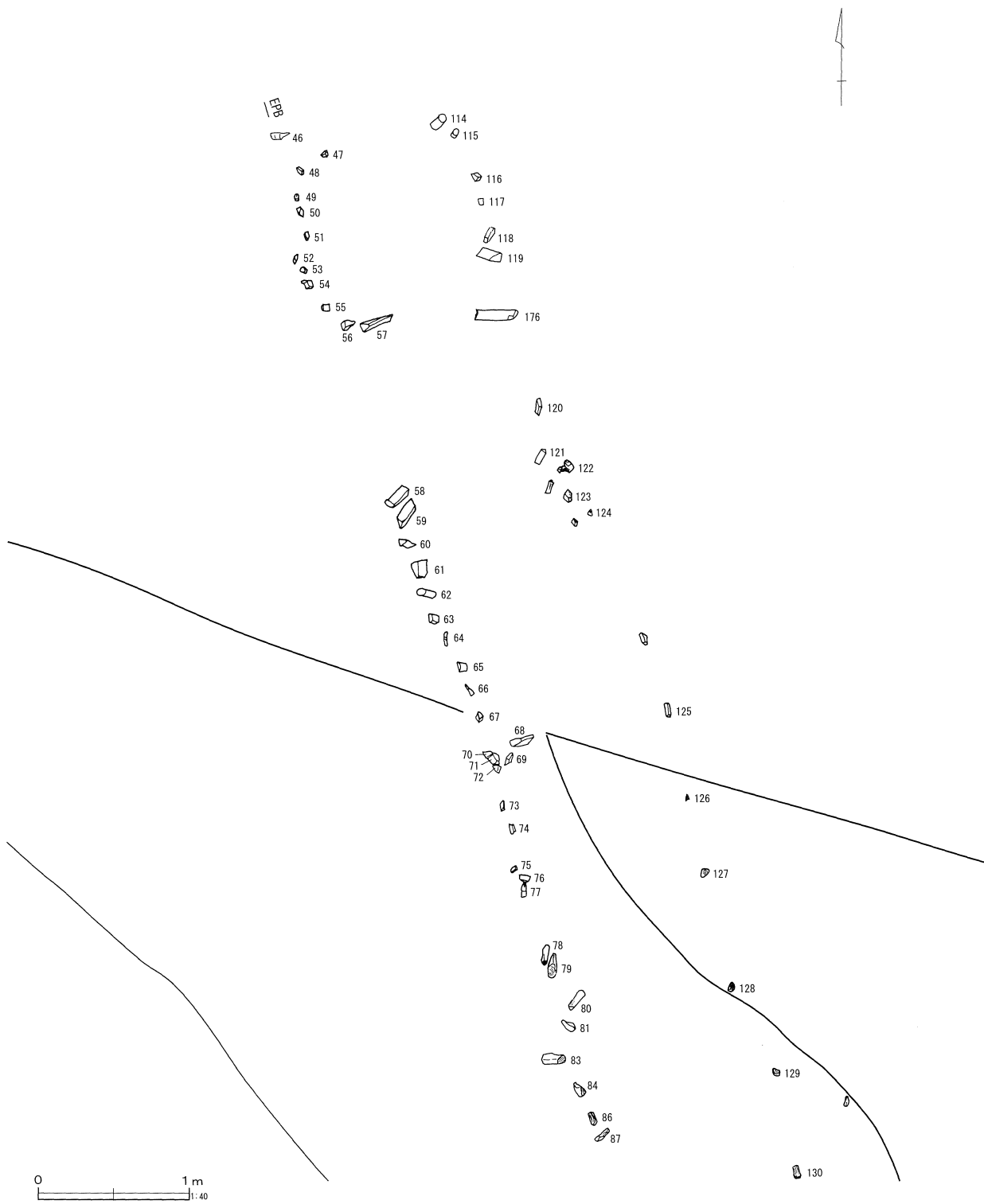
この他に、刃部を欠損した打製石斧を装着した直柄斧、刳物容器破片、刳物容器未製品、形代、丸木弓などの木製品、栃の実、鬼胡桃などの堅果類、鹿・猪などの破碎された骨片が出土した。



第298図 堰全体図



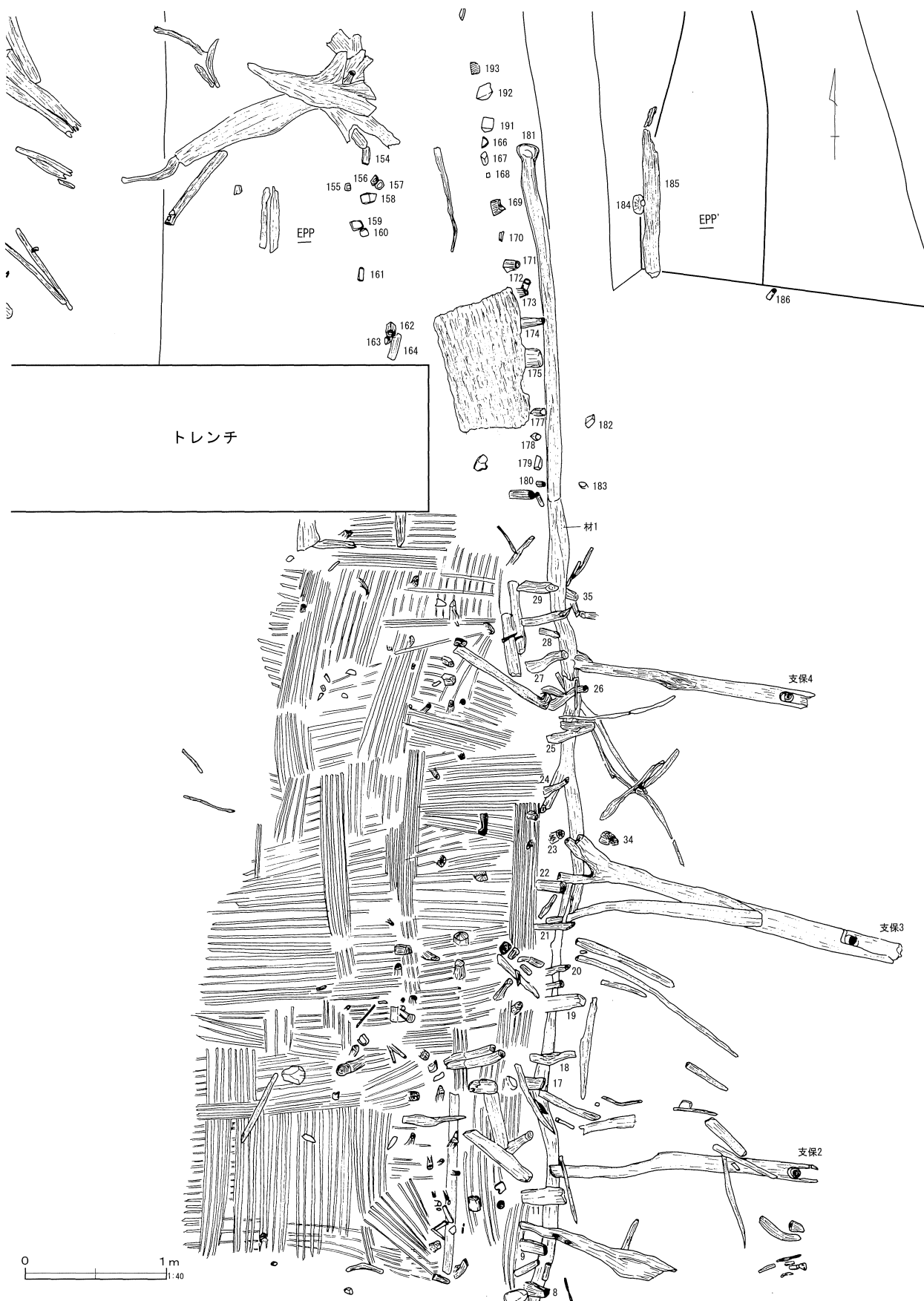
第299図 堰区割図



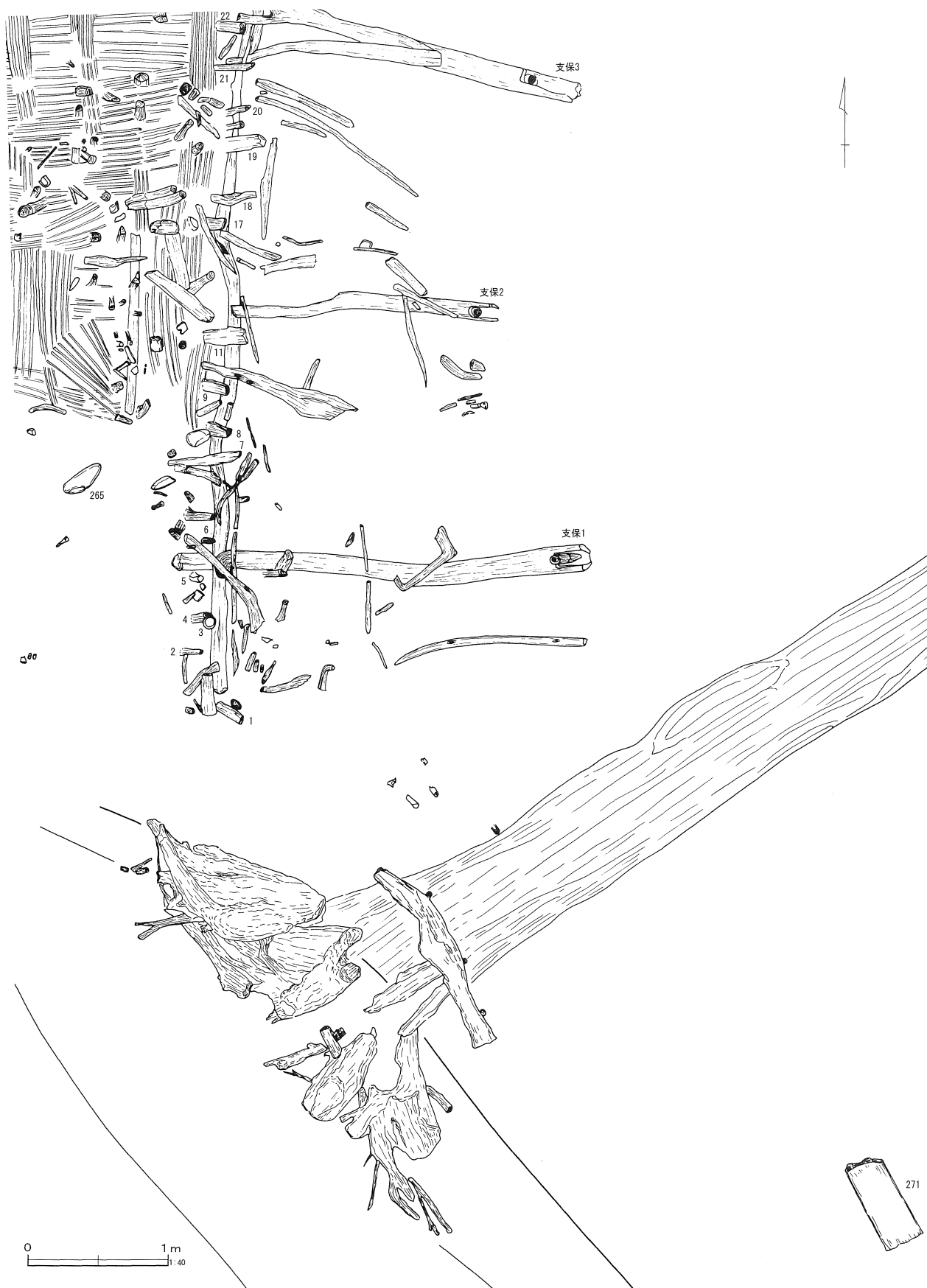
第300図 堰(1)



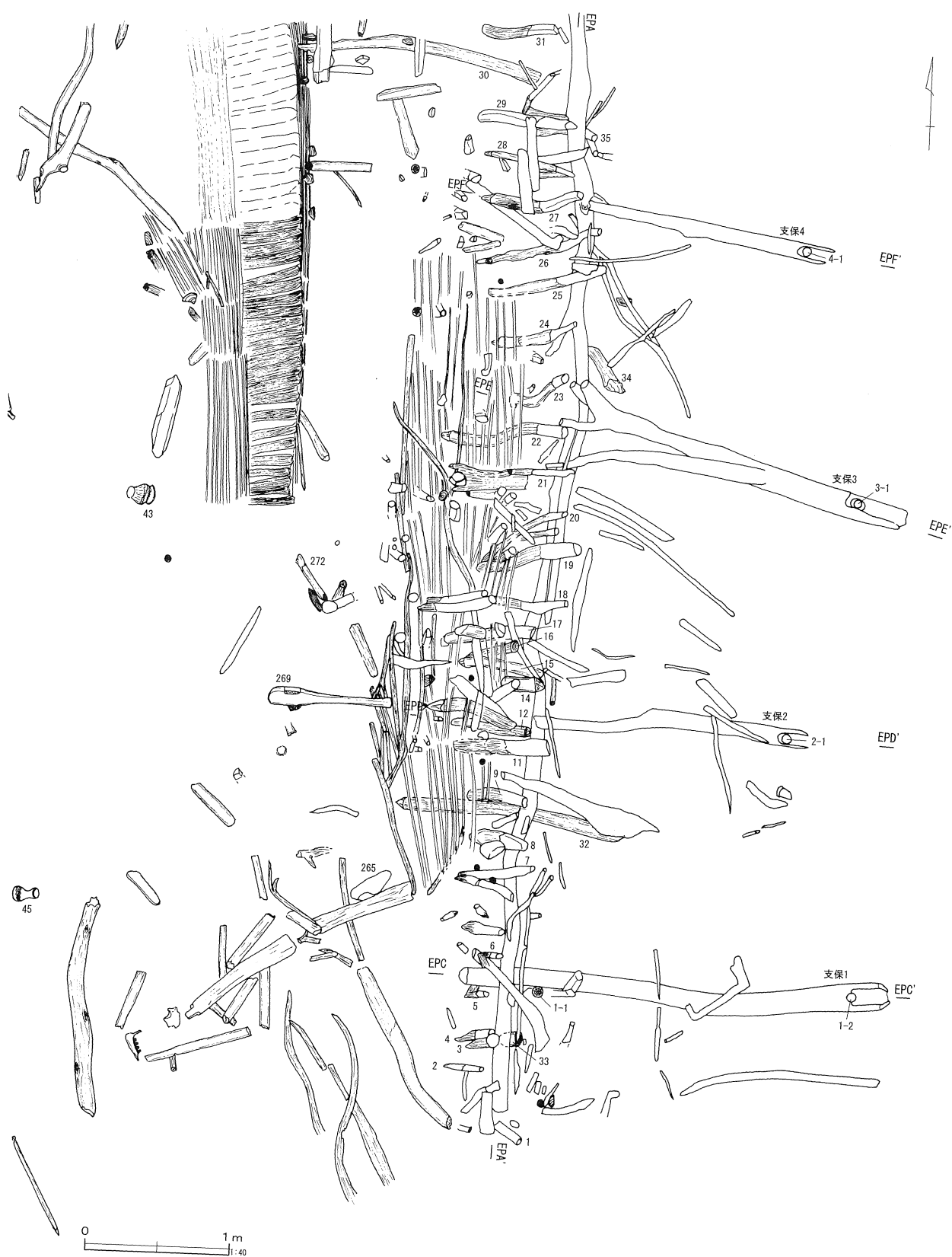
第301図 堰(2)



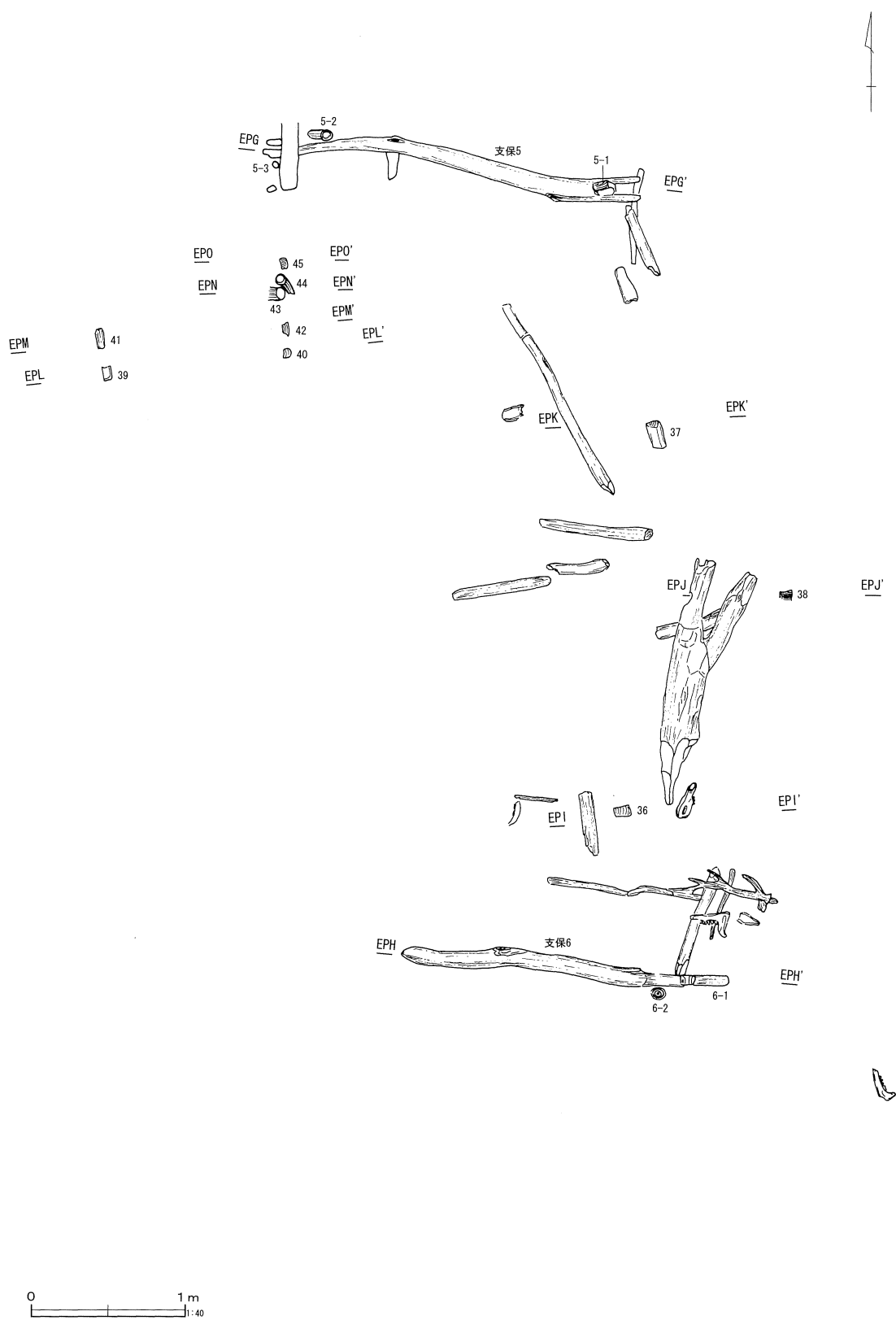
第302図 堰(3)



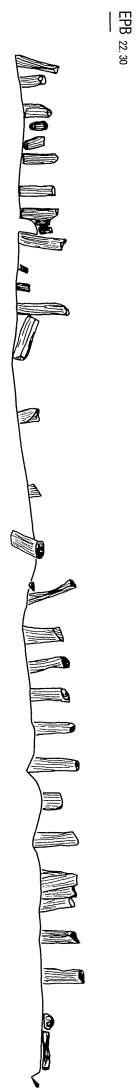
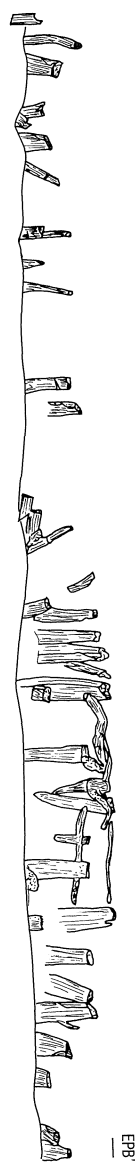
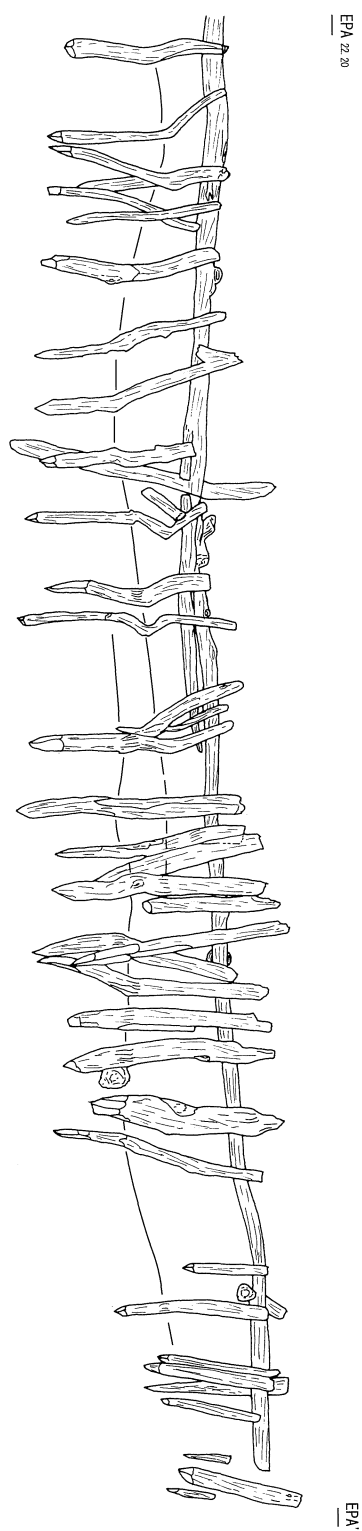
第303図 堰(4)



第304図 堰(5)

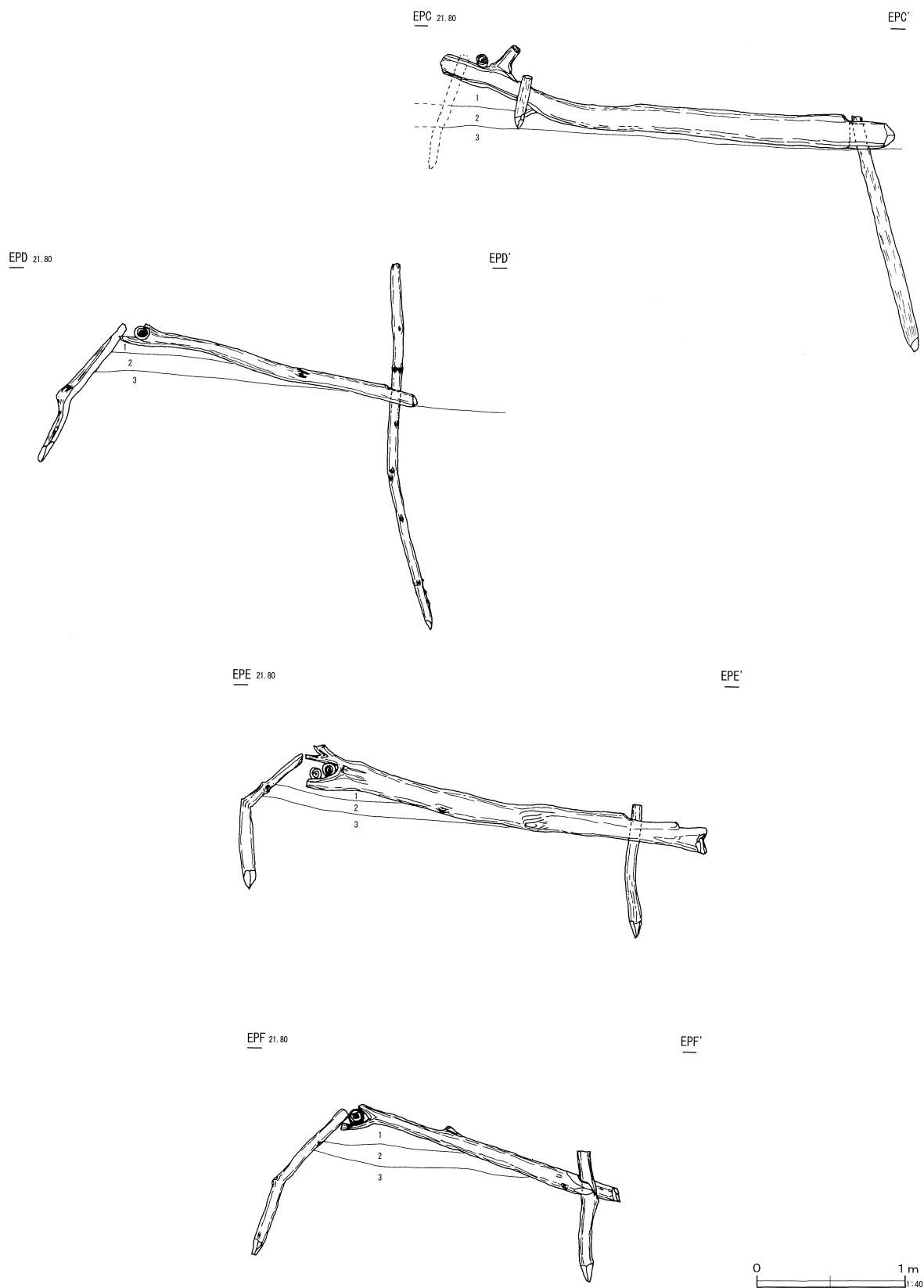


第305図 壕(6)

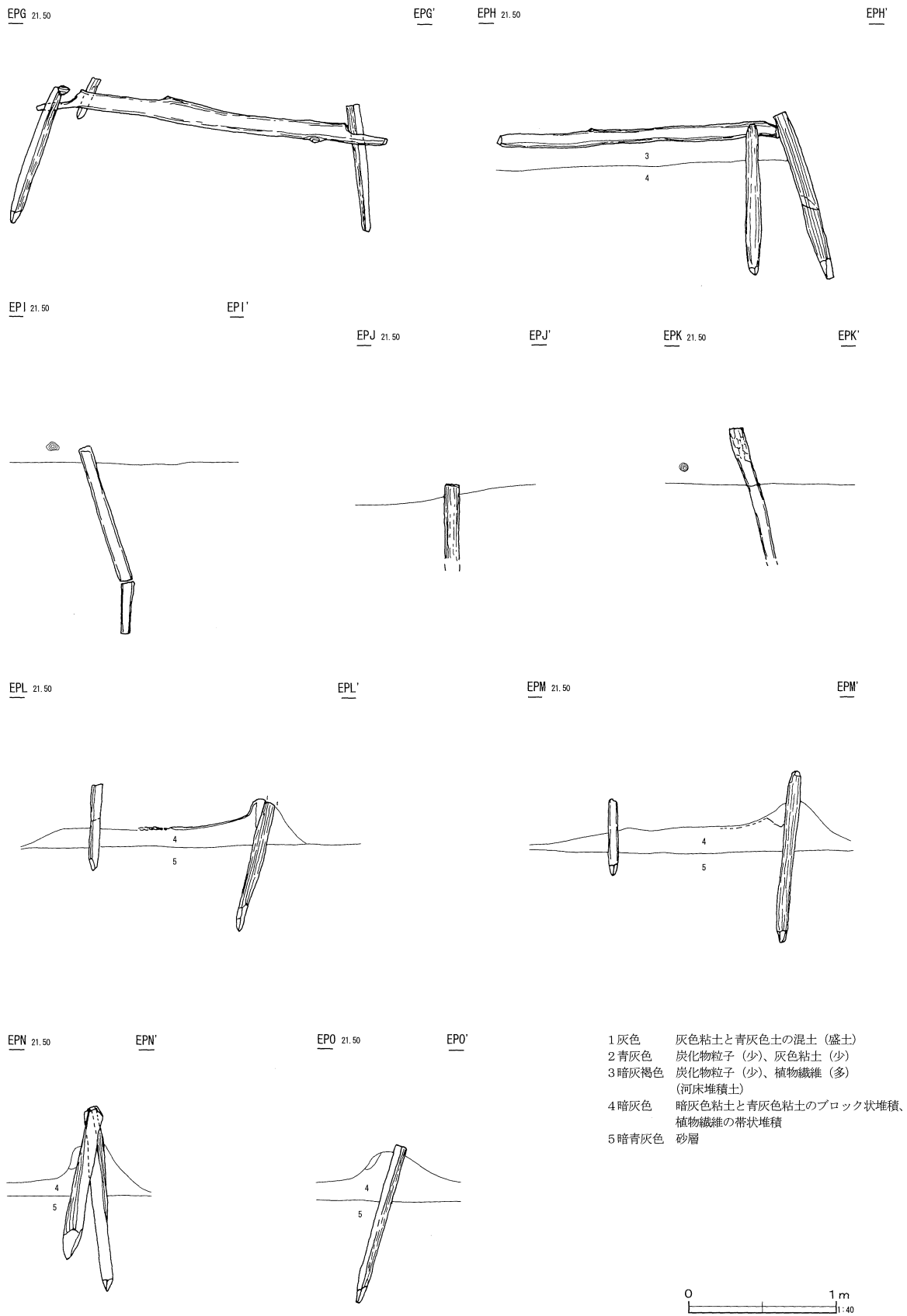


0 1 m
1:40

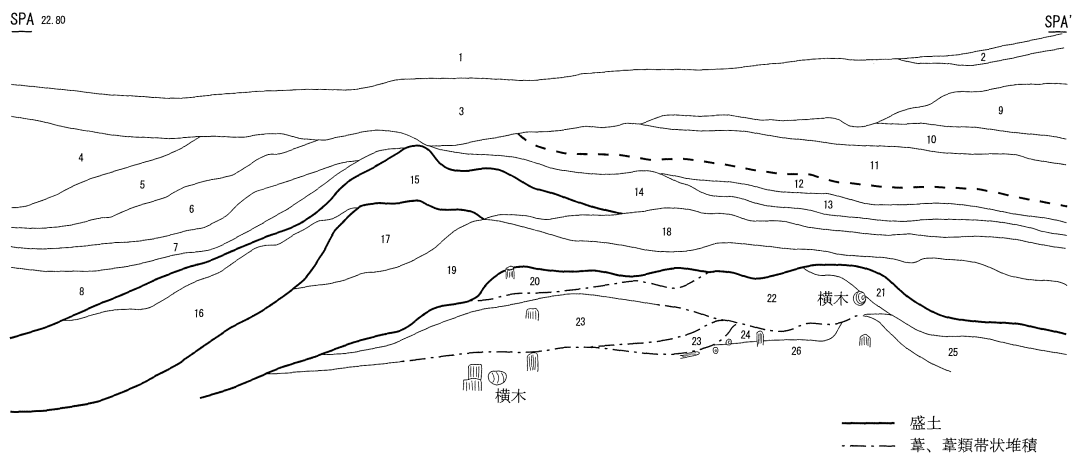
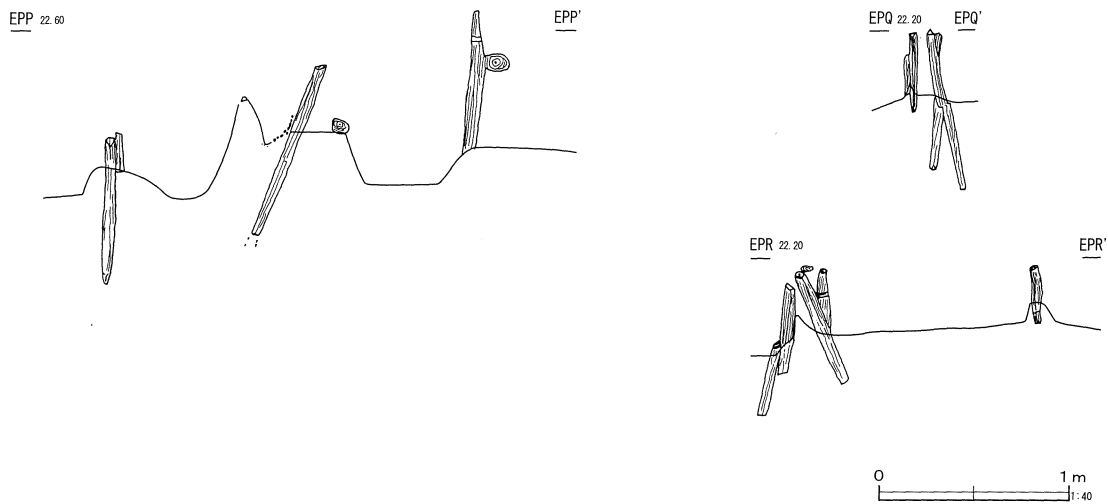
第306図 堰杭列見通図



第307図 堰構築材横断面図(1)

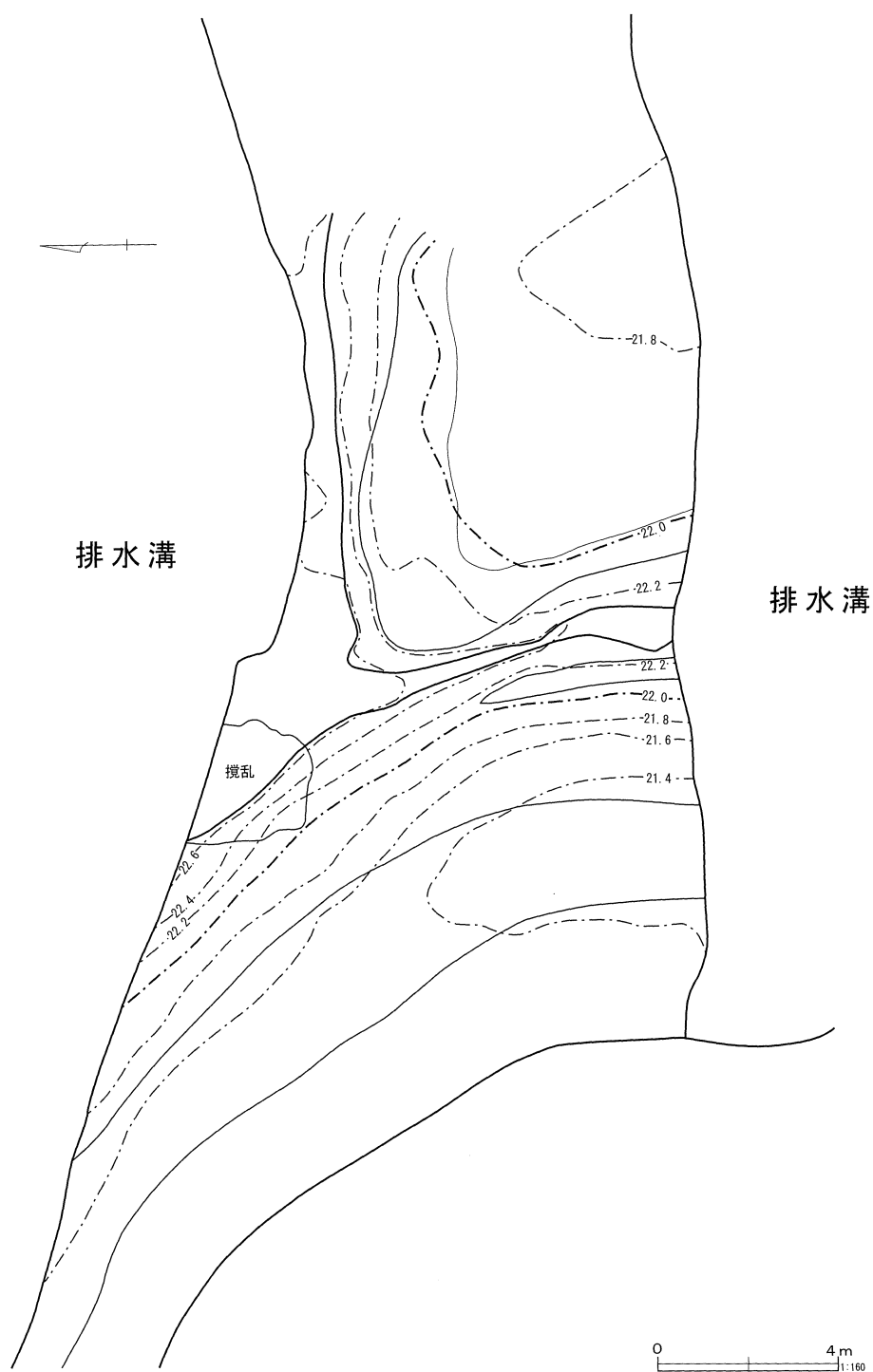


第308図 堰構築材横断面図(2)

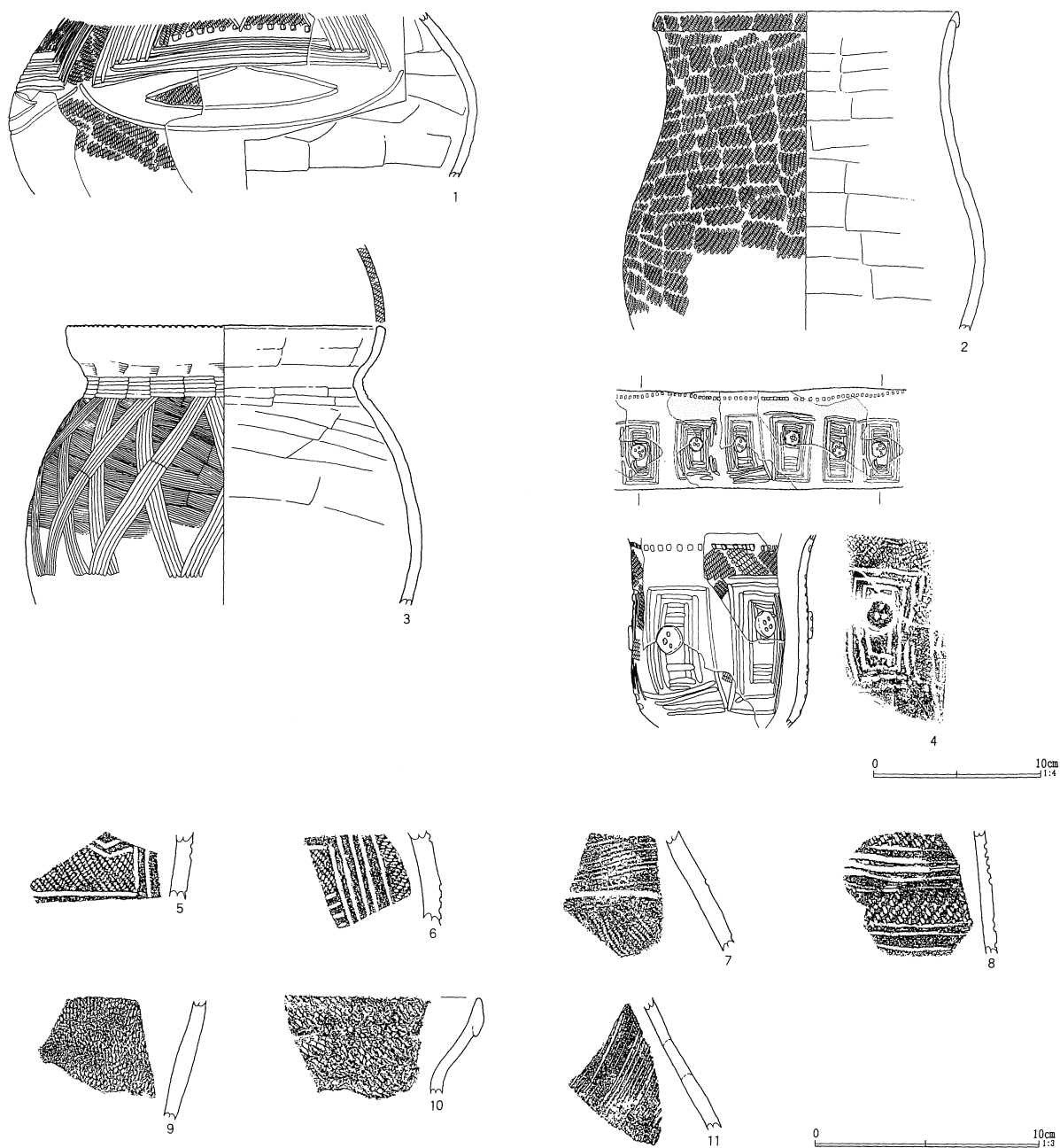


- | | | |
|----|--------|---|
| 1 | オリブ灰色 | 粘質土、鉄分（多）（古代堆積土） |
| 2 | 灰オレンジ色 | 火山灰（F A） |
| 3 | 黒褐色 | 洪水砂帯状堆積、炭化物粒子（多）、鉄分（多）、植物繊維（多）（古墳時代堆積土） |
| 4 | 暗灰褐色 | 洪水砂層、流木を含む粘土の攪拌土 |
| 5 | 暗灰色 | シルト質 |
| 6 | 暗灰色 | シルト質、粘質土（多） |
| 7 | 暗灰色 | 粘質土、炭化物粒子帯状堆積 |
| 8 | 暗灰褐色 | 炭化物粒子（多）、植物繊維（多）、根茎付着鉄分（多） |
| 9 | 緑灰色 | 砂層（古墳時代前期以前の洪水砂層） |
| 10 | 灰色 | 砂層、炭化物帯状堆積（古墳時代前期以前の洪水砂層） |
| 11 | 灰褐色 | シルト質、炭化物の帯状堆積、根茎付着鉄分（多） |
| 12 | 青灰色 | 粘質土、均質（盛土の可能性あり） |
| 13 | 黒褐色 | 粘質土、炭化物帯状堆積、明灰色粘土帯状堆積 |
| 14 | 黒褐色 | 粘質土、明灰色粘土（多） |
| 15 | 青灰色 | 粘質土、均質（盛土） |
| 16 | 黒褐色 | 粘質土、炭化物粒子（少）、植物繊維（多） |
| 17 | 暗灰褐色 | 粘質土、炭化物粒子（少）、青灰色粘土（多）（盛土） |
| 18 | 暗灰色 | 粘質土、炭化物粒子帯状堆積、植物繊維（多） |
| 19 | 暗灰色 | 粘質土、炭化物粒子（少）、植物繊維（少）、明灰色粘土（多）（盛土の可能性あり） |
| 20 | 青灰色 | 粘質土、均質、底面に植物繊維帯状堆積（葦類敷物）（盛土） |
| 21 | 暗青灰色 | 粘質土、炭化物粒子（少）、青灰色粘土（多）、植物繊維（多）（盛土流失土？） |
| 22 | 青灰色 | 炭化物粒子（多）、植物繊維帯状堆積（葦類敷物）（盛土） |
| 23 | 黒褐色 | 粘質土、均質、炭化物粒子（多）、植物繊維帯状堆積2枚（盛土） |
| 24 | 暗青灰色 | 粘質土、均質、灰色粘土ブロック状堆積（構造材床土？） |
| 25 | 暗灰褐色 | 粘質土、均質、明灰色粘土ブロック状堆積（盛土流失土？） |
| 26 | 暗灰褐色 | 粘質土、炭化物粒子（多）、植物繊維（多）（河床堆積土） |

第309 堰構築材横断面図(3)・堰盛土断面図



第310図 堰盛土残存部分等高线图



第311図 下段堰出土遺物

下段堰出土遺物（第311図）

1は、壺胴部である。算盤玉状に張り出す器形を呈する。胴部上半部に重四角文を施文している。重四角文内は、原体前々段多条LR {1 1 1} を充填する鋸歯文を施文していると考えられる。鋸歯文下に、列点文で縁取りしている。重四角文下に、1本描沈線による、連弧文を施文している。また、連弧文内に、同一原体縄文を充填した三角文を施文して

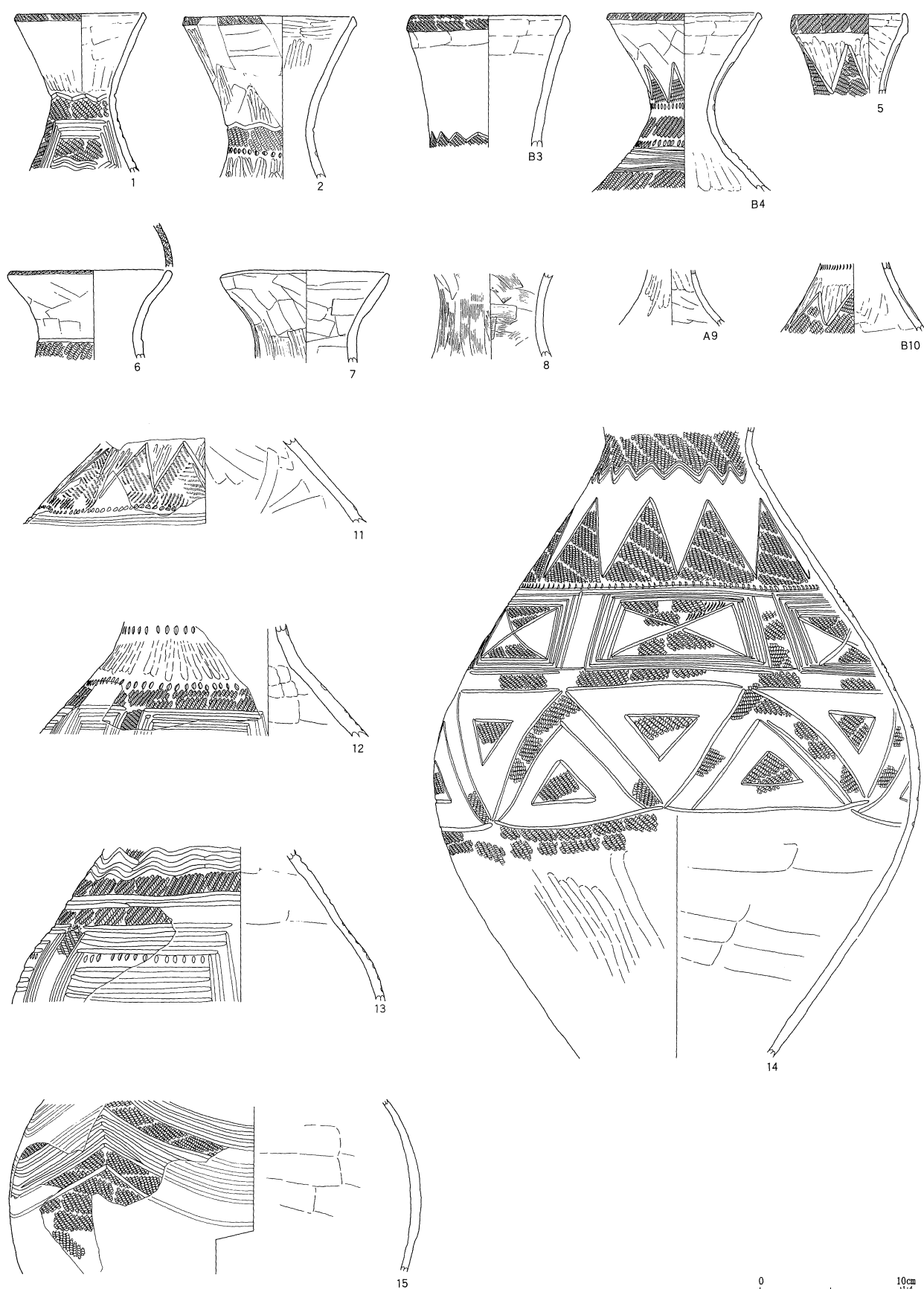
いる。連弧文下には、縄文帯を連弧文に沿わせて施文している。内面に工具によるナデが施されている。2は、複合口縁を呈し、胴部最大径が口縁部径を上回る甕である。口端部は、平坦に面取りされている。口縁部は、原体前々段多条LR {1 1} を施文している。口縁部以下も同一原体により施文している。内面は、工具によるナデが施されている。3は、口縁部が、屈曲して内彎し、胴部が球胴形を呈する甕

である。口端部は、丸みがあり、原体LR単節縄文を施文している。口縁部無文帯を構成し、横位のハケ調整が施されている。頸部は、5本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を施文している。胴部は、ハケ調整後同一工具による、斜格子文を施文している。内面は、工具によるナデを施している。4は、台付甕胴部であるが、筒形に近い器形を呈する。脚部及び口縁部を欠損している。頸部に押引き状の列点文を施文している。列点文下に原体LR単節縄文を斜位施文して縄文帯を設けている。縄文帯下に縦長の重四角文を5単位施文している。区画文は、横位の沈線の本数が縦位の沈線に比べて多い。また、中央部に、多孔のボタン状貼付文を貼付している。区画文間に同一原体縄文を充填している。5・6は、壺胴部で同一個体である。重四角文を施文している。区画内は、単位工具による波状文及び原体RL単節縄文を充填している。7は、壺頸部である。櫛描直線文下に、原体RL単節縄文を施文している。8は、壺胴部上半である。原体LR単節縄文及び1本描沈線による平行線文を交互に施文している。9は、甕胴部である。地文に原体オオバコ系擬縄文を施文している。10は、複合口縁を呈する甕である。口端部より地文原体反撚RRを施文している。全面に煤が付着している。11は、甕胴部である。櫛歯条痕による、斜行文を施文している。

上段壺出土遺物（第312～327図）

1は、直線的に開く単口縁の壺である。口端部を外削ぎ状にし、原体RL単節縄文を施文している。口縁部無文帯下、頸部には、1本描沈線による波状文で区画し、下段に重四角文を3単位施文している。区画文内は、波状沈線文及び同一原体縄文を充填している。また、区画文間にも、縄文を充填している。重四角文下端より斜位の沈線が認められることから、フラスコ形文が施文されている可能性がある。2は、直線的に開く単口縁の壺である。口端部は、外削ぎ状を呈し、原体LR単節縄文を施文している。口縁部無文部には、縦位のミガキがかけられている。

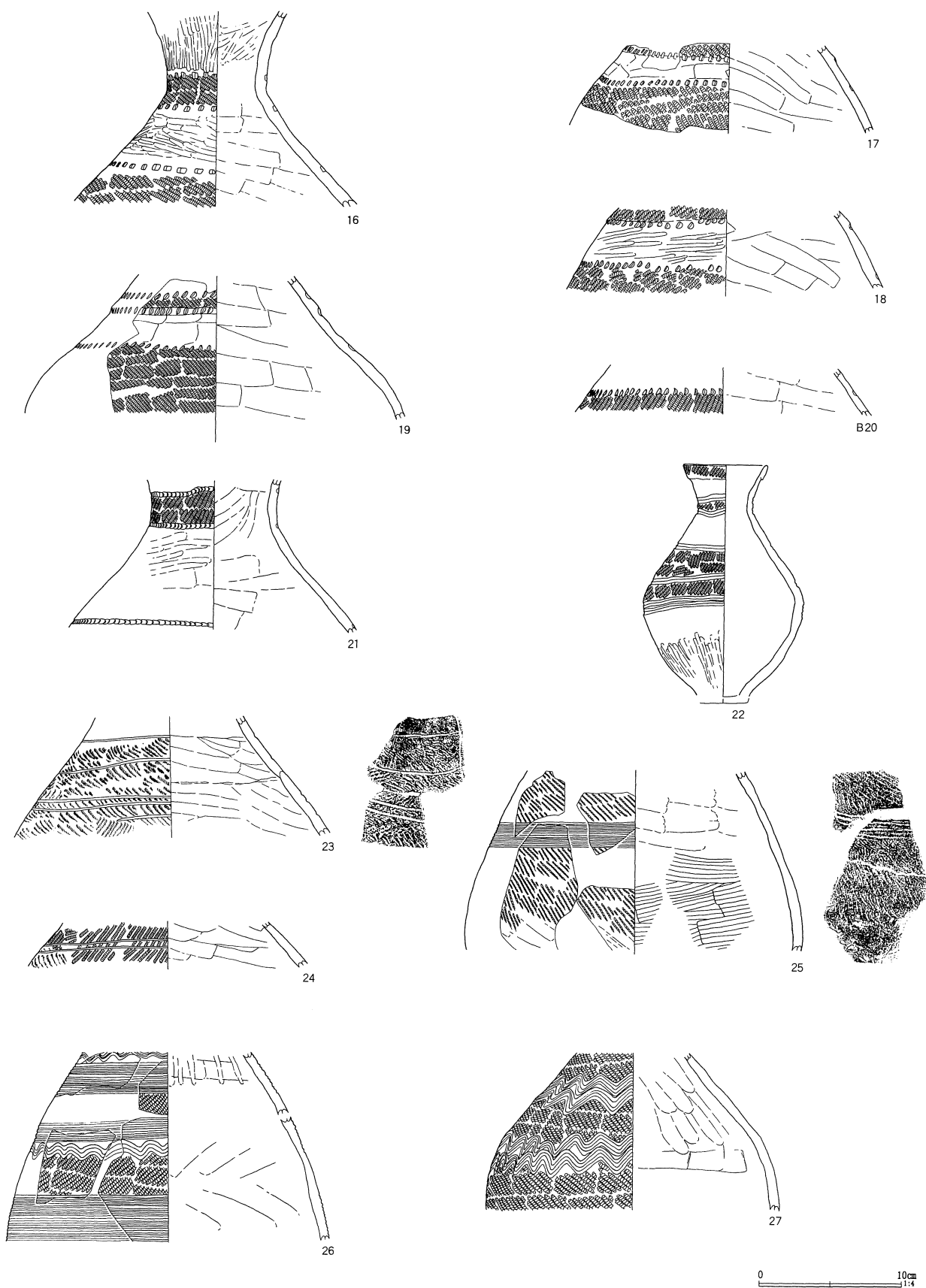
頸部は、1本描沈線による波状文と列点文間に同一原体縄文を充填している。列点文下に縦位のミガキをかけ鋸歯文を施文している。3は、直線的に開く単口縁の壺である。口縁部は、幅広の外削ぎ状を呈し、原体RL単節縄文を施文している。施文部分は、赤彩されている。口縁部無文帯下に、1本描沈線による山形文を施文し、同一原体縄文を充填している。4は、頸部が大きくくびれ口縁部が直線的に開く壺である。口端部は、外削ぎ状を呈し、原体LR単節縄文を施文している。口縁部無文帯下に、同一原体縄文を充填する鋸歯文を施文している。鋸歯文下に、列点文を2段施文し、原体LR単節縄文を充填している。列点文下に、1本描沈線による平行線文及び縄文帯を施文している。縄文施文部分は、赤彩されている。5は、朝顔形に開き複合口縁を呈す壺である。口縁部は、原体LR単節縄文を施文している。口縁部以下無文部は、縦位のミガキをかけている。無文帯下に、同一原体縄文を充填する鋸歯文を施文している。6は、朝顔形に開く単口縁の壺である。口端部に原体LR単節縄文を施文している。口縁部無文帯下頸部を削り出し突帯とし、同一原体縄文を充填している。7は、朝顔形に開く短口縁の壺である。口端部は、平坦に仕上げられている。口縁部は、無文で、工具による、ケズリ及びハケ状工具によるナデが施されている。内面は、ヘラ状工具によるナデが施されている。8は、壺頸部である。縦位のハケ調整が施されている。内面にも、ハケ調整が施されている。9は、壺頸部である。縦位のミガキがかけられている。全面赤彩されている。10は、壺頸部である。列点文下、無文帯に原体LR単節縄文を充填する鋸歯文を施文している。縄文部分は、赤彩されている。11は、壺頸部である。原体無節Lを充填する鋸歯文を施文している。鋸歯文下に、列点文を施文している。列点文下には、1本描沈線による平行線文を施文している。12は、壺頸部から胴部にかけての破片である。頸部は、列点文を2段施文して無文帯を設けている。胴部は、重四角文を6単



第312図 上段堰出土遺物(1)

位施文している。重四角文間は、原体LR単節縄文を充填している。13は、壺頸部から胴部にかけての破片である。頸部は、1本描沈線による波状文下に、太さの異なる原体によるLR単節縄文を充填している。縄文帯下に、平行沈線2条を施文して区画している。胴部は、重四角文を施文している。重四角文内は列点文と平行沈線文を充填している。区画文間に同一原体縄文を充填している。14は、壺である。胴部の張り出しは弱い。頸部は、原体RL単節縄文を斜位に施文し、下段に2本一単位工具による波状文を施文している。波状文下を無文とし、同一原体縄文を充填する鋸歯文を施文している。鋸歯文下に、列点文及び平行沈線を施文して胴部と区画している。胴部上半は重四角文を施文している。区画内をさらに格子目状に区画して、上下を縄文で充填している。充填する原体に無節L縄文が部分的に施文されている。重四角文上下両端の沈線は、隣の区画沈線に繋げている。重四角文下には、三角文を施文している。区画文間及び区画内に、同一原体縄文を充填している。胴下半部には、縦位のミガキが施されている。15は、壺胴部である。1本描沈線による、多条の連弧文と原体RL単節縄文を交互に施文している。連弧文は4単位構成になると考えられる。連弧文下胴下半部にも、縄文を施文している。16は、壺頸部である。縦位のミガキをかけた無文帯下に、原体RL単節縄文を施文して、ヘラ状工具による列点文で区画している。列点文下に、横位のミガキをかけた無文帯を設けている。無文帯下に列点文を施文して区画し、同一原体縄文を充填している。内面は、ミガキ及び工具によるナデが認められる。17は、壺頸部である。原体RL単節縄文施文下に、段を設けた列点文を施文して区画している。列点文下に、横位のナデを施した無文帯を設け、下段に列点文と同一原体縄文を施文している。内面に工具によるナデが施されている。18は、壺頸部である。原体LR単節縄文施文下に、段を設けた列点文を施文して区画している。列点文下に横位のミガキを施

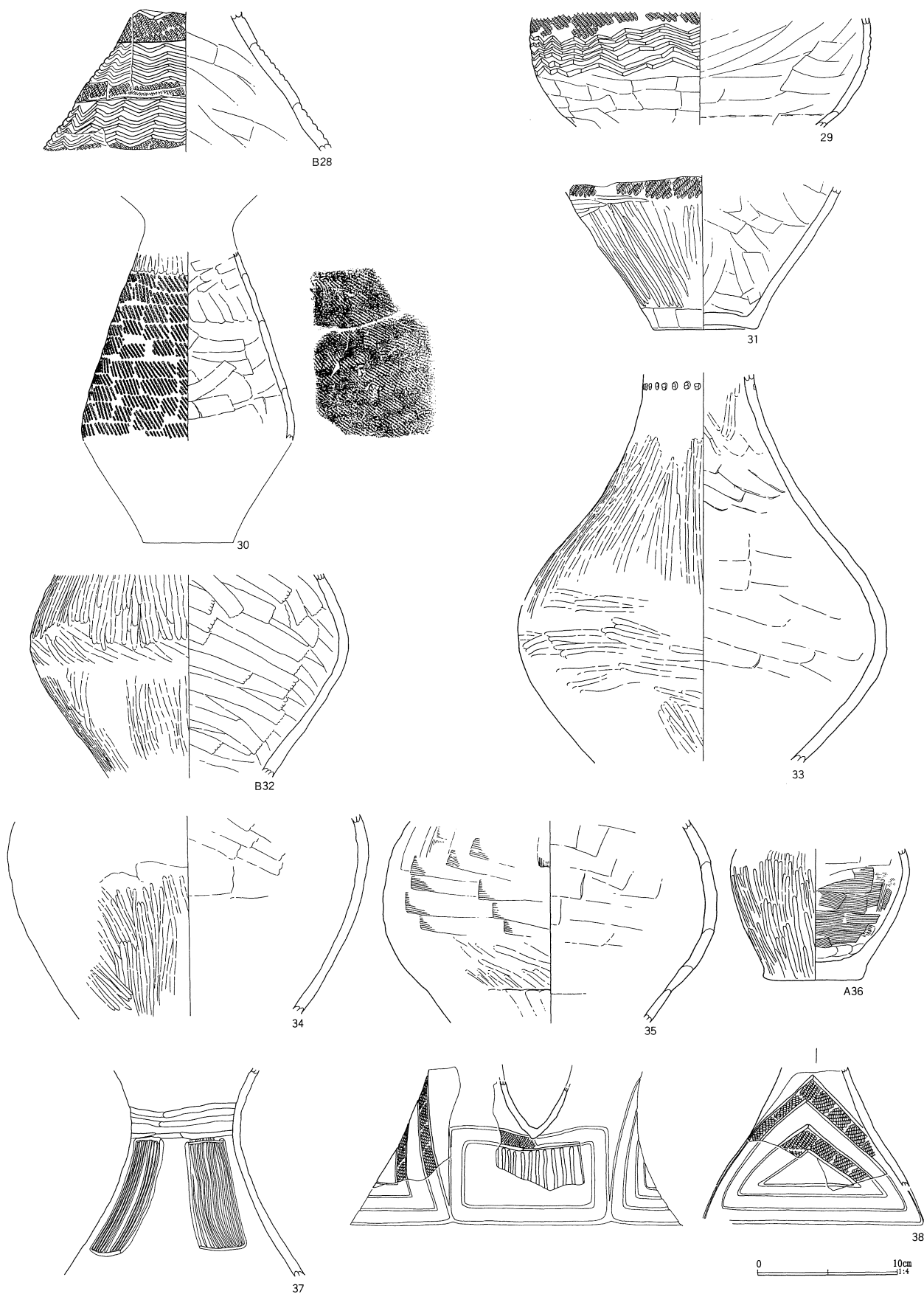
した無文帯を設けている。無文帯下に、列点文及び同一原体縄文を施文している。19は、壺頸部から胴部にかけての破片である。無文帯下に、段を設けた列点文と原体RL単節縄文を施文して区画している。区画下に、列点文を2段施文して無文帯を設けている。列点文下に同一原体縄文を施文している。内面は、工具によるナデが施されている。20は、壺頸部である。無文帯下に、列点文を施文して、下段に原体前々段多条LR {1 1 1} を充填している。縄文部分は赤彩されている。内面に、ヘラ状工具によるナデが施されている。21は、壺頸部である。半截竹管状工具による押引き状の刺突列2条で区画して、原体直前段多条L {RRR} を充填している。無文帯下にも、押引き状の刺突列が施文されている。内面に木口状工具によるナデが施されている。22は、複合口縁を呈する小型の壺である。底部を欠損している。口縁部は、原体LR単節縄文を施文している。頸部は、無文帯間に2本一単位工具による平行線文で区画し、同一原体縄文を充填している。胴部は、2本一単位工具による平行線文と縄文帯を交互に2段施文している。胴下半部を2本一単位工具2条施文して区画している。胴下半部は、縦位のミガキが施されている。23は、壺胴部である。地文に原体無節Rを粗雑に施文し、細沈線による平行線文を、間隔を空けて施文している。地文に原体無節Lを施文している部分がある。内面は、工具によるナデを施している。24は、壺胴部である。地文に原体無節多条L {r r r} を施文し、細沈線による平行線文を施文している。地文に原体無節Rを施文している部分がある。内面は、工具によるナデが施されている。25は、壺胴部である。地文に原体附加条一種RL+Rを施文し、4本一単位櫛描直線文を2段施文している。内面は、棒状工具及び木口状工具によるナデが施されている。26は、壺胴部である。単位不明の櫛描波状文下に、櫛描直線文を4段施文している。直線文下に原体LR単節縄文を充填し、下段に直線文を2段施文している。このモチー



第313図 上段堰出土遺物(2)

フ構成を下段に同じく施文している。最下段の直線文は、4段構成となる。27は、壺胴部である。地文原体RL単節縄文を施文し、4本一単位櫛歯状工具による波状文2条を、間隔をあけて2段施文している。内面に工具によるナデが施されている。28は、壺頸部から胴部にかけての破片である。1本描沈線山形文下に原体RL単節縄文を充填している。これと同じモチーフ構成を下段に2段施文している。山形文は多条化している。縄文部分は、赤彩している。内面はヘラ状工具によるナデが施されている。29は壺胴部である。原体無節多条R {1 1 1} を施文し、下段に、1本描沈線による山形文を施文している。胴下半部は、工具によるナデが施されている。内面は、工具によるナデが施されている。30は、胴部が算盤玉状に張り出す壺である。薄手の造りである。縦位のミガキを施す無文帯下に、地文原体複節RLrを施文している。内面は、工具によるナデが施されている。31は、壺胴下半部である。太さの異なる原体によるLR単節縄文を施文している。縄文施文下に、縦位のミガキが施されている。底面は縦位のミガキがかけられている。内面はナデが施されている。32は、壺胴部である。無文地で、縦位及び斜位のミガキが丁寧にかけられている。胴部上半に赤彩痕跡が認められる。内面は木口状工具によるナデが施されている。33は、壺である。口縁部及び底部を欠損している。頸部に半截竹管状工具による列点文を施文している。胴部は、無文地で、上半部は縦位のミガキが施されている。胴部中央は横位のミガキ、胴下半部は、斜位のミガキが施されている。頸部内面に棒状工具によるナデが施されている。胴部は、ヘラ状工具によるナデが施されている。34は、壺胴部である。無文地である。胴中央部分は、工具による横位のナデが施されている。胴下半部は、縦位のミガキが施されている。内面は、工具によるナデが施されている。35は、壺胴部である。無文地である。胴部上半部に縦位のハケ調整が認められる。胴部中央は、横位のハケ調整が施さ

れている。胴下半部は、ミガキが施されている。内面はナデが施されている。36は、壺胴下半部である。焼成良好で硬質である。縦位のミガキが丁寧にかけられている。全面赤彩されている。底面はヘラ状工具によるナデを施している。内面は、横位のハケ調整が施されている。37は、壺である。頸部無文帯に1本描沈線による平行線文を3条施文している。平行線文下に櫛歯状工具による垂下文を充填した短冊状のモチーフを施文している。無文部は、縦位のミガキがかけられている。38は、双口壺頸部から胴部上半にかけての破片である。接合しない2片からなるが、焼成、胎土、施文具などの特徴から同一個体と判断して復原実測した。正面部分は、1本描沈線による三角文を施文している。文様帯内に、原体LR単節縄文を充填している。側面部分は重四角文を施文していると考えられる。文様帯内に同一原体縄文を充填している。区画文内は垂下沈線を充填している。39は、甕胴部である。地文に原体RL単節縄文を横位に施文している。内面は、工具によるナデを施している。40は、複合口縁を呈し、胴部最大径が口縁部径を上回る甕である。口端部は、平坦に面取りし原体直前段反撚RR {1 1} を施文している。口縁部は、同一原体縄文を施文している。頸部無文帯下に、半截竹管状工具による押引きの刺突列を施文している。胴部は、同一原体縄文を一段施文して下段に無文帯を設け無文帯下に粗雑に施文している。無文帯部分には、ヘラ状工具によるナデが認められる。内面は、ハケ状工具によるナデが施されている。41は、甕胴部である。地文に原体LR単節縄文を胴部最大径部分まで施文している。胴下半部は、縦位のミガキがかけられている。内面は、部分的にミガキが認められる他、ナデが施されている。胴上半部に煤が付着している。42は、受口口縁を呈し底部に向かって緩やかに窄まる甕である。焼成良好で硬質である。口端部は、丸みがあり原体LR単節縄文を施文している。口縁部は、4本一単位櫛描波状文を施文している。口縁部に部分的に縄



第314図 上段堰出土遺物(3)

文を施文している。頸部は、同一工具による擬似簾状文を施文している。簾状文下に、垂下文を施文し、文様間を波状文で充填している。垂下文の上下交互に単孔のボタン状貼付文を貼付している。胴下半部は、同一工具によるナデ調整後磨り消している。外面上半部に煤が付着している。内面は、口縁部に丁寧なミガキをかけている。頸部付近に斜位のミガキが認められる。口縁内面及び胴下半部にオコゲが付着している。43は、口縁部がくの字状に屈曲して外反する小型の甕である。焼成良好で硬質である。口端部は、平坦に面取りし、原体RL単節縄文を施文している。口縁部破無文帯を構成する。胴上半部は、5本一単位櫛描波状文を施文している。波状文は区切りが短く重複が著しい。胴下半部は、ヘラ状工具によるナデを施している。器面に有機物を含む煤が付着している。底面はナデ調整である。内面はヘラ状工具によるナデが施されている。44は、口縁部がくの字に外反して段を持つ台付甕である。薄手の造りで、焼成良好かつ硬質である。口端部は、平坦に面取りされ、原体無節L縄文を施文している。口縁部は、同一原体の縄文を施文し、波状沈線を廻らしている。波状沈線の切れ目には、双孔のボタン状貼付文が貼付されている。頸部無文帯下に2条の沈線で区画している。胴部は、ハケ調整後コの字重ね文を施文している。文様間頂部及び中央部に双孔のボタン状貼付文が貼付されている。内面は、ヘラ状工具によるナデが施されている。45は、小型の台付甕である。焼成良好で硬質である。口縁部及び脚部の一部を欠損している。頸部に単位不明工具による擬似簾状文を施文している。胴部は、5本一単位櫛描波状文を施文している。区切りが短く、重複が著しい。下半部は、縦位のミガキが施されている。外面全体に煤が付着している。内面は、丁寧なミガキが施されている。44の甕と焼成及び施文具の一致が認められる。46は、鉢である。口縁部を欠損している。内外面に丁寧にミガキがかけられ、赤彩されている。47・49は、高坏で、同一個体である。

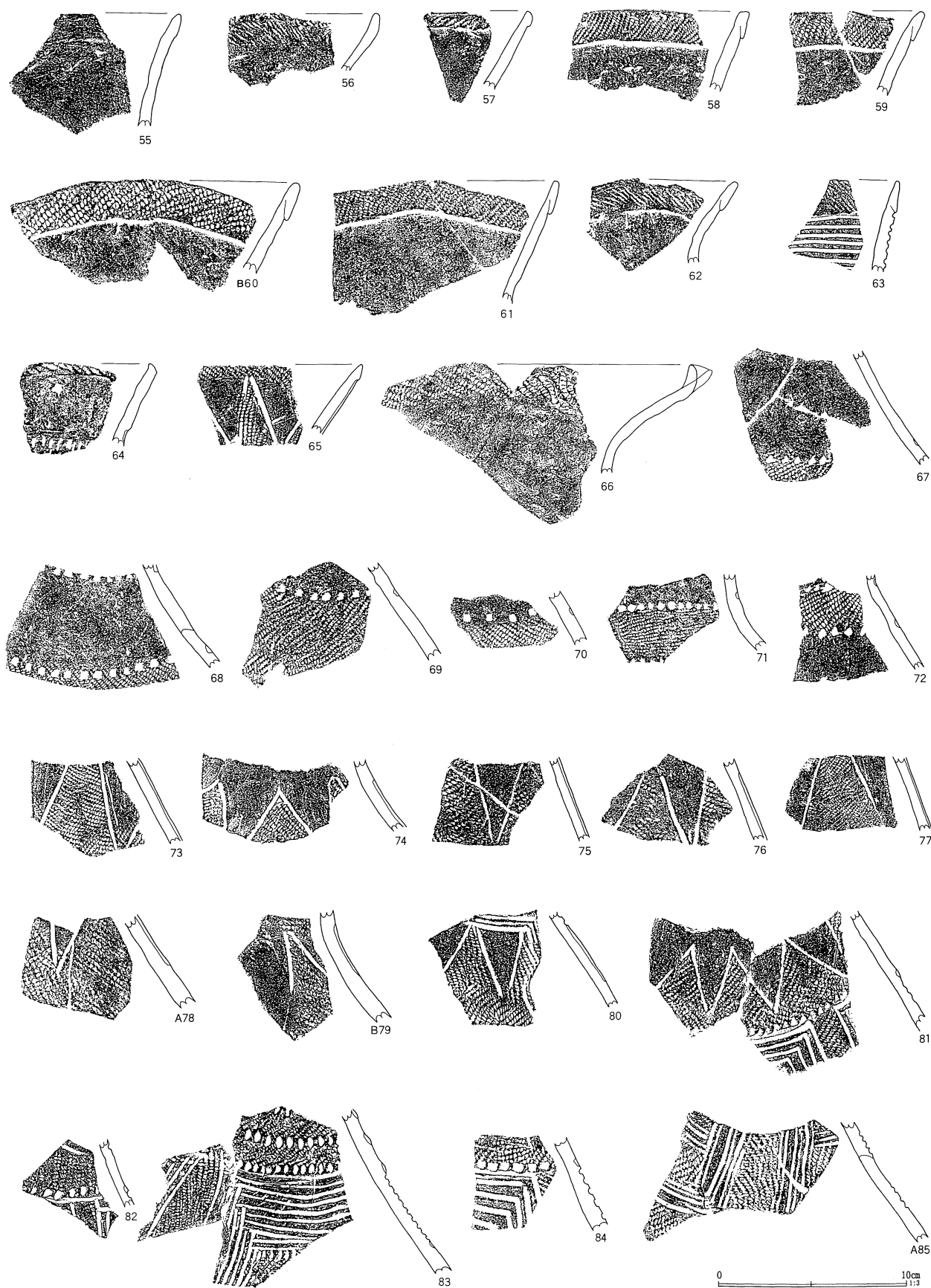
49は、復元実測である。口縁部は、くの字状に大きく外反している。口端部は、丸みがあり、2個一対の突起が付いている。口縁直下に工具による押さえが認められる。坏部は、横位のミガキが施されている。脚部は、縦位のミガキが施されている。坏部内面は横位のミガキが施されている。脚部内面は、ハケ調整が施されている。内外面赤彩である。48は、坏部が内彎する高坏である。口端部は、丸みがある。内外面に丁寧なミガキがかけられている。脚部内面に木口状工具によるナデが施されている。坏部と脚部の接合部分はソケット状を呈している。内外面赤彩である。50は、高坏脚部である。脚部内外面にハケ調整が認められる。内外面赤彩である。51は、高坏脚部である。脚部に縦位のミガキがかけられている。円形の焼成前穿孔による透が、交互段違いに開けられている。52は、高坏脚部である。ハケ調整後にミガキをかけている。脚部内面にも同様の調整を施している。53は、高坏脚部である。内外面に丁寧なミガキがかけられている。脚部内面は、ハケ調整が認められる。内外面赤彩である。54は、高坏脚部である。内外面に丁寧なミガキがかけられている。内外面赤彩である。55は、単口縁の壺である。口端部は、丸みがある。無文で内面に横位のハケ調整が施されている。56は、壺口縁部である。口端部は丸みがある。口縁部に原体無節R縄文を施文している。57は、複合口縁を呈する壺である。口縁部に原体LR単節縄文を施文している。58・59・61は、複合口縁を呈する壺である。口縁部に原体LR単節縄文を施文している。60は、複合口縁を呈する壺である。口縁部に原体直前段多条L〔RRR〕を施文している。口縁部以下は、無文である。縄文部分は、赤彩されている。62は、複合口縁を呈する壺である。口縁部は、原体無節Rを施文している。63は、直線的に立ちあがる複合口縁状の壺である。口縁部は、原体無節多条R〔111〕を施文している。口縁直下に多条の平行沈線を施文している。64は、単口縁の壺である。口



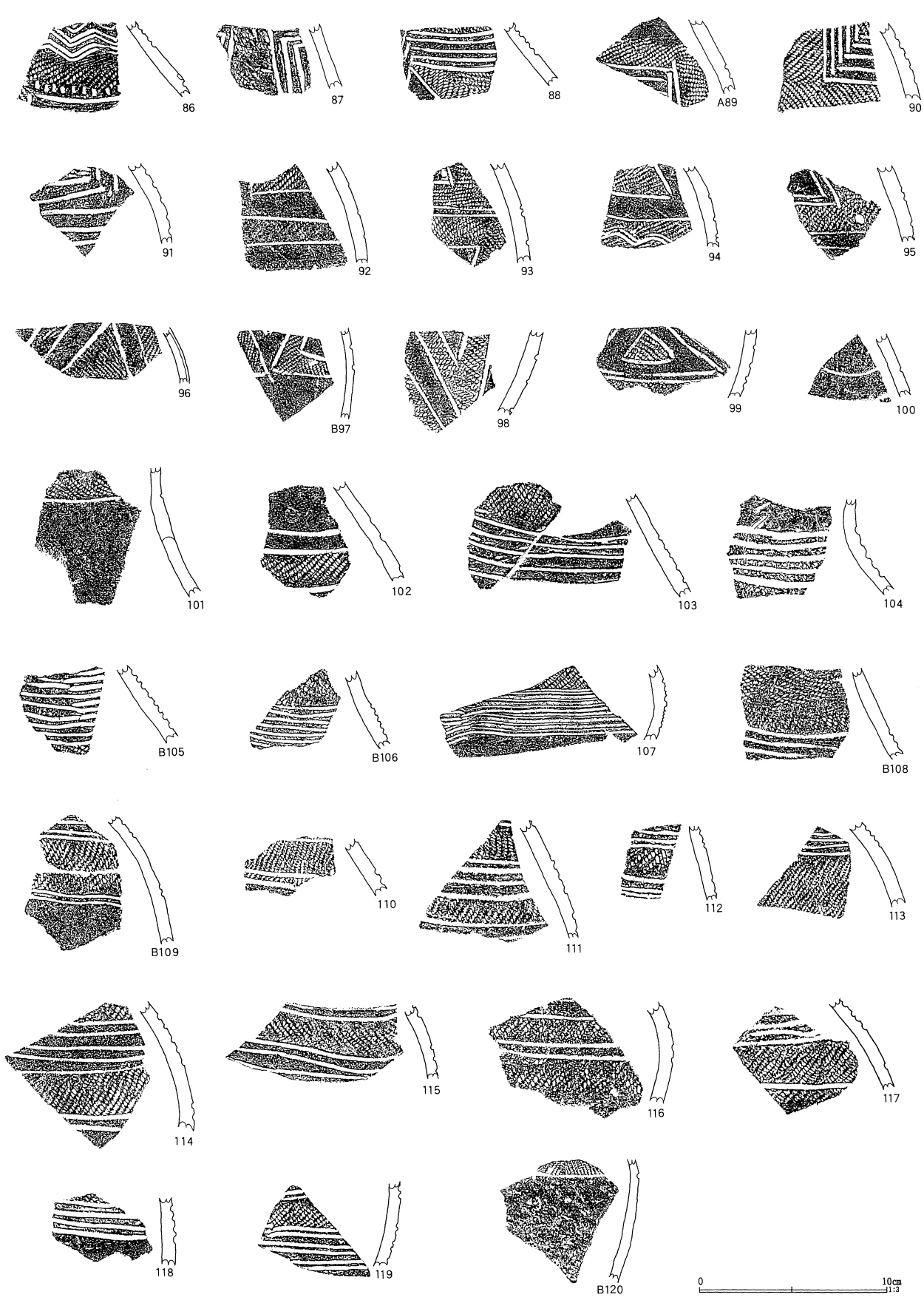
第315図 上段堰出土遺物(4)

端部を外削ぎ状にし、原体無節R縄文を施文している。口縁部無文帯下に、列点文を施文している。65は、単口縁の壺である。口縁部を外削ぎ状にし、原体RL単節縄文を施文している。口縁直下に同一原体縄文を充填する鋸歯文を施文している。66は、大きく外反して口縁部がくの字状に内彎する壺である。片口状を呈している。焼成良好で硬質である。口縁部に原体RL単節縄文を施文している。口縁部以下は、無文である。67は、壺頸部である。無文帯下に列点文を施文している。68は、壺頸部である。列点文下に無文帯を設けている。無文帯下に、列点文と原体RL単節縄文を施文している。69は、壺頸部である。無文帯下に、半截竹管状工具による列点文を施文し、原体LR単節縄文を施文している。70は、壺頸部である。無文帯下にヘラ状工具による列点文を施文し、原体RL単節縄文を施文している。71・72は、無文帯間に列点文で区画して原体LR単節縄文を充填している。73～79は、壺頸部で縄文を充填する鋸歯文を施文している。73は、LR単節縄文、74は、前々段多条LR {1 1 1}、75は、無節多条L {r r r}、76は、RL単節、77は、直前段反撚LL {r r}、78は、複節RLr、79は、原体不明縄文を充填している。78・79は、縄文部赤彩である。80は、壺胴部である。重四角文にフラスコ形文を組み合わせている。区画内に鋸歯文を施文し、下段に原体LR単節縄文を充填している。81は、壺胴部である。原体RL単節縄文を充填する鋸歯文を施文し、下段に段を設けた列点文を施文して区画している。胴部は、重四角文を施文している。重四角文間に同一原体縄文を充填している。82は、壺胴部である。波状沈線文下に、原体直前段多条L {RRR} を施文し、列点文で区画している。列点文下は、重四角文を施文している。83は、壺頸部から胴部にかけての破片である。原体LR単節縄文と隆帯を伴う列点文を2段施文し、下段に重四角文を施文している。区画文内は、列点文及び縄文を充填している。84は、壺胴部である。原体LR単

節縄文下に、列点文を施文している。列点文下に、重四角文を施文している。85は、壺胴部である。重四角文を施文している。区画文内は平行沈線文及び原体前々段多条LR {1 1 1} を充填している。区画間にも同一原体縄文を充填している。縄文部分赤彩である。86は、壺頸部である。2本一単位工具による波状沈線文下に、原体LR単節縄文を施文している。段を設けた列点文下に、重四角文を施文している。87は、壺胴部である。地文に原体無節L縄文を施文し、重四角文を施文している。88は、壺胴部である。重四角文を施文している。区画内をさらに格子目状に区画し、上下に原体前々段多条LR {1 1 1} を充填している。89は、壺胴部である。重四角文を施文し、区画文間を原体LR単節縄文で充填している。全面赤彩である。90は、壺胴部である。重四角文を施文している。区画文間に、原体RL単節縄文を充填している。91は、壺胴部である。重四角文を施文している。92は、壺胴部である。細沈線による重四角文を施文している。区画内に原体LR単節縄文を充填している。93は、壺胴部である。重四角文下に、三角文を施文している。区画内及び区画間に、原体LR単節縄文を充填している。94は、壺胴部である。三角文下に2本一単位工具による波状文を施文している。区画内に原体無節多条L {r r r} を充填している。95は、壺胴部である。三角文を施文し、区画内に原体LR単節縄文を充填している。96～99は、壺胴部で、三角文を施文している。96～98は、原体LR単節、99は、原体RL単節縄文を充填している。97は、縄文部赤彩である。100は、壺胴部である。沈線による弧線状のモチーフを施文している。文様間に原体無節L縄文を充填している。101は、壺頸部である。平行沈線による区画内に、原体RL単節縄文を充填している。縄文帯下は、無文である。102は、壺頸部である。無文帯下に平行沈線で区画し、原体LR単節縄文を充填している。103は、壺頸部である。原体無節多条L {r r r} 施文下に、平行沈線文を



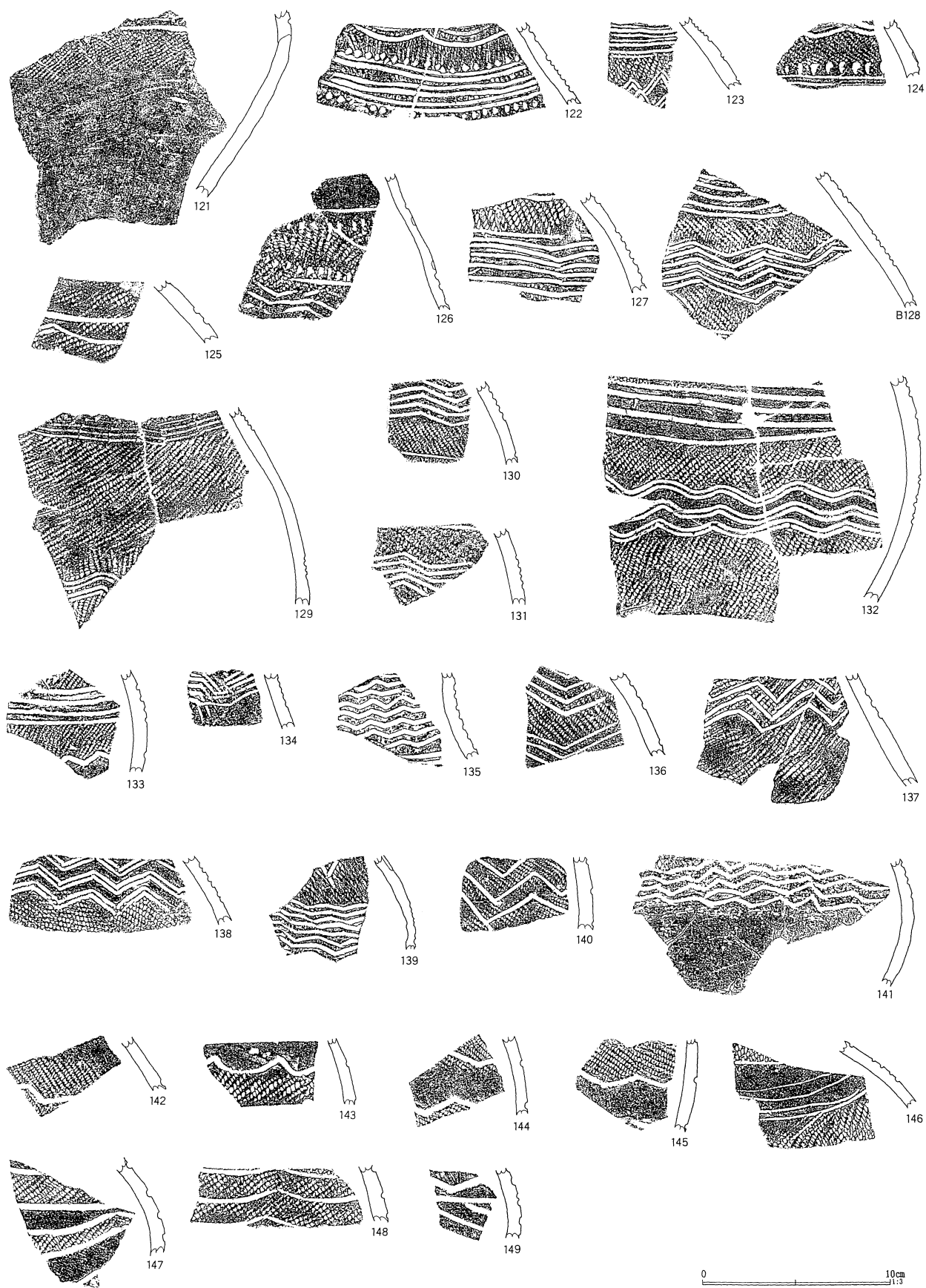
第316図 上段堰出土遺物(5)



第317図 上段堰出土遺物(6)

施文している。104は、壺頸部である。無文帯下に地文原体不明縄文を施文し、平行沈線文を施文している。105は、壺頸部である。多条の平行沈線文を施文している。106は、壺頸部である。原体複節RLrを施文し、下段に多条の平行沈線文を施文している。107は、壺胴部である。原体LR単節縄文施文下に、7本一単位櫛歯状工具による直線文を施文している。108は、壺頸部である。原体RL単節縄文施文下に平行沈線文を施文している。縄文部分は赤彩されている。109は、壺胴部である。2本一単位工具による平行線文間に、原体LR単節縄文を充填している。縄文部は、赤彩されている。110～119は、縄文帯と平行沈線文の組み合わせで、壺胴部である。110は、原体直前段多条L {RRR}、111～114・116・117・119は、原体LR単節、115は、原体RL単節縄文を充填している。120は、壺胴部である。原体LR単節縄文施文下に沈線で区画している。下半部は無文である。縄文部は赤彩されている。121は、壺胴部である。平行沈線下に、原体LR単節縄文を施文している。122は、壺頸部である。地文に原体無節多条L {r r r} を施文し、2本一単位工具による連弧文を施文している。連弧文下に、列点文で縁取りをする平行線文を施文している。123は、壺胴部である。2本一単位工具による平行沈線文及び波状文間に原体LR単節縄文を充填している。124は、壺胴部である。波状沈線文下に原体RL単節縄文を充填し、段を設けた列点文で区画している。列点文下に平行沈線文を施文している。125は、壺胴部である。焼成良好で硬質である。地文に原体LR単節縄文を施文し、沈線直線文下に連弧文を施文している。内面にハケ調整が施されている。126は、壺頸部である。平行沈線文及び列点文で区画し、原体直前段多条L {RRR} を充填している。平行線文下に波状沈線文を施文している。127～133は、平行沈線文と波状沈線文の組み合わせで壺胴部である。127は、原体前々段多条RL {r r r}、128は、原体RL単節縄文、129は、4

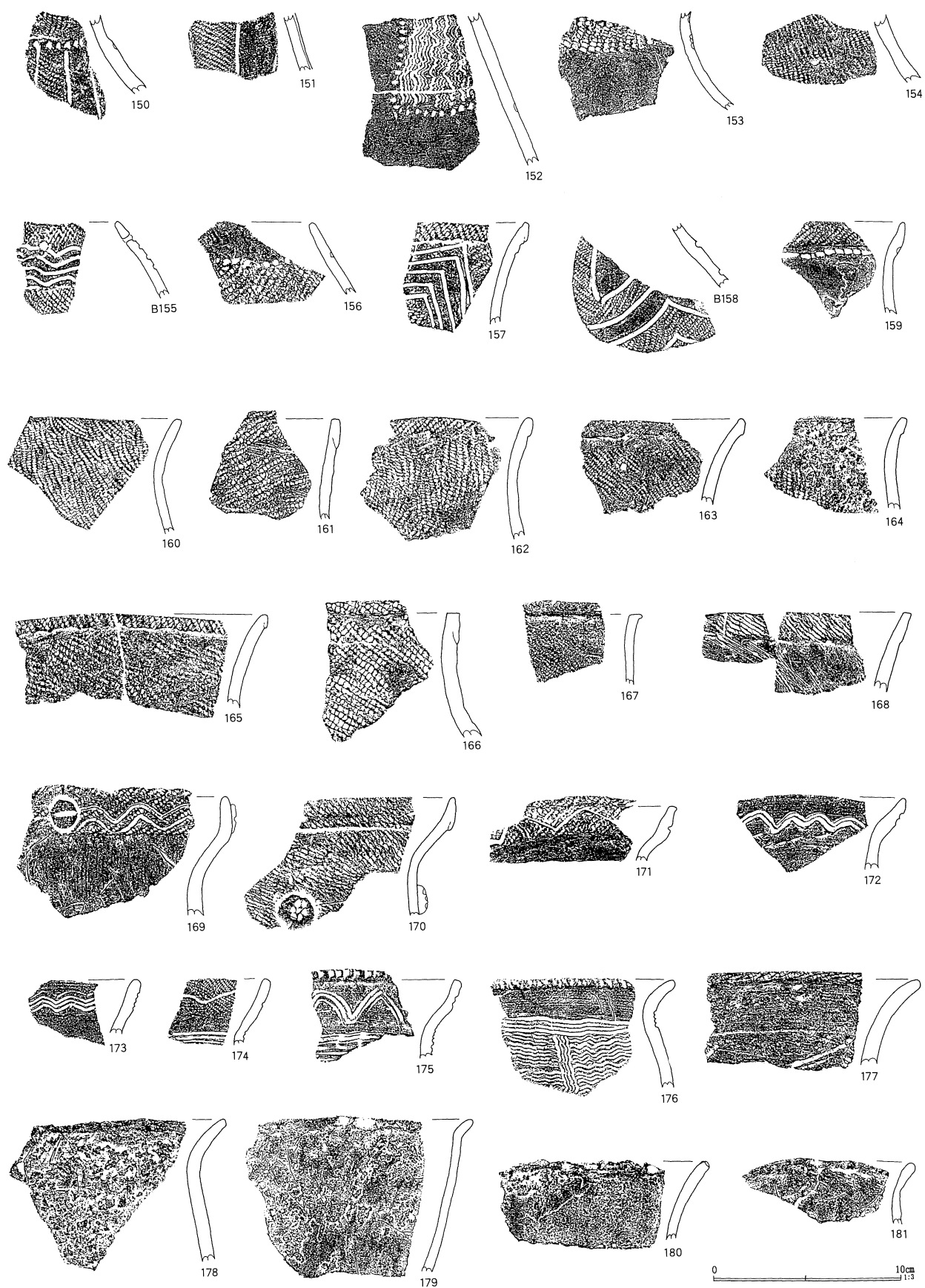
本一単位櫛歯状工具に、原体LR単節縄文、130・131は、原体RL単節、132は、2本一単位波状沈線に原体LR単節、133は、原体LR単節縄文を施文している。128は、縄文部分は赤彩されている。134は、壺頸部である。単位不明工具による波状文を施文している。135は、壺頸部である。1本描沈線による波状文を施文している。136は、壺胴部である。地文に、原体RL単節縄文を施文し、集合沈線による弧線文を施文している。内面にハケ調整が施されている。137は、壺頸部である。地文に原体LR単節縄文を施文し、1本描沈線による波状文を施文している。138は、壺胴部である。2本一単位工具による山形風の波状文下に、原体RL単節縄文を施文している。139は、壺胴部である。鋸歯文下に、原体無節多条R {1 1 1} 充填し、下段に2本一単位工具による波状文を施文している。140は、壺胴部である。地文に、原体LR単節縄文を施文し、山形風の波状文を施文している。141は、壺胴部である。地文に原体無節多条Rを施文し、1本描沈線による波状文を施文している。142は、壺頸部である。無文帯下に地文原体RL単節縄文を施文し、波状沈線文を施文している。143は、壺胴部である。無文帯下に、波状沈線文を施文し、原体LR単節縄文を充填している。144・145は、壺胴部で同一個体である。山形風波状沈線文間に無文帯を設け、両側を、原体RL単節縄文で充填している。146は、壺胴部である。原体前々段多条LR {1 1 1} を施文し、細沈線による平行線文で区画して、無文帯を設けている。147は、壺胴部である。焼成良好で、硬質である。原体LR単節縄文を充填する、平行線文及び連弧文を施文している。148は、壺胴部である。地文に原体無節多条L {r r r} を施文し、1本描沈線による連弧文を施文している。149は、壺胴部である。焼成良好で硬質である。1本描沈線波状文下に複合鋸歯文または、三角文を施文している。150は、壺頸部である。原体直前段多条L {RRRR} を施文し、段を設けた列点文下に、同一原体を充填



第318図 上段堰出土遺物(7)

した垂下文を施文している。151は、壺胴部である。原体無節多条L {r r r} を充填する垂下文を施文している。152は、壺胴部である。焼成良好で硬質である。4本一単位櫛歯状工具による波状文を充填し、列点文で縁取りする垂下文を施文している。153は、壺頸部である。3本一単位工具による列点文で区画し、原体前々段多条LR {l l l} を施文している。下段を無文帯としている。154は、壺頸部である。地文に原体RL単節縄文を施文している。155は、無頸壺である。原体RL単節縄文を施文し、1本描沈線による波状文を施文している。焼成前穿孔が付いている。縄文部分は赤彩されている。156は、無頸壺である。口縁部無文帯下に列点文を施文し、原体LR単節縄文を施文している。157は、複合口縁を呈する筒形土器である。口縁部は、原体RL単節縄文を施文し、口縁直下に重四角文を施文している。区画文内及び区画間に、同一原体縄文を充填している。158は、蓋である。原体LR単節縄文を充填する段違いの連弧文を施文している。縄文部分は赤彩されている。159は、複合口縁を呈し、広口の壺または、甕である。口縁部に原体複節LR1を施文し、口縁直下に押引き状の列点文を施文している。頸部は、無文である。炭化物を含む煤が付着している。160は、単口縁の甕である。地文に原体RL単節縄文を施文している。161は、複合口縁を呈する甕である。地文に原体直前段反撚LL {r r} を施文している。162は、複合状を呈する甕である。地文に原体直前段多条L {RRR} を施文している。163は、複合口縁を呈する甕である。地文に原体RL単節縄文を施文している。164は、複合口縁を呈する甕である。地文に原体LR単節縄文を施文している。炭化物を含む煤が付着している。165は、複合口縁を呈する甕である。地文に原体RL単節縄文を施文している。166は、複合口縁を呈する甕である。口端部を平坦に面取りし、原体RL単節縄文を施文している。口縁部以下、同一原体縄文を施文している。全面に煤が付着している。167は、口端

部が突起状に反り返る甕である。口端部を平坦に面取りし、原体RL単節縄文を施文している。168は、複合口縁を呈する甕である。口端部は、平坦に面取りしている。口縁部は、原体反撚RRを施文している。口縁直下に櫛歯条痕による斜行文を施文している。169は、口縁部が屈曲して内彎する甕である。焼成良好で硬質である。口端部は、原体LR単節縄文を施文している。口縁部は、同一原体縄文を施文し、2本一単位工具による波状文を施文している。波状文上に沈線を加えたボタン状貼付文を貼付している。頸部は、無文で縦位のハケ調整が施されている。内面に横位のミガキが施されている。170は、口縁部が大きく外反し複合口縁を呈する甕である。口端部より地文に原体無節Rを施文している。頸部に多孔のボタン状貼付文が貼付されている。内面にヘラ状工具によるナデが認められる。171は、段を設ける甕口縁部である。口端部は、平坦に面取りし、原体LR単節縄文を施文している。口縁部は、同一原体縄文を施文し、波状沈線文を施文している。頸部は、無文である。172は、口縁部がくの字状に外反する甕である。口縁部は、2本一単位工具による波状文を施文している。口縁部内外面にハケ調整を施している。173は、甕口縁部である。4本一単位櫛歯状工具による波状文を施文している。174は、口縁部が、僅かに内彎する甕である。口端部を平坦に面取りし、原体RL単節縄文を施文している。口縁部は、同一原体縄文を施文し、波状沈線文を施文している。頸部に櫛描簾状文を施文している。175は、口縁部が段状を呈する甕である。焼成良好で硬質である。口端部に刻み目を施している。口縁部は、3本一単位工具による波状文を施文している。頸部は、同一工具による擬似簾状文を施文している。176は、口縁部がくの字状に外反する甕である。口端部は、工具による刻み目を施している。口縁部無文帯下、頸部に4本一単位櫛描直線文を施文し、直線文下に波状の垂下文を施文している。垂下文間は、櫛描波状文を充填している。177は、口縁部が緩や

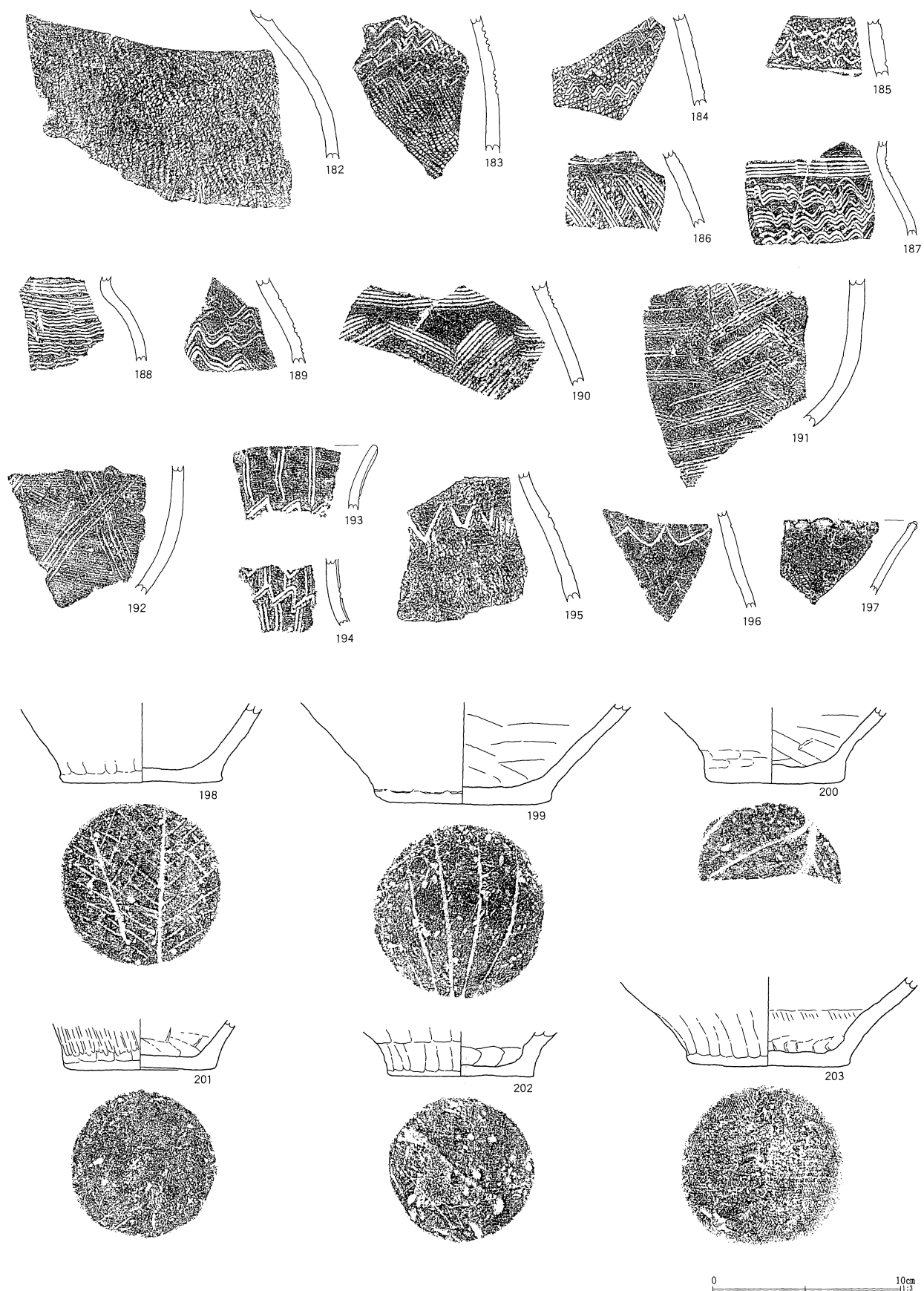


第319図 上段堰出土遺物(8)

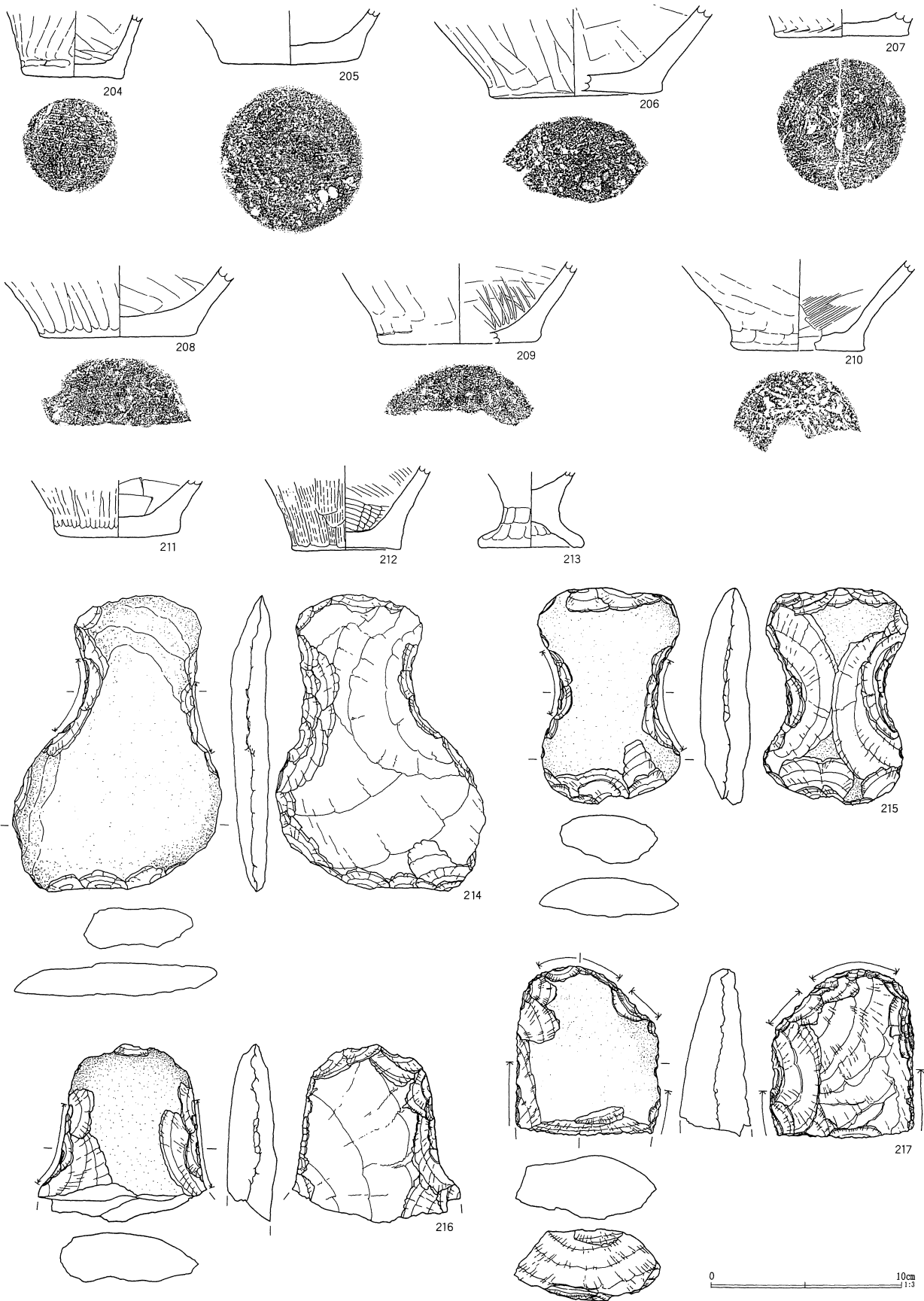
かに外反する甕である。口端部を平坦に面取りし、原体LR単節縄文を施文している。口縁部内外面にハケ調整が施されている。178は、口縁部が緩やかに外反する甕である。口端部は、丸みがある。無文で、炭化物を含む煤が付着している。179は、口縁部がくの字状に屈曲外反する甕である。口唇部外面に指頭による浅い押さえが認められる。無文地である。外面に炭化物を含む煤が付着している。180は、甕口縁部である。口端部に工具による押捺が施されている。無文地である。外面に炭化物を含む煤が付着している。181は、口縁部が外反する甕である。口端部は丸みを持ち比厚している。182は、甕胴部である。地文に原体無節多条R {1 1 1} を施文している。183は、甕胴部である。4本一単位櫛歯状工具による波状文下に、原体複節LRIを施文している。184は、甕胴部である。地文に原体LR単節縄文を施文し、3本一単位櫛歯状工具による波状文を施文している。185は、甕胴部である。地文に原体不明縄文を施文し、単位不明工具による波状文下に、直線文を施文している。186は、甕胴部である。地文に原体不明縄文を施文し、4本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文下に、斜格子文を施文している。187は、甕胴部である。頸部に5本一単位櫛描擬似簾状文を施文し、胴部は、同一工具による波状文を施文している。188は、甕胴部である。頸部に4本一単位櫛描直線文を施文し、胴部は、同一工具による波状文を施文している。189は、甕胴部である。3本一単位櫛歯状工具による波状文を施文している。190は、甕胴部である。5本一単位櫛歯状工具による直線文下に、同一工具による縦羽状文を施文している。191は、甕胴部である。5本一単位櫛歯状工具による縦羽状文を施文している。192は、甕胴部である。5本一単位櫛歯状工具による斜格子文を施文している。193・194は、口縁部が、緩やかに外反する甕である。口端部は、丸みがある。口縁部に、口端部より2本一単位工具による垂下文を施文後、頸部に波状文を施文している。195は、甕胴

部である。ハケ調整後、1本描沈線による波状文を粗雑に施文している。196は、甕胴部である。1本描沈線による波状文を施文している。197は、甕口縁部である。口端部に原体不明縄文施文後、指頭による交互押捺を施している。頸部に原体RL単節縄文を施文している。外面に煤が付着している。198～212は、底部である。198～200は、木葉痕が付いている。201・202・205は種子圧痕が付いている。201・203・204・205・208・209は、布目圧痕が付いている。210は、焼成後穿孔が認められる。213は、台付甕脚部である。内外面にナデが認められる。

214は、打製石斧である。偏平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に、細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。紐帯部は、摩滅している。刃部は、使用により摩滅している。215は、打製石斧である。分銅形を呈し肉厚である。偏平の礫の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。紐帯部は、摩滅している。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。216は、打製石斧である。刃部を欠損している。偏平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。紐帯部は、摩滅している。217は、打製石斧である。堰出土直柄斧に装着されていたものである。刃部を欠損している。両側縁部に細かい剥離を加えて、左側縁は直線状に、右側縁は浅い抉り込みを入れている。紐帯部は、摩滅している。基部にも細かい剥離を加えている。基部にも摩滅が認められる。欠損部分は、表面からの加撃による。218は、扁平片刃磨製石斧未製品である。偏平の礫の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に剥離を加えて直線状に仕上げている。刃部は、断面ノミ形を呈す。219は、扁平片刃磨製石斧未製品である。角礫の右側縁部及び刃部に剥離を加えて形状を整えている。裏面に研



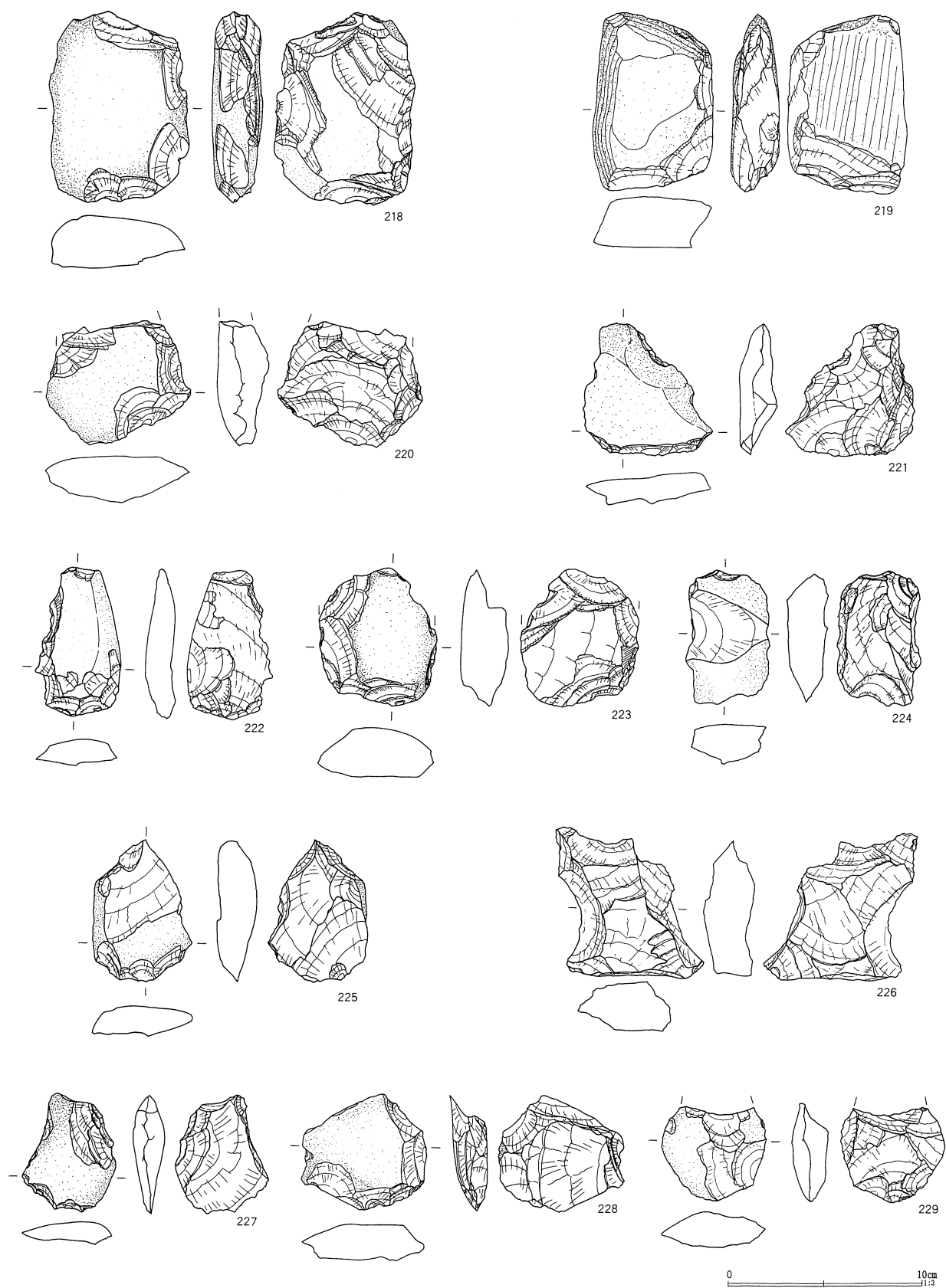
第320図 上段堰出土遺物(9)



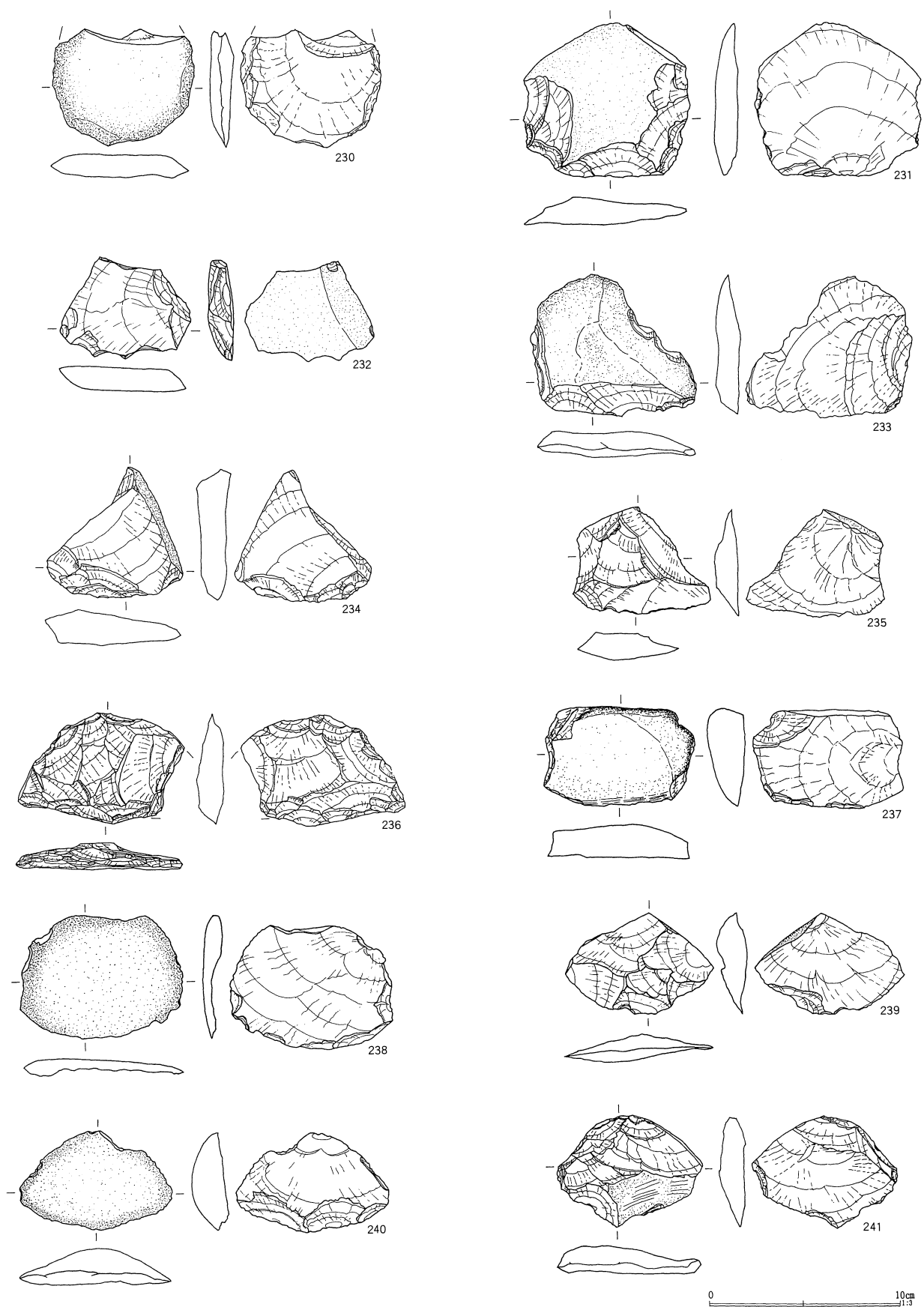
第321図 上段堰出土遺物(10)

磨痕が認められる。刃部に細かい剥離を加えて直線状に仕上げている。220は、搔器である。基部を欠損している。両側縁部に剥離を加え浅い抉り込みを入れている。221は、石匙である。偏平の礫の裏面を打割して素材を取り出し縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。基部より両側縁部に剥離を加えてつまみを作り出している。刃部は、表面から剥離を加えて断面ノミ形に仕上げている。222は、ノミ形石器未製品である。縦長の剥片の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。刃部に細かい剥離を加えて断面ノミ形に仕上げている。223は、打製石斧である。偏平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。基部を欠損しているが、再度剥離を加えて形状を整えている。224は、小型の打製石斧である。偏平の礫の裏面に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に剥離を加えて直線状に仕上げている。刃部断面は、楔状を呈す。225は、搔器である。肉厚の剥片に剥離を加えて形状を整えている。刃部は、ノミ形を呈す。226は、打製石斧である。刃部を欠損しているが再利用していたものと考えられる。両面を打割して素材を取り出し縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に粗い剥離を加えて抉り込みを入れている。227は、ノミ形石器未製品である。横長剥片の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に剥離を加えて浅い抉り込みを入れている。刃部に表面から剥離を加えている。228は、有肩石器である。偏平の礫の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。刃部は、表面から剥離を加えて断面ノミ形に仕上げている。229は、打製石斧である。基部を欠損している。刃部は、裏面から剥離を加えて形状を整えている。230は、有肩扇状石器である。基部を欠損している。横長剥片の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。231は、有肩石器である。横長剥片の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。232は、有肩石器である。剥片の刃部に剥離を加えて形状を整えている。233は、有肩扇状石器である。

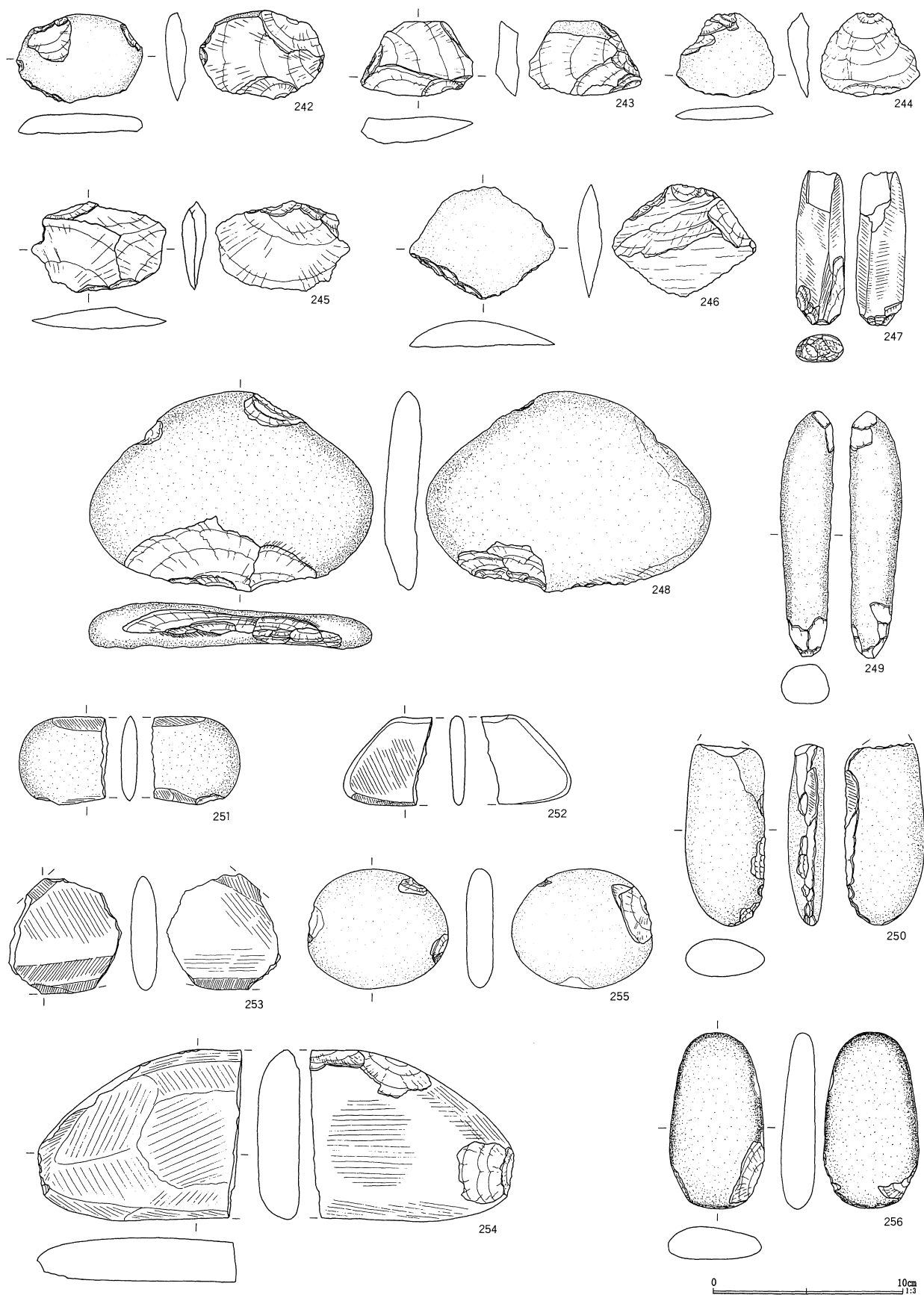
縦長剥片の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に剥離を加えて浅い抉り込みを入れている。刃部は、表面から剥離を加えて断面ノミ形に仕上げている。234～246は、刃器である。236は、欠損している。全面に丁寧な剥離が加えられ半月状を呈す。石庖丁未製品の可能性がある。両側縁部に剥離を加え浅い抉り込みを入れている。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。247は、棒状石器である。先端部に敲打による細かい剥離が生じている。248は、礫器である。縁辺部に敲打による剥離が生じている。249は、棒状石器である。両端部に敲打による剥離が認められる。250は、敲石である。欠損している。縁辺部に敲打による剥離が認められる。251～253は、偏平の磨石である。縁辺部に擦痕及び研磨痕が付いている。254は、砥石である。表裏両面及び縁辺部に研磨痕が認められる。側縁部に剥離が加えられ形状が整えられていることから石庖丁未製品の可能性がある。255は、敲石である。縁辺部に敲打による剥離が付いている。256は、磨石である。縁辺部に擦痕が付いている。257は、石核である。横長の剥片を採取している。258は、敲石である。敲打による細かい剥離が生じている。259は、礫器である。頭部以外の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。260は、敲石である。欠損している。先端部は敲打による摩滅が認められる。また、赤色顔料が付着している。261は、敲石である。欠損している。縁辺部に敲打痕が付いている。262は、磨石である。欠損している。表裏両面に敲打による窪みが付いている。263は、磨石である。欠損している。底面は、研磨により平坦面を形成している。264は、砥石である。欠損している。表面は丁寧に研磨され光沢が認められる。265は、砥石である。礫全体に縦位の研磨による稜が認められる。表面は断面稜研状を呈し底面は、断面三角形の鋭利な線状痕が付いている。側面には、敲打痕が付いている。266～268は、石核である。横長の剥片を採取している。



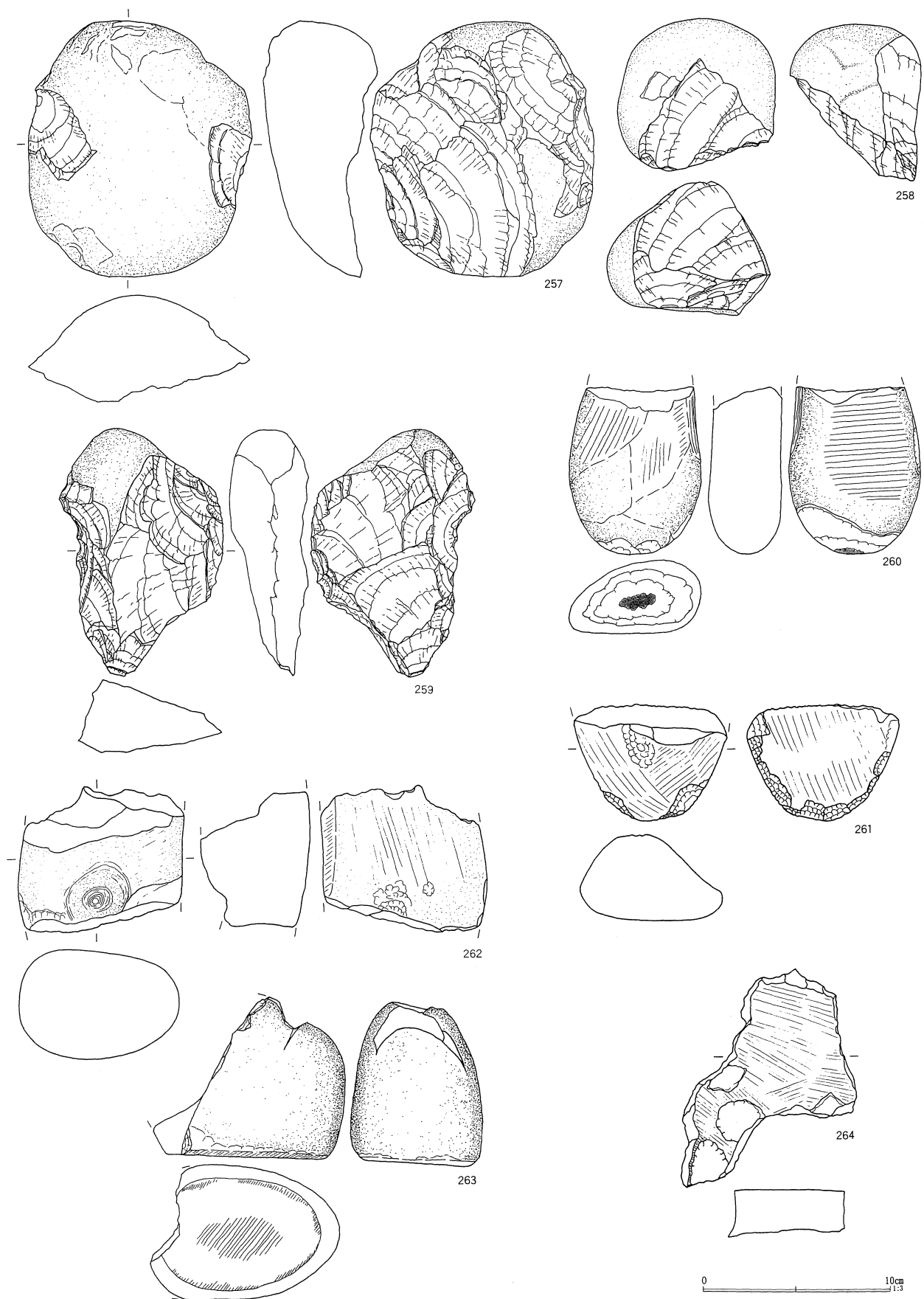
第322図 上段堰出土遺物(11)



第323図 上段堰出土遺物(12)



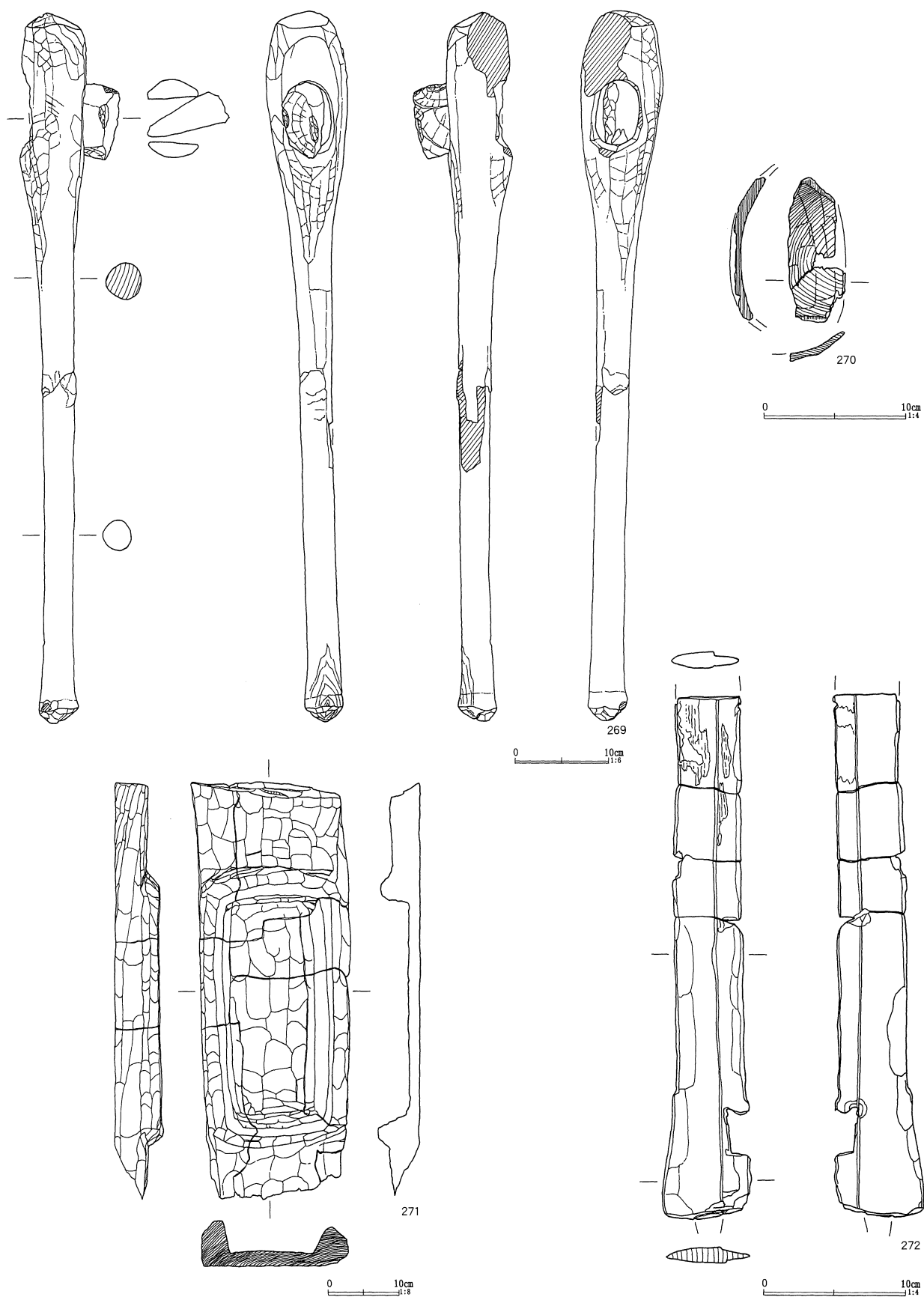
第324図 上段堰出土遺物(13)



第325図 上段壠出土遺物(14)



第326図 上段堰出土遺物(15)



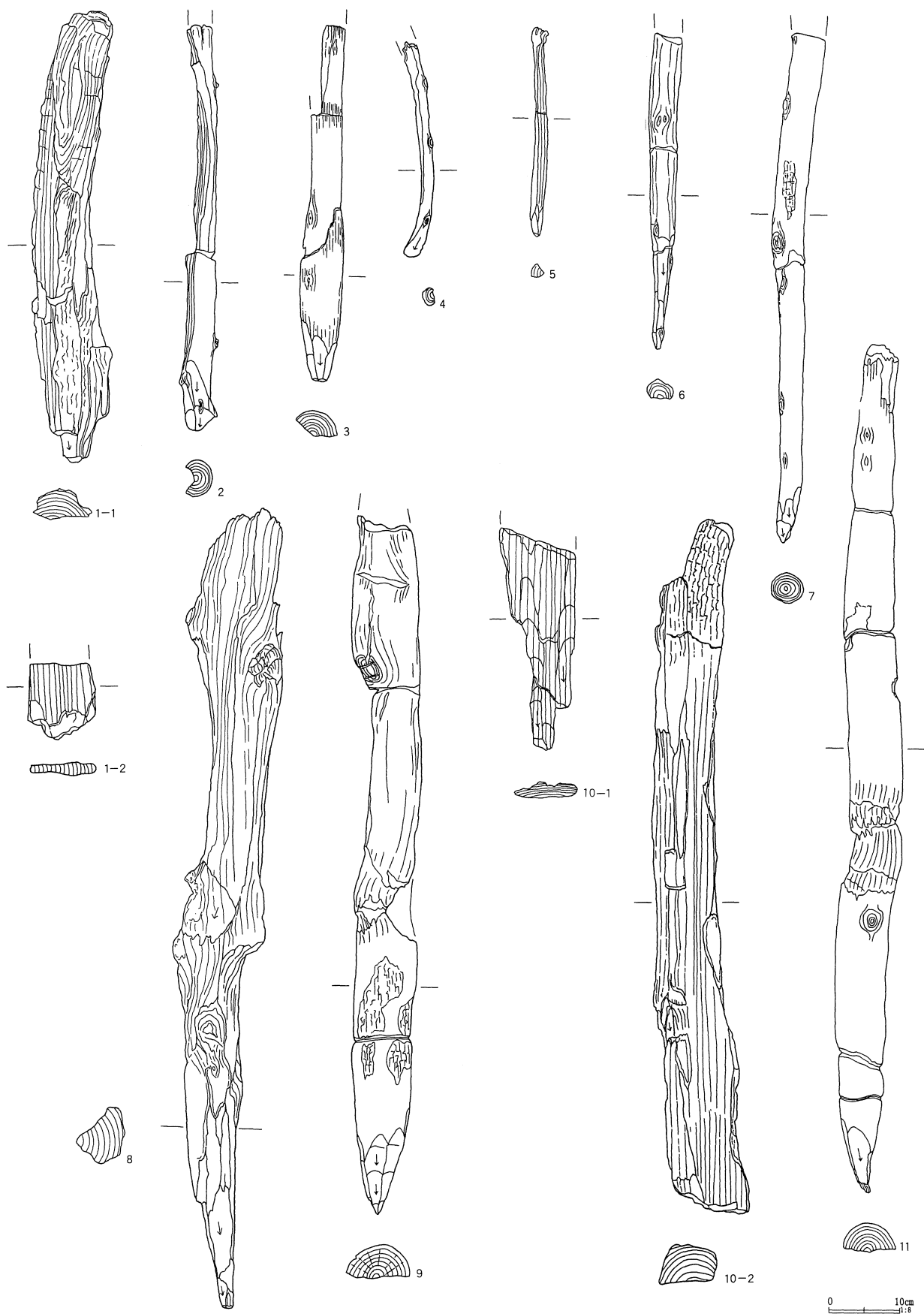
第327图 上段堰出土遺物(16)

269は、直柄斧である。装着孔に217の打製石斧が装着されていた。頭部の一部を欠損している。柄の中央部欠損は調査時のものである。頭部は、丸く丁寧に削り出されている。装着部刃部側を平坦に仕上げ、基部側に稜を作り出している。装着孔は、楕円形を呈し、刃部側がやや大きく削り抜かれている。装着孔の形状から太型蛤刃磨製石斧用の斧であったことが判る。柄部から握部は、丸く丁寧に磨かれている。端部は、グリップが付いている。樹種は、アカガシ垂属である。270は、剝物容器である。大部分を欠損している。横木取りである。椀状に薄く削り込んでいる。内外面を丁寧に磨いている。樹種は、ケヤキである。271は、剝物容器未製品である。横木取りである。両端を切断した材に繰り込みを入れている。また縁辺部は周囲を削り出している。全面に工具による削り出し痕跡が明瞭に認められる。樹種は、ヤマグワである。272は、武器模倣の形代または、機織具の可能性がある。先端部を欠損している。板状の両面中央よりに縦の切込みを入れて薄く菱形状に仕上げている。基部は造出を設けて扇状に幅を広げている。基部先端部に突起状の造出があったと考えられるが欠損している。基部寄りに穿孔が認められるが、部分的に欠損している。樹種は、カエデ属である。

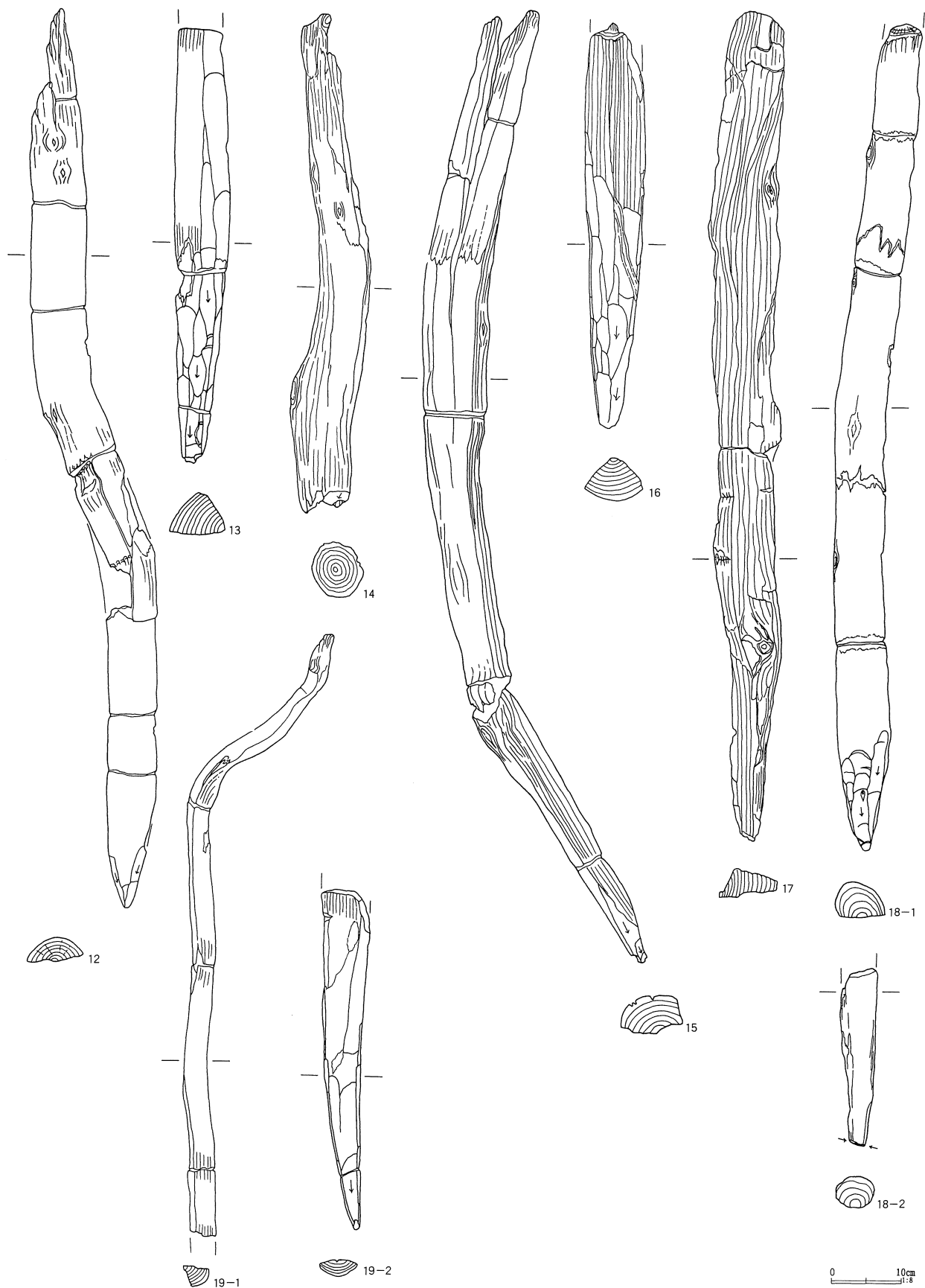
堰出土杭（第328～341図）

1-1は、半割材を用いている。先端部に切込みを入れている。樹皮が付く。樹種はカツラである。1-2は、板材である。先端部は、潰れている。2は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。樹種は、ヌルデである。3は、みかん割材を用いている。先端部に切込みを入れている。樹種は、カエデ属である。4は、丸木を用いている。先端部一方から切込みを入れている。樹種はヤマグワである。5は、みかん割材を用いている。先端部に切込みを入れている。樹種は、ヤマグワである。6は、半割材を用いている。先端部やや上方から切込みを入れている。樹種は、ヤマグワである。7は、丸木

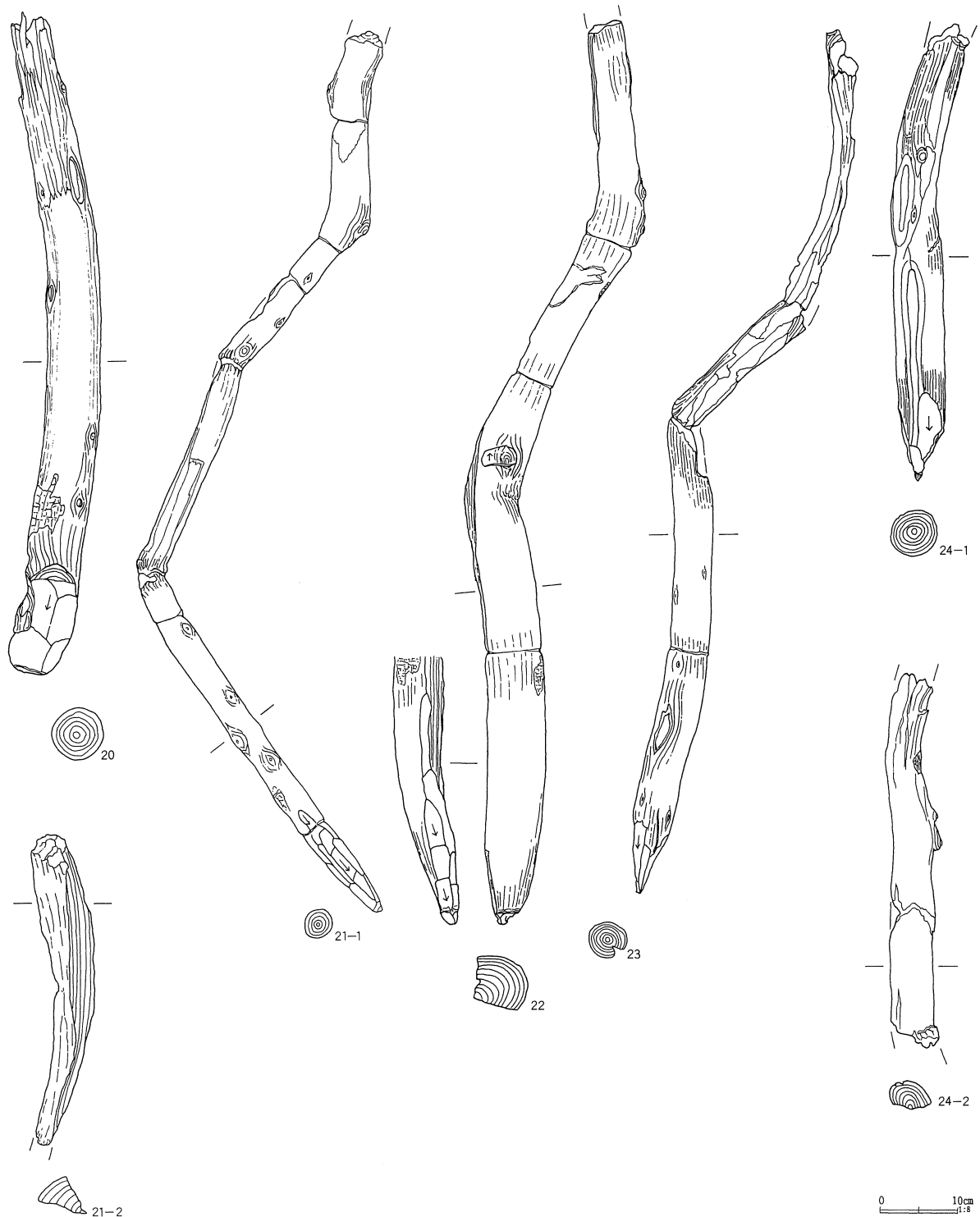
を用いている。先端部に切込みを入れている。樹皮が付く。樹種は、ハリギリである。8は、割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。枝を払っている。樹種は、カツラである。9は、半割材を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。中央部分で屈曲している。樹種は、カエデ属である。10-1は、板材を用いている。先端部に削り込みを入れている。10-2は、半割材を用いている。先端部は潰れている。枝を払っている。上端部は腐朽している。樹種は、ヤマグワである。11は、半割材を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。中央部分で屈曲している。上端部が腐朽している。樹種は、カエデ属である。12は、半割材を用いている。先端部に切込みを入れている。中央部分でL字状に屈曲している。樹種は、ヤマグワである。13は、みかん割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。屈曲部分で欠損している。樹種は、ムクロジである。14は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。上端部は、腐朽している。樹種は、クリである。15は、みかん割材を用いている。先端部に切込みを入れている。中央部分で弓状に湾曲している。上端部は、腐朽している。樹種は、カエデ属である。16は、みかん割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。上端部を欠損している。樹種は、ムクロジである。17は、割材を用いている。割れ面を利用している。枝を払っている。部分的に屈曲している。樹種は、ヤマグワである。18-1は、半割材を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。上端部は腐朽している。樹種は、ヤマグワである。18-2は、丸木を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。19は、半割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。屈曲部分で欠損している。樹種は、ヤマグワである。20は、丸木を用いている。先端部に削り込みを入れている。枝を払っている。樹皮が付着している。上端部は腐朽し



第328图 堰出土杭(1)



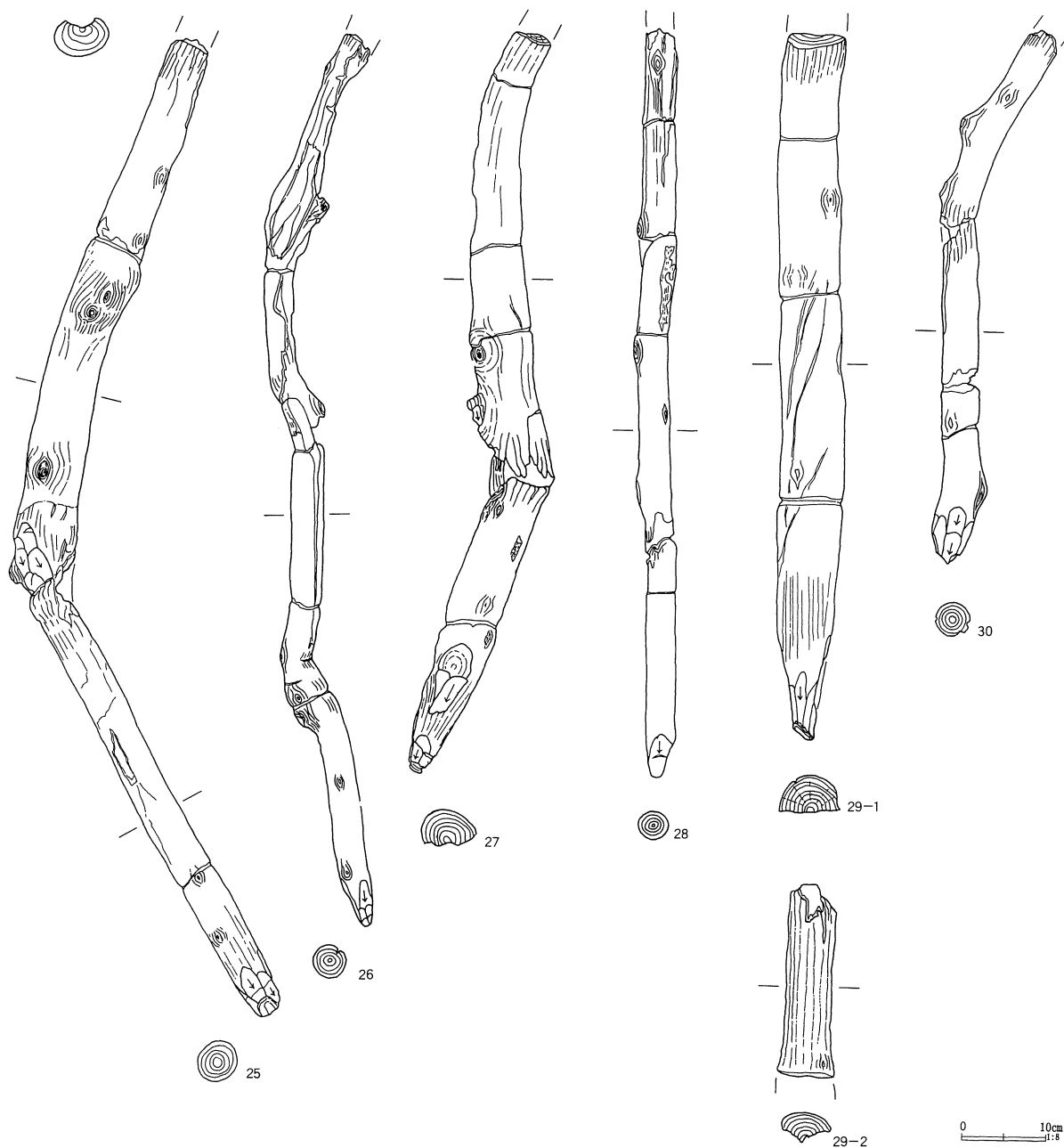
第329図 堰出土杭(2)



第330図 堰出土杭(3)

ている。樹種は、ヤマグワである。21-1は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。クランク状に屈曲している。上端部は欠損している。樹種は、ヤマグワである。21-2は、みかん割材を用いている。割れ面を利用している。

上端部は腐朽している。22は、みかん割材を用いている。先端部両側縁から切込みを入れている。枝を払っている。中央部分でL字状に屈曲している。上端部を欠損している。樹種は、ムクロジである。23は、丸木を用いている。先端部に切込みを入



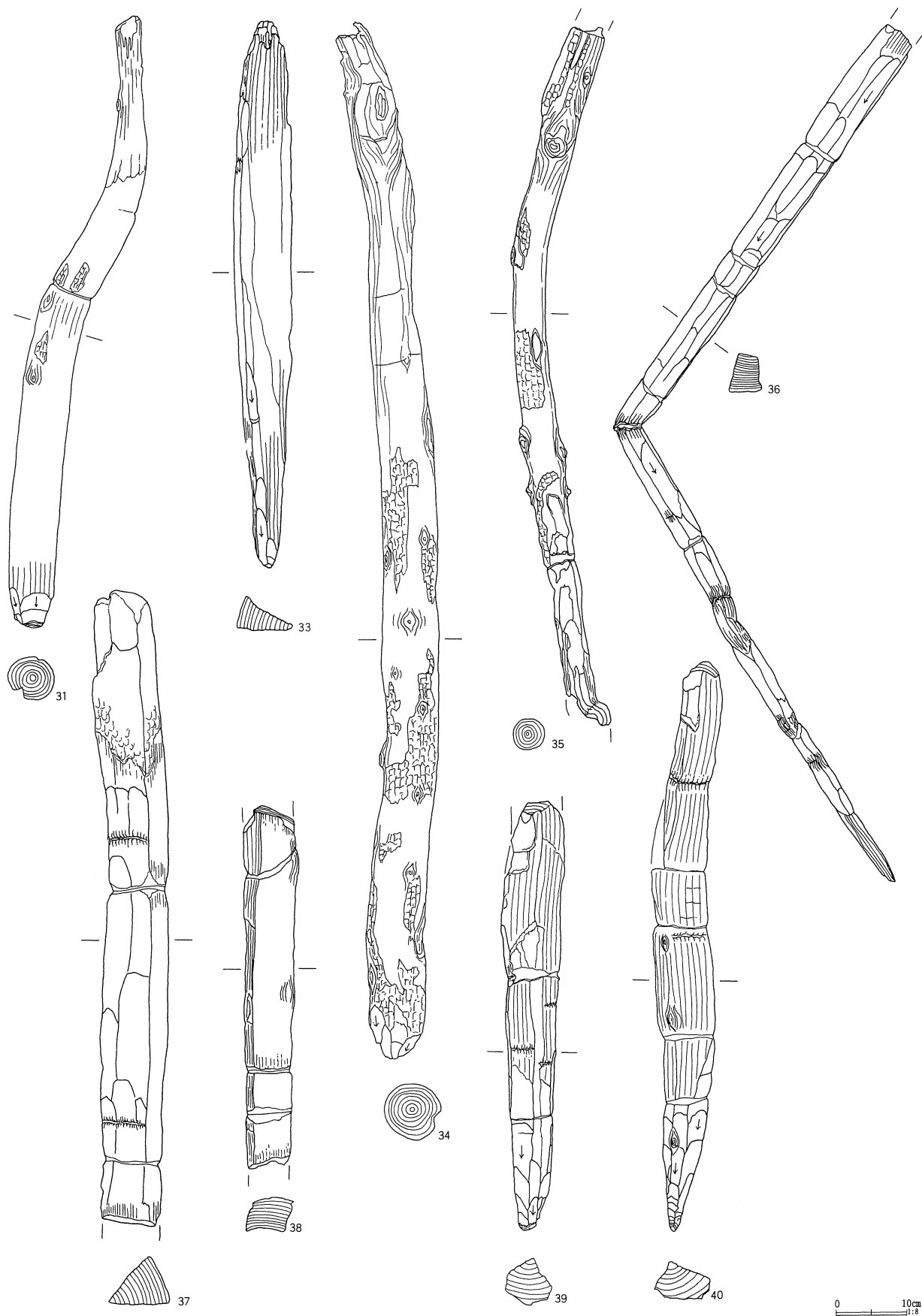
第331図 堰出土杭(4)

ている。中央部分で屈曲している。上端部は腐朽している。樹種は、ヤマグワである。24-1は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。樹種は、ヤマグワである。24-2は、半割材を用いている。24-1に接合する可能性がある。先端部屈曲部で欠損している。上端部は、腐朽欠損している。25は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。中央部分で屈曲している。上端部

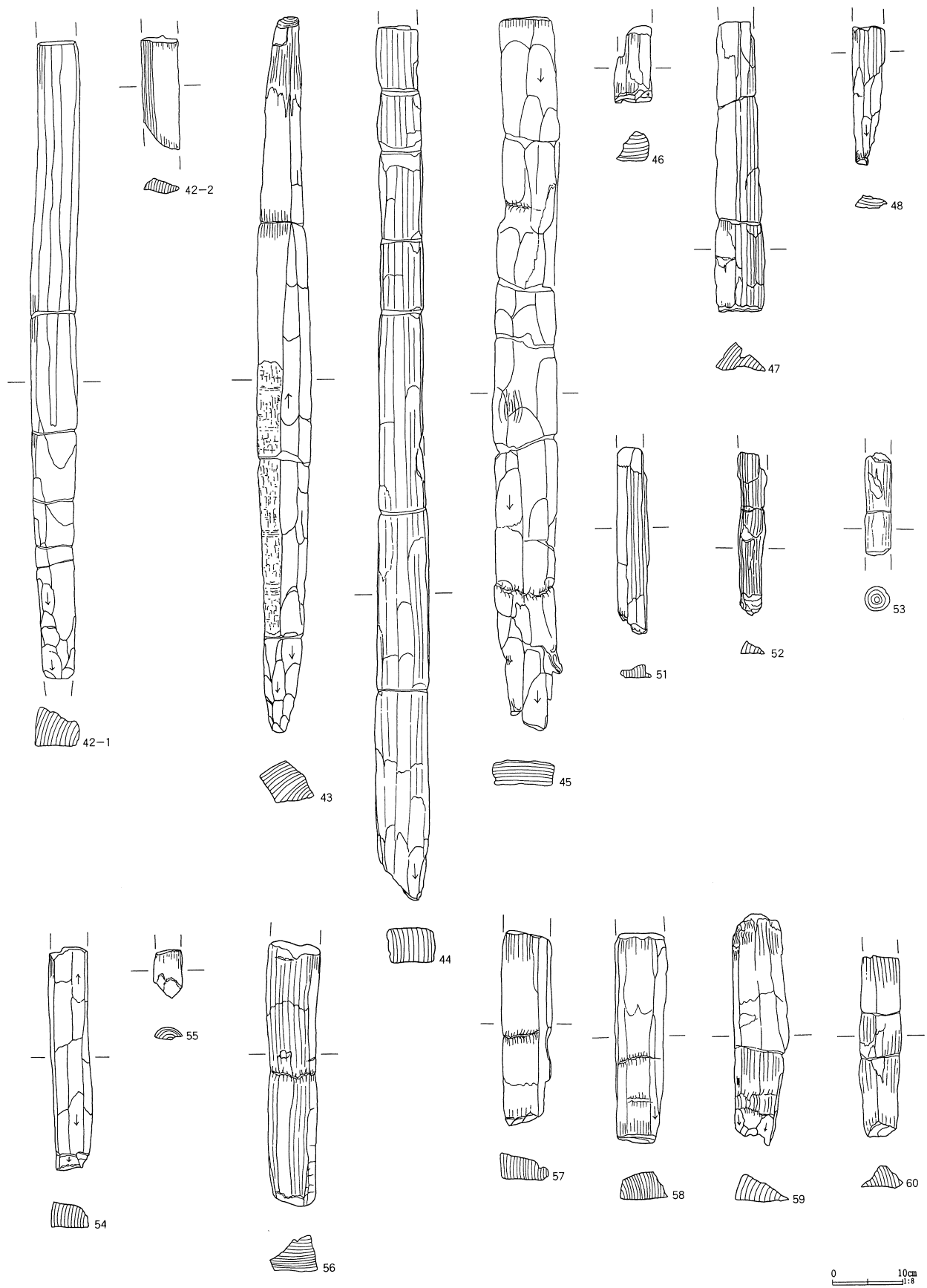
を欠損している。樹種は、ヤマグワである。26は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。クランク状に屈曲している。上端部を欠損している。樹種は、ヤマグワである。27は、半割材を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。中央部分で屈曲している。上端部を欠損している。樹種は、カエデ属である。28は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。樹皮が付着している。上

端部を欠損している。樹種は、ヤマグワである。29-1は、半割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部屈曲部で欠損している。樹種は、カエデ属である。29-2は、半割材を用いている。29-1と接合する可能性がある。先端部を欠損している。30は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。中央部分で屈曲している。上端部を欠損している。樹種は、ヤマグワである。31は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。中央部分でL字状に屈曲している。樹皮が付着している。33は、みかん割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。上端部は腐朽している。34は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。上端部は、腐朽している。35は、丸木を用いている。先端部屈曲部分で欠損している。枝を払っている。樹皮が付着している。上端部を欠損している。36は、割材を用いている。先端部に削り込みを入れている。側縁部にも削り込みを入れている。中央部分で屈曲している。他部分的に屈曲している。上端部を欠損している。37は、みかん割材を用いている。先端部を欠損している。部分的に屈曲している。38は、割材を用いている。先端部及び上端部を欠損している。39は、割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。40は、みかん割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。部分的に屈曲している。42-1は、角材を用いている。先端部上方から削り込みを入れている。先端部を欠損している。上端部を欠損している。42-2は、割材を用いている。両端部を欠損している。43は、割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。側縁部にも削り込みを入れている。部分的に屈曲している。樹皮が付着している。上端部は腐朽している。44は、角材を用いている。先端部に削り込みを入れている。側縁部にも、削り込みを入れている。上端部を欠損している。45は、板材を用いている。

先端部上方から削り込みを入れている。側縁部にも、削り込みを入れている。部分的に屈曲している。46は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。47は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。48は、割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。上端部を欠損している。51は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。52は、みかん割材を用いている。先端部は、割れ面を利用している。53は、丸木を用いている。両端部を欠損している。54は、角材を用いている。先端部に切込みを入れている。側縁部にも、削り込みを入れている。上端部を欠損している。55は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。56は、割材を用いている。先端部は潰れている。側縁部に削り込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。57は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。58は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。59は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。60は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。61は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。62は、みかん割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。63は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。64は、板材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。65は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。67は、みかん割材を用いている。先端部割れ面を利用している。上



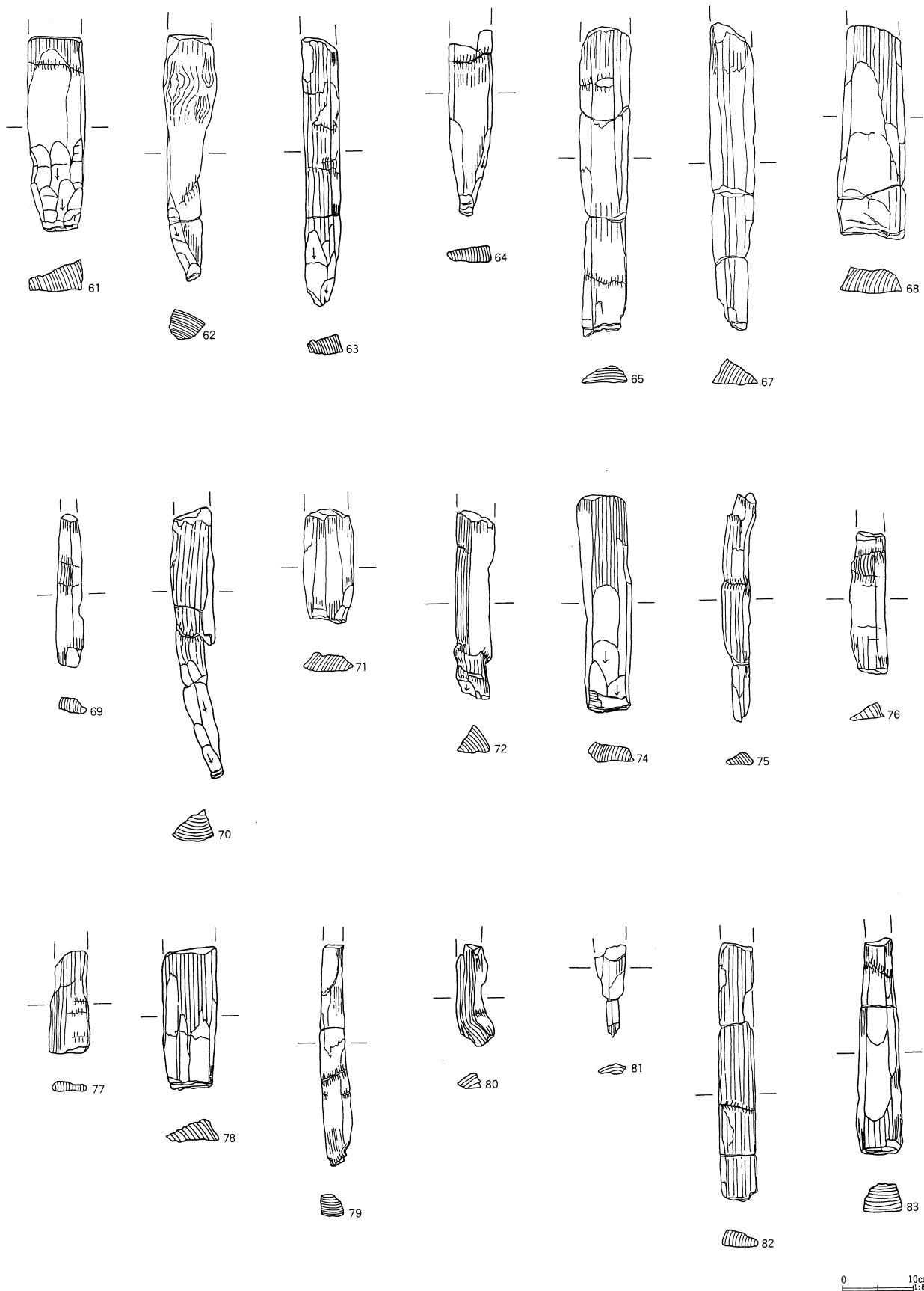
第332图 堰出土杭(5)



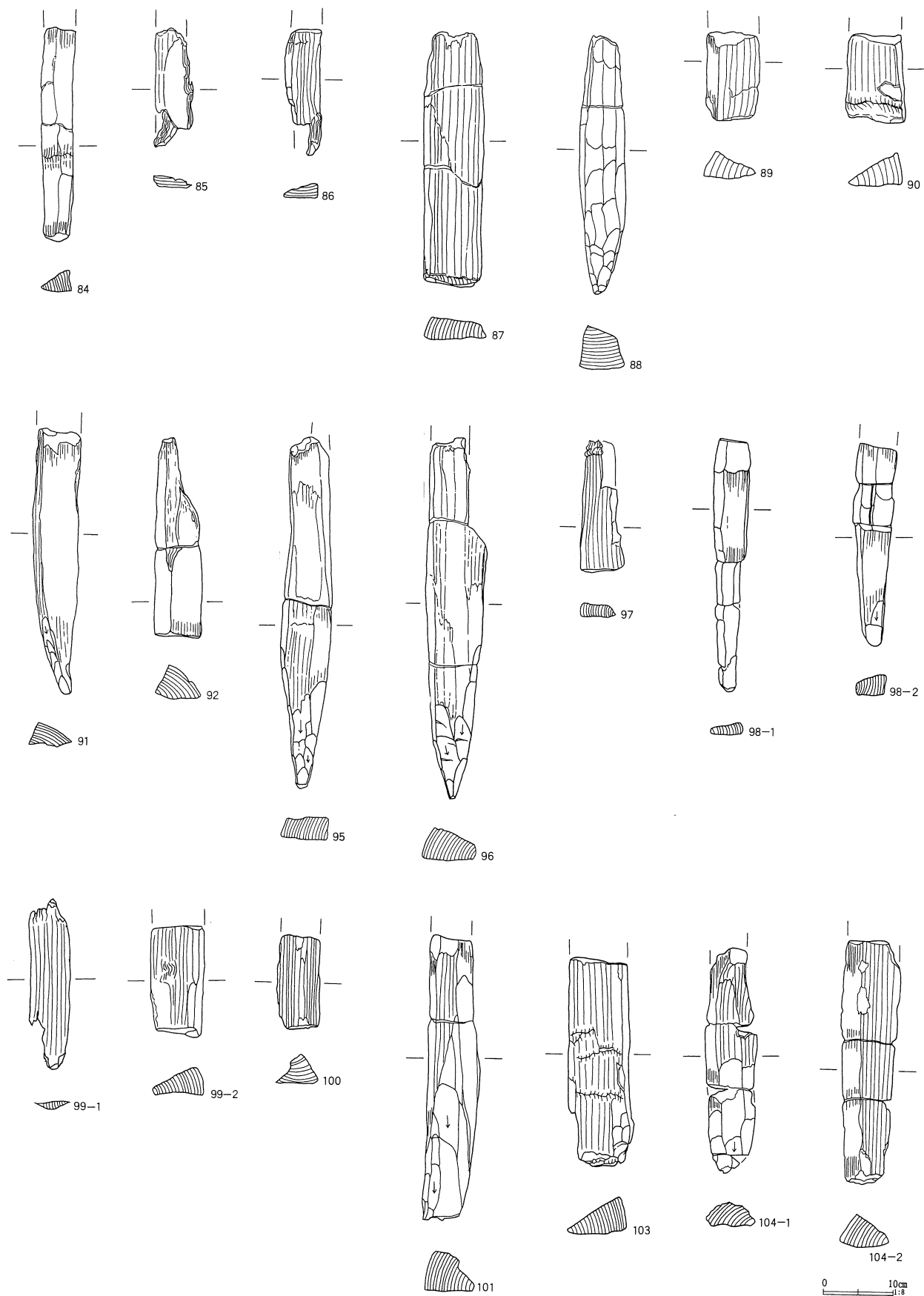
第333图 堰出土杭(6)

端部を欠損している。68は、割材を用いている。先端部は潰れているが、上方から削り込みを入れている。上端部を欠損している。69は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。70は、みかん割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。71は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。72は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。74は、割材を用いている。先端部上方から削り込みを入れている。75は、割材を用いている。割れ面を利用している。部分的に屈曲している。76は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。77は、割材を用いている。先端部は割れ面を利用している。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。78は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。79は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。80は、割材を用いている。先端部屈曲して潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。81は、割材を用いている。先端部は割れ面を利用している。上端部を欠損している。82は、割材を用いている。先端部は、割れ面を利用している。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。83は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。84は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。85は、板材を用いている。先端部は、屈曲して潰れている。上端部を欠損している。86は、板材を用いている。先端部は屈曲して潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。87は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部は、腐朽している。88は、割材を用いてい

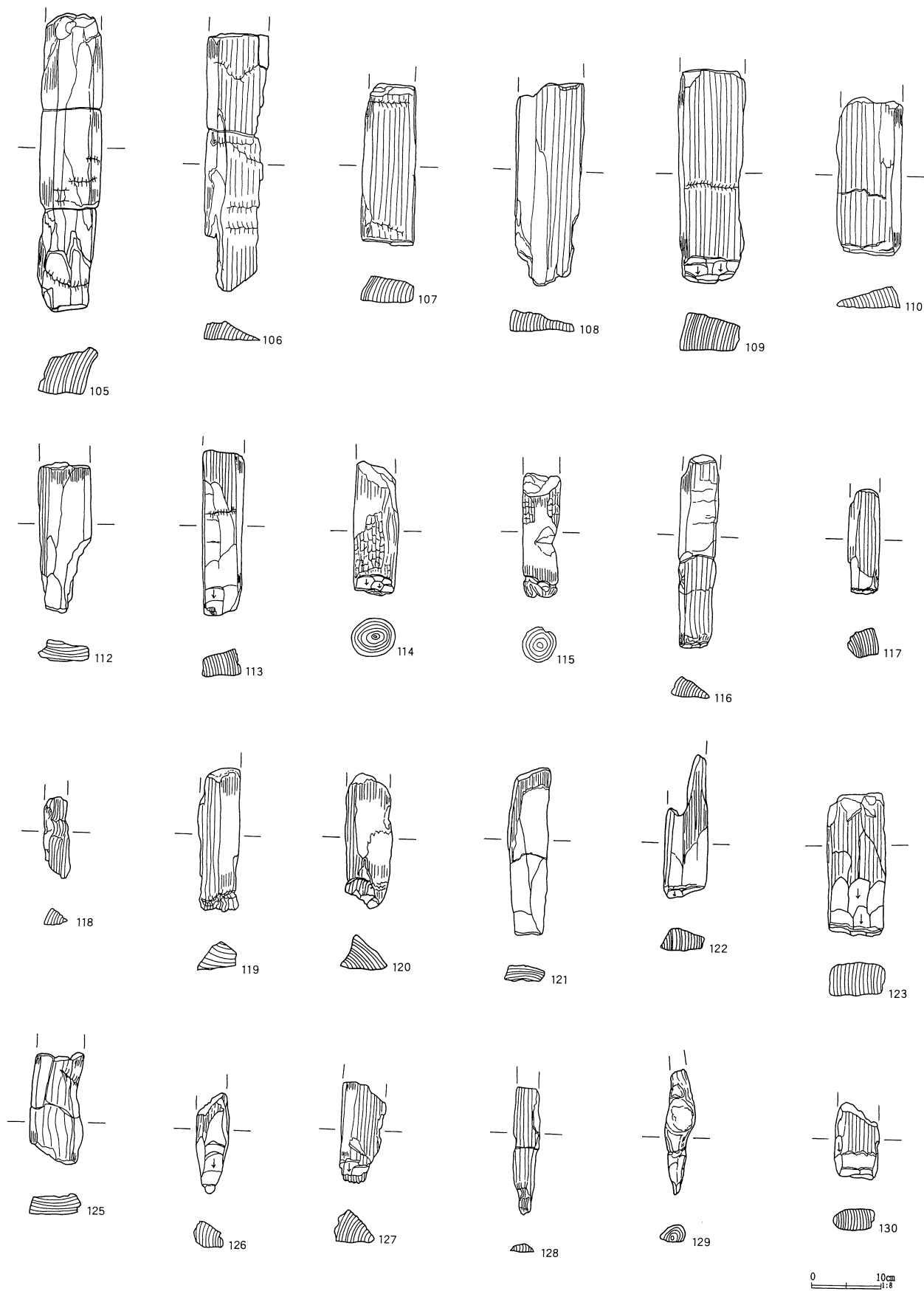
る。全面に削り込みを入れている。上端部を欠損している。89は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。90は、みかん割材を用いている。先端部片面から切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。91は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。92は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。上端部は腐朽している。95は、角材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。上端部を欠損している。96は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。97は、割材を用いている。先端部は割れ面を利用している。上端部を欠損し、腐朽している。98-1は、割材を用いている。先端部は割れ面を利用している。98-2は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。99-1は、割材を用いている。先端部に削り込みを入れている。上端部は腐朽している。99-2は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。100は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。101は、みかん割材を用いている。先端部上方から削り込みを入れている。上端部を欠損している。103は、みかん割材を用いている。先端部上方から削り込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。104-1は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。104-2は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。105は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。106は、みかん割材を用いている。先端部は、割れ面を利用している。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。107は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。108は、割材を用いている。先端部は、割れ



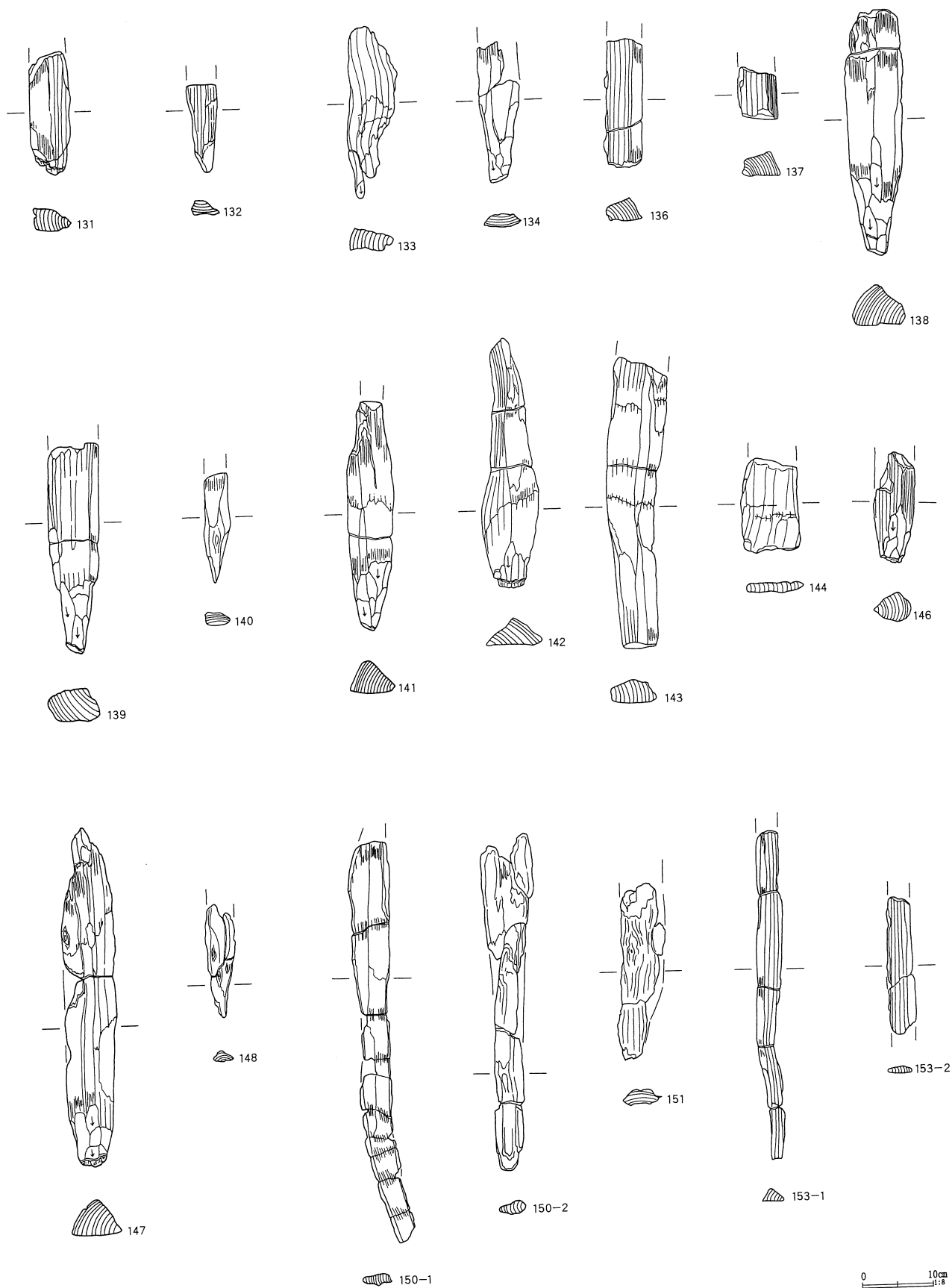
第334图 堰出土杭(7)



第335图 堰出土杭(8)



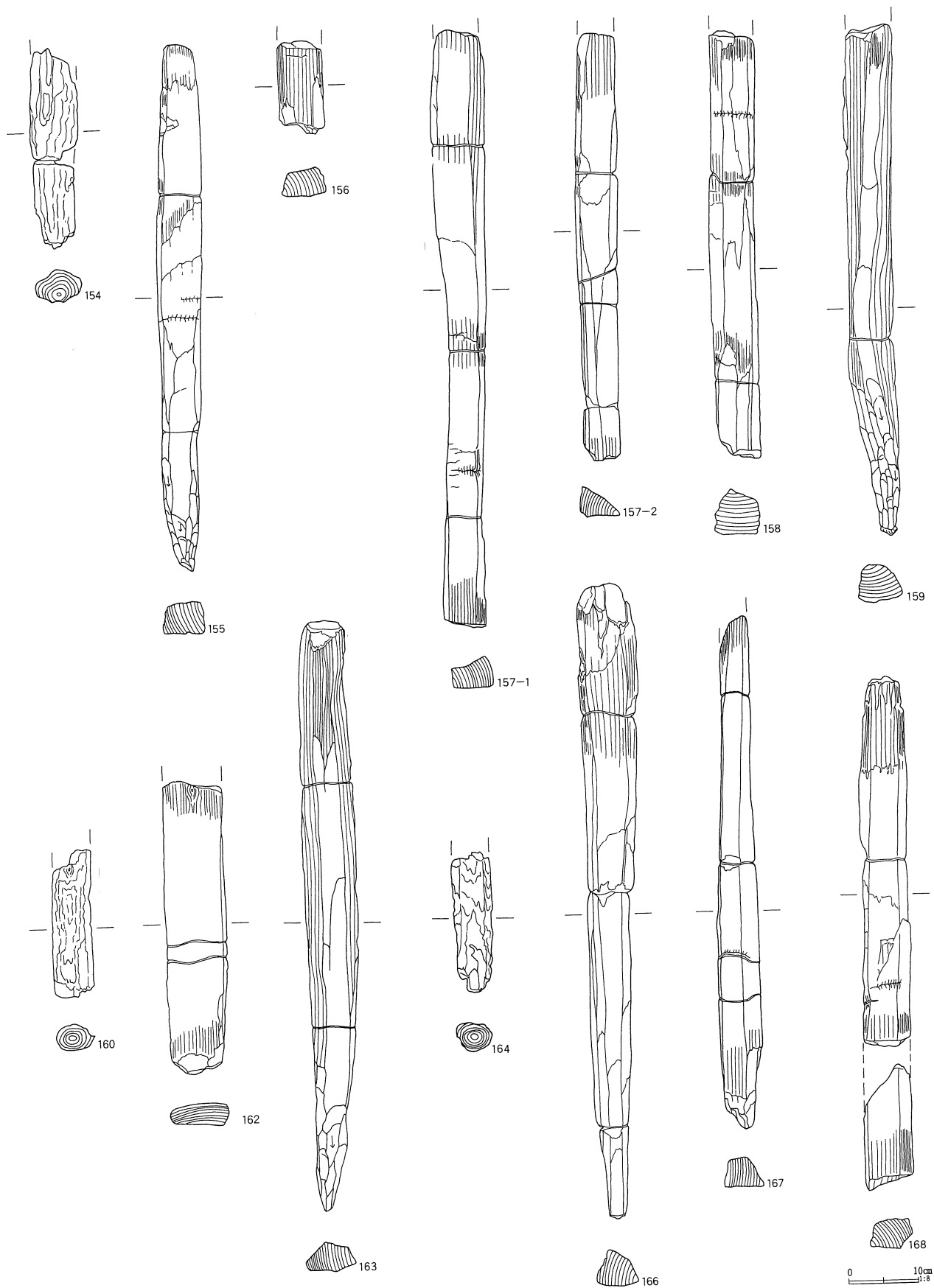
第336图 堰出土杭(9)



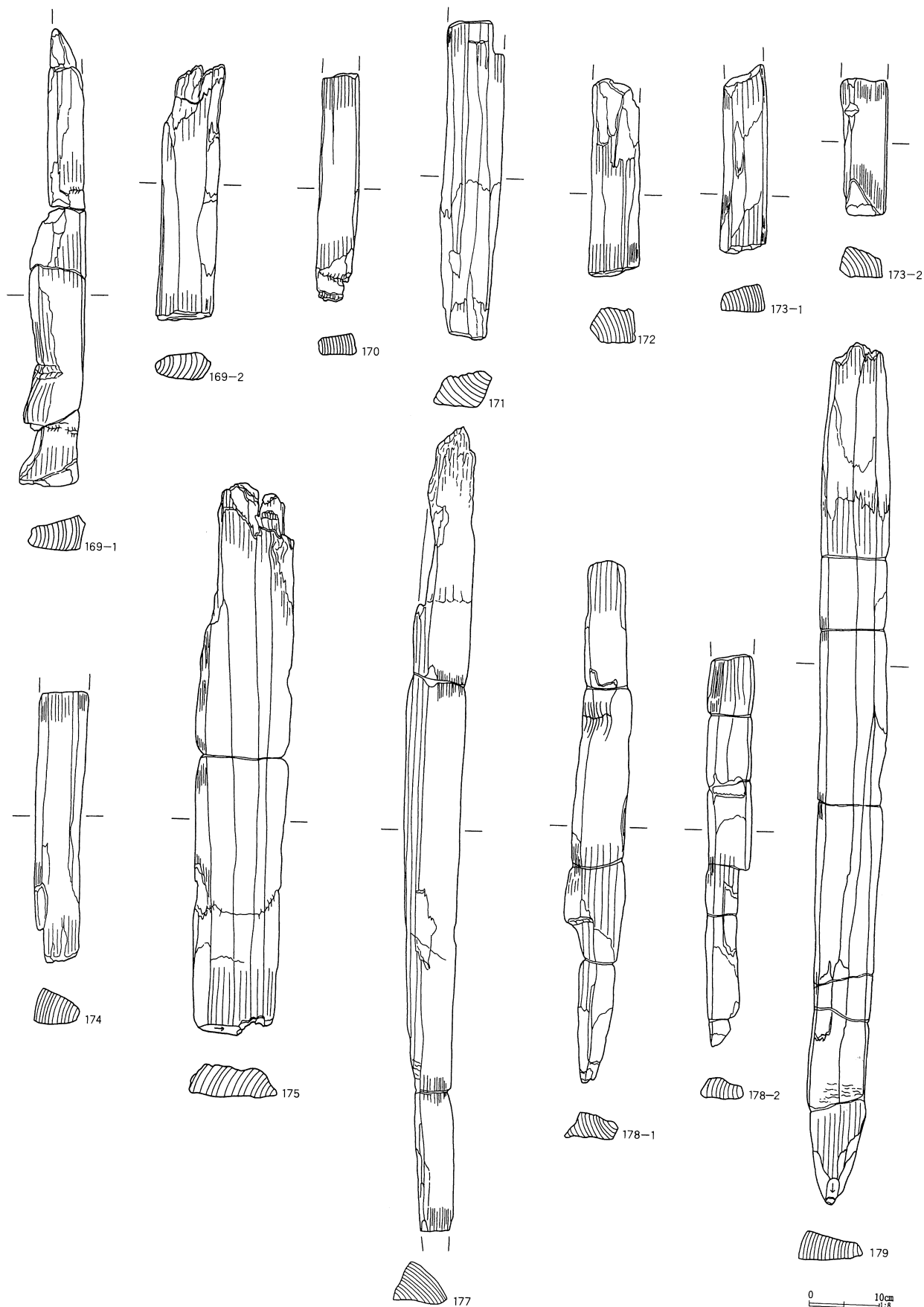
第337図 堰出土杭(10)

先端部上方から切込みを入れている。側縁部にも削り込みが入れている。上端部は腐朽している。156は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。157-1は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。157-2は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。158は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。159は、割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。上端部を欠損している。160は、丸木を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。161は、割材を用いている。先端部に削り込みを入れている。上端部を欠損している。163は、割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。上端部は腐朽している。164は、丸木を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。166は、割材を用いている。先端部上方から削り込みを入れている。上端部は腐朽している。167は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。168は、割材を用いている。先端部は潰れている。中央部分を欠損している。部分的に屈曲している。上端部は腐朽している。169-1は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。169-2は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部は腐朽している。170は、角材を用いている。先端部は、屈曲して潰れている。上端部を欠損している。171は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。172は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。173-1は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。173-2は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。174は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。175は、割

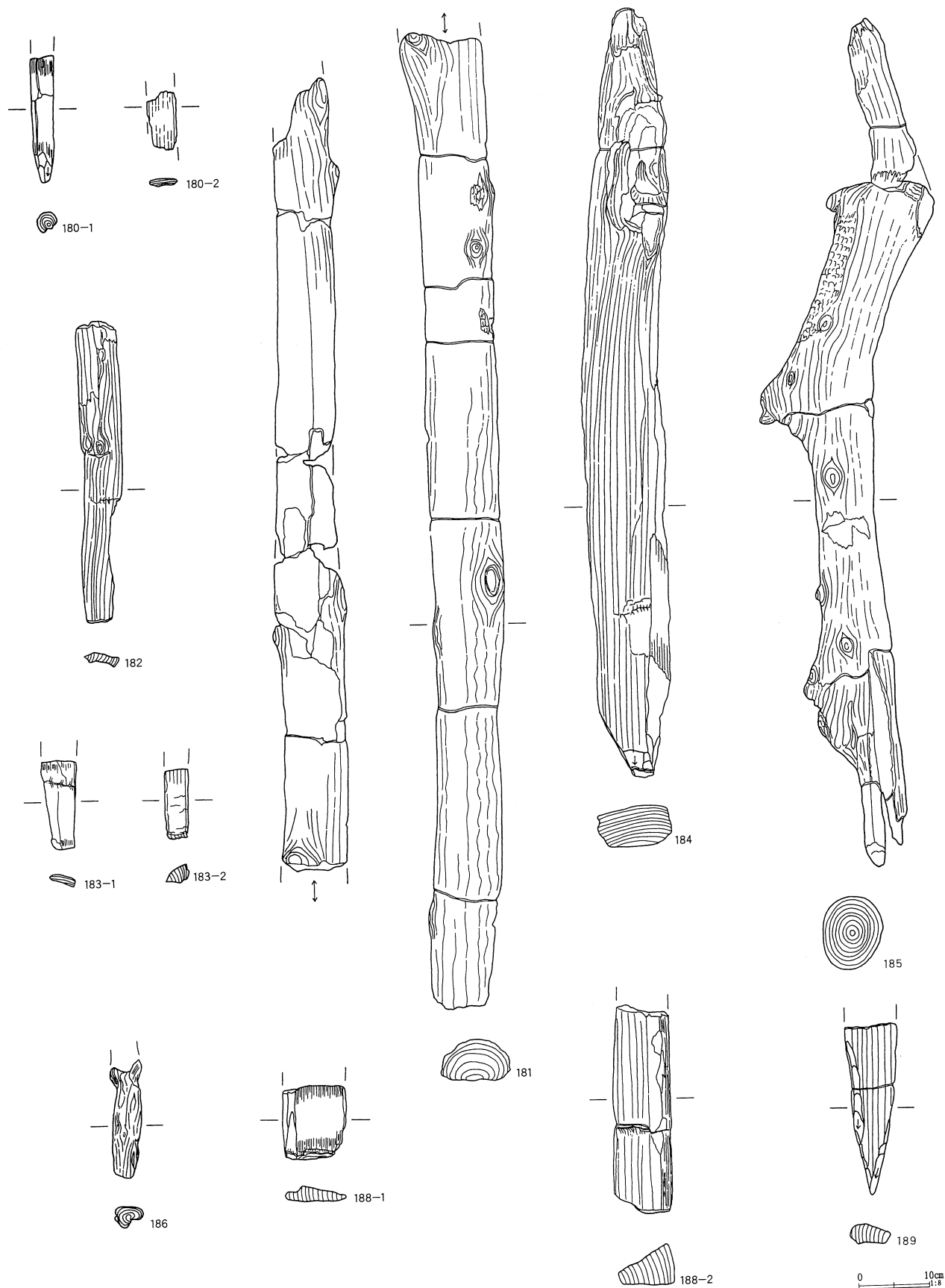
材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部は腐朽している。177は、みかん割材を用いている。先端部を欠損している。部分的に屈曲している。上端部は腐朽している。178-1は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。178-2は、割材を用いている。先端部は、割れ面を利用している。上端部を欠損している。179は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部は腐朽している。180-1は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。180-2は、板材を用いている。両端部を欠損している。181は、割材を用いている。枝を払っている。横木構築材である。182は、割材を用いている。先端部は、割れ面を利用している。183-1は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。183-2は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。184は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。枝を払っている。上端部は腐朽している。185は、丸木を用いている。両端部に切込みを入れている。枝を払っている。樹皮が付着している。186は、丸木を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。188-1は、板材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。188-2は、みかん割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。189は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。191は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。192-1は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。192-2は、割材を用いている。先端部を欠損している。枝を払っている。上端部は腐朽している。193は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部は腐朽し



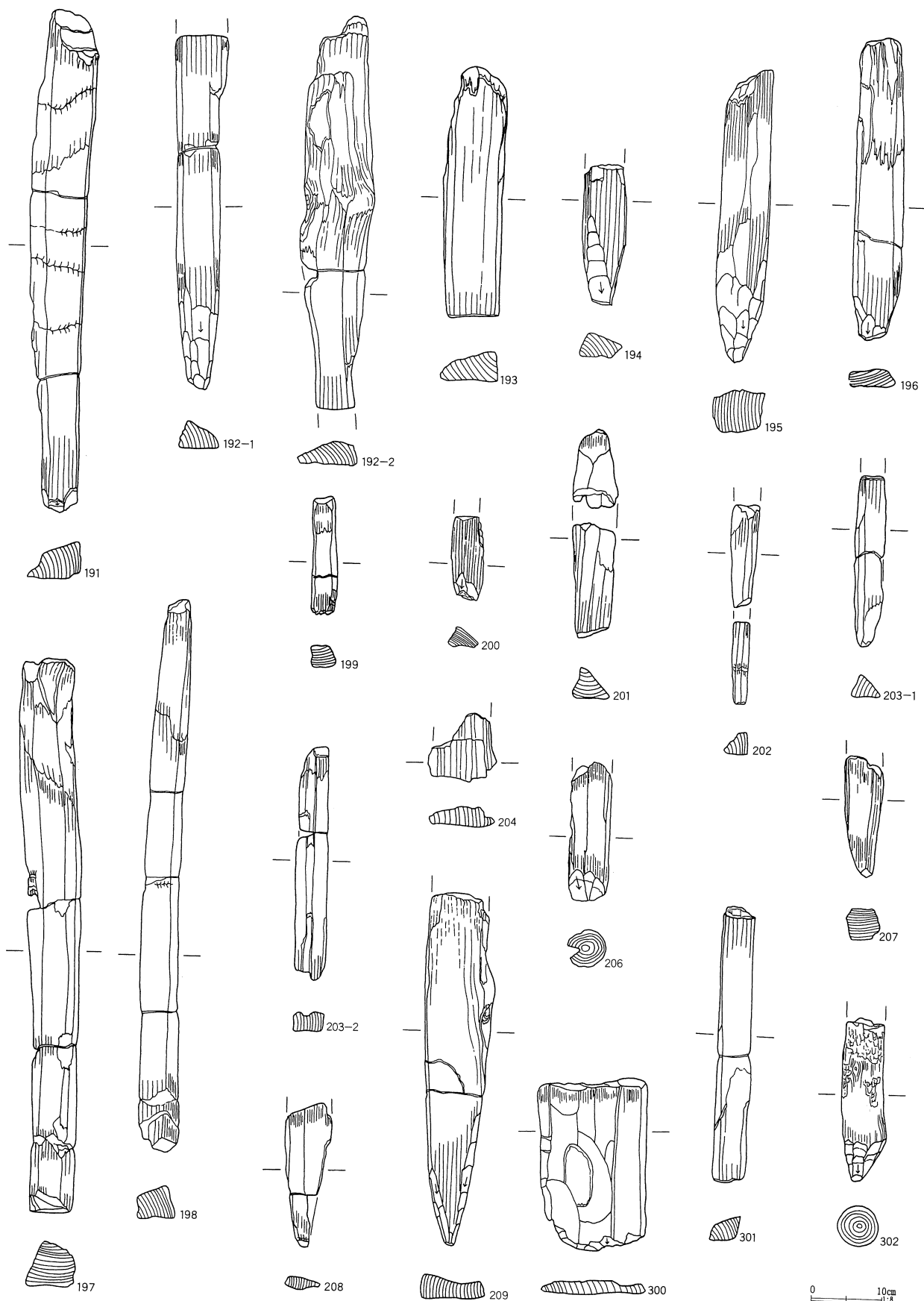
第338图 堰出土杭(11)



第339図 堰出土杭(12)



第340图 堰出土杭(13)



第341图 堰出土杭(14)

ている。194は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。195は、角材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部は腐朽している。196は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部は腐朽している。197は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部は腐朽している。198は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。上端部は腐朽している。199は、割材を用いている。先端部は潰れている。200は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。201は、割材を用いている。先端部は潰れている。中央部分を欠損している。上端部は腐朽している。202は、割材を用いている。先端部は、割れ面を利用している。部分的に屈曲している。中央部及び上端部を欠損している。203-1は、みかん割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。203-2は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部は腐朽している。204は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部を欠損している。206は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。207は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。208は、割材を用いている。先端部に削り込みを入れている。上端部を欠損している。209は、板材を用いている。先端部に切込みを入れ

ている。上端部を欠損している。300は、板材を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部は腐朽している。301は、割材を用いている。先端部は潰れている。上端部は腐朽している。302は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。樹皮が付着している。上端部を欠損している。

支保工付随杭（第342図）

1-1は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。上端部を欠損している。1-2は、丸木を用いている。先端部を欠損している。部分的に屈曲している。枝を払っている。上端部は腐朽している。3-1は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部を欠損している。4-1は、丸木を用いている。先端部に切込みを入れている。樹皮が付着している。上端部を欠損している。5-1は、割材を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。5-2は、みかん割材を用いている。先端部上方から切込みを入れている。5-3は、割材を用いている。先端部に切込みを入れている。部分的に屈曲している。上端部は腐朽している。6-1は、みかん割材を用いている。先端部に切込みを入れている。全面に削り込みを入れている。部分的に屈曲している。6-2は、丸木を用いている。先端部は潰れている。部分的に屈曲している。樹皮が付着している。上端部を欠損している。



第342図 支保工付随杭

5. 水路・溝・河川跡・窪地

水路（第345～350・359・360図）

調査区北側を蛇行して西方から東方に流れていた河川から、C・D・E・F-20グリッドに築かれていた堰を起点として南東方向に向かってほぼ直線に検出された。本水路は、北島遺跡第17地点の調査区内に続いていた。水路は、S-22グリッドから始まり北西方向に向かって開析する支谷と、P-27グリッド付近から始まって南東方向に開析する支谷を利用して開削したと考えられる。水路の大きさは、I-22グリッド付近で上幅4.4m、下幅1.9m、深さ1.2m、T-28グリッド付近で上幅9.0m、下幅4.0m、深さ1.7mであった。形状は逆台形を呈し底面に幅約1mの浅い溝が掘り込まれていた。水路の走行方向はN-29°-Wであった。覆土の堆積状況は、最下層第25層に青灰色粘土を主体とし植物繊維を少量含む均一な堆積が認められた。この中には弥生時代中期の土器片が少量含まれていた。その上層には多量の川砂を含む洪水層が堆積していた。堆積には攪拌が認められ、土器、石器、骨片など多くの遺物が出土した。第22・23層は最下層埋没後の再掘削後の堆積土と考えられる。第21層は粗砂粒及び細砂礫を含む洪水層で古墳時代前期の遺物が出土した。以後洪水及び自然堆積火山灰の降灰堆積などによって埋没し古墳時代後期には、浅い窪地上と化していたと考えられる。なお、水路底面及び傾斜面に部分的に杭が打ち込まれていたが、弥生時代中期に属すると判断されるものはなかった。

出土遺物（第365図）

1は、単口縁の壺である。口端部は、丸みがある。口縁部に原体LR単節縄文を施文している。2は、壺頸部である。原体無節多条Rを充填する鋸歯文を施文している。鋸歯文下に、列点文を施文している。列点文下に平行沈線文を施文している。3は、壺胴部である。三角文を施文し、区画内に原体LR単節縄文を充填している。4は、壺胴部である。原体LR単節縄文を充填する区画文を、細沈線を用いて

施文している。5は、壺胴部である。重三角文を施文している。下段に、原体無節多条R {1 1 1} を施文している。6は、壺胴部である。フラスコ形文に弧状沈線文を組み合わせている。区画文内及び区画間に、原体複節LR1を充填している。7は、壺胴部である。沈線直線文を施文している。全面赤彩されている。8は、壺頸部である。無文帯下に、原体RL単節縄文を施文している。9は、甕胴部である。ハケ調整後、6本一単位櫛歯状工具による斜格子文を施文している。10は、甕胴部である。3本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文施文下に、斜格子文を施文している。11は、高坏脚部である。脚部に原体LR単節縄文を施文している。坏部底面は幅広である。

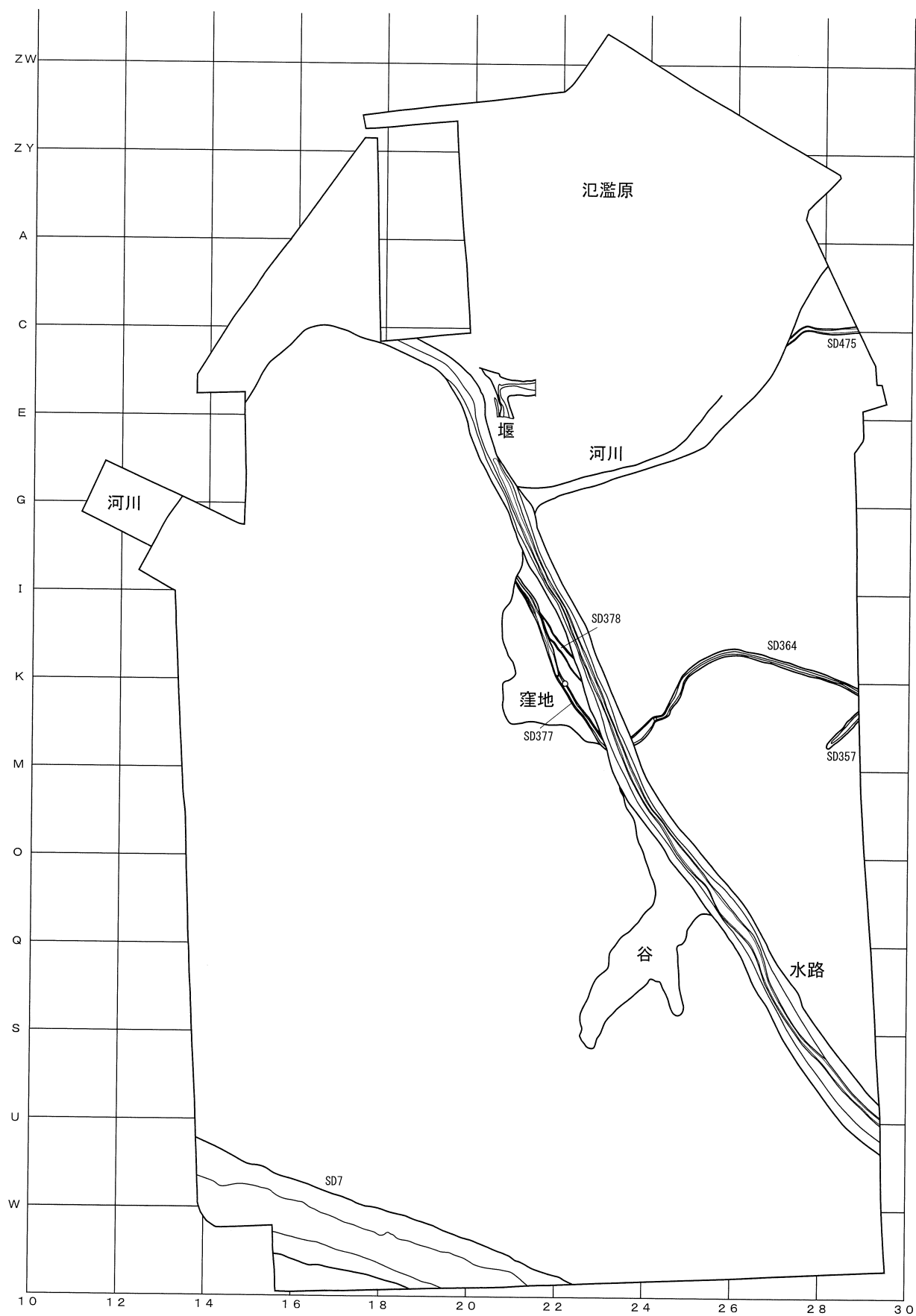
12は、有肩石器である。両側縁部に剥離を加えて抉り込みを入れている。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。

第357号溝（第351図）

調査区東際水路東側K・L-28グリッドで検出された本溝は東側調査区外に続いていた。形状は逆台形状を呈し、幅1.7m深さ1.0mで直線であった。溝の走行方向は、N-45°-Eであった。本溝は西側で急角度に立ち上がっていた。また、この立ち上がり部付近の溝底面から土器が纏まって出土した。

出土遺物（第366図）

1は、胴部がやや下膨れ状に張り出す壺である。口縁部を欠損している。頸部は、原体LR単節縄文を充填する鋸歯文を施文している。鋸歯文下に段を設けた列点文を施文して区画している。胴部は、1本描沈線による多条沈線の平行線文と同一原体縄文を交互に2段施文し、その下に、2条の平行線文を廻らせている。平行線文下にも縄文を施文し、胴下半部までの施文としている。縄文施文部分は、赤彩されている。底面に不明の圧痕が付いている。2・3・4は、壺胴部破片で同一個体である。胴部最大径部分に重四角文を施文している。重四角文内に原



第343図 堰・水路・溝全体図

体LR縄文を充填して、3条沈線による垂下文を施文している。但し、3の破片から垂下文は鋸歯状に配置されている可能性がある。また、重四角文は弧状の沈線で繋がれているかまたは、接続して施文している可能性がある。重四角文下にも縄文を施文している。下半部は、工具による斜位のナデが施されている。5は、複合口縁状を呈する甕である。地文に原体RL単節縄文を施文している。6は、甕胴部である。地文に原体LR単節縄文を施文している。7は、甕胴部である。かすれているが4本一単位櫛歯状工具による斜格子文を施文している。

第364号溝 (第351・359・360図)

調査区中央水路から東側調査区外にかけて湾曲した状態で検出された。グリッド位置はJ・K・Lー23～29グリッドにまたがっていた。本溝は部分的に古墳時代前期の溝と重複していた。また、第214号住居跡に切られていた。本溝は調査区北東際で検出された第475号溝と、形状の類似性が窺えた。形状は、薬研堀状を呈し、幅1.2m、深さ1.1mであった。

出土遺物はなかった。

第377号溝 (第346・359・360図)

調査区中央、水路の西側に併行する状態で検出された。グリッド位置はI～Lー20～23グリッドにまたがっていた。本溝は第316号住居跡、及び古墳時代の環濠に切られていた。また、第378号溝を切っていた。形状は、箱型を呈し、幅1.4m、深さ0.37mであった。溝の走行方向はNー28°ーWであった。

出土遺物は溝北側から両端を欠損した太型蛤刃磨製石斧及び砥石が出土した。

出土遺物 (第367図)

1は、砥石である。板状の石材の表面に研磨による窪みが付いている。研磨部分には、擦痕が明瞭に認められる。研磨部分左側縁辺は直線的に擦痕が付いているが、右側縁辺部はやや蛇行している。縁辺部に敲打痕跡が付いている。2は、太型蛤刃磨製石

斧である。頭部は、第336号住居跡出土遺物と接合した。刃部を欠損している。全面丁寧な研磨が施されている。欠損面に敲打による剥離が認められる事から磨石乃至は、敲石として再利用された可能性がある。また、1の砥石と、研磨面がほぼ一致している事からこの砥石は、磨り潰し用に使用された可能性もある。

第378号溝 (第346・359・360図)

調査区中央、水路の西側にほぼ併行する状態で検出された。グリッド位置はI・Jー21～22グリッドにまたがっていた。本溝は第377号溝に切られていた。形状は、箱型を呈し、幅1.45m、深さ0.22mであった。溝の走行方向はNー34°ーWであった。

出土遺物はなかった。

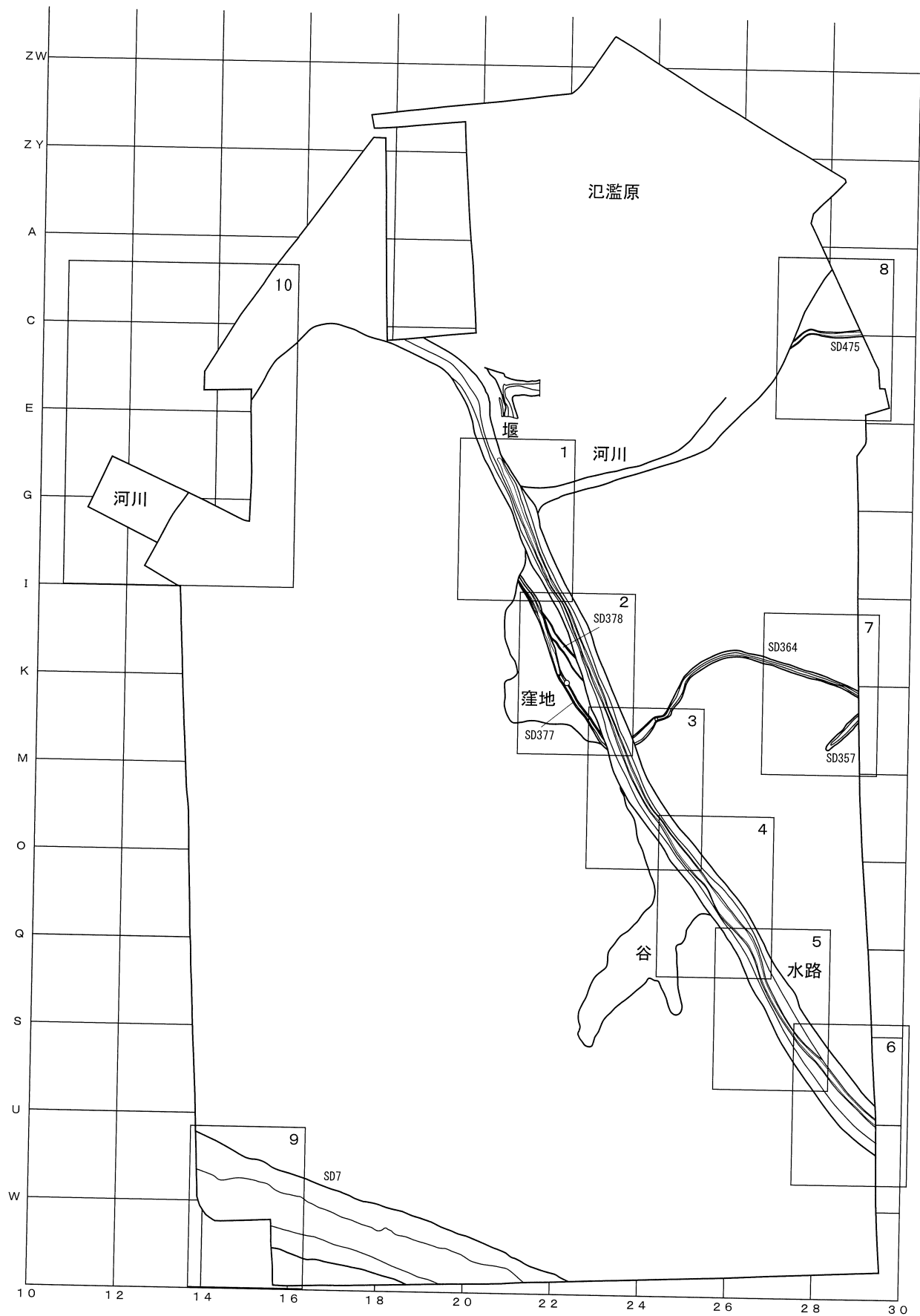
第475号溝 (第352・359・360図)

調査区北東際、北側河川跡東側に接して検出された。グリッド位置はCー27～28グリッドにまたがっていた。本溝は北側河川跡に接続していた。また上部に第402号溝が重複していた。形状は、薬研堀状を呈し、幅1.5m、深さ1.0mであった。溝の走行方向は、Nー90°ーWで南側にクランク状に曲がっていた。出土遺物はなかった。

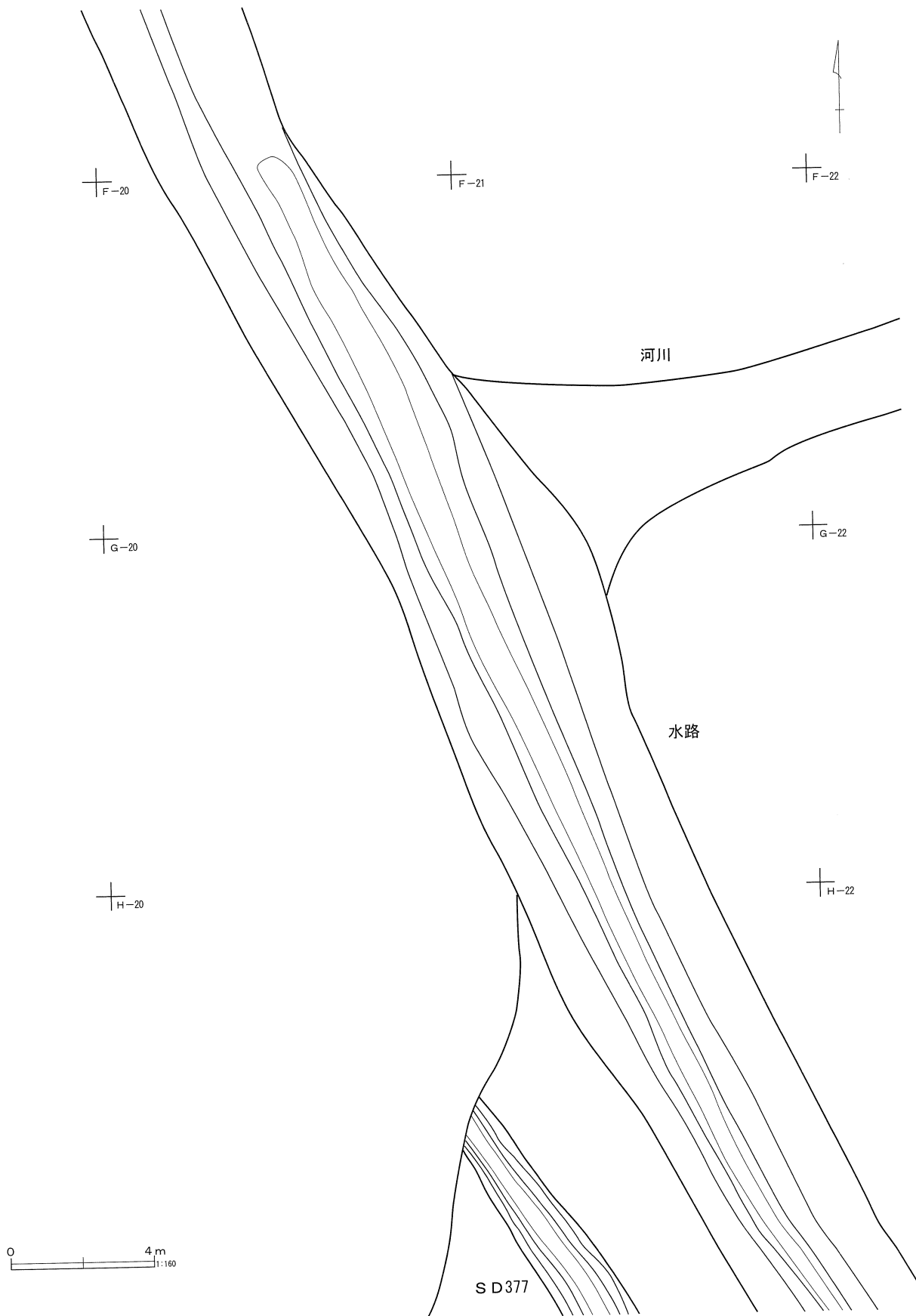
第7号溝 (第353～357・361・362図)

調査区南西際Uー13グリッドからXー22グリッドにかけて検出された。調査の結果、河川跡であることが判明した。本河川跡の調査に際しては、V・Wー15グリッド半ば以東の部分の調査を古墳時代前期の面まで掘り下げた状態で終了している。したがって、本来はその下層に検出されるはずであった弥生時代中期の堆積層の調査を行っていない。また河川の上幅及び下幅についても、弥生時代中期の状態では、広がり傾斜面もより緩やかであったが、V・Wー15グリッド以東においては、古墳時代前期の検出状況を図示している。

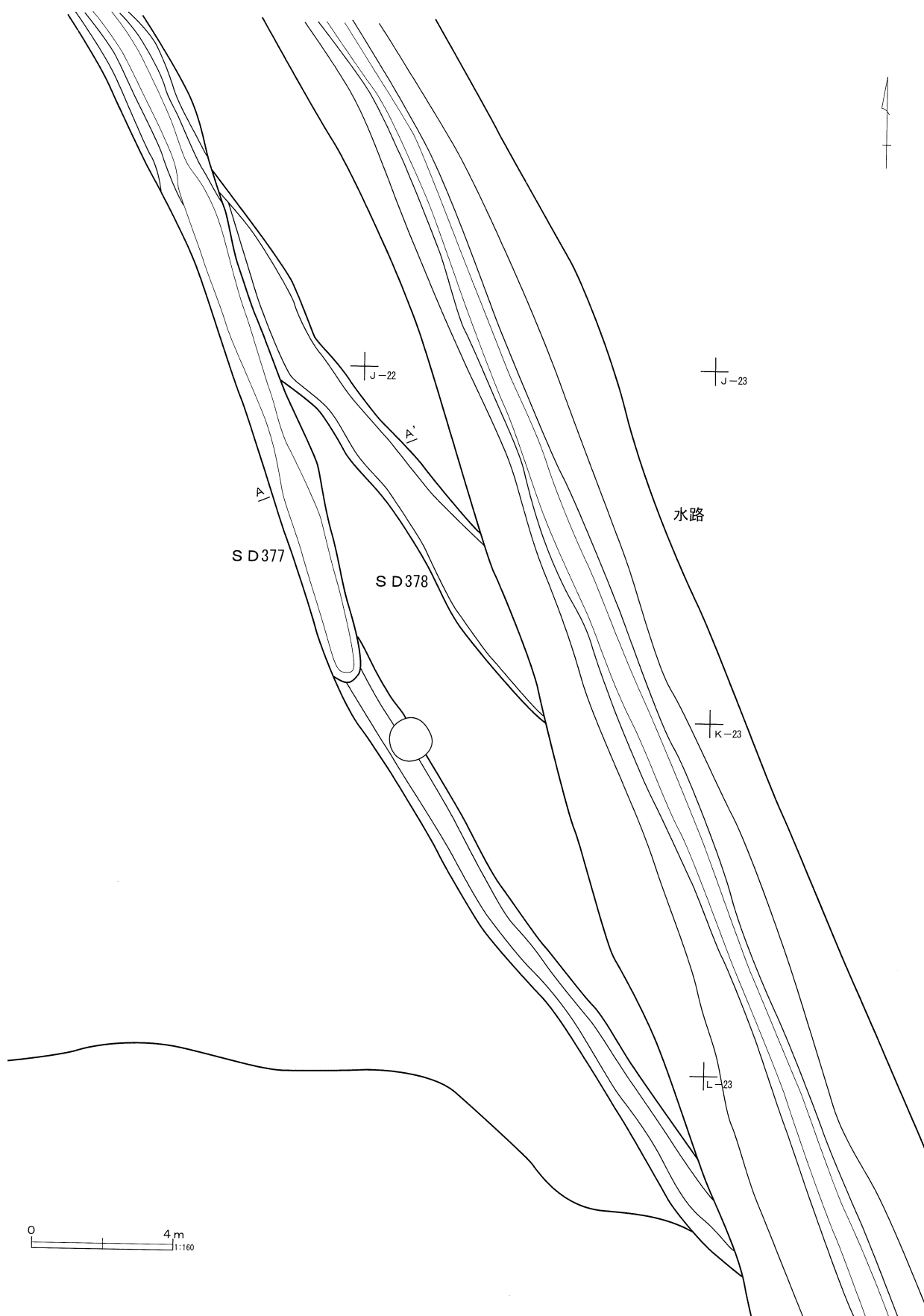
本河川跡は、北島遺跡第17地点の調査において、調査区の北側隅に部分的に検出された。溝の位置、走行方向、堆積土の状況などから同一河川と判断さ



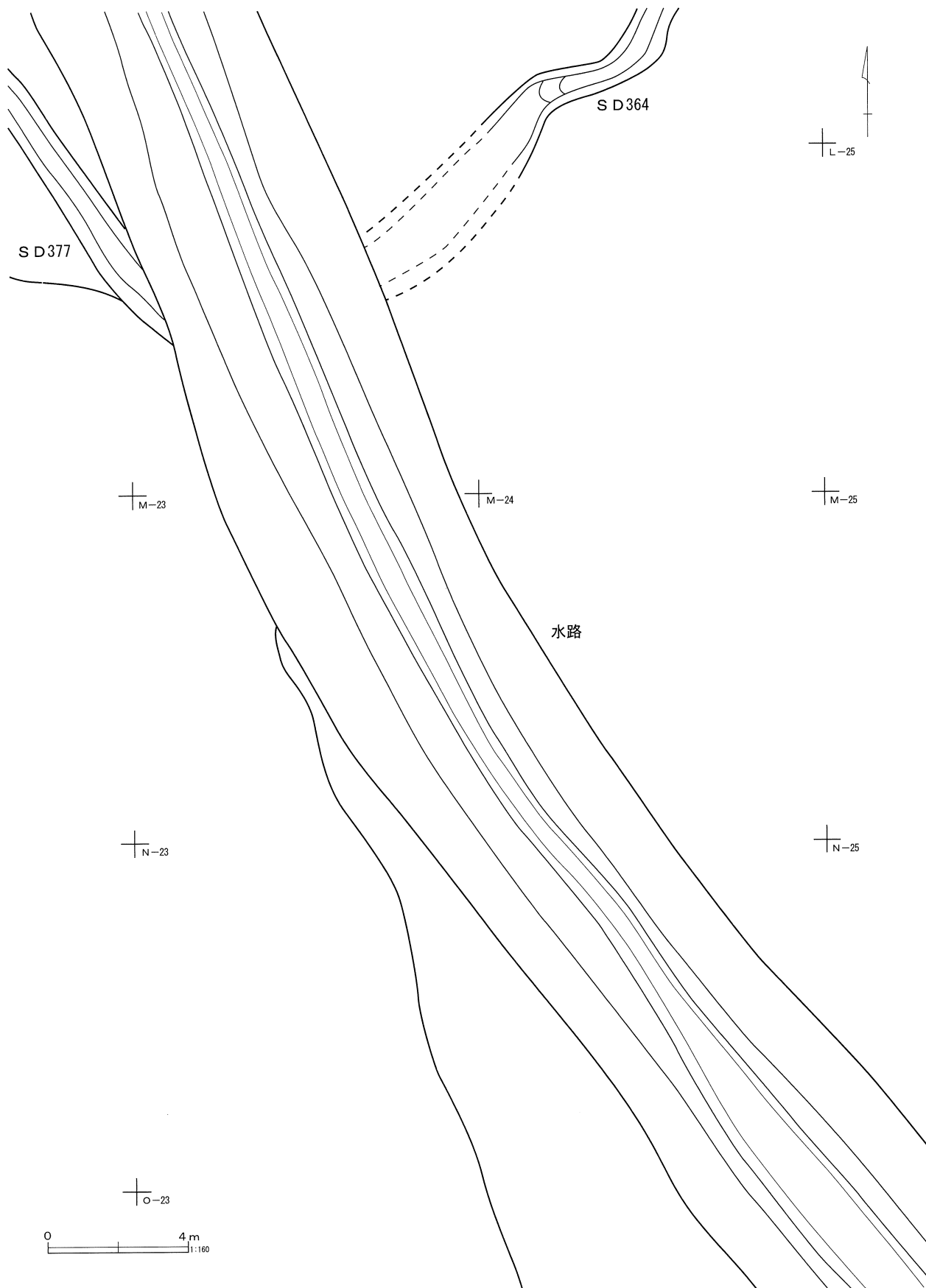
第344図 堰・水路・溝区割図



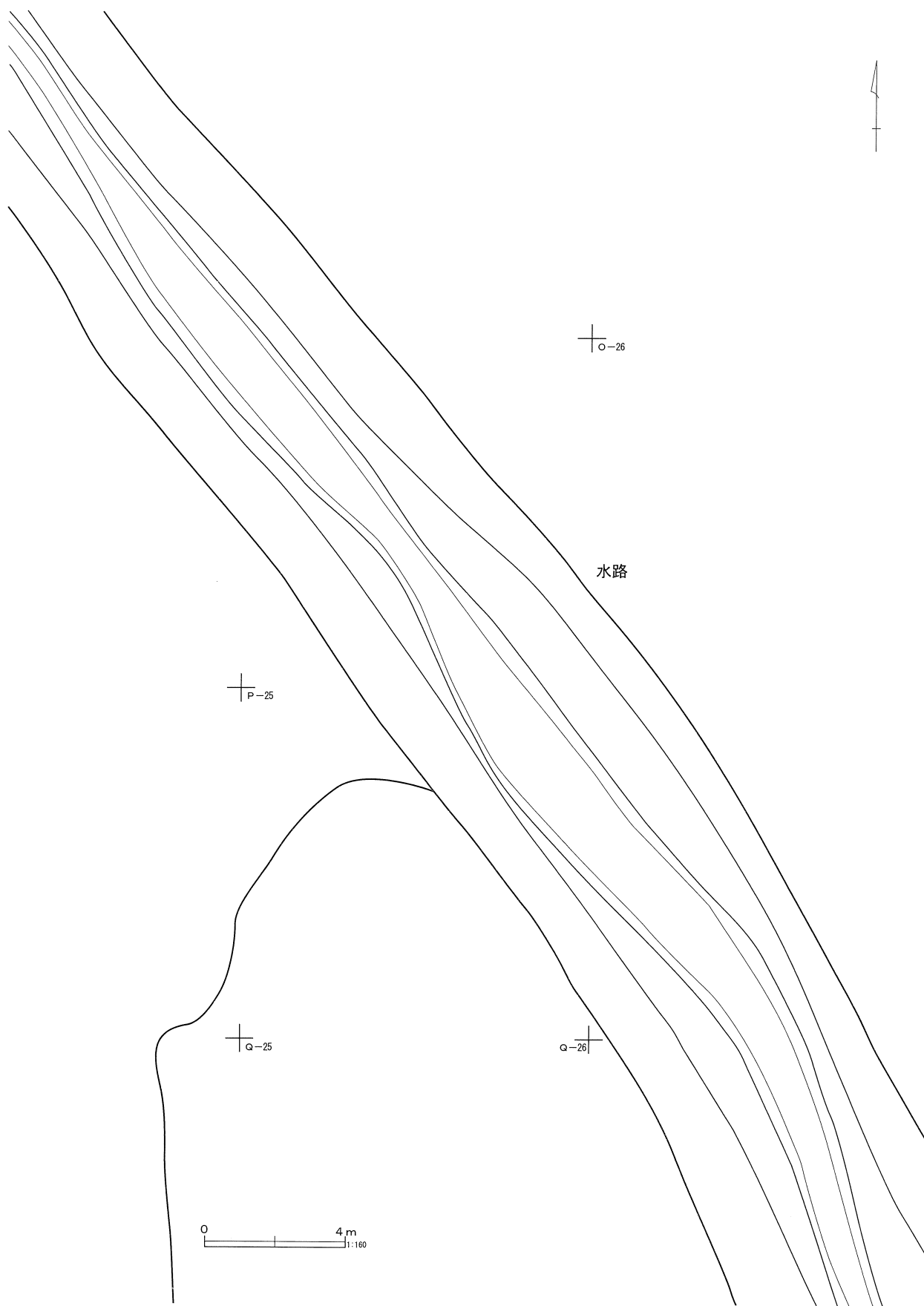
第345図 水路(1)



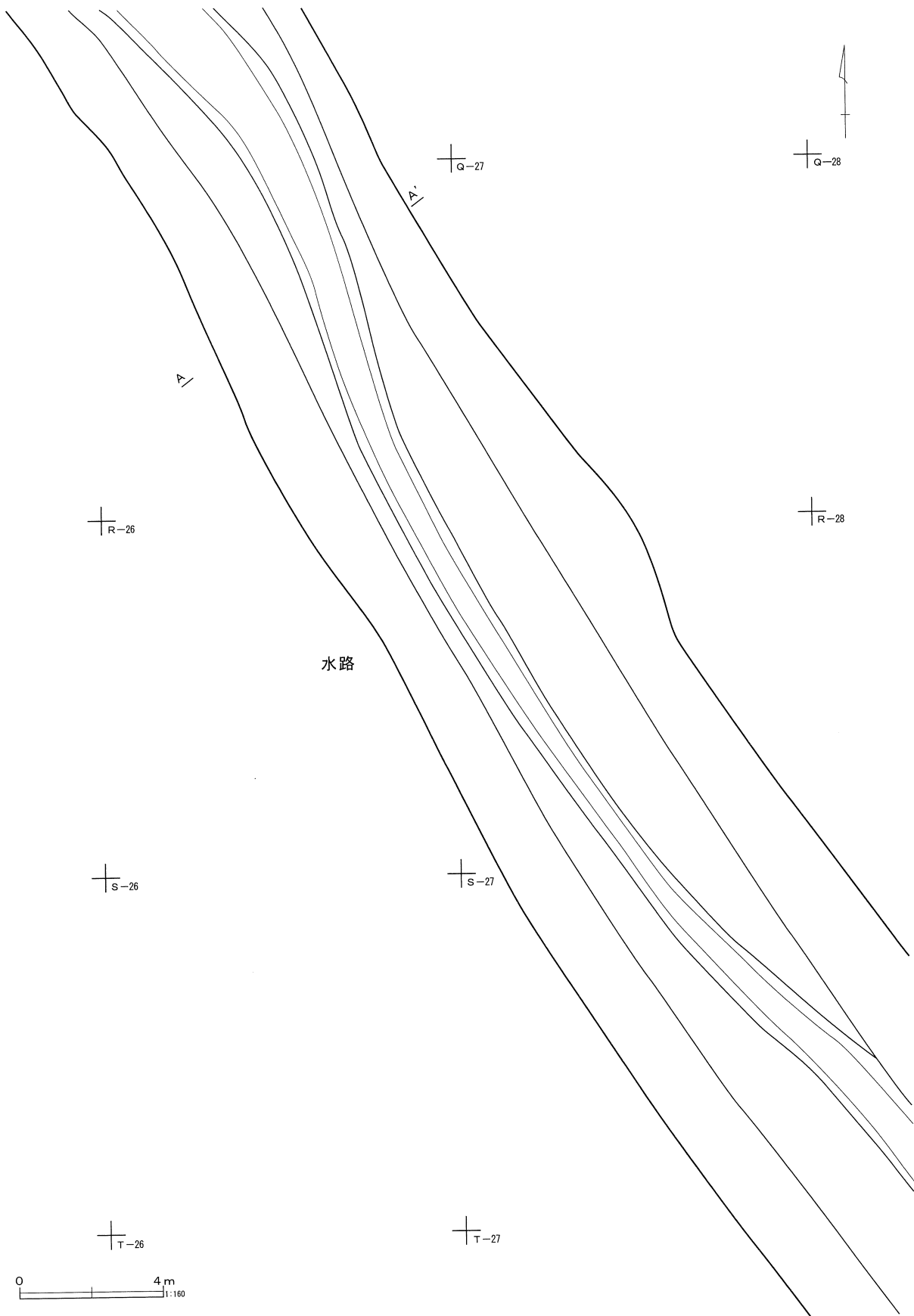
第346図 水路(2)



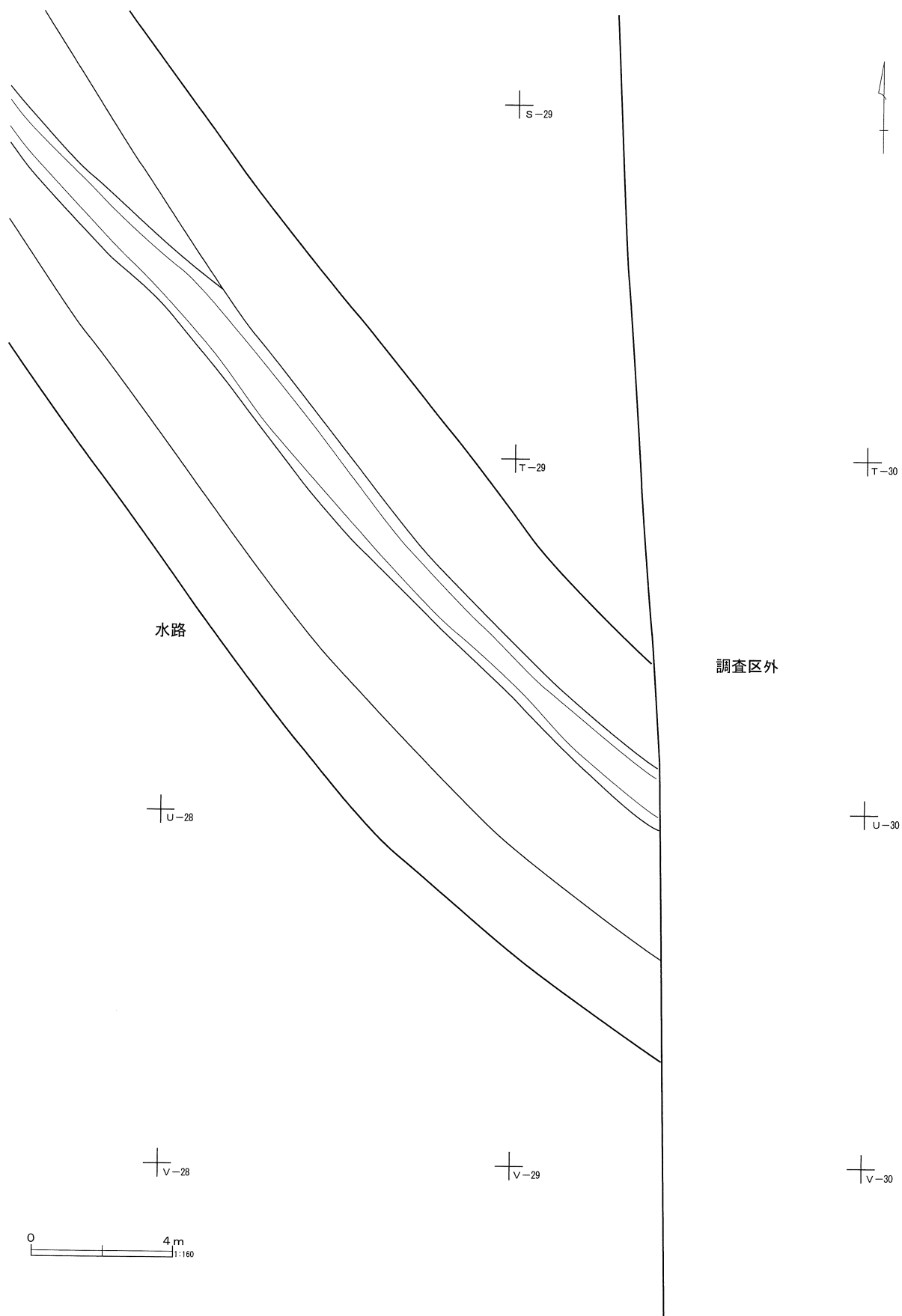
第347図 水路(3)



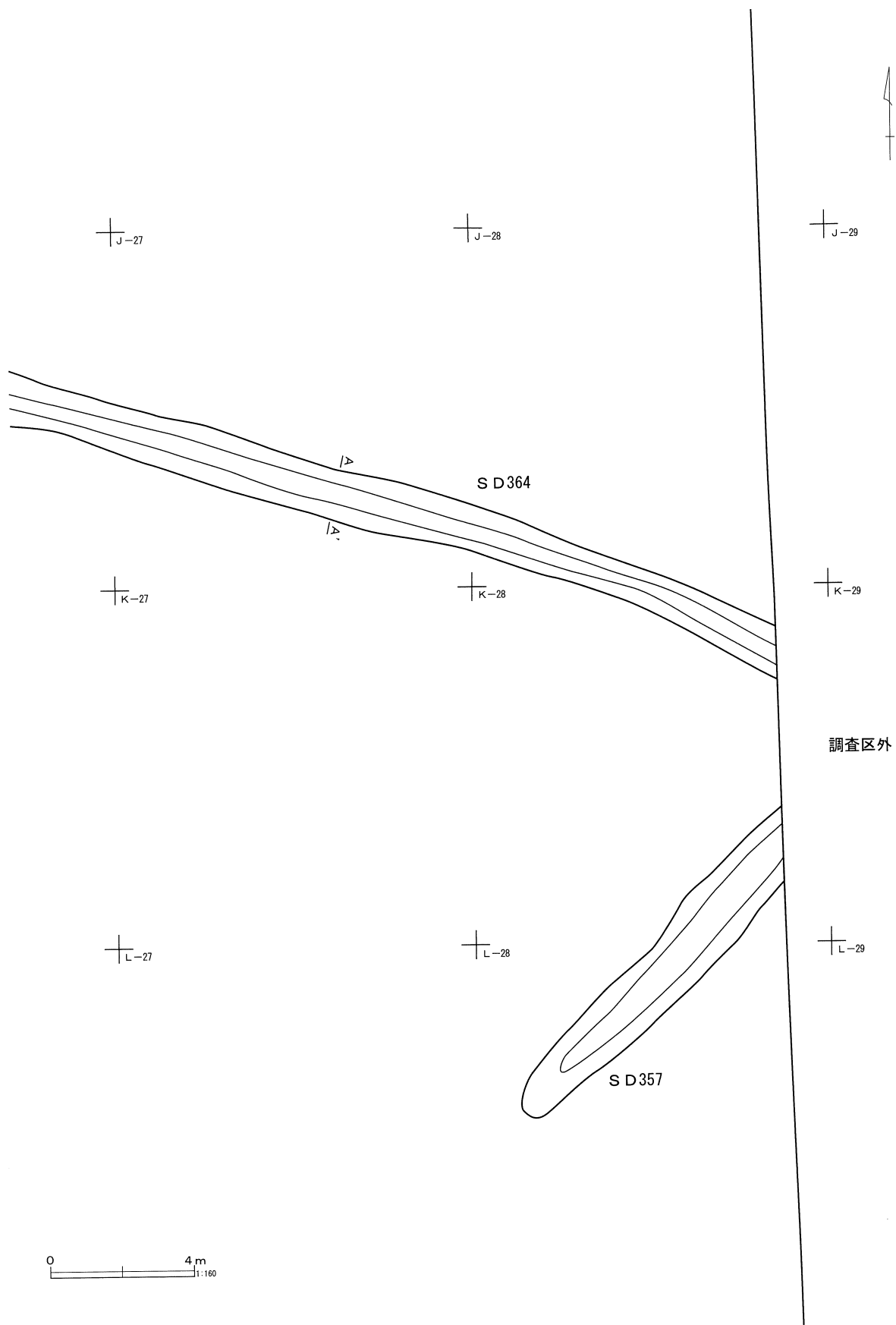
第348図 水路(4)



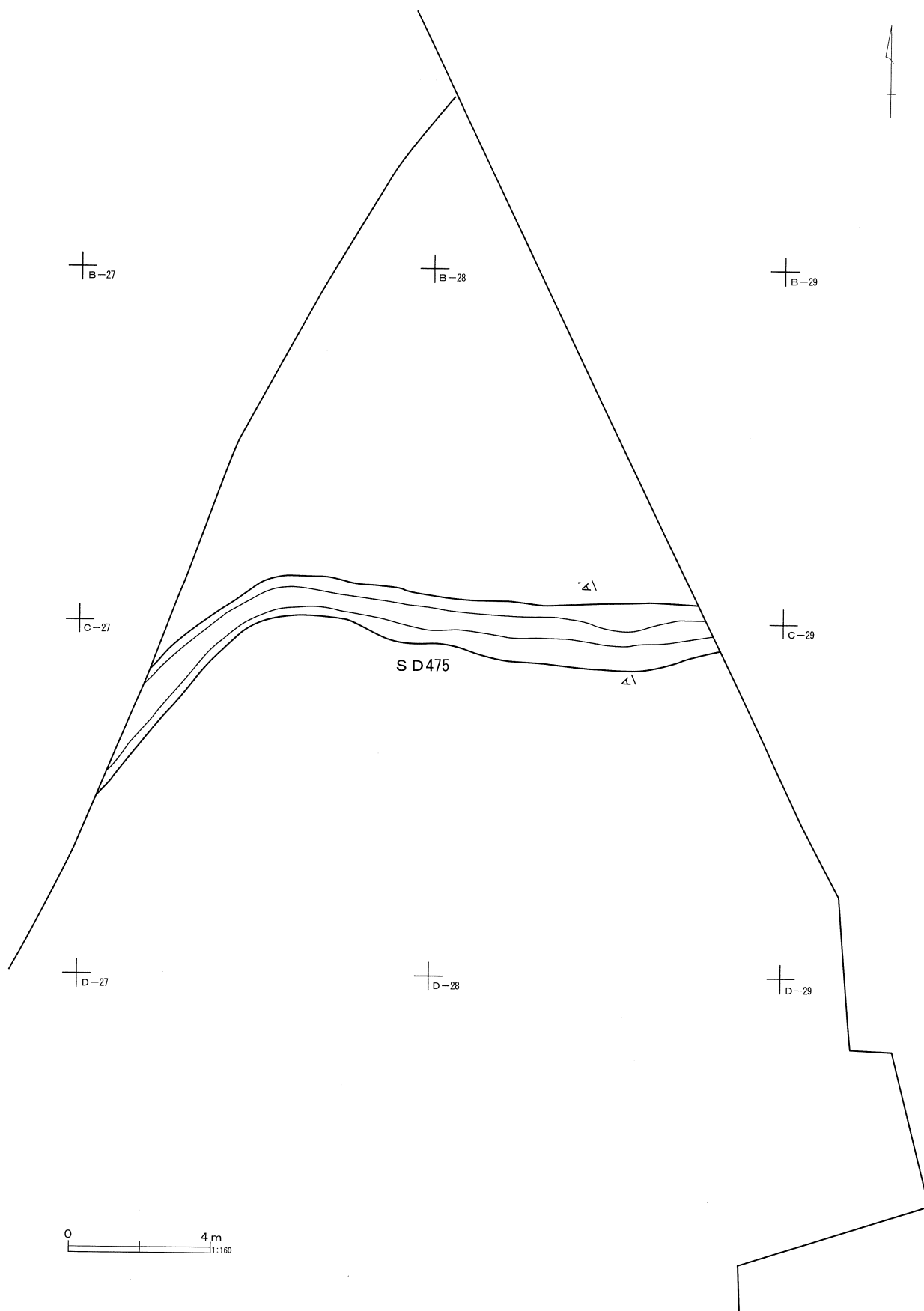
第349図 水路(5)



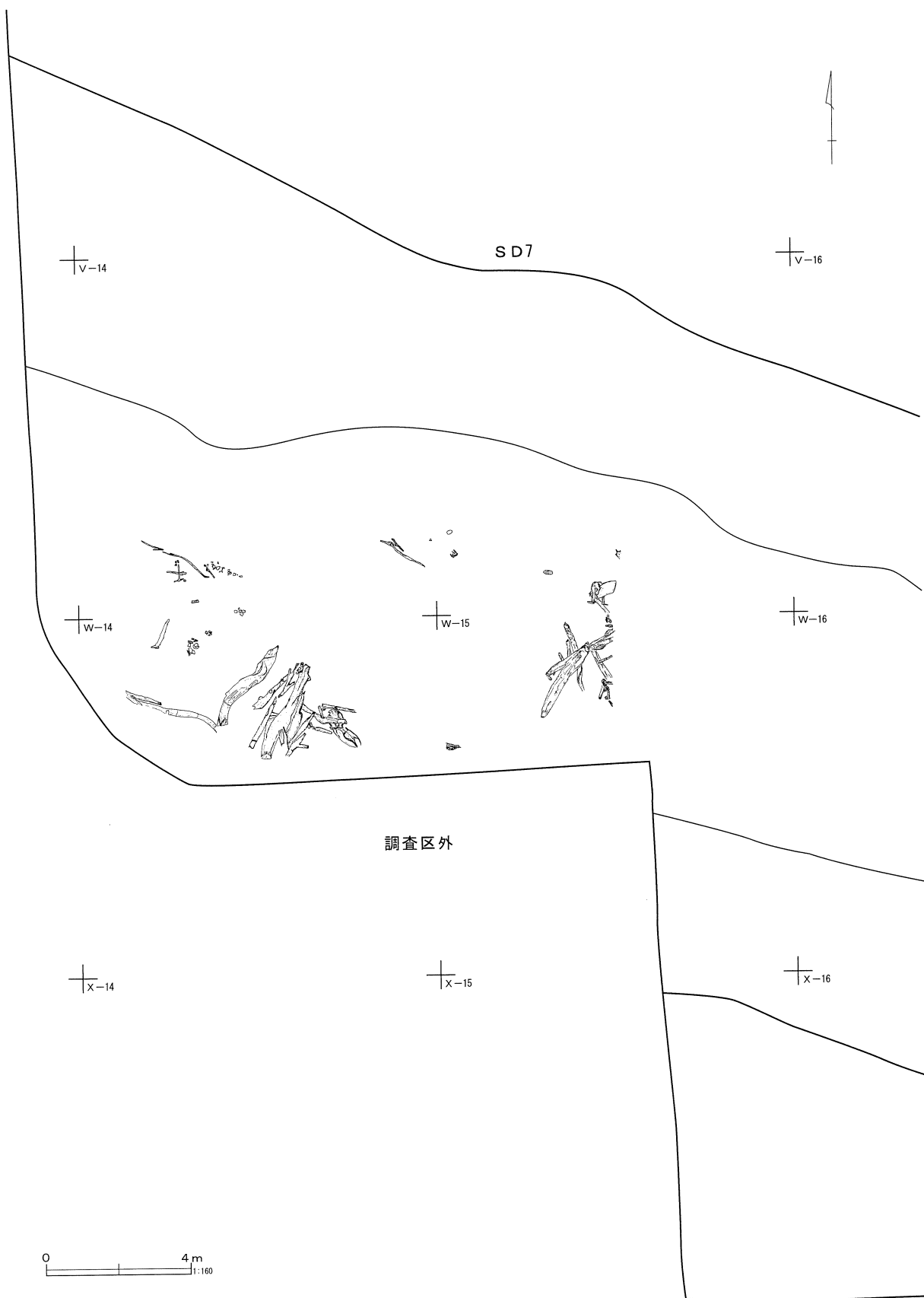
第350図 水路(6)



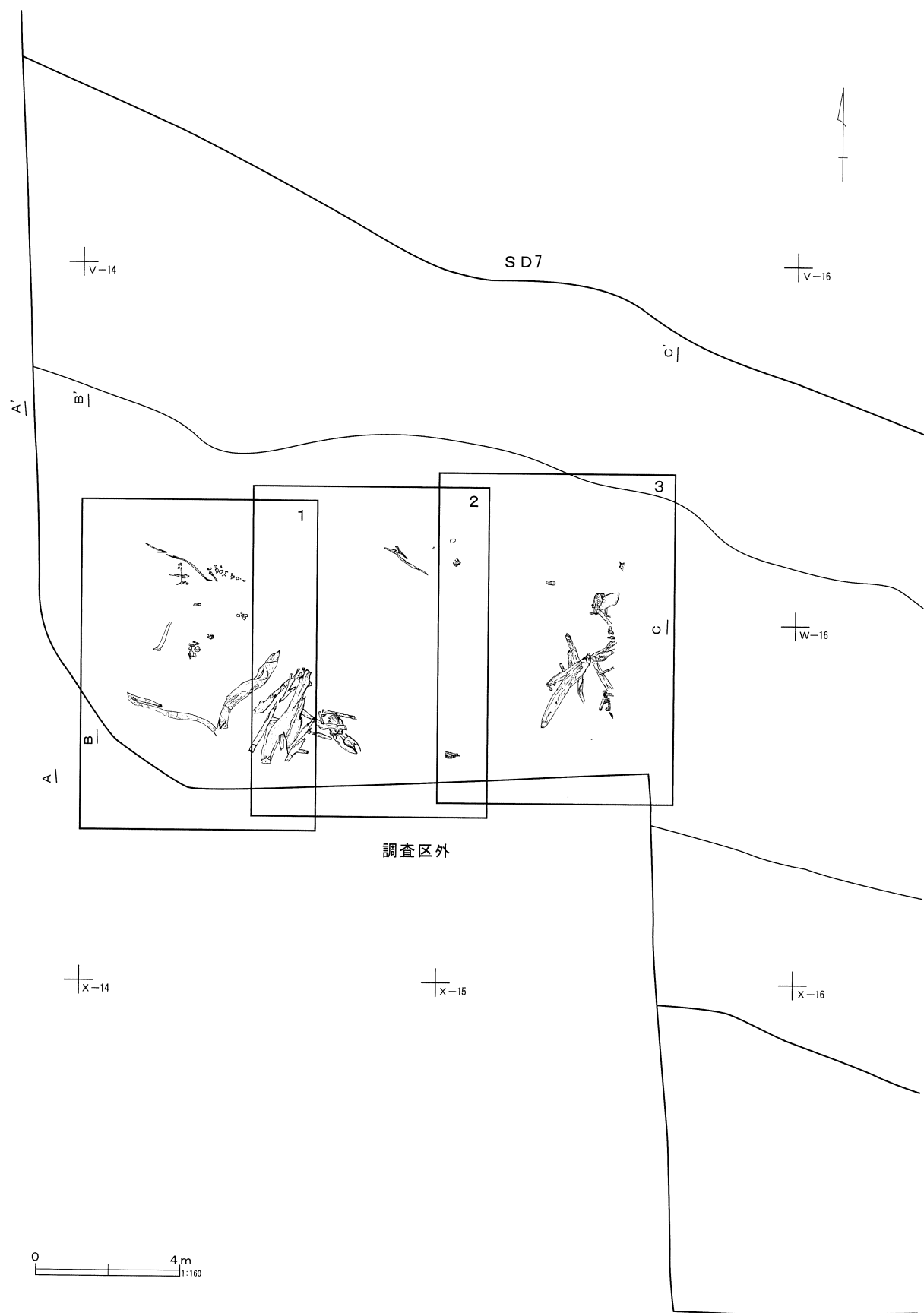
第351図 第357・364号溝(7)



第352図 第475号溝(8)



第353図 第7号溝全体図(9)



第354図 第7号溝区割図



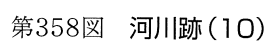
第355図 第7号溝(1)

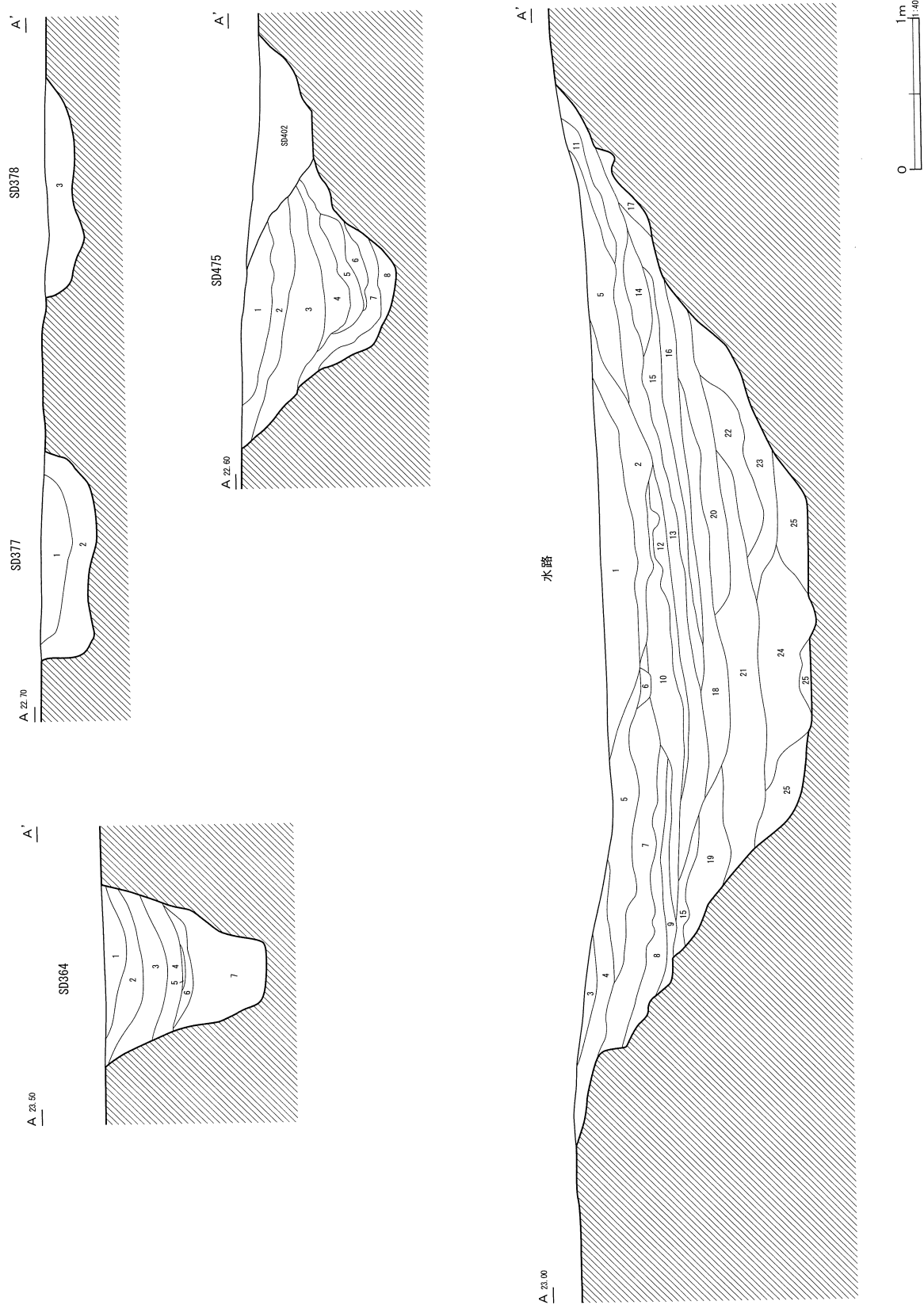


第356図 第7号溝(2)



第357図 第7号溝(3)





第359図 水路・溝断面図(1)

SD364

- 1 暗灰褐色 淡灰色土粒子（少）、炭化物（微）
- 2 淡灰黄色 均質な土層、弥生住居覆土上層の土と近似
- 3 暗褐色 炭化物（少）、淡灰黄色土やや多く含む
- 4 暗褐色 淡灰黄色土をブロック状に含む、炭化物（微）
- 5 暗褐色 灰を多く含む層、炭化物（微）
- 6 暗褐色 淡灰黄色土ブロックを含む、4層よりも灰色濃い
- 7 暗灰褐色 均質な土層、炭化物（少）

SD377・378

- 1 灰褐色 粘性（中）、炭化物粒子（微）
- 2 暗灰褐色 粘性（強）、炭化物粒子（微）、明灰色粘土（少）
- 3 暗灰褐色 粘性（強）、炭化物粒子（微）、明灰色粘土をブロック状に含む

SD475

- 1 黒褐色 炭化物粒子（多）、黄褐色土ブロック（多）
- 2 にぶい黄色 炭化物粒子（少）
- 3 黒褐色 炭化物粒子（多）、黄褐色土ブロック（多）
- 4 黄褐色 炭化物粒子（少）、黄褐色土粒子（多）
- 5 黄灰色 炭化物粒子（少）
- 6 にぶい黄色 炭化物（無）、黄褐色土ブロック（多）
- 7 黄灰色 黄褐色土ブロック、同粒子（多）
- 8 明黄褐色 黄褐色土ブロック（多）

水路

- 1 暗褐色 粘性（中）、炭化物粒子（少）、焼土粒子（少）、土器類（古墳後期以降）含む、黄褐色細砂粒を攪拌状に含む、植物繊維（少）、鉄分含む
- 2 暗褐色 粘性（中）、炭化物粒子（小）、焼土粒子（小）、土器類（古墳後期以降）含む、黄褐色細砂粒を帯状に含む、植物繊維（中）（部分的洪水層か？）
- 3 暗褐色 粘性（中）、炭化物粒子（多）、焼土粒子（中）、明褐色土粒子（少）、鉄分含む
- 4 暗褐色 粘性（中）、炭化物粒子（少）、焼土粒子（無）、暗灰色粘土をブロック状に含む、鉄分含む
- 5 暗褐色 粘性（中）、炭化物粒子（微）、焼土粒子（無）、暗灰色粘土をブロック状に含む、F A火山灰をブロック状に含む、鉄分含む
- 6 暗灰色 粘性（強）、ビット覆度（杭の痕跡か？）、深さ不明
- 7 暗褐色 粘性（中）、炭化物粒子（少）、焼土粒子（少）、土器類を含む（時期古墳時代後期か？）、植物繊維（少）、鉄分含む
- 8 暗灰褐色 粘性（少）、炭化物粒子（多）、焼土粒子（微）、細砂粒、明灰色粘土小ブロック、植物繊維の混土、しまり欠
- 9 灰色 粘性（大）、炭化物粒子（多）、植物繊維、自然木を多く含む粘土層
- 10 暗褐色 粘性（少）、炭化物粒子（中）、植物繊維、自然木、細砂粒、灰色粘土の混土（攪拌状に堆積）
- 11 明灰色 粘性（大）、炭化物粒子（少）、焼土粒子（少）、植物繊維を多量に含む粘土層
- 12 灰色 粘性（大）、炭化物粒子（少）、植物繊維（少）、乾燥化に伴う粘土の帯状堆積か？
- 13 暗灰褐色 粘性（中）、炭化物粒子（少）、灰色粘土、植物繊維、自然木の混土、しまり欠
- 14 暗灰褐色 粘性（中）、炭化物粒子（微）、明灰色粘土小ブロックを含む、植物繊維（少）、鉄分含む
- 15 暗灰褐色 粘性（少）、炭化物粒子（少）、植物繊維（少）、しまり欠
- 16 灰褐色 粘性（少）、炭化物粒子（中）、灰色粘土と多量の植物繊維及び自然木の帯状堆積、細砂粒を部分的に帯状に含む
- 17 灰色 粘性（強）、炭化物粒子（少）、明灰色粘土をブロック状に含む
- 18 暗灰褐色 粘性（中）、炭化物粒子（微）、粗砂粒を帯状に多量に含む、一部攪拌作用を受けている、やや大型の自然木を含む（洪水層）
- 19 青灰色 粘性（少）炭化物粒子（微）、青灰色シルトと灰色粘土の混土、植物繊維（微）
- 20 暗灰褐色 粘性（中）、炭化物粒子（多）、炭化した種子類を含む、明灰色粘土粒子（少）、粗砂粒を一部含む
- 21 暗灰褐色 粘性（少）、炭化物粒子（少）、底面に多量の粗砂粒、細砂礫を含む、大型の自然木を含む、古墳時代前期の遺物を含む
- 22 灰褐色 粘性（中）、炭化物粒子（微）、灰色粘土を主体とし青灰色粘土及び植物繊維を含む
- 23 灰色 粘性（強）、炭化物粒子（微）、灰色粘土を主体とし青灰色細砂粒を帯状に含む、植物繊維（少）
- 24 灰色 粘性（中）、炭化物粒子（微）、灰色粘土と青灰色砂粒の混土、しまり欠、弥生時代中期の遺物を含む（洪水層）
- 25 灰色 粘性（強）、炭化物粒子（微）、灰色粘土を主体とし、青灰色粘土をブロック状に含む、植物繊維（微）

第360図 水路・溝断面図(2)

れる。

本河川跡は、北島遺跡第17地点の遺構検出状況から、南東方向に向かって開削された水路と交差する状況にあった。交差する位置は、第19地点と第17地点の中間付近にあたると考えられる。

この接点付近については、公園内の雨水管工事の再調査所見から、水路が河川を切って構築している状況が看取できた。但し、調査幅が狭い上に掘削深度を十分取ることが不可能であったので、弥生時代中期まで同一の状況であったかについては不明であった。

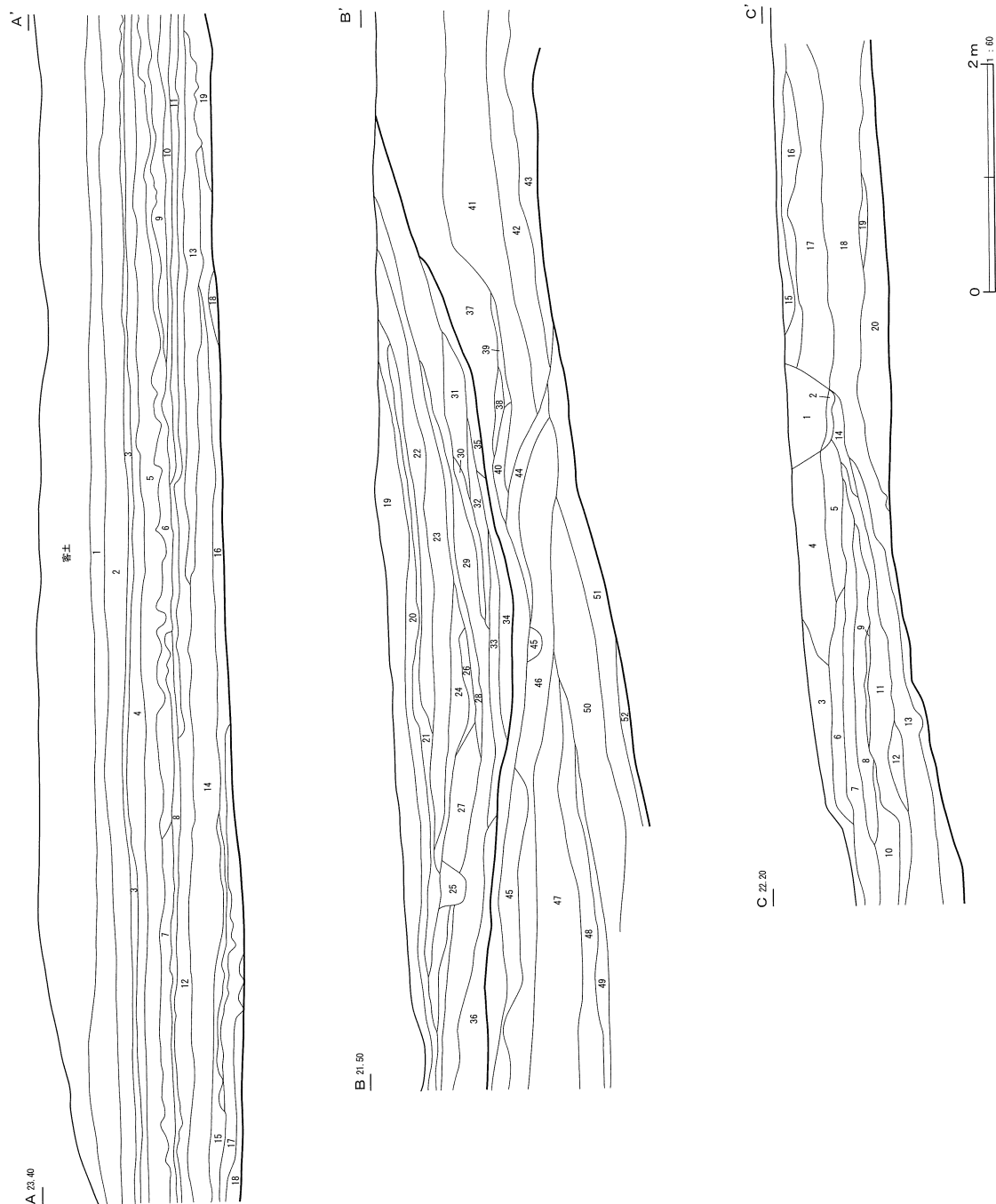
河川の形状は底面の浸食は認められずほぼ直線に流れていた。また、河畔部への傾斜も緩く粘土層が厚く堆積していた。川幅は、上幅で推定20m前後になると考えられる。河川の走行方向はN—70°—Wであった。本河川跡の土壌堆積状況は、最下層部分には砂質土が堆積するものの、有機物及び植物繊維を多く含んだ粘土とシルト質土壌の互層で構

成されていた。したがって、調査区北側を東西方向に蛇行して流れる河川ほど水量は多くなかったと考えられる。

出土遺物は、河畔部堆積土層中に、大型の幹木の両端部を切断し、河畔部傾斜面に垂直に並べられた状態で出土した。これらの、大型材は樹皮が剥がされており、枝が打ち払われていた。打ち払われた枝は、周囲に散乱した状況で出土した。この大型材のまともりは調査範囲内で2箇所認められた。また、付近から多量の炭化物が散布していた箇所が認められその周囲から甕及び壺が纏まって出土した。この他に、斧台頭部に彫刻を施した膝柄斧が完形で出土した。

出土遺物（第368～370図）

1 は、壺胴下半部である。胴部中央部付近に斜位のハケ調整が施されている。下半部は、工具による斜位のナデ調整及びミガキがかけられている。底面はナデ調整である。内面にも、ハケ調整が認められ



第361図 第7号溝断面図(1)

る。2は、口縁部が緩やかに外反し、卵形の胴部を呈する甕である。口端部は、丸みがあり、工具による刻み目を施している。口縁部は、無文帯を構成する。頸部に3本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を2段施文しているが、面によっては、3段構成と

なっている。簾状文下に、同一工具による波状文を3段施文している。波状文は、上から下に向かって施文し、一部重複している。胴部は、同一工具による縦羽状文を粗雑に施文している。羽状文は施文幅が広く底部付近にまで及んでいる。器面外面にハケ

S D 7

A－A'、B－B'

- 1 明褐色 火山灰（浅間A軽石）（少）（水田面）
- 2 褐色 火山灰（浅間A軽石）（多）（水田面）
- 3 暗黄灰色 炭化物粒子（少）、マンガン（多）、酸化鉄沈着（水田床土）
- 4 暗褐色 粘質土、炭化物粒子（少）、土器片含む
- 5 褐灰色 粘質土、マンガン（多）
- 6 暗灰色 火山灰（浅間B軽石）（多）、黄灰色粘土（少）（水田面）
- 7 暗灰色 火山灰（浅間B軽石）（多）、黄灰色粘土（多）（水田面）
- 8 黄灰色 酸化鉄沈着、マンガン（少）（水田床土）
- 9 褐灰色 黄灰色粘土（微）、マンガン（多）
- 10 明灰色 黄灰色粘土（少）、マンガン（多）
- 11 暗褐色 灰白色粘土（微）、マンガン（多）
- 12 暗黄灰色 黄灰色粘土主体、マンガン（多）
- 13 暗褐色 炭化物粒子（少）、黄灰色粘土（多）
- 14 暗褐色 炭化物粒子（少）、黄灰色粘土（微）
- 15 暗褐色 火山灰（榛名ニッ岳）（多）、炭化物粒子（多）
- 16 黒灰色 火山灰（榛名ニッ岳）（少）、炭化物粒子（少）
- 17 暗褐色 炭化物粒子（少）、灰白色粘土（少）
- 18 黒灰色 灰白色粘土（多）
- 19 暗灰色 灰白色粘土（多）
- 20 暗褐色 炭化物粒子（多）、黄灰色粘土（少）
- 21 黄灰色 粘質土炭化物粒子（少）
- 22 褐色 炭化物粒子と黄灰色粘土の互層
- 23 暗黄灰色 炭化物粒子（微）、黄灰色粘土と褐色土の互層
- 24 明黄灰色 粘質土
- 25 黒灰色 黄灰色粘土（多）
- 26 黒灰色 炭化物粒子（微）、黄灰色粘土（微）
- 27 暗褐色 炭化物粒子と黄灰色粘土の互層
- 28 暗黄灰色 炭化物粒子と黄灰色粘土の互層
- 29 褐灰色 炭化物粒子（微）、黄灰色粘土（多）
- 30 黒灰色 炭化物層
- 31 褐灰色 炭化物粒子（微）、灰白色粘土粒子（少）
- 32 褐灰色 灰白色粘土（多）
- 33 暗褐色 炭化物粒子（微）、炭化物ブロック（少）、灰白色粘土粒子（少）
- 34 黒色 炭化物層
- 35 暗緑灰色 褐灰色土と暗緑灰色シルトの混土（古墳時代前期最下層）
- 36 黄灰色 褐灰色土と黄灰色粘土の混土
- 37 暗緑灰色 シルト質、炭化物粒子（微）

- 38 暗緑灰色 シルト質
- 39 褐灰色 褐灰色粘土（多）、炭化物粒子（多）
- 40 黒色 炭化物粒子（少）、緑灰色粘土（多）
- 41 緑灰色 粘土層
- 42 暗緑灰色 シルト質褐灰色土と緑灰色土の混土
- 43 暗褐色 シルト質、緑灰色粘土粒子（多）
- 44 褐灰色 炭化物粒子（微）、有機物（多）
- 45 暗灰色 砂層
- 46 暗褐色 炭化物粒子、有機物（多）
- 47 暗褐色 有機物（多）
- 48 黒褐色 有機物（多）
- 49 黄灰色 炭化物粒子（多）、黄灰色粘土（多）
- 50 暗褐色 炭化物粒子（少）、有機物（少）
- 51 暗褐色 炭化物粒子（多）、有機物（微）
- 52 黒褐色 有機物（多）

C－C'

- 1 暗褐色 緑灰色粘土（多）、炭化物粒子（少）（溝覆土）
- 2 暗褐色 緑灰色粘土粒子（少）（溝覆土）
- 3 褐色 有機物（多）
- 4 緑灰色 粘質土、有機物（多）
- 5 暗灰色 粘質土、炭化物粒子（少）
- 6 暗褐色 有機物（多）、炭化物粒子（多）
- 7 暗褐色 有機物（多）
- 8 黒褐色 有機物（多）
- 9 黄灰色 炭化物粒子（多）、黄灰色粘土（多）
- 10 暗褐色 暗緑灰色粘土（多）、有機物（少）
- 11 暗褐色 炭化物粒子（微）、有機物（微）
- 12 暗褐色 暗緑灰色粘土（少）、有機物（少）
- 13 暗褐色 炭化物粒子（少）、有機物（微）
- 14 緑灰色 シルト質、暗褐色土（少）、炭化物粒子（少）
- 15 暗褐色 緑灰色シルトブロック（少）
- 16 暗褐色 緑灰色シルトブロック（多）
- 17 緑灰色 シルト質（弥生河川堆積最下層）
- 18 暗黄灰色 砂質
- 19 緑灰色 炭化物粒子（少）
- 20 暗褐色 砂層（地山）

第362図 第7号溝断面図(2)

調整が施されている。また、上半部に煤が付着している。底面に種子状の圧痕が付いている。内面胴下半部にオコゲが付着している。3は、複合状の口縁を呈し、口縁部が緩やかに外反する甕である。口端部は、丸みがある。口縁部は、原体無節L縄文を横位施文している。胴部は、地文に、原体無節L縄文を斜位に施文している。胴下半部は、工具によるナデが施されている。底面に木葉痕が付いている。内面は、工具によるナデが施されている。胴下半部にオコゲが付着している。外面ナデ調整変換部分より上に煤が付着している。

4は、膝柄斧である。完存している。斧台先端部裏側に紐止めの切込みが入れられている。紐帯部はやや摩滅している。取り付け面は、右下がりです平坦な面を造り出しているが、左側に削りを加えて面を調整している。頭部両側に工具による、三角状の彫刻を施している。彫刻面は丁寧な削り込まれている。

取り付け面と柄の角度は、105°である。柄は樹皮を剥ぎ、小枝を払って丁寧に磨かれている。先端部持ち手部分はやや摩滅している。樹種は、イヌガヤである。5は、削り物台付容器である。欠損している。横木取りである。縁辺部は丸く直線的に仕上げられている。内面は、緩やかに湾曲し工具によるケズリが認められる。内面内側よりに、突帯を彫り出していた痕跡がある。外面に突起状の台が付いているが、欠損している。樹種は、ムクノキである。

河川跡（第358・363・364図）

調査区北側を東西方向に蛇行して流れていた。本河川跡は、B－16グリッド付近で北東方向に開放していた。開放部分から北東側は、部厚い砂層と植物繊維を含む有機物の带状堆積がみとめられた。したがって、弥生時代中期には、氾濫原となっていたと考えられ、遺構は検出されなかった。また、河道本流は南側集落縁辺部に沿っていたと考えられ堰付



第363図 河川跡断面図(1)

河川跡			
1 灰褐色	火山灰（浅間A軽石）（多）（水田面）	26 黒灰色	黄灰色粘土ブロック（微）
2 明褐色	火山灰（浅間A軽石）（中）（水田面）	27 暗褐色	黄灰色粘土ブロック（少）
3 灰褐色	火山灰（浅間A軽石）（少）（水田面）	28 暗褐色	炭化物粒子（少）、黄灰色粘土ブロック（少）
4 暗褐色	火山灰（浅間A軽石）（微）、黒色土ブロック（少）	29 暗褐色	炭化物粒子（少）、黄灰色粘土（少）
5 黒褐色	灰色粘土ブロック（少）、炭化物粒子（多）	30 暗褐色	炭化物粒子（微）、黄灰色粘土（少）
6 黒色	灰色粘土（多）、炭化物粒子（多）	31 暗褐色	炭化物粒子（少）、攪拌層
7 暗灰褐色	灰褐色粘土主体に炭化物粒子（多）	32 黄灰色	炭化物粒子（微）、黒色土ブロック（少）
8 黒色	灰色粘土ブロック（多）、炭化物粒子（多）	33 暗黄灰色	黄灰色粘土と炭化物粒子の互層
9 黒褐色	黄灰色粘土地山ブロック（多）、炭化物粒子、焼土粒子（多）	34 黄灰色	黄灰色粘土と炭化物粒子の混土
10 黒褐色	灰褐色粘土ブロック（少）、炭化物粒子（多）、焼土粒子（少）	35 暗褐色	暗褐色粘土主体、炭化物粒子と黄灰色粘土の互層
11 黒褐色	炭化物粒子（多）、黄灰色粘土ブロック（多）	36 黄灰色	黄灰色粘土と炭化物粒子の互層
12 暗褐色	炭化物粒子（少）、黄灰色粘土ブロック（多）	37 淡緑灰色	淡緑灰色シルト主体に褐灰色粘土ブロック（少）
13 暗褐色	黄灰色粘土ブロック（少）、炭化物粒子（微）	38 淡褐色	淡褐色粘土主体に褐灰色粘土ブロック（少）
14 褐色	黄灰色粘土ブロック（多）	39 淡灰色	シルト質
15 黒褐色	黄灰色粘土ブロック（多）、炭化物粒子（少）	40 黒灰色	淡緑灰色粘土ブロックと黒灰色土の混土
16 灰褐色	火山灰（浅間B軽石）層	41 淡緑灰色	シルト質、炭化物粒子（少）
17 黒灰色	黄灰色粘土ブロック（多）	42 黒灰色	炭化物粒子（多）
18 黒色	黄灰色粘土ブロック（少）、炭化物粒子（少）	43 褐色	淡緑灰色シルトブロック（少）、炭化物粒子（少）
19 褐色	黄灰色粘土ブロック（少）、炭化物粒子（中）	44 暗褐色	黄灰色粘土小ブロック（少）
20 褐色	黄灰色粘土ブロック（中）	45 黒灰色	淡緑灰色シルトブロック（少）、炭化物粒子（微）
21 褐色	淡緑色粘土ブロック（少）	46 淡緑灰色	黄灰色粘土小ブロック（少）
22 暗褐色	淡緑色粘土ブロック（少）	47 暗黄灰色	粘質土、炭化物粒子（微）
23 暗褐色	淡緑色粘土ブロック（多）	48 黄灰色	シルト質、炭化物粒子（微）
24 黒褐色	黄灰色粘土ブロック（少）、炭化物粒子（微）	49 暗褐色	黄灰色粘土ブロック（中）（堤構築土）
25 暗褐色	黄灰色粘土粒子（少）、炭化物粒子（微）	50 黒褐色	淡緑色粘土ブロック（中）（堤構築土）
		51 褐色	炭化物粒子（少）（堤構築土）

第364図 河川跡断面図(2)

近に攻撃侵食面が認められた。また、調査区西側で検出した河道部分の断面状況からは、第40層及び第45層以下が弥生時代中期に対応する堆積土と考えられる。これらの状況から、広い川幅と河畔部の緩やかな立ち上がりが窺える。なお、第49・50・51層は、古墳時代前期に河道を固定するために設けられた堤盛土であった。

窪地（第346図）

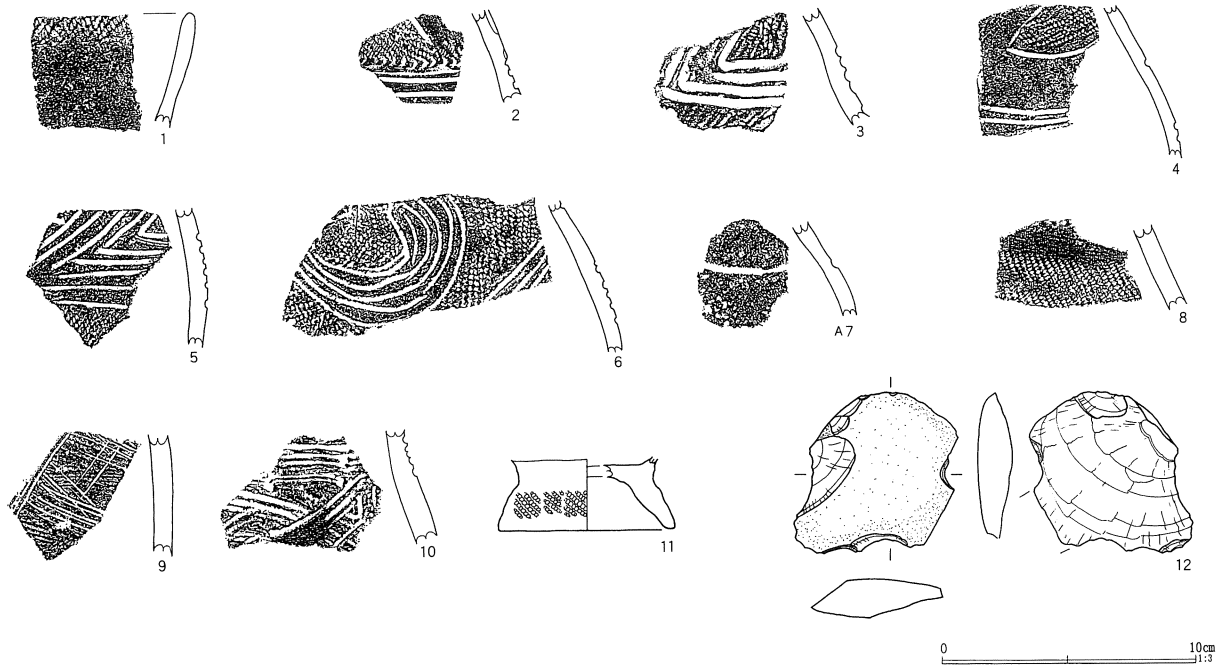
調査区中央水路西側、I～L-20～22グリッドにまたがっていた。本遺構は、北側に開析する支谷が蛇行してできた窪地上の自然地形であった。非常に緩やかに水路方向に傾斜していた。堆積土壌は炭化物を含む白色粘土を主体としていた。

出土遺物は、I-21グリッド周辺部及びK・L-21・22グリッド周辺の2箇所から纏まって出土した。

I-21グリッド出土遺物（第371図）

1・2は、受口口縁を呈する壺口縁部で、同一個体である。口端部は、平坦に面取りされている。口縁部は、原体RL単節縄文を充填する鋸歯文を施文している。鋸歯文下は無文である。内外面に赤彩痕跡が認められる。3は、壺頸部である。原体RL単

節縄文を充填する鋸歯文を施文し、下段に列点文を施文して区画している。列点文下に沈線文が認められる。4は、壺頸部である。原体LR単節縄文を充填する鋸歯文を施文し、段を設けて区画している。胴部は、単位不明工具による波状文を施文している。5は、壺胴部である。3本一単位櫛歯状工具による平行線文下に、原体直前段反撚RR {11} を充填している。縄文帯下に3条の列点文を施文し、下段に同一工具による、平行線文を施文している。縄文施文部分は赤彩されている。6は、壺胴部である。三角文を施文している。区画内は、原体RL単節縄文を充填している。7は、壺胴部である。3本一単位櫛歯状工具による多条の弧線文を施文している。弧線文上に原体LR単節縄文を充填している。8は、壺胴部である。1本描沈線による弧線文を施文している。弧線文内には、原体LR単節縄文を充填している。9は、壺に貼付される耳状の突起である。突起周囲に列点文を廻らせ側面に2孔の焼成前穿孔が付いている。人面付土器把手の可能性ある。10は、口縁部が緩やかに外反する甕である。口端部は、平坦に面取りされている。地文に、原体RL単節縄文を施文している。11は、口縁部が直線的に立ち



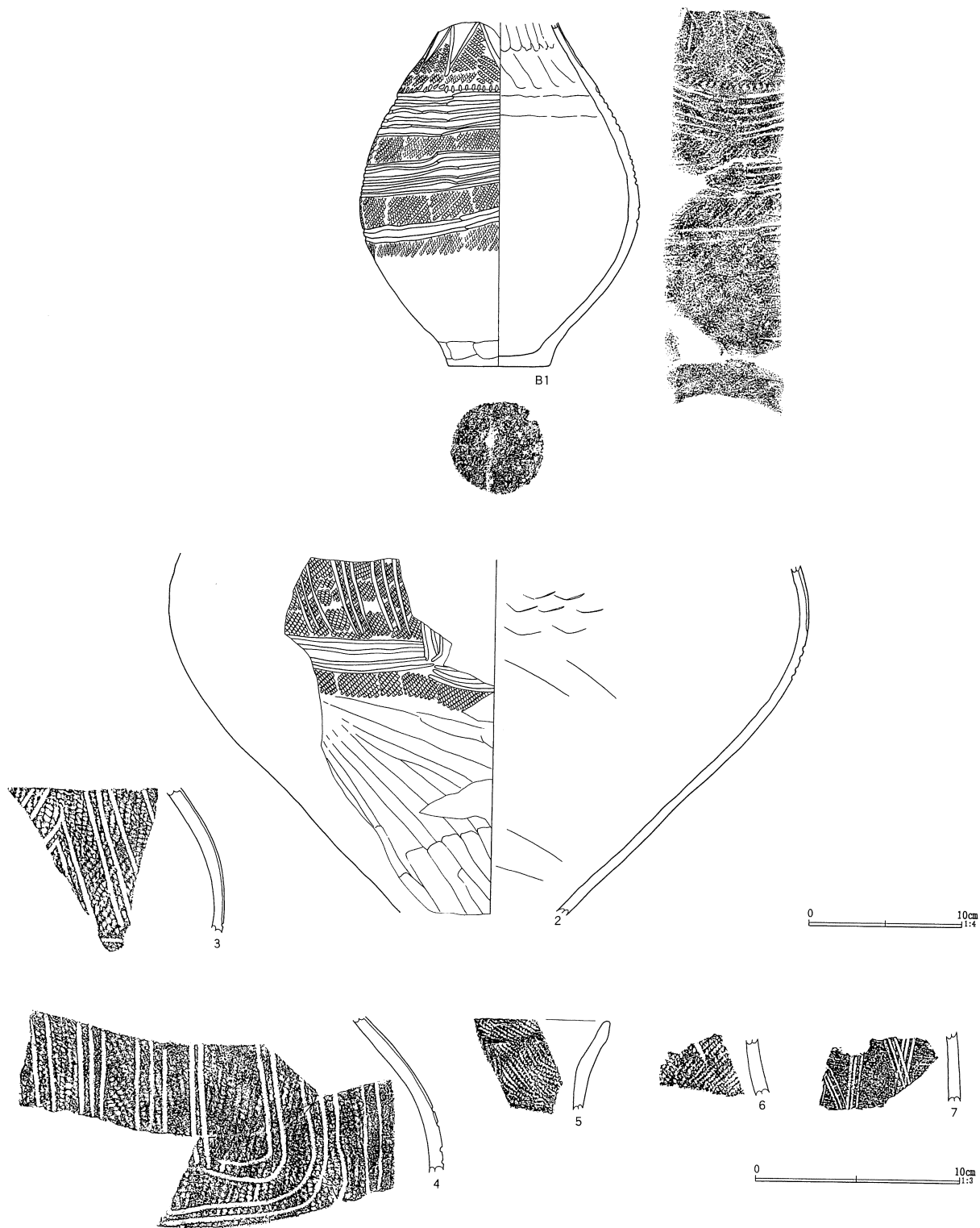
第365図 水路出土遺物

上がり、胴部が張り出す甕である。口端部は平坦に面取りしている。口縁部は、原体RL単節縄文を施文している。頸部は、無文帯を構成する。胴部は、地文に同一原体縄文を施文している。内面にヘラ状工具によるナデ調整が施されている。12は、甕胴部である。単位不明櫛歯状工具による擬似簾状文下に原体複節RLr縄文を施文している。下段に波状文が認められる。13は、甕口縁部である。内彎している。口縁部に、原体LR単節縄文を充填する山形文を施文している。鋸歯文下は、無文である。14は、甕口縁部である。段状を呈している。沈線山形文を施文している。15は、甕胴部である。3本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文下に、同一工具による波状文を施文している。ハケ調整が認められる。

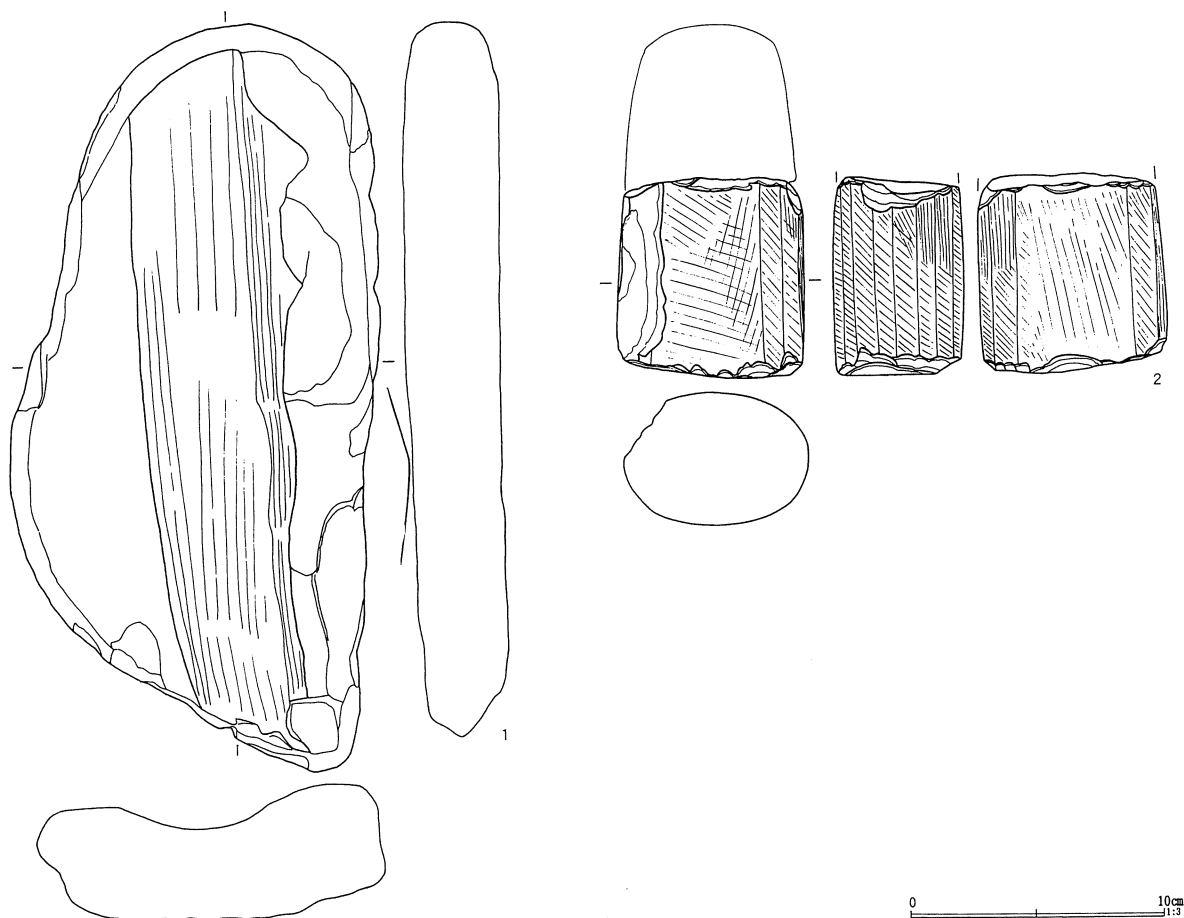
K・L-21・22グリッド出土遺物 (第372図)

1は、壺頸部である。列点文2段施文下に原体LR単節縄文を充填している。2は、壺頸部である。原体不明縄文を充填する鋸歯文を施文している。3は、壺頸部である。原体LR単節縄文を充填する鋸歯文を施文している。4は、壺胴部である。重四角

文を施文している。区画間に原体LR単節縄文を充填している。5は、壺胴部である。重四角文を施文している。区画文内は、原体LR単節縄文を充填している。6は、壺胴部である。渦巻文を施文している。文様間に原体LR単節縄文を充填している。7は、壺胴部である。同心円文を施文している。文様帯内に原体LR単節縄文を充填している。中心部に単孔の貼付文が貼付されている。縄文部分は、赤彩されている。8は、壺胴部である。2本一単位工具による波状文を施文している。9は、壺胴部である。波状沈線文を施文している。10は、壺胴部である。櫛歯状工具による平行線文下に、原体LR単節縄文を施文し、下段に、同一工具による弧線文を施文している。11は、壺胴部である。平行沈線文を施文している。12は、壺頸部である。山形沈線文下に、無文帯を設けている。下段に2本一単位工具で平行線文を施文し、原体LR単節縄文を充填している。13は、壺胴部である。1本描沈線による平行線文下に弧線文を施文している。弧線文下に原体無節L縄文を施文している。14は、壺胴部である。地文に原体RL単節縄文を粗雑に施文している。15は、



第366図 第357号溝出土遺物

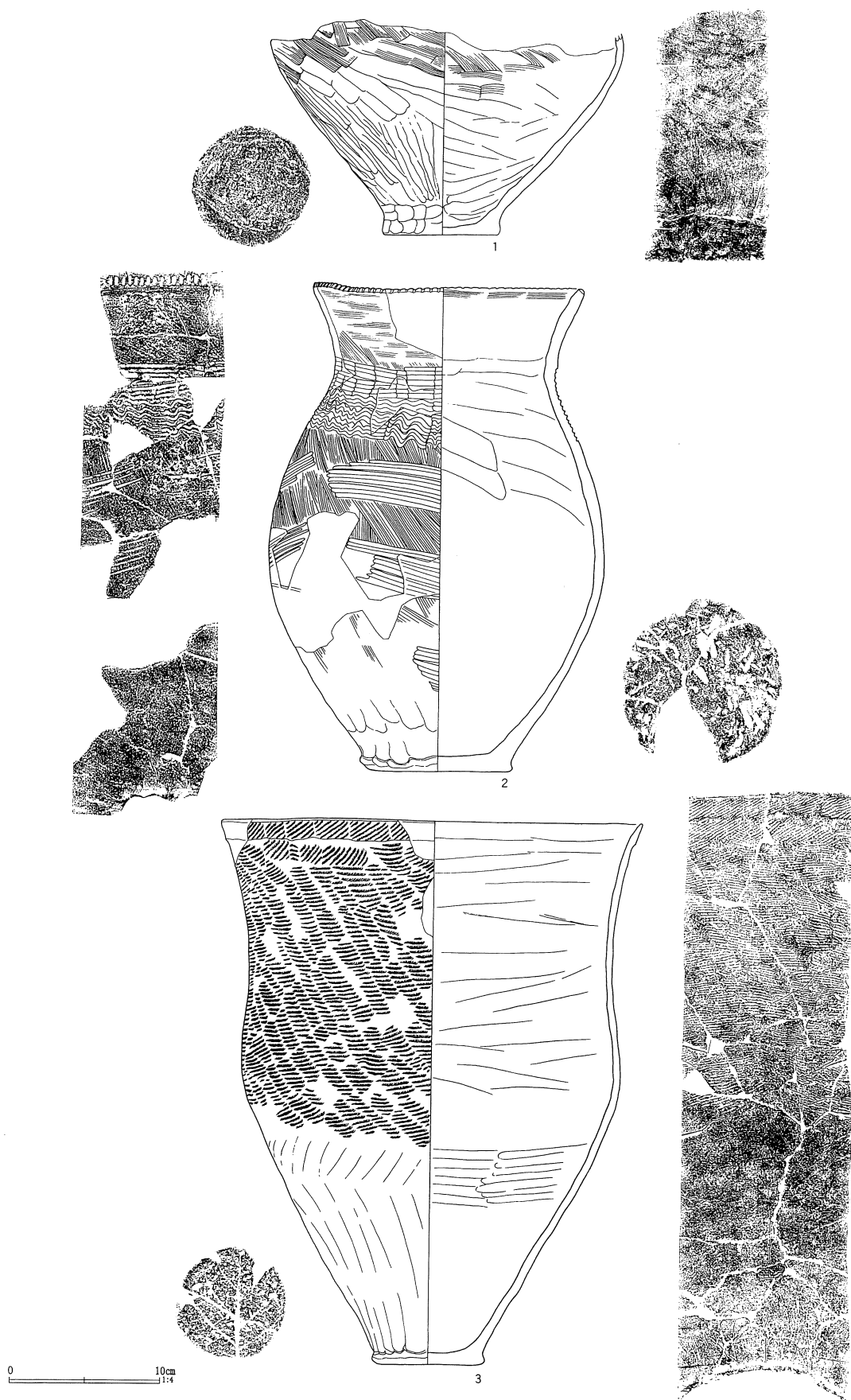


第367図 第377号溝出土遺物

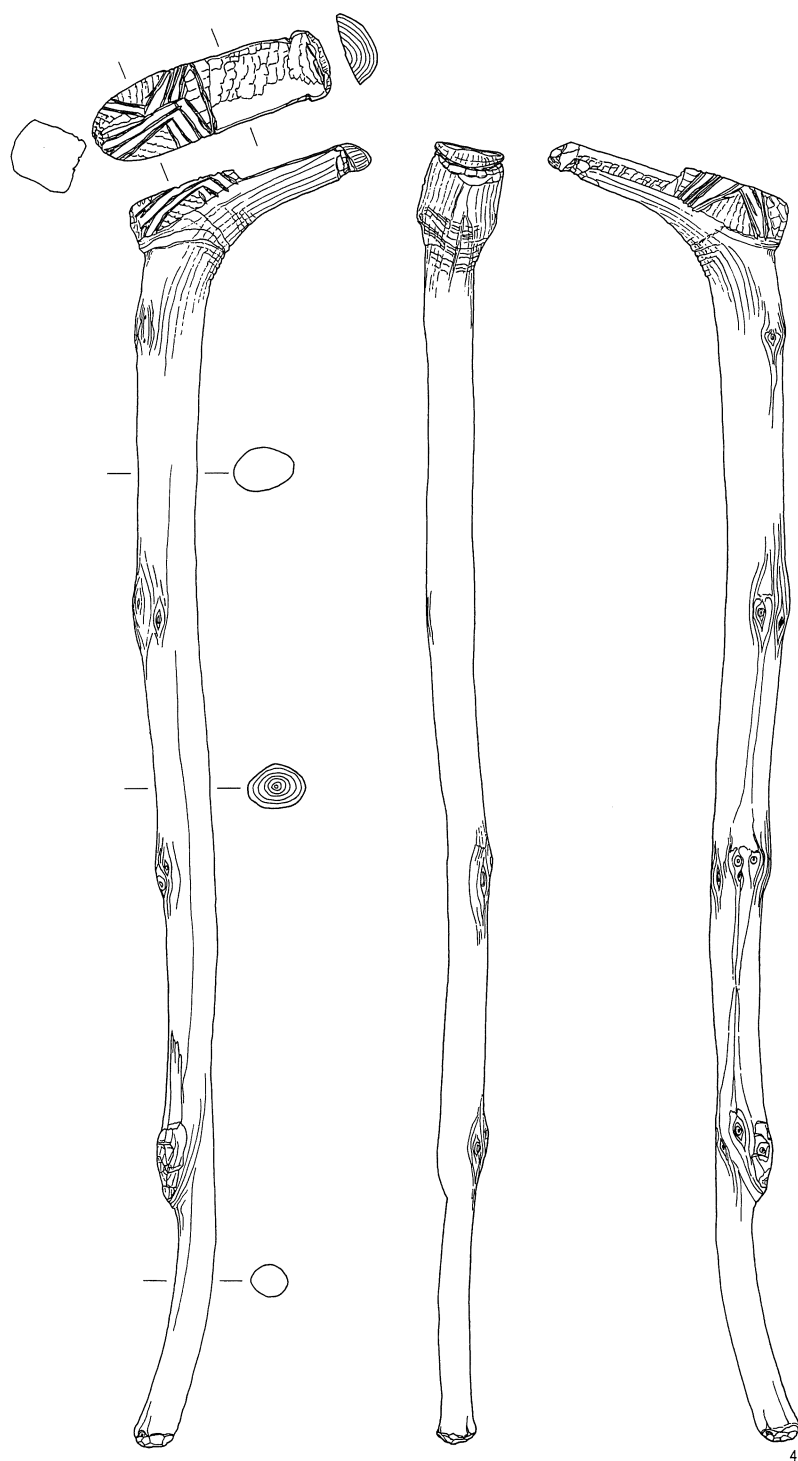
複合口縁を呈する甕である。口縁部は原体RL単節縄文を施文している。胴部は、櫛歯条痕で横位に施文している。16は、複合口縁を呈する甕である。地文に原体RL単節縄文を施文している。17は、甕胴部である。地文に原体RL単節縄文を施文している。18は、口縁部がくの字状に外反する甕である。口端部に原体不明縄文を施文し、頸部に6本一単位櫛描波状文を施文している。19は、甕胴部である。頸部に、5本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を

施文し、簾状文下に同一工具による垂下文を施文している。垂下文間は、櫛描波状文を充填している。20は、甕胴部である。櫛歯条痕による縦羽状文を施文している。21は、台付甕胴部である。コの字重ね文を施文している。

22は、敲石である。円礫の周囲に敲打による剥離が認められる。23は、刃器である。両側縁部に剥離を加えて浅い抉り込みを入れている。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。

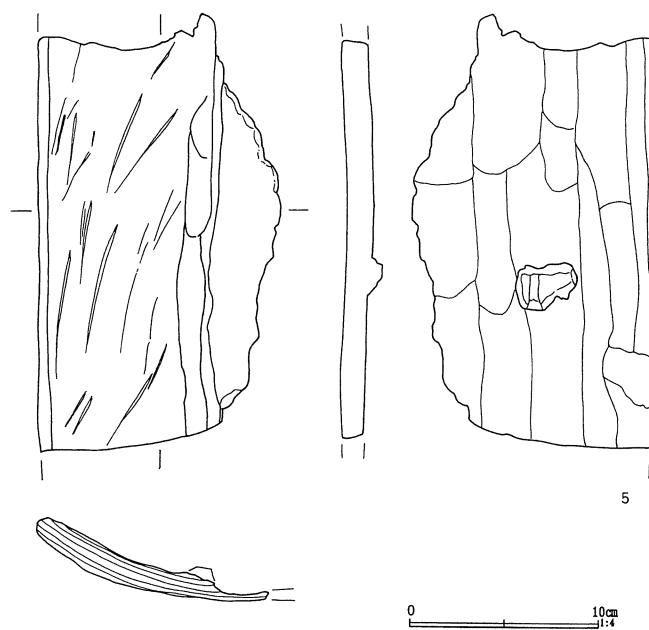


第368図 第7号溝出土遺物(1)

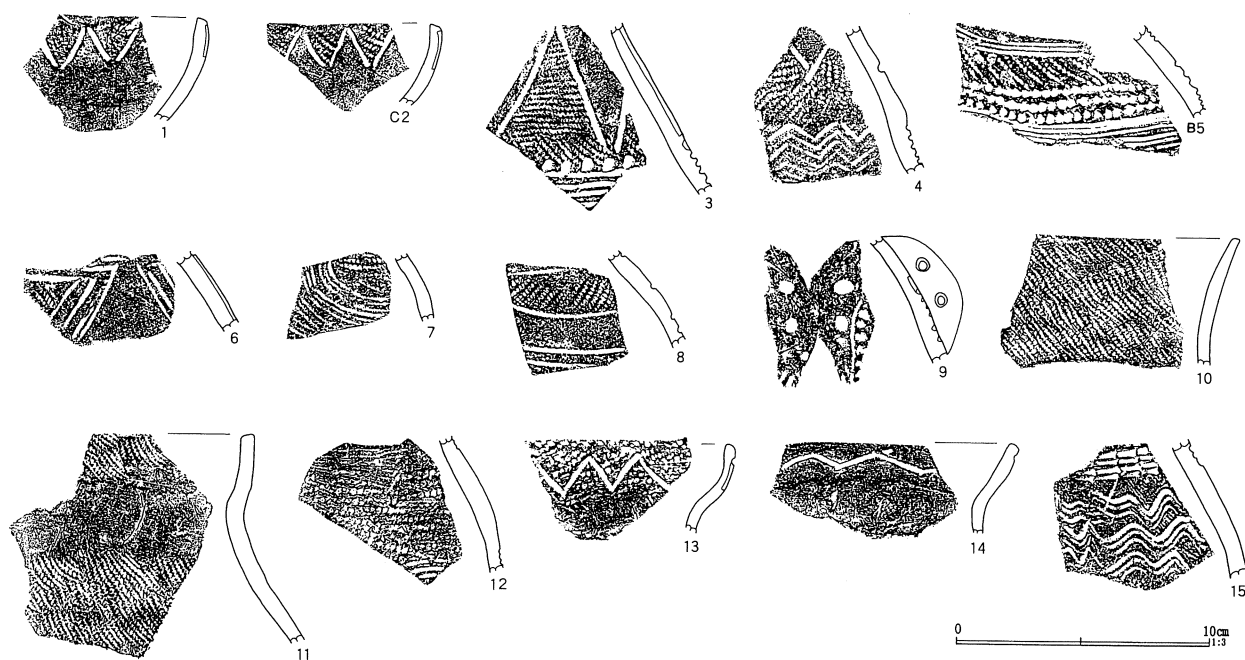


0 10cm
1:6

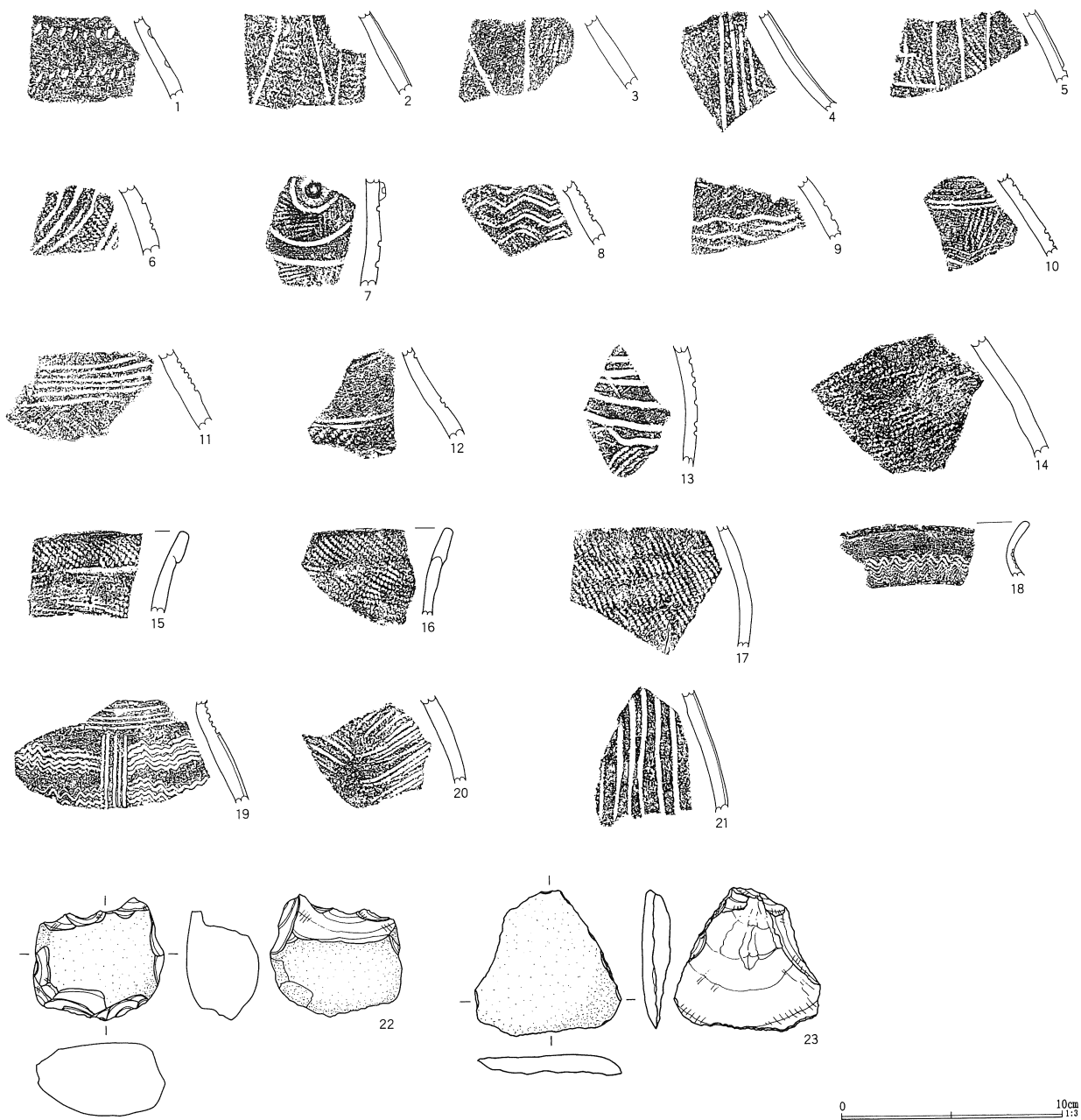
第369図 第7号溝出土遺物(2)



第370図 第7号溝出土遺物(3)



第371図 窪地出土遺物(1)



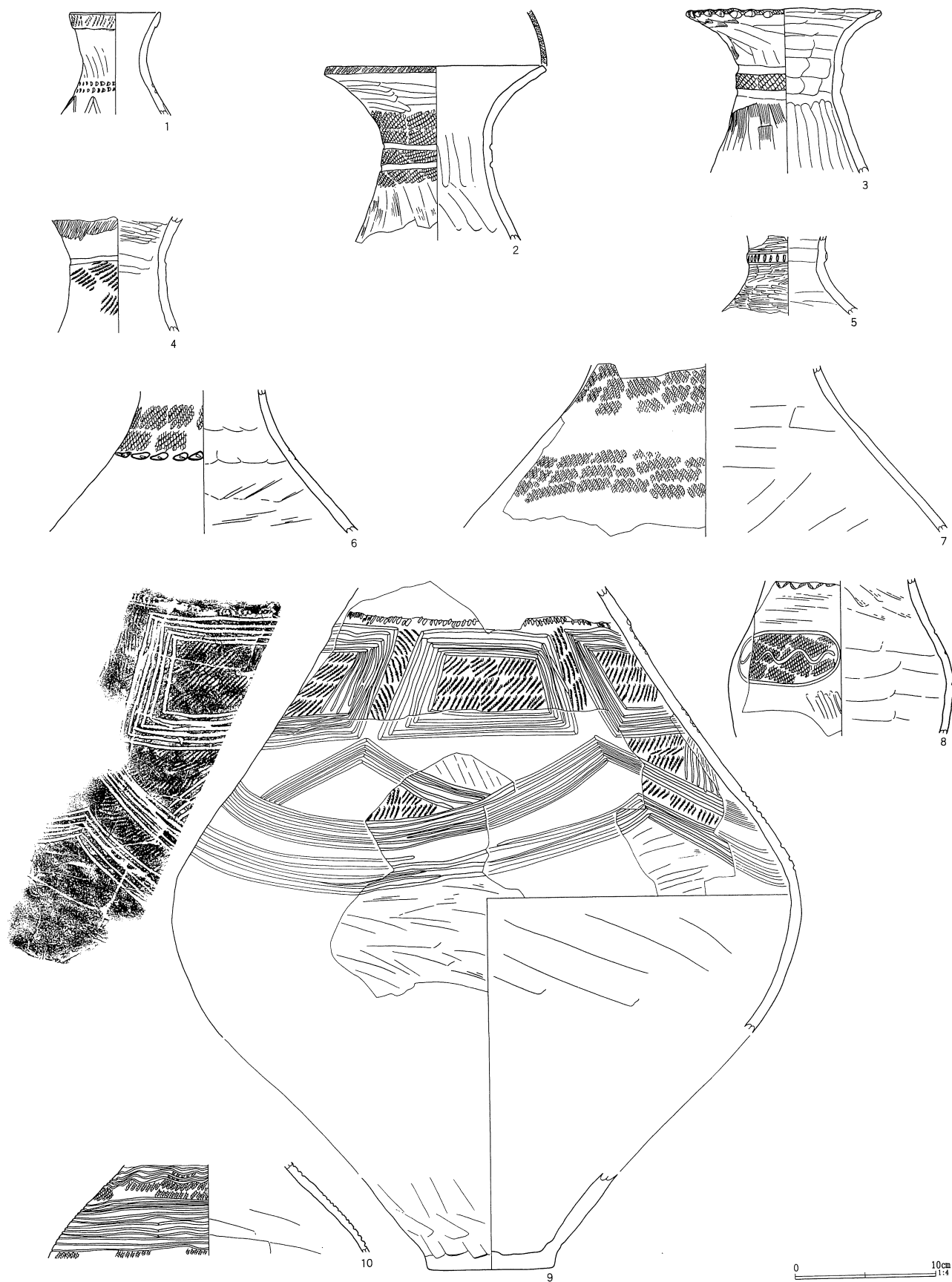
第372図 窪地出土遺物(2)

6. グリッド出土遺物 (第373～382図)

本報告書に掲載する北島遺跡第19地点より出土した遺物を扱う。出土遺物は、当該時期以外の遺構から出土したもの及び、調査区内で表採されたものを掲載した。このうち、第327号溝（古墳時代前期環濠）は当該期の遺構を多数切って構築しており、覆土中から多くの遺物が出土した。また、石器は、表採遺物が多数を占めている。

1は、複合口縁を呈する壺である。口縁部に無節Lを施文している。口縁部以下、無文帯に、列点文を2条施文し、下段に鋸歯文を施文している。2は、口縁部が朝顔形に開く壺である。口端部に原体LR単節縄文を施文している。口縁部無文帯下、頸部に同一原体縄文を施文し、1本描沈線による平行線文を施文している。縄文下に、縦位のハケ調整及びミガキが認められる。3は、口縁部が朝顔形に開く壺である。口端部に原体LR単節縄文を施文し、工具による押捺を施している。頸部は、削り出し突帯の縁辺部を工具によるナデを施して成形し、原体LR単節縄文を充填している。器面外面にハケ調整及びミガキが認められる。内面は、ナデ調整が施されている。4は、壺頸部である。頸部無文帯に斜位のミガキが施されている。無文帯下に、1本描沈線による直線文を施文して、下段に原体無節L縄文を粗雑に施文している。5は、壺頸部である。削り出し突帯上に、列点文を施文している。全面に横位の丁寧なミガキが施されている。6は、壺頸部である。原体LR単節縄文を施文している。縄文施文下に、単独の櫛歯状工具による刺突を囲む楕円文を列状に施文している。文様は、浅く擦れている。内面にナデ調整が認められる。7は、壺頸部である。原体RL単節縄文による帯縄文を2段施文している。器面の色調が朱色を呈している。8は、壺胴部である。頸部にS字状結節文を施文している。胴部は、1本描沈線による楕円形区画文を施文し、区画内に原体LR単節縄文を充填し、波状沈線を施文している。9は、胴部がやや下膨れ状に張り出す壺である。頸

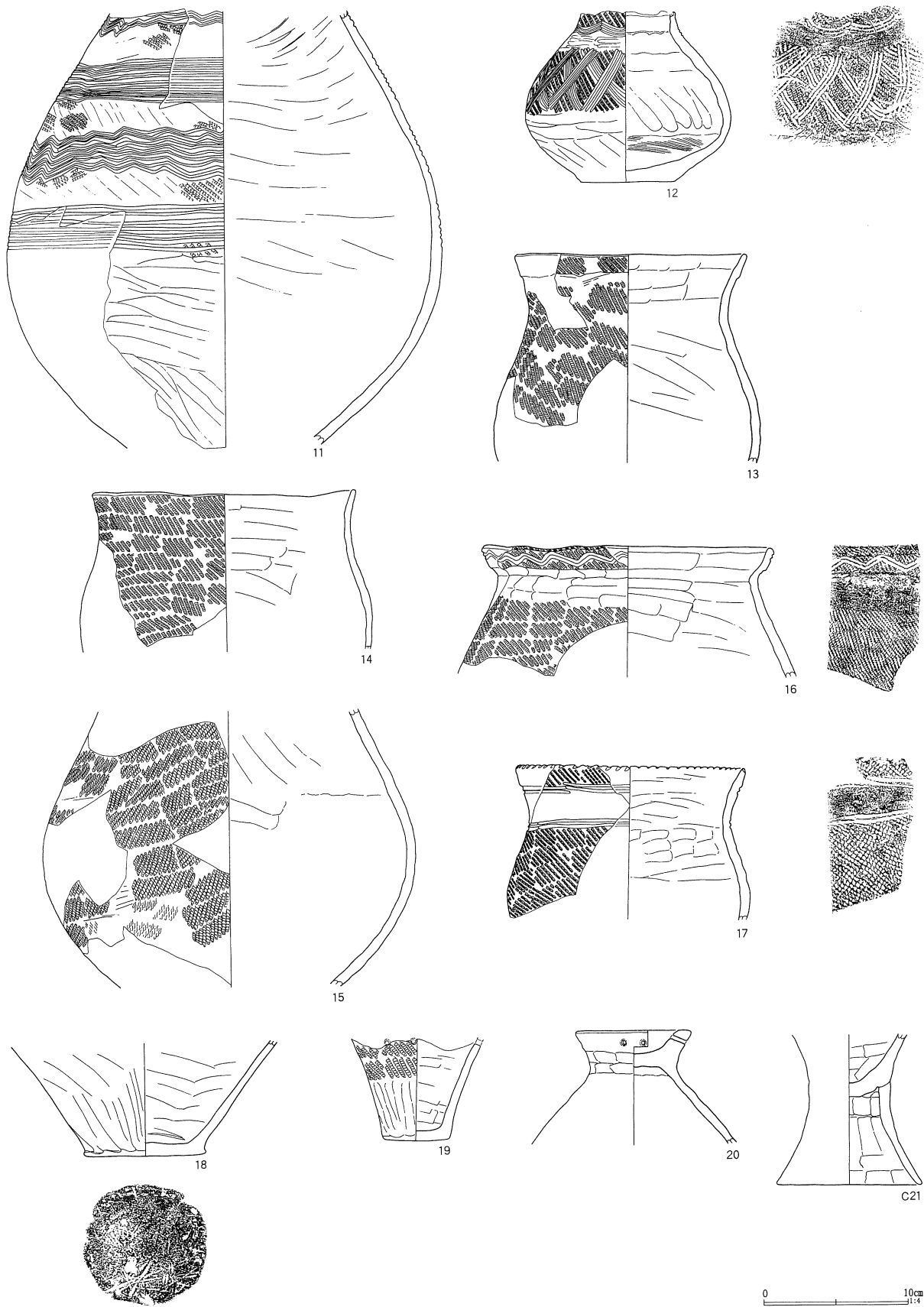
部より上を欠損している。段を設ける列点文で区画し、胴部上半部に重四角文を推定6単位施文している。区画内及び区画間は、原体無節Lを充填している。重四角文下に、1本描沈線7条及び5条で連弧文を施文している。連弧文は重四角文2単位おきに施文されている。また上部連弧文上に、5条沈線による弧線文を充填している。弧線文の頂点は重四角文間に設けられている。弧線文間も、同様に原体無節L縄文を充填しているが、部分的に施文していない箇所も認められる。胴下半部は、工具によるナデ調整が施されている。10は、壺胴部である。1本描沈線による波状文下に、原体LR単節縄文を施文している。縄文帯下に、1本描沈線による多条の平行線文を施文し、下段に縄文を施文している。11は、卵型を呈する壺胴部である。1本描沈線による多条の波状文下に、原体RL単節縄文を僅かに浅く施文している。下段に多条の平行沈線文を施文し、以上の組み合わせを下段にもう一段施文して、二段構成としている。胴下半部は、工具によるナデが施されている。内面は、工具によるナデ調整が施されている。12は、胴部が下膨れ状に張り出す壺である。口縁部を欠損しているが、欠損部分が丸く成形されており、無頸壺として再利用された可能性もある。頸部は、原体3本撚り複節RLrを施文し、3本一単位櫛歯状工具による連弧文を施文している。ミガキをかけた無文帯下に、同一原体縄文を施文し、その上から同一工具による斜格子文を施文している。胴下半部は、工具によるナデが施されている。内面底部付近に布状のナデ調整が施されている。底面はナデ調整である。13は、複合口縁を呈する甕である。地文に原体無節多条R {1 1 1} を粗雑に施文している。内面は工具によるナデ調整が施されている。外面胴部に煤が付着している。14は、単口縁の甕である。地文に原体RL単節縄文を施文している。内面は、工具によるナデ調整が施されている。外面全体に煤が付着している。15は、胴部が



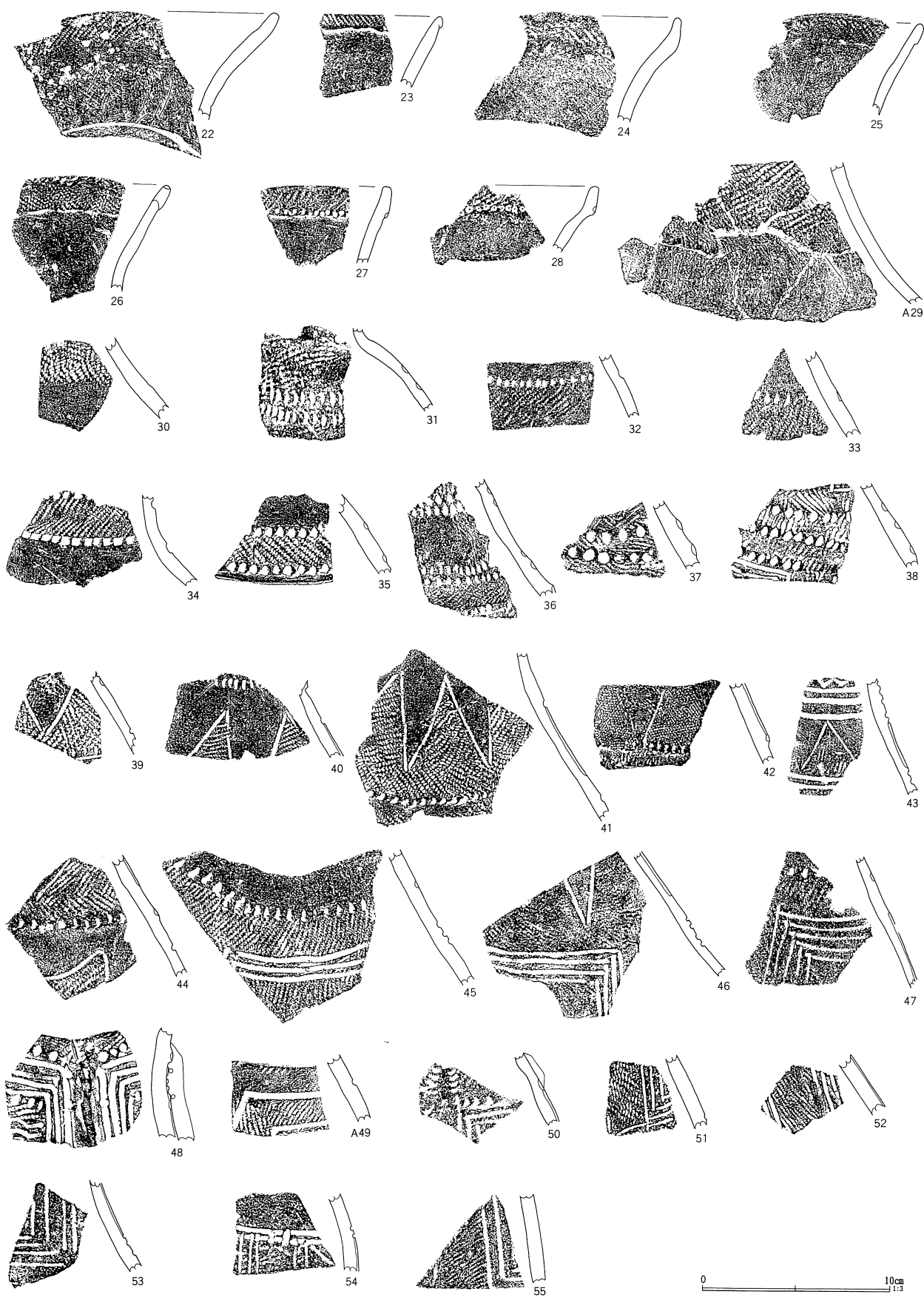
第373図 グリッド出土遺物(1)

やや張り出す壺または、甕である。地文に原体LR単節縄文を胴下半部まで施文している。内面は、工具によるナデ調整が施されている。16は、複合口縁を呈し、胴部が、口縁部径を上回る甕である。口端部は丸みがあり原体直前段多条R {LLL} を施文している。口縁部は、同一原体縄文施文後2本一単位工具による山形風の波状文を施文している。頸部は、ミガキをかけて無文帯としている。胴部は、同一原体縄文を施文している。内面は工具によるナデ調整が施されている。17は、口縁部が緩やかに開く甕である。口端部は、やや外削ぎ状を呈し、工具による刻み目を施している。口縁部は、原体複節RLr縄文を施文している。頸部は、2本一単位工具による平行線文で区画し、無文帯としている。胴部は、同一原体縄文を施文している。内面は、工具によるナデが施されている。外面頸部付近に煤が付着している。内面胴下半部にオコゲが付着している。18は、底部である。内外面にナデ調整が施されている。底面はナデ調整である。19は、小型の甕である。上半部を欠損している。欠損部分に2孔一対の穿孔が認められる。地文は、原体RL単節縄文を施文している。底部付近は、縦位のミガキが施されている。内面は、工具によるナデ調整が施されている。20は、蓋である。やや粗雑な造りである。摘みの部分に、2孔一対の焼成前穿孔が2箇所対称の位置に付いている。無文地である。21は、高坏である。脚部は高台である。坏部の底面は丸く中空の脚部と接合している。内外面赤彩である。22は、朝顔形に開く単口縁の壺である。口縁部は、原体LR単節縄文を施文している。頸部は、1本描沈線による直線文を施文している。23は、複合口縁を呈する壺である。口縁部は、原体RL単節縄文を施文している。24は、口縁部が内彎する壺である。口縁部に原体無節Rを施文している。口縁部以下無文である。25は、複合口縁を呈する壺である。口縁部は、原体RL単節縄文を施文している。口縁部以下は、無文である。26は、複合口縁を呈する壺である。口

縁部は、原体不明縄文を施文している。口縁部以下は、無文である。27は、複合口縁を呈する壺である。口端部は、平坦に面取りしている。口縁部は、原体前々段多条LR {111} を施文し、段部に列点文を施文している。口縁部以下は、無文である。28は、複合口縁を呈する壺である。口縁部は、原体LR単節縄文を施文し、段部に円形の列点文を施文している。口縁部以下は、無文である。29は、壺頸部である。原体LR単節縄文施文下を無文としている。赤彩痕跡がある。30は、壺頸部である。原体RL単節縄文を施文し、以下を無文帯としている。31は、壺胴部である。肩部が張り出している。地文に原体不明縄文を施文後、列点文を2段施文している。32は、壺頸部である。列点文下に、原体LR単節縄文を施文している。33は、壺頸部である。列点文下に原体LR単節縄文を施文している。34～38は、列点文で区画して区画内に縄文を充填している。34は原体LR、35は原体RL、36は原体LR単節、37は原体不明、38は原体RL単節縄文を施文している。38は、下段に重四角文を施文している。39～42は、列点文に、縄文を充填する鋸歯文を施文する壺頸部である。39は原体複節LR1、40は原体RL単節、41は原体RL単節、42は原体LR単節縄文を充填している。43は、波状沈線文下に、平行沈線文で区画し、区画内に原体無節L縄文を充填する鋸歯文を施文している。44は、壺頸部から胴部にかけての破片である。頸部は、原体直前段多条R {LLL} を充填する鋸歯文を施文し、列点文で区画している。胴部は、区画沈線内に同一原体縄文を充填している。45～56は、重四角文を施文する壺胴部破片である。45は、原体LR単節縄文を充填する列点文下に、46は、原体RL単節縄文を充填する鋸歯文下に、47は、原体LR単節縄文を充填する列点文下に、施文している。48は、原体LR単節縄文を施文する列点文下に描き、区画内を列点文、波状沈線文及び縄文で充填している。また、区画間に焼成前の側面穿孔を伴う棒状の突起を付けてい



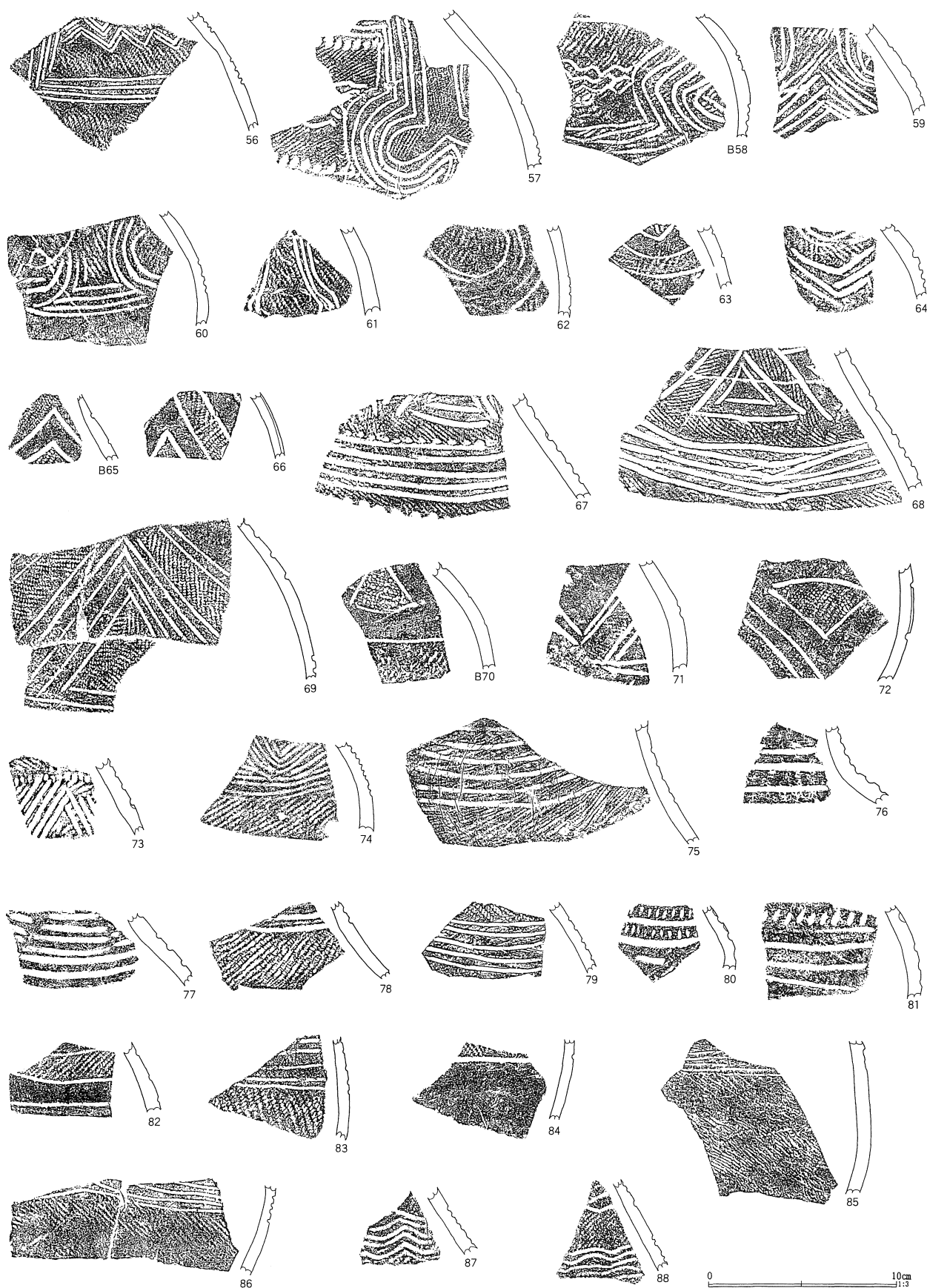
第374図 グリッド出土遺物(2)



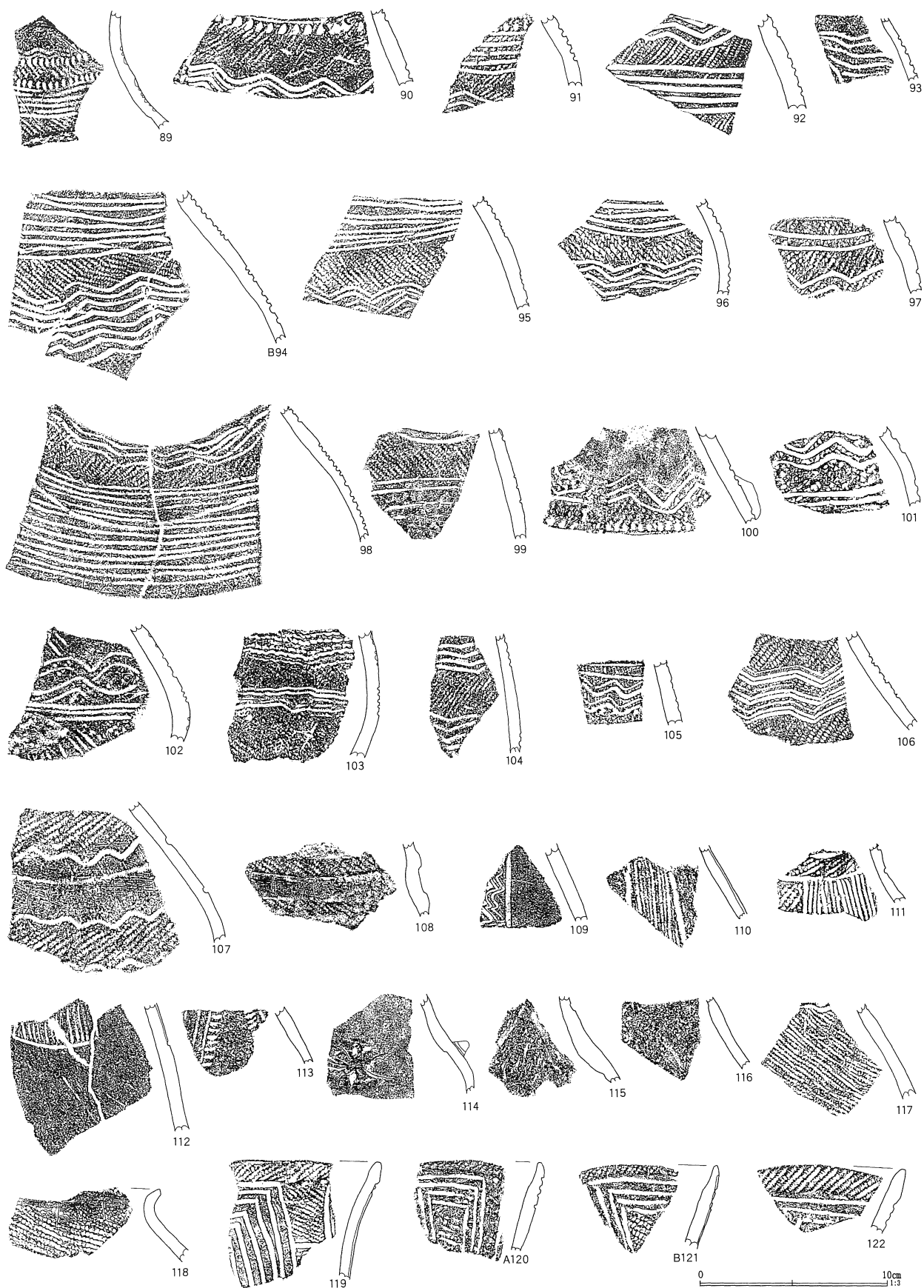
第375図 グリッド出土遺物(3)

る。49は、原体無節L縄文を充填し、赤彩されている。50は、列点文間に描かれている。51は原体RL単節、52は原体LR単節、55は原体不明縄文を充填している。54は、重四角文に列点文を沿わせて施文している。56は、原体RL単節縄文及び2本一単位工具による波状文を充填している。57は、壺胴部である。フラスコ形文と重四角文の組み合わせである。区画文内及び区画間は、原体LR単節縄文を充填している。重四角文内は、列点文で縁取りし、波状沈線文を充填している。フラスコ形文下端部に貫入して連弧文が施文されていると考えられる。58は、フラスコ形文と重四角文の組み合わせである。地文に原体LR単節縄文を施文し、波状文を充填している。縄文部分は、赤彩されている。59は、壺胴部である。地文に原体無節Lを施文し、重四角文を施文している。重四角文間に多条沈線による弧線文を施文している。60は、壺胴部である。フラスコ形文と重四角文の組み合わせであるが、フラスコ文の間隔が狭くなっている。区画内に原体無節L縄文を充填している。61～64は、壺胴部でフラスコ形文を施文している。61は原体RL単節、62は原体LR単節、63は原体LR単節、64は原体RL単節縄文を充填している。65～72は、三角文を施文する壺胴部破片である。65は原体LR単節、66は原体RL単節縄文を充填している。また、65は縄文部赤彩である。67は、原体直前段多条R {LLL} を施文し、下段に列点文と平行沈線文を施文している。68は、原体直前段多条R {LLL} を充填し、下段に平行沈線文を施文している。69は、原体RL単節縄文を充填している。70は、原体直前段多条L {RRR} を充填している。縄文部は、赤彩されている。71は、原体不明縄文を充填している。72は、原体LR単節縄文を充填している。73は、壺胴部である。原体不明縄文施文後、列点文下に重三角文を施文している。74は、壺胴部である。重三角文または、複合鋸歯文施文下に、原体直前段多条L {RRR} を施文している。75は、壺頸部であ

る。ハケ調整後に、1本描沈線による平行線文を施文している。76～85は、平行線文を施文する壺である。76は、無文地の頸部破片である。77は単沈線である。78は、原体LR単節縄文を充填している。79は原体複節LR1を充填している。80・81は、列点文を充填している。82は、原体LR単節、83は原体直前段多条R {LLL}、84は原体RL単節縄文を充填している。85は壺胴部である。半截竹管状工具による平行線文下に、原体直前段反撚RR {11} を施文している。86は壺胴部である。平行沈線文下に原体無節R縄文を施文している。87・88は、波状沈線文を施文する壺頸部破片である。88は原体LR単節縄文を充填している。89は壺頸部である。2本一単位工具による波状文下に、列点文及び平行線文を施文し、原体RL単節縄文を充填している。90・91は、平行沈線文、列点文波状文の組み合わせである。90は原体LR単節、91は原体不明縄文を充填している。92～98は、波状沈線文と平行沈線文の組み合わせである。94・95・98は、多条化している。92は原体LR単節、93は、フラスコ文の周囲に波状沈線を施文している可能性がある。94は原体LR単節、95は2本一単位工具に原体RL単節、96は、原体無節多条R {111}、97は、LR単節、98は原体LR単節縄文を施文している。94は、縄文部赤彩である。99は、壺胴部である。弧状沈線文下に、原体RL単節縄文を施文し、下段に平行沈線文を施文している。100は、壺頸部である。山形沈線文上に、棒状浮文を貼付し、下段に原体無節L縄文及び列点文を施文している。101は、壺胴部である。地文に原体不明縄文を施文し、波状沈線文及び平行沈線文を施文している。102は、算盤玉状を呈する壺胴部破片である。地文に原体不明縄文を施文し、単位工具による弧線文及び斜線文、平行線文を施文している。103は、壺胴部である。2本一単位工具による押引き平行沈線文及び平行沈線文を施文している。104～107は、波状沈線文を施文する壺である。104は、原体LR単節、105は、



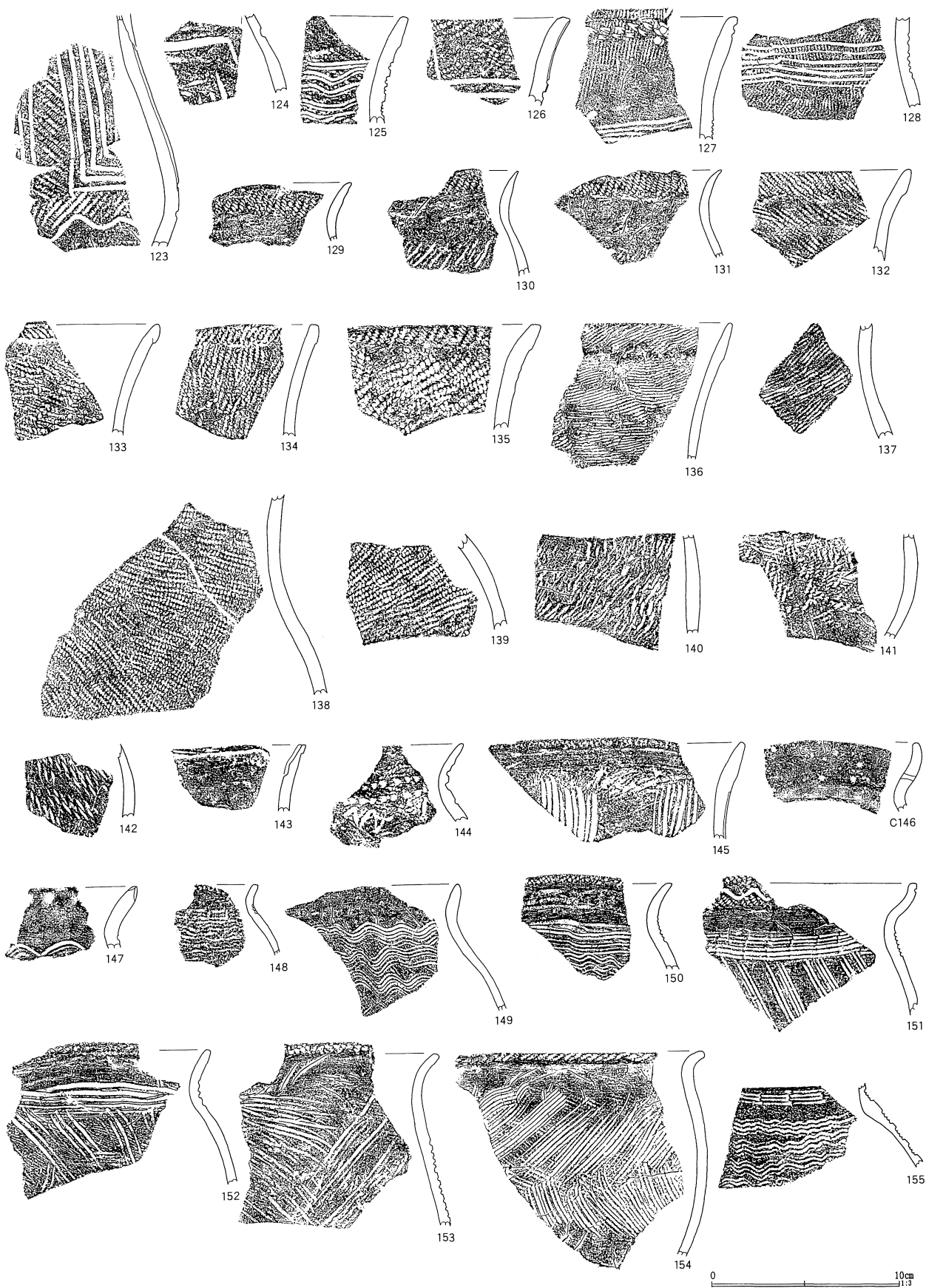
第376図 グリッド出土遺物(4)



第377図 グリッド出土遺物(5)

2本一単位工具に原体不明縄文、106は3本一単位工具に原体LR単節、107はハケ調整後に原体LR単節縄文を施文している。108は、壺頸部である。削り出し突帯2段に原体RL単節縄文を充填している。109～113は、垂下文乃至は、短冊形のモチーフを施文する壺である。109は、櫛描波状文を充填している。110は、櫛描垂下文を充填している。111は、原体LR単節縄文施文下に多条沈線で施文している。112は、櫛描垂下文を充填している。113は、列点文で縁取りをしている。114は、壺胴部である。胴部が算盤玉状に張り出す器形を呈する。無文地に上下穿孔をつける突起が付いている。115は、壺頸部である。原体不明縄文を充填する鋸歯文を施文している。116は、壺頸部で無文である。117は、壺胴部である。波状沈線文下に原体直前段反撚RR {1 1} を施文している。118は、口縁部がくの字状に屈曲して外反する広口の壺である。口唇部に原体不明縄文を施文している。口縁部無文帯下に、原体複節RLr縄文を斜位に施文している。119～124は、重四角文を施文する筒形土器である。119は、口縁部に原体LR単節縄文を施文し、重四角文を沈線で繋いでいる。120は原体LR単節、121は原体LR単節、122は原体直前段多条L {RRR}、123は原体前々段多条LR {1 1 1} 縄文を施文し、波状沈線で胴下半部を区画している。120・121は、赤彩されている。125は、広口の壺または、甕口縁部である。地文に原体不明縄文を施文し、2本一単位工具による平行線文及び波状文を施文している。126は、甕口縁部である。地文に原体LR単節縄文を施文し、1本描沈線による垂下文下に、平行光線文を施文している。127・128は、甕口縁部から頸部にかけての破片で同一個体の可能性がある。また第143号土壌2の甕口縁部と接合した。緩やかに外反する口縁部は、僅かに波状を呈す。口端部より地文に原体カナムグラ系擬縄文を施文している。口縁部に二又状工具による深い刺突列が2段施文されている。頸部は、半截竹管状工具による

緩い弧線文を施文している。胎土に白色粒子を含む。129～131は甕口縁部で、同一個体である。口端部が尖っている。口縁部に原体LR単節縄文を施文している。頸部無文帯下にも、縄文を施文している。131は、口縁部が折り返し状を呈す。132～142は、地文縄文の甕である。132は複合口縁で、原体無節多条R {1 1 1} を施文している。133は、複合口縁で原体RL単節縄文を施文している。134は、複合口縁で原体無節多条L {r r r} を施文している。135は、複合口縁で原体LR単節縄文を施文している。136は、複合状の口縁で原体無節Lを施文している。137は、原体無節L、138は原体RL単節、139は原体LR単節、140は原体直前段反撚LL {r r}、141は原体LR単節、142は原体撚糸Lを施文している。143は、口端部をくの字状に折り返す甕で無文である。144は、口縁部が大きく外反する甕である。地文に原体不明縄文を施文し、頸部列点文下に、波状沈線文を施文している。145は、直線的に立ち上がる甕口縁部である。口端部に原体RL単節縄文を施文し、口縁部を無文としている。頸部以下は、3本一単位工具による垂下文を施文している。146は、受け口状を呈する鉢口縁部である。無文地で、口縁部に焼成後の穿孔が2箇所認められる。内外面赤彩である。147は、甕口縁部である。口端部は、工具による交互押捺を施している。頸部に櫛描波状文を施文している。148は、甕口縁部である。頸部に3本一単位櫛歯状工具による簾状文を施文し、胴部は、波状文を施文している。149は、甕口縁部である。口縁部を無文帯とし、頸部以下に、ハケ調整後、4本一単位工具による櫛描波状文を施文している。150は、甕口縁部である。口端部を平坦に面取りし、原体RL単節縄文を施文している。頸部は、4本一単位櫛歯状工具による直線文を施文し、下段に波状文を施文している。151は、受口口縁を呈する甕である。口縁部に原体RL単節縄文を施文し、波状沈線文を施文している。頸部は、6本一単位櫛描簾状文を施文し、下段に、斜行文を施文

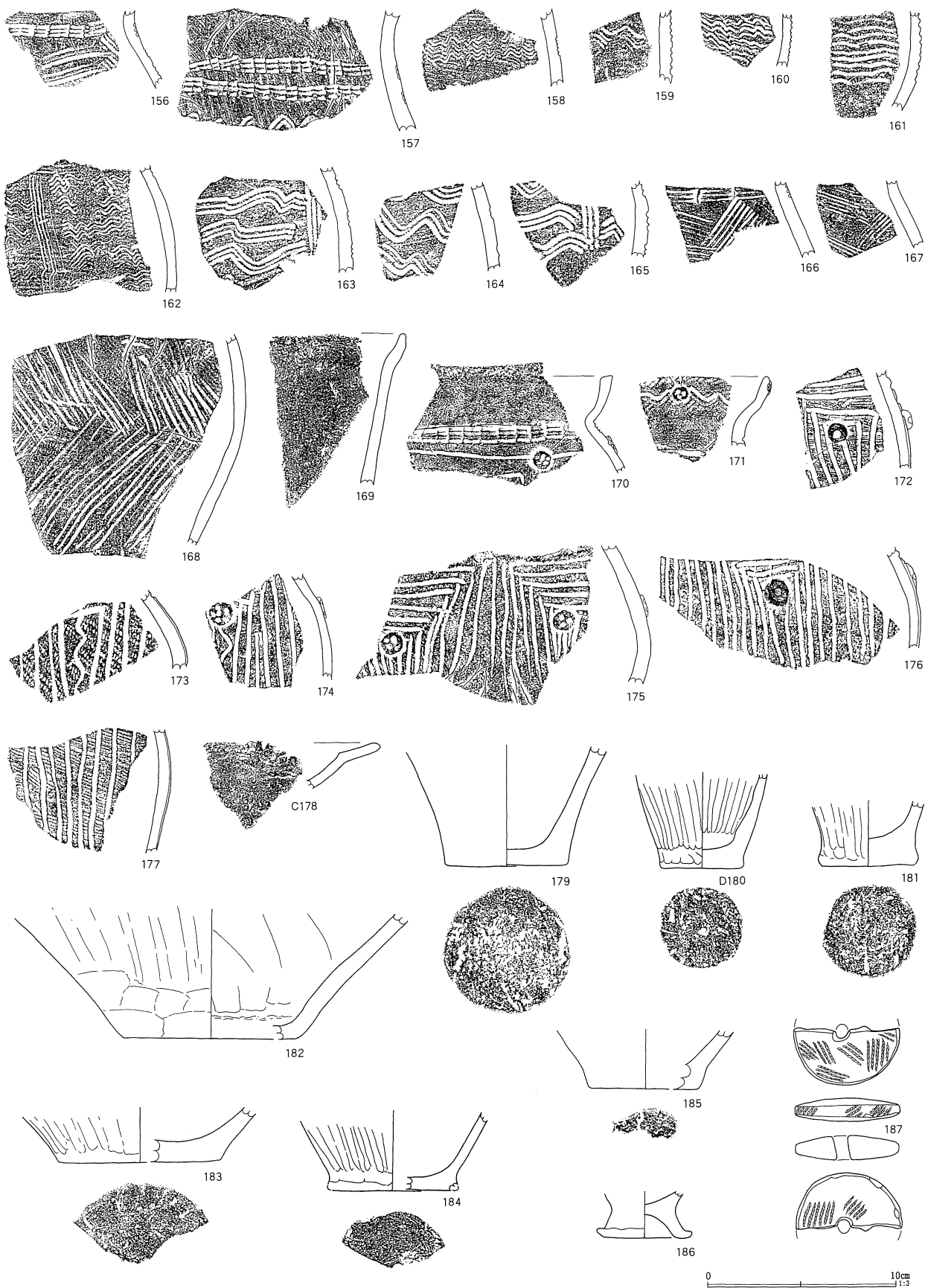


第378図 グリッド出土遺物(6)

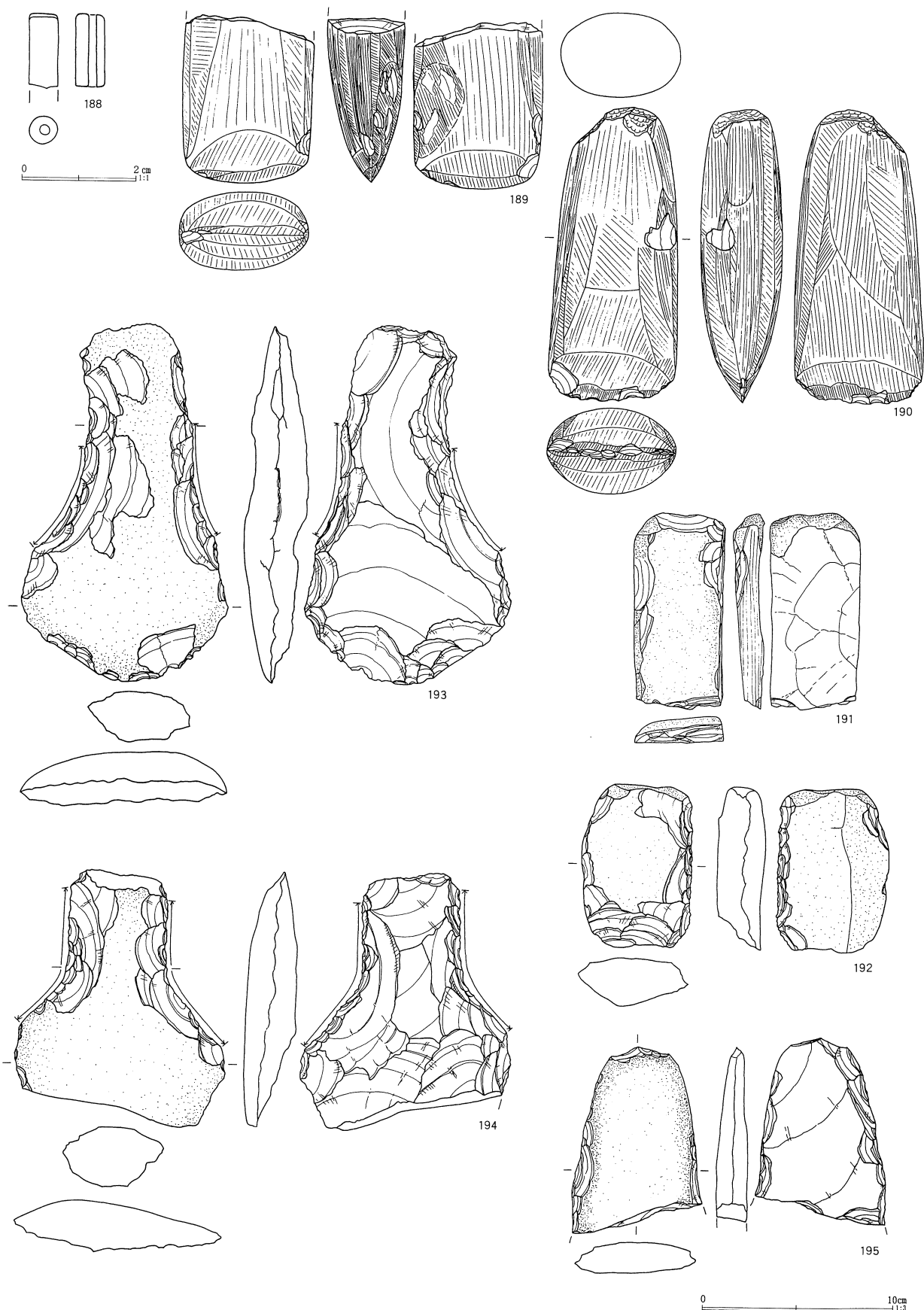
している。152は、口縁部がくの字状に外反する甕である。口端部に原体不明縄文を施文し、口縁部を無文帯としている。頸部は、3本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を施文し、下段に横羽状文を粗雑に施文している。胴部にハケ調整が認められる。153は、甕口縁部である。口端部に原体不明縄文を施文し、口縁部を無文帯としている。胴部は、櫛歯条痕による縦羽状文を施文している。154は、口縁部が、くの字状に屈曲外反する甕である。焼成良好で硬質である。口端部に原体LR単節縄文を施文し、口縁部を無文帯としている。頸部以下に、6本一単位櫛歯状工具による。横羽状文を施文している。155は、甕胴部である。頸部に4本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を施文し、胴部は波状文を施文している。156は、甕頸部である。頸部に3本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を施文し、以下に、縦羽状文を施文している。157は、甕頸部である。ハケ調整後に3本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を2段施文し、下段に波状文を施文している。158～161・164は櫛描き波状文を施文する甕である。158は3本一単位、159は5本一単位、160は単位不明、161は5本一単位、164は3本一単位工具による施文である。162・163・165は、櫛描垂下文間に波状文を充填する甕胴部破片である。162は4本一単位、163・165は3本一単位櫛歯状工具による施文である。166は、甕胴部である。5本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文下に、縦羽状文を施文している。167は、甕胴部である。5本一単位櫛歯状工具による縦羽状文を施文している。168は、甕胴部である。櫛歯条痕による横羽状文を施文している。169は、受け口状を呈する甕である。無文である。170～177は、台付甕である。170は、受口口縁を呈し、口端部に原体不明縄文を施文している。頸部は、4本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を施文し、胴部にコの字重ね文を施文している。文様間頂部に多孔のボタン状貼付文を貼付している。171は、段状の口縁に原体不明縄文を施文し、波状

沈線文を施文している。波状文上に多孔のボタン状貼付文を貼付している。172は、ハケ調整後にコの字重ね文を施文している。文様中央部に単孔のボタン状貼付文を貼付している。173は、地文に原体LR単節縄文を施文し、コの字重ね文を施文している。文様中央部に蛇行沈線文を垂下させている。174は、コの字重ね文を施文し、中央部に多孔のボタン状貼付文と蛇行沈線文を施文、貼付している。175は、コの字重ね文を施文し中央部に多孔のボタン状貼付文を貼付している。176は、コの字重ね文を施文し、単孔のボタン状貼付文を貼付している。177は、ハケ調整後にコの字重ね文を施文している。178は、口縁部が屈曲して外反する高坏である。2個一対の突起が付いている。内外面赤彩である。179～185は、底部である。底面は、ナデ調整である。180は内面に赤彩痕跡が認められる。186は、台付甕脚部である。187は、土製の紡錘車である。当初から紡錘車として利用するために製作されたもので、各面に縄文が施文されている。

188は、管玉である。欠損している。片側穿孔である。丁寧に研磨されている。189は、太型蛤刃磨製石斧である。頭部を欠損している。刃縁はほぼ直線状である。側縁部に形成剥離が残存している。全体に丁寧に研磨されている。欠損面は右側縁からの加撃による。190は、太型蛤刃磨製石斧である。完存している。刃縁は、ほぼ直線状である。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。頭部に敲打痕が付いている。全体に丁寧に磨かれている。191は、扁平片刃磨製石斧未製品である。扁平の礫の縁辺部を剥離して形状を整えている。右側縁は研磨している。刃部は、細かい剥離を加えて断面ノミ形にしている。192は、打製石斧である。短冊形を呈す。扁平の礫の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。刃部は、表面から剥離を加えて断面ノミ形にしている。側縁部は、細かい剥離を加えて直線状に仕上げている。193は、打製石斧である。撥形を呈す。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に



第379図 グリッド出土遺物(7)



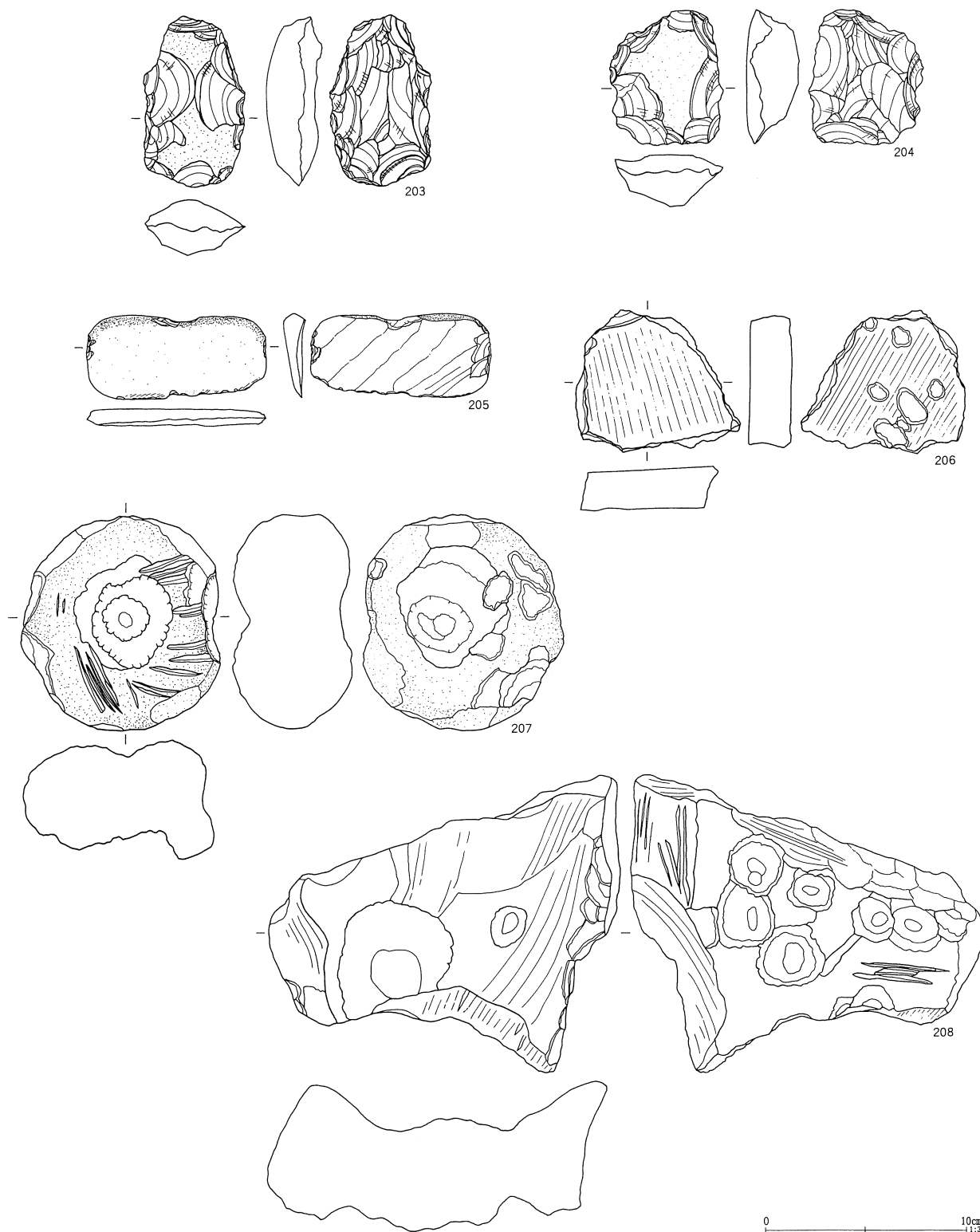
第380図 グリッド出土遺物(8)

剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。紐帯部は、摩滅している。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。194は、打製石斧である。刃部を欠損している。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。紐帯部は、摩滅している。195は、打製石斧である。刃部を欠損している。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて直線状に仕上げている。196は、打製石斧である。撥形を呈す。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。紐帯部は、摩滅している。刃部は、使用により大きく剥離している。197は、打製石斧である。分銅形を呈す。扁平の礫の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。198は、打製石斧である。分銅形を呈す。板状の石材の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。刃部は、使用により摩滅している。199は、打製石斧である。刃部を欠損している。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて浅い抉り込みを入れている。欠損面は表面からの加撃による。200は、打製

石斧である。扁平の礫の刃部と基部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部は自然面を利用している。刃部に細かい剥離を加えて断面楔形に仕上げている。201は、打製石斧である。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて浅い抉り込みを入れている。紐帯部は、摩滅している。刃部に敲打による剥離が認められる。202は、敲石である。側縁部に細かい剥離を加えて浅い抉り込みを入れている。刃部は、敲打による剥離が認められる。203は、打製石斧である。短冊形を呈す。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて直線状にしている。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。204は、搔器である。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。側縁部に細かい剥離を加えて抉り込みを入れている。刃部断面は楔形を呈す。205は、横刃型の刃器である。頭部中央及び両側縁部に剥離を加えて浅い抉り込みを入れている。刃部は、使用により細かい剥離が生じている。206は、砥石である。両面が研磨により光沢が生じている。207は、凹石である。両面に窪み部が付いている。縁辺部に敲打痕が付いている。208は、凹石である。両面に窪み部が付いている。側縁部に研磨痕及び敲打痕が付いている。側縁部に断面三角形の線状痕が付いている。



第381図 グリッド出土遺物(9)



第382図 グリッド出土遺物(10)

第2表 出土土器観察表(1)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
19図	1	SJ165	壺	DEH	不良	灰白	30%		RL	ウ	胴C
19図	2	SJ165	壺	BCE	普通	灰黄			LR	胴E	胴C
19図	3	SJ165	壺	BEH	不良	黄褐	25%			頸I	頸C
19図	4	SJ165	壺	BDEH		にぶい黄橙	50%		LR	胴G	胴C
19図	5	SJ165	壺	BCEH	不良	にぶい黄褐	25%		LR	キ	胴B
19図	6	SJ165	壺	EH		にぶい黄褐	20%		LR1	ア	
20図	7	SJ165	壺	EHL		にぶい黄橙	60%		R	イ	胴C
20図	8	SJ165	甕	DE	良好	にぶい黄褐	20%			胴N	胴D
20図	9	SJ165	高坏	BCEK	良好	にぶい黄橙	80%	C		E・G	A
20図	33	SJ165	小型壺	EGH	良好	明褐	95%			β	胴A
21図	34	SJ165	壺	BC	良好	橙褐	80%				
21図	44	SJ165	高坏	BEH	良好	淡橙褐	95%				
24図	1	SJ173	壺	H	良好	灰黄	20%			β	胴D
27図	1	SJ195	壺	ABDE	普通	灰白	5%未満		LR	口E	口B1
27図	2	SJ195	壺	BDEH	不良	灰白	5%未満		LR	口I	口D
27図	3	SJ195	壺	ABDE	普通	灰白	5%未満	B	LR	口C・J	口B2
27図	4	SJ195	壺	BCDG	不良	灰白	30%		LR	頸C1	頸A
27図	5	SJ195	壺	EH	普通	にぶい黄橙	20%		RL	胴X	胴B
28図	39	SJ195	鉢	BH		明褐灰	40%	A			
28図	40	SJ195	高坏	BH	良好	にぶい橙	20%	C			
28図	41	SJ195	高坏	EH	不良	にぶい橙	90%				
33図	1	SJ198	壺	BEH	不良	にぶい黄橙	80%		LR	ケ	胴D
33図	2	SJ198	壺	BDEGH		にぶい黄橙	30%		LR	頸I	頸E
33図	3	SJ198	壺	EH	不良	にぶい黄橙	20%		LR	胴I1	胴C
33図	4	SJ198	壺	EH	不良	にぶい黄褐	20%			胴X	胴A
33図	5	SJ198	壺	EH	普通	にぶい黄橙	20%		RL	胴G	
33図	6	SJ198	壺	BCEH	普通	褐灰	10%		RL		
33図	7	SJ198	壺	BEHI	不良	にぶい黄橙	25%				
33図	8	SJ198	台付甕	BCH	良好	黒褐	20%		LR	胴T	胴D
33図	9	SJ198	台付甕	DE	不良	にぶい黄褐	15%		R	胴T	胴C
39図	1	SJ209	甕	EH	良好	灰白	90%		LR	胴G	胴H
39図	2	SJ209	甕	BH	良好	茶褐	20%		L	胴A	
39図	3	SJ209	甕	BCH	良好	灰褐	30%			胴V	
42図	1	SJ210	壺	BEH	良好	褐灰	60%		RL	胴E2	胴B
42図	2	SJ210	壺	BE	不良	にぶい黄橙	25%		LR	口C2	口A1a
42図	3	SJ210	壺	DH	良好	にぶい黄橙	15%	A		口J・K	口A1
42図	4	SJ210	壺	BC		灰白	80%			口G	口D
42図	5	SJ210	壺	BCDH	良好	にぶい黄橙	90%		LR	胴A	胴D

第3表 出土土器観察表(2)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
42図	6	SJ210	壺	BE	普通	にぶい黄橙	30%		RL	頸E	頸A
42図	7	SJ210	無頸壺	DH	不良	灰褐	25%	A			
42図	8	SJ210	壺	CDH	良好	にぶい黄橙	20%			胴G2	
42図	9	SJ210	甕	BE	良好	灰黄褐	15%			口K	口E
42図	10	SJ210	甕	BH	良好	にぶい黄橙	40%			胴M	胴B
42図	11	SJ210	高坏	CH	良好	褐灰	10%	C	LR	D	C
42図	12	SJ210	高坏	CH	良好	にぶい橙		C		G	C
42図	13	SJ210	高坏	BH	不良	にぶい黄橙	20%	C		F	C
44図	54	SJ210	鉢	BCH	不良	灰黄	20%	C		C	B
45図	90	SJ210	台付甕	BH	良好	暗褐 褐灰	50%				
51図	1	SJ214	壺	BDEH	普通	にぶい橙	30%		LR	I 1	
51図	2	SJ214	甕	CH	不良	にぶい黄橙	30%		RL	頸C	B
51図	3	SJ214	甕	EGH	普通	にぶい橙	100%		RL×L	頸G	A
51図	4	SJ214	甕	H	不良	にぶい黄橙	70%			胴F	
51図	5	SJ214	高坏	H	良好	浅黄橙	15%	C		G	D
58図	1	SJ216	台付甕	BEH	良好	暗褐	30%		RL	胴T	C
61図	1	SJ217	壺	DEH	良好	にぶい黄橙	90%		RL	口C2	口B1
61図	2	SJ217	壺	DH	普通	にぶい黄橙	90%		LR	口F・J	口C
61図	3	SJ217	壺	BDE	普通	灰黄	20%		RL	ウ	胴C
61図	4	SJ217	壺	DEH	良好	にぶい黄褐	30%		RL	ア	胴B
61図	5	SJ217	壺	BSH	良好	にぶい黄橙	25%			胴N	胴E
61図	6	SJ217	甕	CH	不良	にぶい黄橙	25%			胴V	口E
64図	1	SJ228	壺	BEH	普通	にぶい黄橙	60%	B	L{RRR} LR{lll}or	口C2	口A1b
64図	2	SJ228	壺	EH	良好	にぶい黄橙	20%			口D	口A3
64図	3	SJ228	鉢	DEH	不良	にぶい黄橙	13%	C		C	B
72図	1	SJ234	壺	EH	不良	にぶい黄橙	20%		LR	口H	口B1
72図	2	SJ234	壺	EH	普通	橙	95%		LR	口C3	口A3
72図	3	SJ234	壺	H	不良	橙	25%		LR	口C3	口A3
72図	4	SJ234	壺	DEH	普通	にぶい黄橙	30%		RL	胴I 1	
72図	5	SJ234	小型壺	EGH	良好	にぶい黄橙	100%			胴β	胴A
72図	6	SJ234	壺	BCD	良好	にぶい橙	40%				
72図	7	SJ234	甕	H	良好	にぶい褐	15%		RL	口F	口A
72図	8	SJ234	台付甕	EH	普通	黒	10%		LR	胴T・U	口C
72図	9	SJ234	台付甕	EGH	良好	褐	40%		LR	胴T・U	胴B
78図	1	SJ256	壺	CDE	普通	にぶい黄橙	60%		LR	胴E1	胴D
81図	1	SJ259	壺	BEH	良好	浅黄	80%		RL	胴A1	頸A・C
81図	2	SJ259	壺	EH	不良	にぶい黄橙	25%		RL	頸I	頸A
81図	3	SJ259	壺	BEH	良好	にぶい褐	50%		LR	頸E	頸A

第4表 出土土器観察表(3)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
81図	4	SJ259	壺	E	普通	黄褐	10%		RL	ア	胴B
81図	5	SJ259	甕	H	良好	灰黄褐	25%		RL	胴A	
86図	1	SJ264	壺	H	良好	灰黄	20%			頸N・P	頸A
86図	2	SJ264	甕	BDH	良好	灰黄褐	25%			胴M	
86図	3	SJ264	鉢		普通	にぶい橙	50%				D
96図	1	SJ269	壺	BEH	普通	にぶい黄橙	20%		RL	胴E1	
96図	2	SJ269	壺	BCDH	普通	灰黄褐	25%	有	LR	胴A1・2	胴C
96図	3	SJ269	甕	DEH	普通	暗褐	20%		LR	胴A	
100図	1	SJ274	壺	EH	普通	灰白	30%		LR	胴G	
100図	3	SJ274	壺	CDH	不良	にぶい黄橙	20%		RL	胴A1・2	
100図	4	SJ274	壺	CH	不良	にぶい黄橙	25%			胴β2	
100図	5	SJ274	壺	CDH	良好	にぶい黄橙	25%		RL	胴A1・2	胴C
100図	6	SJ274	台付甕	DEH	良好	にぶい黄橙	20%			胴T・U	胴A
101図	7	SJ274	甕	DEH	不良	にぶい黄橙	60%		LR	胴M	口E
101図	8	SJ274	甕	H	普通	灰黄褐	20%		LR	胴I	口C
101図	9	SJ274	甕	BDEH	普通	にぶい黄橙	10%			胴L	胴B
101図	10	SJ274	甕	DEH	普通	灰黄	25%			胴V1	胴B
105図	1	SJ287	鉢	BH	良好	にぶい黄橙	50%	C		A	B
112図	1	SJ300	壺	DEH	不良	にぶい黄橙	50%				
112図	2	SJ300	甕	BC	良好	灰黄褐		有		胴M	口E
112図	3	SJ300	甕	DF	普通	灰白	5%				
114図	1	SJ301	壺	EH	普通	灰褐～淡褐			LR+L	ウ	胴D
114図	2	SJ301	甕	BDH	良好	にぶい黄褐	20%	有		胴B	口B
118図	1	SJ303	甕	BDH	良好	浅黄橙	100%		RL	胴A	胴B
118図	2	SJ303	甕	DEH	普通	暗褐	15%	有	RL	胴A	
118図	3	SJ303	甕	DH	普通	にぶい黄橙	20%	有		胴V2	胴B
118図	4	SJ303	甕	BDH	良好	にぶい黄橙	40%	有		胴M	口C
118図	5	SJ303	甕	EH	普通	暗褐	15%			胴V1	口E
125図	1	SJ304	壺	EH	不良	にぶい黄橙	20%	B	LR	口C2	口B1
125図	2	SJ304	壺	BH	良好	にぶい褐	20%		RL		
128図	1	SJ305	壺	H	不良	にぶい黄橙	30%			胴β	胴A
128図	2	SJ305	壺	BDEH	不良	にぶい黄橙	25%	A		胴γ1	胴C
128図	3	SJ305	台付甕	ABE	不良	灰白	10%			胴T・U	胴B
128図	4	SJ305	甕	B	良好	黒褐	20%			頸C	口A
129図	27	SJ305	壺	BCL	不良	にぶい黄橙	25%		LR	頸D	口A3
134図	1	SJ306	壺	BCD	良好	にぶい橙	25%	B	LR	口C2	口B1
134図	2	SJ306	壺	BEH	良好	浅黄橙	90%	B	RL	口C2	口B1
134図	3	SJ306	壺	BH	普通	灰褐	10%			胴κ	

第5表 出土土器観察表(4)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
134図	4	SJ306	壺	BDE	普通	灰白	20%	有	LR	胴X	胴B
140図	1	SJ307	壺	CDEGH	良好	浅黄橙	95%		LR	頸E	口B1
140図	2	SJ307	壺	DE	不良	にぶい橙	20%		LR		
140図	3	SJ307	甕	BDEH	良好	明褐灰	50%		LR	胴A	口B
143図	1	SJ310	片口鉢	BCEH	普通	にぶい黄橙	50%	C		C	C
145図	1	SJ312	壺	DEH	良好	にぶい橙	40%				
145図	2	SJ312	甕	DH	普通	にぶい橙	20%			胴N	口A
147図	1	SJ316	壺	BC	普通	浅黄橙	90%		LR	頸I	口A1c
147図	2	SJ316	壺	ABEH	良好	にぶい橙	5%未満		LR	頸V	頸A
150図	1	SJ317	壺	EH	良好		100%	B	LR	キ	胴D
150図	2	SJ317	壺	DE	不良	にぶい黄橙	90%		L	ア	口D
150図	3	SJ317	壺	BH	不良	にぶい黄橙	100%	C		口K・L	口A2
150図	4	SJ317	小型壺	BDE		にぶい黄橙	100%			胴β	胴D
150図	5	SJ317	壺	BEH	不良	にぶい黄橙	40%		RL	胴α	
150図	6	SJ317	甕	BE	良好	暗褐	10%		RL+ ^R or RL	胴A	
150図	7	SJ317	(台付)甕	EH	良好	にぶい黄褐	40%		RL	胴T	口E
150図	8	SJ317	高坏か鉢	BC	普通	淡褐	12%				
154図	1	SJ318	双口壺	AEH	普通	にぶい黄橙	90%		L{RRR} L{rrr}or	ア	胴F
154図	2	SJ318	壺	DE	普通	浅黄橙	15%		LR	イ	
157図	1	SJ320	甕	EH	普通	褐灰	15%			胴B	口B
160図	1	SJ323	壺	ABDE	普通	明褐灰	20%				
160図	2	SJ323	壺	BDH	良好	にぶい橙	80%				
165図	1	SJ325	壺	BH	良好		20%	B	LR	頸R	胴D
165図	2	SJ325	壺	BCD	良好	にぶい黄橙	30%	有			
165図	3	SJ325	壺	BCD	不良	にぶい黄橙	60%				
168図	1	SJ326	壺	BCD	不良	にぶい黄橙	15%		LR	オ	
168図	2	SJ326	壺	BDH		にぶい黄橙	20%		LL{rr}		
168図	3	SJ326	小型甕	BDH	良好	灰褐	30%		R	胴I	口A
168図	4	SJ326	小型甕	CDH	良好	にぶい橙	30%		RL	胴A	口A
168図	5	SJ326	甕	BCDE	不良	にぶい黄橙	25%		RL	口F	口B
172図	1	SJ329	壺	BH	良好	にぶい橙	50%		RL	胴X	胴A
172図	2	SJ329	壺	BH	良好	黒褐	90%		RL	イ	胴C
172図	3	SJ329	小型壺	BE	普通	浅黄橙	90%			胴β2	胴D
172図	4	SJ329	壺	BEH	良好	灰黄褐	60%				
172図	5	SJ329	甕	BDEH	普通	明褐灰	90%	有	RLr	胴A	胴C
172図	6	SJ329	鉢	CDH	良好	にぶい橙	55%	C		A	B
177図	1	SJ330	壺	ABDE		にぶい橙	20%				
177図	2	SJ330	甕	BCH	良好	黒褐	90%		LR	胴A	胴B

第6表 出土土器観察表(5)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
179図	1	SJ331	長頸壺	ABDE		灰白	50%		LR	E2	胴C
179図	2	SJ331	壺	BCDE	不良	にぶい黄橙	20%		LR	頸H	頸A
179図	3	SJ331	壺	BEH	普通	にぶい黄橙	80%			胴V2	胴D
179図	4	SJ331	壺(広口壺)	BCH	不良	褐	30%			ア	頸B
179図	5	SJ331	甕	E	良好	黄灰	80%			口I	口E
179図	6	SJ331	甕	BDH	不良	にぶい黄橙	25%			胴D	口E
179図	7	SJ331	壺	BDE		にぶい橙	10%		RL	胴X	胴A
187図	1	SJ336	壺	EH	良好	にぶい黄橙	60%			頸N	胴C
187図	2	SJ336	壺	BEH	不良	にぶい黄橙	95%		LR	頸I・X	口B1
187図	3	SJ336	壺	AE	良好	灰白	20%			胴M1	胴D
187図	4	SJ336	壺	BEH	良好	にぶい黄橙	80%		R{LLL}	胴B	
187図	5	SJ336	筒形土器	BC	普通	にぶい褐	60%		LR	A	B
187図	6	SJ336	甕	BCDH	良好	にぶい黄橙	90%	有	LR	口E	口B
187図	7	SJ336	甕	EH	普通	灰褐	5%未満		LR{lll}	口F	口B
188図	8	SJ336	甕	EH	良好	にぶい赤褐	70%		RL	胴A	胴A
188図	9	SJ336	甕	ABDE	普通	にぶい橙	60%		不明	胴D	口E
188図	10	SJ336	甕	BE	良好	黄灰	80%	有			
188図	11	SJ336	壺	ABDE	良好	にぶい橙	5%未満				
196図	1	SJ338	筒形土器	DE	普通	にぶい赤褐	15%		RL	A	B
196図	2	SJ338	甕	DE	普通	灰白	5%未満	有	L{rrr}	口C	口B
199図	1	SJ339	壺	ABDE		浅黄橙	30%	B	LR	キ	胴B
199図	2	SJ339	壺	ABDE		にぶい橙	30%		RL	G	胴C
199図	3	SJ339	壺	BDE	良好	にぶい黄橙	20%				
199図	4	SJ339	壺	ADE	普通	にぶい黄橙	5%未満	有			
199図	5	SJ339	甕	BDE	普通	浅黄橙	10%	有	RL		
199図	6	SJ339	甕	BE	良好	にぶい橙	10%	有	R{lll}	口F	口B
200図	7	SJ339	壺	BDE	普通	にぶい橙	10%	有	RL	ア	
200図	8	SJ339	甕	AE	良好	灰褐	40%	有	RL	頸B	胴C
200図	9	SJ339	甕	DE	不良	にぶい橙	10%			胴M1	胴E
200図	10	SJ339	高坏	ABDE	普通	灰白	5%未満	C		G	B
205図	1	SJ340	壺	BDE	良好	にぶい橙	5%未満		R, RL	頸C3	口A1b
205図	2	SJ340	壺	ABDE	普通	にぶい褐	5%未満			口L	口A3
205図	3	SJ340	壺	ADE	普通	灰白	30%		RL	胴X	D
205図	4	SJ340	壺	DE	普通	明褐灰	10%	B	LR	胴E2	
205図	5	SJ340	壺	ADE	普通	にぶい黄橙	10%		RL	胴X	
205図	6	SJ340	壺	E	良好	灰白	30%		RL	胴X	胴B
205図	7	SJ340	壺	DE	普通	にぶい橙	20%				
205図	8	SJ340	筒形土器	BDE	普通	明褐灰	20%	有	RL	D	B

第7表 出土土器観察表(6)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
205図	9	SJ340	台付甕	ADE	普通	橙	90%	有	LR	筒A	H
205図	10	SJ340	甕	AEH	普通	にぶい橙	15%				
210図	1	SJ341	甕	EH	普通	にぶい橙	60%	有	LR	胴A	胴B
212図	1	SJ342	壺	BDE	良好	にぶい橙	10%		LR		
212図	2	SJ342	壺	DEN		明褐灰	15%		LR	胴D	
212図	3	SJ342	甕	AEM		にぶい橙	30%		LR	胴L	B
217図	1	SJ344	甕	BEH	普通	灰褐	5%未満	有		胴N	
221図	1	SJ348	壺	EH		にぶい黄橙	100%		RL	胴G	胴C
221図	2	SJ348	壺	BDE	良好	にぶい黄橙			LR	胴I1	
221図	3	SJ348	壺	DE		灰白	30%		LR	胴I1	胴D
222図	4	SJ348	壺	BH	普通	にぶい黄橙	50%		RL	胴X	胴C
222図	5	SJ348	甕	BH	良好	にぶい橙	45%		RL	胴M	口E
223図	6	SJ348	壺	BEH		にぶい褐	80%		LR	エ	
223図	7	SJ348	壺	BEH	良好	灰黄褐	50%		RL	胴E	
223図	8	SJ348	壺	CH	良好	にぶい黄橙	90%		L		
223図	9	SJ348	甕			褐灰～にぶい褐	60%	有	RL	胴A	
223図	10	SJ348	壺	DE	良好	にぶい黄橙	5%未満		LR	口C2	口A2
223図	11	SJ348	鉢	E	良好	淡黄	10%	C		C	B
223図	12	SJ348	鉢		良好	淡赤橙	10%	C		C	A
229図	1	SJ359	壺	ADE	普通	灰白	60%	有	LR	胴E2	胴D
229図	2	SJ359	壺	ADE		浅黄橙	60%	B	RL	胴ア	胴C
230図	3	SJ359	甕	CH	良好	明黄褐	100%	有	LR	胴L	胴C
230図	4	SJ359	甕	BEH	普通	にぶい赤褐	20%		RR{11}	胴A	胴B
235図	1	SJ369	甕	EH	良好	にぶい赤褐	5%未満		オオバコ系擬	頸C	口D
235図	2	SJ369	鉢	DE	普通	浅黄橙	20%		LR	B	A
235図	3	SJ369	高坏	BE	普通	灰白	5%未満	C		G	C
243図	1	SJ412	壺	E	不良	にぶい橙	5%未満		LR	E2	
243図	2	SJ412	甕	ADE	良好	にぶい赤褐	10%			胴O	口G
243図	3	SJ412	壺	DE	普通	明褐灰	5%未満				
246図	1	SJ413	壺	DE	普通	浅黄橙	5%未満		L{RRR}	D・A・I	
246図	2	SJ413	壺	BDE	普通	灰白	30%		RL	胴T	
246図	3	SJ413	甕	ADE	良好	灰白	5%未満		L{rrr}	胴A	胴B
246図	4	SJ413	鉢	ABDE	良好	灰白	25%			A	D
246図	5	SJ413	高坏	BDE	普通	にぶい黄橙	5%未満			C	F
252図	1	SJ417	壺		普通	灰褐	15%				
255図	1	SJ421	壺	BDE	良好	灰白	10%		LR	口C2・J	口B1
255図	2	SJ421	壺	ABDE	良好	灰白			LR	頸E	口B1
257図	1	SJ426	壺	BDE	良好	明灰褐	10%		RL	頸E1	口A1b

第8表 出土土器観察表(7)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
257図	2	SJ426	壺	E	良好	にぶい褐	5%未満		LR	口E	口B1
265図	1	SJ430	壺	EH	良好	灰白	25%		LR	イ	胴B
265図	2	SJ430	甕	BDE	普通	灰白	60%	有	RL	胴E	胴A
265図	3	SJ430	鉢	BD	良好	にぶい黄橙	5%	C		A	B
267図	1	SJ431	壺	BDE	普通	浅黄橙	5%未満		LR	口C2	口A3
267図	2	SJ431	壺	BDEH	普通	灰褐	5%		LR	キ	
267図	3	SJ431	甕	BDEH	普通	にぶい黄橙	80%	有	RL	胴V	口D
267図	4	SJ431	台付甕	DEH	良好	にぶい黄橙	90%	有	LR	胴M	胴H
267図	5	SJ431	高坏	DE	良好	にぶい黄橙	20%	C			
270図	1	SJ432	壺	DE	普通	灰白	90%		RL	胴I1	胴A
279図	297-1	SK297	台付甕	BDE	普通	にぶい橙	15%			胴T・U	
279図	320-1	SK320	壺	ABEH	普通	灰白			LR	頸H・S	頸A
279図	327-1	SK327	壺	DE	普通	にぶい黄橙	5%未満			口L	口A1a
279図	340-1	SK340	壺	ADE	良好	浅黄橙					
279図	340-2	SK340	高坏	DE	普通	淡黄	5%未満	C		G	D
279図	364・373-1	SK364・373	甕	BE	普通	灰白	5%未満		RL	頸B	口A
279図	364-1	SK364	甕	E	普通	にぶい橙	30%	有	LR	胴A	口B
279図	370-1	SK370	壺	BDE	普通	赤黒	5%未満	A	L{RRR}	ア	
279図	371-1	SK371	土製スプーン	E	普通	淡黄	30%	C			
279図	552-1	SK552	高坏	BE	普通	灰白	5%未満	C		F	D
279図	769-1	SK769	壺	DE	普通	灰白	5%未満		LR	胴O	
290図	1	SK219	壺	EH	普通	にぶい橙	50%		RL	エ	胴C
290図	2	SK219	壺	BDE	普通	灰白	5%未満		L	頸I	頸A
291図	1	SK221	壺	EH	普通	浅黄橙	5%		R{111}	頸I	頸A
291図	2	SK221	甕	EH	良好	にぶい橙	70%	有		胴M	口F
292図	1	SK312	壺	DEH	普通	浅黄橙	20%		LR	胴D	胴D
292図	2	SK312	壺	ABDE	普通	にぶい黄橙	30%		LR	胴A1・2	
292図	3	SK312	甕	DE	普通	灰白	5%未満			胴T・U	口A
293図	1	SK521	壺	DEH	普通	にぶい黄橙	10%	A		頸I	胴D
293図	2	SK521	甕	ADE	良好	浅黄橙	90%	有	RL	胴A	胴B
294図	1	SK555	壺	E	普通	淡黄	5%未満		RL	胴I1	
294図	2	SK555	甕	AE	普通	灰白	5%未満	有			
294図	3	SK555	甕	DEH	良好	浅黄橙	90%	有	LR	胴M	口D
295図	1	SK556	壺	BDE	普通	にぶい橙	30%				
296図	1	SK795	壺	AEH	良好	灰白	30%	B		胴β2	胴D
296図	2	SK795	壺	ADEH	普通	灰白	5%		RL	口C3	口A1
296図	3	SK795	壺	EGH	良好	淡黄	10%			胴β2	胴D
296図	4	SK795	甕	AE		灰白	70%		RL	頸G	胴F

第9表 出土土器観察表(8)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
297図	777-1	SK777	壺	ADE		浅黄橙	25%		RL	ウ	
297図	796-1	SK796	壺	ADE	普通	浅黄橙	30%		RL	ア	胴C
297図	796-2	SK796	壺	EH	不良	にぶい黄橙	40%		RL	胴X	
311図	1	下段堰	壺	DEH	良好	にぶい黄橙	5%		LR{lll}	力	
311図	2	下段堰	甕	DH	普通	にぶい橙	30%		LR{ll}	胴A	胴B
311図	3	下段堰	甕	DEH		にぶい赤褐	40%		LR	胴V	胴D
311図	4	下段堰	台付甕	DH	良好	灰黄	50%		LR	筒A	胴C
312図	1	上段堰	壺	DEH	普通	にぶい黄橙	5%未満		RL	頸K	口A1b
312図	2	上段堰	壺	BC	普通	暗褐	30%		LR	頸E1	口A1b
312図	3	上段堰	壺	DEH	不良	にぶい黄橙	5%未満	B	RL	口C1	口A1c
312図	4	上段堰	壺	H	普通	にぶい黄橙	5%未満	B	LR	頸I	口A1b
312図	5	上段堰	壺	CDE	普通	にぶい黄橙	5%未満		LR	頸I	口A1c
312図	6	上段堰	壺	BDEH	普通	にぶい黄褐	30%		LR	口C3	口A2
312図	7	上段堰	壺	DH	不良	灰黄褐	80%			口L	口A2
312図	8	上段堰	壺	BE	普通	浅黄	70%			頸A	頸A
312図	9	上段堰	小型壺	DH	普通	にぶい黄橙	5%未満	A		頸A	頸A
312図	10	上段堰	壺	CH	良好	灰白	5%未満	B	LR	頸I	頸A
312図	11	上段堰	壺	BH	良好	灰黄褐	20%		L	頸I	
312図	12	上段堰	壺	ACDE	普通	にぶい黄橙	5%未満		LR	胴E	
312図	13	上段堰	壺	DEH	普通	灰黄	5%未満		LR	胴E3・5	
312図	14	上段堰	壺	DEH	普通	黄灰	30%		RL, L	ウ	胴C
312図	15	上段堰	壺	DEH	不良	にぶい黄橙	5%未満		RL	胴D	
313図	16	上段堰	壺	DEH	普通	にぶい黄橙	10%		RL	頸E	頸A
313図	17	上段堰	壺	BCE	良好	黒褐	30%		RL	胴I1	
313図	18	上段堰	壺	BH	良好	暗黄灰	60%		LR	胴I1	
313図	19	上段堰	壺	DEH	普通	にぶい黄橙	5%未満		RL	胴I1	
313図	20	上段堰	壺	DE	普通		5%未満	B	LR{lll}	胴I1	
313図	21	上段堰	壺	ADEH	普通	灰黄	5%未満		L{RRR}	頸E	頸A
313図	22	上段堰	壺	ADE	普通	にぶい橙	30%		LR	胴A2	胴C
313図	23	上段堰	壺	DE	良好		5%未満		R, L	胴A	
313図	24	上段堰	壺	EH	普通	灰褐	5%未満		L{rrr}, R	胴A	
313図	25	上段堰	壺	ADH	普通	にぶい黄橙	5%未満		RL+R	胴K	
313図	26	上段堰	壺	H	良好	灰褐	5%		LR	ア	
313図	27	上段堰	壺	DEH	普通	灰黄	5%未満		RL	胴J	
314図	28	上段堰	壺	BC	良好	褐灰	15%	B	RL	胴C1・2	
314図	29	上段堰	壺	EH	普通	灰黄褐	5%未満		R{lll}	胴C1	
314図	30	上段堰	壺	DEH	良好	にぶい黄橙	10%		RLr	胴X	胴A
314図	31	上段堰	壺	BC	普通	にぶい黄橙	50%		LR		

第10表 出土土器観察表(9)

図版番号	出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
314図	32	上段堰	壺	EH	良好	灰白	40%	B		胴β2
314図	33	上段堰	壺	DEH		にぶい黄橙	40%			胴β2 胴D
314図	34	上段堰	壺	DH	普通	にぶい黄橙	5%			胴β2
314図	35	上段堰	壺	AH	普通	にぶい黄橙	5%			胴β
314図	36	上段堰	壺	BDH	良好	赤～にぶい黄橙	80%	A		胴γ1
314図	37	上段堰	壺	DH	普通	明褐灰	5%未満			M1b
314図	38	上段堰	双口壺	BDEH	普通	灰褐	5%未満		LR	ウ 胴F
315図	39	上段堰	甕	ADEH	普通	にぶい橙	5%		RL	胴A
315図	40	上段堰	甕	BC	良好	黒褐	30%		RR{11}	頸C 胴B
315図	41	上段堰	甕	BD	普通	灰黄褐	30%	有	LR	胴A 胴C
315図	42	上段堰	甕	DE	良好	灰褐	10%	有	LR	胴D 胴G
315図	43	上段堰	甕	H	良好	黒褐	90%	有	RL	胴H □E
315図	44	上段堰	甕	DEH	良好	明褐灰	10%		L	胴T・U □C
315図	45	上段堰	台付甕	BE	良好	黒褐	95%	有		胴H 胴H
315図	46	上段堰	鉢	BD	普通	灰黄	20%	C		
315図	48	上段堰	高坏	CH	良好	にぶい黄橙	30%	C		G B
315図	49	上段堰	高坏	CDEH	良好	赤～灰黄褐	40%	C		E C
315図	50	上段堰	高坏	BEH	普通	黄灰	50%	C		
315図	51	上段堰	高坏	DEG	普通	にぶい赤褐	60%			C
315図	52	上段堰	高坏	BH	普通	灰黄褐	90%			
315図	53	上段堰	高坏	E	不良	にぶい黄橙	100%	C		
315図	54	上段堰	高坏	BDE	普通	灰黄褐	90%	C		
366図	1	SD357	壺	DEO	普通	灰黄	60%	B	LR	胴A1・2 胴C
366図	2	SD357	壺	BDEO	普通	浅黄橙	5%未満		LR	胴E4
368図	1	SD7	壺	AE	良好	灰白	30%			胴β1
368図	2	SD7	甕	EH	良好	にぶい黄橙	40%	有		頸C・D 胴B
368図	3	SD7	甕	EH	良好	明灰褐	50%	有	L	胴A 胴A
373図	1	グリッド	壺	BDE	普通	灰白	5%未満		L	□C2 □B1
373図	2	グリッド	壺	H	普通	灰白	5%未満		LR	□C3 □A3
373図	3	グリッド	壺	ADE	良好	灰白	5%未満		LR	□D □A3
373図	4	グリッド	壺	DE	普通	灰白			L	頸A 頸A
373図	5	グリッド	壺	ABE	良好	灰白	5%未満			頸U 頸A
373図	6	グリッド	壺	ADE	普通	にぶい橙	5%未満		LR	頸E 頸A
373図	7	グリッド	壺	HBC	良好	橙	20%			胴Z
373図	8	グリッド	壺	BDE	普通	にぶい橙	5%		LR	胴U
373図	9	グリッド	壺	ABDE	普通	灰白	25%		L	カ
373図	10	グリッド	壺	ABDE	不良	浅黄橙	10%		LR	ア
374図	11	グリッド	壺	AE	良好	にぶい黄橙	40%		RL	ア 胴C

第11表 出土土器観察表(10)

図版番号		出土位置	器 種	胎 土	焼成	色 調	残存率	スス・オコゲ 赤彩の有無	縄 文	文 様	形 態
374図	12	グリッド	壺	EH	普通	にぶい橙	70%		RL r	胴V	胴D
374図	13	グリッド	甕	DE	普通	灰褐	20%	有	R{111}	口F	口B
374図	14	グリッド	甕	E	良好	にぶい褐	5%	有	RL	口F	口A
374図	15	グリッド	壺	EH	普通	にぶい黄橙	30%		LR	胴A	
374図	16	グリッド	甕	E	良好	暗赤灰	5%未満		R{LLL}	口J	口C
374図	17	グリッド	甕	BE	良好	灰褐	5%未満	有	RL r	頸F	口B
374図	18	グリッド	壺	BDE	普通	にぶい橙	5%未満				
374図	19	グリッド	小型甕	ADE	普通	淡黄	30%		RL		
374図	20	グリッド	蓋	AE	普通	淡黄	20%			A	B
374図	21	グリッド	高坏	DE	普通	灰白	20%	C		G	E

北島遺跡出土石器観察表

石器の緒元データを表にして掲載した。尚、用いられた石材については表中に記号化して掲載してあるので、ここで正式名称を記する。

A. 黒色ガラス質安山岩

B. 赤玉石

C. 安山岩

D. 花崗岩

E. 軽石

F. 黒色頁岩

G. 砂岩

H. シルト岩

I. 蛇紋岩

J. 石英

K. 閃緑岩

L. 多孔質安山岩

M. チャート

N. 泥岩

O. フォルンフェルス

P. 片岩

Q. 碧玉

R. 絹雲母片岩

S. 紅簾片岩

T. 緑泥片岩

U. 礫岩

第12表 出土石器観察表(1)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
14図	2	SJ128	剥片石器	4.6	5.3	0.8	24.1	O	
21図	46	SJ165	有肩扇状石器	5.6	5.3	1.7	59.0	O	
21図	47	SJ165	有肩扇状石器	6.7	6.1	2.1	99.8	O	
21図	48	SJ165	有肩扇状石器	7.2	7.2	2.1	106.0	G	
21図	49	SJ165	有肩扇状石器	5.4	8.4	1.6	75.3	O	
21図	50	SJ165	敲打具	8.6	4.3	3.1	143.0	O	
21図	51	SJ165	刃器	3.4	6.1	0.8	20.5	O	刃器状石器

第13表 出土石器観察表(2)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
22図	52	SJ165	刃器	4.6	4.8	1.0	19.9	O	刃器状石器
22図	53	SJ165	刃器	4.6	5.1	0.8	25.3	O	刃器状石器
22図	54	SJ165	磨石	8.7	5.7	2.2	160.9	G	
22図	55	SJ165	磨石	7.7	7.7	2.9	249.1	G	
22図	56	SJ165	磨石	5.4	7.9	1.6	101.9	G	
22図	57	SJ165	磨石	11.4	8.9	1.2	151.9	H	
24図	13	SJ173	石核	6.2	3.6	3.8	110.3	M	
24図	14	SJ173	磨石	10.4	7.8	1.4	208.3	G	
24図	15	SJ173	磨石	8.9	7.4	1.5	132.3	G	
24図	16	SJ173	磨石	10.8	7.6	6.0	667.8	G	
28図	43	SJ195	石鏃	2.3	2.5	0.8	7.0	A	未製品
28図	44	SJ195	有肩扇状石器	3.8	5.1	1.1	28.7	O	
28図	45	SJ195	有肩扇状石器	4.1	5.6	0.9	22.0	O	
28図	46	SJ195	有肩扇状石器	4.0	6.1	2.1	63.3	O	
28図	47	SJ195	有肩扇状石器	2.8	5.1	0.7	12.9	O	
28図	48	SJ195	搔器	4.9	4.0	1.4	28.2	G	
29図	49	SJ195	搔器	6.9	5.9	2.5	147.5	O	
29図	50	SJ195	搔器	6.0	6.2	1.5	69.2	M	
29図	51	SJ195	搔器	6.3	7.0	2.0	71.5	O	
29図	52	SJ195	搔器	5.1	7.6	1.9	112.6	O	
29図	53	SJ195	搔器	5.0	6.3	1.4	53.3	O	
29図	54	SJ195	搔器	8.3	7.0	3.3	202.1	O	
29図	55	SJ195	刃器	8.8	5.6	1.6	79.7	O	
29図	56	SJ195	刃器	7.2	3.7	0.9	26.4	M	
29図	57	SJ195	刃器	5.1	5.0	0.6	16.7	M	
29図	58	SJ195	刃器	3.1	4.2	0.7	16.1	O	
29図	59	SJ195	刃器	4.0	3.7	0.8	17.6	A	
29図	60	SJ195	刃器	1.8	3.4	0.6	4.0	O	
29図	61	SJ195	磨石	4.2	8.3	2.7	126.1	O	
29図	62	SJ195	磨石	9.9	5.3	1.8	148.5	G	
30図	63	SJ195	磨石	10.1	6.8	2.3	237.3	G	
30図	64	SJ195	磨石	9.6	7.3	1.5	150.7	G	
30図	65	SJ195	磨石	12.6	8.0	4.2	559.5	G	
30図	66	SJ195	磨石	13.5	6.0	2.5	294.2	G	
30図	67	SJ195	磨石	6.0	8.2	5.7	345.1	G	
30図	68	SJ195	砥石	8.8	5.6	3.5	310.2	G	
30図	69	SJ195	砥石	10.3	11.1	5.5	827.8	U	
31図	70	SJ195	砥石	10.8	7.5	6.2	516.4	O	

第14表 出土石器観察表(3)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
31図	71	SJ195	砥石	10.7	6.8	4.3	493.0	G	
34図	28	SJ198	磨製石鏃	3.7	2.1	0.4	6.0	M	未製品
34図	29	SJ198	刃器	5.6	3.6	0.6	22.6	O	
34図	30	SJ198	刃器	2.7	3.4	0.6	6.8	O	
34図	31	SJ198	刃器	5.0	7.7	1.9	85.4	M	
34図	32	SJ198	刃器	4.0	6.8	1.3	34.3	O	
35図	33	SJ198	磨石	20.0	5.4	2.0	328.9	G	
35図	34	SJ198	搔器	6.3	7.0	2.5	109.2	O	
35図	35	SJ198	磨石	5.4	7.7	1.3	72.8	G	
35図	36	SJ198	磨石	7.8	4.9	1.5	67.5	G	
35図	37	SJ198	磨石	9.1	5.6	1.2	81.7	G	
35図	38	SJ198	敲石	7.7	6.8	5.7	438.8	C	赤色顔料付着
35図	39	SJ198	敲石	8.1	8.2	8.0	633.9	K	
37図	6	SJ199	刃器	4.2	5.3	1.1	31.3	O	
37図	7	SJ199	刃器	4.0	5.0	1.4	32.1	O	
37図	8	SJ199	刃器	2.9	4.0	0.7	8.3	M	
37図	9	SJ199	刃器	3.2	2.6	1.0	11.7	O	
37図	10	SJ199	刃器	2.8	3.1	1.3	11.9	A	
39図	13	SJ209	刃器	5.9	2.7	1.0	17.0	O	石匙
39図	14	SJ209	刃器	6.2	5.6	0.7	44.1	O	
39図	15	SJ209	刃器	5.6	4.3	0.8	30.0	O	
39図	16	SJ209	刃器	4.4	5.5	0.9	29.1	G	
40図	17	SJ209	磨石	8.0	10.1	4.3	507.5	G	
40図	18	SJ209	砥石	6.4	6.0	1.5	81.3	U	
40図	19	SJ209	砥石	7.4	5.7	1.9	128.2	U	
45図	92	SJ210	石鏃	4.0	2.6	0.3	6.7	B	未製品
45図	93	SJ210	有孔石剣	5.8	3.1	2.3	57.5	M	再加工品
45図	94	SJ210	扁平片刃磨製石斧	7.3	6.6	1.3	131.6	I	
46図	95	SJ210	扁平片刃磨製石斧	9.5	6.9	1.8	189.1	I	
46図	96	SJ210	磨製石斧	20.8	6.4	3.7	768.9	O	未製品
46図	97	SJ210	有肩扇状石器	3.9	4.1	1.9	29.8	O	
46図	98	SJ210	刃器	6.6	3.6	0.8	25.5	O	
46図	99	SJ210	刃器	8.0	4.8	1.2	51.2	O	
46図	100	SJ210	刃器	6.7	3.8	1.1	34.0	O	
46図	101	SJ210	刃器	6.2	6.5	1.7	87.6	O	(両面加工)
46図	102	SJ210	刃器	7.5	10.5	1.2	116.1	O	
46図	103	SJ210	切削具	4.4	8.7	1.1	57.4	G	
46図	104	SJ210	磨石	10.1	4.8	1.6	120.6	U	

第15表 出土石器観察表(4)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
46図	105	SJ210	磨石	9.0	9.9	1.9	288.3	K	
46図	106	SJ210	磨石	9.5	5.0	1.1	88.0	G	
46図	107	SJ210	磨石	9.8	5.0	1.6	124.3	G	
46図	108	SJ210	磨石	3.5	3.6	1.0	19.1	G	
47図	109	SJ210	磨石	10.7	5.3	1.2	110.9	G	
47図	110	SJ210	磨石	8.8	5.7	1.2	88.7	G	
47図	111	SJ210	棒状石器	8.4	2.8	1.5	48.1	M	
47図	112	SJ210	棒状石器	9.2	2.4	2.3	91.8	G	
47図	113	SJ210	棒状石器	12.7	4.4	1.8	184.9	M	
47図	114	SJ210	敲石	22.6	7.2	3.7	836.4	R	
47図	115	SJ210	砥石	15.0	8.6	5.0	822.9	G	
47図	116	SJ210	砥石	9.7	7.1	6.4	508.0	G	
47図	117	SJ210	砥石	13.7	7.1	2.4	251.2	G	
47図	118	SJ210	砥石	4.8	4.9	1.4	49.0	G	
47図	119	SJ210	砥石	6.0	5.9	4.1	72.0	G	
48図	120	SJ210	砥石	15.7	10.8	7.2	1539.1	G	
48図	121	SJ210	砥石	12.8	8.6	2.6	385.2	G	
48図	122	SJ210	砥石	8.3	8.2	3.2	285.5	C	
48図	123	SJ210	石核	5.5	9.2	4.3	263.4	O	
53図	63	SJ214	器種不明	6.6	2.9	1.1	31.7	O	未製品
53図	64	SJ214	刃器	4.3	4.5	0.7	17.1	M	
53図	65	SJ214	刃器	5.8	6.0	1.1	51.1	O	
54図	66	SJ214	刃器	6.1	4.4	1.2	37.2	O	
54図	67	SJ214	刃器	4.3	5.1	0.9	25.9	O	
54図	68	SJ214	刃器	3.8	5.8	0.8	23.7	O	
54図	69	SJ214	刃器	3.3	3.2	0.6	8.6	A	
54図	70	SJ214	磨石	5.0	6.7	1.0	50.0	G	
54図	71	SJ214	磨石	5.0	6.1	0.9	41.1	G	
54図	72	SJ214	太型蛤刃磨製石斧	18.0	7.2	4.3	1011.3	I	
54図	73	SJ214	磨石	8.5	4.0	1.6	81.1	G	
54図	74	SJ214	磨石	9.8	3.3	0.9	64.0	G	
54図	75	SJ214	磨石	5.8	9.2	1.9	126.0	C	
54図	76	SJ214	磨石	9.7	7.7	1.0	111.0	G	
54図	77	SJ214	石核	11.5	10.6	5.6	881.3	O	
56図	14	SJ215	石鏃	3.9	3.3	0.9	11.2	F	未製品
56図	15	SJ215	搔器	4.4	4.5	2.2	37.6	M	
56図	16	SJ215	刃器	3.8	4.7	1.6	34.5	B	
56図	17	SJ215	刃器	3.7	3.3	0.9	19.4	O	

第16表 出土石器観察表(5)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
56図	18	SJ215	刃器	3.8	9.5	1.1	56.7	O	
56図	19	SJ215	石核	5.3	4.6	2.2	82.4	M	
56図	20	SJ215	磨石	4.2	7.1	4.9	178.5	G	
56図	21	SJ215	石核	5.0	6.7	3.5	163.2	O	
56図	22	SJ215	磨石	9.9	6.2	1.1	130.4	G	
56図	23	SJ215	敲石	7.2	6.2	3.8	245.7	K	
58図	27	SJ216	石錐	4.9	3.8	1.7	37.2	O	
58図	28	SJ216	刃器	3.3	5.6	1.2	18.0	O	
58図	29	SJ216	刃器	4.0	5.9	0.7	16.7	O	
59図	30	SJ216	刃器	3.3	7.8	1.2	40.9	O	
59図	31	SJ216	刃器	3.8	5.8	1.2	26.7	O	
59図	32	SJ216	刃器	5.0	7.1	0.6	36.8	O	
59図	33	SJ216	刃器	4.5	6.8	1.0	42.7	O	
59図	34	SJ216	磨石	10.4	6.8	4.3	489.9	G	
59図	35	SJ216	磨石	6.8	6.7	2.3	162.8	G	
59図	36	SJ216	砥石	3.7	6.5	1.4	39.0	G	
59図	37	SJ216	砥石	10.2	8.0	2.2	271.9	G	
59図	38	SJ216	砥石	9.5	3.7	3.9	156.1	K	
62図	14	SJ217	刃器	3.6	6.3	1.4	19.9	A	剥片 2 点接合
62図	17	SJ217	刃器	3.3	3.7	1.2	17.9	F	
62図	18	SJ217	刃器	3.4	3.9	0.6	10.7	A	
62図	19	SJ217	刃器	2.7	4.4	0.7	8.7	A	
62図	20	SJ217	刃器	2.9	2.1	0.8	6.5	O	
62図	21	SJ217	刃器	5.8	9.2	1.3	90.2	O	
62図	22	SJ217	磨石	8.8	4.5	1.3	85.5	G	
62図	23	SJ217	磨石	4.8	8.0	0.9	49.8	G	
65図	24	SJ228	敲打具	6.1	7.0	3.1	143.0	O	打製石斧 再加工
65図	25	SJ228	刃器	5.0	6.0	1.0	44.1	F	
65図	26	SJ228	刃器	5.0	5.2	1.0	34.0	O	有肩扇状石器
65図	27	SJ228	打製石斧	3.7	6.6	1.8	54.5	O	
65図	28	SJ228	刃器	4.4	6.2	0.5	17.3	O	
65図	29	SJ228	刃器	5.6	4.1	0.7	20.6	O	
65図	30	SJ228	刃器	6.1	6.2	1.1	65.7	O	赤色顔料付着
65図	31	SJ228	刃器	5.2	6.5	0.9	40.2	F	
65図	32	SJ228	刃器	3.7	6.8	0.5	15.6	F	
65図	33	SJ228	磨石	4.3	5.4	1.3	39.0	G	
65図	34	SJ228	砥石	24.2	9.3	2.3	853.6	T	石皿転用
65図	35	SJ228	台石	16.6	15.5	2.6	1186.9	K	

第17表 出土石器観察表(6)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
66図	36	SJ228	凹石	28.2	22.4	10.7	3870.0	L	
68図	11	SJ229	石鏃	5.0	3.6	0.7	13.6	O	未製品
68図	12	SJ229	刃器	5.6	4.2	1.2	38.2	O	
68図	13	SJ229	刃器	3.2	4.9	1.1	22.8	O	
68図	14	SJ229	刃器	3.7	5.7	0.7	17.3	O	
68図	15	SJ229	礫器	4.5	5.5	1.9	45.7	M	器種不明
70図	5	SJ231	磨石	11.9	5.5	5.7	810.8	G	
74図	60	SJ234	扁平片刃磨製石斧	7.9	5.6	1.4	142.9	I	
74図	61	SJ234	石錐	4.6	3.2	0.6	16.4	G	
74図	62	SJ234	打製石斧	3.5	7.3	1.8	64.3	O	
74図	63	SJ234	礫器	4.2	5.4	2.3	64.9	O	器種不明
74図	64	SJ234	刃器	3.5	4.9	1.0	22.9	O	
74図	65	SJ234	刃器	4.5	5.7	1.3	47.8	O	
75図	66	SJ234	刃器	6.8	3.7	1.7	50.5	O	
75図	67	SJ234	刃器	6.9	5.0	0.9	35.2	O	
75図	68	SJ234	刃器	4.1	3.2	0.8	17.9	O	
75図	69	SJ234	刃器	3.0	4.2	1.5	19.6	A	
75図	70	SJ234	刃器	3.5	3.7	0.9	18.7	O	
75図	71	SJ234	刃器	4.0	5.2	1.1	30.1	O	
75図	72	SJ234	磨石	7.7	6.6	1.7	115.9	G	
75図	73	SJ234	礫器	11.2	9.9	6.8	902.6	J	
75図	74	SJ234	敲石	13.0	7.4	5.7	884.7	K	
75図	75	SJ234	磨石	13.0	10.3	6.2	1170.3	K	
75図	76	SJ234	磨石	7.3	5.4	4.1	201.6	C	支脚
75図	77	SJ234	磨石	3.7	6.5	4.5	126.6	K	
76図	78	SJ234	砥石	18.5	12.4	5.5	1263.0	G	
76図	79	SJ234	砥石	8.1	8.8	5.6	470.3	C	
83図	49	SJ259	扁平片刃磨製石斧	6.0	5.2	1.1	59.2	O	未製品
83図	50	SJ259	扁平片刃磨製石斧	4.2	4.6	0.8	30.2	O	
83図	51	SJ259	打製片刃石斧	8.3	4.9	1.5	83.4	O	
83図	52	SJ259	打製片刃石斧	8.2	4.1	1.3	58.7	O	
83図	53	SJ259	有肩扇状石器	9.0	6.0	0.7	58.5	O	
83図	54	SJ259	柱状片刃状石器	9.3	5.6	1.8	146.6	O	
83図	55	SJ259	打製石斧	8.9	8.5	1.4	163.6	O	
83図	56	SJ259	打製石斧	6.2	6.2	1.6	119.3	O	
83図	57	SJ259	刃器	5.2	5.8	1.2	34.1	O	
83図	58	SJ259	刃器	6.0	4.6	1.3	40.9	O	
83図	59	SJ259	刃器	6.7	5.8	1.0	58.0	O	

第18表 出土石器観察表(7)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
83図	60	SJ259	刃器	4.2	5.7	0.6	18.4	O	
83図	61	SJ259	刃器	4.0	3.9	1.2	25.5	O	
83図	62	SJ259	刃器	4.6	8.9	0.6	36.6	O	
83図	63	SJ259	刃器	3.4	7.4	0.5	16.6	O	
84図	64	SJ259	刃器	3.6	3.4	0.6	11.4	O	
84図	65	SJ259	刃器	3.5	4.2	0.7	14.7	A	
84図	66	SJ259	磨石	4.8	5.7	0.8	37.7	G	
84図	67	SJ259	砥石	27.7	14.3	7.3	2544.8	G	
84図	68	SJ259	磨石	5.4	8.7	7.7	530.5	G	
84図	69	SJ259	砥石	21.6	6.6	3.9	576.7	G	
88図	66	SJ264	扁平片刃磨製石斧	3.0	4.6	1.2	29.7	H	
88図	67	SJ264	有肩石斧	5.7	6.0	1.7	74.2	O	
88図	68	SJ264	打製石斧	4.6	5.4	1.3	44.0	O	
88図	69	SJ264	打製石斧	8.2	4.3	2.1	105.3	O	
88図	70	SJ264	搔器	7.0	3.6	1.4	42.1	O	
88図	71	SJ264	刃器	7.0	3.2	0.5	15.2	T	石鏃未製品？
88図	72	SJ264	刃器	4.0	3.1	0.8	12.7	O	
88図	73	SJ264	刃器	5.5	4.8	1.3	39.0	O	
88図	74	SJ264	刃器	4.7	4.2	1.0	32.2	O	
88図	75	SJ264	刃器	4.5	5.2	1.1	32.3	O	
88図	76	SJ264	刃器	4.5	4.3	1.1	23.7	O	
88図	77	SJ264	刃器	5.2	4.5	1.2	36.4	O	
88図	78	SJ264	刃器	4.0	4.2	1.0	20.1	O	石匙
89図	79	SJ264	刃器	6.0	6.7	1.2	64.3	O	打製石庖丁
89図	80	SJ264	刃器	5.7	8.1	1.6	116.8	O	再加工品
89図	81	SJ264	刃器	6.8	6.2	1.4	88.3	O	
89図	82	SJ264	刃器	4.8	8.3	1.4	64.4	O	
89図	83	SJ264	刃器	3.4	7.5	0.7	33.8	O	
89図	84	SJ264	刃器	4.0	8.9	1.5	70.2	O	
89図	85	SJ264	刃器	3.8	6.2	1.0	30.7	A	
89図	86	SJ264	刃器	3.5	5.5	0.8	26.7	O	
89図	87	SJ264	刃器	3.0	4.3	1.4	16.8	F	
89図	88	SJ264	刃器	4.0	5.5	1.0	27.3	O	
89図	89	SJ264	刃器	3.7	5.3	0.7	15.9	O	
89図	90	SJ264	刃器	3.8	6.4	1.0	40.0	O	
89図	91	SJ264	刃器	4.9	7.0	1.0	54.2	G	切削具
89図	92	SJ264	刃器	4.0	5.4	1.0	30.3	O	
89図	93	SJ264	礫器	5.6	6.5	1.7	94.9	T	

第19表 出土石器観察表(8)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
89図	94	SJ264	刃器	7.3	4.3	1.8	102.6	O	
89図	95	SJ264	磨石	9.2	5.0	1.5	101.3	G	
89図	96	SJ264	磨石	4.6	4.7	0.8	26.3	G	
90図	97	SJ264	磨石	9.2	5.1	0.9	70.6	G	
90図	98	SJ264	磨石	8.3	7.6	1.3	134.4	G	
90図	99	SJ264	磨石	8.4	7.3	1.6	152.9	G	
90図	100	SJ264	磨石	5.9	7.6	1.0	69.0	G	
90図	101	SJ264	磨石	9.8	6.3	2.8	292.1	K	
90図	102	SJ264	磨石	12.2	8.4	1.8	283.1	G	
90図	103	SJ264	敲石	26.9	7.5	5.2	1625.5	R	炉石
90図	104	SJ264	磨石	13.1	8.4	5.2	743.1	G	
90図	105	SJ264	磨石	6.9	9.5	5.4	476.6	C	
90図	106	SJ264	磨石	6.4	8.4	3.6	266.8	K	
91図	107	SJ264	磨石	11.2	6.8	7.7	793.4	K	
91図	108	SJ264	磨石	11.8	7.4	4.7	568.7	L	石皿転用
91図	109	SJ264	磨石	13.3	12.7	3.0	773.2	K	
91図	110	SJ264	砥石	4.8	8.6	3.3	247.2	G	
91図	111	SJ264	砥石	4.9	4.7	1.3	52.7	G	
91図	112	SJ264	砥石	10.1	7.5	5.5	659.7	D	
91図	113	SJ264	石核	11.3	8.7	4.2	437.6	O	
93図	13	SJ268	有肩扇状石器	6.1	6.3	1.3	74.1	O	
97図	32	SJ269	打製石斧	17.7	8.5	3.0	456.2	O	石鋤
97図	33	SJ269	礫器	7.6	8.3	3.4	194.5	O	
97図	34	SJ269	剥片石器	7.5	7.0	2.0	142.9	O	
97図	35	SJ269	刃器	5.3	6.3	1.5	50.7	O	
97図	36	SJ269	刃器	4.9	6.2	1.2	36.8	O	
97図	37	SJ269	刃器	5.9	6.2	1.5	68.5	O	
98図	38	SJ269	磨石	6.7	8.2	1.2	108.8	G	
98図	39	SJ269	磨石	4.9	7.9	1.5	86.1	G	
98図	40	SJ269	磨石	7.3	10.5	7.4	665.4	M	
98図	41	SJ269	磨石	8.6	6.5	1.1	88.5	G	
98図	42	SJ269	台石	20.4	17.8	3.4	1993.5	K	
102図	22	SJ274	刃器	5.0	2.2	0.5	6.0	O	
102図	23	SJ274	刃器	5.2	5.1	0.8	20.4	O	
102図	24	SJ274	刃器	4.9	3.1	1.2	18.2	O	
102図	25	SJ274	刃器	5.3	7.0	0.7	27.5	G	
102図	26	SJ274	刃器	5.0	7.0	1.7	73.1	O	
102図	27	SJ274	刃器	4.5	5.3	0.7	22.9	O	

第20表 出土石器観察表(9)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
102図	28	SJ274	刃器	2.7	5.4	1.1	12.7	O	
102図	29	SJ274	石核	5.5	6.8	2.2	153.0	O	
103図	30	SJ274	太型蛤刃磨製石斧	16.0	6.9	4.2	654.7	O	未製品？
103図	31	SJ274	台石	28.4	13.7	11.0	7220.0	G	
103図	32	SJ274	磨石	5.5	4.2	1.0	39.9	G	
105図	22	SJ287	刃器	4.8	4.2	1.1	30.4	O	
105図	23	SJ287	棒状石器	10.9	3.3	2.1	112.6	G	
109図	11	SJ293	打製石斧	12.3	6.5	2.7	271.9	F	
109図	12	SJ293	礫器	4.5	5.7	2.5	93.6	F	
109図	13	SJ293	礫器	6.5	7.0	3.2	175.1	O	
109図	14	SJ293	刃器	4.5	5.4	1.7	48.2	O	
109図	15	SJ293	刃器	3.2	5.1	0.8	12.6	O	
109図	16	SJ293	刃器	3.6	4.8	0.8	11.7	O	
109図	17	SJ293	刃器	3.9	3.3	1.2	20.4	O	
109図	18	SJ293	磨石	9.9	4.9	1.1	85.1	G	
109図	19	SJ293	磨石	8.3	4.8	1.2	87.7	G	
110図	20	SJ293	磨石	7.4	4.4	1.4	52.1	G	
110図	21	SJ293	磨石	5.3	5.8	1.9	93.9	G	
110図	22	SJ293	敲石	12.0	6.0	1.8	197.0	G	
110図	23	SJ293	礫器	10.0	5.8	3.9	264.1	F	柱状片刃石斧未製品
115図	10	SJ301	太型蛤刃磨製石斧	7.0	3.4	2.5	102.6	I	赤色顔料付着
115図	11	SJ301	刃器	4.4	5.6	0.9	25.7	O	
115図	12	SJ301	礫器	6.1	6.2	3.4	106.6	G	
115図	13	SJ301	敲石	9.9	8.1	5.4	549.2	G	
120図	64	SJ303	磨製石鏃	5.2	2.5	0.4	10.4	M	未製品
120図	65	SJ303	石錐	4.8	3.2	1.1	15.1	O	
120図	66	SJ303	刃器	5.3	8.0	1.5	70.3	O	
121図	67	SJ303	搔器	4.5	4.5	1.3	32.3	O	
121図	68	SJ303	刃器	5.0	5.0	1.2	48.8	F	
121図	69	SJ303	刃器	3.0	4.1	0.7	12.0	O	
121図	70	SJ303	刃器	5.9	5.7	0.8	43.5	O	
121図	71	SJ303	刃器	4.8	7.1	1.5	47.5	O	
121図	72	SJ303	刃器	4.1	4.5	1.3	25.9	O	
121図	73	SJ303	刃器	6.8	8.9	1.7	125.6	O	
121図	74	SJ303	刃器	5.0	8.3	0.9	42.7	O	
121図	75	SJ303	刃器	5.5	9.0	1.4	68.2	O	
121図	76	SJ303	刃器	5.9	7.3	1.4	81.4	O	
121図	77	SJ303	磨石	4.7	5.4	1.3	49.2	G	

第21表 出土石器観察表(10)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
121図	78	SJ303	磨石	5.2	5.6	1.5	55.9	G	
121図	79	SJ303	磨石	5.3	8.1	1.1	68.6	G	
121図	80	SJ303	磨石	5.4	7.5	1.0	49.9	G	
121図	81	SJ303	磨石	6.2	8.3	2.6	76.9	G	
121図	82	SJ303	磨石	7.2	5.6	1.2	83.8	F	
122図	83	SJ303	磨石	5.4	7.8	1.8	106.9	G	
122図	84	SJ303	磨石	5.5	7.5	1.1	75.7	G	
122図	85	SJ303	磨石	12.6	11.0	2.4	572.6	K	
122図	86	SJ303	磨石	9.1	5.6	1.5	142.3	G	切削具
122図	87	SJ303	磨石	8.7	7.5	1.3	139.8	G	
122図	88	SJ303	磨石	10.6	6.6	2.0	176.1	G	
122図	89	SJ303	砥石	8.5	5.5	3.7	31.7	G	
122図	90	SJ303	磨石	5.5	3.6	4.6	94.4	G	
122図	91	SJ303	石核	5.6	7.4	3.2	203.2	O	
123図	92	SJ303	砥石	10.4	22.4	8.7	1638.2	L	台石
130図	40	SJ305	打製石斧	8.8	6.1	2.2	125.7	O	基部欠損
130図	41	SJ305	有肩扇状石器	6.1	4.5	1.1	41.6	O	
130図	42	SJ305	剥片石器	5.2	4.2	1.2	31.6	O	
130図	43	SJ305	刃器	5.2	5.7	1.4	52.1	O	
130図	44	SJ305	刃器	4.3	4.9	0.5	18.5	O	
130図	45	SJ305	刃器	4.1	5.4	0.9	21.9	O	
130図	46	SJ305	刃器	5.3	5.9	1.2	33.3	O	
130図	47	SJ305	刃器	4.2	6.5	1.9	66.5	O	
130図	48	SJ305	刃器	3.9	7.2	1.6	38.0	O	
130図	49	SJ305	刃器	3.9	6.2	1.0	29.5	O	
130図	50	SJ305	刃器	4.9	8.5	1.4	69.3	O	
130図	51	SJ305	礫器	5.9	10.8	2.6	204.7	G	
130図	52	SJ305	磨石	8.0	6.8	1.5	107.0	G	
130図	53	SJ305	磨石	8.0	5.3	1.0	64.7	G	
131図	54	SJ305	敲石	12.9	5.8	3.5	375.6	G	
131図	55	SJ305	砥石	16.6	11.5	4.2	617.7	G	
131図	56	SJ305	敲石	11.0	10.7	9.7	1587.0	O	
136図	58	SJ306	打製石鏃	2.9	1.5	0.3	1.8	F	凹基有茎式
136図	59	SJ306	磨製石鏃	3.1	1.8	0.3	2.7	P	未製品
136図	60	SJ306	磨製石鏃	4.1	2.0	0.3	3.9	P	
136図	61	SJ306	礫器	4.9	4.5	1.7	52.7	O	
136図	62	SJ306	打製石斧	6.5	7.0	2.8	165.3	O	刃部欠損
136図	63	SJ306	有肩扇状石器	6.5	8.3	1.4	92.1	O	

第22表 出土石器観察表(11)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
136図	64	SJ306	刃器	4.5	4.8	1.4	34.7	O	
136図	65	SJ306	刃器	6.4	5.2	1.2	44.0	O	
136図	66	SJ306	刃器	4.3	4.9	0.9	22.0	O	
136図	67	SJ306	刃器	5.2	6.3	0.7	29.5	O	
136図	68	SJ306	刃器	3.7	4.9	1.1	21.9	O	
136図	69	SJ306	刃器	4.6	5.7	0.9	25.6	O	
136図	70	SJ306	刃器	6.4	8.2	1.3	90.3	O	
136図	71	SJ306	刃器	5.0	7.5	1.3	45.0	F	
136図	72	SJ306	刃器	5.8	8.5	1.1	63.6	O	
136図	73	SJ306	刃器	3.3	8.7	1.0	27.0	O	
136図	74	SJ306	刃器	3.4	5.5	1.1	22.0	O	
136図	75	SJ306	刃器	3.1	5.1	0.7	17.0	F	
136図	76	SJ306	刃器	4.9	6.1	0.9	29.5	O	
137図	77	SJ306	礫器	2.9	5.4	0.4	12.4	O	
137図	78	SJ306	磨石	6.6	4.8	1.4	74.5	G	
137図	79	SJ306	磨石	5.1	5.4	1.4	58.8	G	
137図	80	SJ306	磨石	6.7	4.8	1.2	60.2	G	
137図	81	SJ306	磨石	6.9	6.4	1.0	82.1	G	
137図	82	SJ306	磨石	9.3	4.4	1.3	85.5	G	
137図	83	SJ306	磨石	10.2	6.7	1.4	158.7	G	
137図	84	SJ306	磨石	9.7	6.8	1.4	129.9	G	
137図	85	SJ306	棒状石器	12.2	2.7	1.9	120.2	G	工具
137図	86	SJ306	棒状石器	8.4	2.5	1.9	67.3	G	
137図	87	SJ306	棒状石器	9.4	5.0	3.3	222.9	G	
137図	88	SJ306	棒状石器	7.2	2.1	1.8	39.3	G	
137図	89	SJ306	磨石	7.9	4.9	1.9	82.9	G	赤色顔料付着
137図	90	SJ306	礫器	7.3	7.8	2.9	219.0	G	
137図	91	SJ306	打製石斧	9.8	6.0	3.2	246.2	O	
137図	92	SJ306	敲石	9.8	6.7	3.4	337.9	K	
138図	93	SJ306	砥石	12.3	7.3	1.3	226.4	G	
138図	94	SJ306	砥石	10.4	8.6	1.8	238.1	G	
138図	95	SJ306	砥石	20.0	13.8	7.6	2138.7	G	
138図	96	SJ306	砥石	7.4	5.3	1.4	65.0	G	
138図	97	SJ306	石核	6.5	4.6	3.2	109.2	M	
138図	98	SJ306	石核	6.6	7.0	4.4	247.7	F	
140図	4	SJ307	磨石	13.2	8.7	5.6	886.3	G	
145図	15	SJ312	刃器	3.4	5.9	1.1	25.6	O	
145図	16	SJ312	刃器	4.9	5.0	0.6	17.4	A	

第23表 出土石器観察表(12)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
145図	17	SJ312	砥石	6.5	6.4	1.7	99.0	G	
145図	18	SJ312	磨石	5.4	7.4	1.6	91.9	G	
145図	19	SJ312	打製石斧	9.3	7.6	4.2	323.3	A	
147図	8	SJ316	棒状石器	7.4	3.3	1.1	56.8	O	
147図	9	SJ316	磨石	6.3	5.8	0.9	45.4	G	工具
151図	20	SJ317	刃器	3.4	6.3	1.1	26.8	O	
151図	21	SJ317	磨石	3.6	7.3	0.7	30.5	G	
151図	22	SJ317	磨石	11.2	6.8	1.6	188.9	G	
155図	28	SJ318	石鏃	6.2	3.2	0.6	16.4	O	未製品
155図	29	SJ318	ノミ形石器	5.4	2.5	0.8	21.6	I	扁平片刃磨製石斧再加工
155図	30	SJ318	刃器	5.2	5.0	1.3	48.7	O	
155図	31	SJ318	刃器	5.7	5.6	1.3	54.7	O	
155図	32	SJ318	刃器	4.4	6.0	1.4	52.8	O	
155図	33	SJ318	刃器	3.8	5.0	0.9	15.2	F	
155図	34	SJ318	刃器	3.7	4.7	0.9	15.0	O	
155図	35	SJ318	刃器	3.4	3.7	0.9	14.7	O	
155図	36	SJ318	磨石	3.7	5.7	1.1	34.9	G	工具
155図	37	SJ318	磨石	7.9	6.0	1.3	94.6	G	工具
155図	38	SJ318	磨石	7.2	9.4	1.2	103.8	C	切削具
155図	39	SJ318	磨石	7.9	6.0	2.2	146.3	K	
155図	40	SJ318	棒状工具	6.2	2.4	1.8	44.5	G	
155図	41	SJ318	敲石	8.0	4.3	1.4	76.9	G	
155図	42	SJ318	磨石	5.8	9.8	3.9	198.2	G	
155図	43	SJ318	磨石	5.5	7.8	2.7	163.5	K	
157図	14	SJ320	磨石	7.9	9.4	6.0	582.0	G	
157図	15	SJ320	刃器	4.8	4.9	1.1	27.9	O	
157図	16	SJ320	有肩扇状石器	5.0	7.4	1.3	64.8	O	
157図	17	SJ320	磨石	11.5	5.5	7.5	637.7	G	
157図	18	SJ320	敲石	10.7	7.4	5.3	622.5	K	
160図	20	SJ323	磨製石鏃	1.5	2.0	0.2	1.5	F	凹基無茎式
160図	21	SJ323	磨製石鏃	3.4	2.0	0.2	2.7	B	未製品
160図	22	SJ323	石鏃	4.5	3.1	0.3	6.9	O	未製品
160図	23	SJ323	棒状石器	6.8	1.9	0.6	13.4	G	工具
161図	24	SJ323	打製石斧	8.8	4.9	0.9	50.5	S	
161図	25	SJ323	有肩扇状石器	6.4	6.5	1.9	89.2	O	
161図	26	SJ323	刃器	5.9	3.7	1.1	30.7	O	
161図	27	SJ323	刃器	3.4	4.7	0.7	11.3	O	
161図	28	SJ323	刃器	4.2	5.2	0.9	24.2	O	

第24表 出土石器観察表(13)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
161図	29	SJ323	刃器	5.5	7.6	1.4	69.7	O	
161図	30	SJ323	搔器	3.5	5.3	1.2	27.7	O	
161図	31	SJ323	刃器	5.9	9.2	2.0	137.4	O	
161図	32	SJ323	棒状石器	10.0	2.4	1.5	62.9	R	
161図	33	SJ323	磨石	5.8	4.2	0.9	32.7	G	
161図	34	SJ323	磨石	7.7	5.5	0.9	65.4	G	
161図	35	SJ323	磨石	5.7	7.4	1.2	69.5	G	
161図	36	SJ323	磨石	6.1	7.4	1.5	93.5	G	
161図	37	SJ323	敲石	12.5	5.4	3.2	295.3	R	
161図	38	SJ323	砥石	17.5	8.6	4.0	871.2	U	
163図	16	SJ324	太型蛤刃磨製石斧	3.6	5.2	3.2	91.8	I	
163図	17	SJ324	刃器	4.5	8.0	1.4	53.0	O	
163図	18	SJ324	有肩扇状石器	5.9	8.7	2.7	161.7	O	
163図	19	SJ324	刃器	4.5	7.9	1.3	45.4	O	
163図	20	SJ324	刃器	4.3	5.7	1.1	22.4	O	
163図	21	SJ324	磨石	9.3	9.7	8.1	917.0	K	
163図	22	SJ324	砥石	20.7	10.0	6.2	2088.6	G	
165図	17	SJ325	石匙	4.9	5.2	0.8	26.6	O	
165図	18	SJ325	刃器	3.8	3.7	0.8	15.3	O	
165図	19	SJ325	刃器	7.5	4.0	0.9	33.5	O	
165図	20	SJ325	刃器	2.8	3.5	0.8	6.3	O	
165図	21	SJ325	刃器	3.3	5.1	0.7	15.9	O	
165図	22	SJ325	刃器	3.3	6.2	0.7	17.2	O	
165図	23	SJ325	刃器	2.7	4.7	0.5	8.2	F	
166図	24	SJ325	刃器	4.0	6.7	1.2	43.6	O	
166図	25	SJ325	磨石	6.8	9.0	1.3	124.1	G	
166図	26	SJ325	磨石	8.1	5.0	1.2	77.8	G	工具
166図	27	SJ325	砥石	10.2	3.0	1.6	161.2	G	
166図	28	SJ325	軽石	8.1	5.5	4.2	76.5	E	磨石
169図	35	SJ326	太型蛤刃磨製石斧	4.8	4.9	0.7	21.7	I	破片
169図	36	SJ326	刃器	4.6	4.0	1.5	30.1	O	
169図	37	SJ326	刃器	3.5	3.9	0.8	11.3	O	
169図	38	SJ326	磨石	7.2	7.9	5.8	419.0	G	
169図	39	SJ326	磨石	10.2	8.5	8.0	862.6	G	
173図	30	SJ329	打製石斧	17.0	10.3	2.3	595.4	O	石鍬
173図	31	SJ329	有肩扇状石器	7.7	6.7	1.8	124.9	O	
173図	32	SJ329	刃器	5.8	4.4	1.5	45.0	O	
174図	33	SJ329	石錐	6.3	3.8	1.5	37.4	O	

第25表 出土石器観察表(14)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
174図	34	SJ329	石匙	3.8	3.9	0.9	16.7	O	
174図	35	SJ329	有肩扇状石器	4.0	6.8	0.5	19.5	O	
174図	36	SJ329	刃器	6.2	4.8	1.1	45.0	O	
174図	37	SJ329	刃器	5.2	5.7	1.0	30.3	O	
174図	38	SJ329	刃器	4.0	5.8	1.2	35.9	O	
174図	39	SJ329	刃器	3.6	4.9	1.0	17.1	F	
174図	40	SJ329	刃器	4.7	4.9	1.1	34.3	O	
174図	41	SJ329	磨石	5.2	5.2	1.2	44.6	G	切削具
174図	42	SJ329	磨石	5.1	8.0	1.1	54.0	G	工具
174図	43	SJ329	磨石	7.5	4.8	1.3	75.1	G	工具
174図	44	SJ329	砥石	10.8	12.7	9.3	802.3	L	
175図	45	SJ329	台石	23.7	16.5	8.4	3420.0	G	
175図	46	SJ329	磨石	9.7	8.4	4.7	521.3	K	
177図	14	SJ330	剥品石器	3.5	3.5	0.9	14.0	O	削器
177図	15	SJ330	刃器	3.6	4.5	0.5	13.1	O	
177図	16	SJ330	刃器	4.6	6.3	1.3	34.6	O	
181図	41	SJ331	刃器	4.4	5.9	0.6	18.6	O	
181図	42	SJ331	刃器	3.4	6.3	1.1	18.8	G	
181図	43	SJ331	刃器	6.5	7.2	1.7	110.1	F	
181図	44	SJ331	刃器	5.0	7.7	0.7	41.9	O	
181図	45	SJ331	礫器	7.0	7.6	4.2	338.7	O	
181図	46	SJ331	砥石	13.1	8.9	1.8	314.4	G	
181図	47	SJ331	砥石	10.7	10.0	4.1	278.9	L	
183図	2	SJ333	刃器	5.0	4.7	1.1	39.7	O	
190図	55	SJ336	太型蛤刃磨製石斧	6.6	6.8	5.1	393.4	I	
190図	56	SJ336	石錐	4.4	3.9	0.8	18.9	O	
190図	57	SJ336	刃器	4.1	4.3	1.3	32.5	O	
190図	58	SJ336	刃器	3.1	7.6	2.0	81.6	A	
190図	59	SJ336	礫器	8.0	5.5	2.6	169.4	O	打製石斧
190図	60	SJ336	刃器	5.9	4.4	1.2	53.1	O	
190図	61	SJ336	有肩石斧	10.9	12.7	1.9	327.0	O	
190図	62	SJ336	磨石	5.2	5.3	0.9	45.8	G	工具
190図	63	SJ336	磨石	4.9	8.2	0.9	59.0	C	
190図	64	SJ336	磨石	8.6	7.3	1.9	149.7	G	
190図	65	SJ336	砥石	6.1	9.2	1.6	126.0	G	
190図	66	SJ336	礫器	9.0	9.7	4.4	582.7	O	
191図	67	SJ336	棒状石器	13.0	3.2	1.1	99.8	G	
191図	68	SJ336	磨石	11.1	9.7	6.7	1012.5	K	

第26表 出土石器観察表(15)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
191図	69	SJ336	砥石	17.0	7.8	5.4	910.6	G	
191図	70	SJ336	台石	15.5	16.7	2.7	1192.7	K	
192図	71	SJ336	台石	11.0	33.0	7.0	4240.0	R	
192図	72	SJ336	台石	8.5	24.2	8.3	2846.8	G	
194図	14	SJ337	打製石斧	15.2	9.9	2.4	467.6	O	石鍬
194図	15	SJ337	石核	9.0	6.0	5.0	311.1	O	
194図	16	SJ337	刃器	3.7	4.8	0.9	22.4	O	
194図	17	SJ337	砥石	10.6	11.5	3.9	789.8	G	
197図	26	SJ338	打製石斧	5.1	12.0	2.7	506.4	O	石鍬
197図	27	SJ338	刃器	4.9	5.2	0.9	37.2	O	
197図	28	SJ338	刃器	4.5	5.3	0.8	24.9	O	
197図	29	SJ338	刃器	3.9	6.9	1.4	54.6	F	
197図	30	SJ338	刃器	4.9	6.7	2.0	58.4	O	
197図	31	SJ338	礫器	7.4	6.2	4.6	319.7	O	敲打具
197図	32	SJ338	磨石	7.8	5.7	2.2	103.5	C	
197図	33	SJ338	砥石	7.9	7.7	3.4	336.0	G	
202図	54	SJ339	有肩扇状石器	9.1	4.5	1.1	78.6	O	
202図	55	SJ339	刃器	4.4	6.2	0.8	27.5	O	
202図	56	SJ339	刃器	3.6	5.7	0.5	16.6	O	
202図	57	SJ339	刃器	4.9	5.9	1.6	57.8	O	
202図	58	SJ339	刃器	4.5	5.0	1.9	27.4	O	
202図	59	SJ339	石錐	4.5	3.7	1.2	18.6	O	
202図	60	SJ339	磨石	4.9	9.2	1.1	84.4	G	工具
202図	61	SJ339	棒状工具	6.2	1.4	0.5	8.5	G	
202図	62	SJ339	礫器	8.3	6.8	3.1	199.9	O	敲打具
202図	63	SJ339	礫器	10.9	9.8	5.3	632.8	O	
202図	64	SJ339	礫器	7.1	6.7	5.7	372.2	D	敲打具
202図	65	SJ339	棒状工具	11.9	3.7	3.2	196.4	G	
202図	66	SJ339	磨石	5.5	8.3	1.4	108.2	G	
203図	67	SJ339	磨石	10.3	11.8	7.8	1253.5	G	
203図	68	SJ339	磨石	4.2	8.0	5.8	271.8	G	
203図	69	SJ339	磨石	7.8	7.3	6.0	448.7	G	
203図	70	SJ339	台石	11.8	10.1	3.5	679.3	K	赤色顔料付着
203図	71	SJ339	砥石	10.2	8.4	2.5	358.3	K	
203図	72	SJ339	砥石	15.1	7.0	2.6	401.2	G	
203図	73	SJ339	砥石	17.0	6.4	2.7	447.6	G	
207図	50	SJ340	打製石斧	8.0	5.9	3.0	232.0	O	
207図	51	SJ340	刃器	3.9	10.0	1.0	62.3	R	切削具

第27表 出土石器観察表(16)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
207図	52	SJ340	刃器	4.1	6.5	1.0	34.4	A	
207図	53	SJ340	石核	4.5	4.3	2.7	83.6	M	
208図	54	SJ340	敲石	8.3	3.8	1.0	62.8	R	
208図	55	SJ340	砥石	7.5	3.6	1.3	75.4	G	
208図	56	SJ340	敲打具	11.0	3.9	1.2	105.0	R	
208図	57	SJ340	石核	10.7	8.0	6.8	733.0	O	
208図	58	SJ340	敲石	10.7	6.8	4.7	483.4	O	
208図	59	SJ340	砥石	7.6	23.2	5.6	1543.8	C	
208図	60	SJ340	敲石	10.0	7.9	3.9	433.2	G	
210図	9	SJ341	刃器	2.8	3.4	0.3	5.0	O	
213図	40	SJ342	刃器	5.0	6.3	1.2	59.5	O	
213図	41	SJ342	刃器	6.6	3.2	1.1	46.2	O	ノミ形石器模倣
213図	42	SJ342	剥片石器	5.5	4.3	1.8	57.5	O	搔器？
213図	43	SJ342	刃器	5.2	5.4	1.3	43.5	O	
214図	44	SJ342	刃器	4.5	5.6	0.9	30.9	O	
214図	45	SJ342	刃器	3.7	6.2	0.9	25.6	O	
214図	46	SJ342	刃器	4.0	6.5	0.7	19.7	O	
214図	47	SJ342	磨石	5.4	8.5	0.8	73.1	G	
214図	48	SJ342	磨石	7.0	5.3	1.1	66.5	G	工具
214図	49	SJ342	磨石	9.7	7.9	1.3	118.7	G	
214図	50	SJ342	台石	12.0	10.8	2.4	581.2	K	
214図	51	SJ342	敲石	14.5	7.4	5.8	963.9	K	
214図	52	SJ342	砥石	16.2	8.0	6.2	936.7	G	
214図	53	SJ342	砥石	8.5	6.7	2.6	279.7	K	
215図	54	SJ342	砥石	24.0	9.5	8.8	3450.0	G	
225図	37	SJ348	刃器	5.5	4.3	1.1	28.4	F	石鏃未製品？
225図	38	SJ348	石匙	3.0	4.2	0.8	12.2	O	
225図	39	SJ348	刃器	6.3	6.5	1.3	80.1	O	
225図	40	SJ348	打製石斧	4.6	7.5	2.1	94.3	O	
225図	41	SJ348	刃器	5.5	4.7	1.0	38.2	O	
225図	42	SJ348	磨石	7.9	5.9	1.1	69.3	G	工具
225図	43	SJ348	磨石	9.4	5.4	1.8	91.5	G	
225図	44	SJ348	砥石	11.8	6.3	1.2	153.8	G	
225図	45	SJ348	磨石	9.4	6.0	1.7	132.0	U	
225図	46	SJ348	磨石	13.8	6.1	4.8	709.0	G	
226図	47	SJ348	砥石	12.5	8.1	3.4	648.5	K	
226図	48	SJ348	敲石	13.0	8.2	2.3	349.1	G	
226図	49	SJ348	棒状石器	11.0	2.6	2.3	117.3	G	工具

第28表 出土石器観察表(17)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
226図	50	SJ348	台石	14.2	11.9	2.7	843.7	K	
231図	29	SJ359	磨製石鏃	1.6	1.3	0.1	1.3	B	
231図	30	SJ359	有肩扇状石器	3.2	4.3	1.4	23.4	O	
231図	31	SJ359	刃器	4.9	4.9	0.9	27.3	O	
231図	32	SJ359	打製石斧	5.0	6.4	2.1	89.4	O	
231図	33	SJ359	磨石	4.6	7.0	0.9	38.2	G	
231図	34	SJ359	磨石	8.6	5.5	1.2	49.9	G	
231図	35	SJ359	磨石	4.7	7.0	0.8	97.3	G	
231図	36	SJ359	台石	15.0	13.7	2.5	920.5	K	
236図	41	SJ369	太型蛤刃磨製石斧	8.0	22.3	4.4	1485.8	I	欠損後敲石として再利用
236図	42	SJ369	石鏃	2.6	2.2	0.7	4.9	A	未製品
236図	43	SJ369	敲石	10.7	6.2	1.1	111.1	G	
236図	44	SJ369	打製石斧	6.5	5.7	2.4	138.7	O	
236図	45	SJ369	刃器	5.8	8.7	1.6	74.2	O	
236図	46	SJ369	剥片石器	5.5	5.3	1.0	44.2	O	有肩扇状石器？
236図	47	SJ369	刃器	5.2	7.4	1.2	46.0	O	
236図	48	SJ369	刃器	5.0	7.6	1.2	63.0	O	
236図	49	SJ369	刃器	5.2	7.4	1.8	83.9	O	
236図	50	SJ369	剥片石器	4.6	5.7	0.9	32.2	O	
237図	51	SJ369	磨石	4.8	4.5	0.9	26.3	G	
237図	52	SJ369	磨石	7.0	7.3	1.5	128.5	F	
237図	53	SJ369	棒状石器	14.8	4.5	2.5	252.2	G	工具
237図	54	SJ369	敲石	11.7	7.6	7.0	856.5	K	
237図	55	SJ369	磨石	12.4	6.9	1.4	163.4	G	
237図	56	SJ369	磨石	9.7	6.9	1.2	114.1	G	
237図	57	SJ369	台石	26.1	10.8	7.5	3000.0	G	磨石
244図	20	SJ412	刃器	12.9	3.7	1.1	69.8	R	
244図	21	SJ412	棒状石器	8.2	2.2	2.2	60.7	G	
244図	22	SJ412	刃器	3.8	5.2	1.0	18.7	O	
248図	13	SJ414	有肩扇状石器	3.7	5.1	1.0	25.0	O	
248図	14	SJ414	刃器	3.0	4.0	0.8	13.3	O	
252図	26	SJ417	刃器	6.6	7.8	1.4	79.9	O	
252図	27	SJ417	刃器	4.9	4.5	1.0	27.0	O	
252図	28	SJ417	刃器	4.5	3.7	1.3	24.1	A	
253図	29	SJ417	砥石	12.3	5.8	1.8	155.0	G	
253図	30	SJ417	磨石	8.9	6.1	1.2	87.5	G	
253図	31	SJ417	磨石	8.7	6.3	1.2	95.9	G	工具
255図	9	SJ421	打製石斧	8.3	8.2	2.1	178.1	O	

第29表 出土石器観察表(18)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
255図	10	SJ421	打製石斧	7.1	5.0	1.8	96.8	O	再加工具
255図	11	SJ421	刃器	3.3	5.0	1.3	20.9	F	
255図	12	SJ421	刃器	4.0	8.1	1.1	42.4	F	
255図	13	SJ421	刃器	3.5	7.5	1.5	36.6	O	
255図	14	SJ421	磨石	8.4	5.3	1.4	88.1	G	
255図	15	SJ421	棒状石器	16.4	5.4	2.0	276.4	R	
257図	27	SJ426	打製石斧	7.2	6.3	2.3	182.5	O	
257図	28	SJ426	刃器	5.0	5.8	0.7	28.3	O	
257図	29	SJ426	磨石	6.0	5.1	1.0	48.3	G	
257図	30	SJ426	磨石	3.6	3.6	0.7	17.3	F	工具
257図	31	SJ426	磨石	6.0	8.0	1.3	92.9	G	
258図	32	SJ426	敲石	5.7	6.1	3.4	134.2	O	
258図	33	SJ426	棒状石器	6.5	1.5	1.2	19.9	G	
258図	34	SJ426	磨石	7.7	6.5	1.9	136.2	G	
258図	35	SJ426	磨石	11.9	7.9	1.2	195.7	G	工具
258図	36	SJ426	原石	9.4	7.0	4.9	400.0	B	赤色顔料用
258図	37	SJ426	磨石	9.3	8.7	9.0	824.8	C	
258図	38	SJ426	敲石	9.5	8.8	7.1	688.0	G	赤色顔料付着
258図	39	SJ426	敲石	9.1	7.5	5.2	477.3	G	
258図	40	SJ426	敲石	8.8	10.7	5.8	672.6	O	
260図	4	SJ427	刃器	4.4	6.5	1.4	47.0	O	
262図	3	SJ428	刃器	3.1	4.2	0.5	14.3	O	
265図	22	SJ430	刃器	3.7	5.7	0.4	11.1	O	
265図	23	SJ430	磨石	5.8	8.1	1.4	99.9	G	
267図	28	SJ431	打製石斧	8.0	5.4	3.4	185.7	O	
267図	29	SJ431	石核	5.7	4.3	3.2	93.4	A	搔器
267図	30	SJ431	磨石	10.0	6.2	1.3	101.2	G	
268図	31	SJ431	刃器	5.5	6.8	2.5	107.3	O	
268図	32	SJ431	磨石	7.2	9.3	6.5	536.9	K	
268図	33	SJ431	磨石	8.0	7.0	1.6	109.7	G	
268図	34	SJ431	磨石	7.5	6.9	1.2	91.9	G	
268図	35	SJ431	棒状石器	21.7	7.2	3.8	968.4	G	
268図	36	SJ432	台石	23.8	14.2	5.1	2564.6	G	
285図	320-10	SK320	扁平片刃磨製石斧	10.7	5.9	1.4	191.2	H	
285図	364-6	SK364	管玉	1.2	0.25	0.25	0.08	Q	
285図	364-7	SK364	管玉	1.3	0.2	0.2	0.07	B	欠損
285図	364-8	SK364	砥石	7.4	6.5	1.7	99.9	U	
285図	364-9	SK364	敲石	6.6	12.6	1.3	220.2	G	

第30表 出土石器観察表(19)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
285図	364-10	SK364	磨石	8.6	11.2	7.1	914.4	K	
285図	368-3	SK368	管玉	1.6	0.25	0.25	0.21	Q	欠損
285図	368-4	SK368	磨石	9.4	7.8	6.4	696.8	C	
285図	370-10	SK370	管玉	1.8	0.2	0.2	0.17	Q	
285図	370-11	SK370	有肩扇状石器	7.3	8.2	1.3	102.4	O	
286図	370-12	SK370	砥石	11.3	4.9	3.7	192.3	C	
286図	370-13	SK370	砥石	20.0	6.6	6.5	1299.4	G	
286図	371-10	SK371	刃器	6.7	5.8	1.4	78.7	O	
286図	371-11	SK371	敲石	5.0	22.5	4.9	627.5	R	
286図	373-1	SK373	砥石	10.8	8.6	4.3	685.2	G	
286図	393-1	SK393	打製石斧	15.2	11.7	2.5	536.5	O	石鍬
287図	399-10	SK393	磨石	6.9	6.3	3.1	206.3	G	
287図	440-11	SK440	刃器	4.0	4.2	1.3	32.8	O	
287図	459-1	SK459	扁平片刃磨製石斧	4.9	5.3	1.2	67.2	I	
287図	501-2	SK501	砥石	6.3	5.7	1.0	71.1	G	
287図	570-7	SK570	打製石斧	16.6	10.6	2.7	616.4	O	石鍬
287図	570-8	SK570	刃器	3.6	3.8	0.8	12.7	O	
293図	10	SK521	刃器	4.4	5.2	1.2	27.9	O	
295図	17	SK556	剥片石器	5.8	3.6	0.8	32.6	O	
321図	214	上段堰	打製石斧	15.3	10.7	1.8	392.5	R	石鍬
321図	215	上段堰	打製石斧	11.3	7.8	2.5	288.5	O	
321図	216	上段堰	打製石斧	9.3	9.2	2.3	247.1	O	石鍬
321図	217	上段堰	打製石斧	8.7	7.8	3.2	330.6	R	327図269直柄斧に装着
322図	218	上段堰	扁平片刃磨製石斧	9.7	6.9	2.6	275.7	M	未製品
322図	219	上段堰	扁平片刃磨製石斧	9.1	6.2	2.6	227.8	O	未製品
322図	220	上段堰	搔器	5.9	7.5	2.3	144.4	M	
322図	221	上段堰	石匙	6.7	6.5	1.4	86.6	O	
322図	222	上段堰	ノミ形石器	7.7	4.5	1.2	62.3	O	未製品
322図	223	上段堰	打製石斧	7.0	6.1	2.5	136.1	O	
322図	224	上段堰	打製石斧	6.8	4.0	2.0	76.0	O	未製品
322図	225	上段堰	搔器	7.2	5.1	1.3	88.5	O	
322図	226	上段堰	打製石斧	7.0	4.9	2.4	132.9	M	
322図	227	上段堰	ノミ形石器	6.0	4.8	0.9	44.7	M	未製品
322図	228	上段堰	有肩石器	5.7	6.4	1.8	80.6	M	
322図	229	上段堰	打製石斧	4.5	5.3	1.8	47.1	O	
323図	230	上段堰	有肩扇状石器	5.7	7.3	1.1	78.4	O	
323図	231	上段堰	有肩石器	8.0	8.6	1.4	117.7	O	
323図	232	上段堰	有肩石器	5.0	7.0	1.2	60.2	M	

第31表 出土石器観察表(20)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
323図	233	上段堰	有肩扇状石器	7.3	8.3	1.3	86.2	O	
323図	234	上段堰	刃器	6.8	7.2	1.7	83.1	O	
323図	235	上段堰	刃器	5.6	7.2	1.4	52.8	O	
323図	236	上段堰	刃器	5.7	7.7	1.3	74.5	M	石庖丁未製品？
323図	237	上段堰	刃器	5.1	7.9	1.7	110.6	O	
323図	238	上段堰	刃器	6.5	8.4	0.8	61.8	O	
323図	239	上段堰	刃器	5.3	7.9	1.3	45.4	O	
323図	240	上段堰	刃器	5.2	8.0	1.8	70.2	G	
323図	241	上段堰	刃器	5.7	7.7	1.3	66.7	M	
324図	242	上段堰	刃器	4.5	6.6	1.0	39.7	M	
324図	243	上段堰	刃器	3.9	5.9	1.2	35.3	O	
324図	244	上段堰	刃器	4.4	5.2	0.6	23.3	O	
324図	245	上段堰	刃器	4.6	6.9	1.1	40.1	O	
324図	246	上段堰	刃器	5.9	7.7	1.3	55.2	M	
324図	247	上段堰	棒状石器	8.1	2.5	1.4	45.0	M	
324図	248	上段堰	礫器	10.5	15.1	2.3	423.2	G	
324図	249	上段堰	棒状石器	12.8	2.6	2.0	111.7	O	
324図	250	上段堰	敲石	9.4	4.2	1.9	97.9	U	
324図	251	上段堰	磨石	4.5	4.6	0.9	28.1	G	
324図	252	上段堰	磨石	4.7	3.9	0.8	22.1	G	
324図	253	上段堰	磨石	6.0	5.8	1.4	63.8	G	
324図	254	上段堰	砥石	9.0	10.5	2.3	334.5	G	石庖丁未製品？
324図	255	上段堰	敲石	6.3	7.4	1.4	119.1	M	
324図	256	上段堰	磨石	9.3	5.0	1.7	111.5	O	
325図	257	上段堰	石核	13.6	12.0	6.0	1133.9	M	
325図	258	上段堰	敲石	7.9	8.5	6.8	568.7	M	
325図	259	上段堰	礫器	13.0	8.4	3.9	416.0	O	
325図	260	上段堰	敲石	8.7	7.1	3.8	317.6	G	赤色顔料付着
325図	261	上段堰	敲石	6.1	8.0	4.6	242.4	G	
325図	262	上段堰	磨石	7.7	8.7	5.7	500.1	C	
325図	263	上段堰	磨石	8.5	10.0	7.2	678.1	G	
325図	264	上段堰	砥石	7.5	9.4	2.2	308.9	N	
326図	265	上段堰	砥石	30.3	9.7	12.5	4010.0	G	
326図	266	上段堰	石核	9.3	8.1	5.1	469.3	O	
326図	267	上段堰	石核	9.6	9.5	4.5	602.8	O	
326図	268	上段堰	石核	5.3	5.8	3.6	133.0	O	
365図	12	水路	有肩石器	6.1	5.8	1.5	63.0	O	
367図	1	SD377	砥石	14.0	28.0	14.0	3050.0	M	太型蛤刃磨製石斧用

第32表 出土土器観察表(21)

図版番号		出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備 考
367図	2	SD377	太型蛤刃磨製石斧	13.8	7.3	5.1	617.4	I	
372図	22	窪地	敲石	4.8	5.7	3.2	132.3	O	
372図	23	窪地	刃器	6.2	6.5	0.8	65.0	O	
380図	188	グリッド	管玉	1.3	0.5	0.5	0.71	Q	欠損
380図	189	グリッド	太型蛤刃磨製石斧	8.6	6.7	4.0	406.7	I	
380図	190	グリッド	太型蛤刃磨製石斧	15.1	6.2	4.4	757.2	I	
380図	191	グリッド	扁平片刃磨製石斧	10.0	4.7	1.3	129.3	O	未製品
380図	192	グリッド	打製石斧	8.5	5.7	2.4	183.4	O	
380図	193	グリッド	打製石斧	18.5	10.7	3.0	611.7	G	石鍬
380図	194	グリッド	打製石斧	12.5	10.9	3.0	421.4	O	石鍬
380図	195	グリッド	打製石斧	9.2	6.9	1.6	145.2	O	基部
381図	196	グリッド	打製石斧	14.4	10.8	2.5	459.9	O	石鍬
381図	197	グリッド	打製石斧	11.0	4.5	1.8	171.9	O	
381図	198	グリッド	打製石斧	10.6	8.5	1.3	175.8	R	
381図	199	グリッド	打製石斧	10.7	9.0	3.4	383.8	O	石鍬基部
381図	200	グリッド	打製石斧	8.0	6.0	1.4	80.0	N	
381図	201	グリッド	打製石斧	8.3	8.2	3.5	296.3	O	
381図	202	グリッド	敲石	12.8	6.1	2.7	377.2	F	
382図	203	グリッド	打製石斧	8.3	4.8	2.6	135.7	O	
382図	204	グリッド	搔器	6.5	5.2	2.5	106.4	O	
382図	205	グリッド	刃器	4.1	8.8	0.7	43.5	F	横刃型石器
382図	206	グリッド	砥石	7.0	8.0	1.9	197.1	C	
382図	207	グリッド	凹石	10.5	9.7	5.0	512.9	L	
382図	208	グリッド	凹石	13.8	17.0	6.5	878.5	L	

V 調査のまとめ

北島遺跡出土土器の製作技法と分類について

1. 土器の製作

北島遺跡から出土した弥生時代中期の土器については、小型土器を含めてほとんどが、粘土帶積上法を用いて製作されている。僅かに、鉢の一部に手捏と考えられる製作技法がみられる。

器面の調整に認められる要素は、ナデ、ミガキ、ハケ、ケズリ、オサエ、などがある。ナデは、篋状の工具等を用いる他に、細かい線条痕が横位直線状に認められる場合がある。この線条痕については、布を器面に当ててまわしている可能性がある。ミガキは、各種の棒状工具及び扁平または、棒状の礫の側縁部や先端部を用いていると考えられる。器面に平滑且つ光沢を与える効果を生じさせているが、全面赤彩の土器の殆どにこのミガキが施されている。ハケは、細かい櫛歯状の工具または木の木口面を器面に当て押し引くことにより、器面を滑らかにする作用を生じさせている。本遺跡では、在地系の土器には用いず、中部高地系の土器及び南関東系の土器の多くに用いられている。特に、焼成良好で硬質な土器（搬入品の可能性がある）に多く、文様が、異系統のものでも、在地の胎土を用いた土器には、ハケ調整が施されない場合が多い。また、器面の内面にハケ調整を施す土器が認められる。ケズリは、器面の厚さを調整する目的でヘラ状の工具を用いて胎土を削り取るもので、多くの痕跡が、壺及び甕の胴下半部から底部にかけての無文部に認められる。第336号住居跡187図3の壺は器面が非常に薄手であるが、文様施文部分のみ器厚が厚い。これは、文様を施文した後に施文部分以外の器面をケズリ込んだものと考えられる。オサエは、器面内面の輪積接合部分に良く認められる。また頸部及び底部接合部分についても指頭及び工具を用いたオサエが認められる。

底部については、木葉・網代・布目・種子などの

圧痕が付くものと、ナデ・ミガキ・ケズリ等が行なわれるもの、調整の痕跡が認められないものがある。

報告書掲載土器の底部総数262例中、ナデ等の調整により圧痕のないものが183例、木葉痕が65例、布目圧痕13例、網代痕1例であった。無文のものが全体の70%を占め、続いて木葉痕が25%を占めている。布目圧痕及び網代痕は、極めて少なく前時期の土器底部に比べて無文化の傾向が強まっている状況が窺える。

2. 形態分類

本遺跡から出土した土器は、壺、無頸壺、筒形土器、甕、鉢、高坏、蓋、杓子形土製品がある。各器種については、さまざまな器形があるので分類を行なった。但し、本遺跡の遺物出土状況の特徴として壺の口縁部と胴部が分離して出土しているものが大半を占める状況にある。したがって、少数の完形土器から全体の形状を復元することは困難な状況であるので、壺については口縁部と胴部を分離して形態分類を行なった。

各器種の組成比率については、報告書掲載土器の全てを対象として行なった。したがって、非掲載遺物との合算比率は含まれていないことから、あくまでも概数として理解していただきたい。壺は、54.1%、甕は、40.8%、無頸壺は、0.9%、筒形土器は、1.1%、鉢は、0.6%、高坏は、2.3%、蓋は、0.2%で、壺・甕以外の器種の合計比率は、5.1%となる。この中で問題となるのは壺と甕の構成比率が他遺跡と比べて逆転していることであるが、これは掲載土器の甕が単純文様を施文する場合が多く、採択にあたって恣意的操作が影響したものと考えられる。したがって口縁部破片による比率では、壺が36.2%、甕が63.8%となる。

以上の数値からおおまかな傾向として、壺と甕の

比率は近接するもののやや甕が多く無頸壺以下の器種は、全体の1割に満たない状況が窺える。

壺口縁部

A類 単口縁

- 1 直線的に開く形態を呈する。
 - a 口端部が丸みを持つ形態を呈する。
 - b 口端部が外削ぎ状を呈する。
 - c 口端部が直線状を呈する。
- 2 緩やかに内彎する形態を呈する。
- 3 朝顔形に外反する形態を呈する。
- 4 朝顔形に外反し、くの字状に内彎する形態を呈する。
- 5 くの字状に強く外反し広口の形態を呈する。

B類 複合口縁

- 1 直線的に開く形態を呈する。
- 2 緩やかに内彎する形態を呈する。
- 3 広口の形態を呈する。

C類 受口口縁

D類 袋状口縁

壺頸部

- A類 細頸の形態を呈する。
- B類 太頸の形態を呈する。
- C類 長頸の形態を呈する。
- D類 短頸の形態を呈する。
- E類 頸部と胴部の境界に段を設ける形態を呈する。

壺胴部

- A類 長胴形を呈する。
- B類 球胴形を呈する。
- C類 卵形を呈する。
- D類 下膨れ状を呈する。
- E類 肩の張る形態を呈する。
- F類 双口の器形を呈する。

無頸壺

- A類 単口縁の形態を呈する。
- B類 複合口縁の形態を呈する。
- C類 口縁部が緩やかに外反する形態を呈する。

筒形土器

- A類 単口縁の形態を呈する。
- B類 複合口縁の形態を呈する。

甕口縁部

- A類 単口縁の形態を呈する。
- B類 複合口縁の形態を呈する。
- C類 段状の形態を呈する。
- D類 受口状を呈する。
- E類 外反する形態。
- F類 直線的に立ち上がる形態。
- G類 くの字状に屈曲外反する形態。

胴部

- A類 口縁部径が最大の形態を呈する。
- B類 胴部径が最大の形態を呈する。
- C類 長胴形の形態を呈する。
- D類 球胴形の形態を呈する。
- E類 肩が張る形態を呈する。
- F類 寸胴の形態を呈する。
- G類 底部に向かって直線的に窄まる形態を呈する。
- H類 台が付く形態を呈する。

鉢

- A類 碗状の形態を呈する
- B類 緩やかに内彎する形態を呈する。
- C類 片口口縁を呈する。
- D類 粗製を呈する。

高坏

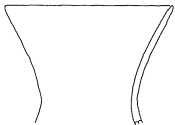

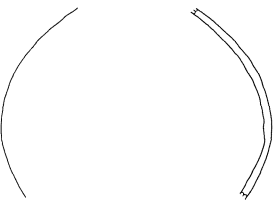

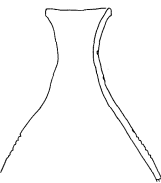
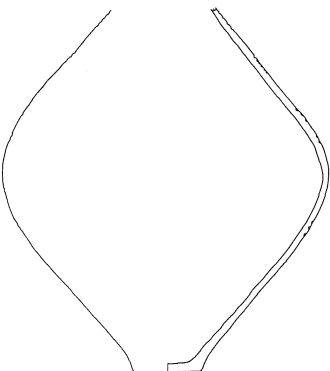
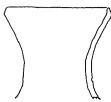

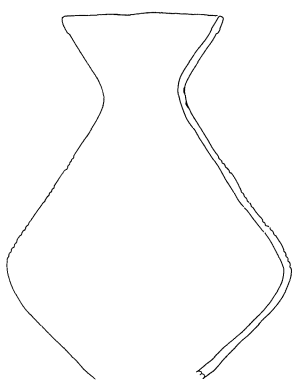
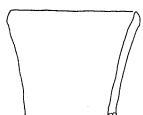
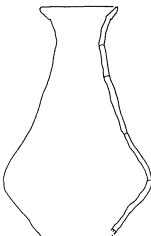
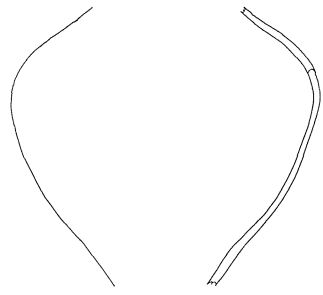
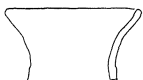



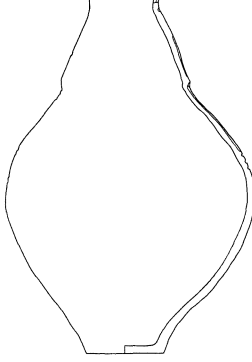
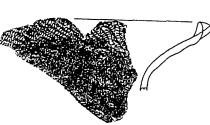
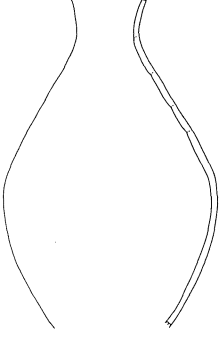


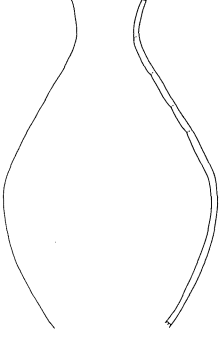

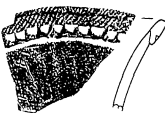
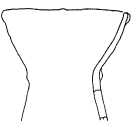
- A類 碗状の形態を呈する。
- B類 緩やかに内彎する形態を呈する。
- C類 口縁部がくの字状に外反する形態を呈する。
- D類 口縁内面に突帯を廻らせる形態を呈する。
- E類 長脚を呈する。
- F類 短脚を呈する。

蓋


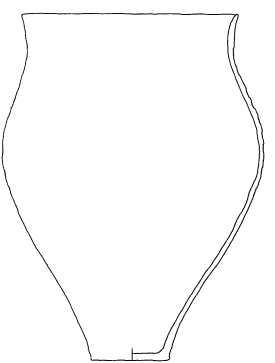
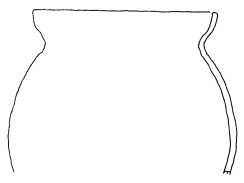



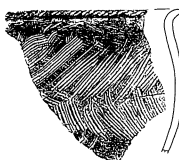
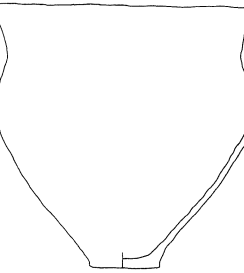

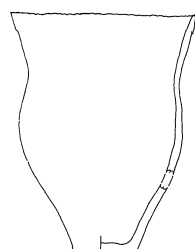
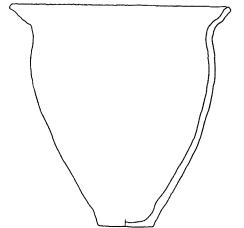
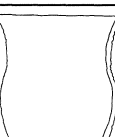
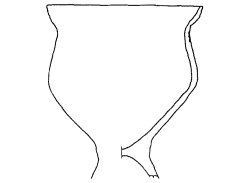
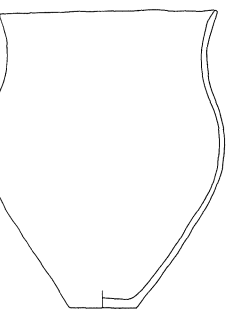
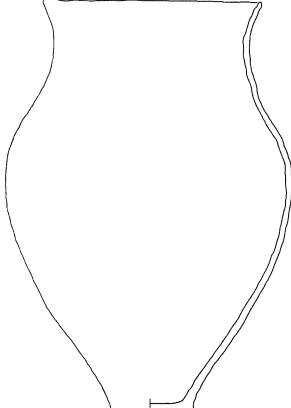

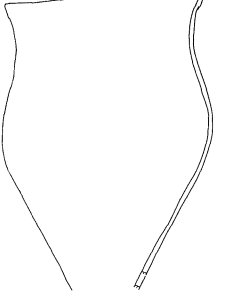



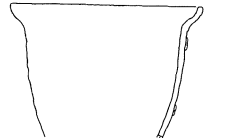

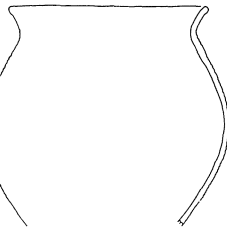
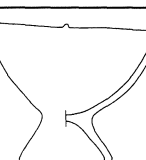
- A類 瘤状の摘みを付す形態。
- B類 環状の摘みを付す形態。

杓子形土製品

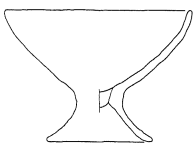
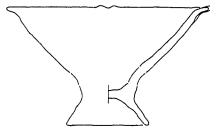


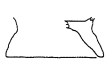
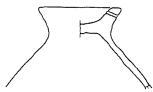

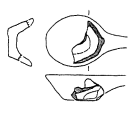
碗状の皿部に柄を設けて赤彩する。

壺口縁部	A類	1		壺頸部	D類		壺胴部	B類	
		a			A類			C類	
		b			B類			D類	
		c			C類			E類	
		2			D類			F類	
		3			E類				
		4			A類				
		5							
	B類	1		壺胴部	A類				
		2							
		3							
	C類								

出土土器形態分類図1

無頸壺	A類		甕口緣部	F類		甕胴部	D類		
	B類				E類				
	C類			G類			F類		
筒形土器	A類		甕胴部	A類		G類			
	B類				H類				
甕口緣部	A類			B類	C類		鉢	A類	
	B類							B類	
	C類							C類	
	D類							D類	
E類		高坏	A類						

出土土器形態分類図2

高 坏	B 類	
	C 類	
	D 類	
	E 類	
	F 類	
蓋	A 類	
	B 類	
杓 子 形 製 品		

出土土器形態分類図3

壺口縁部は、A1類の形態が比較的多く認められるが、前時期の壺口縁部に比べてB1類のように複合口縁化する傾向が認められる。A3・A4類は、在地の系統にあるものではなく、中部高地系の壺口縁部に求められると考えられる。A5類及び頸部D類も異系統として把握すべきで出土点数も僅かである。B3類は、口縁部文様と併せて、北関東系の可能性がある。口縁部C類で頸部C類の長頸の例は、文様と併せて、南東北もしくは、東関東系の特徴的な形態であると考えられる。口縁部D類は出土例が僅かに認められる程度である。また頸部E類は、在地の壺に普遍的に認められる、特徴的な要素である。胴部は、C類が最も多く認められる。B類は、まれ

な形態である。D類は在地の壺の系統ではなく、中部高地系または、南関東系の壺に系譜が求められる。また、第301号住居跡第114図1の壺のように胴部が張り出す器形は、在地的なC類の器形の中にD類の要素が取り込まれたものと考えられる。E類は、特異な形態で出土例も僅かに認められるだけである。時代の古い器形が残存したものであろうか。F類は、本遺跡で2例認められるのみである。栃木県大塚古墳群内遺跡SK-24出土土器は、片口が閉じているが類似した器形を呈す。また、新潟県平田遺跡SD8出土土器に双口を呈す例がある。

無頸壺A類は中部高地系のもので搬入品の可能性がある。C類は鉢との中間形態を呈すると考えられる。

筒形土器は、第336号住居跡第187図5のように器形は、甕の器形に同化しつつある状況が窺える。甕は、口縁部A類が多く認められるが、前時期に比べてB類の比率が飛躍的に多くなる傾向にある。尚、第336号住居跡第187図7の甕のように口端部が尖る形状を示すものは、やや新しい様相として捕らえることができる。口縁部C類は、胴部H類の台付甕に多く認められる。D類もC類の類型として捉えることができるが、第326号住居跡第169図23・24の甕口縁部のように別の系統の例も考慮しておく必要がある。E類は各種の甕に多く認められる形態である。F類は、古い器形が残ったものであろうか。出土例は僅かである。G類は条痕文系の甕及び上段堰出土第319図179の甕口縁部のように無文地の甕にも認められる。胴部形態では、縄文地文施文の口縁部A類に属する甕の多くが、胴部B類になる状況が窺える。したがって、縄文地文施文の胴部A類は、口縁部B類に多く認められる。C類は口縁部F類と同様に、古い器形が残ったものとして考えたい。D類は、H類などの台付甕や文様要素として斜格子文を施文した甕に多く認められる形態である。E類は、出土例は僅かであるが、群馬県清里・庚申塚遺跡第13号住居跡-16の甕などに類型が求められる可能

性がある。F類は南関東系の甕に系譜を求められる形態である。G類は第209号住居跡第39図1のように中部高地系の要素をもつ例と、上段堰出土第319図179及び320図197のように別系統の要素をもつ例が認められる。H類は、文様要素としてコの字重ね文や、櫛描波状文を施文する中部高地系の甕に認められる形態であるが、第340号住居跡第205図9のように筒形に採用される文様を施文した例や、第431号住居跡第267図4のように縦羽状文を施文した例などが認められる。

鉢B類は中部高地系の形態をとるもので搬入品の可能性がある。C類は第310号住居跡第143図1の例しかなく、特異な形態である。D類は、第413号住居跡第246図4の鉢を含めて、南関東系の鉢に系譜を求めることが可能である。

高坏は、基本的に中部高地系の系譜を引くもので、搬入品の可能性も考えられる。D類はさらに西側の地域に系譜を求めることができそうである。F類は在地化した高坏の脚部であろうか。

蓋は、A類は甕の蓋として用いられる器形である。またB類は、無頸壺の蓋として用いられる器形であり、中部高地系と考えられる。但し、蓋自体の総点数は僅かに4例のみである。

杓子形土製品は、長野県佐久市根々井芝宮遺跡などに類例があり、搬入品の可能性がある。

3. 文様

本遺跡出土土器に描かれた文様要素は、縄文または擬縄文による施文、篋描沈線、単位工具による沈線、櫛描文、刺突文、浮文、突帯、刻み目、赤彩などがある。

縄文による施文は、原体を回転押捺させて施文する方法を用いて横位、縦位、斜位方向に施文している。区画内に縄文を施文する場合は磨消施文技法は用いられず、充填施文技法により施文されている。

縄文原体は、無節、無節多条、単節、複節、附加条一種、附加条二種、直前段多条または前々段多条、直前段反撚、撚糸、S字状回転結節などが用いられ

ている。最も頻度の高いものは、単節でLR、RL双方とも同程度認められる。比較的多く用いられる原体は無節及び多条系である。これらの原体で全体の9割ほどを占めている。複節は第165号住居跡第19図6の壺、グリット出土第374図12の壺等に施文されているが、非常に撚りの細かい原体の条が現れている可能性も考えられる。附加条は、一種が、第301号住居跡第114図1、上段堰出土第313図25、二種が第214号住居跡第51図3に施文されている限りである。但し第336号住居跡第187図6のように撚りの太さの異なる原体を用いて、附加条的な施効果を生じさせる例も認められる。

直前段多条と前々段多条の判別は難しく、あいまいな分類によったもので、本来は多条系と表記すべきものかもしれない。直前段反撚は、第359号住居跡第230図4の甕、上段堰第315図40など甕に施文される例が多く認められる。撚糸は、第326号住居跡第169図28の甕、グリッド出土第378図142の甕に施文されているのみである。尚、第326号住居跡出土遺物の多くに異系統の土器が多く含まれていることは注意を要する。S字状の回転結節文は、第264号住居跡第86図19の広口の壺、第268号住居跡第93図3の壺、第341号住居跡第210図7の壺、グリッド出土第373図8の壺の4例にのみ認められる。

擬縄文は、第264号住居跡第87図30の壺胴部に施文された1例を除いて他は、全て甕に施文されている。第301号住居跡第114図2の甕及び、第320号住居跡第157図1の甕のように植物の茎（カナムグラ）を回転施文したものと、第264号住居跡第86図2の甕、第305号住居跡第128図4の甕のように植物の穂状花序（オオバコ）を回転施文したものとの2種類が認められる。

篋描沈線文は、1本描沈線による施文例が最も多く、棒状の工具の先端部を用いて施文しているものと考えられる。また、同じく施文される刺突及び列点文に工具の状況が判断できる例がある。沈線の太

さについては、第348号住居跡第221図1の壺のように太めでしっかりと施文する例、グリッド出土第373図3の壺頸部のように太く押しなでるよう施文する例、第269号住居跡第96図1の壺のように細い沈線で浅く施文する例、上段堰出土第314図28の壺のように断面が鋭く深くなる施文例などが認められる。また、2本の棒状工具をまとめて施文した、第318号住居跡第154図1の壺などの例は比較的多く認められる。第331号住居跡第179図4の広口壺は、9本の棒状工具をまとめて施文したものと考えられる。第326号住居跡第169図25及び、第359号住居跡第230図21は、2本一組の沈線であるが、沈線間の断面が蒲鉾状を呈することから半截竹管状工具を用いて施文したと考えられる。

櫛描文は、壺及び甕に施文されているが、比率はそれほど多くはない。但し、甕などに用いられている櫛歯状の工具による施文例を含めればやや甕の施文例が増加すると考えられる。また、壺などに施文する場合でも、地文縄文の上に施文する例が多く認められる。櫛歯の本数は第323号住居跡第160図11の3本、第336号住居跡第187図1の4本、同住居跡第188図9の5本などが認められる。また、第512号土壙第284図512-3のように線の細いものと、上段堰出土第313図27のように線の太いものが認められる。線の細いものについては、焼成良好で硬質な土器乃至は、ハケ調整を施したものに多く認められる。櫛歯状工具に付いては、第348号住居跡第222図5、第359号住居跡第230図3などの従来甕の横位羽状条痕文や縦位羽状条痕文に用いられている。また、第555号土壙第294図3の甕のように同一工具で波状文を施文する例や簾状文を施文する例が認められる。第521号土壙第293図7の壺は、木口状工具によると考えられる直線文を施文している。また、第320号住居跡第157図1の甕口縁部にも、木口状工具が用いられている可能性がある。

刺突文は、棒状または篋状の工具の先端を押し当

てて施文するもので、第331号住居跡第179図5の甕のように器面に面的に施文する例、第348号住居跡第224図18の壺のように区画文内を充填する例、第348号住居跡第221図3の壺のように列条になる例が認められる。施文部位は、口縁部から胴部まで広範囲にわたるが、甕は頸部に、壺は頸部と胴部の境界に多く施文する例が認められる。また、列点文については、第30号土壙第280図30-2のようにやや間隔をあけた押引き状の施文例や、第326号住居跡第168図3の甕及び、上段堰出土第313図21の壺のように、沈線状の押引き施文となる例も認められる。刺突の施文具については、先端部の丸い棒状工具、角棒状の工具、半截竹管状の工具などの他に、第348号住居跡第224図18の壺のように内部が中空の茎状ものを用いた例、グリッド出土第378図127の甕のように先端部が二股状を呈する例、第370号土壙第279図370-1の壺のように櫛歯状工具を擬似簾状文風に施文する例、などが認められる。

浮文は、棒状浮文及び円形浮文がある。円形浮文は、第336号住居跡第187図2の壺、窪地出土第372図7の壺、第30号土壙第280図30-2の壺のように単孔で壺の頸部・胴部に貼付される例や、第234号住居跡第72図9の台付甕、上段堰出土第315図42の甕のように単孔または、複数孔で口縁部及び、胴部に貼付する例が認められる。棒状浮文は、第195号住居跡第27図3の壺、第421号住居跡第255図1の壺のように壺の口縁部・頸部に貼付する例が認められる。この他に高坏や鉢の口縁部に突起を設ける例が認められる。また、第301号住居跡第114図1の壺、第306号住居跡第134図3の壺、窪地出土第371図9、グリッド出土第375図48の壺のように頸部及び胴部に突起または、隆帯を設ける例がある。

突帯は、第259号住居跡第82図48の高坏のように高坏の坏部と脚部の境界に設ける例と、第217号住居跡第61図2の壺及び第316号住居跡第147図

2のように壺の頸部に設ける例がある。

刻み目は、甕の口端部に施文される。工具により直線方向及び斜位に施文される。これとは別に、第399号土壙第283図399-6の甕口端部のように工具による押捺や、第336号住居跡第187図6の甕口端部のように指頭による交互押捺の例が認められる。

赤彩は、壺・無頸壺・鉢・高坏に認められる。無頸壺は、外面全面に彩色される。鉢及び高坏は、内外面全面に彩色される。壺は、第305号住居跡第128図2の壺のように無文地に全面赤彩する例、第359号住居跡第229図2の壺のように、縄文施文部分のみ彩色する例、第317号住居跡第150図1の壺のように区画文内の縄文に彩色する例、第325号住居跡第165図1の壺のように本来沈線文で描く部分を彩色のみで表現する例が認められる。

4. 文様分類

文様の構成については各器種の各部位に多種の文様が施文されている。したがって形態分類と同様に壺については、口縁部・頸部・胴部及び一定の組み合わせを持つものとして分類した。また、甕においても、口縁部及び頸部に多種の文様が施文されるため、口縁部・頸部・胴部に分離して分類した。高坏は、脚部と坏部分かれて出土し、接合が困難な状況から、特徴のあるものについては坏部と脚部に分離して分類した。また、各文様の出土頻度をグラフで示した。同一個体と考えられる個体は極力排除したが、口縁部と胴部分離して出土する例が多いため、部位によっては、重複して合算した状況も否めない。あくまでも傾向を掴むための概数として理解していただきたい。また、組み合わせによる分類比率は、組み合わせを構成する個体の総数の中での比率を示す。

壺口縁部

- A類 山形文を施文する。
- B類 列点文を施文する。
- C類 縄文を施文する。

- 1 口端部から口縁部まで施文する。
- 2 口縁部に施文する。
- 3 口端部にのみ施文する。

- D類 刻み目を施文する。
- E類 鋸歯文を施文する。
- F類 連弧文を施文する。
- G類 擬縄文を施文する。
- H類 波状文を施文する。
- I類 垂下文を施文する。
- J類 突起を付す。
- K類 赤彩する。
- L類 無文とする。

壺頸部

- A類 無文とする。
- B類 帯縄文を施文する。
- C類 沈線で区画した帯縄文を施文する。
 - 1 平行線文と平行線文の組み合わせ。
 - 2 平行線文と波状文の組み合わせ。
 - 3 波状文と波状文の組み合わせ。
- D類 削り出し突帯で区画した帯縄文を施文する。
- E類 列点文で区画した帯縄文を施文する。
 - 1 列点文と波状文の組み合わせ。
- F類 篋描山形文を施文する。
- G類 篋描波状文を施文する。
- H類 篋描平行線文を施文する。
- I類 篋描鋸歯文を施文する。
- J類 篋描三角文を施文する。
- K類 篋描重四角文を施文する。
- L類 単沈線文を施文する。
- M類 縦羽状文を施文する。
- N類 櫛描波状文を施文する。
- O類 櫛描直線文を施文する。
- P類 櫛描擬似簾状文を施文する。
- Q類 端部が開く鋸歯文を施文する。
- R類 平行沈線文で区画し、波状文を充填する。
- S類 列点文を施文する。

T類 舌状文を施文する。

U類 刻み目突帯を設ける。

V類 縄文施文突帯を設ける。

W類 突帯を設ける。

X類 突起を付す。

壺胴部

A類 匚描平行線文を施文する。

1 多条に施文する。

2 多段に施文する。

B類 匚描波状文を施文する。

1 多条に施文する。

2 多段に施文する。

C類 山形文風の波状文を施文する。

1 多条に施文する。

2 多段に施文する。

D類 連弧文を施文する。

1 平行沈線と連弧文の組み合わせ。

E類 重四角文を施文する。

1 区画内に斜格子文を充填する。

2 区画内に波状文を充填する。

3 区画内に平行線文を充填する。

4 区画内に垂下文を充填する。

5 区画内に列点文を充填する。

F類 フラスコ形文を施文する。

G類 三角文を施文する。

1 重三角構成を呈する。

2 複合鋸歯状構成を呈する。

H類 鋸歯文を施文する。

I類 列点文を施文する。

1 列点文と縄文の組み合わせ。

J類 櫛描波状文を施文する。

K類 櫛描直線文を施文する。

L類 垂下文を施文する。

1 区画内を縄文で充填する。

2 区画内を垂下沈線で充填する。

M類 短冊文を施文する。

1 縁取りを匚描沈線で施文する。

2 縁取りを列点文で施文する。

a 区画内を縄文で充填する。

b 区画内を匚描沈線で充填する。

c 区画内を櫛描波状文で充填する。

N類 鳥足形文を施文する。

O類 渦卷文を施文する。

P類 同心円文を施文する。

Q類 菱形文を施文する。

R類 擬似流水文を施文する。

S類 結紐文を施文する。

T類 舌状文を施文する。

U類 楕円文を施文する。

V類 斜格子文を施文する。

W類 S字状結節文を施文する。

X類 縄文のみ施文する。

Y類 擬縄文を施文する。

Z類 帯縄文を施文する。

α 類 平行沈線文で区画して波状文を充填する。

β 類 無文とする。

1 ハケ調整を施す。

2 ミガキをかける。

γ 類 赤彩する。

1 全面赤彩する。

2 縄文施文部分を赤彩する。

κ 類 貼付文を付す。

胴部組み合わせ文様

A類 平行線文と波状文の組み合わせ。

I類 平行線文と連弧文の組み合わせ。

U類 重四角文と三角文の組み合わせ。

E類 重四角文とフラスコ形文と三角文の組み合わせ。

O類 重四角文とフラスコ形文の組み合わせ。

K類 重四角文と連弧文の組み合わせ。

キ類 フラスコ形文と連弧文の組み合わせ。

ク類 フラスコ文と鋸歯文と連弧文の組み合わせ。

ケ類 垂下文と平行線文または波状文の組み合わせ。

せ。

無頸壺

- A類 口縁部または胴部に縄文を施文する。
- B類 篋描波状文を施文する。
- C類 無文地で赤彩する。
- D類 交互刺突文を施文する。

- 1 穿孔を設ける。

筒形土器

- A類 重四角文を施文する。
- B類 重四角文間に連結部を設ける。
- C類 重四角文下に波状沈線文を施文する。
- D類 重四角文内に文様を充填する。

甕口縁部

- A類 口端部に縄文を施文する。
- B類 口端部に擬縄文を施文する。
- C類 口端部に刻み目を施文する。
- D類 口端部に工具による押捺を施す。
- E類 口端部に指頭による交互押捺を施す。
- F類 口縁部に縄文を施文する。
- G類 口縁部に擬縄文を施文する。
- H類 口縁部を無文とする。
- I類 口縁部に列点文を施文する。
- J類 口縁部に波状文を施文する。
- K類 口縁部に山形文を施文する。
- L類 口縁部に貼付文を付する。
- M類 口縁部に棒状突起を付する。
- N類 口縁内面に縄文を施文する。
- O類 篋描垂下文を施文する。

甕頸部

- A類 列点文を施文する。
- B類 無文とする。
- C類 櫛描または櫛歯状工具による擬似簾状文を施文する。
- D類 櫛描または櫛歯状工具による波状文を施文する。
- E類 櫛描または櫛歯状工具による直線文を施文する。

- F類 篋描平行線文で区画して無文とする。

- G類 帯縄文を施文する。

- H類 縄文を施文する。

- I類 篋描平行線文を施文する。

- J類 篋描弧線文を施文する。

甕胴部

- A類 縄文のみ施文する。

- B類 擬縄文を施文する。

- C類 撚糸文を施文する。

- D類 櫛描垂下文間に波状文を充填する。

- E類 櫛描垂下文間に直線文を充填する。

- F類 櫛描縦位波状文間に直線文を充填する。

- G類 櫛描縦位波状文間に波状文を充填する。

- H類 櫛描波状文を施文する。

- I類 篋描波状文を施文する。

- J類 縦位波状文を施文する。

- K類 櫛描直線文を施文する。

- L類 横羽状文を施文する。

- M類 縦羽状文を施文する。

- N類 斜格子文を施文する。

- O類 格子文を施文する。

- P類 交差文を施文する。

- Q類 斜行文を施文する。

- R類 垂下文を施文する。

- S類 弧線文を施文する。

- T類 コの字重ね文を施文する。

- U類 ボタン状貼付文を付する。

- V類 無文とするもの。

- 1 ハケ調整を施す。

- 2 ミガキをかける。

鉢

- A類 口縁部に瘤状の突起を設ける。





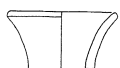




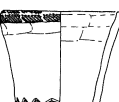


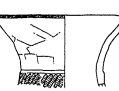






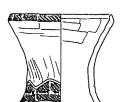
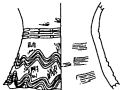
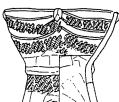






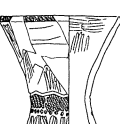










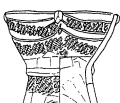

- B類 外面に縄文を施文する。

- C類 内外面赤彩する。

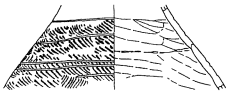
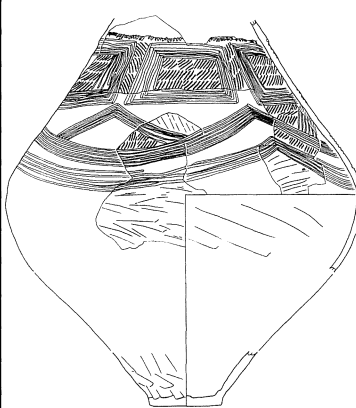

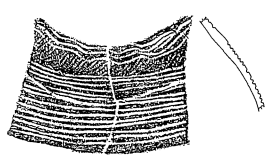
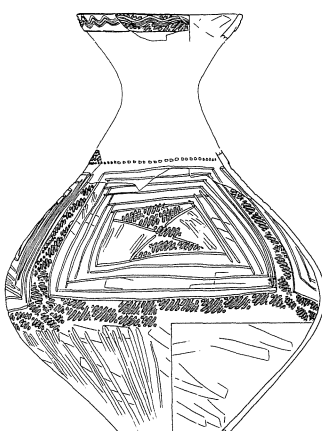
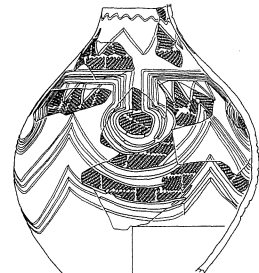
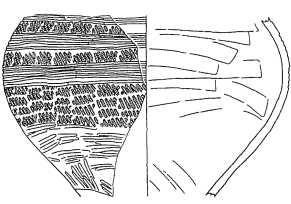
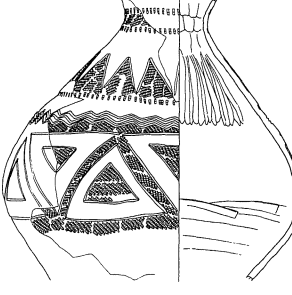







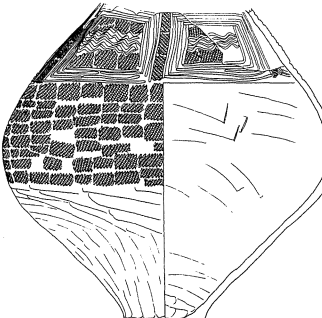

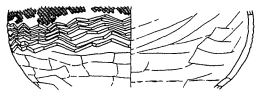
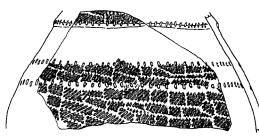
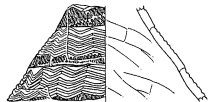

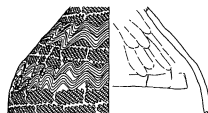
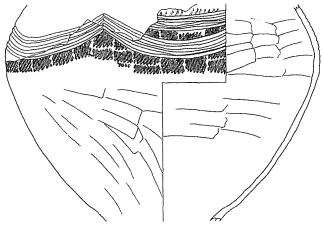

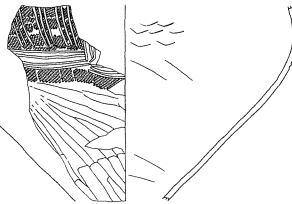
高坏

- A類 坏部と脚部の境界に突帯を廻らせる。

- B類 脚部に縄文を施文する。

壺口縁部	A		壺頸部	K		壺頸部	J	
	B			L			K	
	C1			A			L	
	C2			B			M	
	C3			C1			N	
	D			C2			O	
	E			C3			P	
	F			D			Q	
	G			E			R	
	H			E1			S	
	I			F			T	
	J			G			U	
				H			V	
				I			W	
							X	

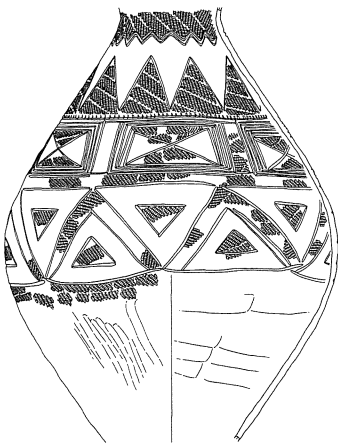
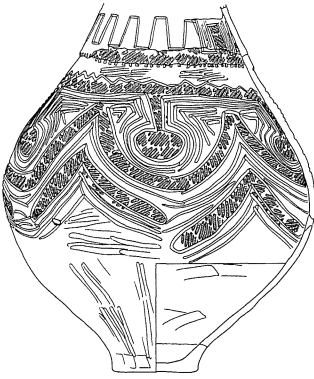
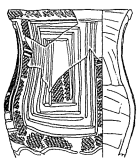
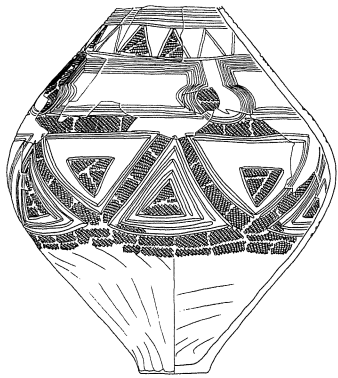
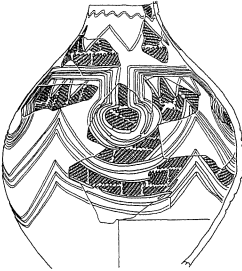
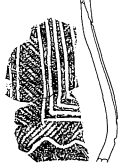
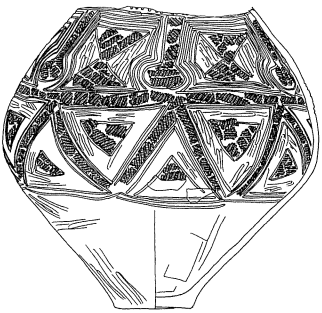

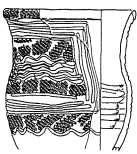
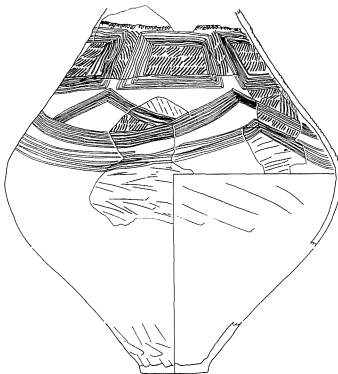

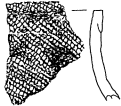

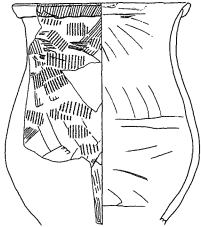





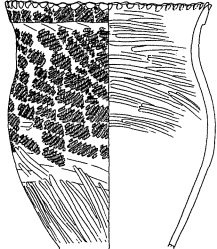

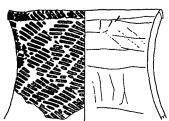
出土土器文様分類図1

壺 胴 部	A		壺 胴 部	E		壺 胴 部	E5		
	A1			E1			F		
	A2						G		
	B						G1		
	B1						G2		
	B2						H		
	C			E2			I		
	C1						I1		
	C2			E3			J		
	D						K		
	D1			E4					

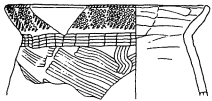
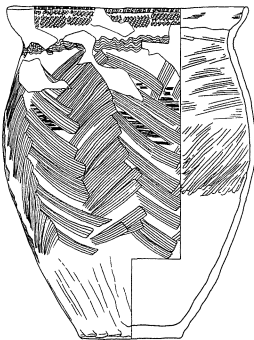
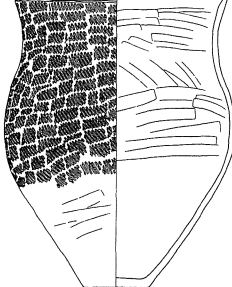

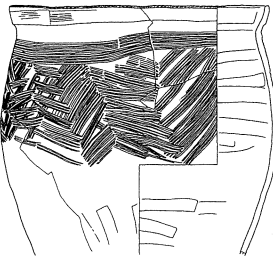
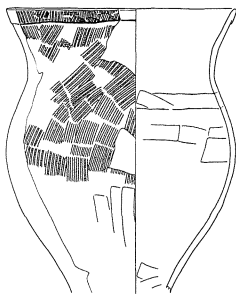

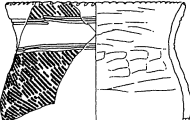

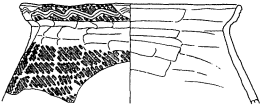
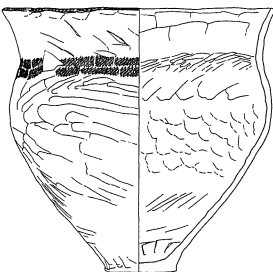
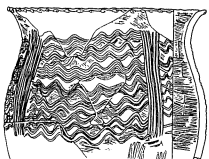

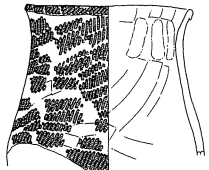
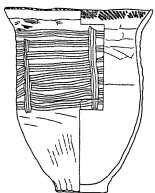


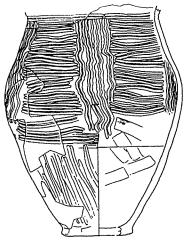




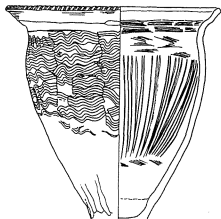


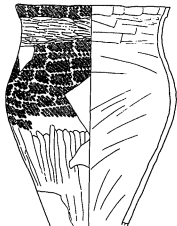
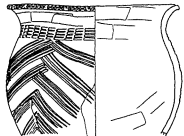
出土土器文様分類図2

壺 胴 部	L		壺 胴 部	Q		壺 胴 部	β		
	L1			R			$\beta 1$		
	L2			S			$\beta 2$		
	M			T			$\gamma 1$		
	M1			U			$\gamma 2$		
	M2			V			κ		
	Ma			W			胴 部 組 み 合 わ せ 文 様	ア	
	Mb			X					イ
	Mc			Y					
		N			Z				
	O								
	P								



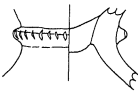


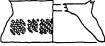

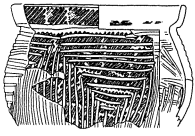
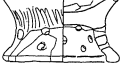
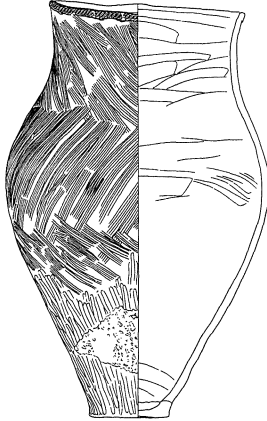
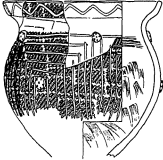

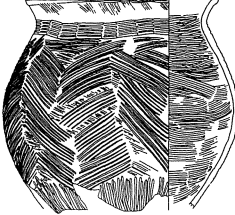

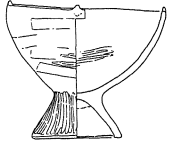
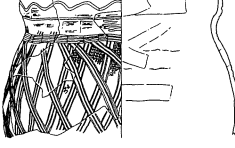

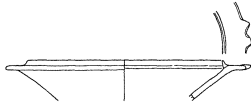
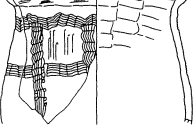
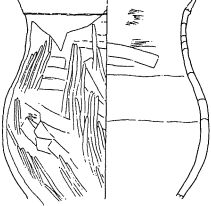
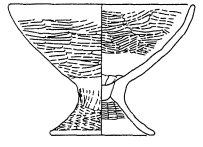




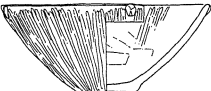
出土土器文様分類図3

胴部組み合わせ文様	ウ		胴部組み合わせ文様	キ		筒形土器	B	
	エ			ク			C	
	オ			ケ			D	
	カ		無頸壺	A		甕口縁部	A	
				B			B	
				C			C	
				D			D	
				1			E	
			筒形土器	A			F	

出土土器文様分類図4

甕口縁部	G		甕頸部	D		甕胴部	A	
	H			E			B	
	I			F			C	
	J			G			D	
	K			H			E	
	L			I			F	
	M			J			G	
	N						H	
	O							
甕頸部	A		甕胴部			甕底部		
	B							
	C							

出土土器文様分類図5

甕 胴 部	I		甕 胴 部	R		高 坏	A	
	J			S			B	
	K			T			C	
	L			U			D	
	M			V			E	
	N			V1			F	
	O			V2			G	
	P			鉢	A	蓋	A	
	Q				B		B	
				C				

出土土器文様分類図6

- C類 脚部に透しを設ける。
- D類 口縁内面に文様を施文する。
- E類 口縁部に瘤状の突起を設ける。
- F類 口縁部に山形の突起を設ける。
- G類 内外面赤彩する。

蓋

- A類 無文とする。
- B類 外面に文様を施文する。

各器種全体の文様要素は、在地の系列化にあるものを主体としながら、中部高地系列のものが比較的多く認められ、しかも各器種にまたがっている。また、南関東系、北関東系、南東北または東関東的な様相を示すもの、それ以外の地域の様相を示すものなど、多地域にまたがる文様要素が認められる。同時にこれらの各要素をもつ遺物の出土頻度は、グラフが示すとおり地域ごとにまた、器種ごとに大きく異なっている。

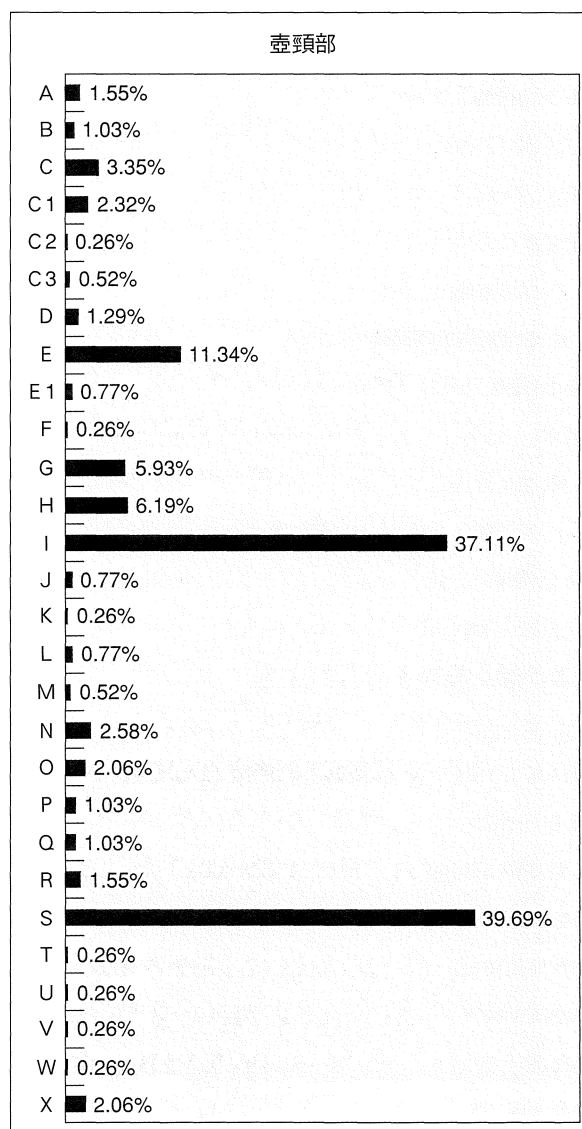
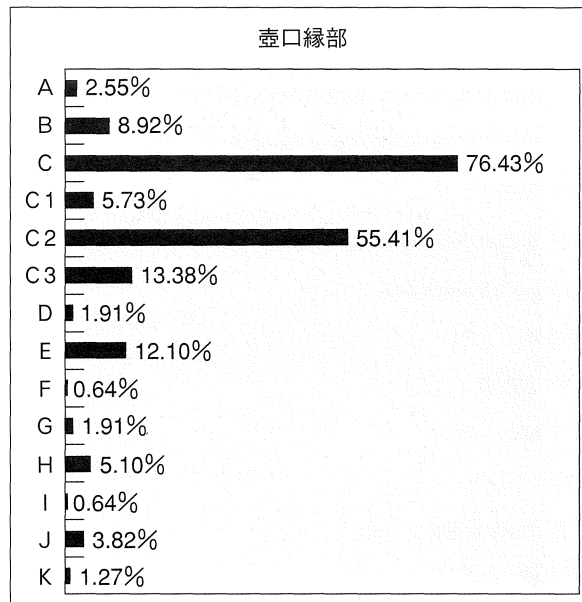
壺は、全体傾向として、口縁部と胴部が切り離される出土状況の中で、口縁部の複合口縁化が強まると同時に、胴下半部張り出しが増す状況が窺える。これに伴い口縁部に各種の文様が施文されるようになり、また胴部最大径以下にまで文様が施文される状況が生じてくる。壺口縁部A類は、中部高地系の段を有する口縁を持つ壺や甕の口縁部に描かれる文様である。B類は栃木県烏島森遺跡B-2・SI004出土1の壺口縁部に類例があり上山系列と呼ばれる広口の壺と考えられる。C類は、最も出土頻度が高く、通有して用いられる文様である。D類は、中部高地系の朝顔形に開く口縁に施文されるもので、工具押捺による刻みである。E類は基本的に頸部に施文される文様であるが口縁部と合体している。F類は、1例のみで南東北または、東関東に類型を求められるが、施文工具が2本一単位の工具では施文されていない。G類は、長頸壺の古い形態を残すものであろうか。H類はA類の類型として捉えることが可能である。I類は、1例のみで、千葉県菊間遺跡第42号住居跡13に類例を求めることができる。J

類は、基本的に南関東系譜の突起と考えられる。K類は縄文施文部分にのみ赤彩する例は在地の要素と考えられるが、無文で胴部にかけて全面赤彩するのは他地域の影響を受けたものと考えられる。

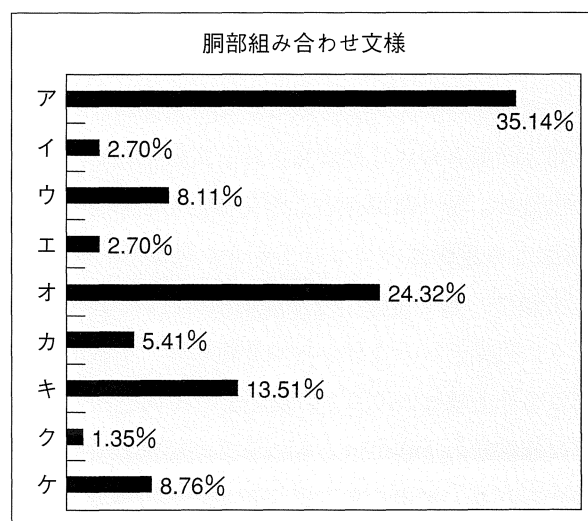
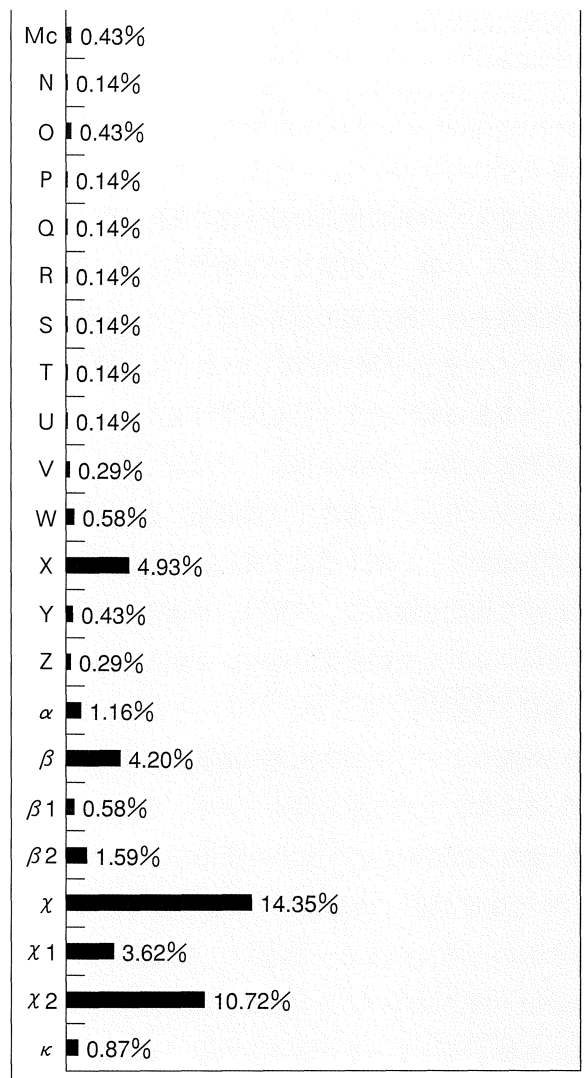
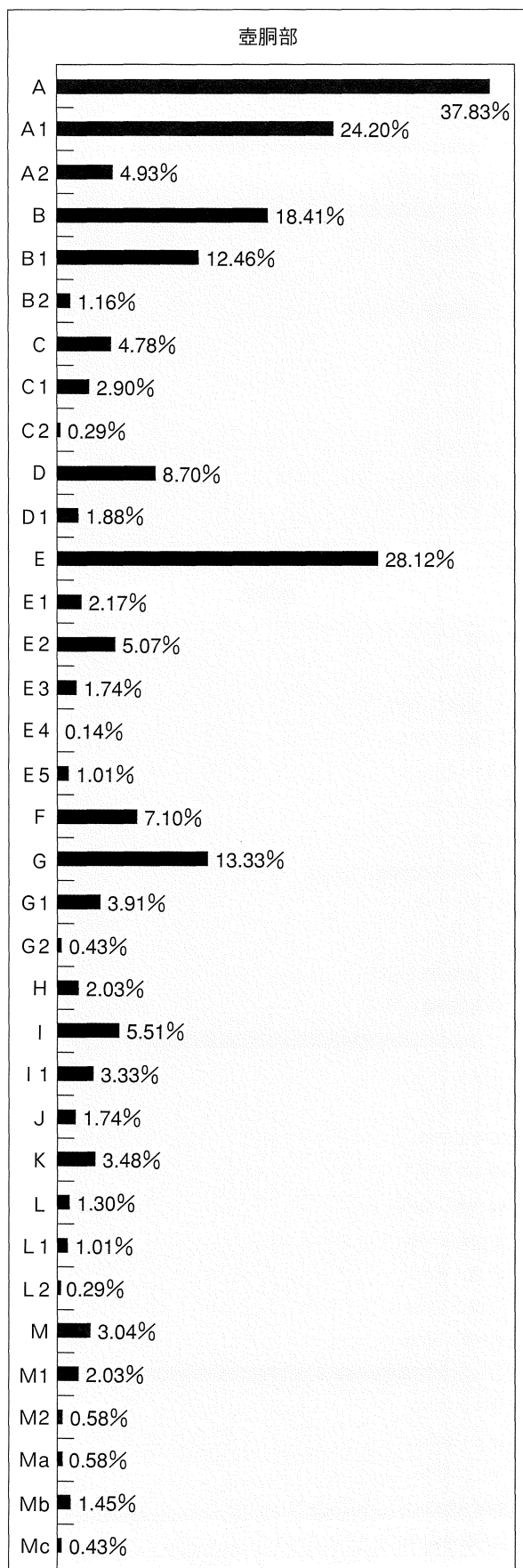
壺頸部B類は南関東系の文様要素と考えられ新しい様相を示すものと考えられる。C類は平行沈線で区画する例が一般的であるが、波状文との組み合わせで区画する例も僅かであるが認められる。D類は、中部高地系の壺頸部に施される文様と考えられる。E類は本遺跡では、比較的多く認められ在地の主要な施文要素を構成すると考えられる。F類は、1例のみで施文部位から見て、I類の類型として捉えることができる。G類は、壺胴部の文様が頸部まで及んだ例や櫛描文の影響が考えられる。I類は、出土頻度が最も高く、本遺跡を代表する文様である。この文様はJ類及びQ類の文様と併せて考えると埼玉県池上・小敷田遺跡及び上敷免遺跡に認められる三角文や振幅の大きい波状文の変化形態と捉えることも可能であるが、中部高地系の壺頸部に見られる山形文や、北原式系土器の壺胴部に施文される連続山形文なども候補として考えられる。また、鋸歯文自体は、胴部H類として少数例であるが施文されている。このような施文例は県内でも美里町神明ヶ谷戸遺跡第10号住居跡出土壺や皆野町栗谷瀬遺跡出土壺などに類例を求めることができる。K類は基本的に胴部に施文される文様であるが、複段構成をとる場合などは頸部から施文することが考えられる。また、前時期の池上遺跡1号環濠出土20の壺に施文されているが、頸部に多く施文される例は、神奈川県王子ノ台遺跡など神奈川県域に例が多いようである。L類は、3例認められるが中部高地系の壺の文様要素と考えられる。M類も中部高地系の文様要素と考えられる。N類、O類、P類ともに南関東系の櫛描文の影響を受けていると考えられるが、本遺跡では、多くが地文縄文上に施文されているのが特徴である。R類は中部高地系の壺頸部に多く認められる文様である。S類は、154例あり、頸部と胴部

の境界に段を設けて列点を施す例は、本遺跡の代表的な要素の一つであるが、第135号土壙出土第280図135-3のように多段に施文する例は、他地域の影響を受けたものと考えられる。T類は、南関東系の舌状文と、中部高地系の垂下文の両方の要素が考えられる。U類、V類併せて2例であるが、基本的に南関東系の文様要素であると考えられる。W類は、1例のみで形態分類で説明したように東関東または、南東北の壺に施文される突帯である。

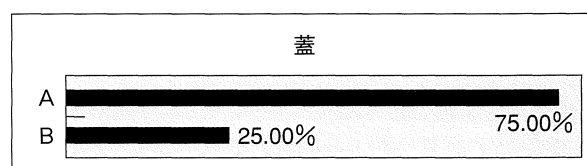
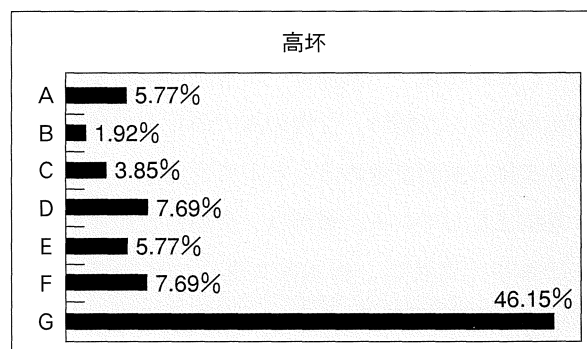
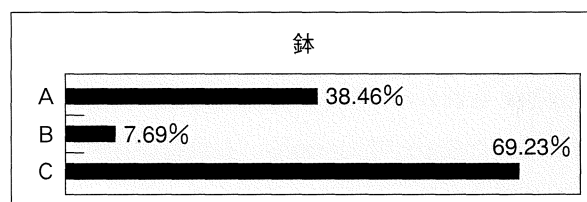
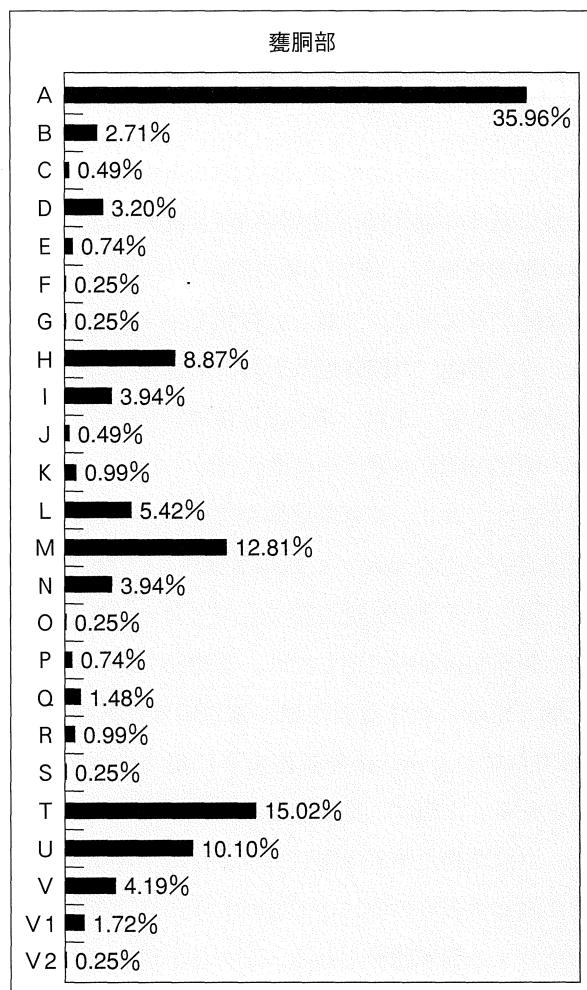
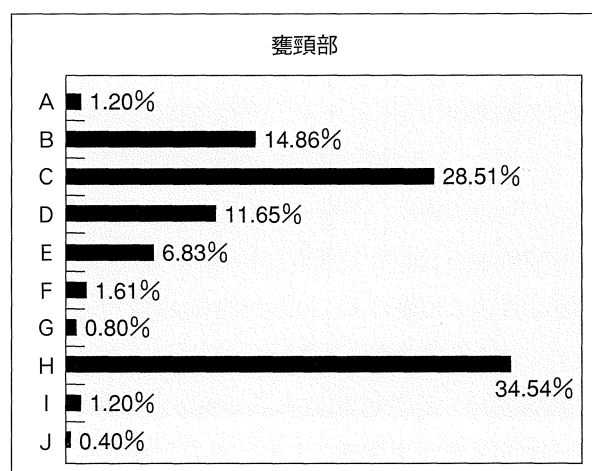
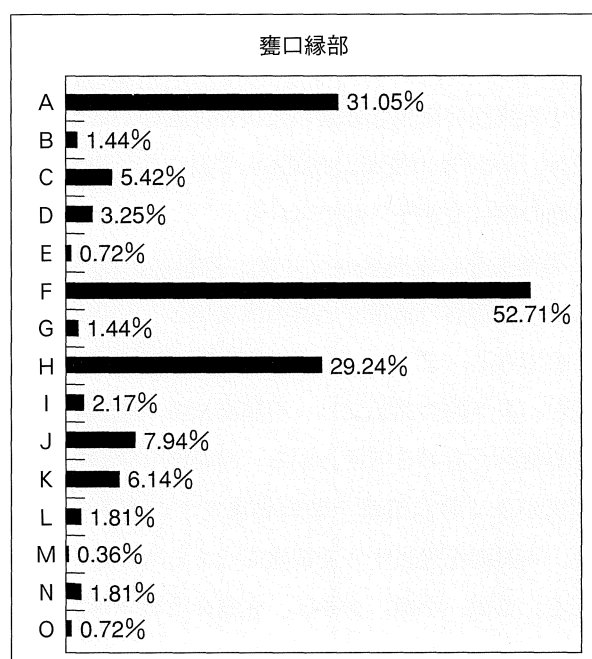
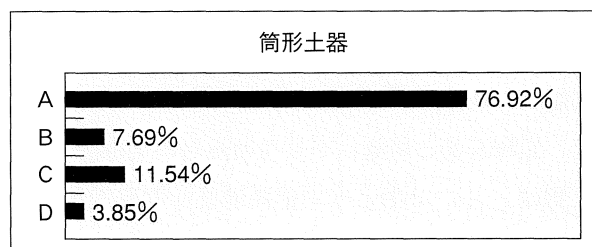
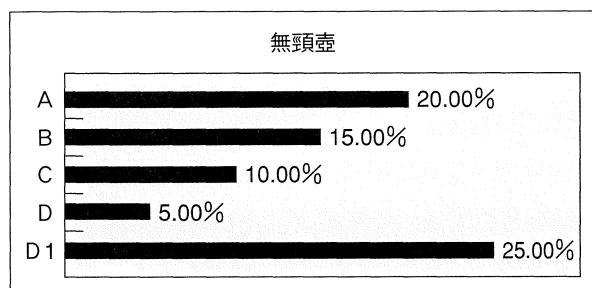
壺胴部A類は、胴部文様としては最も多く施文される要素である。本遺跡では前時期に比べ多段多条化する傾向と、2本1単位工具による施文及び、細線化する傾向が窺える。B類は、本遺跡で3番目に多く用いられる文様要素である。A類と同様に多段多条化する傾向にあるが、グリッド出土第377図107の壺のように中部高地系の波状文の影響を受けていると考えられる例も認められる。C類の上段堰出土第314図28はやや古手の様相を示し、グリッド出土第374図11は細線化しており新しい様相を示すものと考えられる。D類は、60例認められ比較的地出土頻度が高い。D1類は中部高地系の文様要素の影響を受けていると考えられる。E類は、194例認められ、本遺跡を代表する文様である。区画内部の充填文様によってさらに分類したが、E2例が最も多い。また、E1類はE2・E3類に比べてやや後出の様相を持つものと考えられる。E4類は1例のみで特殊な文様である。F類は、49例認められ比較的多い出土頻度である。この文様はD類及びE類との組み合わせで施文される文様である。文様の出自は、埼玉県深谷市上敷免遺跡Y4号住居跡第18図1の壺胴部のように上部から紡錘状に貫入する文様や、池上遺跡1号環濠第40図17の壺胴部のように玉抱き状の文様からの変化形態、小敷田遺跡第205号土壙第250図1の壺のように同心円文の上下に櫛歯状の文様が付くものからの変化形態などが考えられる。類例は栃木県大塚古墳群内遺跡SK-21出土の壺、埼玉県浦和市上野田西台遺跡第3号



文様分類別出土頻度グラフ1



文様分類別出土頻度グラフ2



文様分類別出土頻度グラフ3

土壙出土の壺、埼玉県川口市戸塚上台遺跡第1号住居跡出土の壺などに認められる。G類も比較的出土頻度が高く、本遺跡を代表する文様である。また、E類と上下に組み合わせて施文される例が多い。G1類に属する第318号住居跡第154図17はやや古手の様相を示し、第217号住居跡第61図3のように連繋する文様はより新しい様相を示すと考えられる。G2類は、中部高地系土器の影響を受けていると考えられる。また、第348号住居跡第221図1及び、第223図6の壺は胴部最大径から以下にかけて施文されており、長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行なわれた、松原遺跡SB1146出土一括の壺と大きな類似性を持つものと考えられる。H類は頸部文様でも説明したが、本遺跡では、F類の文様と組み合わせる例の他、第259号住居跡第82図29の壺のように櫛描直線文下に施文する例も認められる。I類は、比較的出土頻度が高い文様である。上段堰出土第318図122のように平行沈線の下に施文するものや、I1類のように縄文帯を区画したりする例が認められる。このI1類は本遺跡の代表的な文様要素に含まれると考えられる。J・K類は、太めで単位工具による施文と見分けにくいものが認められるが、基本的に南関東系の櫛描文の影響を受けたものと考えられる。L類及びM類は、中部高地系の壺に見られる垂下文である。但し、L1類及びMa類は在地化した要素を示すと考えられる。また、L類に比べてM類はやや後出の様相を示すと考えられる。N類は、1例のみで西日本地域からの記号文様に系譜を求めることができるが、本遺跡では単位文化している。類例は、群馬県荒口前原1号住居跡出土壺及び、栃木県大塚古墳群内遺跡SK20出土壺などが挙げられる。O・P類は東関東系譜の文様であると考えられる。Q類は、1例のみで、在地の系譜にある文様が残存したもので、区画内の充填の刺突文が内部中空の植物の茎を押捺したものに变化しており、新しい様相を示すものと考えられる。R・S・T・U類は、各1例のみで南関東系の

文様と考えられる。V類は、同じく南関東的な文様であるがグリッド出土第374図12は、地文に複節の縄文が施文されている。W類は4例認められ、南関東系譜の文様である。このうち第264号住居跡第86図19の壺は、埼玉県大宮市御蔵山中遺跡Y-5号住居跡出土第68図2の壺に類例がある。X類は、34例認められ在地の文様要素であるが、北関東地域とつながりが認められる可能性がある。Z類は2例認められ、南関東系譜の文様と考えられる。 α 類は、頸部R類と同様に中部高地系譜の文様である。 β 類は、 $\beta 1 \cdot 2$ 類とも中部高地及び南関東系譜上にあると考えられる。 γ 類のうち $\gamma 1$ 類は、中部高地的な赤彩技法が考えられる。また、 $\gamma 2$ 類のうち第317号住居跡第150図1のように、区画文内を赤彩する技法は南東北地域の技法の可能性はある。 κ 類は、第30号土壙第280図30-2のように中部高地系譜の貼付文が多く認められる。

胴部文様の組み合わせでは、A類は、26例と最も多く本遺跡の横帯文土器の代表例として捉えることができる。また、I類もA類の変化形と考えられるが、最下段の連弧文は、中部高地系の連弧文の影響を受けたものと考えられる。U類及びO類も出土頻度が高く特に頸部I類の鋸歯文との組み合わせは、本遺跡を代表する文様構成をとるものと考えられる。カ類、キ類、ク類は、在地の文様と中部高地系の連弧文が変化して組み合わせたものと考えられる。またこれらの壺は、胴部が張るものや、球胴形を呈するのが特徴である。出土頻度は多くないものの他地域出土例に比べると優勢な状況が認められることから、本遺跡に特有の文様構成と位置づけることが可能である。ケ類は、基本的に中部高地系譜の文様の組み合わせと考えられるが、第348号住居跡第221図1の壺のように在地的な文様に変化したものと考えられる例もある。

無頸壺は、総点数20点のみであり、D類を除いて中部高地系の無頸壺の系譜にあると考えられる。但し、A類の、上段堰出土第319図156は、列点文

を施文しており、在地の文様が施文されている。D類は、1例のみであり、特異な文様である。

筒形土器は、26例認められ基調文様として重四角文を施文している。B類は、埼玉県浦和市東裏遺跡4次第8号住居跡の筒形土器に類例がある。D類は、壺胴部E2類の文様を取り込んだものと考えられる。

甕の文様構成は、基本的に縄文施文を主体とするもの、櫛歯状工具による条痕文を主体とするもの、櫛描文を主体とするもの、篋描沈線を主体とするもの、台付甕特有の文様を施文するものに分けられる。

口縁部A類は、本遺跡では、在地の縄文甕及び中部高地系の条痕甕、櫛描文系の甕などに広く施文されている。C類は、第301号住居跡第115図7、第306号住居跡第135図35、第414号住居跡第248図11のように口縁部無文帯に施文する例や、グリッド出土第374図17などのように、口縁部縄文施文上に施文する例が認められる。D類は、第331号住居跡第179図6のように中部高地系の甕に施文される例、第329号住居跡第173図22のように地文縄文上に施文される例がある。E類は、南関東系譜に類例を求めることができるが、第336号住居跡第187図6は、地文縄文上に施文されている。I類は、第143号土壇第280図143-2の例のように在地の系譜では、たどれない文様である。J・K・L類は中部高地系の甕及び台付甕に多く施文されている文様である。但し、第303号住居跡第119図36は、在地の文様系譜であろうか。M類は、1例のみで明らかに異系統土器である。N類は、5例認められ群馬県荒砥北三木堂遺跡2区1号住居跡、長野県松原遺跡SB1102、栃木県へび塚遺跡第111号住居跡などの壺及び甕に類例を求めることができる。O類は、南東北地域の天神原式に系譜を求めることはできないであろうか。頸部A類は、在地の系譜では追えない文様である。B類は、埼玉県池上遺跡や、小敷田遺跡などの頸部無文帯をもつ甕から系譜をたど

れる。類例は、栃木県御新田遺跡SK-13出土の甕、浦和市東裏遺跡4次第8号住居跡出土の甕などに認められる。本遺跡では、やや新しい様相として捉えることができる。C・D・E類は、中部高地系の甕に施文される文様である。F類は、グリッド出土第374図17の1例のみであるが、小敷田遺跡第5号住居跡第41図8の甕のように在地の甕の系譜に求めることもできるが、口端部に刻み目を伴うことを考慮に入ると、別系統の甕も考慮に入れる必要があると考えられる。G類は2例認められ、南関東系譜の影響を受けているものと考えられる。J類は、1例のみで、口縁部I類の甕と同一個体と考えられる。したがって異系統土器と考えられる。

胴部A類は、最も出土頻度が高く本遺跡を代表する甕の文様である。B類は、原体カナムグラを施文する甕は、在地の縄文系の甕に採用されるが、原体オオバコを施文する甕は、中部高地系の甕に多く採用されている。C類は、東北系譜の原体を用いた文様であると考えられる。D・E・F・G類は、中部高地系の甕である。基本は、D類にあり、E・F・G類は変化形であると考えられる。また、E類は、神奈川県大塚遺跡南環濠出土の壺胴部上半部に描かれる文様で、丁字文と関連する文様と考えられる。H類は中部高地系の甕で小型の製品に多い。J類は、類例として、群馬県荒砥前原5T1号住居跡出土甕に認められる。L類は、埼玉県池上遺跡で中部高地系の甕として普及し、小敷田遺跡でも出土している。本遺跡ではグリッド出土第378図154の甕のように中部高地系の形態をとる甕に施文される例と、第359号住居跡第230図3の甕のように長胴形を呈する甕に施文される例が認められる。第359号住居跡例は、本来在地の古手の様相を示す甕の形態を呈しており、在地甕の延長上に池上遺跡以来の文様が施文されたものと考えられる。M類は、中部高地系譜の文様で、頸部C・D・E類と伴に施文される例が多く認められる。但し、頸部を無文として単独で施文される例もあり、やや新しい様相を示すものと考え

えられる。N類は、胴部形態D類に施文される例が多く認められる。本遺跡では甕の中でも新しい文様構成を示すものとして位置づけられる。O類は、1例のみ認められ特異な文様である。類例は、栃木県御新田遺跡B区SK14出土甕に求められる。P類は、M・N類の変化形または、粗雑化として考えられる。Q類はL類の変化形と考えられるが、破片資料の場合はL類の可能性もある。T類及びU類は台付甕に多く施文される文様である。T類施文の甕で胴部が長胴化し地文縄文や貼付を省略する例はやや新しい様相を示すものと考えられる。V類は本遺跡では新しい様相を示すのであろうか。但し、第303号住居跡第118図5の甕は、異系統に属すると考えられる。

北島遺跡出土土器の編年と集落の変遷について

1. 土器の編年

北島遺跡の出土土器は、住居跡をはじめ土壇・溝・堰・水路・窪地・河川跡などから出土している。本遺跡の編年については、遺構の重複関係も含めて住居跡出土資料を基軸として進めたい。また、土壇出土資料など重要と考えられる資料は、随時補足的に加えて全体のまとめとしたい。

編年の基軸になる資料は住居跡一括資料であるが、第259号住居跡のように調査時点では明瞭な重複関係を認められることができず、支柱穴の配置及び遺物の出土状況及び様相から新旧に分けられると判断される例も認められ、一括遺物の全てが同一時期に帰属するものとは、断定し難い状況も認められる。また、当然のことながら住居跡床面上の遺物と覆土中の遺物では、時間差があるように考えられる。さらに異なる住居跡間での同一個体遺物の接合も認められ、これをもって同一時期とすべきか、他の遺物との関係から判断に苦慮する場合もある。したがって、主要となる遺物を中心に据えて、編年を行なった。編年軸の中心となる遺物は、本遺跡を代表とする土器として、壺の組み合わせ文様に示される個

鉢は、A類には、中部高地系のものと南関東系のものが含まれると考えられる。B類は、1例のみで在地または、南東北系であろうか。C類は、中部高地系の赤彩である。

高坏は、A類、E類、F類、G類は、中部高地系譜であると考えられる。B類及び、C類は、埼玉県池上遺跡1号環濠出土高坏脚部に類例がある。D類は、埼玉県寄居町用土平遺跡第10号住居跡出土高坏に類例がある。

蓋は、4例出土しているが、在地の器種としては欠落している。従って本遺跡で出土したものは全て異系統である。A類は中部高地及びその他の系統が考えられる。B類は南東北系であろうか。

体を中心に組み立てた。

本遺跡検出住居跡78軒を遺物の変遷様相から捉えて3期に区分した。第Ⅰ期と第Ⅱ期の区分は、壺においては漸移的であり、重四角文内に斜格子文が充填されるなどの新しい文様要素の出現を除けば、第Ⅲ期への移行期として捉えることができる。また、甕は、櫛描文系の甕の頸部擬似簾状文が形骸化する点、台付甕の地文縄文が粗雑になり器形が長胴化する点などが挙げられる。第Ⅱ期と第Ⅲ期の区分は、壺においては、フラスコ形文と連弧文の組み合わせの出現に大きな画期が認められる。また、甕に斜格子文が採用されるようになる。さらに、各器種の文様の粗雑化及び形骸化がより進む段階である。

集落の開始期にあたる第Ⅰ期は、第331号住居跡を代表例としたい。第179図1の胴部文様E2類の壺は、胴部の張り出しが中位にあり、頸部も細頸状を呈することなど、器形がやや古手の様相を示し、文様施文も太くしっかりと施文されている。また、第180図11～15に施文された胴部E3類の破片もしっかりとした施文である。同図8の壺口縁部は、細頸長頸で、頸部文様Q類は、鋸歯文施文でも古相

に位置付けられる。同図16の胴部G1類は、三角文施文の中でも古相を示している。この他、19の胴部文様C1類の施文具も太めでしっかりと描かれている。これに伴う土器として、甕は、第179図6の胴部D類の甕や、胴部T類の甕など中部高地系の甕が伴っている。また、第179図3の胴部文様β1類の壺が伴出している。

この第Ⅰ期に含まれる住居跡は、第209号住居跡、第234号住居跡、第259号住居跡、第303号住居跡、第306号住居跡、第318号住居跡、第323号住居跡、第329号住居跡、第348号住居跡、第369号住居跡、第411号住居跡、遺構との切り合い関係から、第337号住居跡、第428号住居跡が挙げられる。第Ⅰ期を構成する住居跡の中で、3基の土器埋設遺構を検出した第348号住居跡は、埋設された土器の出土状況からP-13出土第221図→P-14出土第222図→P-15出土第223図6～9の順になる。第221図胴部組み合わせケ類の三角文は丁寧に描かれており古相を示す。また、蓋として、壺胴部I1類が伴っている。第222図4は、頸部I類に胴部X類の文様が施文されている。また、蓋に使用された甕には、胴部文様M類を施文する中部高地系の甕が伴っている。また、第223図6の壺エ類は、重四角文内の充填がE1類の斜格子文を施文していることから、第Ⅱ期に含まれる様相を示している。よって第348号住居跡は、継続期間の長い住居跡と考えられる。

第Ⅱ期は、住居跡軒数が最も多く隆盛期にあたる。第Ⅱ期を代表する住居跡として第210号住居跡が挙げられる。第42図1の胴部文様E2類の壺は、施文が太くしっかりとしている。但し、頸部文様はI類ではなく、E類が施文されている。また、5の胴部文様A2の壺は、形態が胴部D類になり、中部高地系の器形の影響を受けているが新しい様相を示している。8は、中部高地系の胴部G2類の三角文を施文している。第43図19のように胴部文様I1類は伴っている。32～34の胴部文様G類の三角文は

施文が浅く粗雑化している。甕は、第44図43～46のように頸部文様C類に胴部M・P類を施文する中部高地系の甕が伴うが、第42図10のように頸部文様を持たず単独で胴部M類を施文するより新しい様相を示す甕も認められる。また、胴部文様T類のコの字甕も伴出するが地文縄文を欠落する破片も認められやや新しい様相を示す。

第Ⅱ期に含まれる住居跡は、第195号住居跡、第198号住居跡、第214号住居跡、第216号住居跡、第228号住居跡、第256号住居跡、第264号住居跡、第287号住居跡、第293号住居跡、第300号住居跡、第301号住居跡、第305号住居跡、第310号住居跡、第316号住居跡、第324号住居跡、第325号住居跡、第330号住居跡、第338号住居跡、第340号住居跡、第342号住居跡、第359号住居跡、第361号住居跡、第408号住居跡、第412号住居跡、第413号住居跡、第417号住居跡、第430号住居跡、第432号住居跡が挙げられる。

第Ⅱ期を構成する住居跡の中で第198号住居跡第33図1は中部高地系の栗林式の壺が伴出している。また、第214号住居跡第52図32の組み合わせカ類の壺は、第556号土壙出土第295図8・9、下段堰出土第311図1、グリッド出土第373図9のカ類の壺と同じく、第Ⅲ期の壺を特徴付ける、組み合わせ文様キ・ク類に繋がる過渡的様相を示すものと考えられる。第228号住居跡第64図14は、壺胴部文様R類の擬似流水文の破片が出土している。第256号住居跡第78図1の壺は、胴部文様E1類を施文し、形態が胴部D類に近くなり、Ⅱ期の特徴を示している。第264号住居跡は、第86図1の櫛描文の壺が伴出している。第301号住居跡第114図1の壺は、組み合わせ文様ウ類であるが、文様帯がやや上方に上がる傾向にある。また、棒状の隆帯は、中部高地系の壺胴部に多く認められる。第305号住居跡第128図15の甕は、胴部N類に属し第Ⅲ期を特徴付ける様相を持つ資料が伴出している。第316号住居跡第147図2は壺頸部文様V類で宮ノ台式に認めら

れる文様である。第325号住居跡第165図1は、栗林式の壺が伴出している。第340号住居跡第205図8・9に施文された文様は、本来別の器種に用いられる文様である。第342号住居跡第212図3は、第359号住居跡第230図3の甕と同類である。第359号住居跡は、2基の土器埋設遺構が検出されている。このうちP-7出土第229図1の壺は、壺胴部文様E2類であるが下膨れ気味の胴部上半に文様帯が上がつて施文されている。また、P-9出土第229図2は、地文縄文に近い状態で櫛描文を施文している。第412号住居跡第243図1は、壺胴部文様E2・5類である。また、同図14の壺は、栗林式で共に伴出している。第413号住居跡第246図2は、壺胴部文様T類に属し、宮ノ台式の影響を受けている。第430号住居跡第265図4は、第Ⅲ期住居跡に含まれる第426号住居跡出土第257図3と接合しているが、第359号住居跡との切り合い関係からⅡ期に編入することとした。

第Ⅲ期は、住居跡軒数が減少し、衰退期に入る。本時期を代表する住居跡として、第165号住居跡が挙げられる。第19図1の壺は組み合わせ文様ウ類で、沈線は太めであるが、非常に浅く施文されている。また、文様帯が上方に上がる傾向を示すと共に、三角文が小さく簡素化して施文されている。充填縄文も粗雑である。同図4の胴部文様G類の三角文は、連繋化している。同図5の壺は、組み合わせ文様キ類に属し、第Ⅲ期を代表する文様である。この組み合わせ文様は、第Ⅱ期で説明した、組み合わせ文様カ類の重四角文の下辺が消失し、連弧文がフラスコ形文を囲むように貫入することによって生成された文様であると考えられる。この中間形態を示す資料として、グリッド出土第376図57の壺胴部破片が挙げられる。この資料は、重四角文の下辺部分が連弧状の文様となって、フラスコ形文中央部に貫入しているものと考えられる。この資料を介在して連弧文が半単位ずれることによって組み合わせ文様キ類が生じる。第20図8は、甕胴部N類に属し、本遺

跡第Ⅲ期の甕を構成する文様となる。

第Ⅲ期に含まれる住居跡は、第173号住居跡、第199号住居跡、第215号住居跡、第217号住居跡、第229号住居跡、第231号住居跡、第268号住居跡、第269号住居跡、第274号住居跡、第312号住居跡、第317号住居跡、第320号住居跡、第326号住居跡、第333号住居跡、第336号住居跡、第339号住居跡、第341号住居跡、第344号住居跡、第414号住居跡、第416号住居跡、第421号住居跡、第426号住居跡、第427号住居跡、第431号住居跡が挙げられる。

第Ⅲ期を構成する住居跡の中で、第217号住居跡第61図3の壺は、組み合わせ文様ウ類に属するが、施文具が細く粗雑に施文されている。また、三角文は、連繋化し、充填縄文も粗雑に施文されている。より形態化し、新しい様相を示している。同図4の壺は、組み合わせ文様ア類に属し、細い沈線で施文されている。また、第165号住居跡と同様に甕胴部N類が伴っている。第229号住居跡第68図6の重四角文も細い沈線で施文されている。第268号住居跡第93図3は、壺胴部W類の破片である。第269号住居跡、第96図1の壺は、細い沈線で施文されている。また、同図2の壺胴部文様A2類が伴出している。第274号住居跡第100図1は、三角文が、連繋化している。また、同図5は、第269号住居跡と同類である。同図6の甕胴部文様T類は、地文縄文を欠失している。第317号住居跡第150図1の壺は、組み合わせ文様キ類に属し、第Ⅲ期の特徴を示す文様である。また、同図7の甕T類は、地文縄文を欠失している。第336号住居跡第187図1は、櫛描文を施文する壺であるが胴部以下に丁寧なミガキを施している。同図3の中部高地系の壺胴部文様は退化している。また、同図6の甕は、口縁部文様E類で宮ノ台式の影響を受けている。同図7の甕口縁部形態が尖る状況は、新しい様相と考えられる。第339号住居跡第199図1の壺も組み合わせ文様ク類に属し、第Ⅲ期の特徴である。また、同図7の壺胴部組み合わせ文様ア類は、細い沈線で施文されてい

る。第341号住居跡第210図7は、壺胴部W類に属し宮ノ台式の影響を受けている。第426号住居跡第257図3は、第430号住居跡出土第265図4と接合し、壺口縁部文様B類に属し、上山系列上に求められる。また、壺は、胴部文様A1・A2類で構成され、細い沈線で施文されている。第431号住居跡第267図2の壺は、組み合わせ文様キ類に属す。同図4の甕は、形態H類の台付甕で、胴部文様M類を施文し、新しい様相を示すと考えられる。また、同図17は、壺胴部文様S類に属し、宮ノ台式である。

土壙出土資料については、屋外土器埋設土壙を中心として扱う。

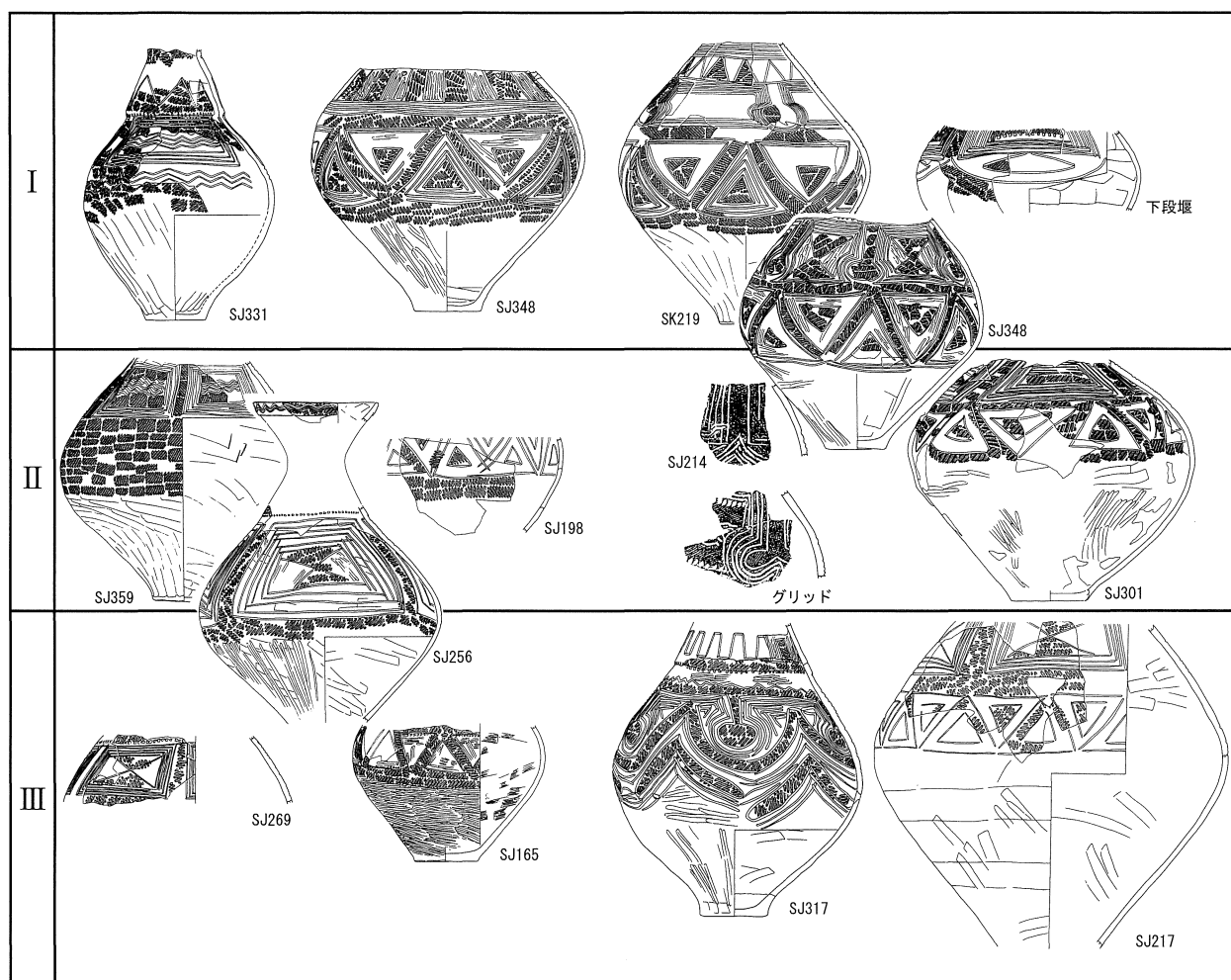
第Ⅰ期に該当する資料は、第219号土壙出土第290図1の壺が挙げられる。壺組み合わせ文様エ類に属し、頸部鋸歯文は、やや小ぶりに施文されている。三角文は、正立側が重三角構造を呈し、充填縄文も丁寧に施文されている。形態は、胴部D類に属し第348号住居跡第223図6とやや異なるものの文様は、同類であると考えられる。さらに、第555号土壙出土第294図3の甕が挙げられる。甕胴部文様M類に属し、長野県埋蔵文化財センター調査の松原遺跡SB267-672の甕に類例が求められる。従って栗林式の甕である。本資料は、形態及び文様施文などの特徴から搬入品の可能性がある。よって第331号住居跡出土第179図6の甕などと同様に第Ⅰ期に位置付けられる。また、蓋として壺胴部I1類が伴出している。

第Ⅱ期に該当する資料は、第221号土壙出土第291図2の甕が挙げられる。甕口縁部形態F類に属し、特異な器形であるが、文様は、胴部M類に属す。条痕施文は、第555号出土の甕よりは、粗雑で、頸部の櫛描波状文が2段になるなど新しい様相を持つと考えられる。また、蓋として同図1が伴出している。第Ⅱ期に属する第264号住居跡第86図2の甕と同様の文様構成を持ち本時期に位置付けられる。さらに、第521号土壙出土第293図2の甕が挙げられる。甕胴部形態B類でやや長胴気味である。文様

は胴部A類で本遺跡を代表する甕である。第Ⅱ期に属する第359号住居跡第230図3の甕と文様は異にするものの形態での特徴は一致している。また、第330号住居跡第177図2の甕と同類である。但し、第339号住居跡第199図6、第341号住居跡第210図1の甕のように、第Ⅲ期に属する住居跡出土例も認められ、変化の緩やかな器種と考えられる。また、蓋として同図1・7・8を同一個体とする壺がある。この個体と同一個体と考えられる破片が第326号住居跡・第340号住居跡・第342号住居跡から出土し、いずれも第Ⅱ期に属する住居跡である。但し、頸部文様I類の鋸歯文は粗雑で全面赤彩であることから、より新しい様相を持つと考えられる。

第Ⅲ期に該当する資料は、第312号土壙出土第292図1の壺がある。形態は、胴部D類と推定される。また文様は、胴部D類であるが、連弧文の単位幅が大きくフラスコ形文と組み合わせる可能性が高い。また、同図2の壺は、胴部文様A2類であるが第269号住居跡第96図2及び、第274号住居跡第100図5の壺と同類である。同図3の台付甕は、形態化が著しい。さらに、第Ⅲ期に該当する資料として、第777号土壙出土第297図1の壺がある。壺組み合わせ文様ウ類に属し、施文がやや細く浅く施文されている。また、三角文は、連繫化している。第795号土壙出土第296図1・2・3・4もⅢ期に含まれると考えられるが、宮ノ台式の影響を受けていると考えられる。壺及び甕の文様の無文化とミガキの多様化によって該期に含められると考えられる。第796号土壙出土第297図1の壺は、胴部組み合わせ文様ア類に属するが、多段多条化し、やや細い沈線で描かれていることから、第Ⅲ期に含めたが、本類も変化の緩やかな器種と考えられる。

以上、住居跡出土資料を中心として3期に区分したが、該期に前後する様相を示す資料も本遺跡で出土しているので、提示しておきたい。まず、Ⅰ期以前の様相を示す資料として、第325号住居跡第165図10、第30号土壙出土第280図30-2、上段堰出



北島遺跡出土土器編年案1

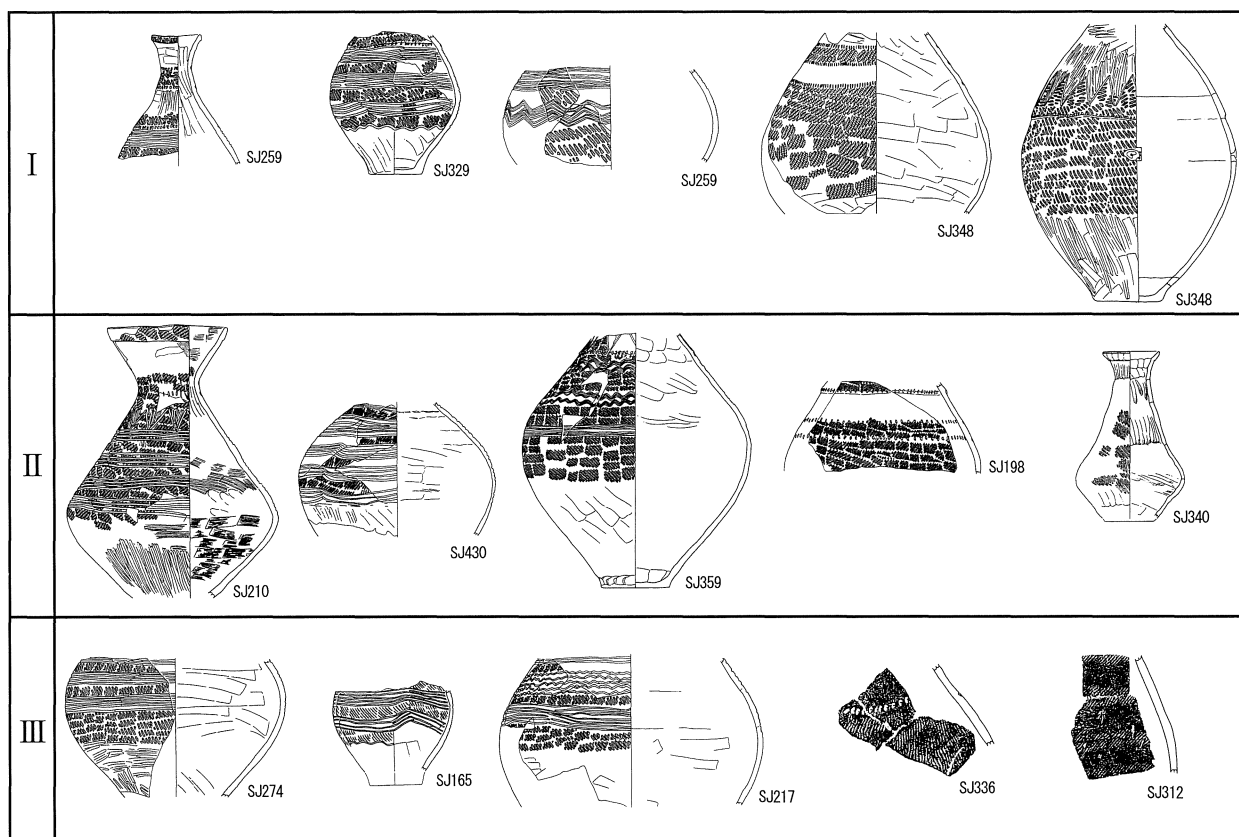
土第319図152の壺胴部資料のように列点文を伴う文様は、中部高地系列の栗林式でも古相に位置付けられている。但し、松原遺跡などでは、新相の土器と共に伴出している。また、第336号住居跡出土第188図12の頸部三角文及び、グリッド出土第375図48の壺胴部重四角文を囲む隆帯は、在地の系譜にある土器でも、古相を示す文様である。

第Ⅲ期以降の様相を示す資料として、第326号住居跡出土第168図21の交互刺突文を施文する無頸壺破片が挙げられる。この資料は、異系統に属するもので、上層の古墳時代前期の住居跡との一部重複も認められ、時期決定に検討を要するものである。また、第7号溝出土第368図2の甕は、口端部に刻み目を施し、弥生時代後期の樽式土器に類似する器形と文様を備えることから、より新しい段階に位置

付けられる。

最後に北島遺跡の弥生時代全体編年に占める位置付けであるが、大きく区分して弥生時代Ⅳ期に入る時期に位置付けられる。在地の土器編年に基づけば、弥生時代中期中葉に位置付けられる埼玉県池上遺跡の次の段階に同県小敷田遺跡が位置付けられることが判明している。北島遺跡は、この小敷田遺跡の次の段階にあたり、深谷市上敷免遺跡・美里町神明ヶ谷戸遺跡と概ね並行する関係にある。北島遺跡に後続する段階として、寄居町用土平遺跡・吹上町袋・台遺跡が位置付けられる。また、熊谷市前中西遺跡は、北島遺跡と並行関係を持つ時期から弥生時代後期初頭にまたがる時期を含む遺跡である。

北島遺跡では、中部高地系の栗林式土器が多く伴出している。これらの伴出土器は、長野県松原遺跡



北島遺跡出土土器編年案2

を中心とする中部高地の編年との比較が可能である。そこで、まず長野市教育委員会刊行の『松原遺跡Ⅲ』に掲載の時期区分に沿って当てはめると、概ね新段階古（松原Ⅱ期）から新段階新（松原Ⅲ期）に収まると考えられる。また、99シンポジウム『長野県の弥生土器編年』の寺島氏の編年に基づけば、中段階古相から新段階の範囲に収まるものと考えられる。

さらに、本遺跡では、南関東系の宮ノ台式の資料も伴出している。これらの土器は、大宮台地を中心とする宮ノ台式土器との比較が可能である。『YAY』掲載の安藤氏の編年に沿って当てはめると、Si地域第Ⅲ期に収まるものと考えられる。但し、S字状回転結節文を施文する一群は、Ⅳ期に入る可能性がある。

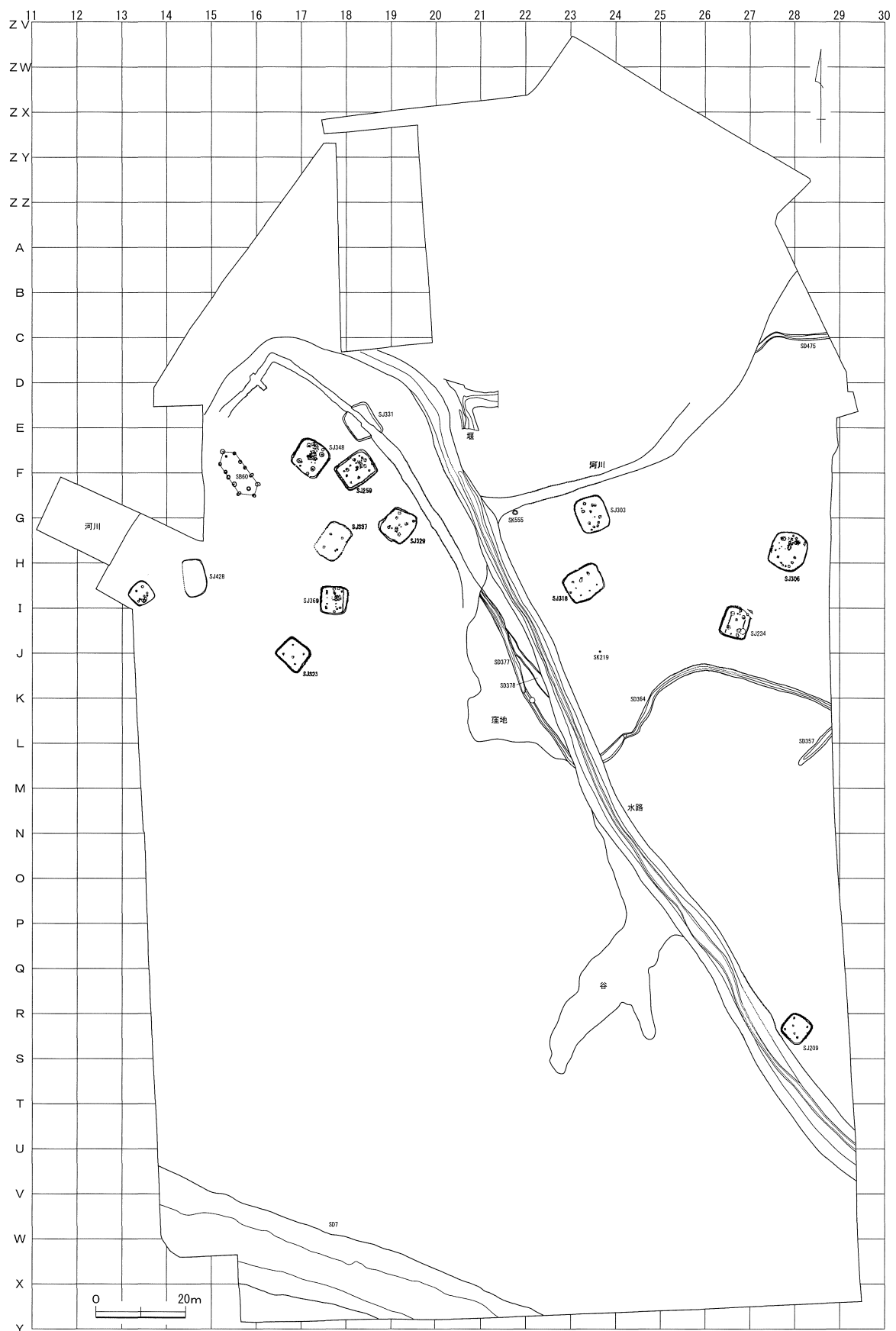
2. 集落の変遷

土器の編年の項で説明した住居跡を中心とした3時期区分に基づいて、各遺構も含めた時期変遷をま

とめてみたい。

まず、本集落は、調査区内に全ての遺構が納められているものではなく、未検出の部分が調査区外にあることを念頭に置き話を進めたい。集落の南北限界は、東西方向に流れる2本の河川によって収束することが判断される。東西方向については、北側の河川沿いの微高地に沿って遺構が展開することが予想される。従って各時期における住居跡の個数及び集落の構成人数を算出することは、不可能であるのでここでは触れないこととする。

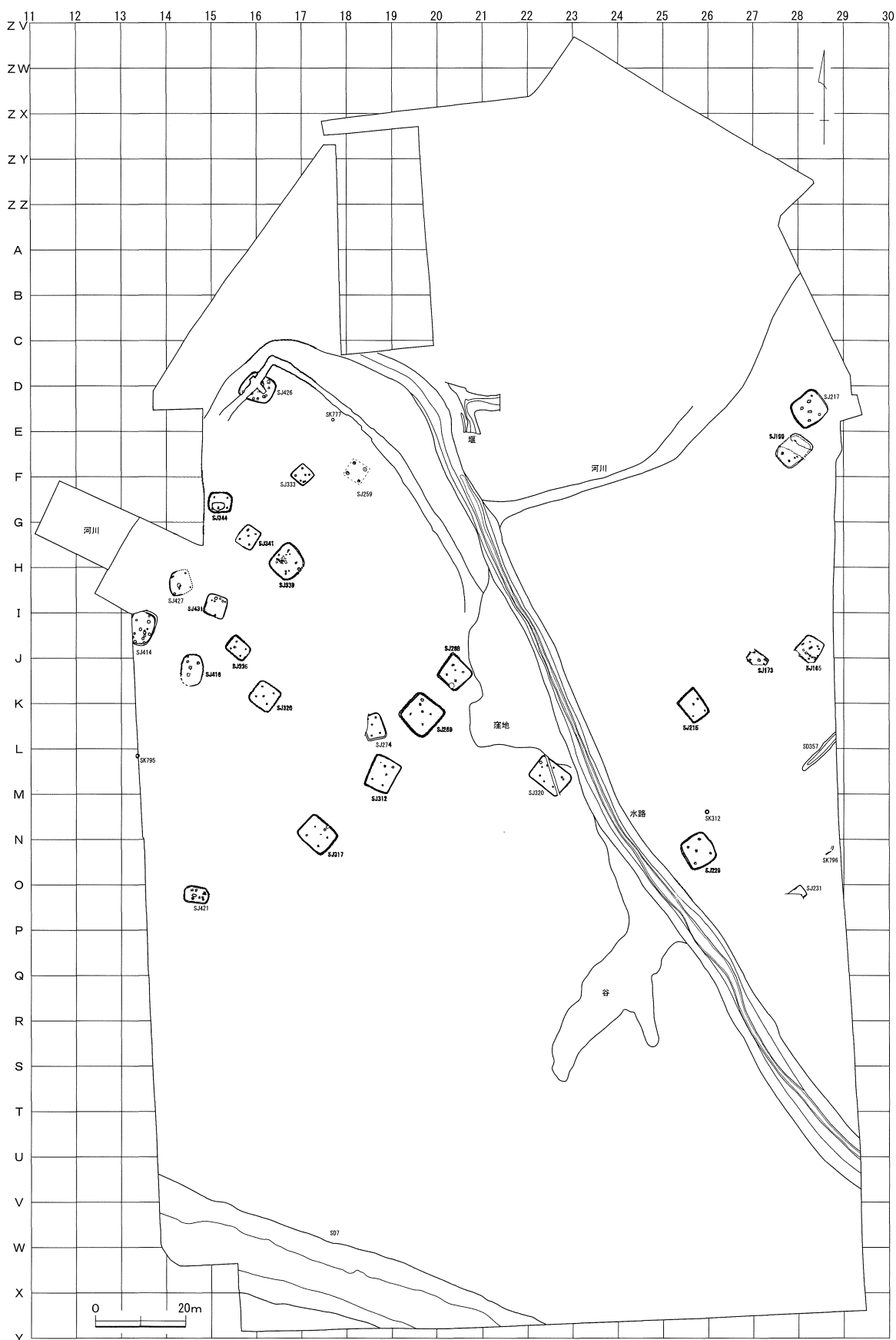
本遺跡での住居跡等の遺構配置を見ると北側中央に構築された堰を中心として、河川に沿う帯状の微高地に纏まって存在していることが解る。また、堰を起点に南東方向に開削された水路が、本集落を大きく規制している状況が窺える。さらに、水路中央から東に延びる第364号溝も、本集落を区画しているものと考えられる。よって、水路及び溝については各時期ごとに触れて説明したい。



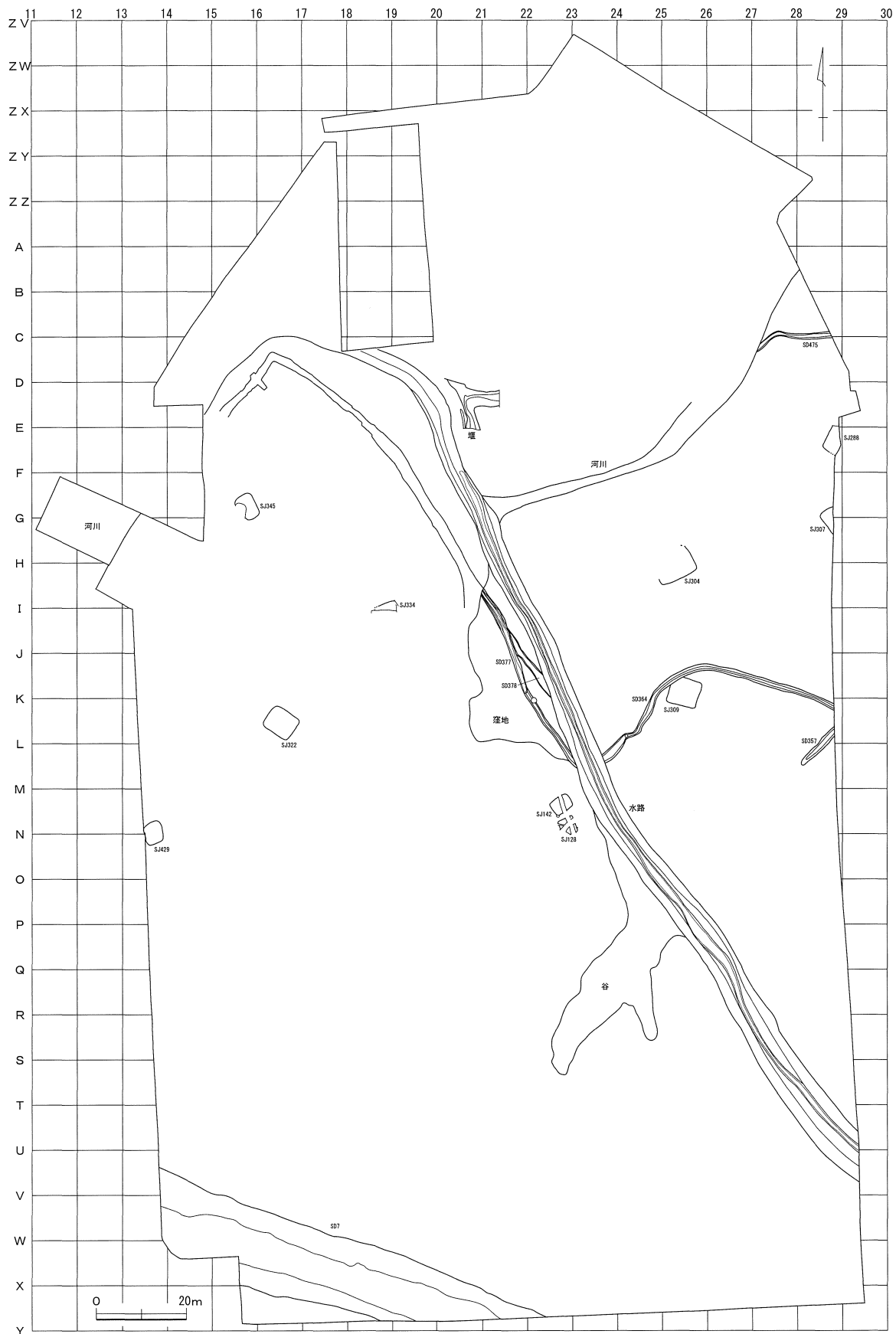
北島遺跡集落変遷図〈第Ⅰ期〉



北島遺跡集落変遷図〈第Ⅱ期〉



北島遺跡集落変遷図〈第Ⅲ期〉



北島遺跡集落変遷図〈時期不明〉

第Ⅰ期の住居跡は、14軒である。遺構の配置は、調査区北側に偏っている。水路西側で9軒検出されている。また、掘立柱建物跡も本期に含められる。この掘立柱建物跡は、北西端部の最も標高の高い地点に建てられており、住居跡は、その東側を中心に囲むように配置されている。水路の東側は、5軒の住居跡が検出されている。この内、4軒は、第364号溝とこの溝が周回して第475号溝に接続する範囲内に築かれている。残りの一軒は、水路沿い南東方向に離れて位置している。この離れた住居跡は、廃絶後に土壌群が築かれ遺物の出土状況から、墓坑として使用された可能性がある。この他、土器埋設遺構については、水路の西側に第348号住居跡屋内埋設として3基検出されている。また、水路の東側では、第364号溝の内側に屋外埋設土壌が2基検出されている。また、第303号住居跡で検出された埋設土器については、土器棺とは別の意味を含むものとしておきたい。第Ⅰ期を構成する住居跡は、比較的大型の住居跡が建てられている。

第Ⅱ期は、住居総数29軒である。住居総数は、第Ⅰ期のほぼ、倍に増え南側に拡散している状況が窺える。水路の西側は18軒である。掘立柱建物跡は廃絶され軸を換えて大型の第293号住居跡が建てられている。第Ⅰ期で、北側に纏まって位置していた住居跡は、一軒に減り南東方向に小型の住居跡も交えて拡散している。水路の東側は、11軒である。第214号住居跡が第364号溝を切って構築していることから、第Ⅱ期にはこれらの溝は埋まっていたものと考えられる。住居跡は、南北方向に拡散し、第364号溝の南側に進出している。また、大型の住居跡と小型の住居跡に分かれるようである。土器埋設遺構は、水路の西側では、北側に位置する第359号住居跡及び第430号住居跡の3基と第256号住居跡の1基、屋外埋設として、第521号土壌が検出されている。この土壌は、蓋に使用された土器と同一個体と考えられる破片が、第Ⅲ期の第326号住居跡及び、第340・342号住居跡の3軒から出土している。

また、第330号住居跡出土の埋設土器は、別の用途が考えられる。水路の東側では、第301号住居跡床面上で出土した土器が埋設土器の可能性もある他、第221号土壌が屋外土器埋設土壌である。第Ⅱ期では、水路西側の住居跡に比べて水路東側の住居跡の拡散が広まる傾向にある。

第Ⅲ期は、住居総数25軒である。住居総数は、第Ⅱ期に比べて減少している。水路西側の住居跡は、18軒で、第259号住居跡内を認めれば、19軒となる。住居跡は北側に纏まる一群と、南側に離れて列状に纏まる一群に分かれて構成している。南側の住居群は、大型の住居跡が多く北側の住居跡群は、小型の住居跡が多い。水路東側の住居総数は、7軒である。拡散傾向はより顕著になり、調査区北東側の一群と調査区東側の一群、さらに調査区南東側の一群と合計3群に分かれて構成されている状況が窺える。住居跡は、いずれも2乃至3軒で構成されるようである。土器埋設遺構は、水路西側では、屋内埋設が、2軒で各1基ずつ埋設されている。また、屋外埋設土壌は、2基検出されいずれも北側の住居跡群の両側に位置している。水路東側の埋設遺構は、屋外埋設土壌が2基検出されている。いずれも、東側と南東側の住居跡群の中間に位置している。第Ⅲ期では水路西側の集団が2群に分裂すると同時に、水路東側は、第Ⅰ期の居住域から抜け出し調査区外へ拡散する状況が窺える。

最後に集落全体を通じて指摘できる点について述べたい。まず、堰であるが、調査の結果最低2回の構築が認められる点についてである。これについては、第1回目に構築された堰は、洪水等の原因によって壊されたものと考えられ、この構造材の残存部分の上に再構築している。この上下の堰に伴う遺物は、分離して図示したが、編年上からは混在しているようである。堰全体の出土遺物の全体状況から、第Ⅰ期には、既に構築されていたと考えられる。2回目の構築については不明であるが、水路西側の住居跡の動態を見る限りでは、第Ⅰ期または、第Ⅱ期

の中で行なわれた可能性が高い。

堰の再構築でふれた水路西側での住居跡の拡散についてであるが、調査結果から考えられる要因の一つとして、洪水による住居跡の廃絶が挙げられる。まず、第Ⅰ期の堰よりの第303号住居跡及び第318号住居跡は、覆土を洪水層によって覆われている。第Ⅱ期では、第195・198・305号住居跡が同じく洪水層をかぶっている。第Ⅲ期では、第199号住居跡が挙げられる。このように、度重なる洪水により堰に近い部分では住居跡の立地が困難な状況に陥り、周辺部に拡散したことも考えられる。同様な状況は、水路西側に立地する第Ⅰ期第331号住居跡にも認められ、東側の住居跡も堰からやや離れた部分に立地するようになったと考えられる。

埋設土器については、水路西側と東側で大きく異なる様相が認められる。まず、西側では、各時期で

屋内埋設が認められ合計8基検出されている。また、屋外埋設は、第Ⅰ期には無く第Ⅱ期及び第Ⅲ期の合計で3基である。水路東側では、屋内埋設は、第Ⅱ期に第301号住居跡床面上に検出されているが、住居跡廃絶後の埋設の可能性も考えられる。また、屋外埋設は、各時期に認められ、合計5基検出されている。また、その配置は、水路に沿って、比較的等間隔に列状になっている。このように、水路西側では、屋内埋設を多く用い、反対に水路東側では、屋外埋設を計画的に配置している状況が認められる。

最後に出土遺物から見た状況であるが、南関東地域を中心とする宮ノ台式の影響を受けた遺物の多くは、水路の西側の住居跡に多く認められる。但し、在地の土器ならびに栗林式の影響を受けた土器については、東西に同一頻度で出土している。

引用・参考文献

- 相京建史 1988「清里・庚申塚遺跡のその後」『群馬の考古学』創立十周年記念論集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 赤坂 亨 2001「つくば市上境発見の弥生時代土器棺墓」『筑波大学先史学・考古学研究』第12号 筑波大学歴史・人類学系
- 安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）」『古代文化』第42巻第6号 古代学協会
- 安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（下）」『古代文化』第42巻第7号 古代学協会
- 安藤広道 1996「南関東地方（中期後半・後期）」『YAY!』
- 安藤広道 1999「『栗林式土器』の成立をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』92号 長野県考古学会
- 石川日出志 1986「中部・関東の弥生時代中期をめぐる諸問題」『第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』
- 石川日出志 1996「東日本弥生時代中期広域編年の概略」『YAY!』
- 石川日出志 1998「弥生時代中期関東の4地域の併存」『駿台史学』第102号 駿台史学会
- 石川日出志 2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号 駿台史学会
- 石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100号 長野県考古学会
- 石川日出志 2002「東日本から見た併行関係と実年代資料」『日本考古学協会2002年度榎原大会研究発表資料集』日本考古学協会2002年度榎原大会実行委員会
- 飯塚美保 1996「宮ノ台式土器における台付甕形土器の成立」『神奈川考古』第32号 神奈川考古

同人会20周年記念論集 神奈川考古同人会

- 岩上照朗他 1997「栃木県における弥生時代中期後半の土器群」—「上山系列」の提唱—『研究紀要』第5号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 小倉淳一 1996「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』第27号 史館同人
- 甲斐博幸 1998「君津市常代遺跡の造墓過程」『研究紀要』Ⅷ 君津郡市文化財センター
- 柿沼幹夫 2000「岩槻市掛貝塚1号住居址出土の弥生土器」『土曜考古』第24号 土曜考古学研究会
- 柿沼幹夫 1996「①埼玉県」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社
- 久世辰男 2001『集落遺構からみた南関東の弥生社会』六一書房
- 黒沢 浩 1987「神奈川県伊勢山遺跡出土の弥生式土器」『明治大学考古学博物館館報』3
- 黒沢 浩 1997「房総宮ノ台式土器考」—房総における宮ノ台式土器の枠組み—『史館』第29号 史館同人
- 黒沢 浩 1993「宮ノ台式土器の成立」『駿台史学』89 駿台史学会
- 坂口滋皓 1991「東日本弥生墓制における土器棺墓(1)」—研究史の再検討を中心として—『神奈川考古』第27号 神奈川考古同人会
- 宍戸信悟 1992「南関東における宮ノ台期弥生文化の発展」—特に西相模を中心として—『神奈川考古』第28号 神奈川考古同人会
- 設楽博己 1993「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集 共同研究「葬墓制と他界観」国立歴史民俗博物館
- 設楽博己 1993「壺棺再葬墓の起源と展開」『考古学雑誌』第79巻4号 日本考古学会
- 鈴木正博 2000「『宮ノ台式』成立基盤の再吟味—北方文化論的視点から見た『宮ノ台式』在地化基盤と進行濃度」『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』 日本考古学協会
- 鈴木正博 2001「『王子台』の頃、そして『王子ノ台』から—相模弥生式中期中葉における『土器DNA関係基盤』の構築—」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』 日本考古学協会
- 鈴木正博 2001「弥生式中期「雲間式」と「富士前式」の間」『栃木県考古学会誌』第22集 栃木県考古学会
- 鈴木正博 2001「『小田原式』研究序説」—「十王台式」研究法である「土器DNA関係基盤」から見た「小田原式」の真相—『茨城県考古学協会誌』第13号 茨城県考古学協会
- 鈴木正博 2002「関東弥生式中期中葉の突起文と筒形土器の型式学—『様式論』では接近不能な『特に変わった弥生式』と『土器DNA関係基盤』—」『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』 日本考古学協会
- 寺島孝典 2001「成立期の栗林式土器」『長野県考古学会誌93・94号』 長野県考古学会
- 直井雅尚 1991「松本平における百瀬式土器の実態」『長野県考古学会誌63号』 長野県考古学会
- 直井雅尚 2001「弥生中期から後期へ」『長野県考古学会誌93・94号』 長野県考古学会
- 中村五郎 2001「天王山式以前」『福島考古』第42号 福島県考古学会
- 長野県考古学弥生部会編 1999 99シンポジウム『長野県弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
- 荻野谷正宏 2000「白岩式土器」の再検討『転機』7号
- 荻野谷正宏 2000「遠江における弥生中期後半の土器様相と『折衷土器』」『折衷型土器と土器変遷』第1回

例会発表要旨集 中部弥生時代研究会

- 橋本裕行 1999「朝光寺原式土器成立過程の枠組み」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』頌寿記念会編
- 浜田晋介 1998「朝光寺原式土器の成立をめぐる」『川崎市市民ミュージアム 紀要』第11集
- 春成秀爾 1993「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集 共同研究「葬墓制と他界観」
国立歴史民俗博物館
- 久田正弘 1999「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌』92 長野県考古学会
- 増山 仁 1989「小松式土器の再検討—小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理を通して—」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌第32号 石川考古学研究会
- 山梨県考古学協会 1998『治水・利水遺跡を考える』人は水とどのようにつきあってきたか 第7回東日本埋蔵文化財研究会山梨大会実行委員会
- 弥生時代研究プロジェクトチーム 2002「宮ノ台式土器の研究（1）」『かながわの考古学』研究紀要7 財団法人 かながわ考古財団
- 若狭 徹 1991「北西関東における弥生土器の成立と展開」『駿台史学』89 駿台史学会
- 青木義脩他 1982『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第20集 浦和市遺跡調査会
- 青木義脩他 1983『松木北・松木遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第23集 浦和市遺跡調査会
- 青木義脩他 1983『西谷・和田南・大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第25集 浦和市遺跡調査会
- 青木義脩他 1987『上野田西台遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第73集 浦和市遺跡調査会
- 青木義脩他 1988『上野田西台遺跡（第4次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第108集 浦和市遺跡調査会
- 剣持和夫他 1984『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』住宅・都市整備公団浦和南部地区 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山田尚友他 2000『東裏西遺跡（第2次）・東裏遺跡（第4次）・下野田稻荷遺跡（第3次）・大門西裏南遺跡（第2次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第277集 浦和市遺跡調査会
- 笹森紀巳子 1989『大和田本村北遺跡』第2次調査 大宮市遺跡調査会報告第64集 大宮市遺跡調査会
- 山形洋一他 1989『御蔵山中遺跡—1—』大宮市遺跡調査会報告第26集 大宮市遺跡調査会
- 青木文彦他 2001『木曽良・上野六丁目・西原・村国道下』岩槻市文化財調査報告書第22集 埼玉県岩槻市教育委員会
- 早川智明他 1972『加倉・西原・馬込・平林寺』東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 埼玉県遺跡調査会
- 埼玉県遺跡調査会 1971『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査会報告第8集 埼玉県遺跡調査会
- 小出輝雄 1983『針ヶ谷遺跡群』通遺跡第3地点の調査 富士見市遺跡調査会調査報告第21集 富士見市遺跡調査会
- 加藤恭明他 1985『附島遺跡』附島遺跡発掘調査報告書Ⅰ 埼玉県坂戸市教育委員会

江原昌俊他 1993『岩鼻遺跡（第2次）』埼玉県東松山市埋蔵文化財発掘調査報告 東松山市文化財調査報告書第21集 東松山市教育委員会

栗原文蔵他 1973『岩の上・雉子山』埼玉県遺跡発掘調査報告第1集 埼玉県教育委員会

鈴木孝之他 1991『代正寺・大西』一般国道407号線東松山市地内埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

横川好富他 1974『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告第5集 埼玉県教育委員会

東松山市 1977『雉子山』東松山市史編纂調査報告第8集 東松山市

中島 宏 1984『池守・池上』一般国道125号埋蔵文化財発掘調査報告書 埼玉県教育委員会

宮 昌之 1983『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

吉田 稔他 1991『小敷田遺跡』一般国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

木戸春夫 1955『根絡・横間栗・関下』一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

寺社下博 1988『天神遺跡』スポーツ文化公園取り付け道路内遺跡発掘調査 昭和62年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県熊谷市教育委員会

寺社下博 2001『一本木前遺跡Ⅱ』平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県熊谷市教育委員会

吉野 健 2001『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書 埼玉県熊谷市遺跡調査会

吉野 健 2002『前中西遺跡Ⅱ』平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県熊谷市教育委員会

吉野 健 2000『寺東遺跡・別府市館跡』平成11年度熊谷市埋蔵文化財報告書 埼玉県熊谷市教育委員会

石坂俊郎他 2000『堀東／城西』福川河川改修事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第257集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

磯崎一他 1989『新田裏・明戸東・原遺跡』一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

滝瀬芳之他 1993『上敷免遺跡』一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

高橋俊男 1982『袋・台遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書 吹上町教育委員会

岩田明広 1998『今井条里遺跡』本庄今井工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

細田 勝 1984『向田・権現塚・村後』県道蛭川・普済寺線関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

恋河内昭彦 1990『雷電下遺跡（b地点）』児玉町文化財調査報告書第13集

恋河内昭彦 1990『根田遺跡』児玉町文化財調査報告書第12集

恋河内昭彦 1995『飯玉東Ⅱ・高縄田・桶越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集

栗島義明 1988『姥原遺跡』自治セミナー関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第72集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

石井博他 1980『折本西原遺跡』横浜市都市計画道路新横浜元石川線折本地区埋蔵文化財発掘調査報告書
横浜市埋蔵文化財調査委員会

岡本勇他 1994『大塚遺跡』弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅱ遺物編 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XV 横浜市ふるさと歴史財団

宮原俊一 2000『王子ノ台遺跡』第Ⅲ巻 弥生・古墳時代編 東海大学校地内遺跡調査団

相京建史他 1981『清里・庚申塚遺跡』昭和54年度県営畑地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財調査報告書第2集 群馬県埋蔵文化財調査事業団

井上 太 1987『小塚・六反田・久保田遺跡発掘調査報告書』 富岡市教育委員会

群馬県史編さん委員会 1986『群馬県史』資料編2 原始古代2 群馬県

伊藤伸久他 1996『常代遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第112集 君津郡市文化財センター

大淵淳志他 1994『安房仮屋塚』房総半島最南端弥生時代中期の方形周溝墓の調査 仮屋塚遺跡第6次・第7次発掘調査報告書 宝珠院遺跡1991年度確認調査報告書 千葉県三芳村教育委員会

斎木勝他 1974『市原市菊間遺跡』市原市菊間地区における公営住宅建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告 千葉県都市部

三森俊彦他 1974『市原市大厩遺跡』 財団法人 千葉県開発公社 千葉県都市公社

橋口尚武他 1983『三宅島 坊田遺跡』東京都埋蔵文化財調査報告第10集 東京都教育委員会

小林三郎他 1996『飛鳥山遺跡』 東京都北区教育委員会郷土博物館建設準備委員会

亀田幸久 2001『大塚古墳群内遺跡・塚原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第244集 栃木県教育委員会

田代隆他 1976『烏森遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第80集 栃木県文化振興事業団

田村雅美他 2001『へび塚遺跡』佐野新都市開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 栃木県埋蔵文化財調査報告第258集 栃木県教育委員会

細谷正策他 1987『御新田遺跡・富士前遺跡・ヤッチャラ遺跡・下り遺跡』宇都宮競馬場附属きゅう舎建設地内遺跡 栃木県埋蔵文化財調査報告第85集 栃木県教育委員会

佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1987『大崎台遺跡発掘調査報告書』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

青木一男 1998『松原遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 日本道路公団 長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター

飯島哲也・寺島孝典 1993『松原遺跡Ⅲ』長野市教育委員会

小山岳夫 1987『北西の久保』佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第8集 佐久市教育委員会 佐久埋蔵文化財センター

羽毛田卓也他 1998『根々井芝宮遺跡』宮の上遺跡群 佐久市埋蔵文化財調査報告書第49集 佐久市教育委員会

坂上有紀他 2000『平田遺跡』県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 新潟県教育委員会

附偏

北島遺跡から出土した木材の樹種同定分析について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北島遺跡は、利根川と荒川に挟まれた沖積低地から微高地にかけて位置する。地形的には、荒川新扇状地の扇端部付近に位置し、微高地は扇状地上に形成された自然堤防とされる（籠瀬，1990）。本遺跡では、発掘調査により、弥生中期後半の水田跡と集落跡が検出された。水田跡では、水を取り込むための堰や用水路なども確認されている。

本報告では、出土した木製品、堰構築材、立木等について樹種同定を行い、種類を明らかにする。

1. 試料

試料は、木製品、堰構築材、立木等50点（試料番号1～50）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2. 方法

各試料の接合面または破損面を利用して、5mm～1cm角程度の木片を採取した。なお、試料番号1については、完成品で破損面もほとんど認められなかったため、製品から直接切片を作成した。この際、木口面と板目面の切片は作成できたが、柁目面については木製品の木取りの関係から採取できなかった。

木片試料については、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。

切片をスライドガラス上に載せ、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹1種類（イヌガヤ）と広葉樹11種類（ヤナギ属・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ムクノキ・ケヤキ・ヤマグワ・カツラ・ヌルデ・カエデ属・ムクロジ・ハリギリ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.） イヌガヤ科イヌガヤ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞は、早材部・晩材部の区別なく散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。柁目面が採取できなかった目、分野壁孔の形態は不明。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

・ヤナギ属（*Salix*） ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して、年輪全体にはほぼ一様に散在し、年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

複合放射組織が認められなかったが、その他の特徴が一致することからアカガシ亜属に同定した。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.)

Planchon) ニレ科ムクノキ属

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～5細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino)

ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret)

クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1～5列、晩材部への移行は緩やかで、小道管は漸減しながら塊状に複合して接線・斜方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁には

表1 樹種同定結果

番号	遺構	器種	樹種
1	SD7	膝柄斧	イヌガヤ
2	堰周囲	容器未製品	ヤマグワ
3	堰	小型容器	ケヤキ
4	堰	No.2形代	カエデ属
5	堰	No.4直柄斧	コナラ属アカガシ亜属
6	堰	杭-1	カツラ
7	堰	杭-2	ヌルデ
8	堰	杭-3	カエデ属
9	堰	杭-4	ヤマグワ
10	堰	杭-5	ヤマグワ
11	堰	杭-6	ヤマグワ
12	堰	杭-7	ハリギリ
13	堰	杭-8	カツラ
14	堰	杭-9	カエデ属
15	堰	杭-10	カツラ
16	堰	杭-11	ヤマグワ
17	堰	杭-12	ヤマグワ
18	堰	杭-13	ムクロジ
19	堰	杭-14	クリ
20	堰	杭-15	カエデ属
21	堰	杭-16	ムクロジ
22	堰	杭-17	カツラ
23	堰	杭-18	ヤマグワ
24	堰	杭-19	ヤマグワ
25	堰	杭-20	ヤマグワ
26	堰	杭-21	ヤマグワ
27	堰	杭-22	ムクロジ
28	堰	杭-23	ヤマグワ
29	堰	杭-24	ヤマグワ
30	堰	杭-25	ヤマグワ
31	堰	杭-26	ヤマグワ
32	堰	杭-27	カエデ属
33	堰	杭-28	ヤマグワ
34	堰	杭-29	カエデ属
35	堰	杭-30	ヤマグワ
36	堰	支保1	ヤマグワ
37	堰	支保1-杭2	ヤマグワ
38	堰	支保1-杭1	ヤマグワ
39	堰	支保-2	ヤマグワ
40	堰	支保-3	ヤマグワ
41	堰	支保-4	ヤマグワ
42	堰	支保-5	ヤナギ属
43	堰	支保-6	ヤナギ属
44	堰	支保3-杭1	ヌルデ
45	堰	支保4-杭1	ヤナギ属
46	堰	支保5-杭1	ムクロジ
47	堰	支保6-杭1	ムクロジ
48	堰	横木5	ヤマグワ
49	堰	倒木	ムクノキ
50	SD7	台付容器	ムクノキ

らせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～30細胞高。

・ヌルデ (*Rhus javanica* L.) ウルシ科ウルシ属

試料は、いずれも年輪幅が広い。年輪界を挟んだ道管径の変化が観察できなかったが、晩材部に向かって径を大きく減少させること等から環孔材と判断した。小道管は管壁厚は中庸、横断面では楕円形～やや角張り、2～3個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～5細胞幅、1～40細胞高であるが、時に上下に連結する。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圏部はやや疎な1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帯状およびターミナル状。

・ハリギリ (*Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai) ウコギ科ハリギリ属

環孔材で、孔圏部は疎な1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列上に配列する。放射組織は異性Ⅲ～同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。

4. 考察

樹種同定を行った木材は、堰の構築材（杭・支保）、木製品（膝柄斧・容器未製品・小型容器・台付容器・形代・直柄斧）、自然木（倒木）に大別される。堰の構築材は、ヤマグワが多く利用され、他にカツラ、ヌルデ、カエデ属、クリ、ムクロジ、ハリギリ、ヤナギ属が認められた。この結果から、ヤマグワを主とした木材利用が推定される。ヤマグワの木材は、強度や耐水性等に優れた材質を有する。そのため、利用する木材を選定する際に材質が考慮された可能性がある。ただし、検出された種類が多岐にわたり、中には保存性の低い木材（ヤナギ属等）も認められることから、周辺で入手可能な木材を利用し、偶然ヤマグワが多くなった可能性もある。

木製品では、容器未製品にヤマグワ、小型容器にケヤキ、台付容器にムクノキが認められた。このうち、ヤマグワやケヤキは、これまでの分析例で出土した容器によく認められている樹種であり、現在の民族事例でも利用される（橋本，1979；島地・伊東，1988）。寿能遺跡では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の木製容器が出土しており、その樹種同定が行われている（鈴木ほか，1984）。その結果では、縄文時代はサ

クラ属、トチノキ、イヌガヤの3種類がほとんどを占めているが、古墳時代になるとクリやハンノキ属の利用が多くなり、奈良・平安時代ではケヤキが多くを占める。また、器種による樹種の違いも認められている。時代によって樹種が異なる背景には、工具が石から鉄製に変化したことによる加工可能な木材の変化、加工法（刳物・挽物・曲物）、要求される精度、生産形態や流通機構の違い等が要因として挙げられる（山田ほか、1990）。本遺跡の容器についても、加工具や器種の違い等が木材利用に反映されている可能性がある。

膝柄斧は針葉樹のイヌガヤ、直柄斧は広葉樹のアカガシ亜属であった。イヌガヤは、針葉樹としては比較的緻密で硬い材質を有する。一方、アカガシ亜属は、重硬で強度の高い材質を有する。このことから、斧柄として堅く折れにくい材質の木材を選択していたことが推定される。樹種の違いは、斧の形状や用途の違いを反映している可能性があるが、現時点では詳細は不明である。

自然木はムクノキであった。ムクノキは、暖地の沖積地等に生育する落葉高木であり、現在の周辺地域でも生育している。今回の結果から、河道沿い等水分の多い場所に生育していたことが推定される。

北島遺跡では、過去に周辺植生等を明らかにするため花粉分析が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1998）。その結果では、イネ科や水生植物の花粉化石が多く、樹木では、コナラ属、アカガシ亜属、クマシデ属－アサダ属等で構成される植生が推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1995）が、この結果は本遺跡の結果とも調和的である。また、熊谷市小敷田遺跡では、五領期の自然木の樹種同定により、ヤマゲワ、エノキ属、カエデ属、トネリコ属、イヌガヤ、クヌギ節、ヤマウルシ、オニグルミ等が確認されており、落葉広葉樹を主とした二次林または疎林が見られ、山地に近い場所には針葉樹を交えた山地性の落葉広葉樹林が見られたことが推定されている（鈴木・能城、1991）。小敷田遺跡で確認された樹種は、本遺跡で認められた樹種とも一致しており、弥生時代の本遺跡周辺にも同様の植生が見られた可能性がある。

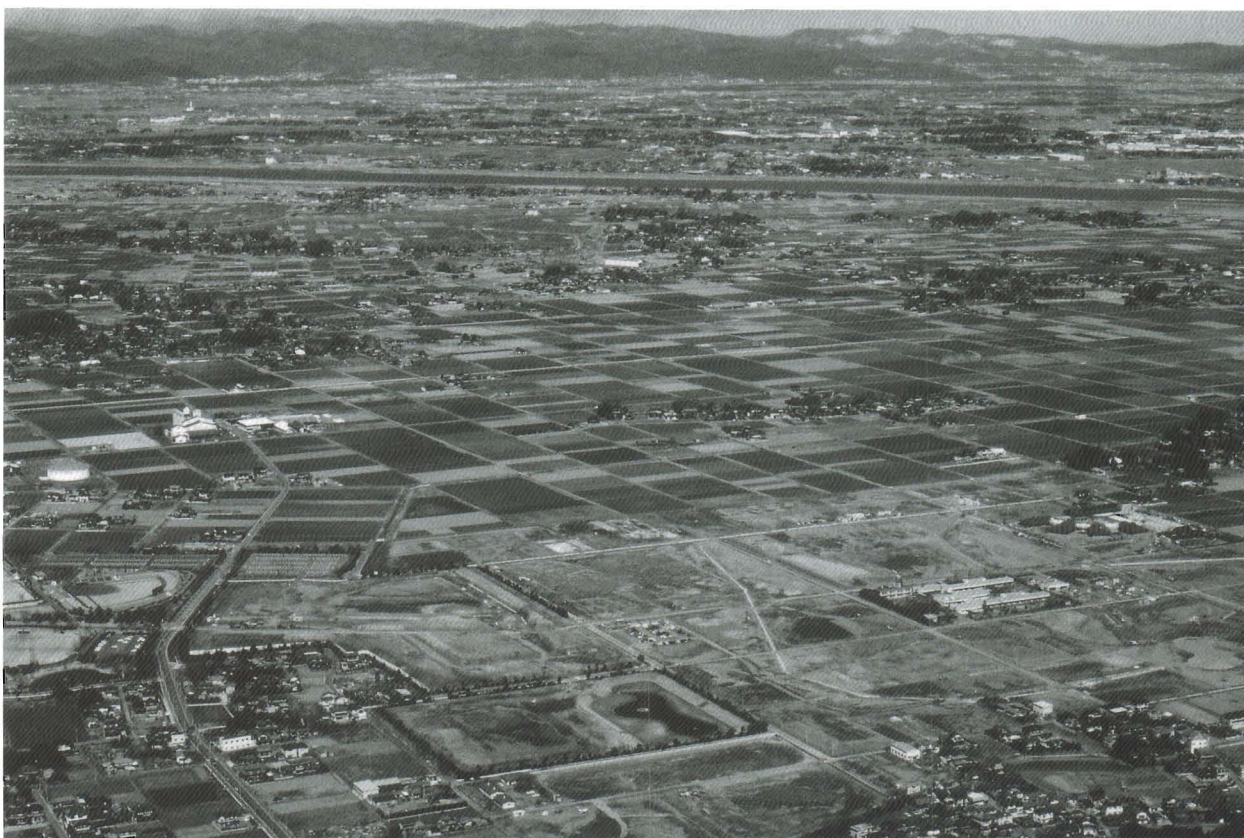
引用文献

- 橋本鉄男（1979）ろくろ（ものと人間の文化史31）、p.444、法政大学出版局
- 籠瀬良明（1990）自然堤防の諸類型 一河岸平野と水害一、p.202、古今書院
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1995b）テフラ・微化石の分析と古環境の復原、「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集 深谷市 城北遺跡 一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」（第3分冊）、p.796-811、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1998）北島遺跡の古環境変遷、「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集 熊谷市北島遺跡Ⅳ 第2分冊」、p.485-503、財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、296、雄山閣
- 鈴木三男・能城修一（1991）小敷田遺跡の木材化石群集、「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 行田市・熊谷市 小敷田遺跡 一般国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告〈河川跡遺跡編・第Ⅱ分冊〉」、p.268-318、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木三男・能城修一・植田弥生（1984）加工木の樹種、「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書 一人口遺物・総括編一」、p.699-724、埼玉県教育委員会
- 山田昌久・鈴木三男・能城修一（1990）考古学における木製遺物の樹種選択研究の現状、日本民具学会編「木と民具」、p.121-135、雄山閣

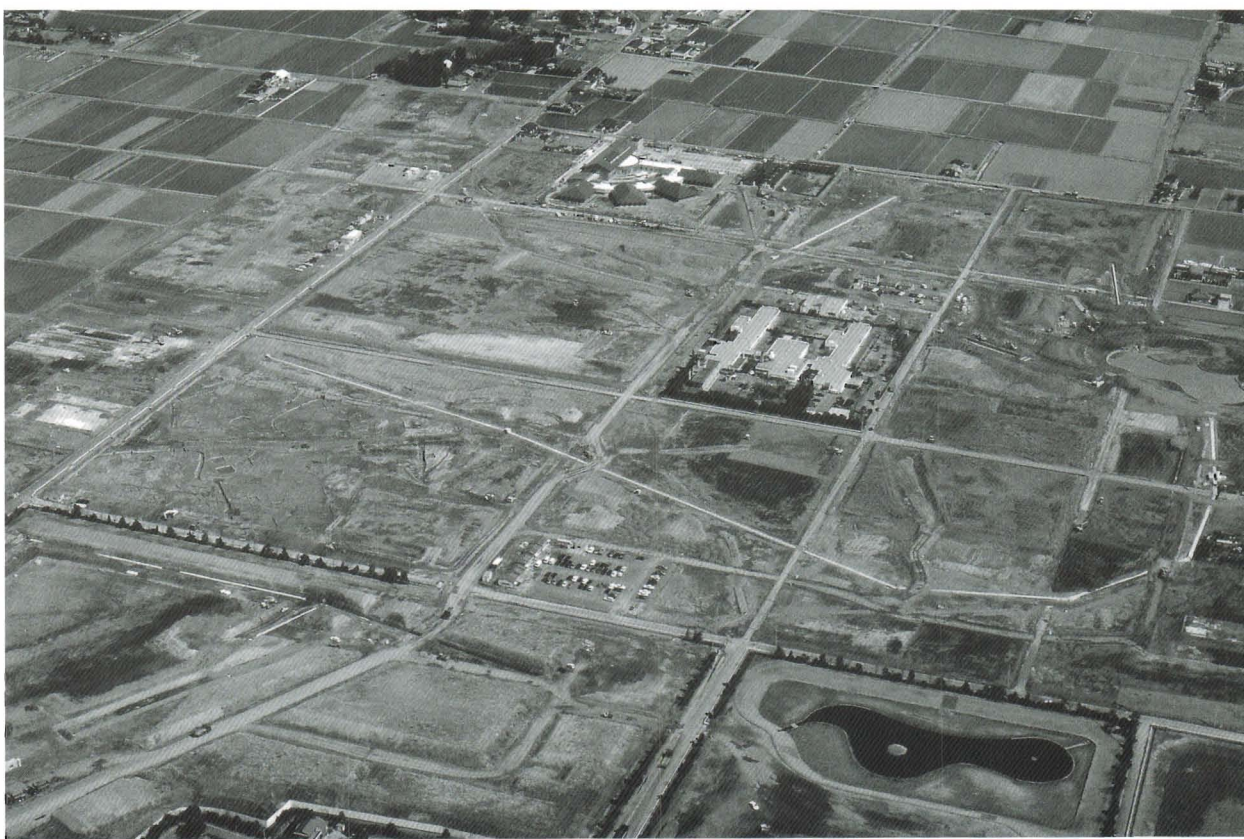
写真図版



北島遺跡第19地点空中写真



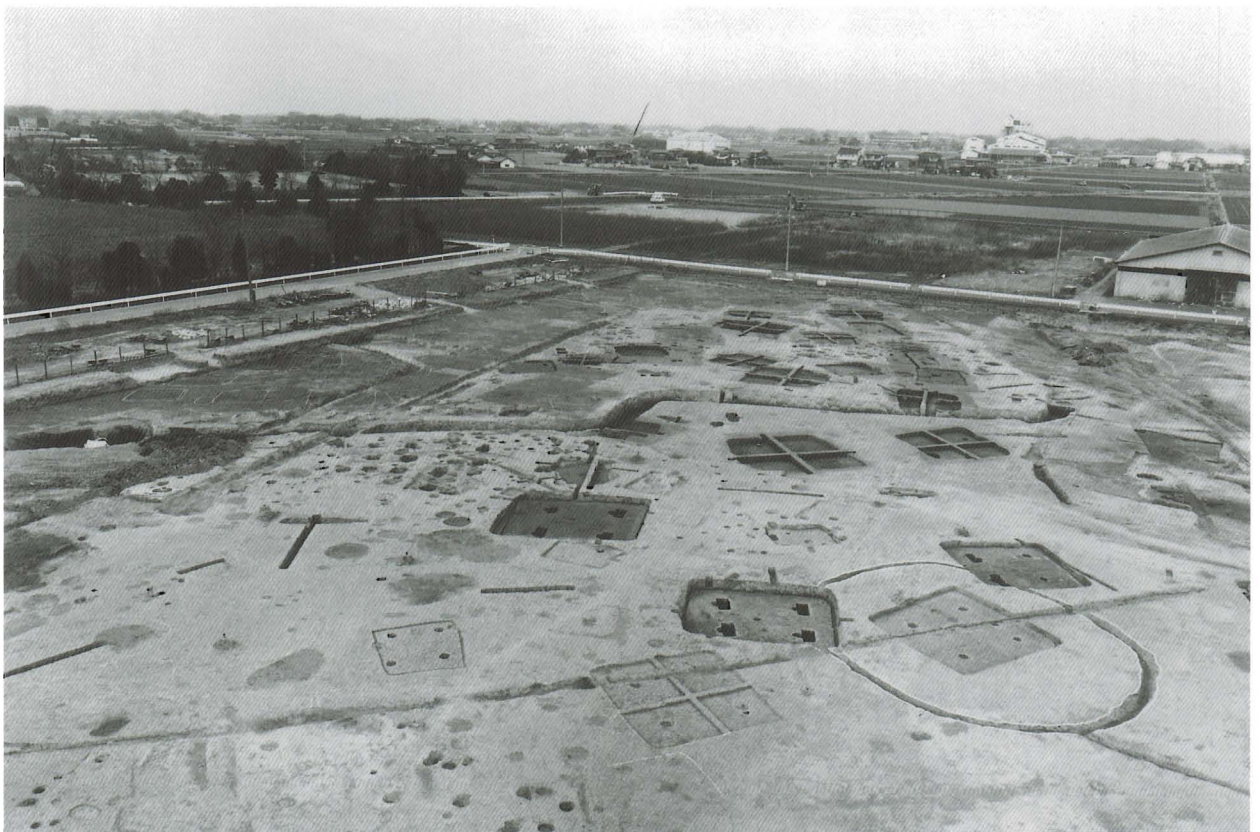
北島遺跡遠景



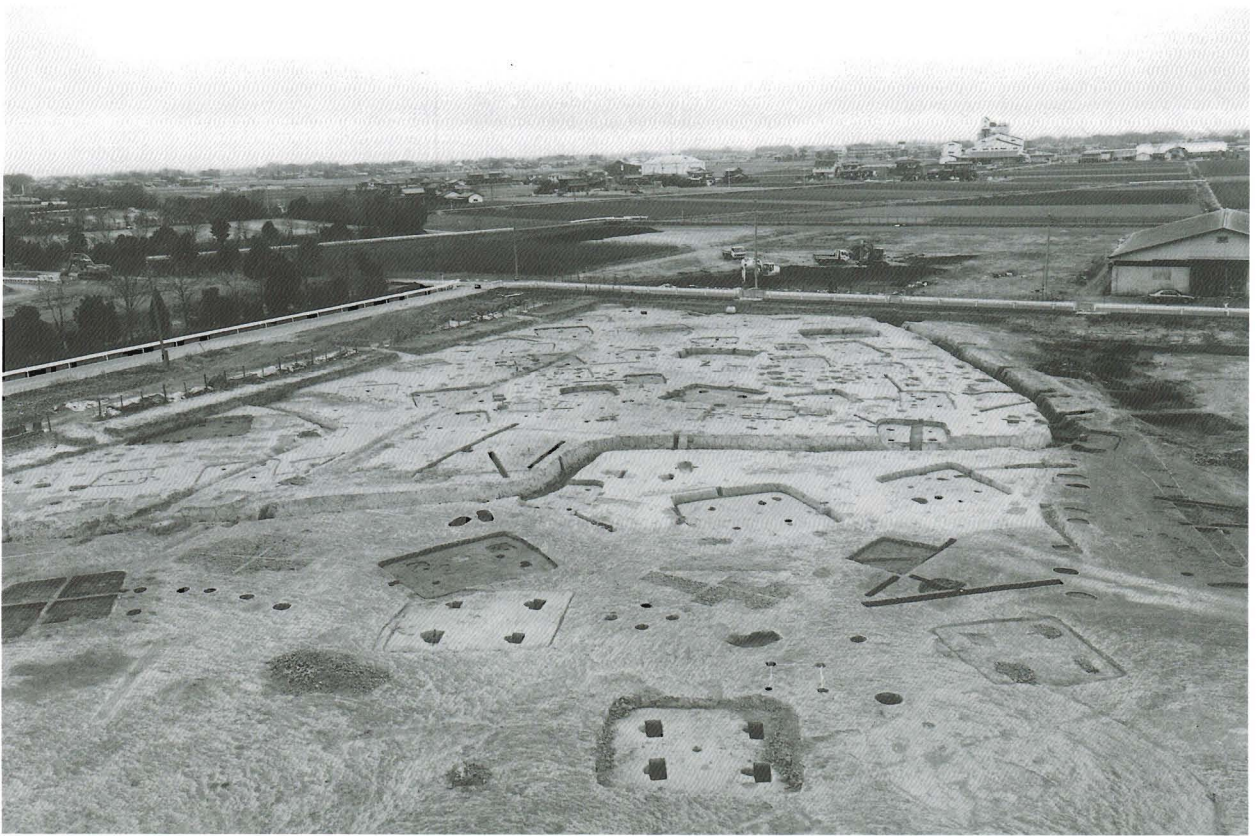
北島遺跡遠景



調査区全景(東側から)



調査区全景(南側から)



調査区全景(南側から)



調査区全景(西側から)



第142号住居跡



第165号住居跡



第173号住居跡



第195号住居跡



第198号住居跡



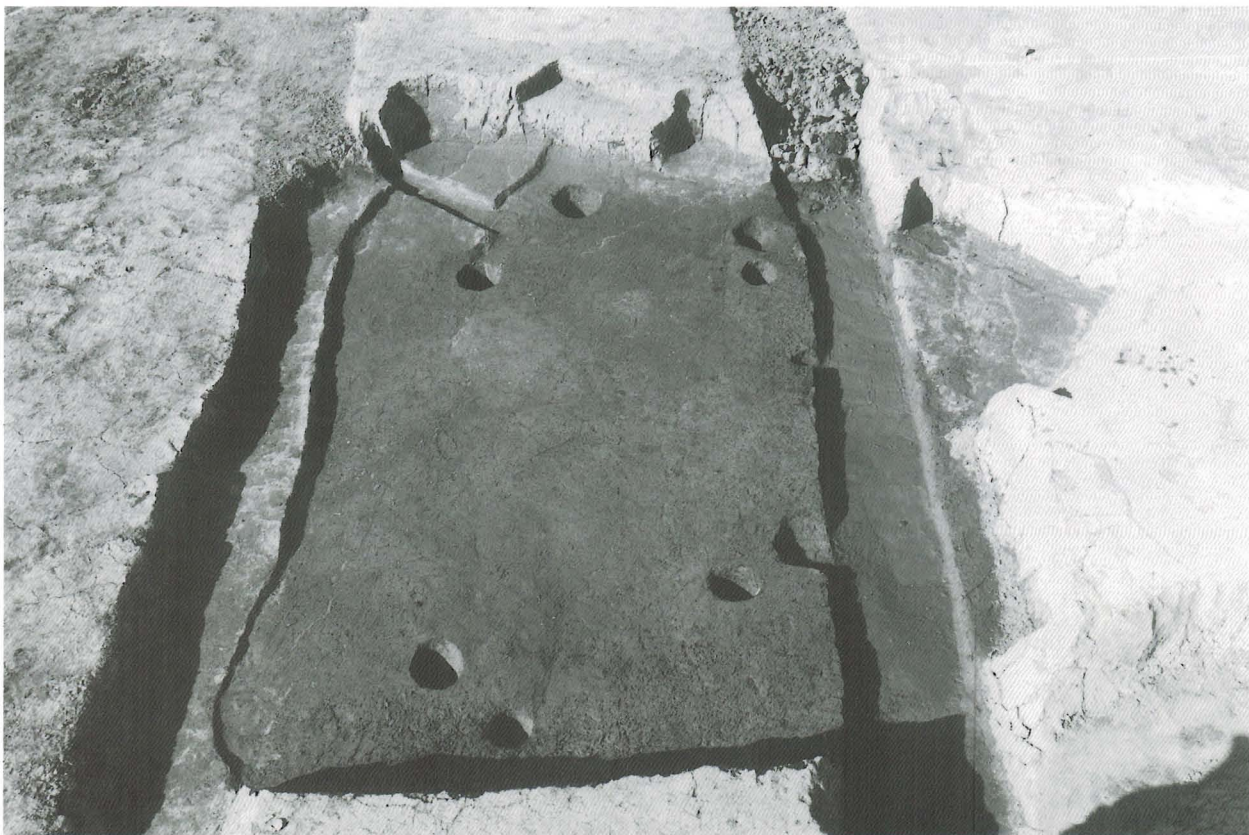
第199号住居跡



第195・198・199・217号住居跡



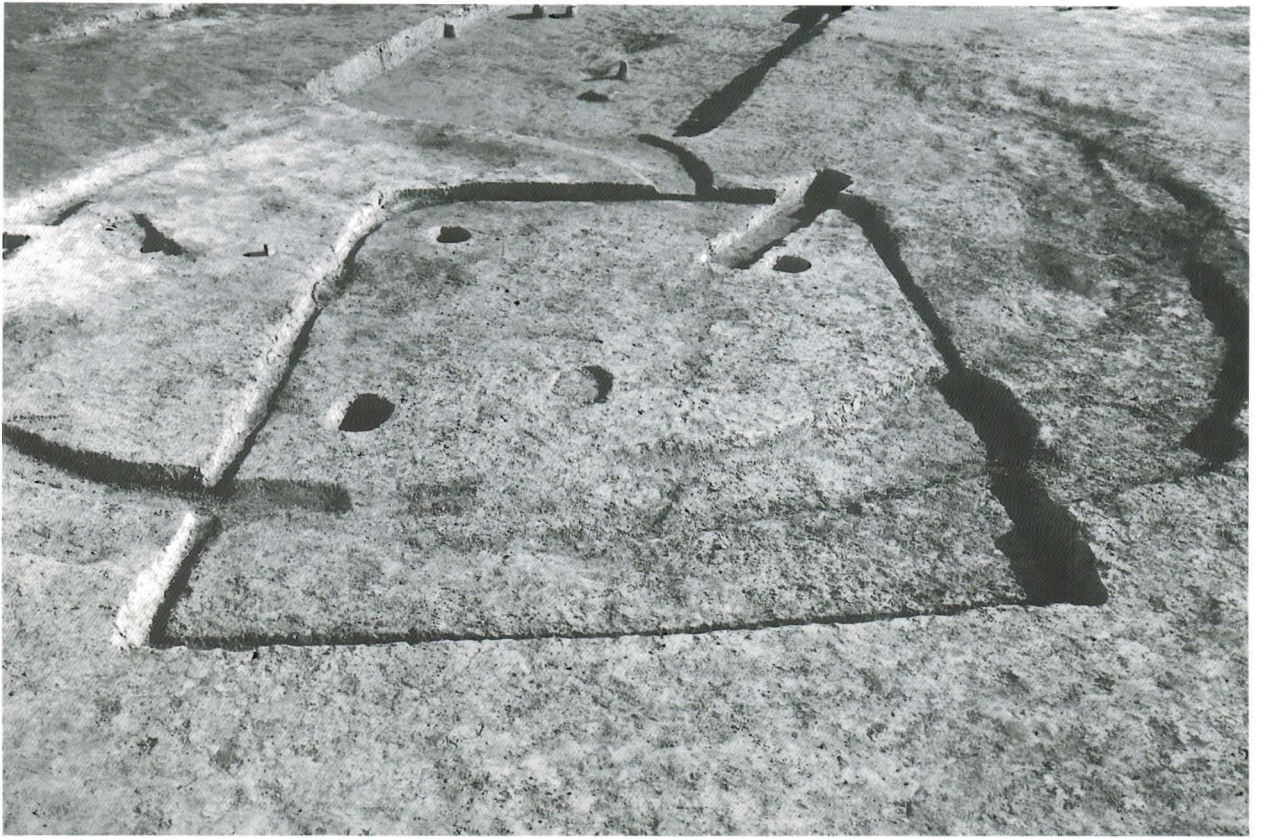
第209号住居跡



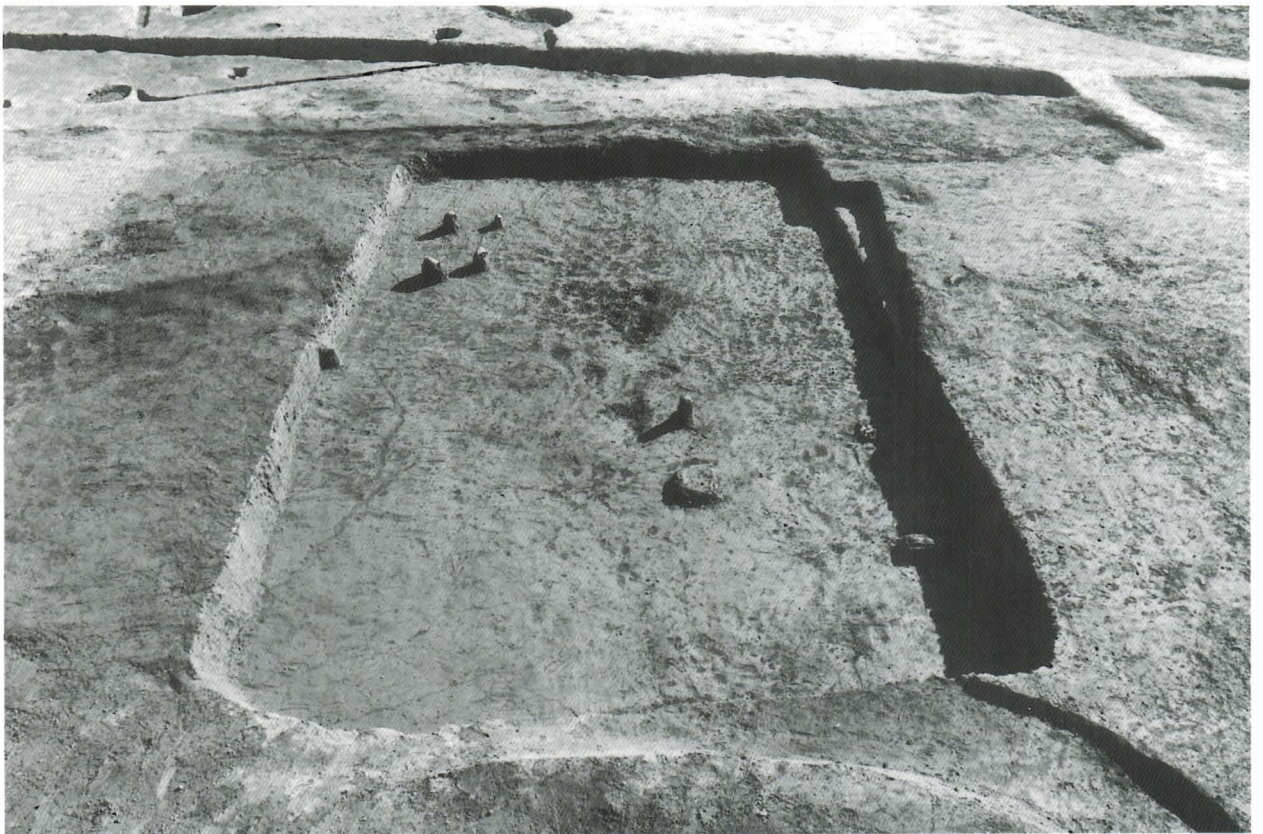
第210号住居跡



第214号住居跡



第215号住居跡



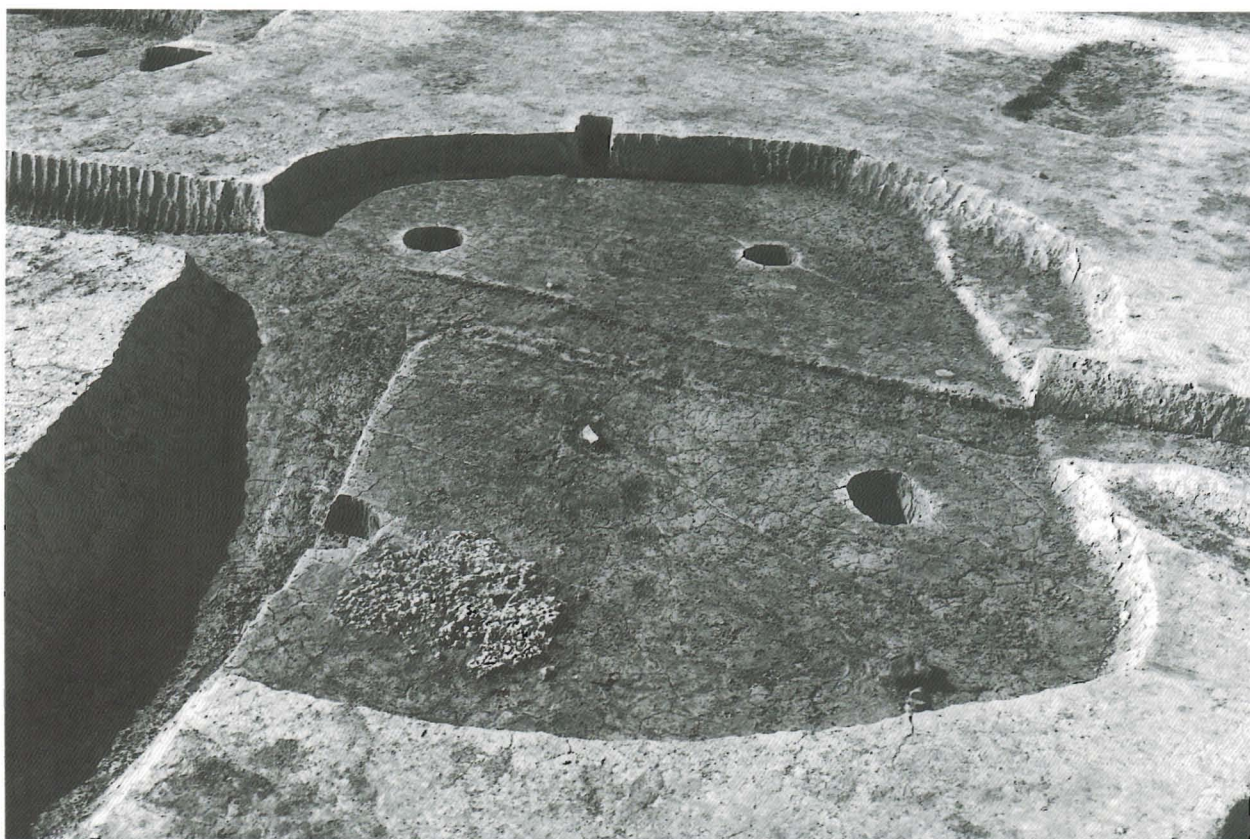
第216号住居跡



第217号住居跡(南側半分)



第217号住居跡(北側半分)



第228号住居跡



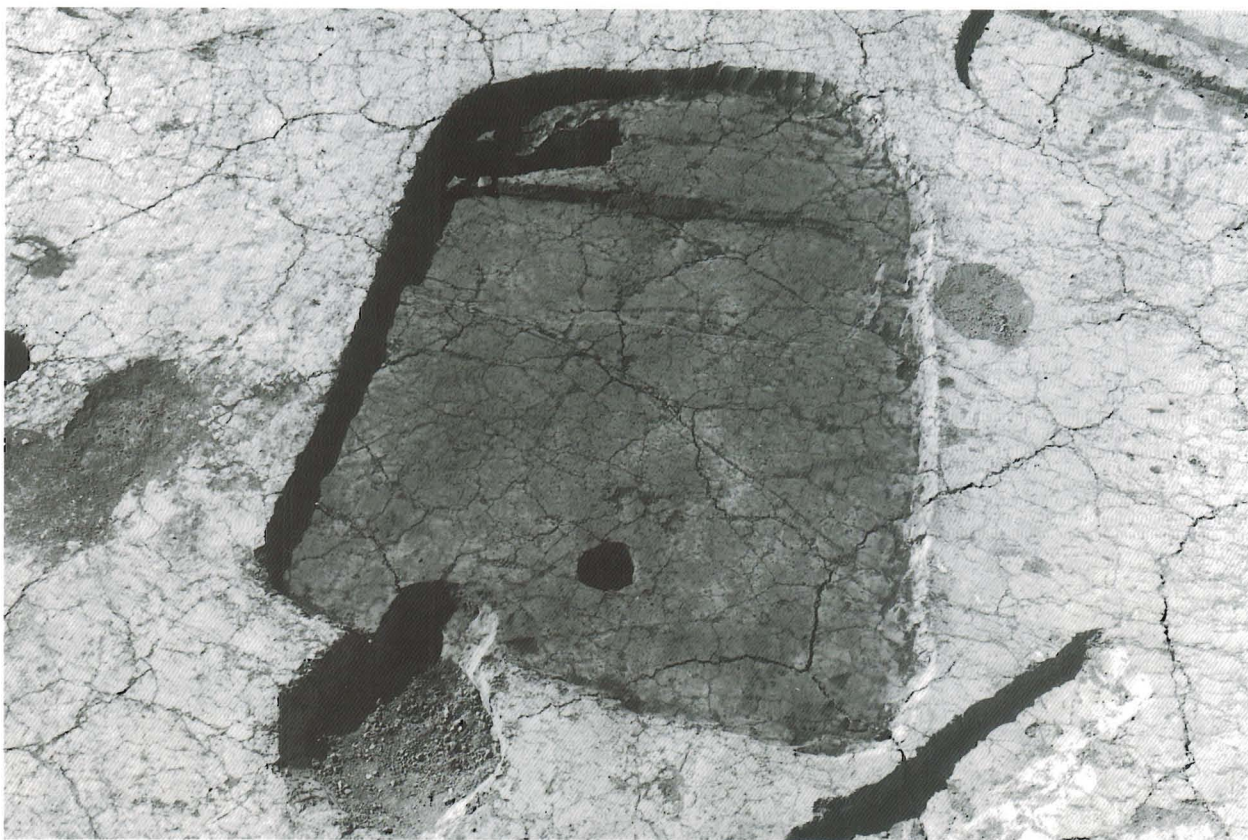
第229号住居跡



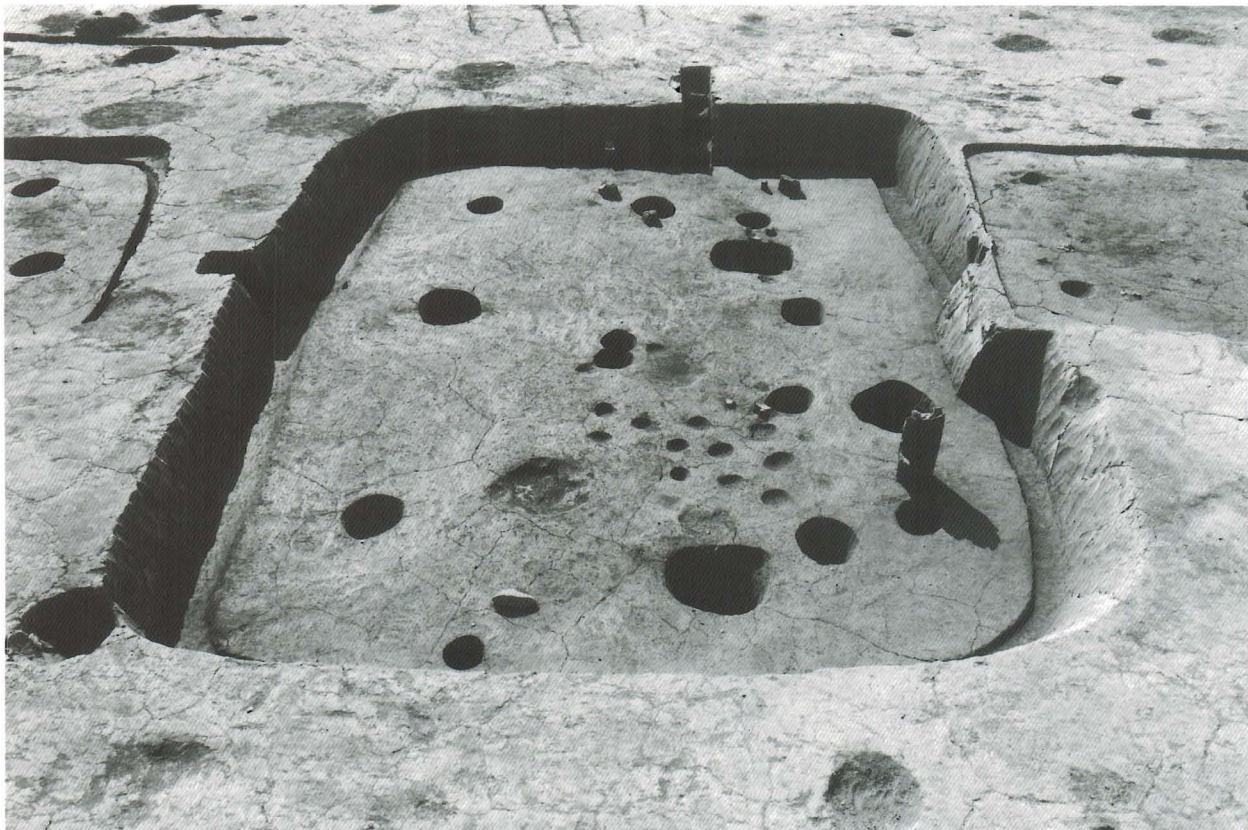
第231号住居跡



第234号住居跡



第256号住居跡



第259号住居跡



第264号住居跡



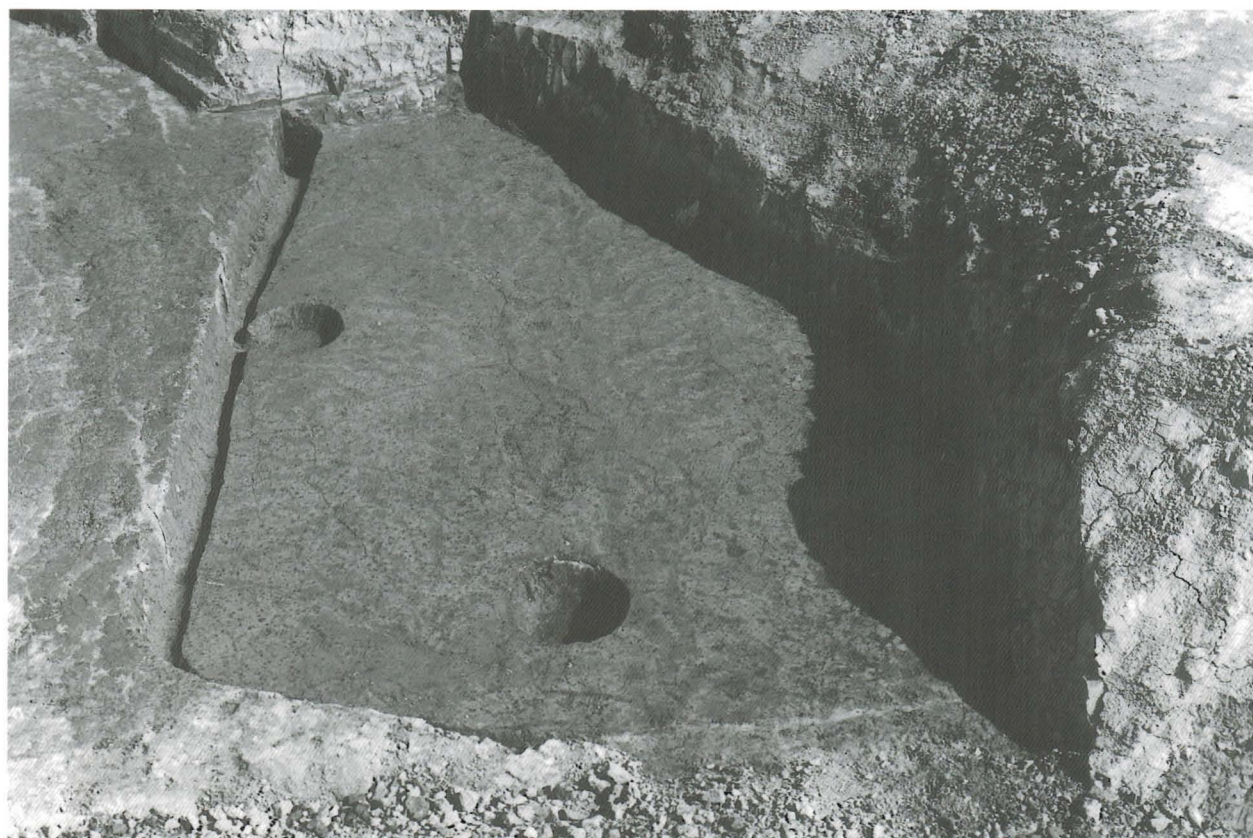
第268号住居跡



第269号住居跡



第274号住居跡



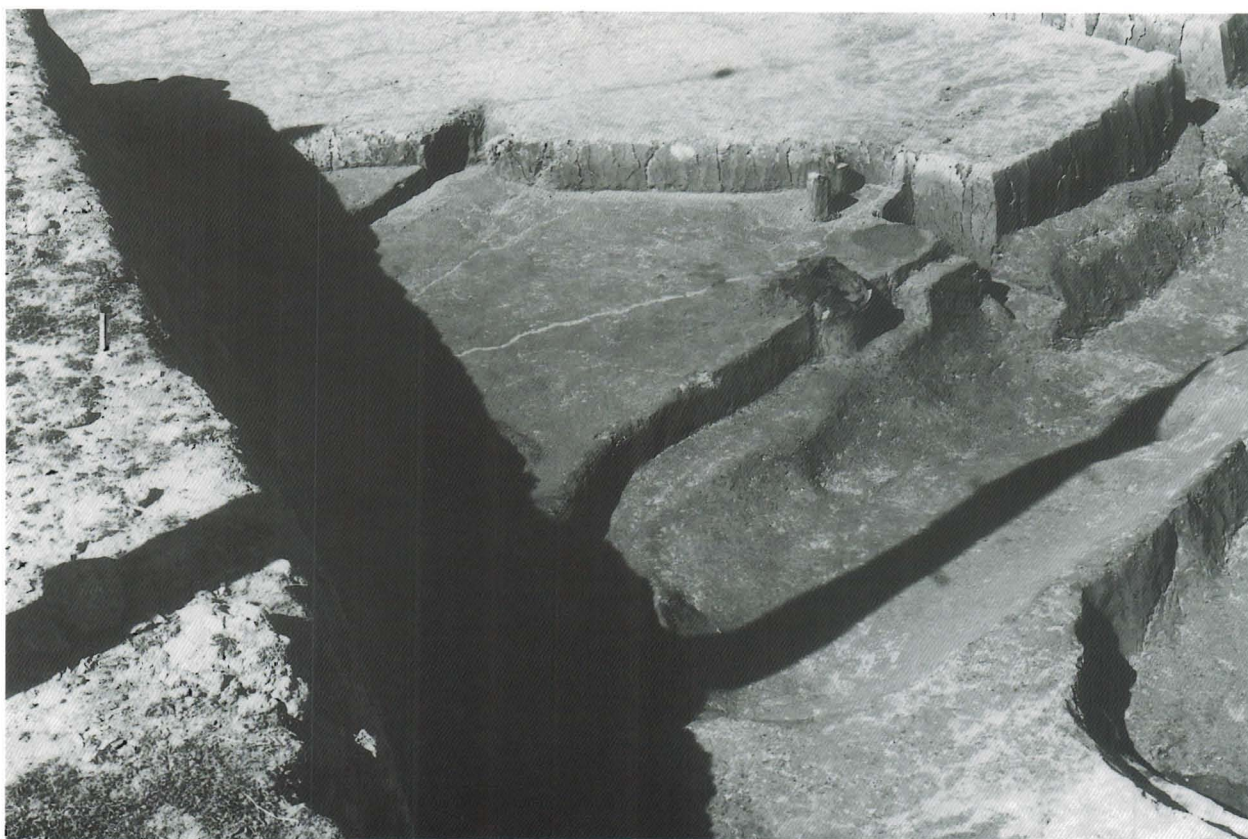
第288号住居跡



第293号住居跡



第300号住居跡



第301号住居跡



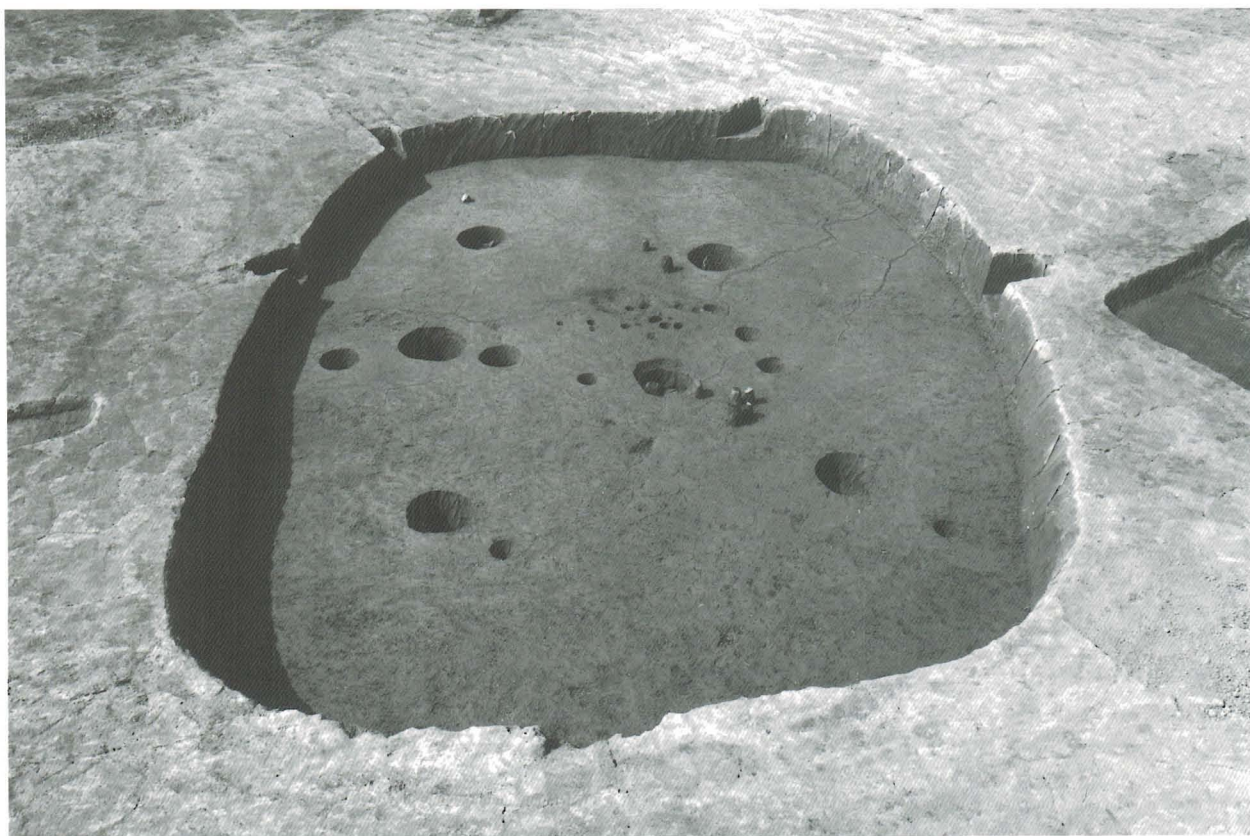
第303号住居跡(遺構確認状況)



第303号住居跡



第304号住居跡



第305号住居跡



第306号住居跡



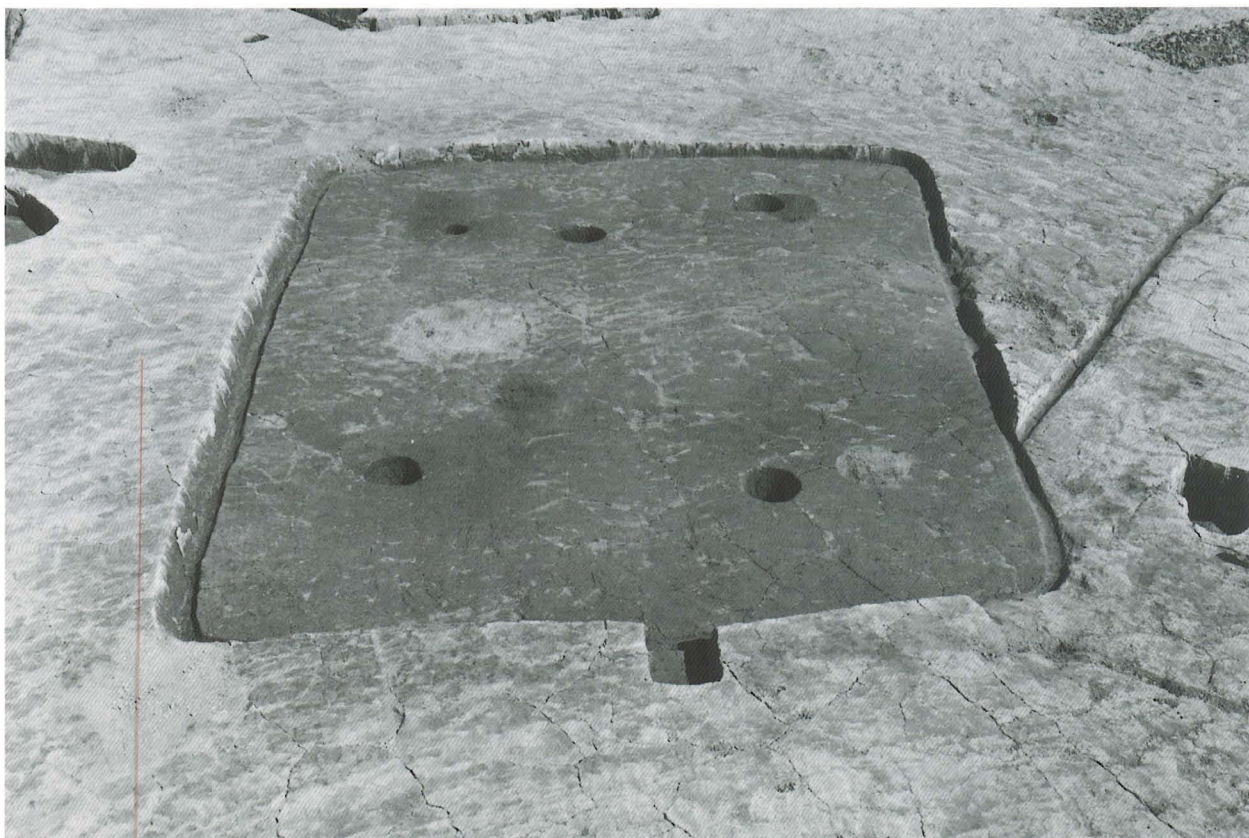
第307号住居跡



第309号住居跡



第310号住居跡



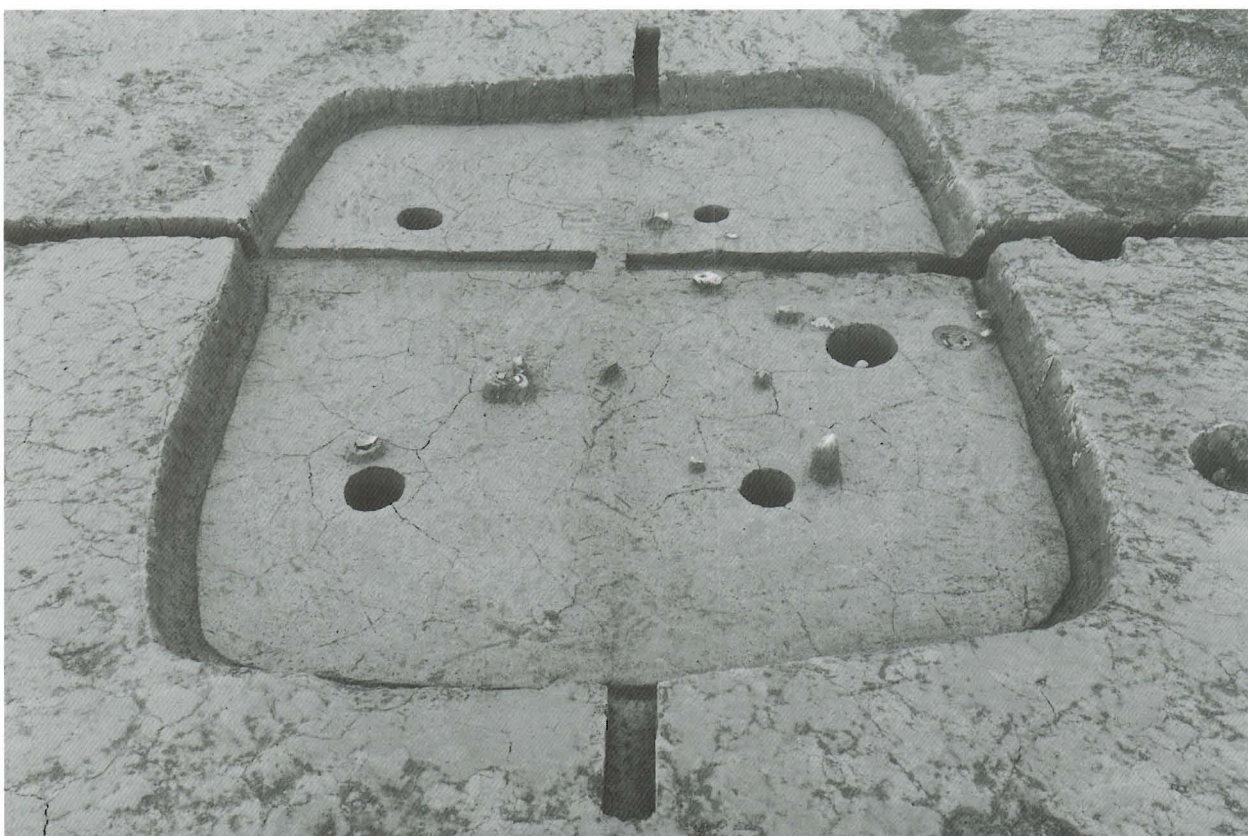
第312号住居跡



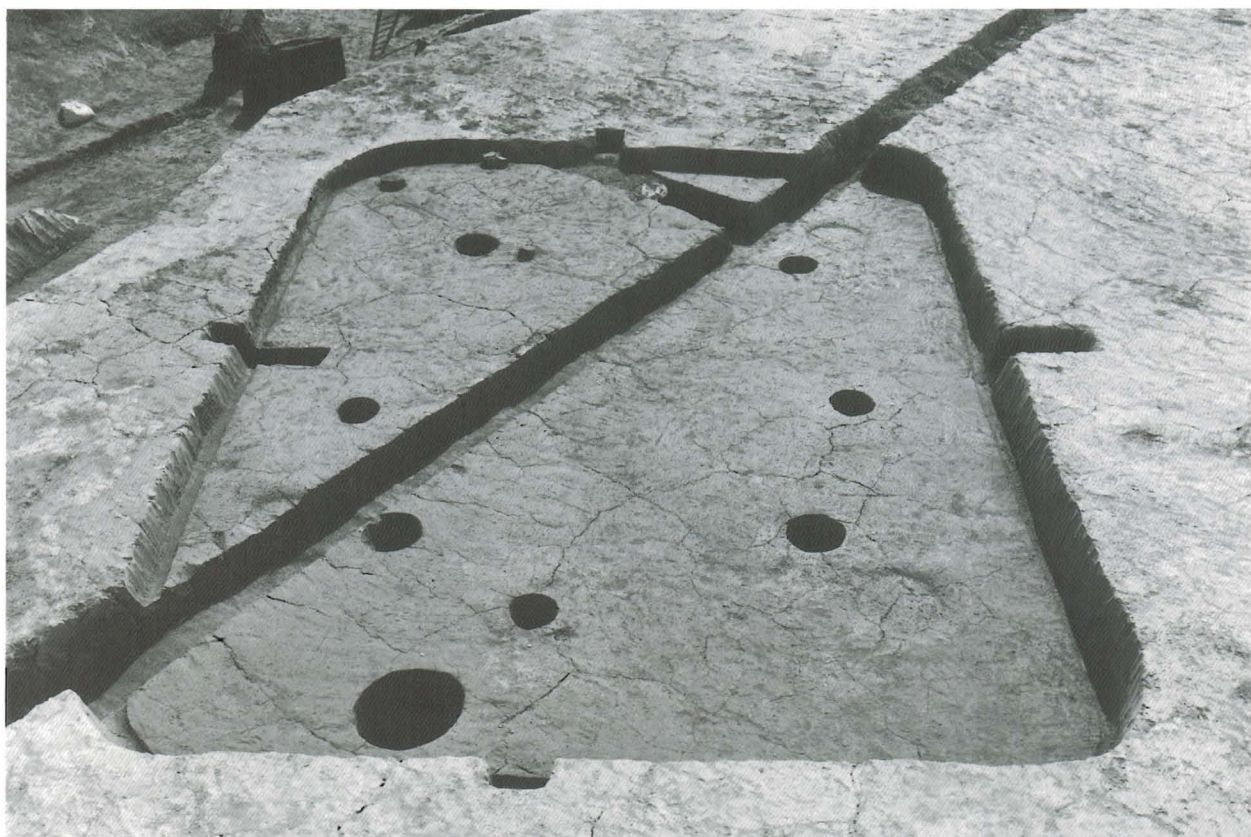
第313号住居跡



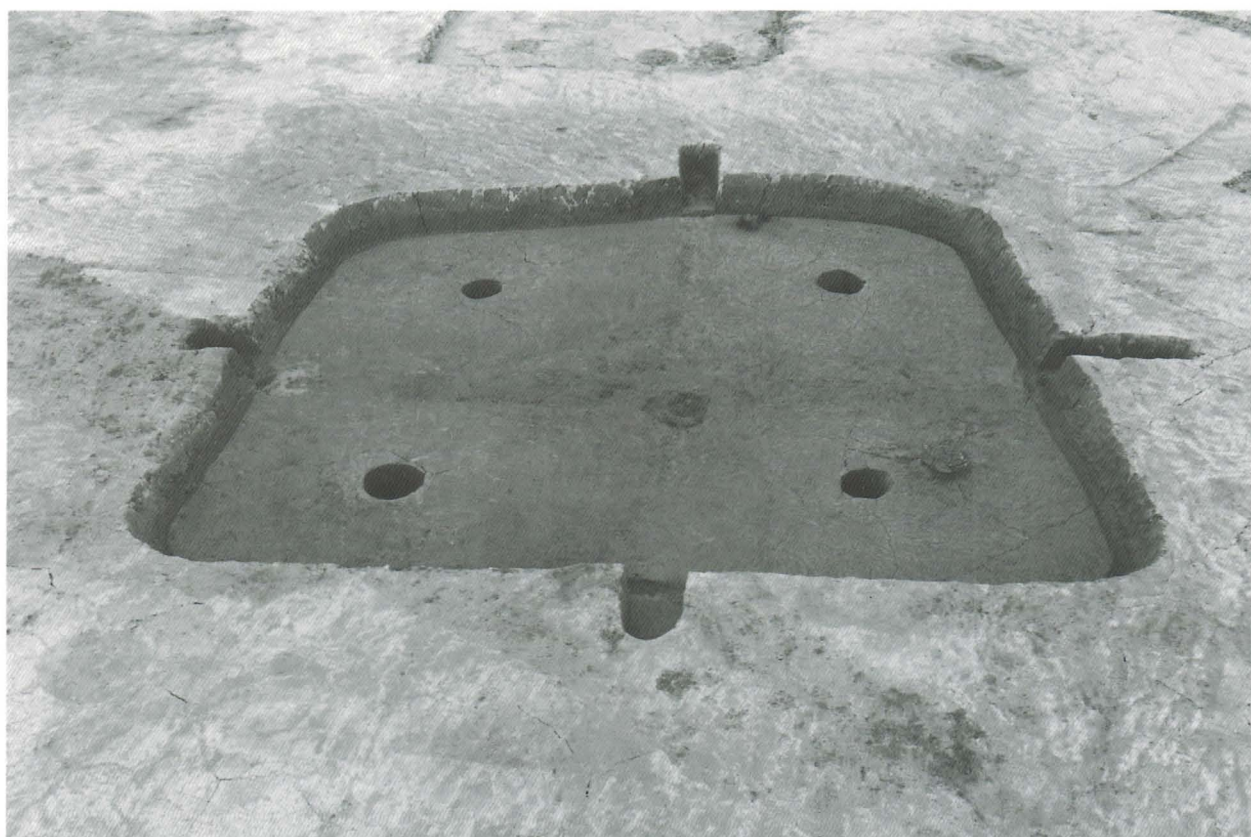
第316号住居跡



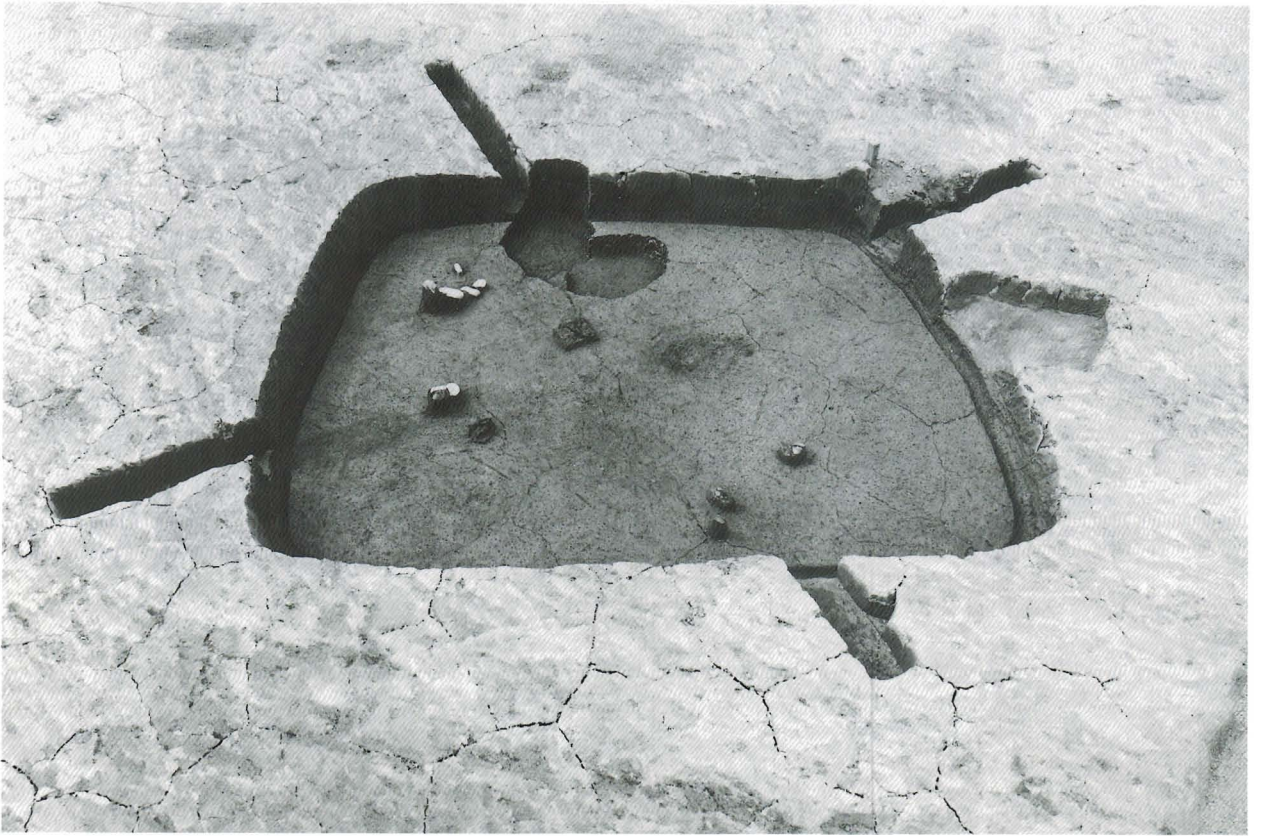
第317号住居跡



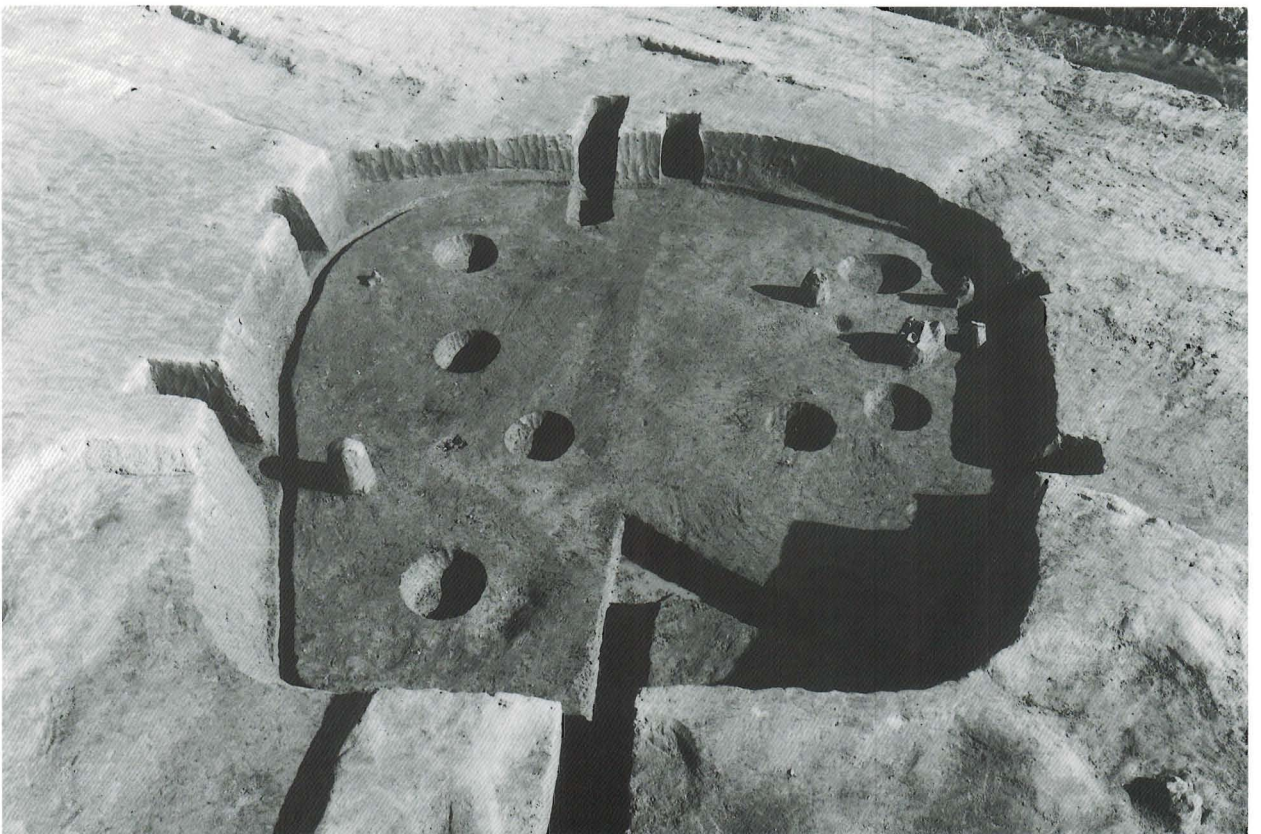
第320号住居跡



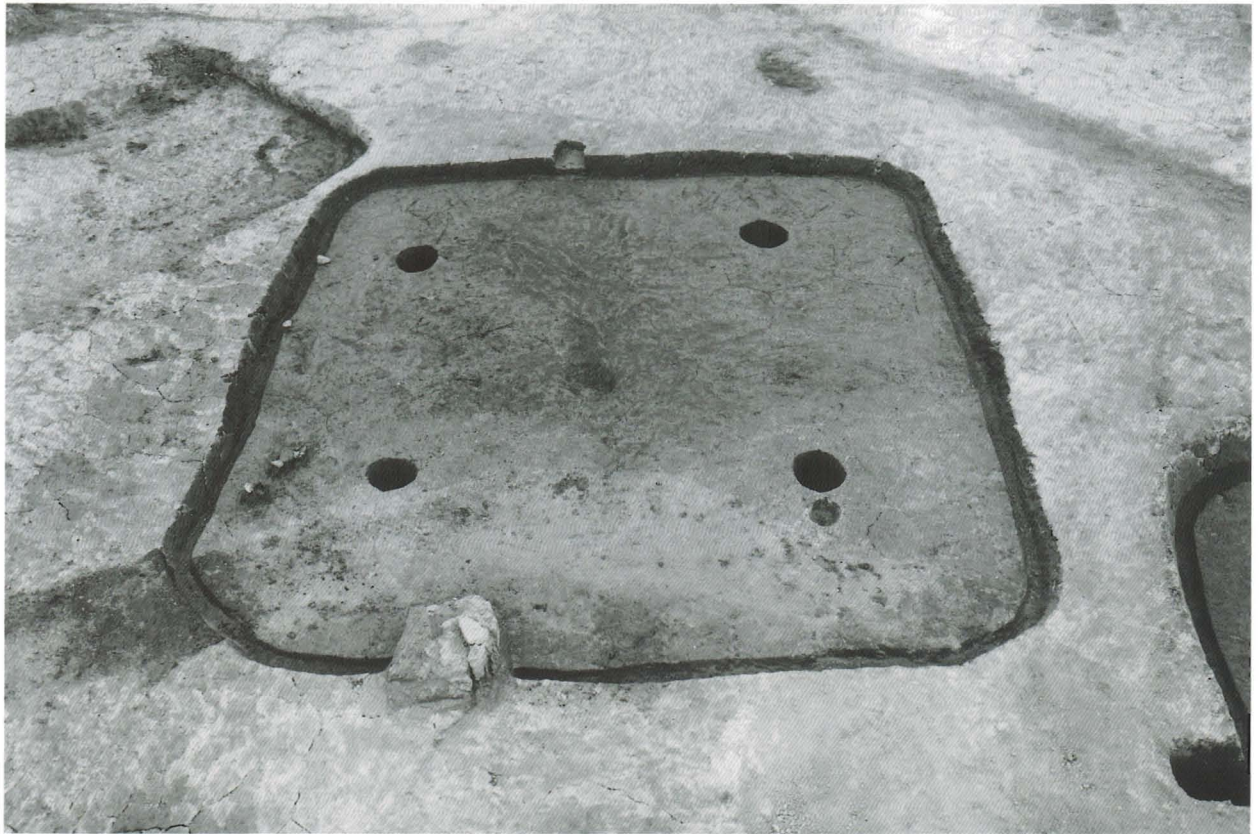
第323号住居跡



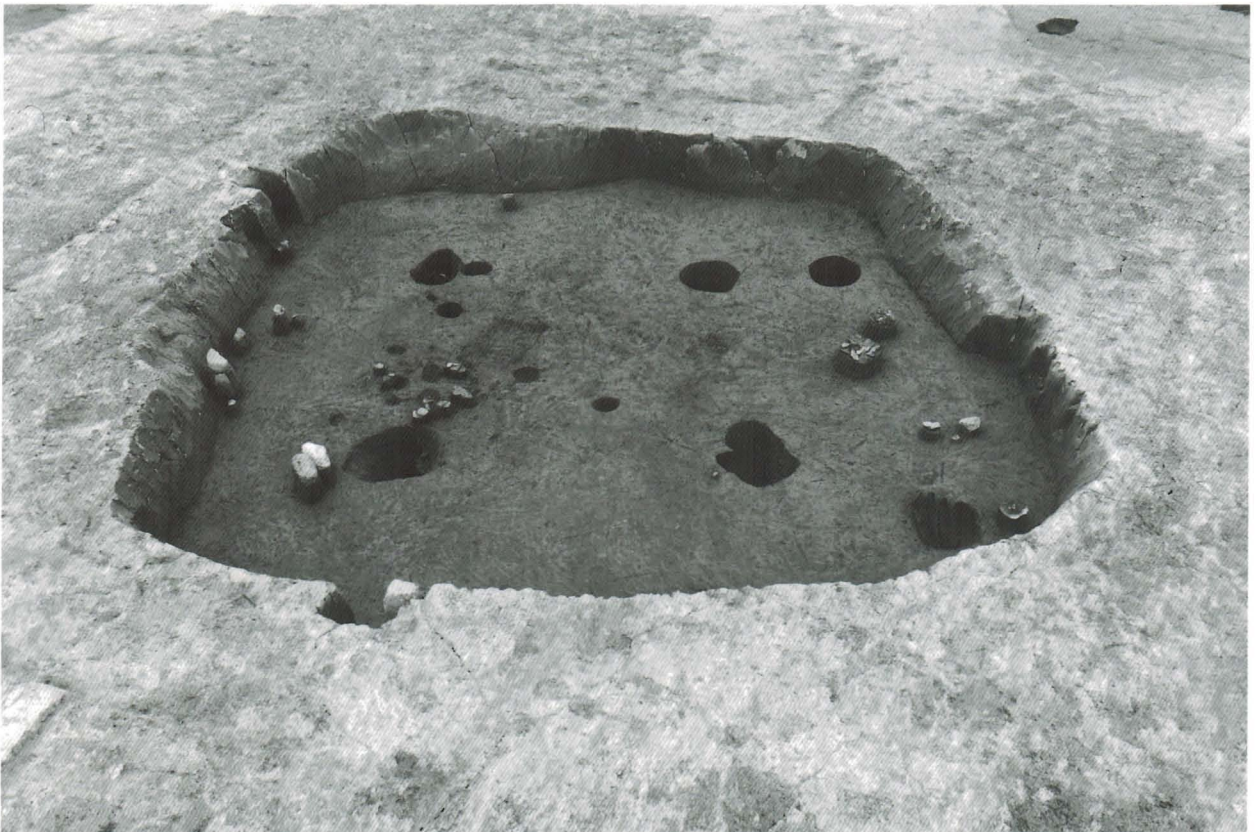
第324号住居跡



第325号住居跡



第326号住居跡



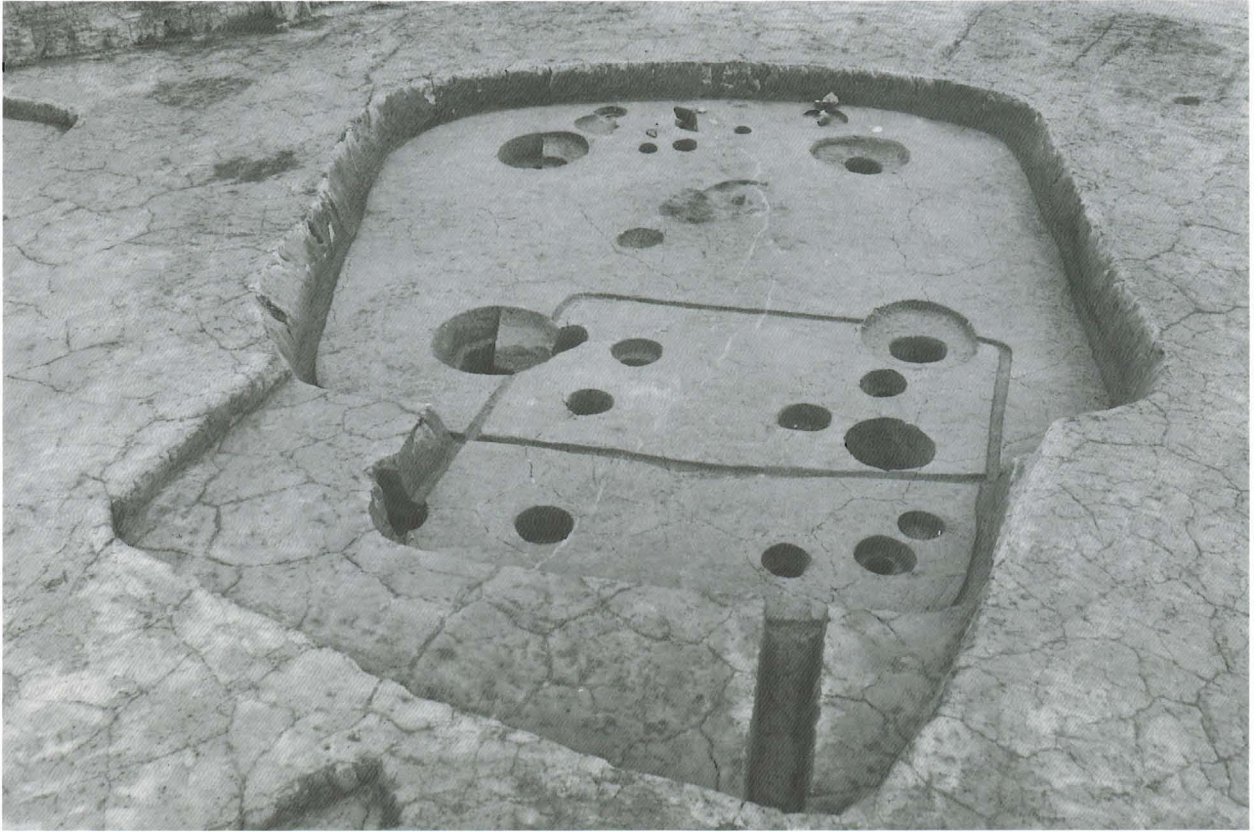
第329号住居跡



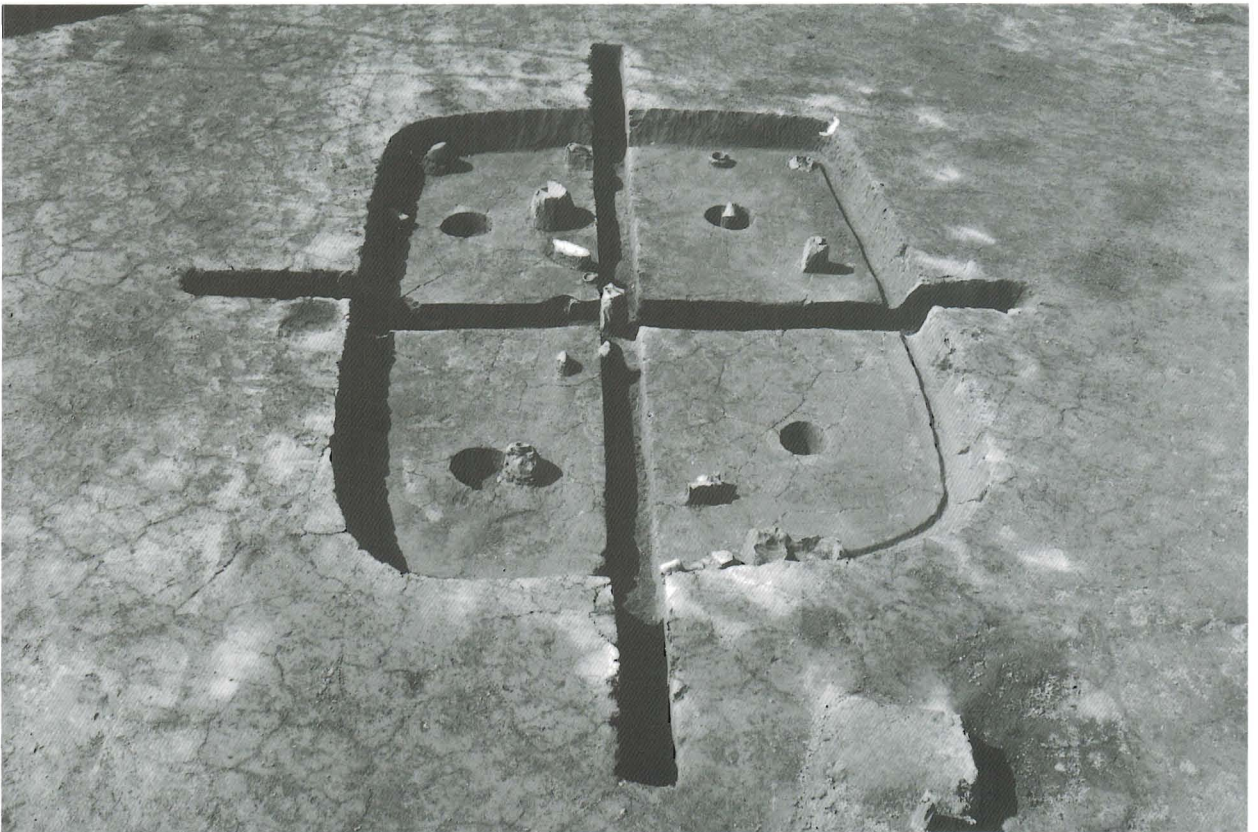
第330号住居跡



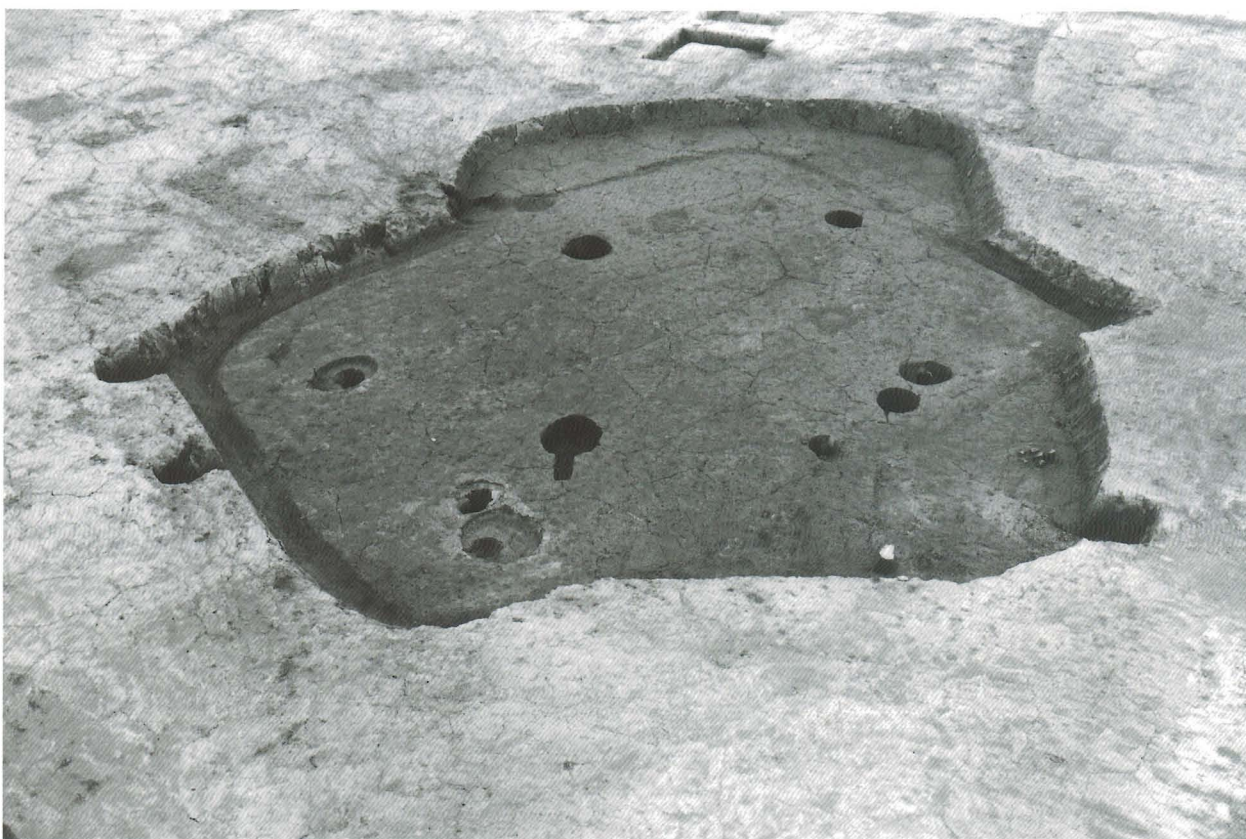
第331号住居跡



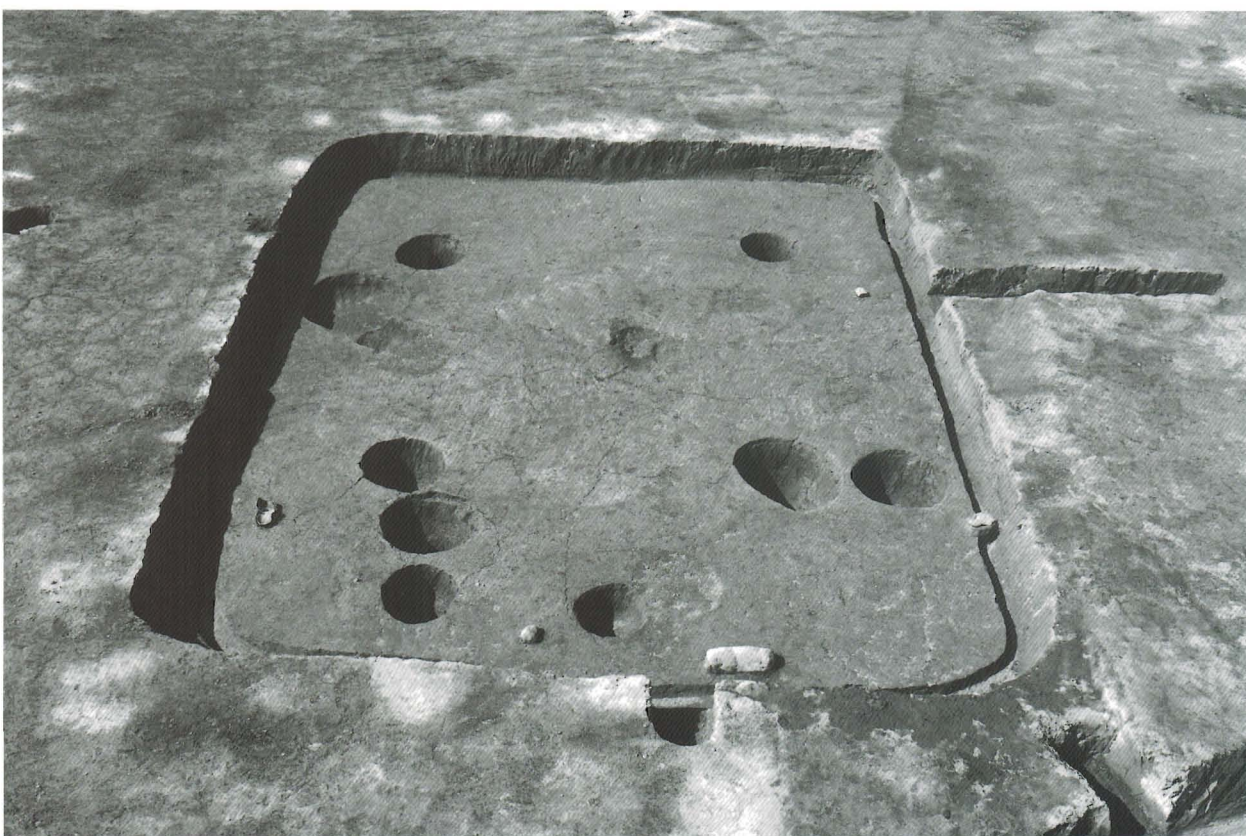
第333・348号住居跡



第336号住居跡



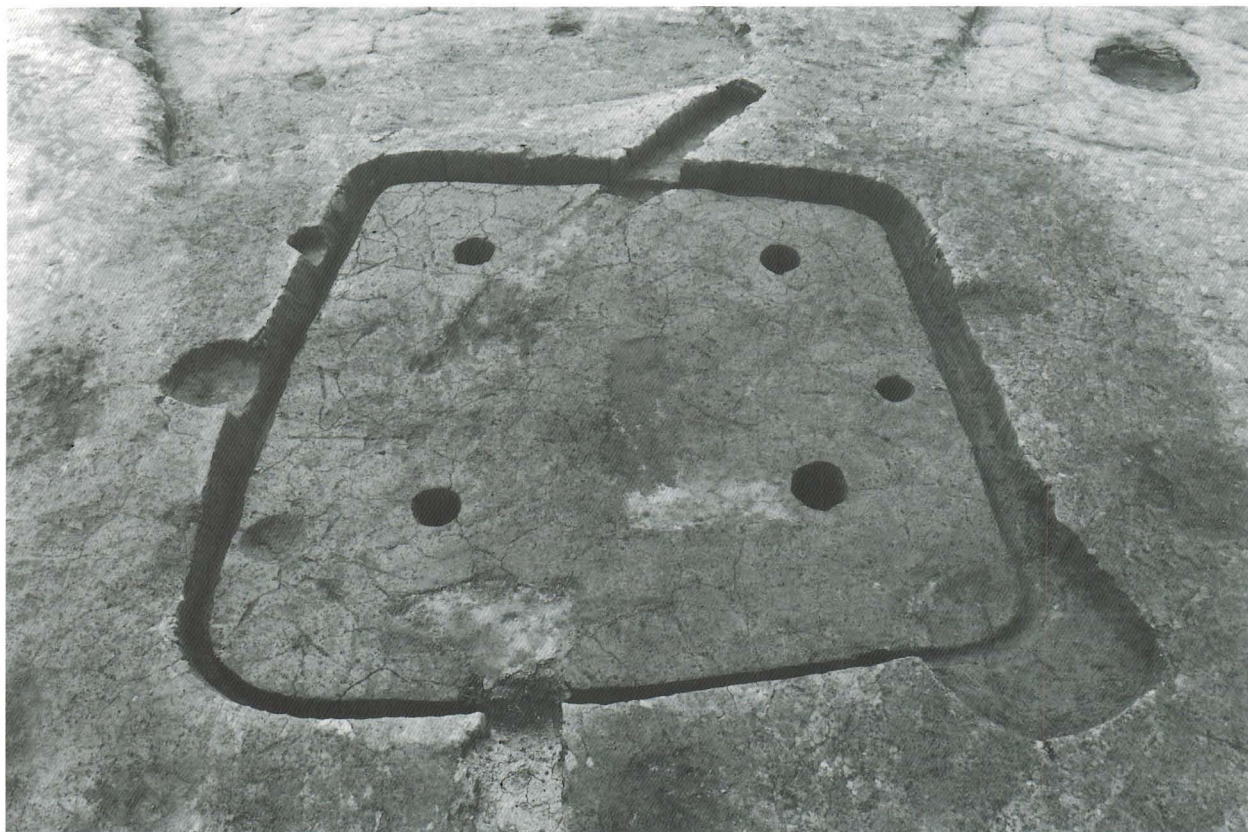
第337号住居跡



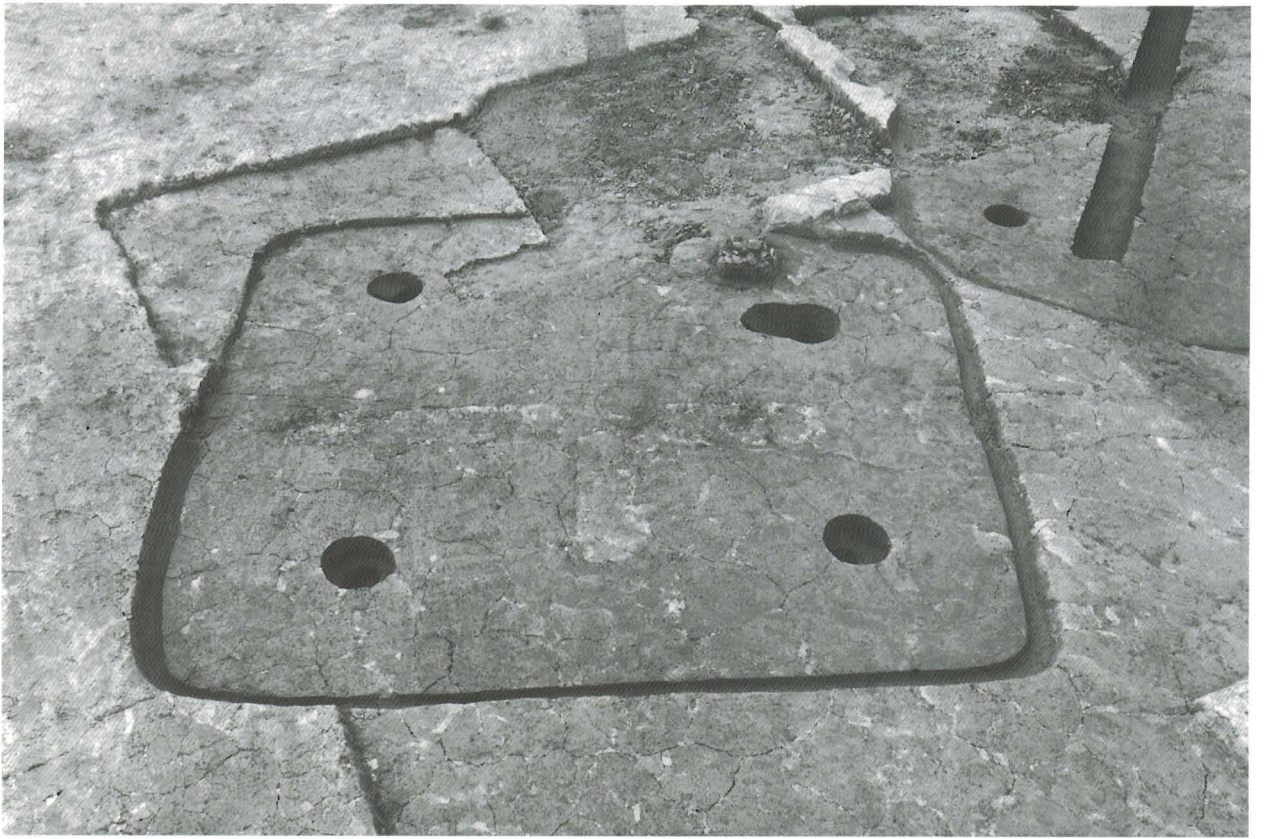
第338号住居跡



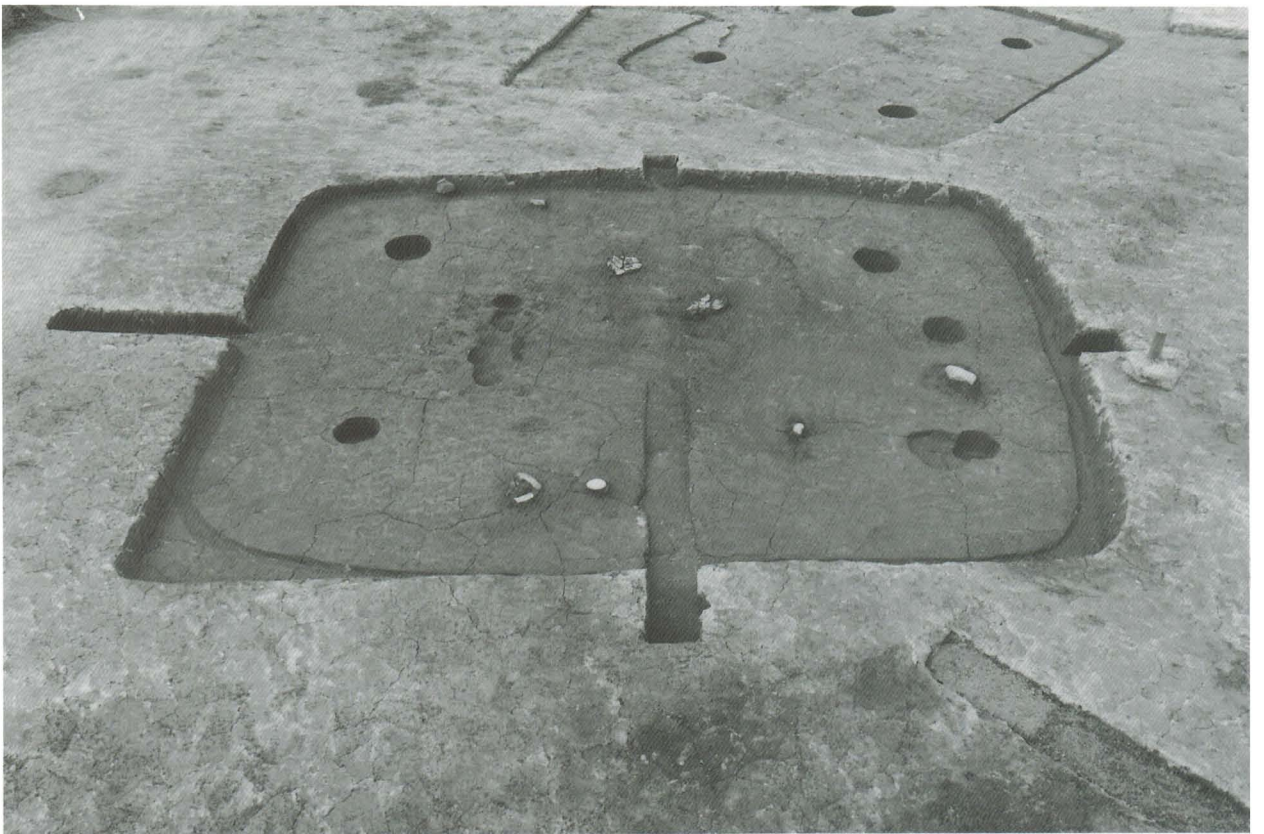
第339号住居跡



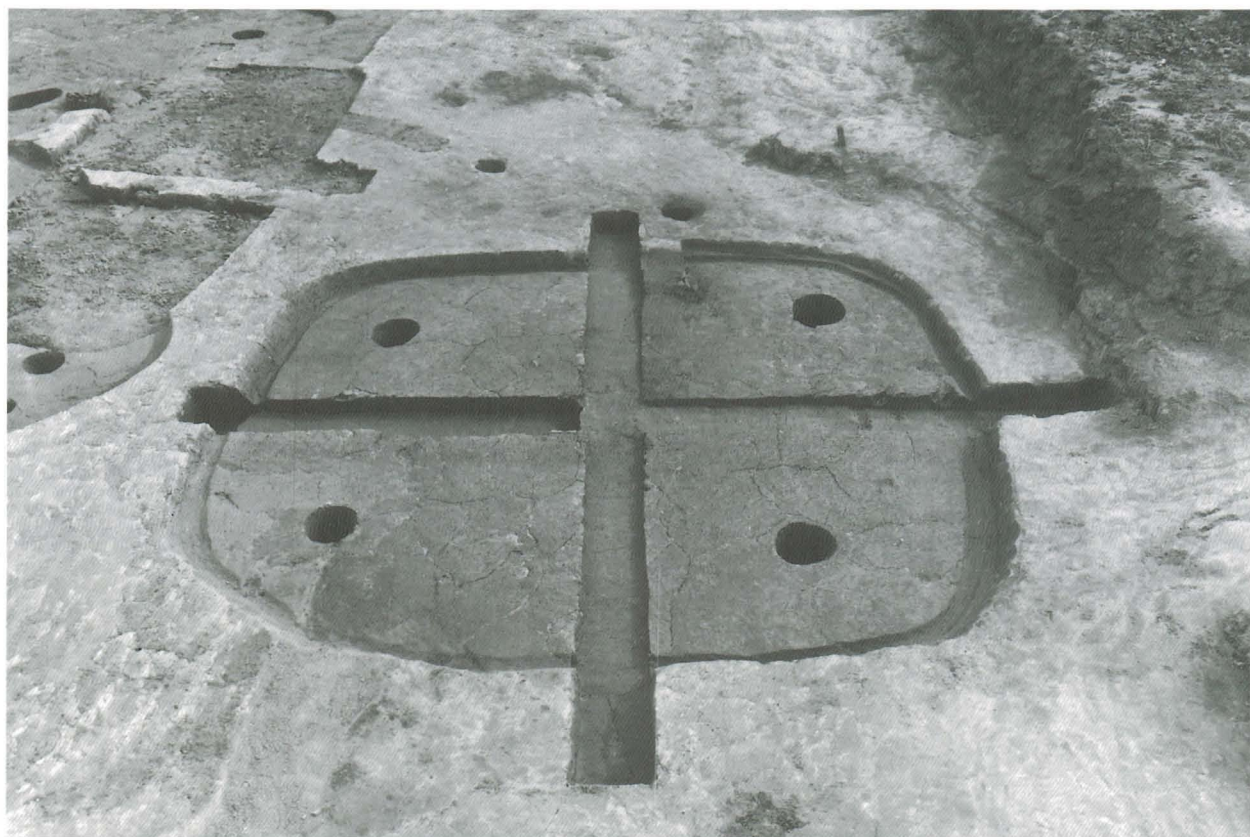
第340号住居跡



第341号住居跡



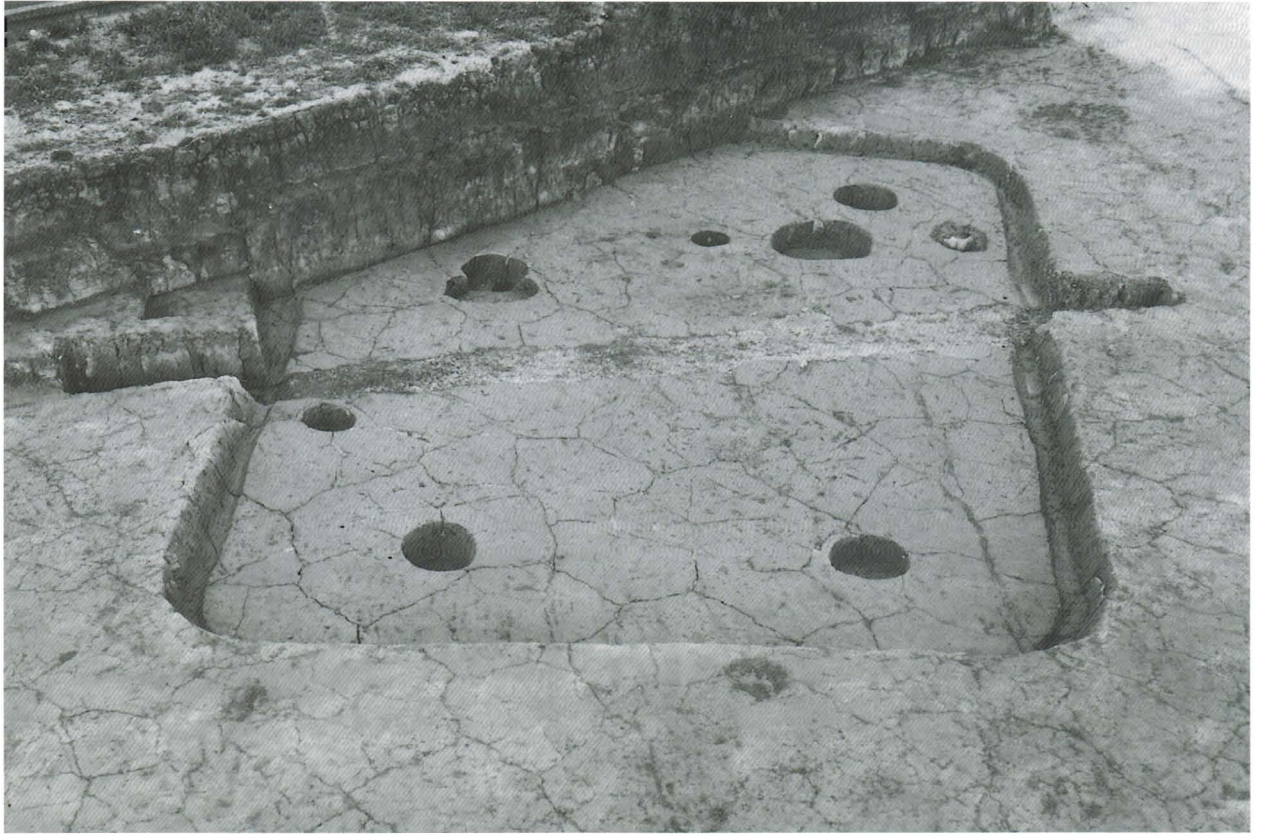
第342号住居跡



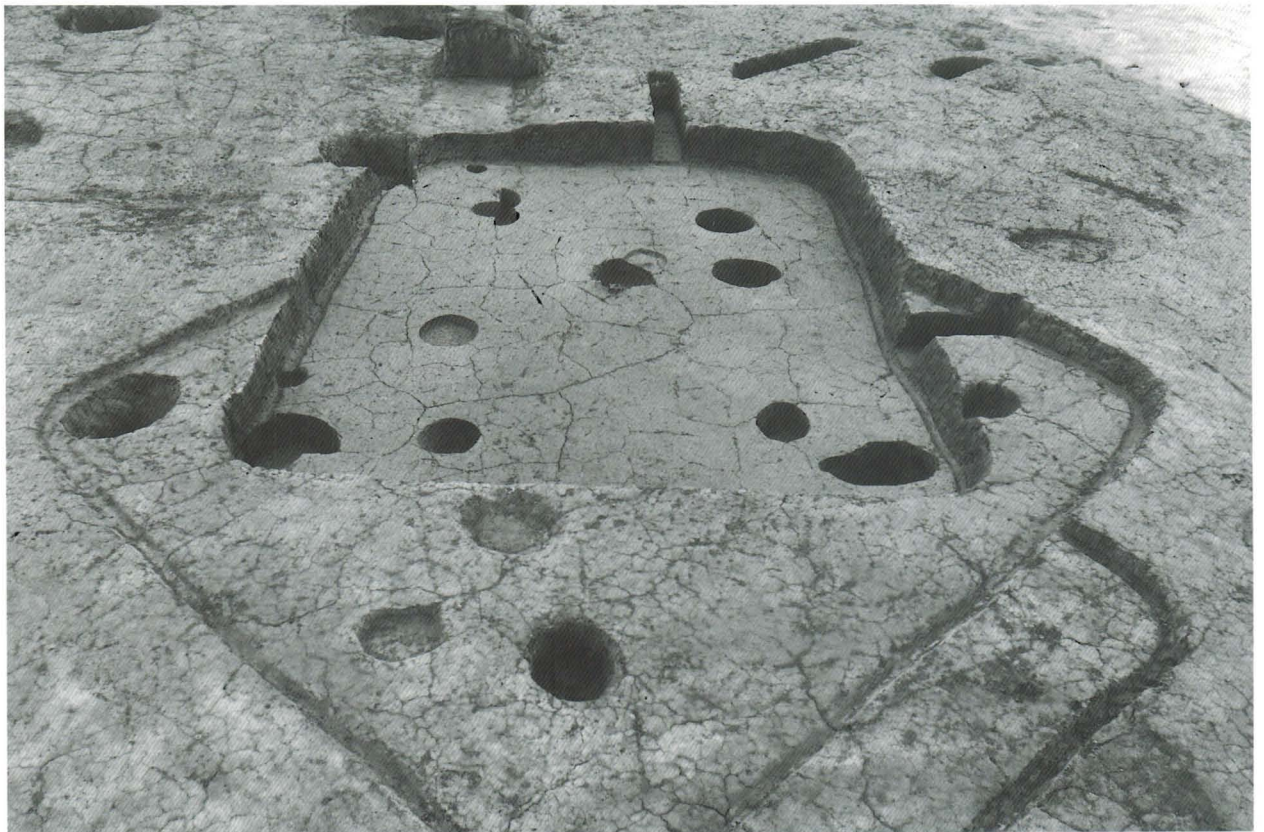
第344号住居跡



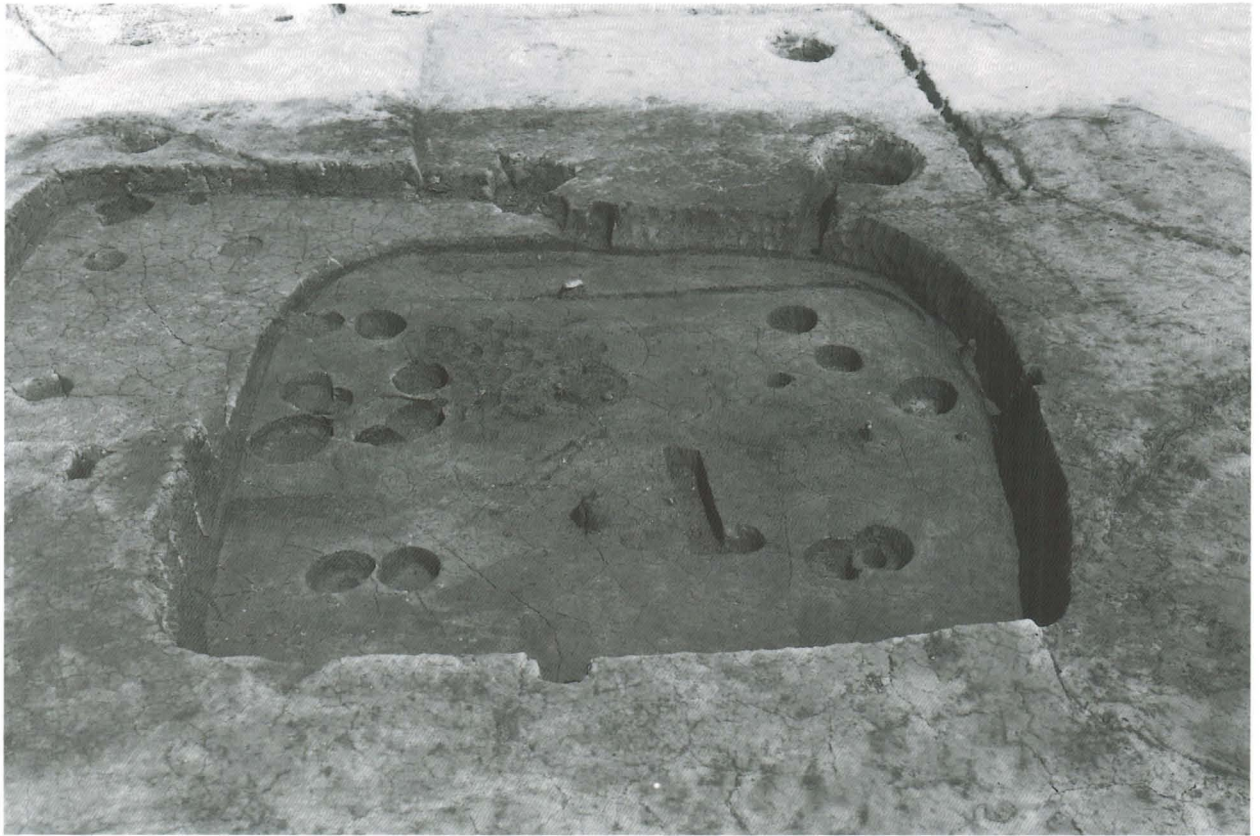
第345号住居跡



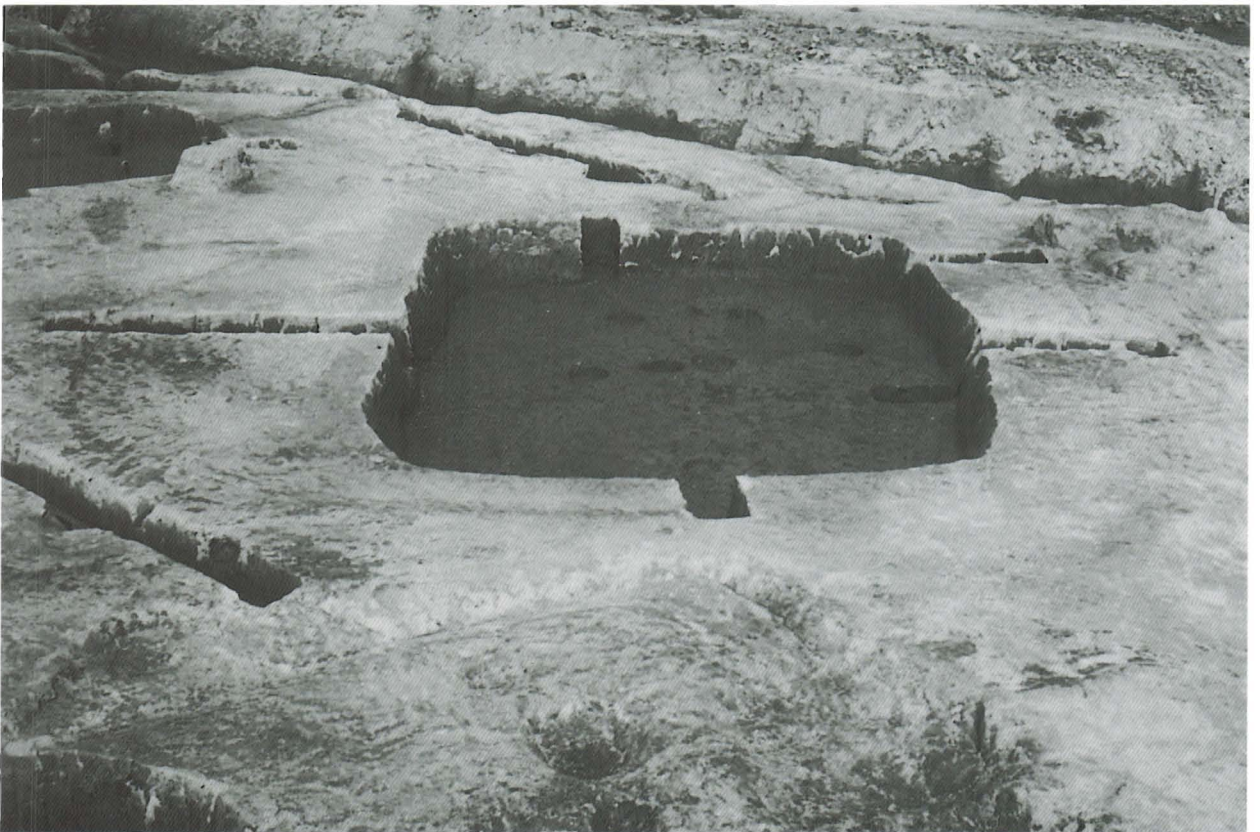
第359号住居跡



第361号住居跡



第369号住居跡



第408号住居跡



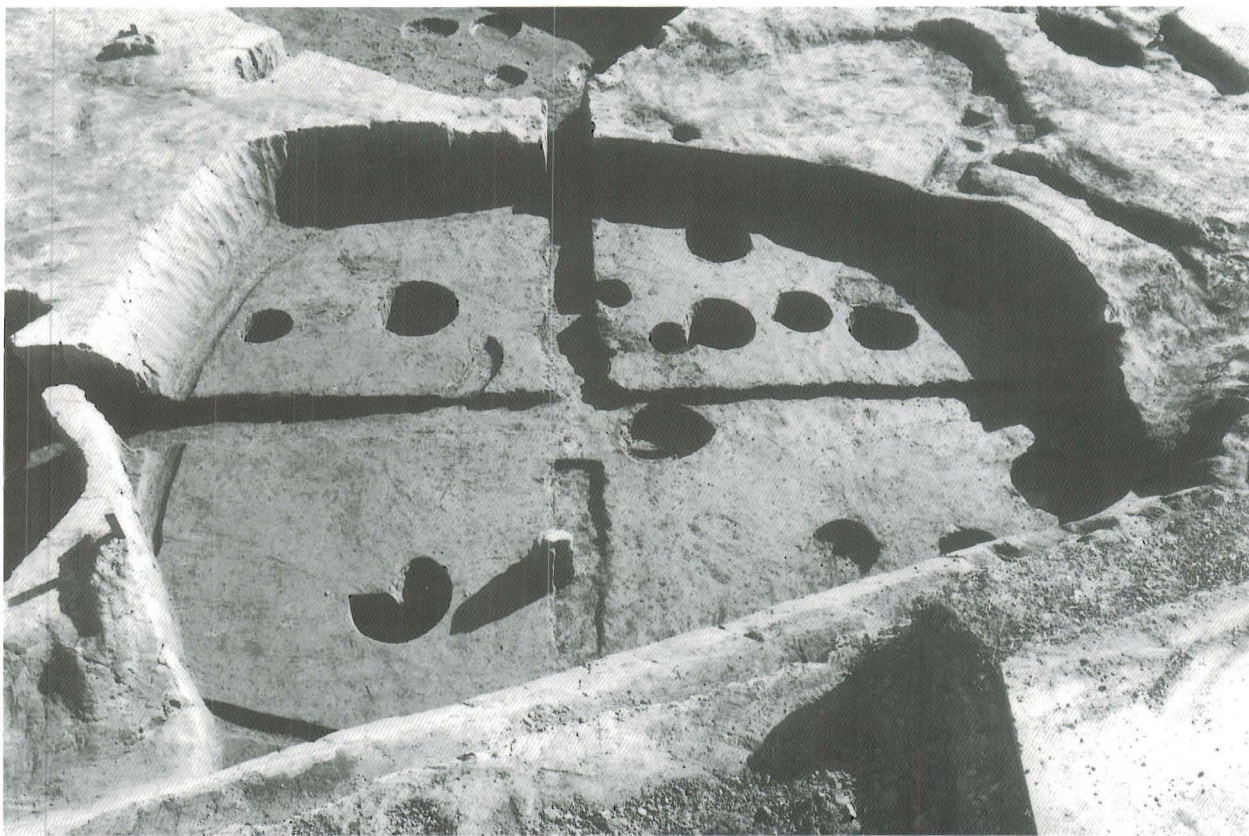
第411号住居跡



第412号住居跡



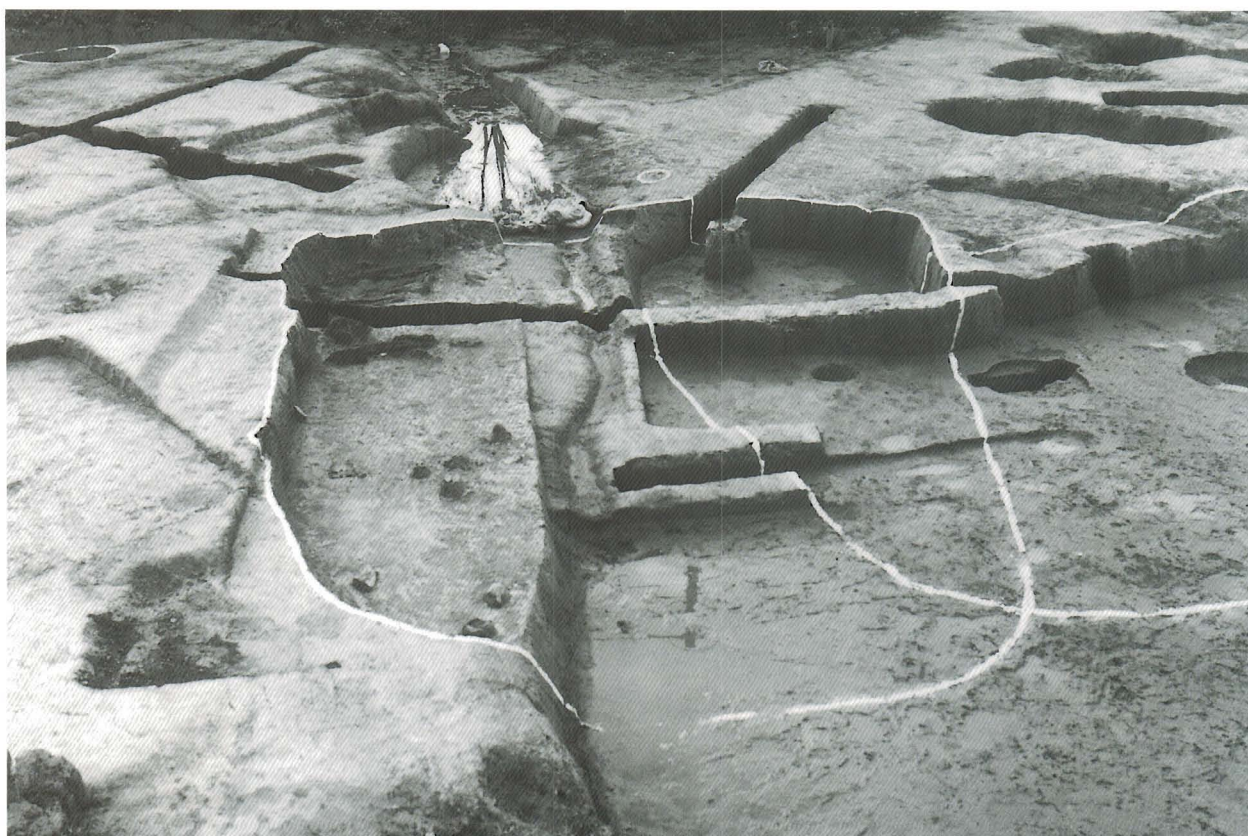
第413号住居跡



第414号住居跡



第416号住居跡



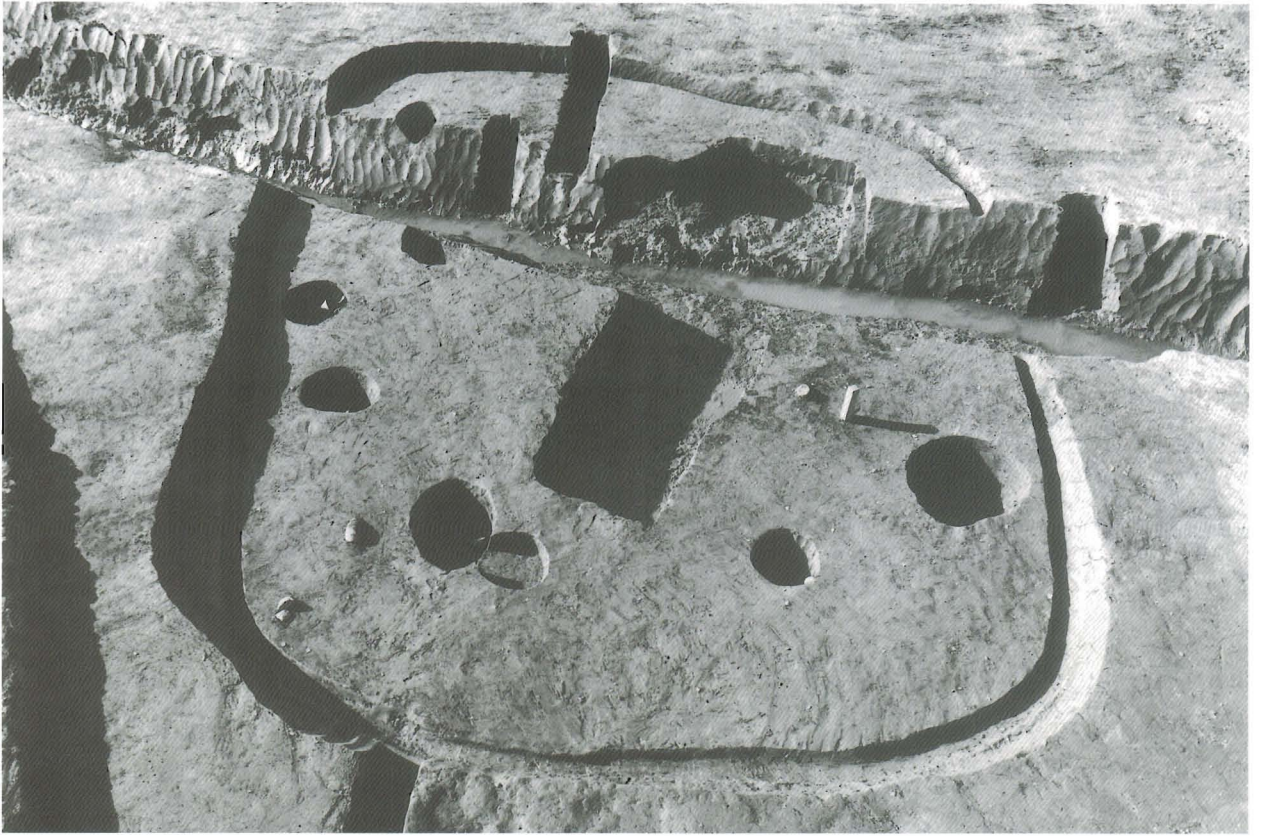
第417号住居跡



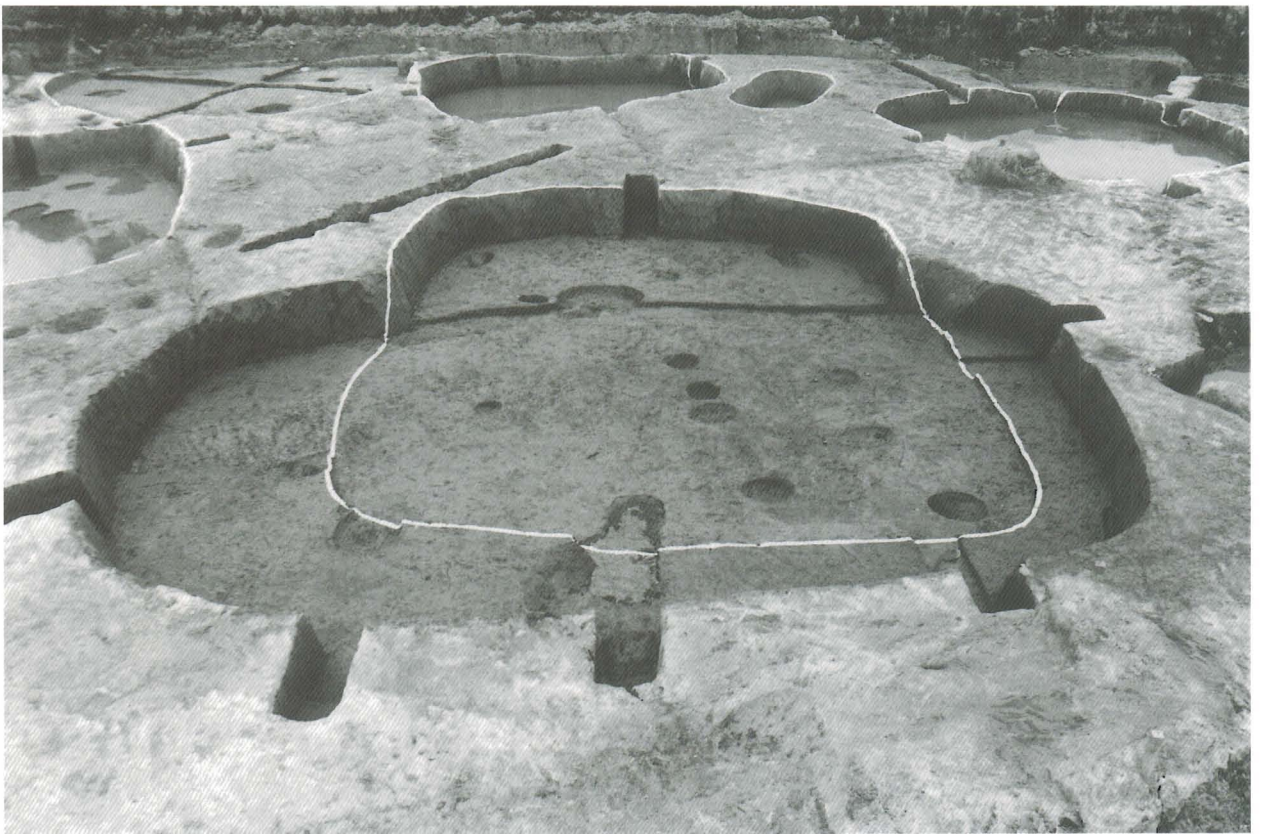
第416・417号住居跡



第421号住居跡



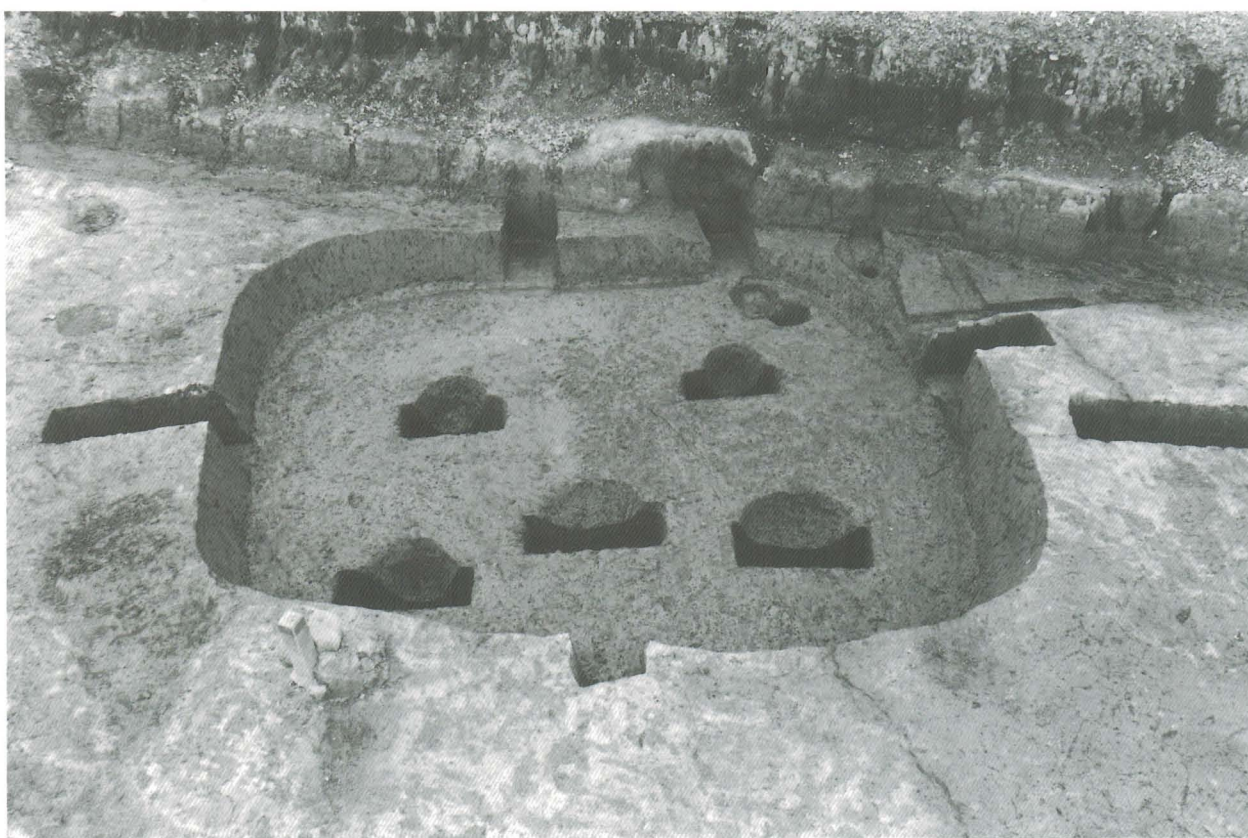
第426号住居跡



第427号住居跡



第428号住居跡



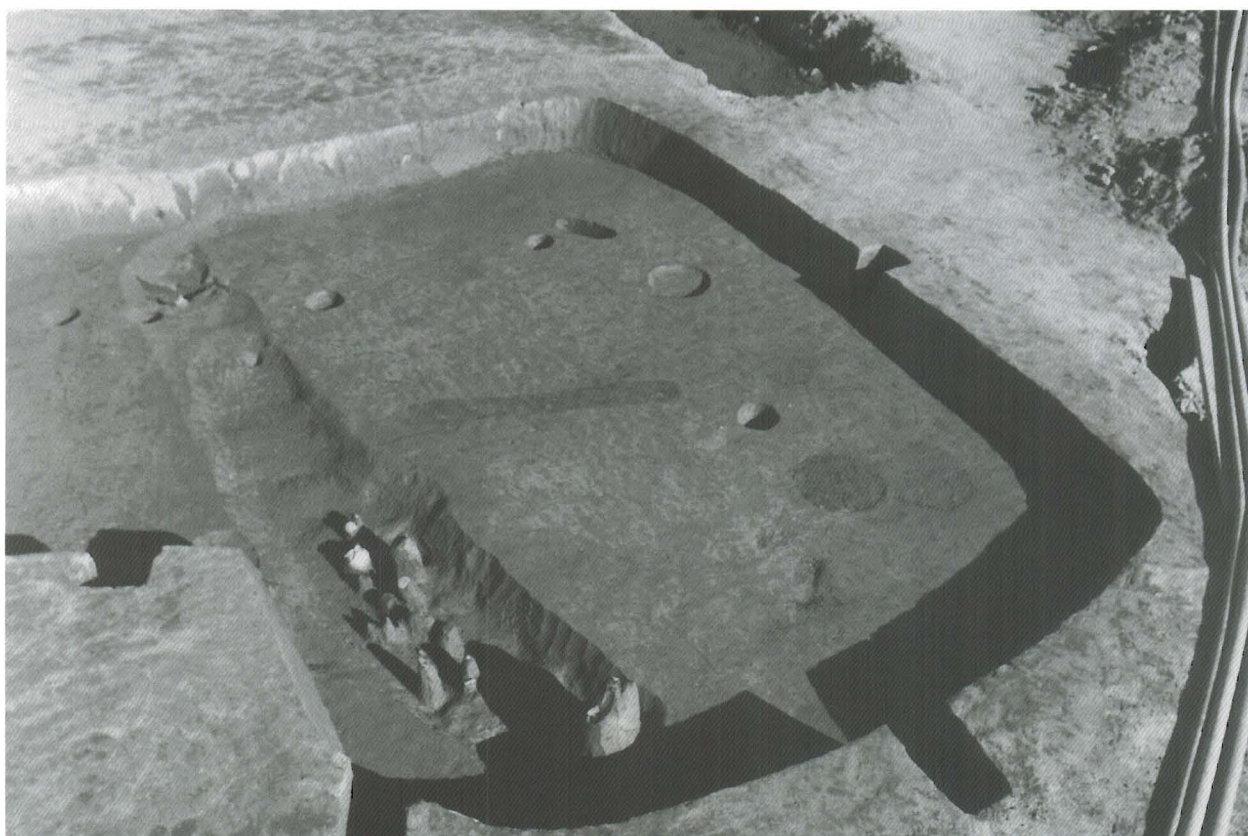
第429号住居跡



第430号住居跡



第431号住居跡



第432号住居跡



第60号掘立柱建物跡



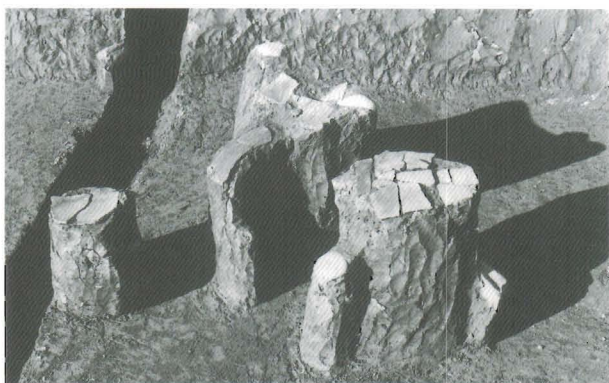
第165号住居跡炭化材出土状況



第198号住居跡遺物出土状況



第165号住居跡遺物出土状況



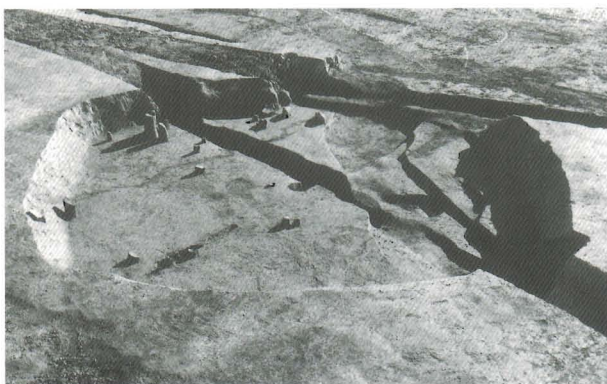
第198号住居跡遺物出土状況



第165号住居跡遺物出土状況



第198号住居跡遺物出土状況



第198号住居跡遺物出土状況



第210号住居跡遺物出土状況



第210号住居跡遺物出土状況



第214号住居跡遺物出土状況



第214号住居跡炭化材出土状況



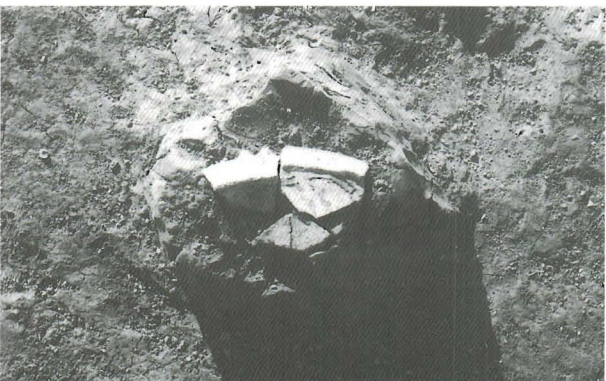
第214号住居跡遺物出土状況



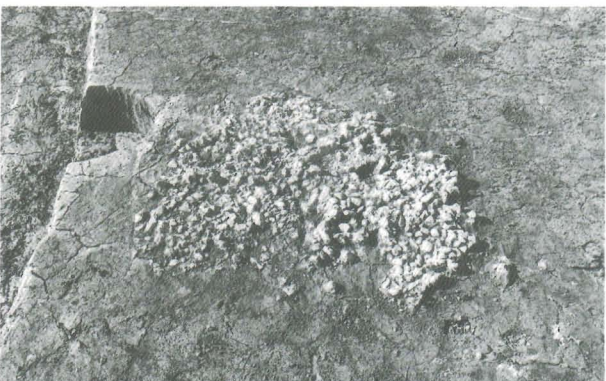
第214号住居跡遺物出土状況



第217号住居跡遺物出土状況



第214号住居跡遺物出土状況



第228号住居跡遺物出土状況



第228号住居跡遺物出土状況



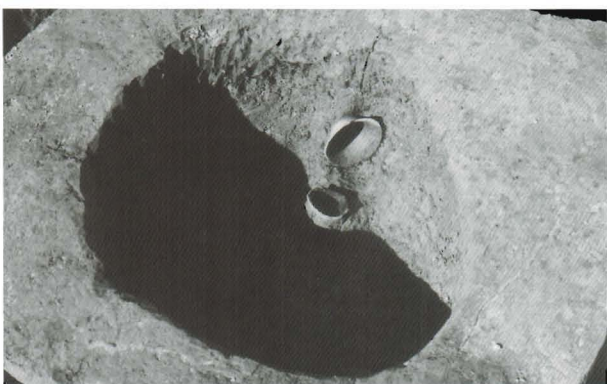
第234号住居跡遺物出土状況



第234号住居跡遺物出土状況



第234号住居跡遺物出土状況



第234号住居跡遺物出土状況



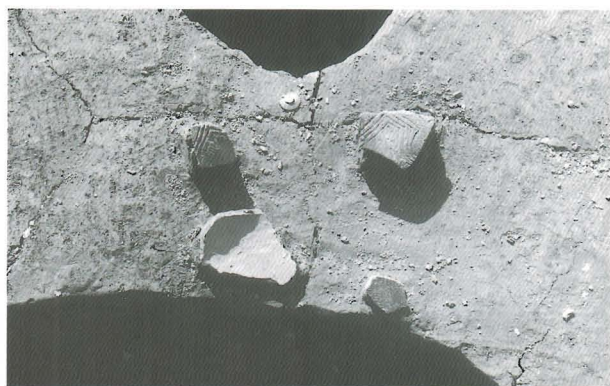
第234号住居跡遺物出土状況



第234号住居跡遺物出土状況



第259号住居跡炉跡



第259号住居跡遺物出土状況



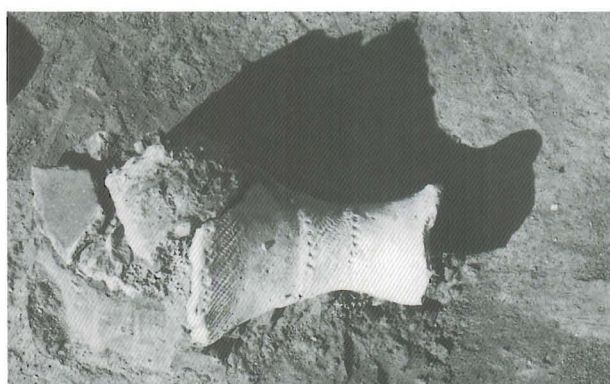
第264号住居跡遺物出土状況



第264号住居跡遺物出土状況



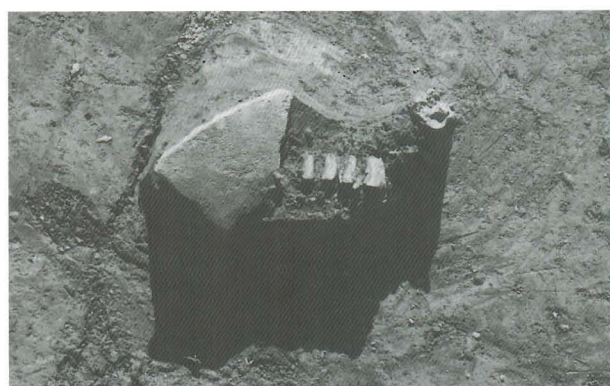
第274号住居跡遺物出土状況



第264号住居跡遺物出土状況



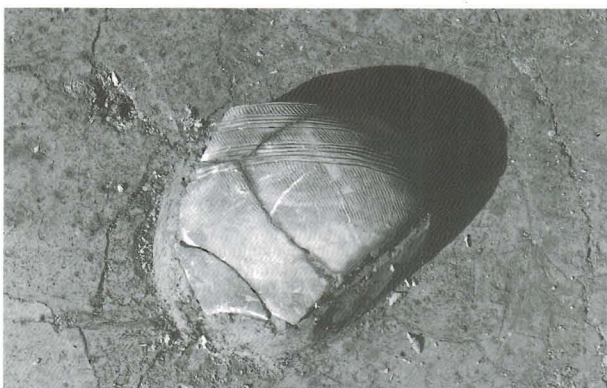
第274号住居跡遺物出土状況



第264号住居跡遺物出土状況



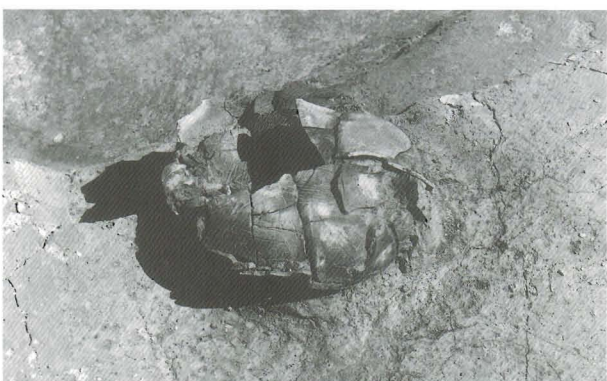
第274号住居跡遺物出土状況



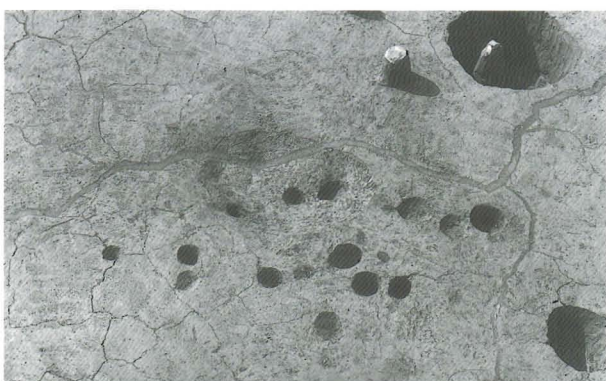
第274号住居跡遺物出土状況



第303号住居跡遺物出土状況



第301号住居跡遺物出土状況



第305号住居跡炉跡



第301号住居跡遺物出土状況



第305号住居跡遺物出土状況



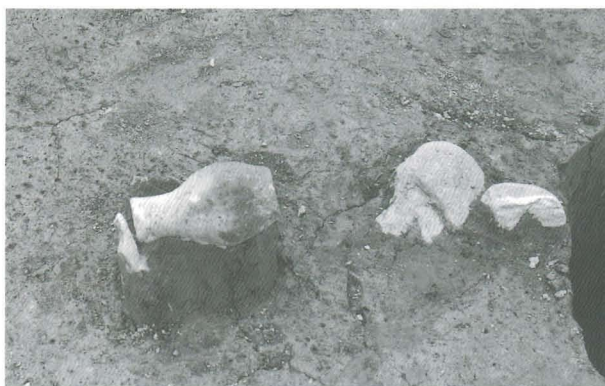
第303号住居跡遺物出土状況



第306号住居跡遺物出土状況



第306号住居跡炉跡



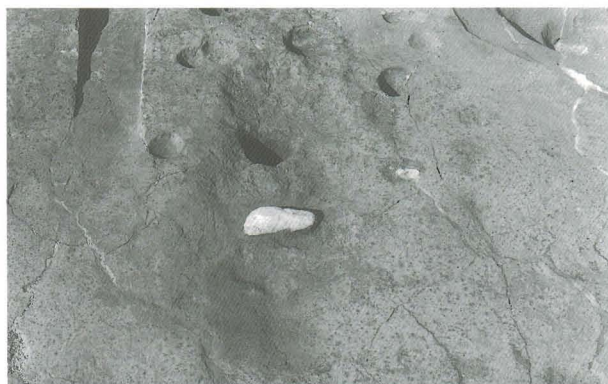
第317号住居跡遺物出土状況



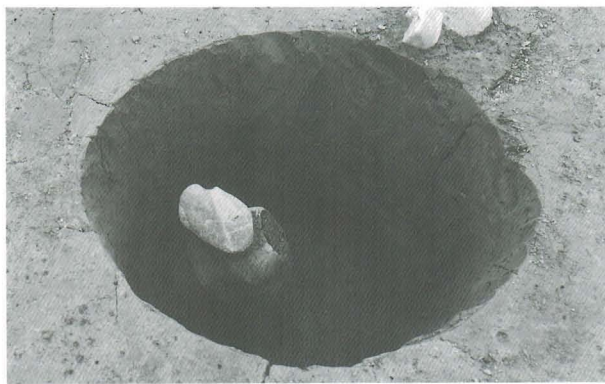
第306号住居跡被熱硬化部分



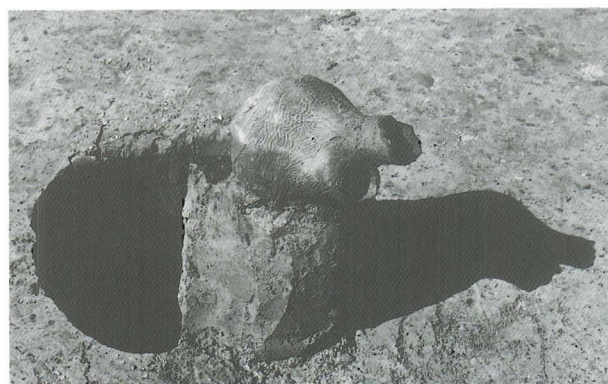
第317号住居跡遺物出土状況



第306号住居跡炉跡



第317号住居跡遺物出土状況



第318号住居跡遺物出土状況



第317号住居跡遺物出土状況



第317号住居跡遺物出土状況



第325号住居跡遺物出土状況



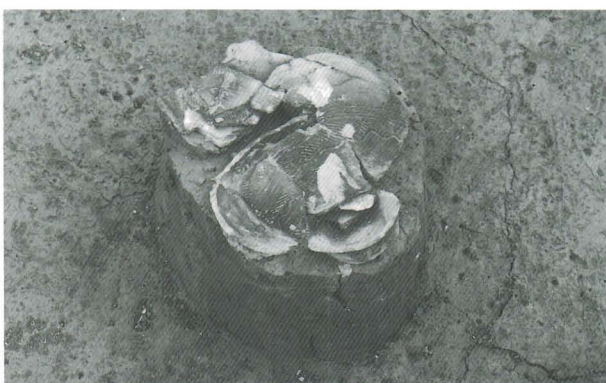
第317号住居跡遺物出土状況



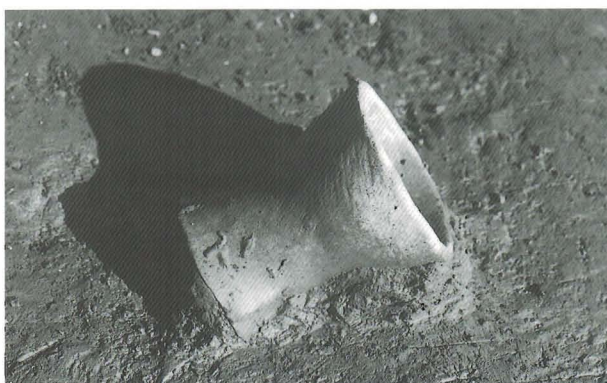
第329号住居跡遺物出土状況



第317号住居跡遺物出土状況



第329号住居跡遺物出土状況



第325号住居跡遺物出土状況



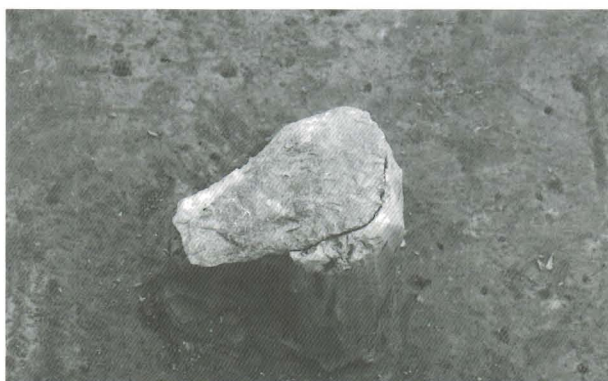
第329号住居跡遺物出土状況



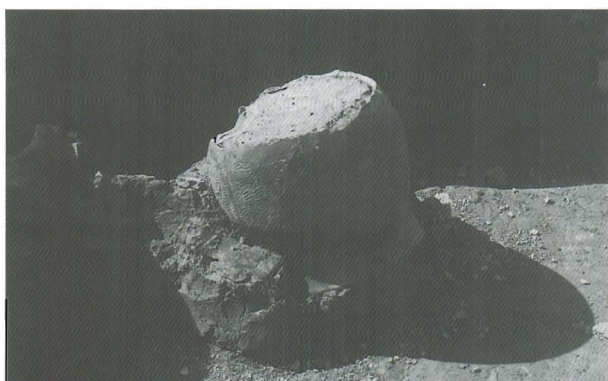
第329号住居跡遺物出土状況



第336号住居跡遺物出土状況



第329号住居跡遺物出土状況



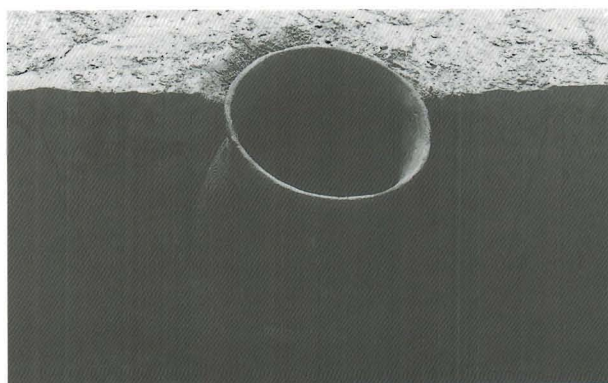
第336号住居跡遺物出土状況



第329号住居跡貯蔵穴



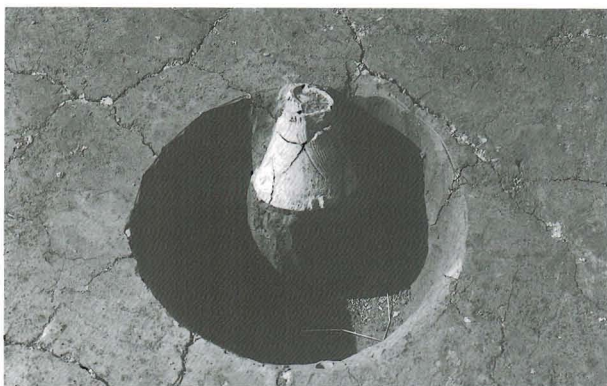
第336号住居跡遺物出土状況



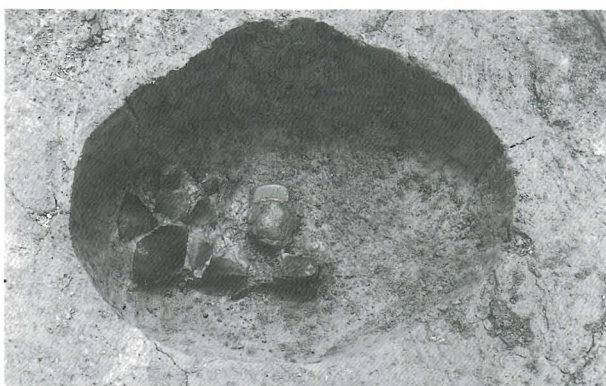
第330号住居跡遺物出土状況



第336号住居跡遺物出土状況



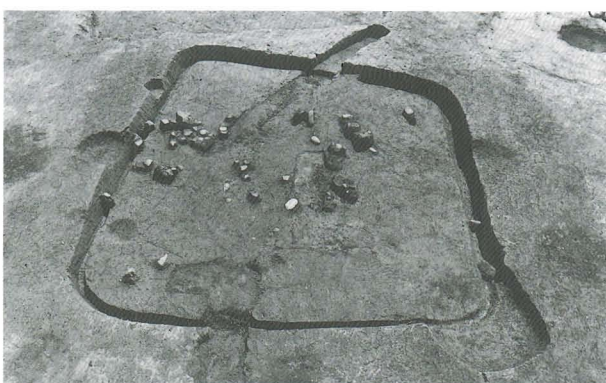
第336号住居跡遺物出土状況



第339号住居跡遺物出土状況



第336号住居跡遺物出土状況



第340号住居跡遺物出土状況



第336号住居跡遺物出土状況



第340号住居跡遺物出土状況



第339号住居跡遺物出土状況



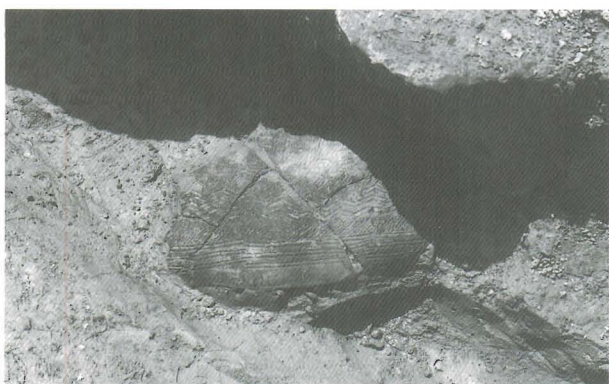
第340号住居跡遺物出土状況



第340号住居跡遺物出土状況



第342号住居跡遺物出土状況



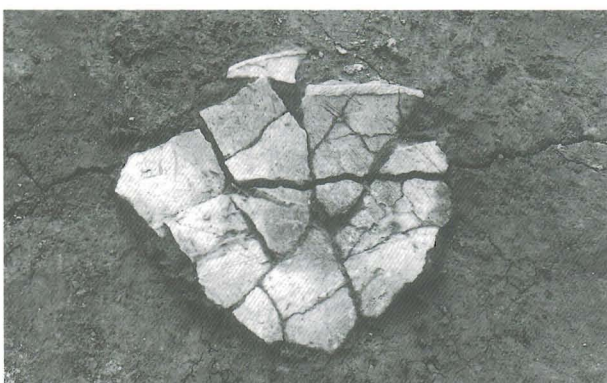
第340号住居跡遺物出土状況



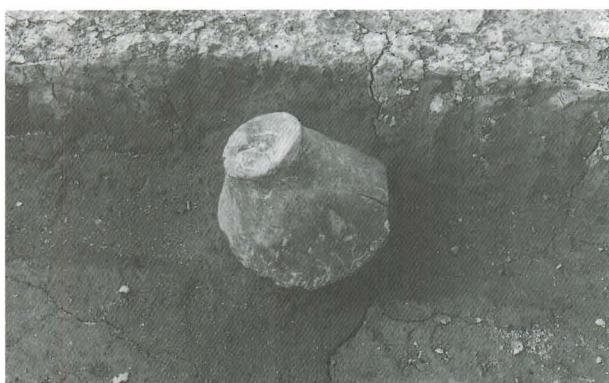
第342号住居跡遺物出土状況



第342号住居跡遺物出土状況



第342号住居跡遺物出土状況



第342号住居跡遺物出土状況



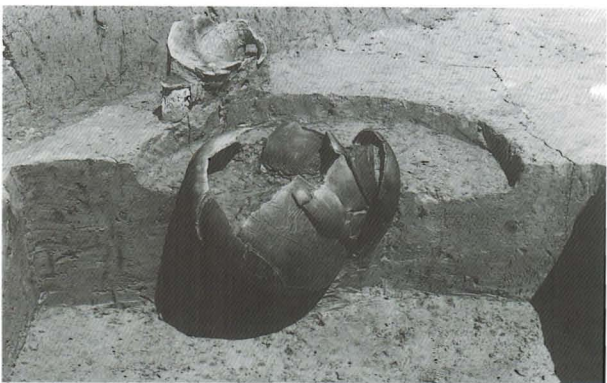
第348号住居跡遺物出土状況



第348号住居跡遺物出土状況



第359号住居跡遺物出土状況



第348号住居跡遺物出土状況



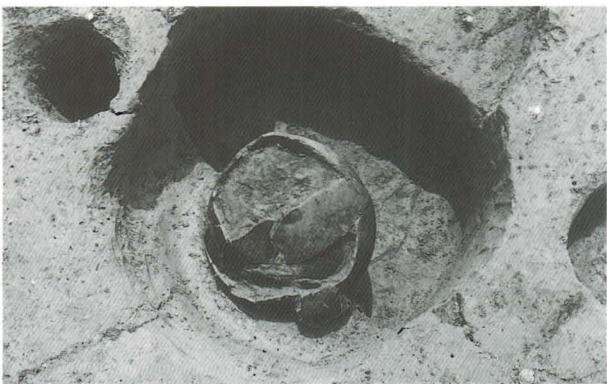
第359号住居跡遺物出土状況



第348号住居跡遺物出土状況



第359号住居跡遺物出土状況



第348号住居跡遺物出土状況



第359号住居跡遺物出土状況



第359号住居跡遺物出土状況



第426号住居跡遺物出土状況



第369号住居跡遺物出土状況



第430号住居跡遺物出土状況



第421号住居跡遺物出土状況



第431号住居跡遺物出土状況



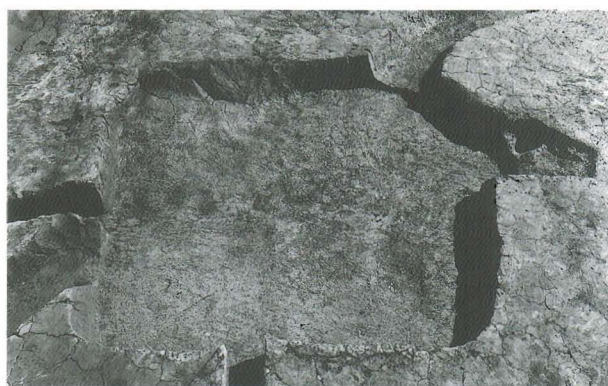
第421号住居跡遺物出土状況



第431号住居跡遺物出土状況



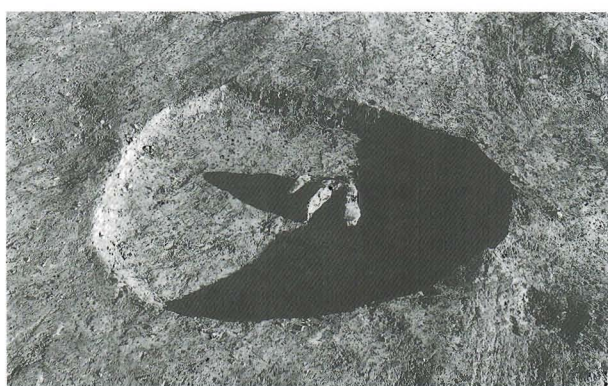
第219号土壙遺物出土状況



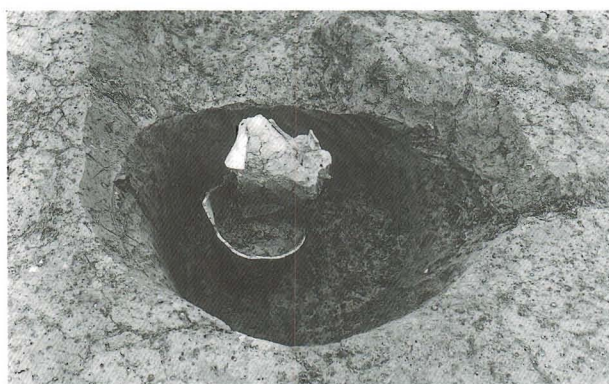
第241号土壙



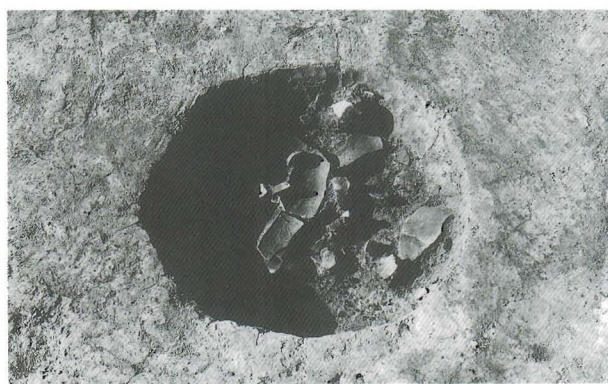
第219号土壙遺物出土状況



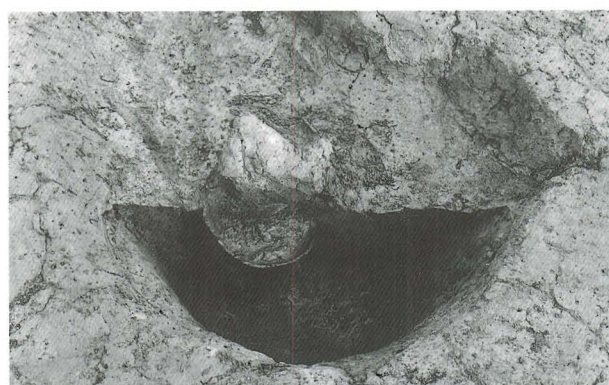
第297号土壙遺物出土状況



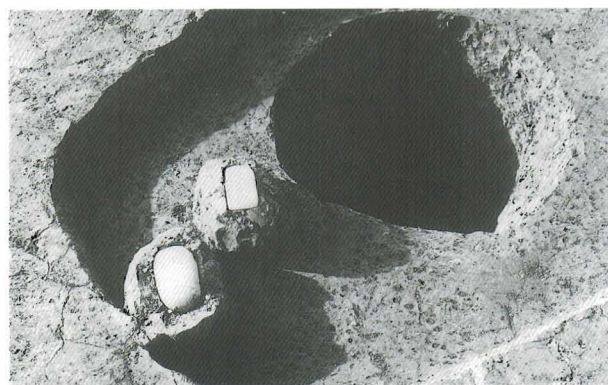
第221号土壙遺物出土状況



第312号土壙遺物出土状況



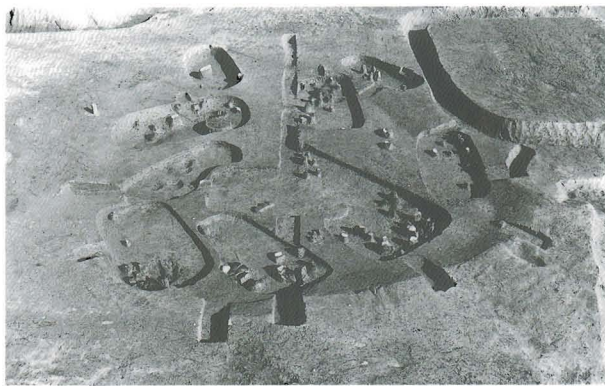
第221号土壙遺物出土状況



第320号土壙遺物出土状況



第320号土壙遺物出土状況



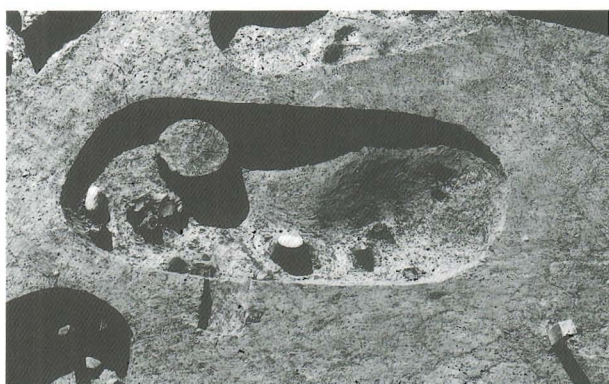
第364～373号土壙遺物出土状況



第327号土壙遺物出土状況



第368号土壙遺物出土状況



第364号土壙遺物出土状況



第368号土壙遺物出土状況



第364号土壙遺物出土状況



第368号土壙遺物出土状況



第369号土壇遺物出土状況



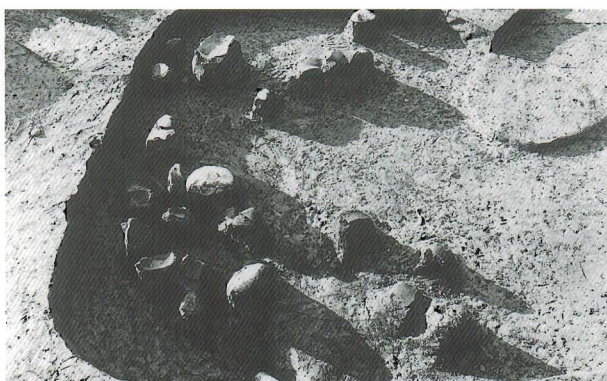
第371号土壇遺物出土状況



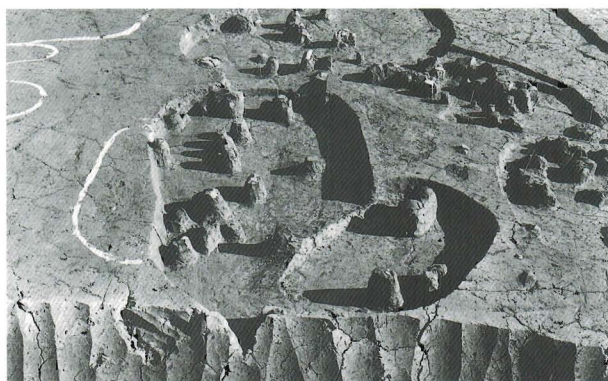
第370号土壇遺物出土状況



第372号土壇遺物出土状況



第370号土壇遺物出土状況



第398・399号土壇遺物出土状況



第370号土壇遺物出土状況



第398～403号土壇遺物出土状況(西側から)



第398～403号土壙遺物出土状況(南側から)



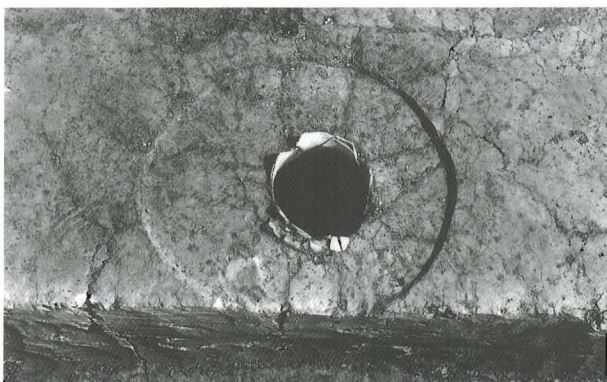
第521号土壙遺物出土状況



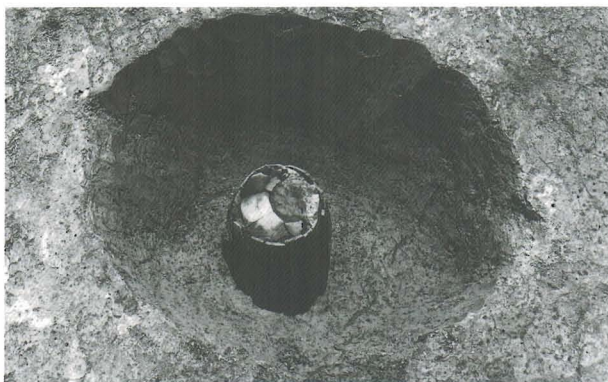
第402号土壙遺物出土状況



第521号土壙遺物出土状況



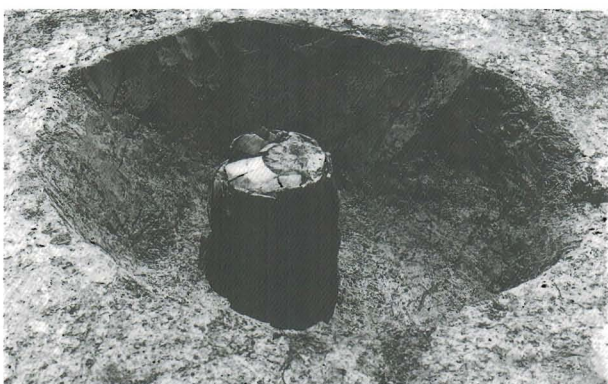
第521号土壙遺物出土状況



第555号土壙遺物出土状況



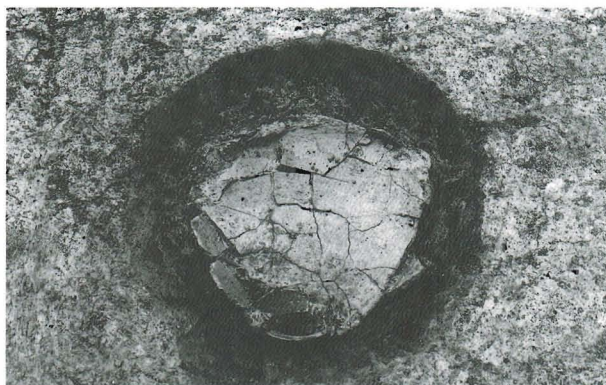
第521号土壙遺物出土状況



第555号土壙遺物出土状況



第556号土壌遺物出土状況



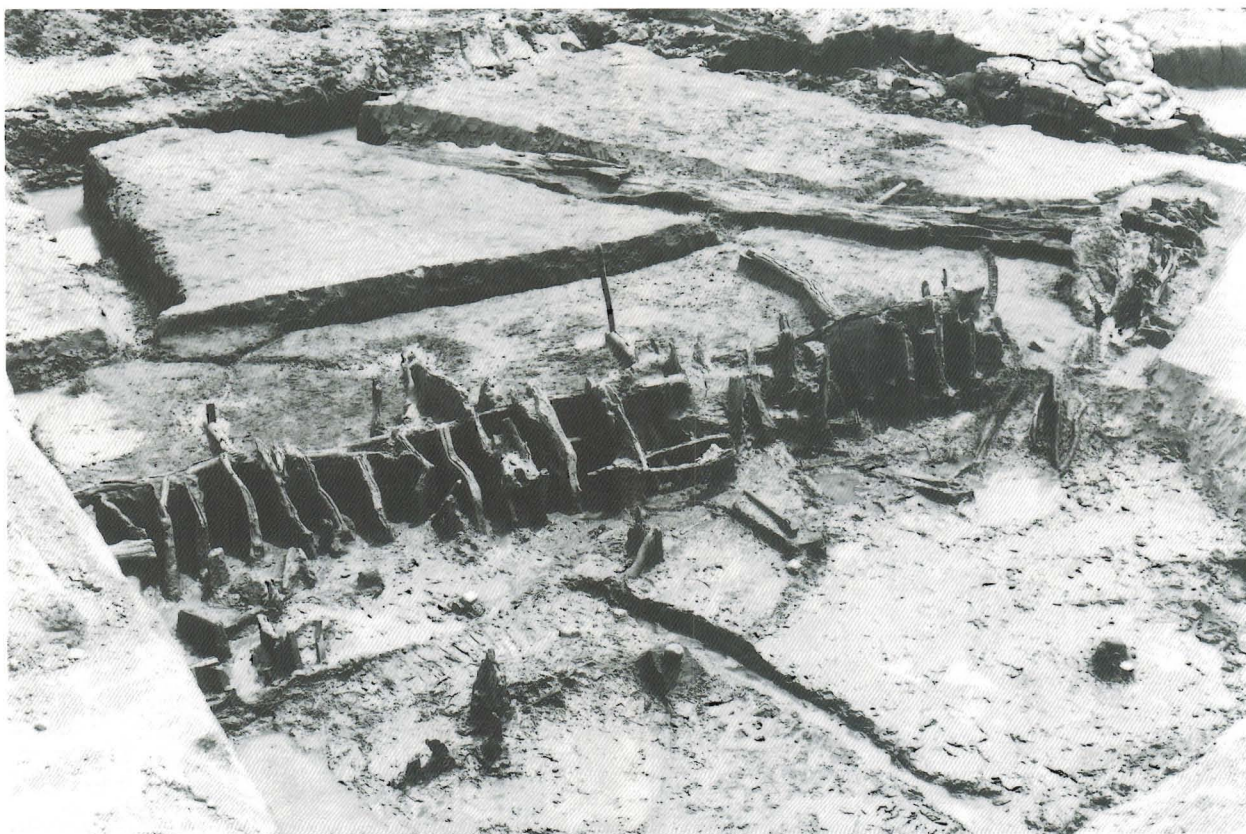
第777号土壌遺物出土状況



第565号土壌遺物出土状況



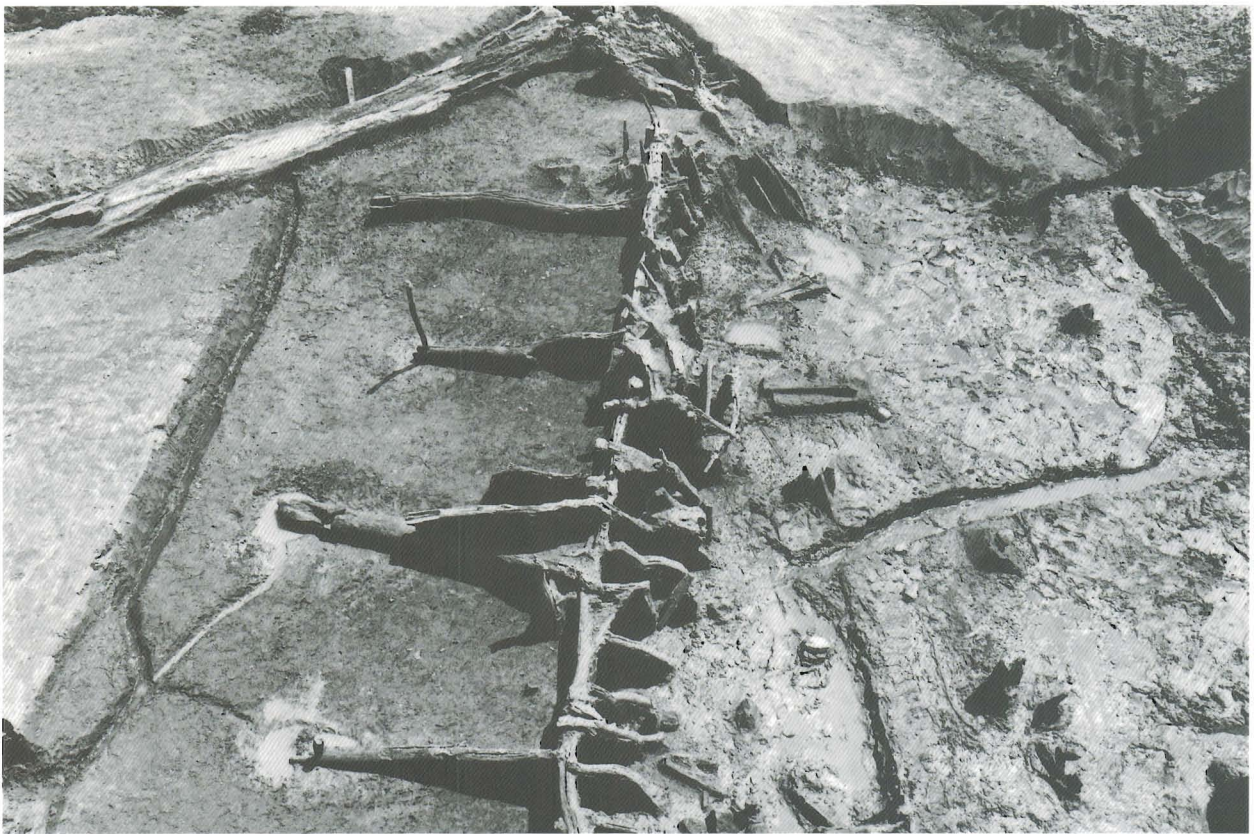
第795号土壌遺物出土状況



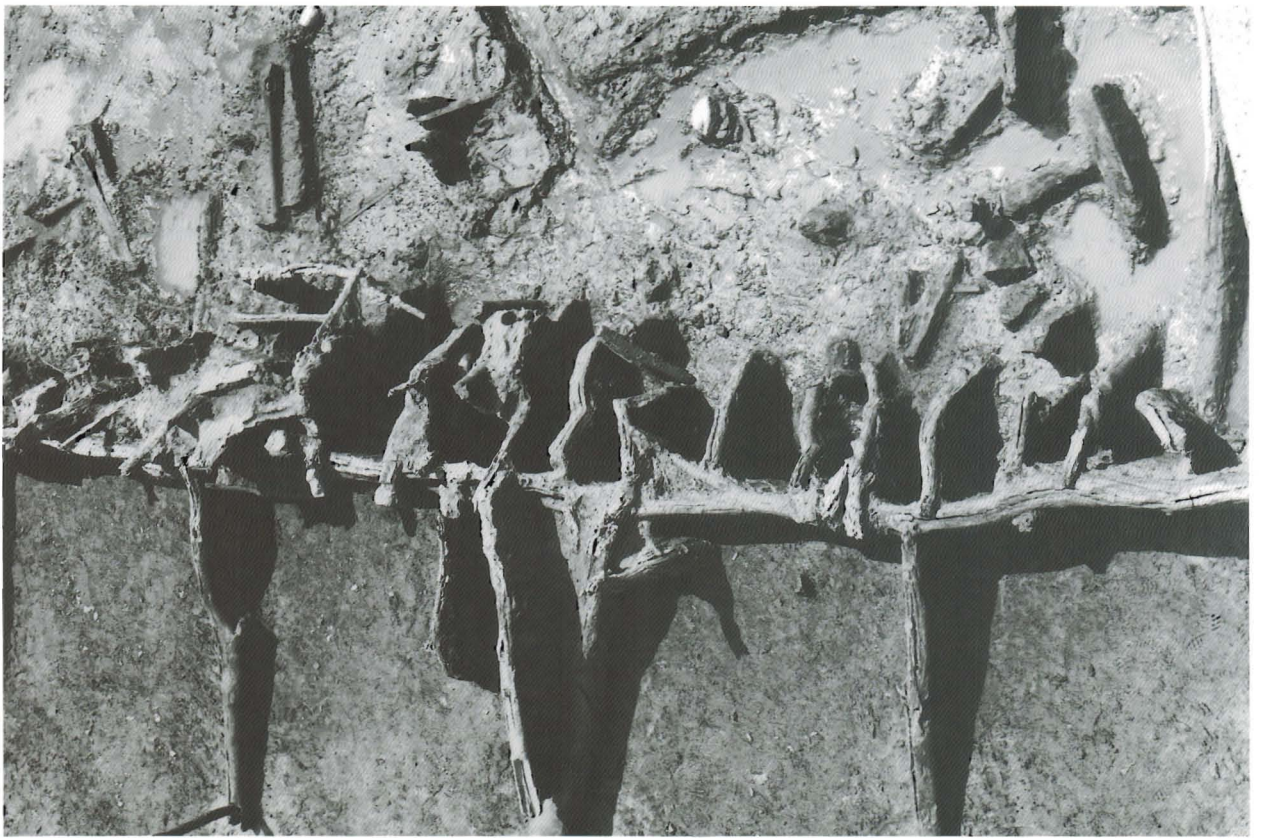
堰検出状況(西側から)



堰検出状況(上層)



堰検出状況(北側から)



堰検出状況(北側から)



堰遠景



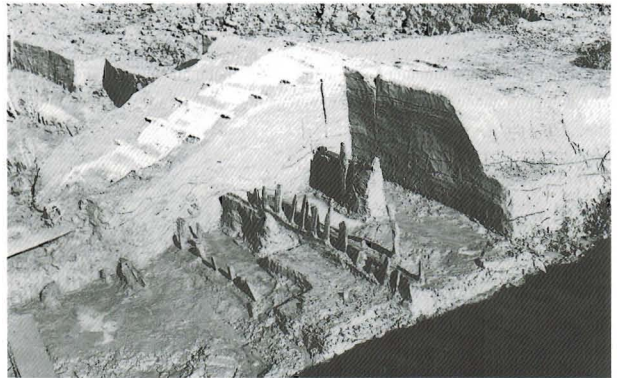
堰(東側から)



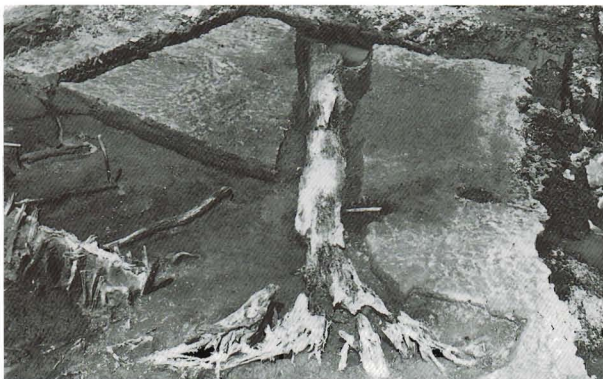
盛土検出状況



堰(上から)



堰盛土立割状況



堰脇倒木出土状況



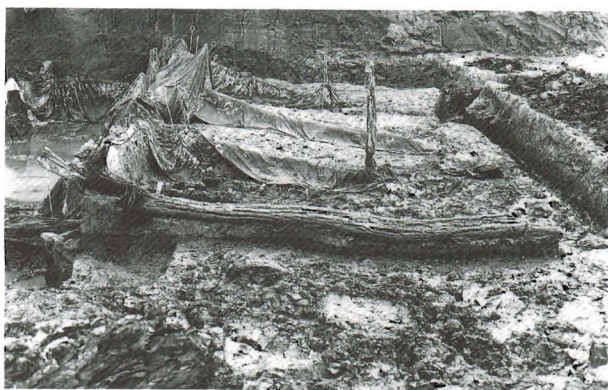
下段堰検出状況(西側から)



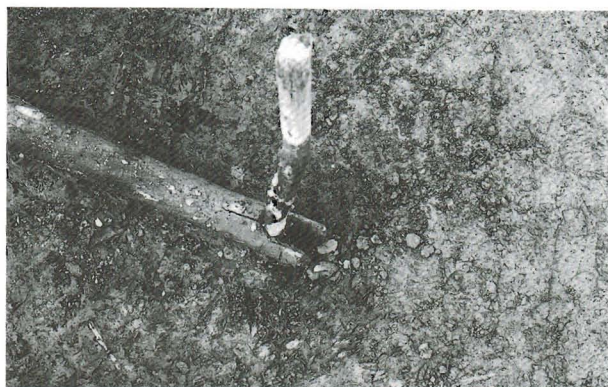
堰土層断面



下段堰検出状況(東側から)



堰支保1



堰支保2



堰支保2



堰支保3



堰支保2



堰支保3



堰支保2



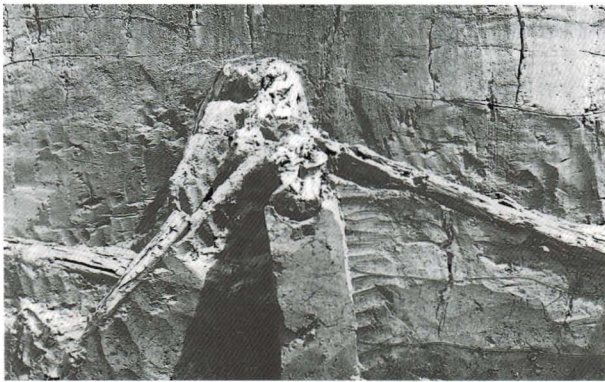
堰支保3



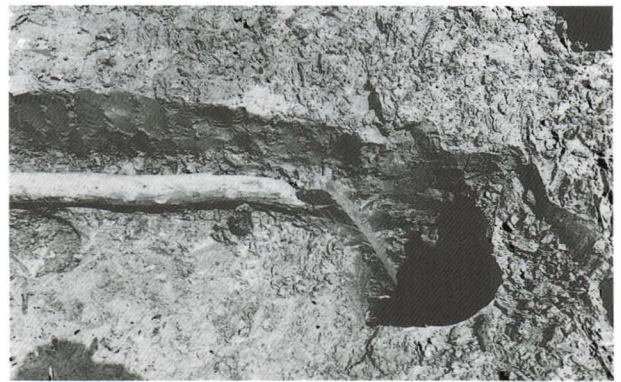
堰支保3



堰支保6



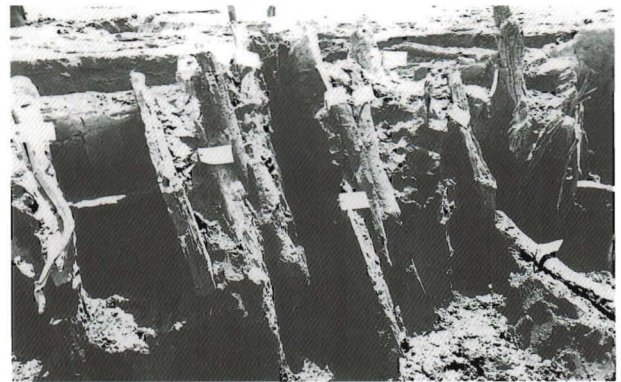
堰支保4



堰支保6



堰支保4



堰構造材杭



堰支保4



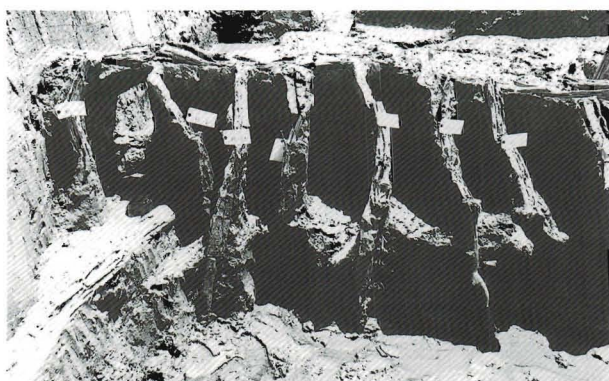
堰構造材杭



堰構造材杭



堰構造材杭



堰構造材杭



堰構造材杭



堰構造材杭



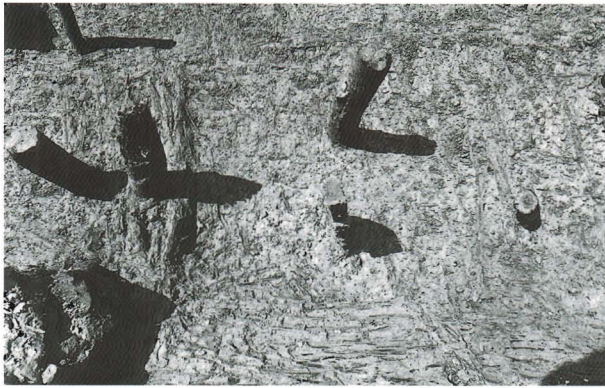
堰脇しがらみ



堰構造材杭



堰脇しがらみ



堰脇しがらみ



堰獣骨出土状況



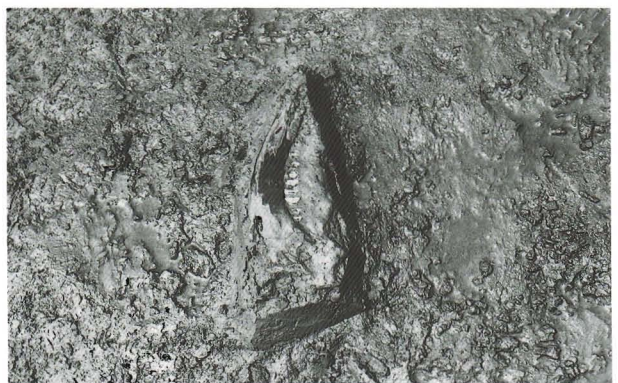
堰遺物出土状況



堰下段獣骨出土状況



堰遺物出土状況



堰下段獣骨出土状況



堰遺物出土状況



堰下段獣骨出土状況



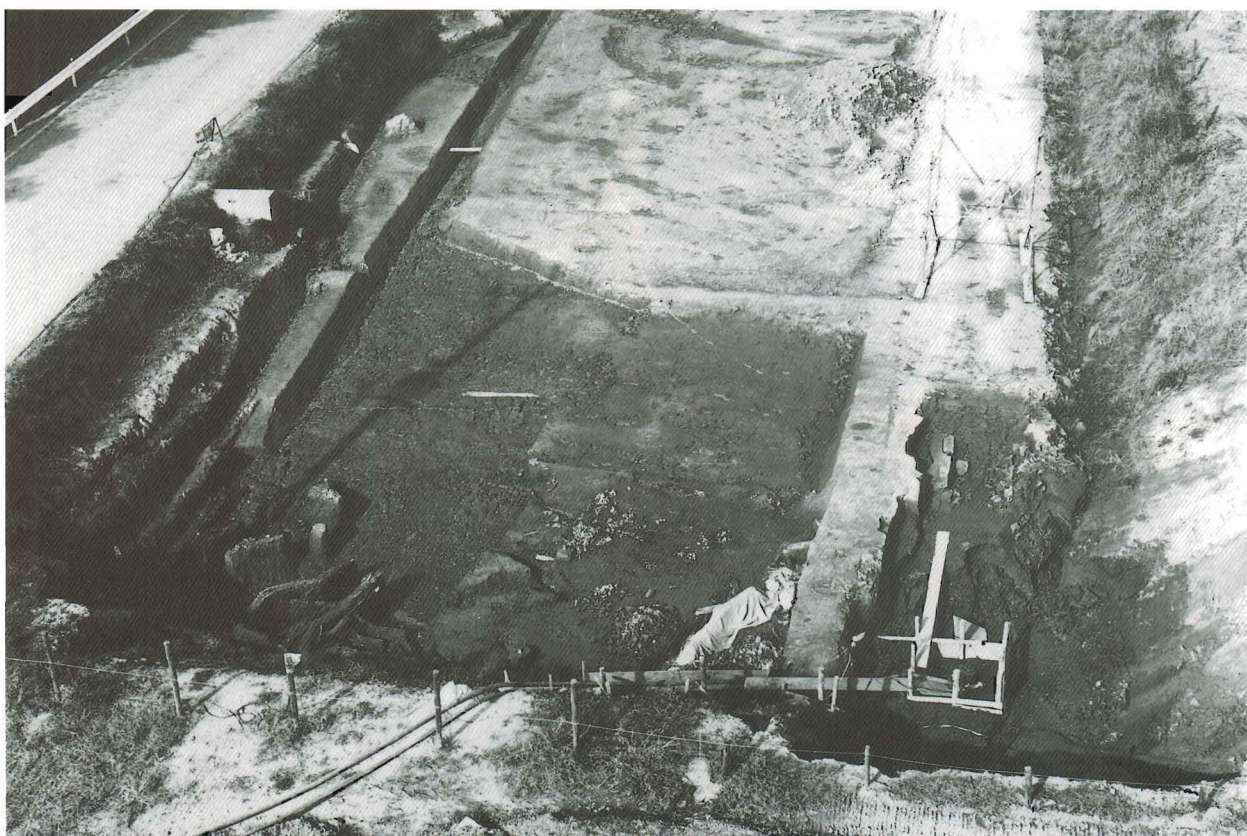
水路(南側から)



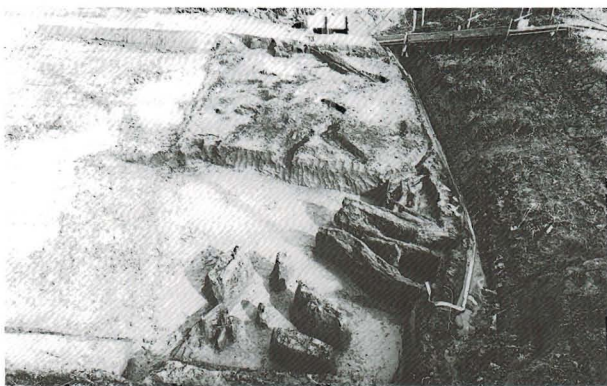
水路(北側から)



第364号溝



第7号溝(南側から)



第7号溝(西側から)



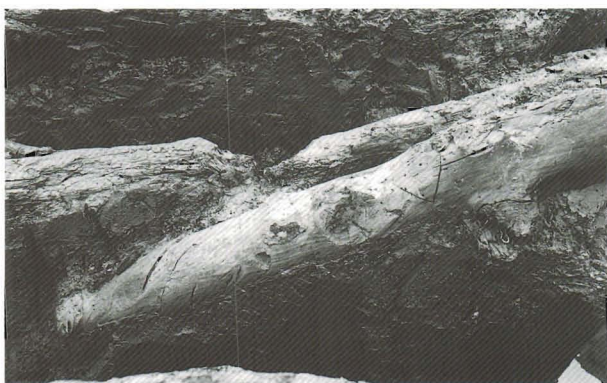
第7号溝遺物出土状況



第7号溝遺物出土状況



第7号溝遺物出土状況



第7号溝流木枝打ち状況



第7号溝遺物出土状況



第7号溝流木枝打ち状況



第7号溝土層断面



第165号住居跡第19図1



第165号住居跡第20図9



第165号住居跡第19図4



第173号住居跡第24図1



第165号住居跡第19図6



第195号住居跡第27図2



第195号住居跡第27図3



第198号住居跡第33図4



第198号住居跡第33図1



第198号住居跡第33図8



第198号住居跡第33図3



第209号住居跡第39図1



第210号住居跡第42図1



第210号住居跡第42図8



第210号住居跡第42図4



第210号住居跡第42図10



第210号住居跡第42図5



第214号住居跡第51図3



第216号住居跡第58図1



第217号住居跡第61図4



第217号住居跡第61図2



第217号住居跡第61図5



第217号住居跡第61図3



第217号住居跡第61図6



第228号住居跡第64図1



第234号住居跡第72図3



第228号住居跡第64図2



第234号住居跡第72図5



第234号住居跡第72図2



第234号住居跡第72図6



第234号住居跡第72図9



第234号住居跡第74図59



第234号住居跡第72図13



第256号住居跡第78図1



第234号住居跡第74図58



第259号住居跡第81図1



第259号住居跡第81図3



第269号住居跡第96図2



第264号住居跡第86図3



第274号住居跡第100図1



第269号住居跡第96図1



第274号住居跡第100図3



第274号住居跡第100図5



第274号住居跡第101図8



第274号住居跡第100図6



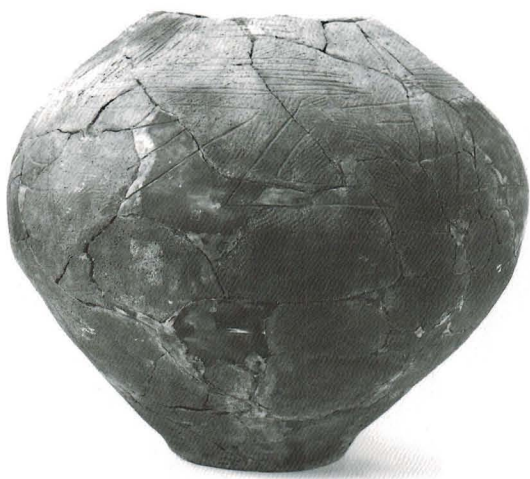
第287号住居跡第105図1



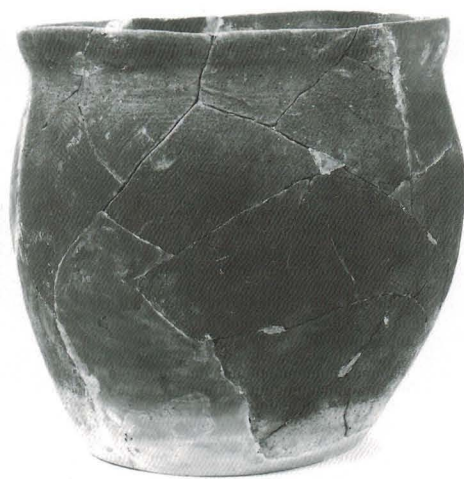
第274号住居跡第101図7



第300号住居跡第112図2



第301号住居跡第114図1



第303号住居跡第118図4



第301号住居跡第114図2



第303号住居跡第118図5



第303号住居跡第118図1



第305号住居跡第128図1



第305号住居跡第128図2



第305号住居跡第128図26



第305号住居跡第128図3



第305号住居跡第129図27



第305号住居跡第128図4



第306号住居跡第134図1



第306号住居跡第134図2



第312号住居跡第145図1



第307号住居跡第140図1



第312号住居跡第145図2



第307号住居跡第140図3



第316号住居跡第147図1



第316号住居跡第147図2



第317号住居跡第150図3



第317号住居跡第150図1



第317号住居跡第150図4



第317号住居跡第150図2



第317号住居跡第150図5



第317号住居跡第150図7



第320号住居跡第157図1



第318号住居跡第154図1



第323号住居跡第160図1



第318号住居跡第154図2



第325号住居跡第165図1



第326号住居跡第168図3



第329号住居跡第172図2



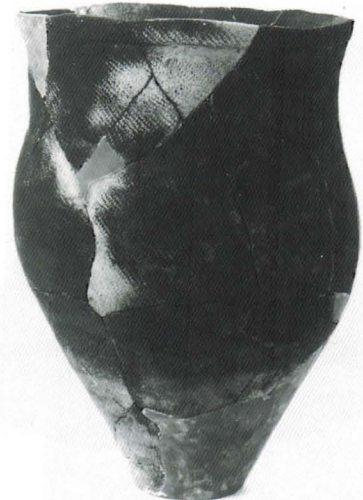
第326号住居跡第168図4



第329号住居跡第172図3



第329号住居跡第172図1



第329号住居跡第172図5



第329号住居跡第172図6



第331号住居跡第179図1



第330号住居跡第177図1



第331号住居跡第179図2



第330号住居跡第177図2



第331号住居跡第179図3



第331号住居跡第179図4



第331号住居跡第179図7



第331号住居跡第179図5



第336号住居跡第187図1



第331号住居跡第179図6



第336号住居跡第187図2



第336号住居跡第187図3



第336号住居跡第187図6



第336号住居跡第187図4



第336号住居跡第187図7



第336号住居跡第187図5



第336号住居跡第188図8



第336号住居跡第188図9



第338号住居跡第196図1



第336号住居跡第188図10



第338号住居跡第196図2



第336号住居跡第188図11



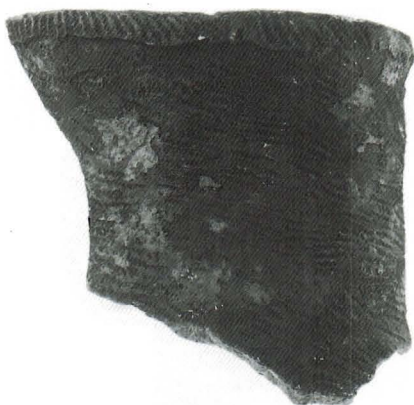
第339号住居跡第199図1



第339号住居跡第199図2



第339号住居跡第200図8



第339号住居跡第199図6



第340号住居跡第205図1



第339号住居跡第200図7



第340号住居跡第205図2



第340号住居跡第205図3



第340号住居跡第205図8



第340号住居跡第205図4



第340号住居跡第205図9



第340号住居跡第205図6



第341号住居跡第210図1



342号住居跡第212図1



第348号住居跡第221図1



342号住居跡第212図2



第348号住居跡第221図2



342号住居跡第212図3



第348号住居跡第221図3



第348号住居跡第222図4



第348号住居跡第223図8



第348号住居跡第222図5



第348号住居跡第223図9



第348号住居跡第223図6



第348号住居跡第223図10



第359号住居跡第229図1



第359号住居跡第230図4



第359号住居跡第229図2



第369号住居跡第235図1



第359号住居跡第230図3



第413号住居跡第246図2



第413号住居跡第246図5



第426号住居跡第257図1



第421号住居跡第255図1



第430号住居跡第265図1



第421号住居跡第255図2



第430号住居跡第265図2



第431号住居跡第267図2



第431号住居跡第267図5



第431号住居跡第267図3



第432号住居跡第270図1



第431号住居跡第267図4



第297号土壇第279図1



第320号土壤第279图1



第769号土壤第279图1



第364号土壤第279图1



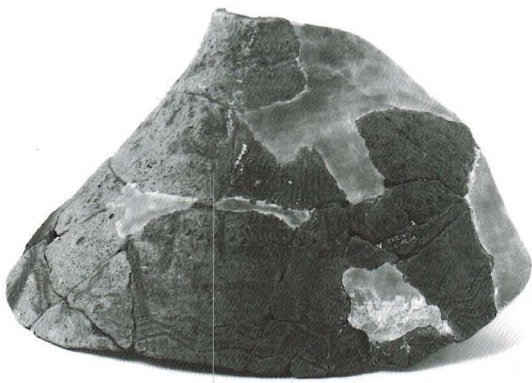
第219号土壤第290图1



第370号土壤第279图1



第219号土壤第290图2



第221号土壤第291图1



第312号土壤第292图2



第221号土壤第291图2



第312号土壤第292图3



第312号土壤第292图1



第521号土壤第293图1



第521号土壙第293图2



第795号土壙第296图1



第555号土壙第294图3



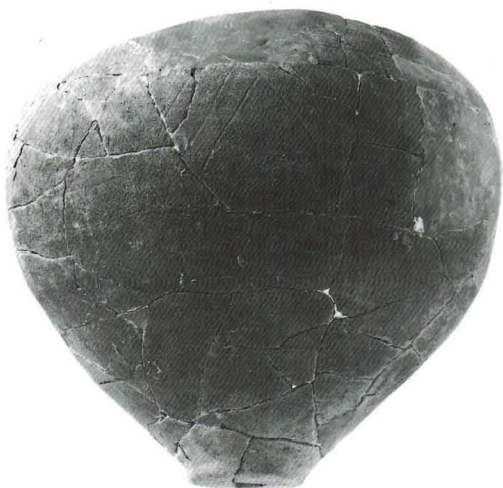
第795号土壙第296图2



第556号土壙第295图1



第795号土壙第296图4



第777号土壙第297図1



下段壙第311図1



第796号土壙第297図1



下段壙第311図2



第796号土壙第297図2



下段壙第311図4



上段堰第312図1



上段堰第312図4



上段堰第312図2



上段堰第312図5



上段堰第312図3



上段堰第312図6



上段堰第312図7



上段堰第312図12



上段堰第312図9



上段堰第312図14



上段堰第312図10



上段堰第313図16



上段堰第313図17



上段堰第313図22



上段堰第313図18



上段堰第313図23



上段堰第313図21



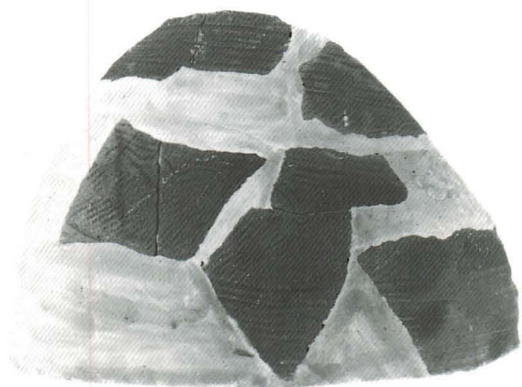
上段堰第313図24



上段堰第313図25



上段堰第314図29



上段堰第313図26



上段堰第314図30



上段堰第314図28



上段堰第314図31



上段堰第314図33



上段堰第314図38



上段堰第314図36



上段堰第314図38



上段堰第314図37



上段堰第315図39



上段堰第315図40



上段堰第315図43



上段堰第315図41



上段堰第315図44



上段堰第315図42



上段堰第315図45



上段堰第315図48



上段堰第315図52



上段堰第315図50



上段堰第315図53



上段堰第315図51



第357号溝跡第366図1



第357号溝跡第366図2



第7号溝跡第368図3



第7号溝跡第368図1



グリッド第373図2



第7号溝跡第368図2



グリッド第373図3



グリッド第373図4



グリッド第374図11



グリッド第373図7



グリッド第374図12



グリッド第373図10



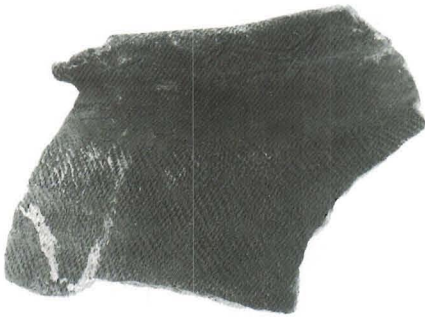
グリッド第374図13



グリッド第374図15



グリッド第374図19



グリッド第374図16



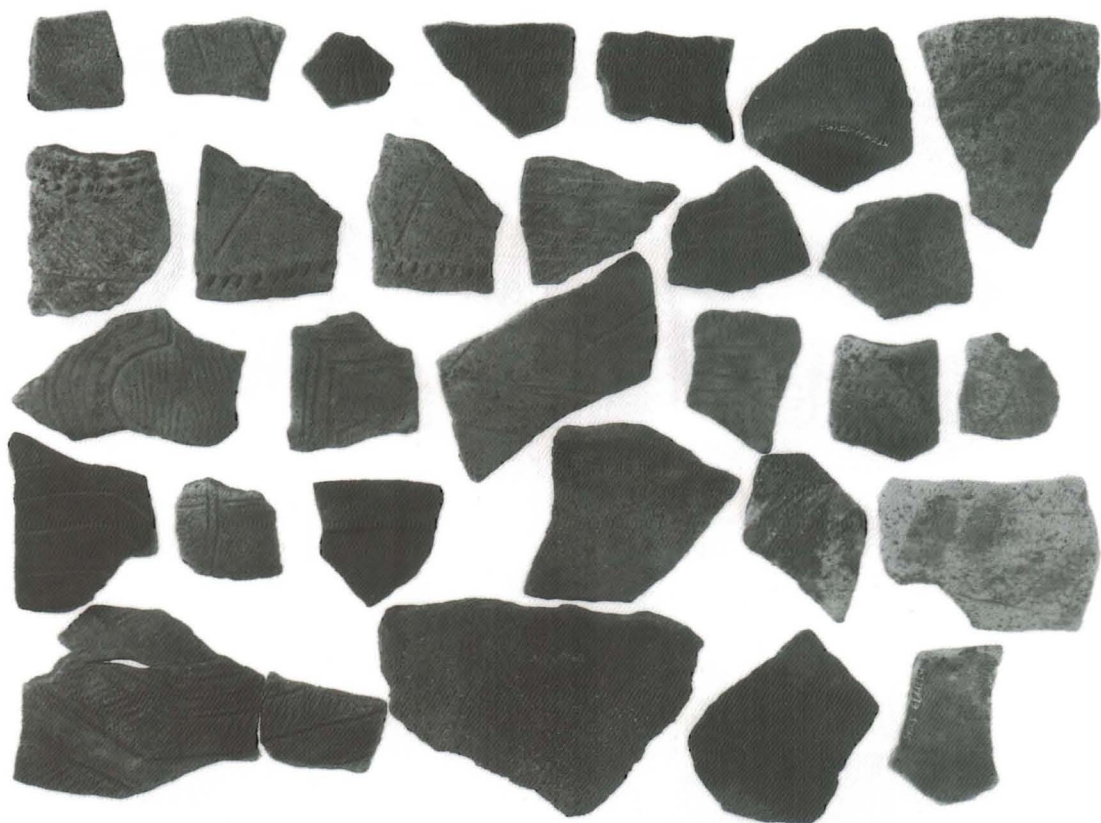
グリッド第374図20



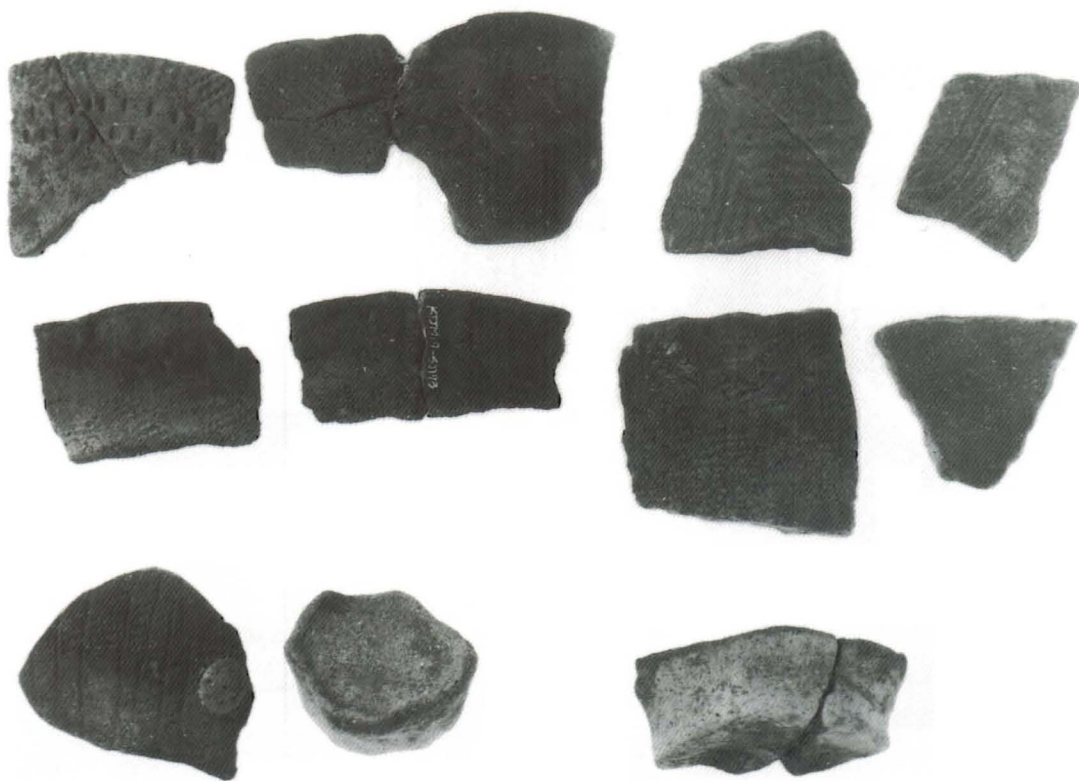
グリッド第374図17



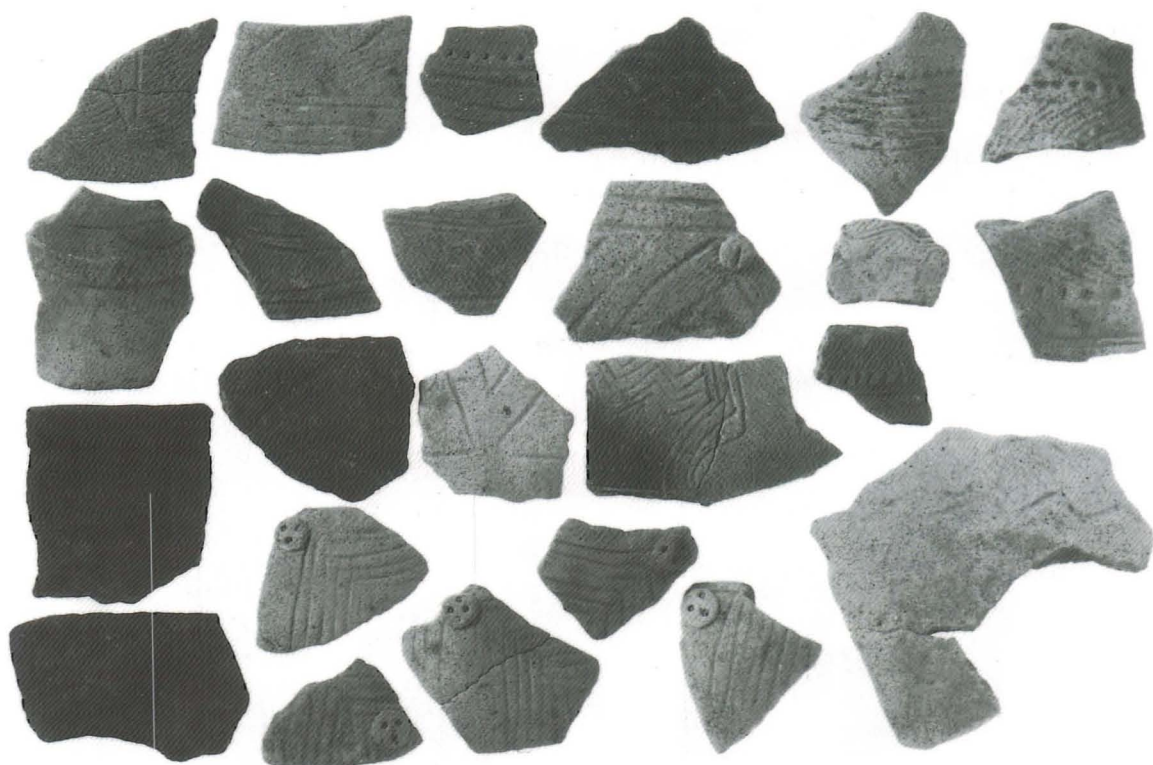
グリッド第374図21



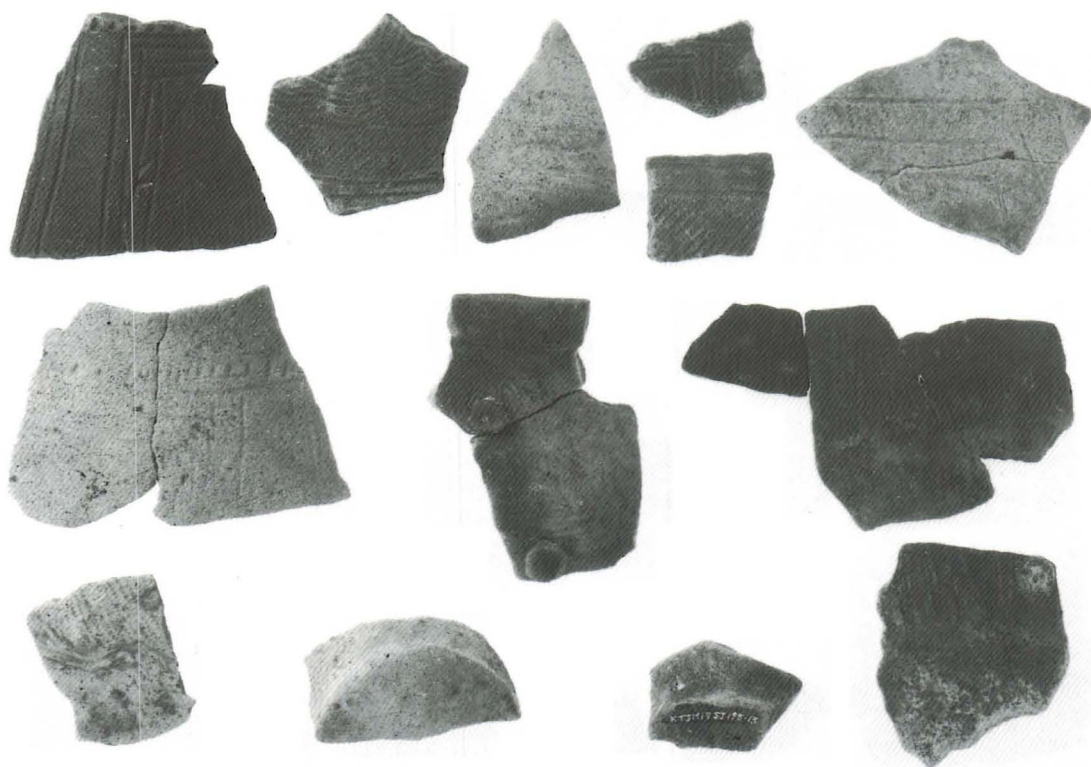
第142・165号住居跡出土遺物



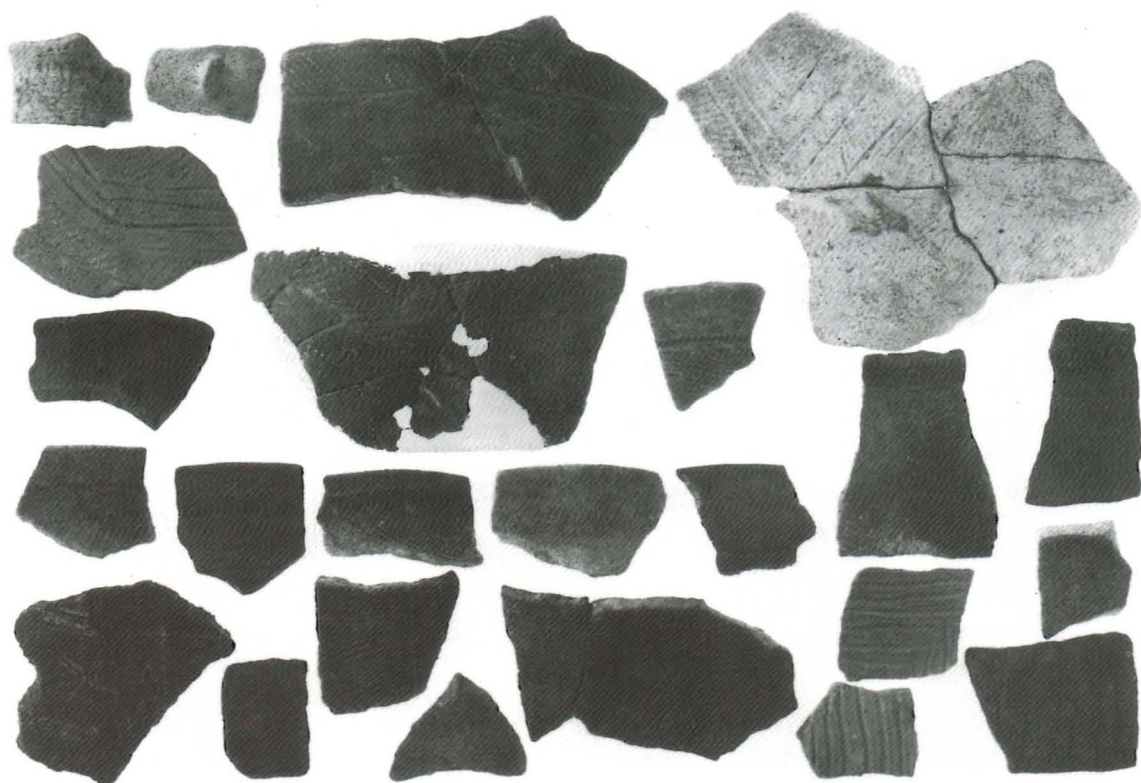
第173号住居跡出土遺物



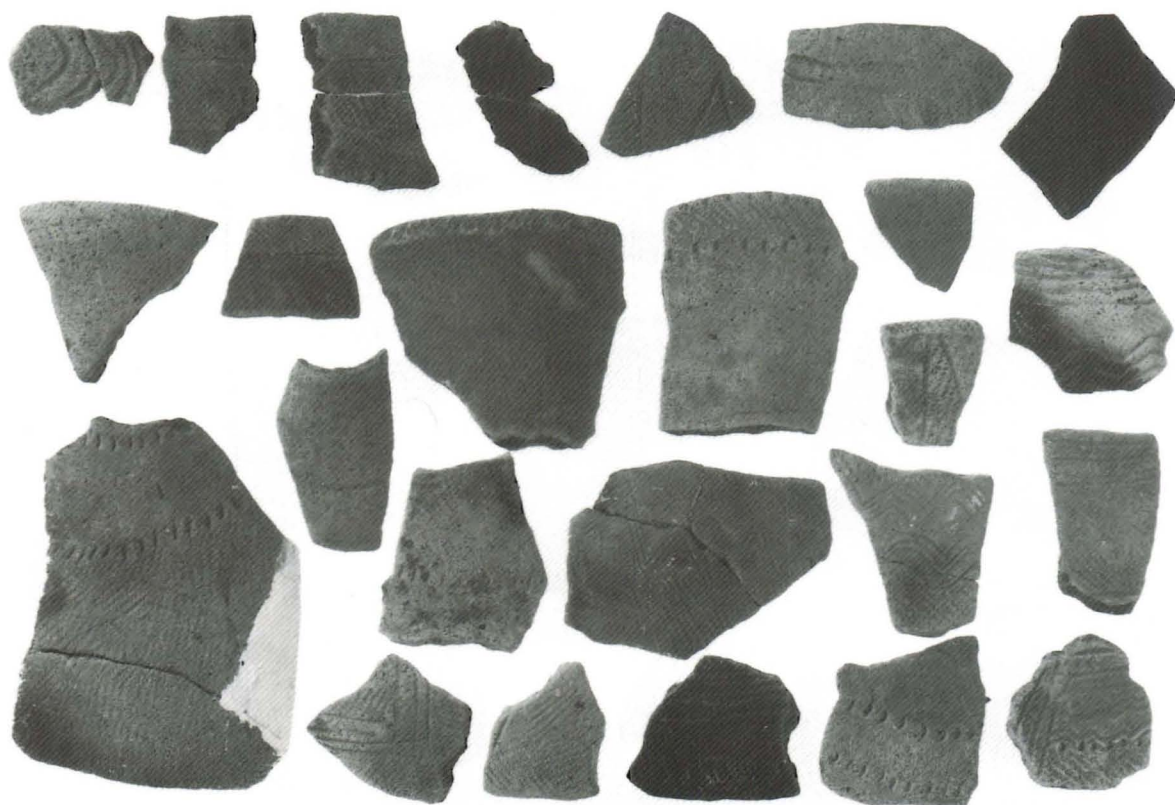
第195号住居跡出土遺物



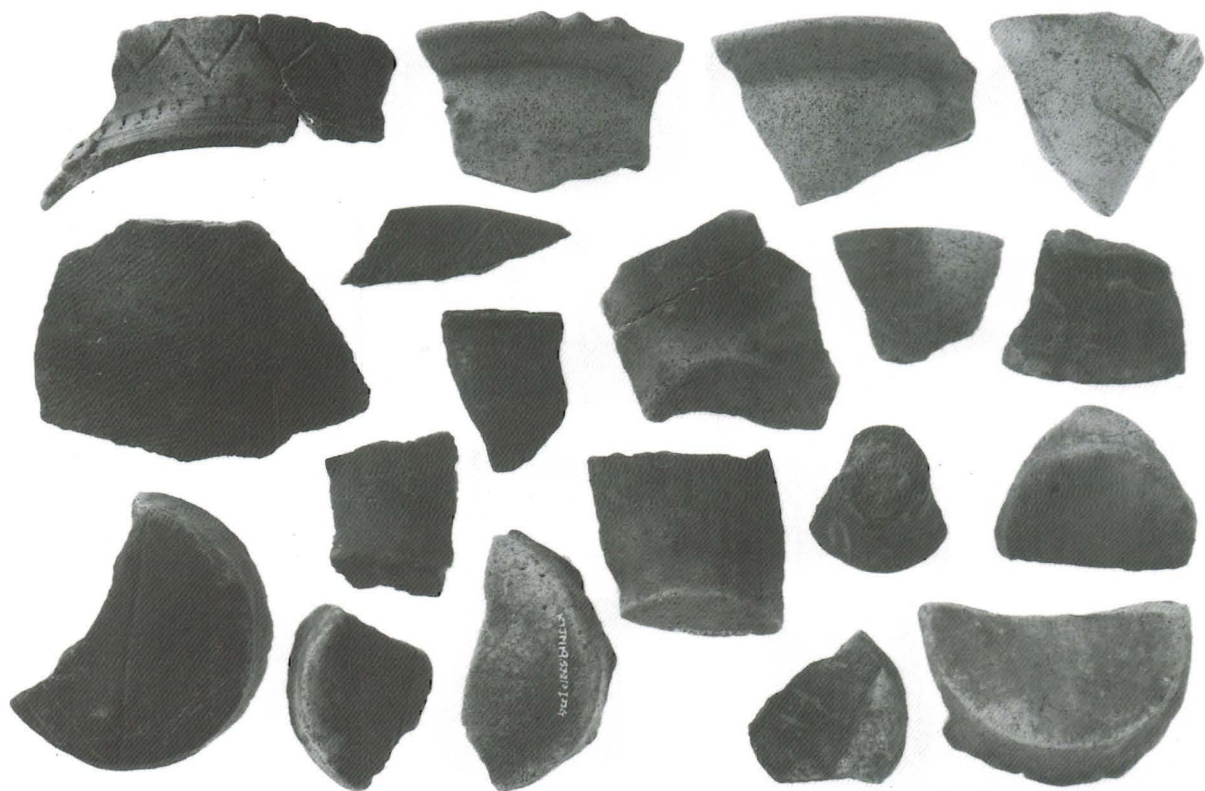
第198号住居跡出土遺物



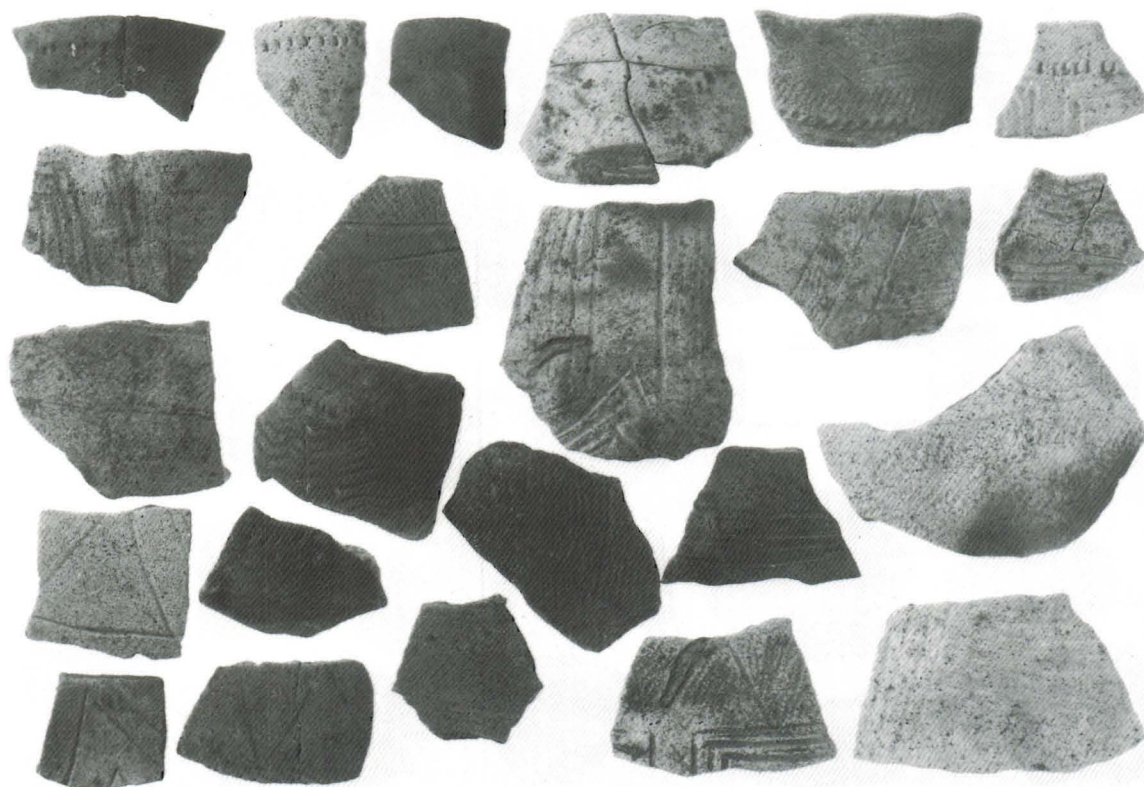
第199・209・210号住居跡出土遺物



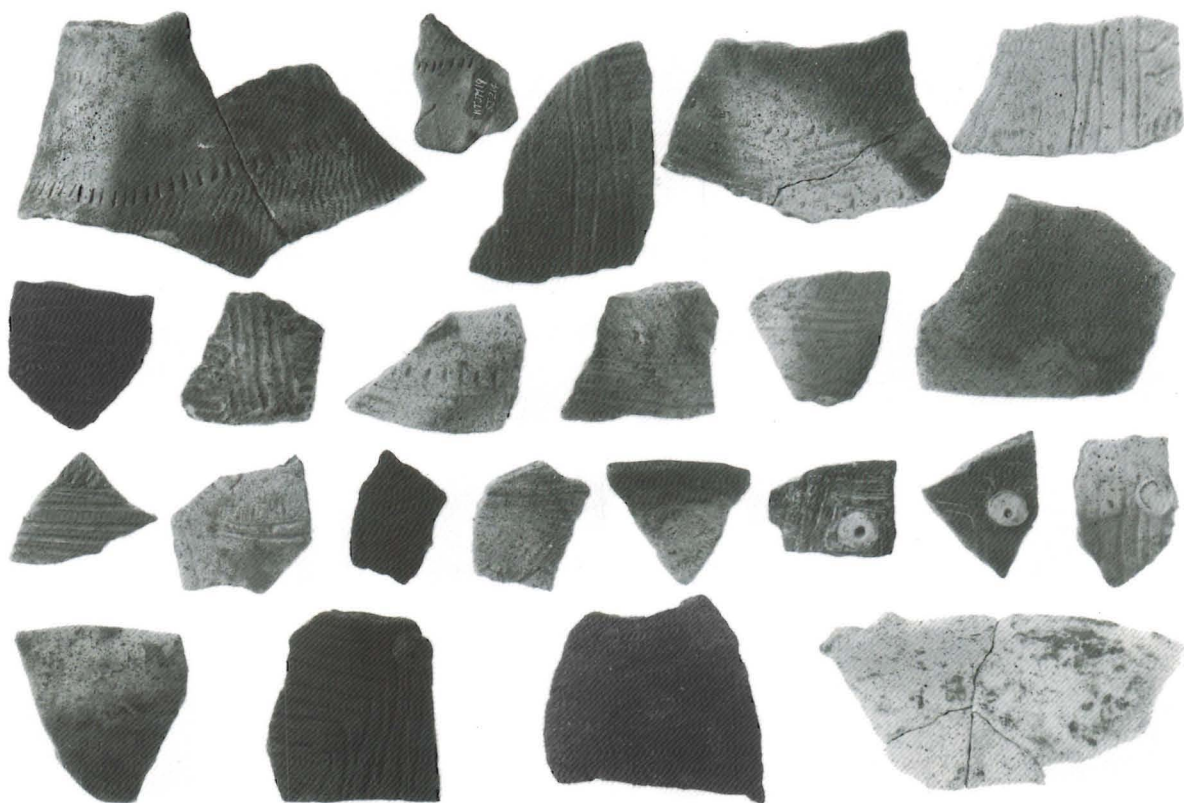
第210号住居跡出土遺物



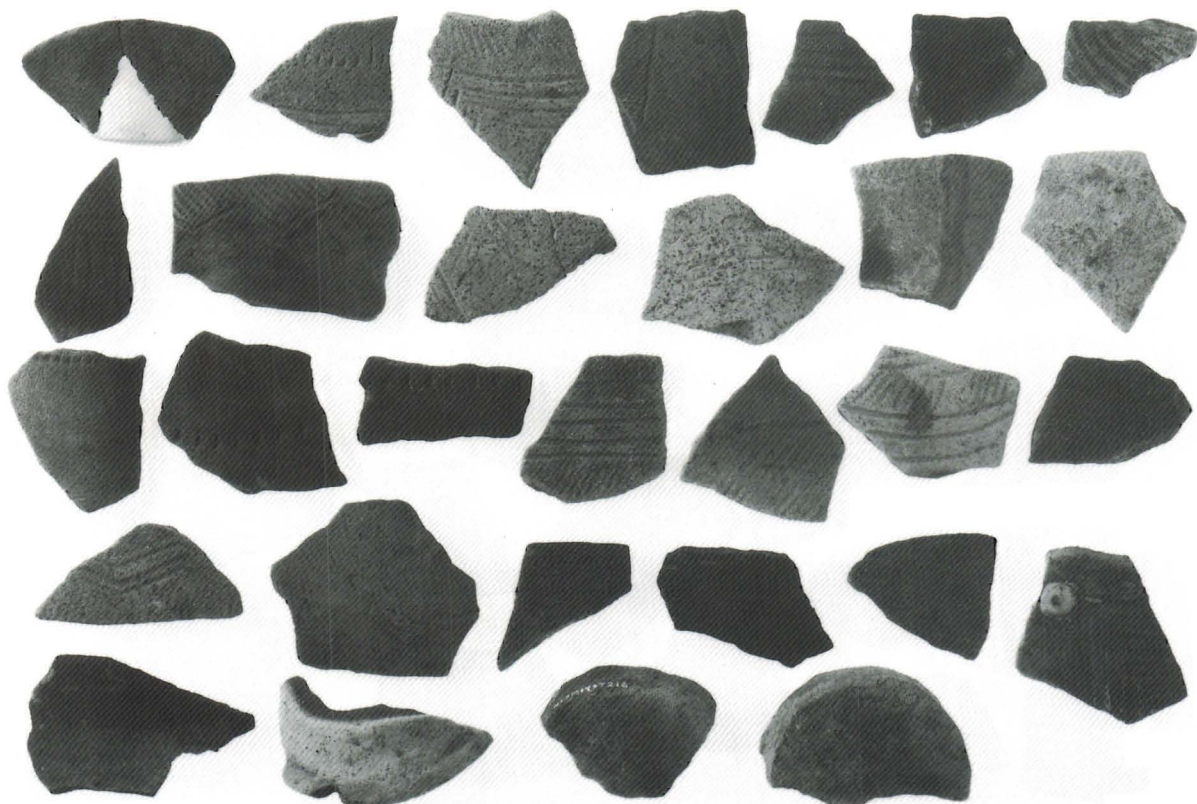
第210号住居跡出土遺物



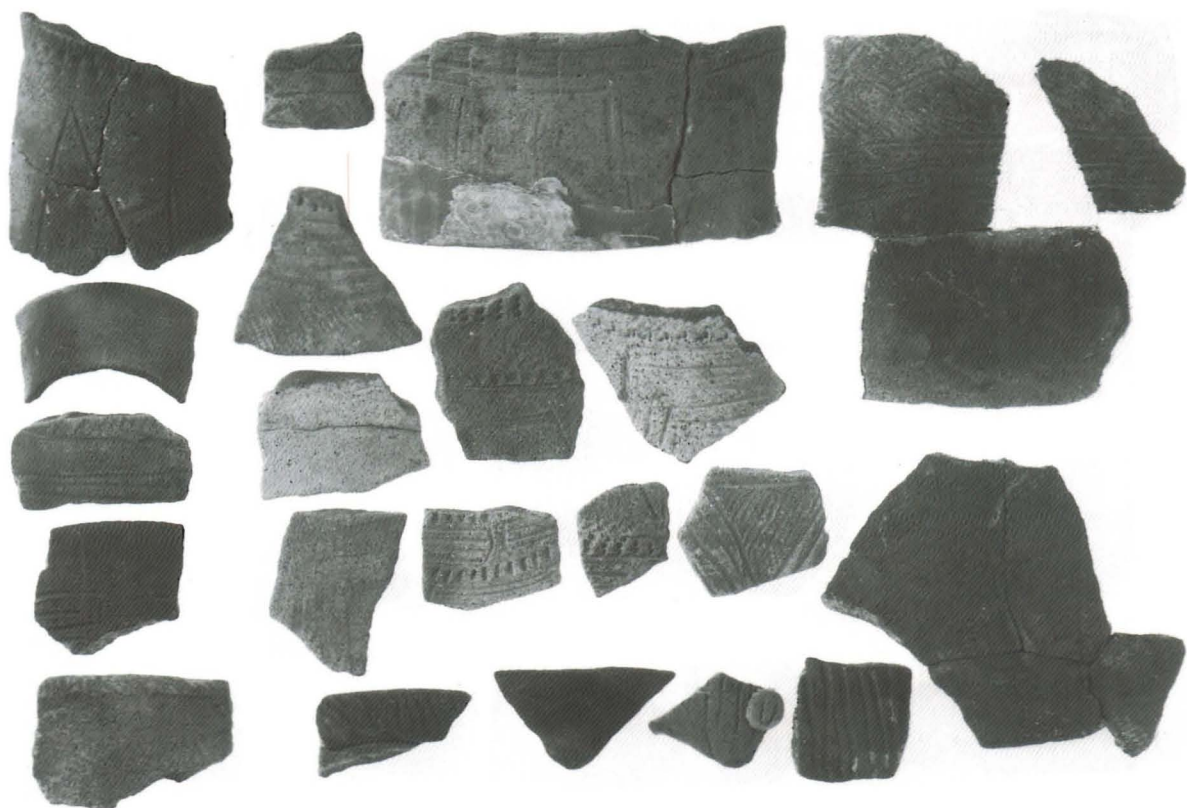
第214号住居跡出土遺物



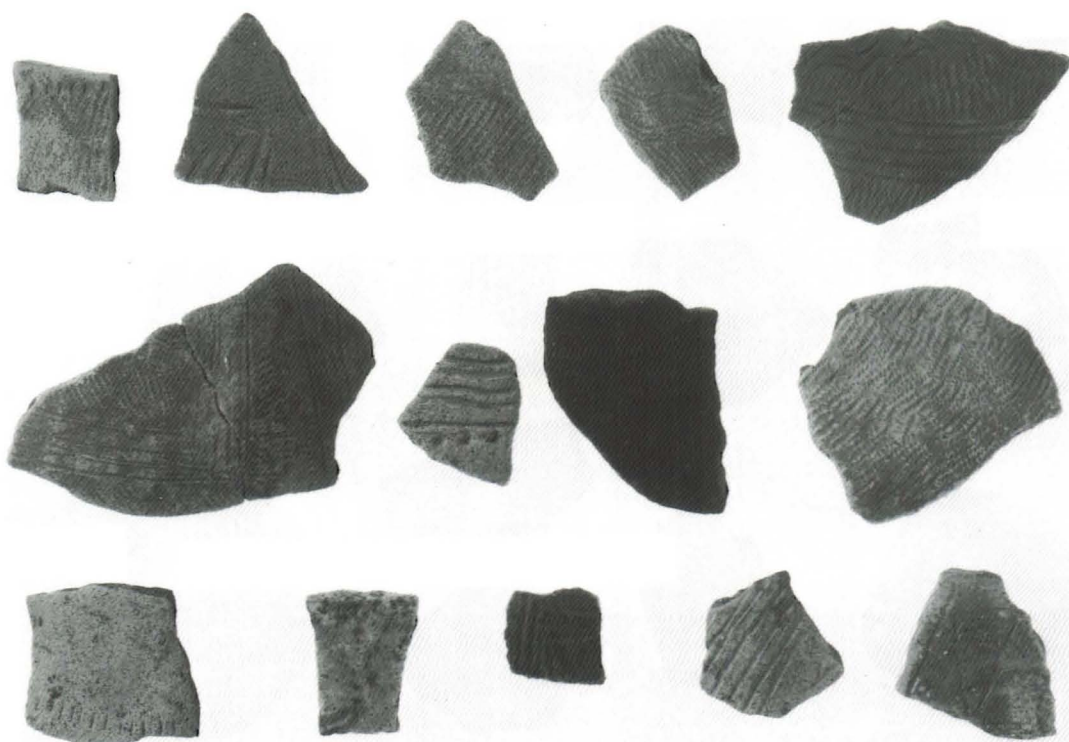
第214号住居跡出土遺物



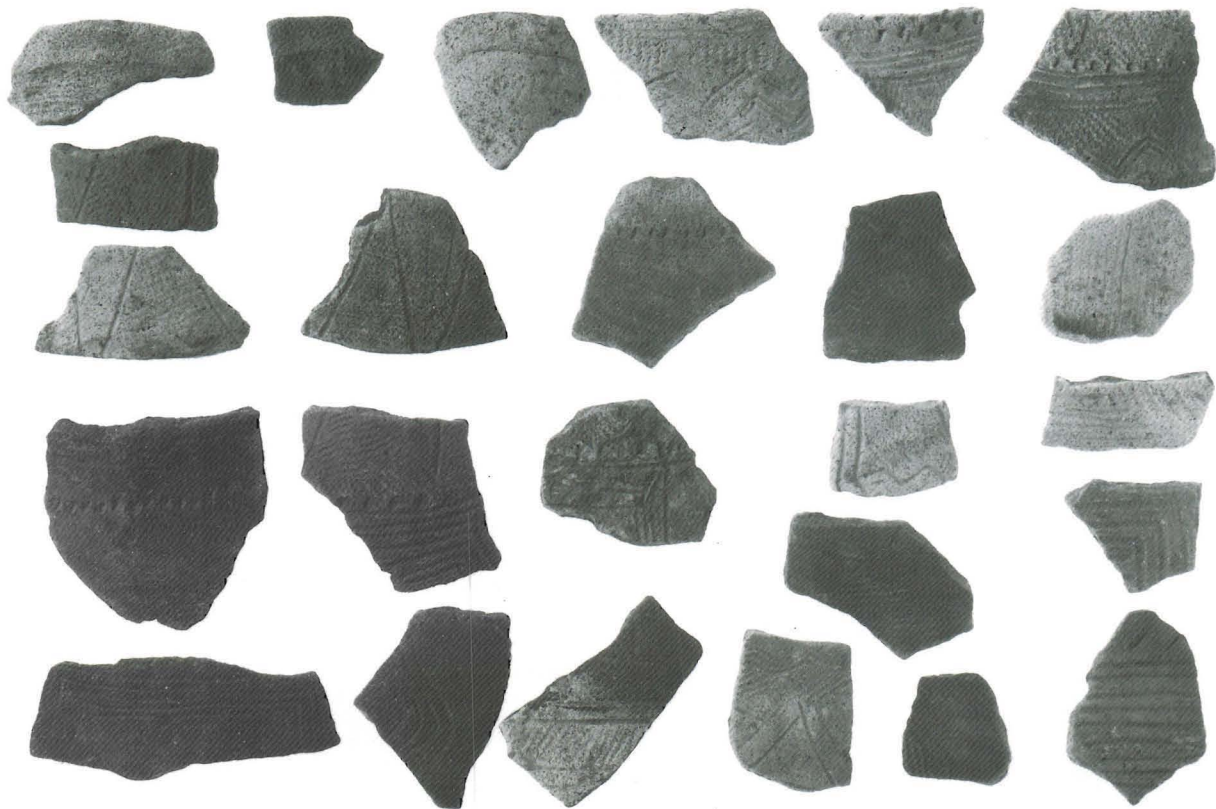
第215・216号住居跡出土遺物



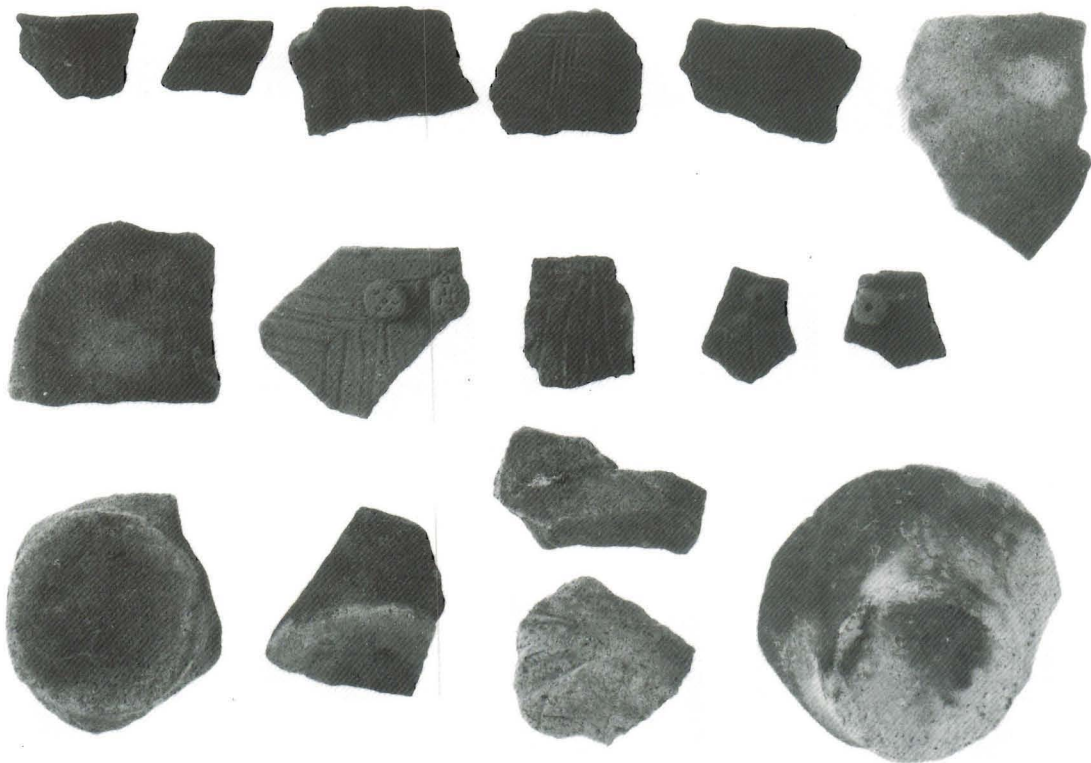
第217・228号住居跡出土遺物



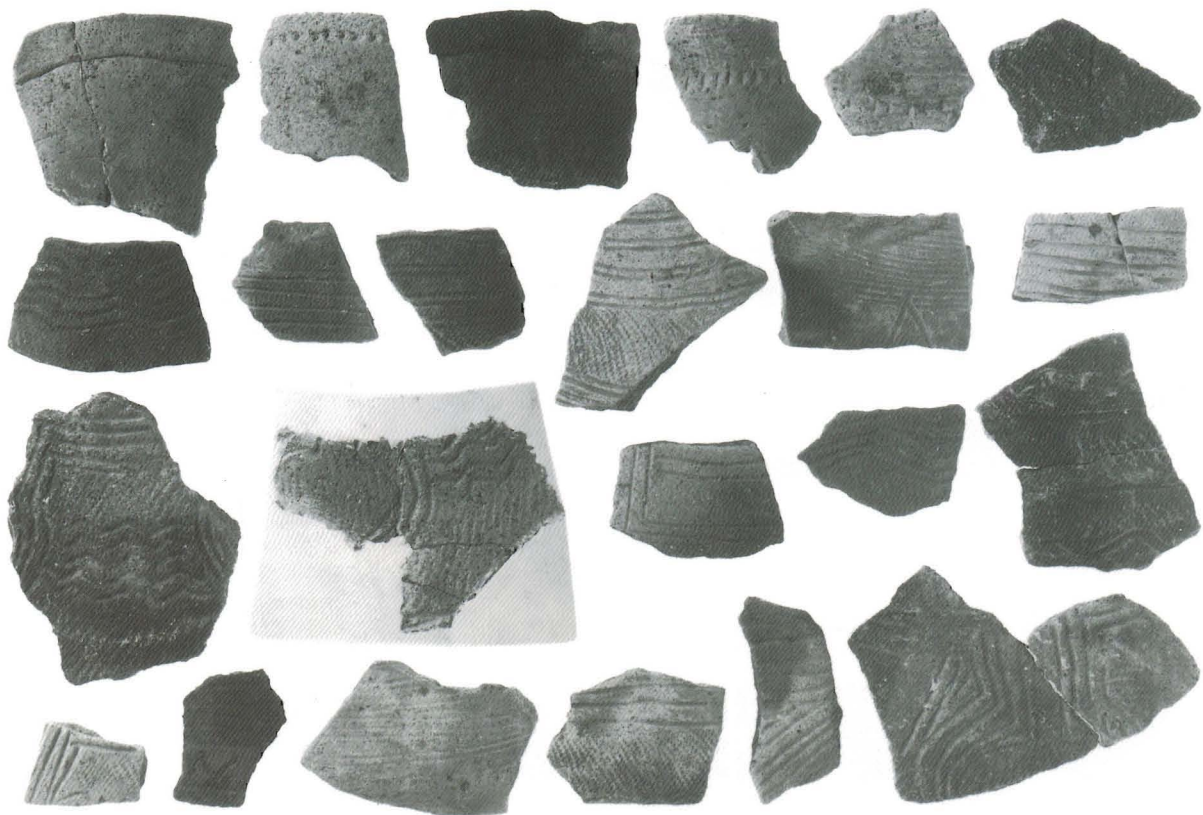
第229・231号住居跡出土遺物



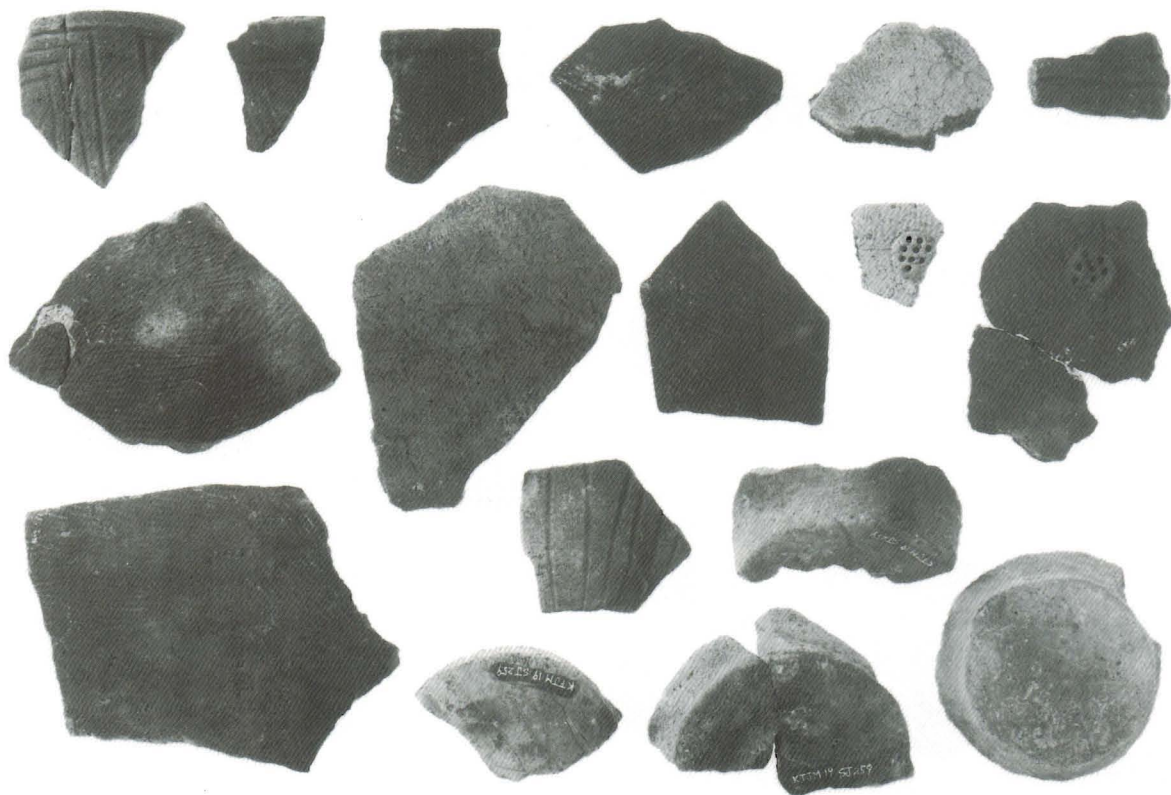
第234号住居跡出土遺物



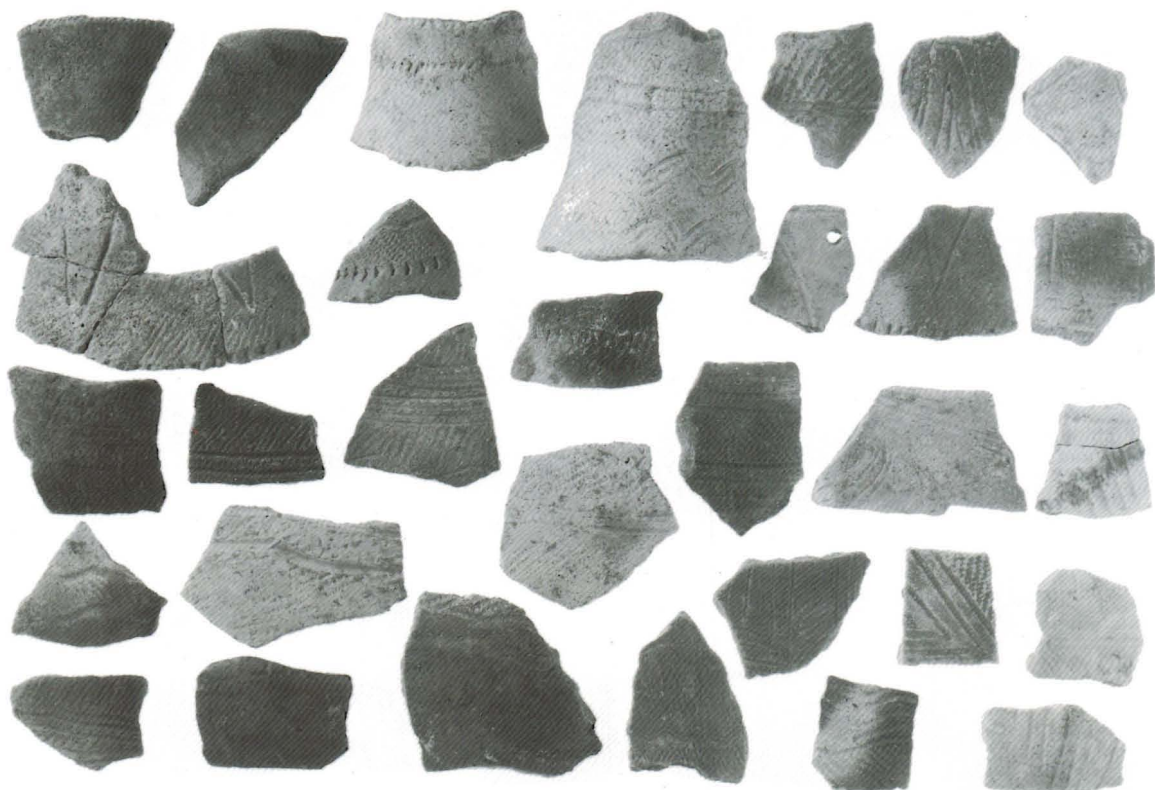
第234号住居跡出土遺物



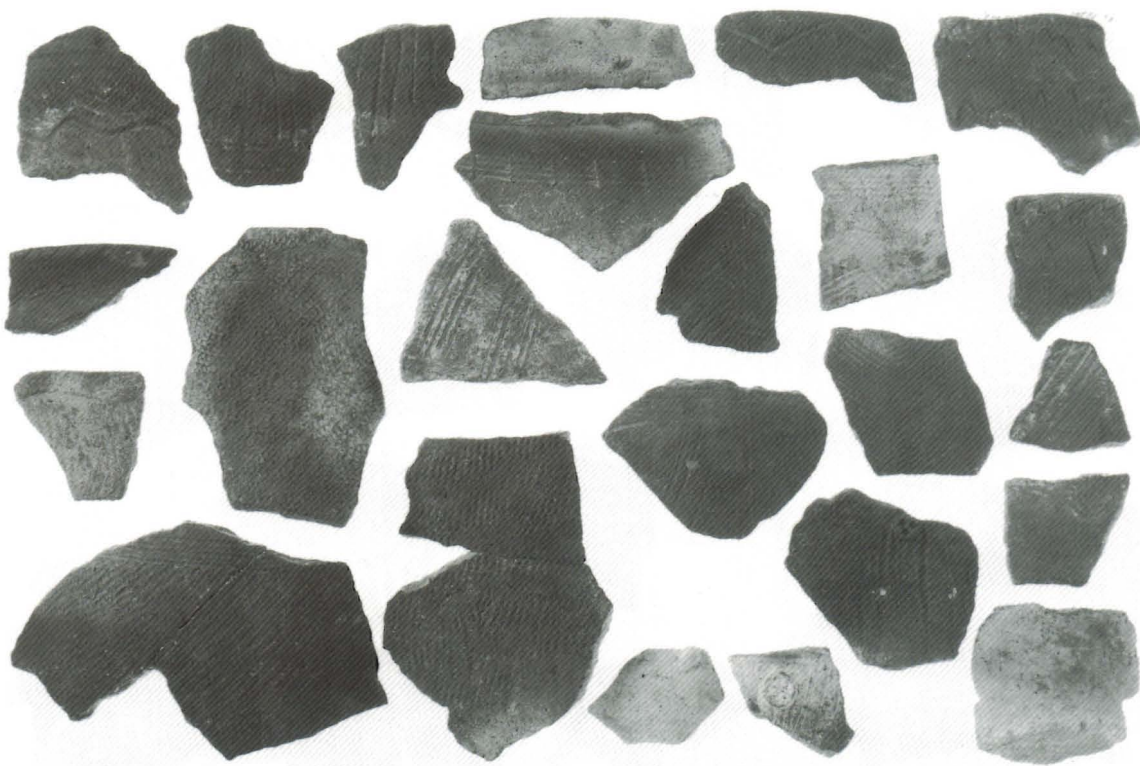
第259号住居跡出土遺物



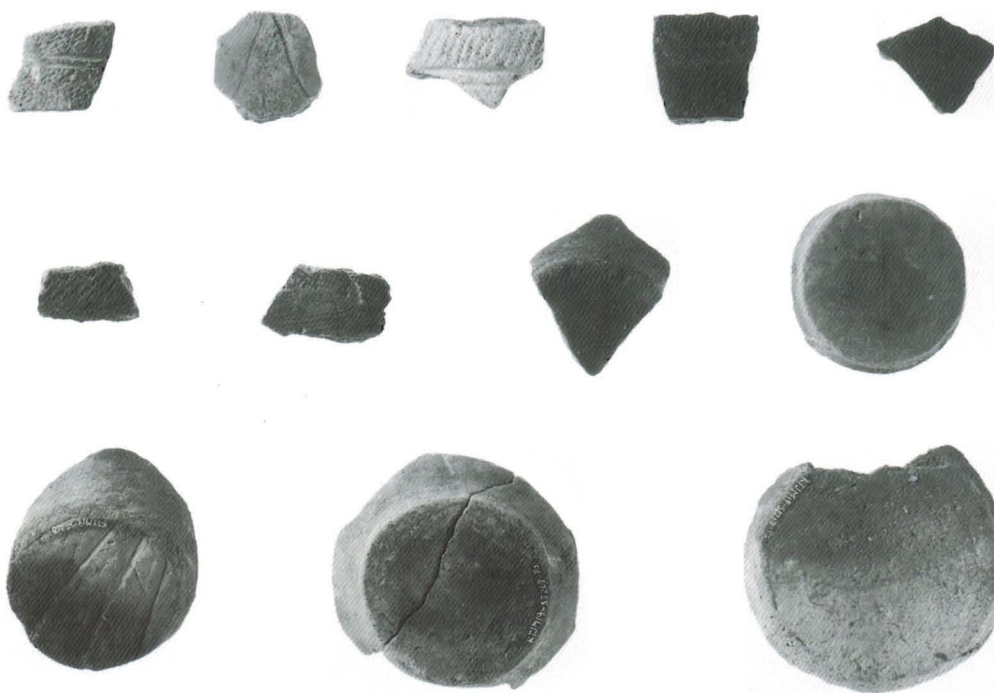
第259号住居跡出土遺物



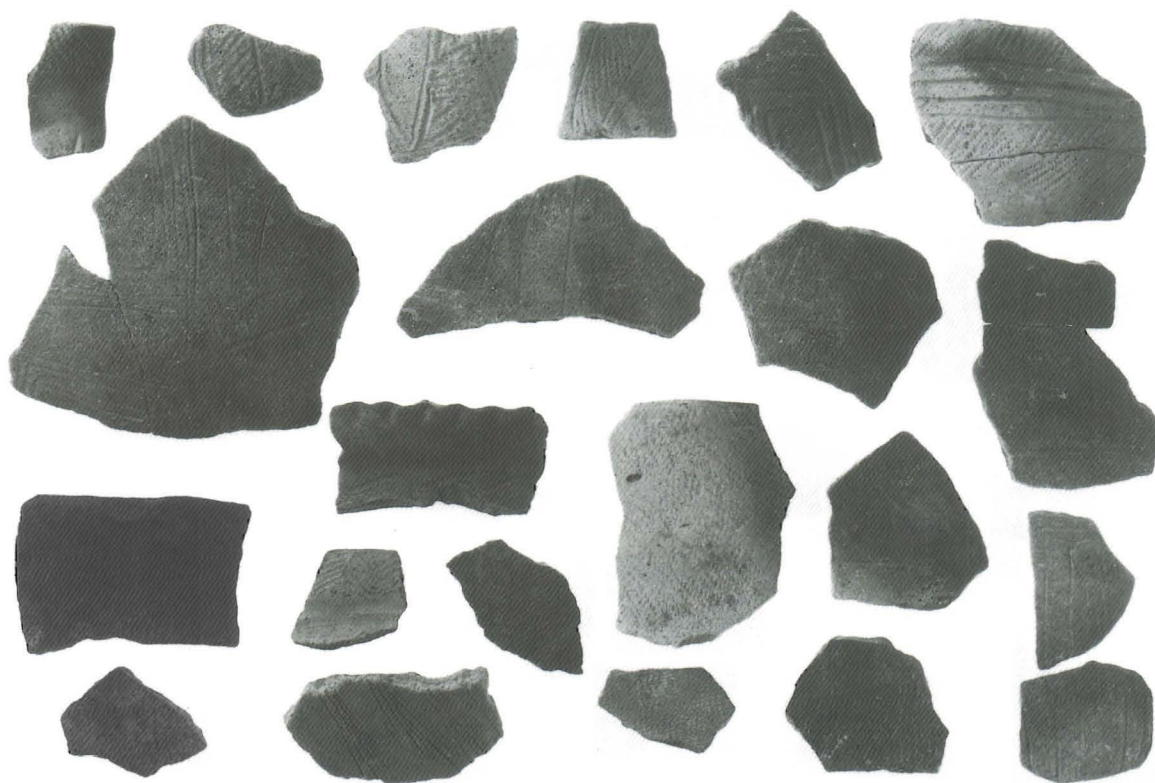
第264号住居跡出土遺物



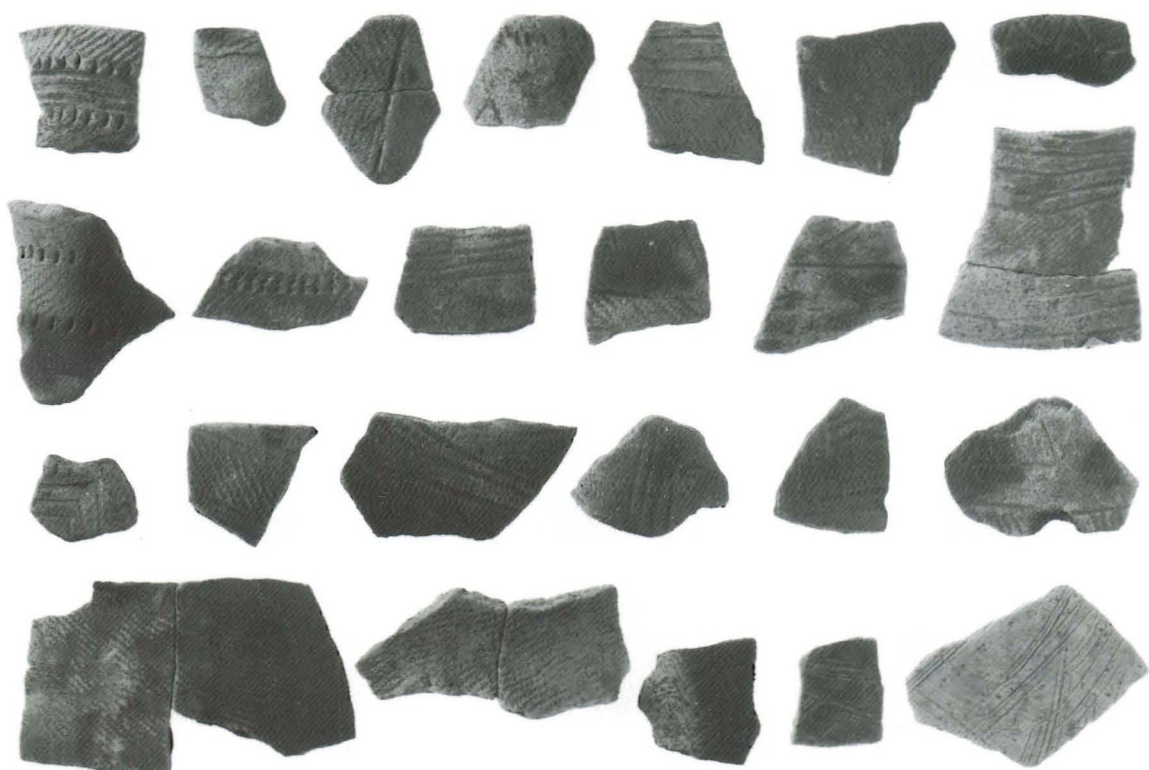
第264号住居跡出土遺物



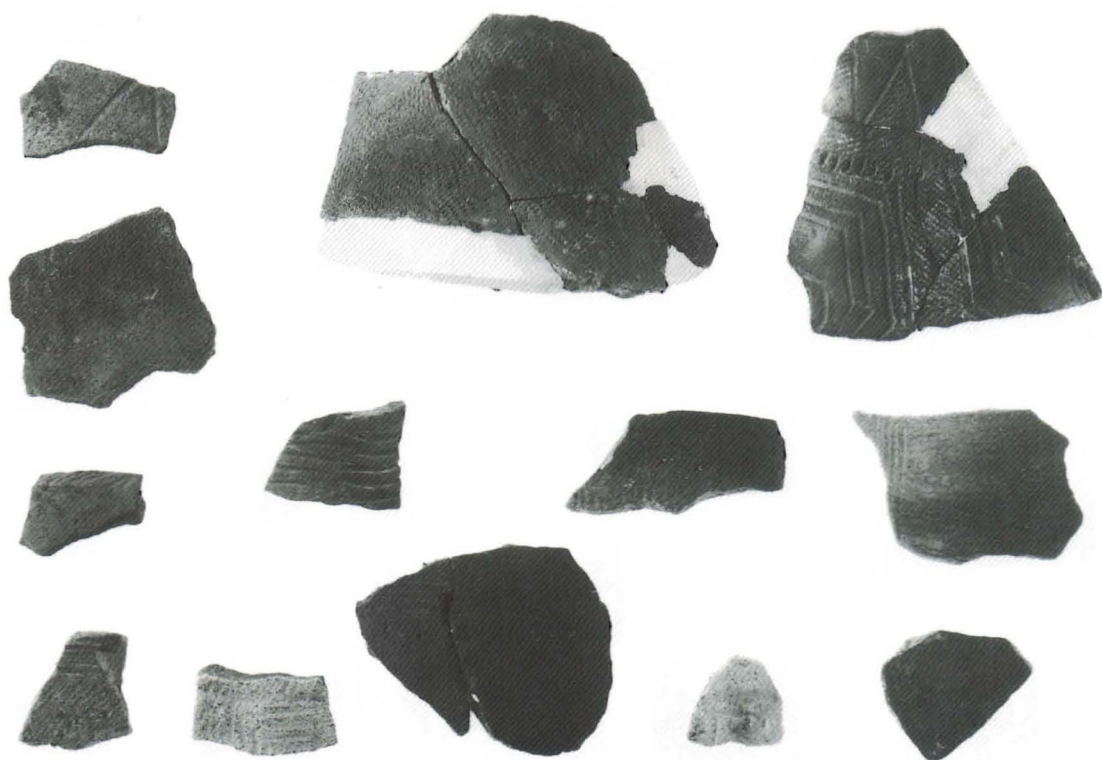
第268号住居跡出土遺物



第269号住居跡出土遺物



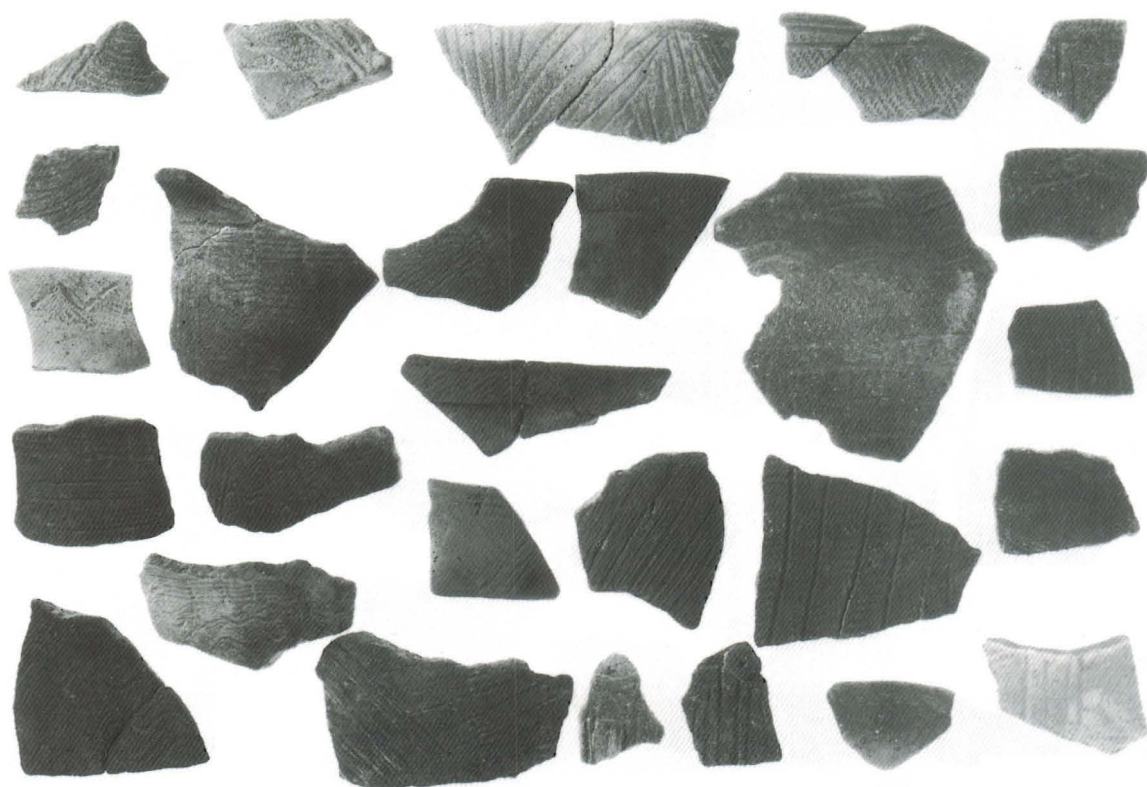
第274・287号住居跡出土遺物



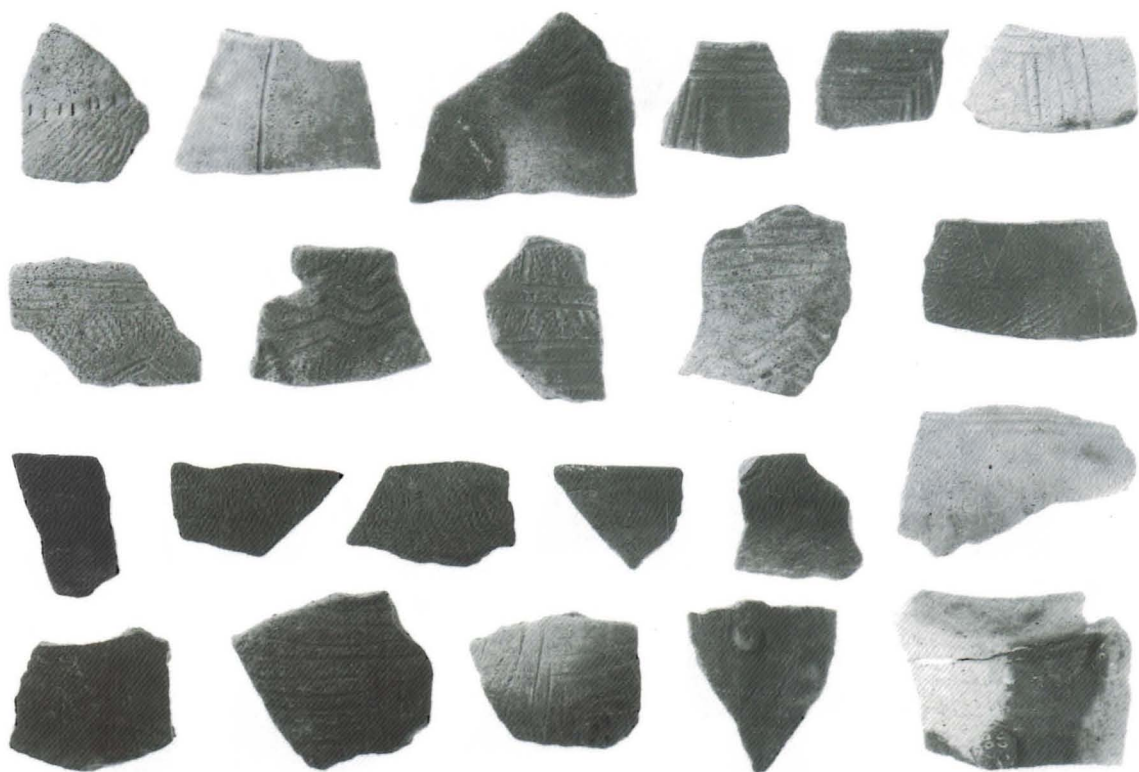
第288・293・300号住居跡出土遺物



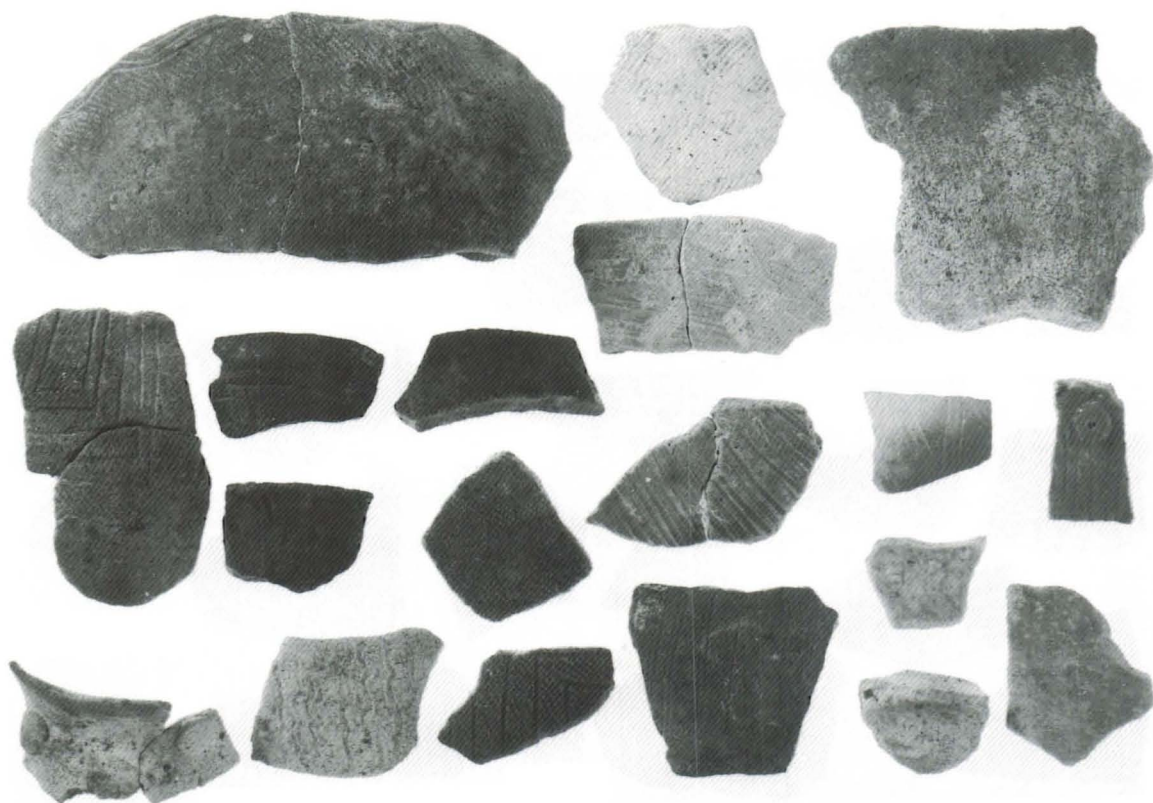
第301・303号住居跡出土遺物



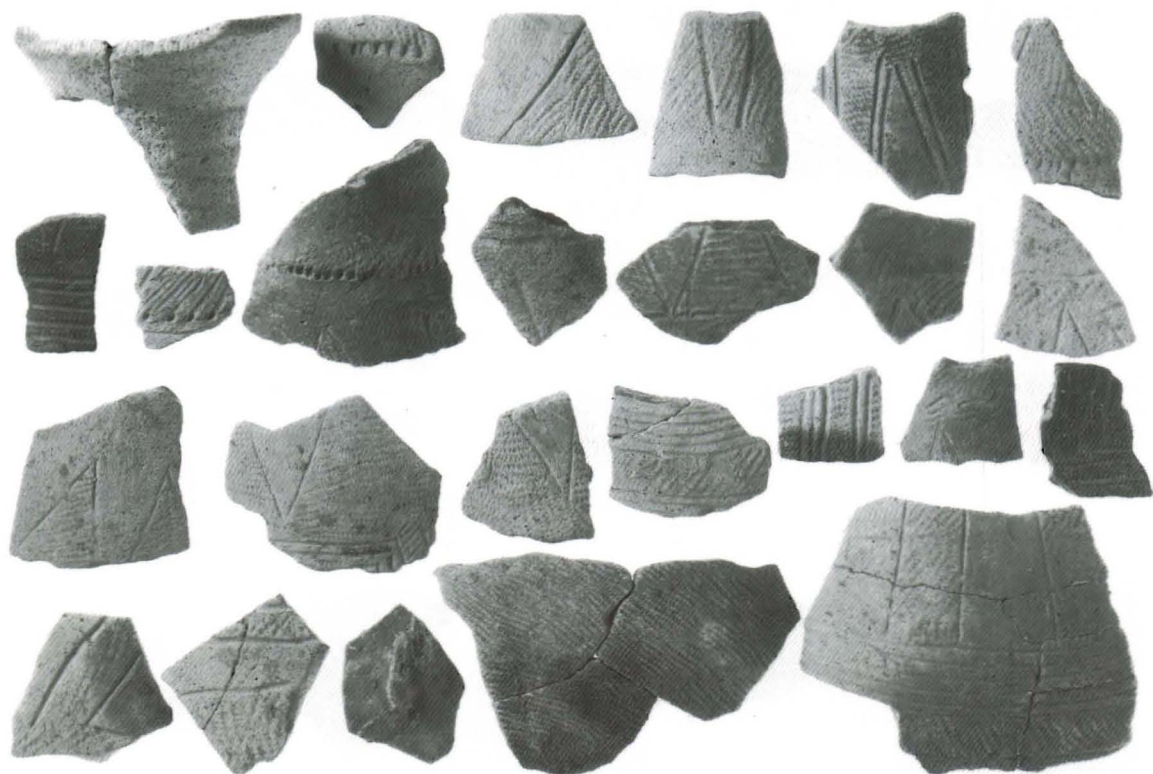
第303・304号住居跡出土遺物



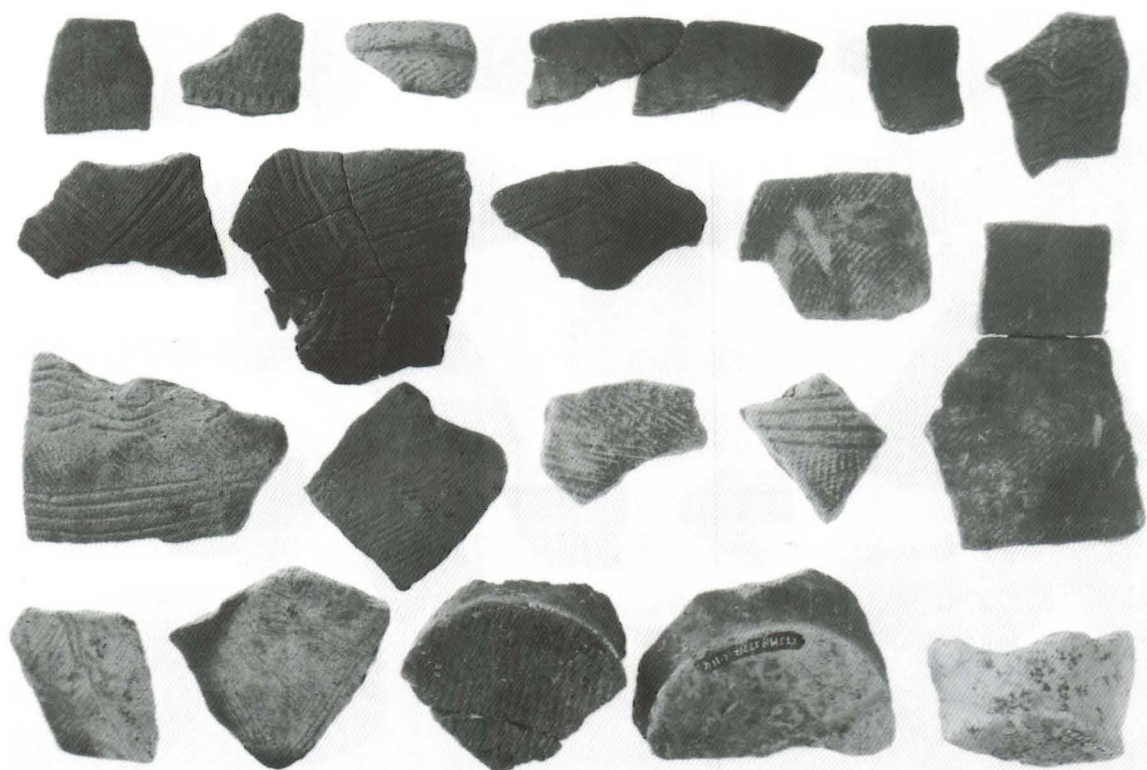
第305号住居跡出土遺物



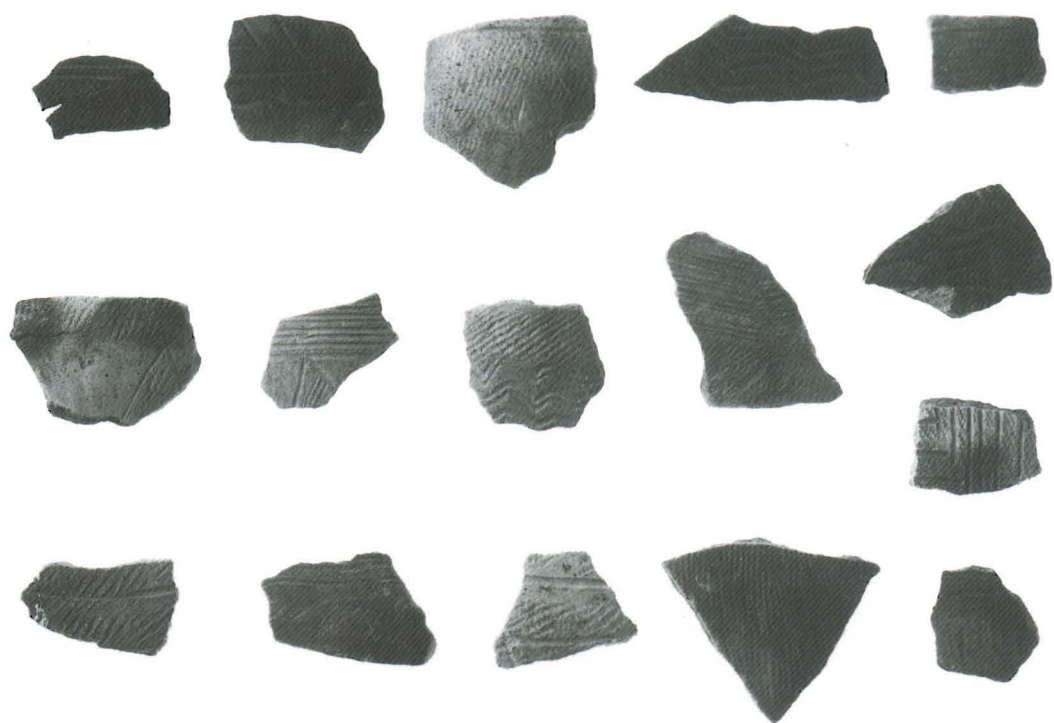
第306号住居跡出土遺物



第306号住居跡出土遺物



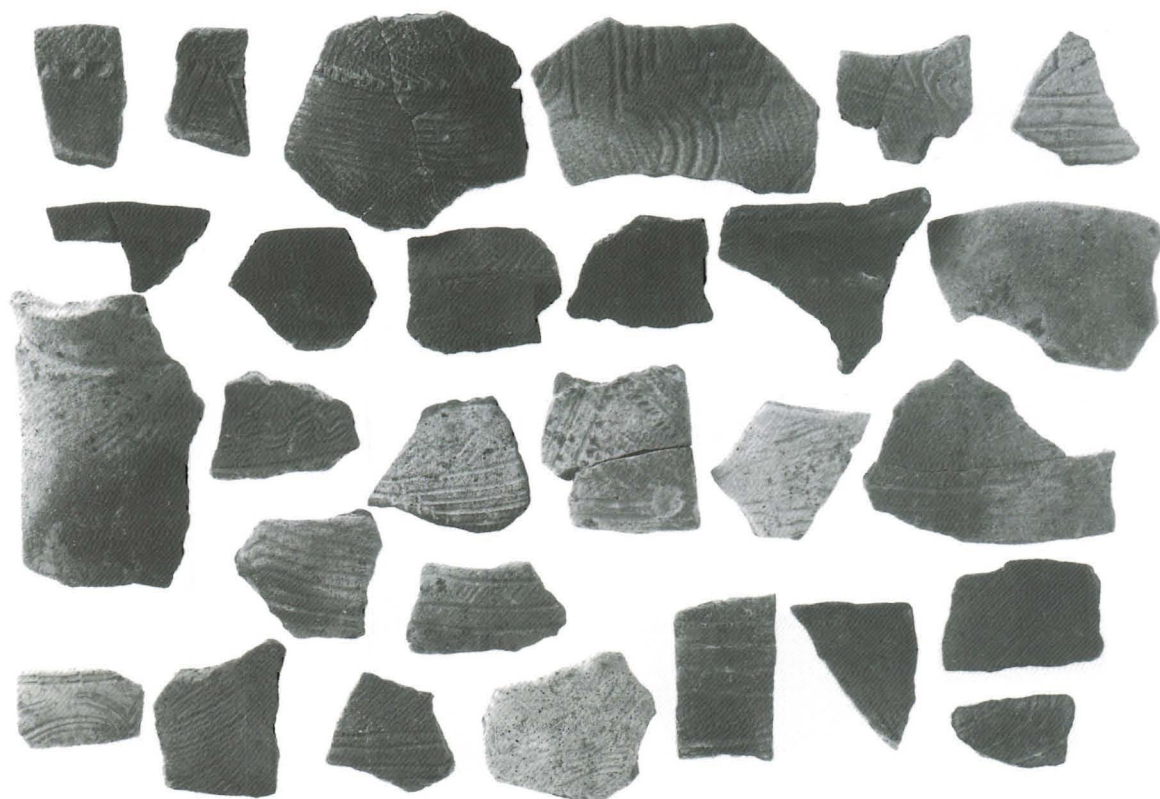
第310・312号住居跡出土遺物



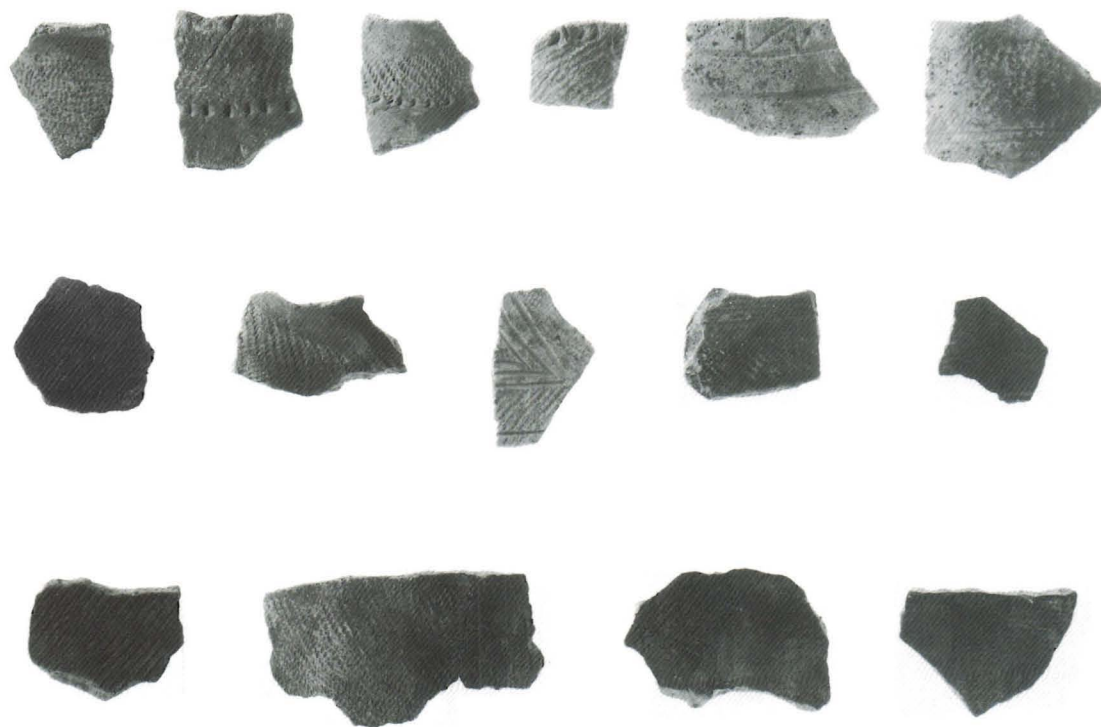
第316・317号住居跡出土遺物



第318号住居跡出土遺物



第320・323号住居跡出土遺物



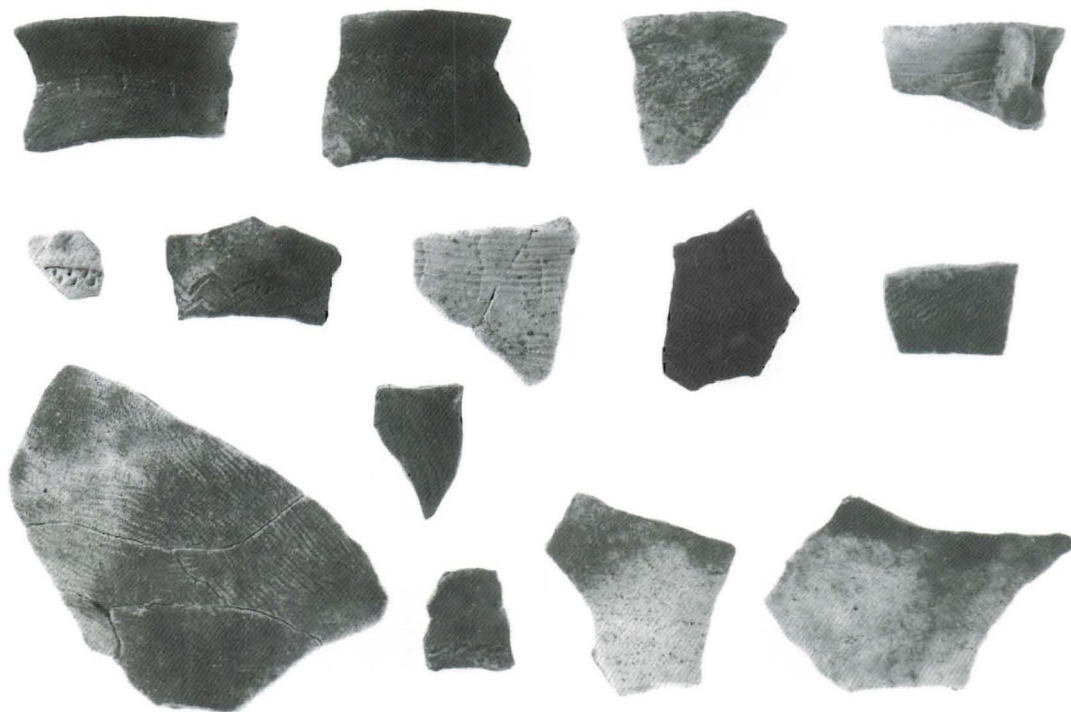
第324号住居跡出土遺物



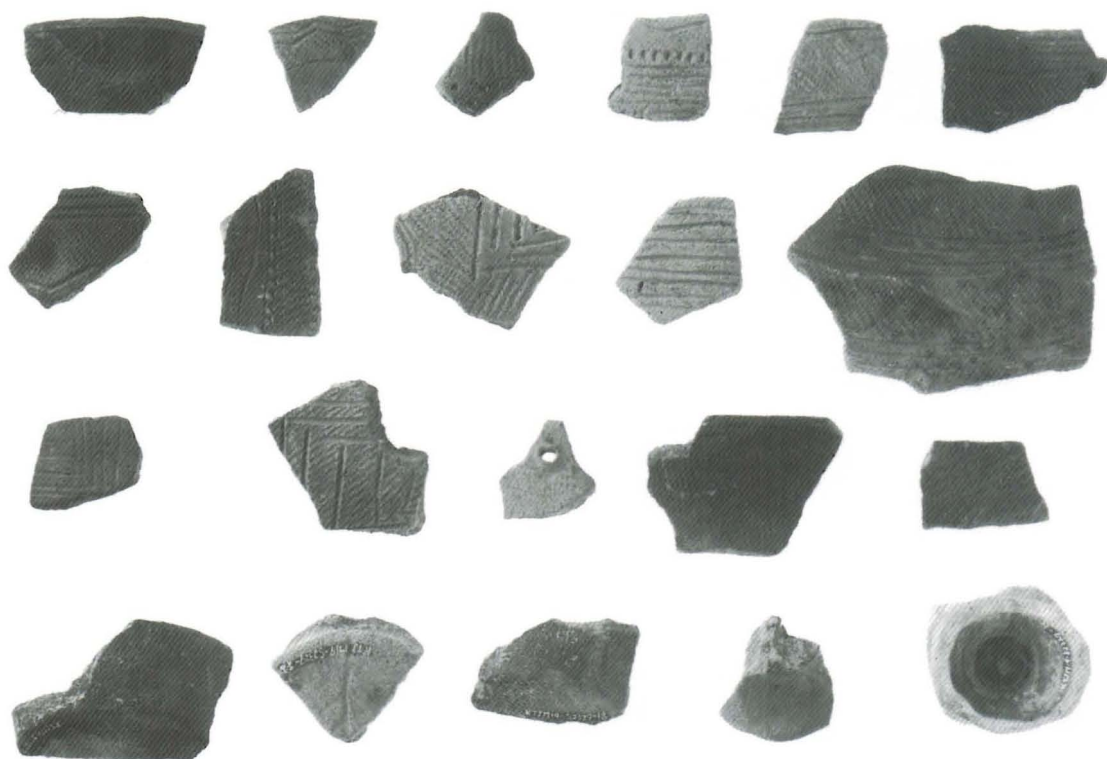
第325号住居跡出土遺物



第326号住居跡出土遺物



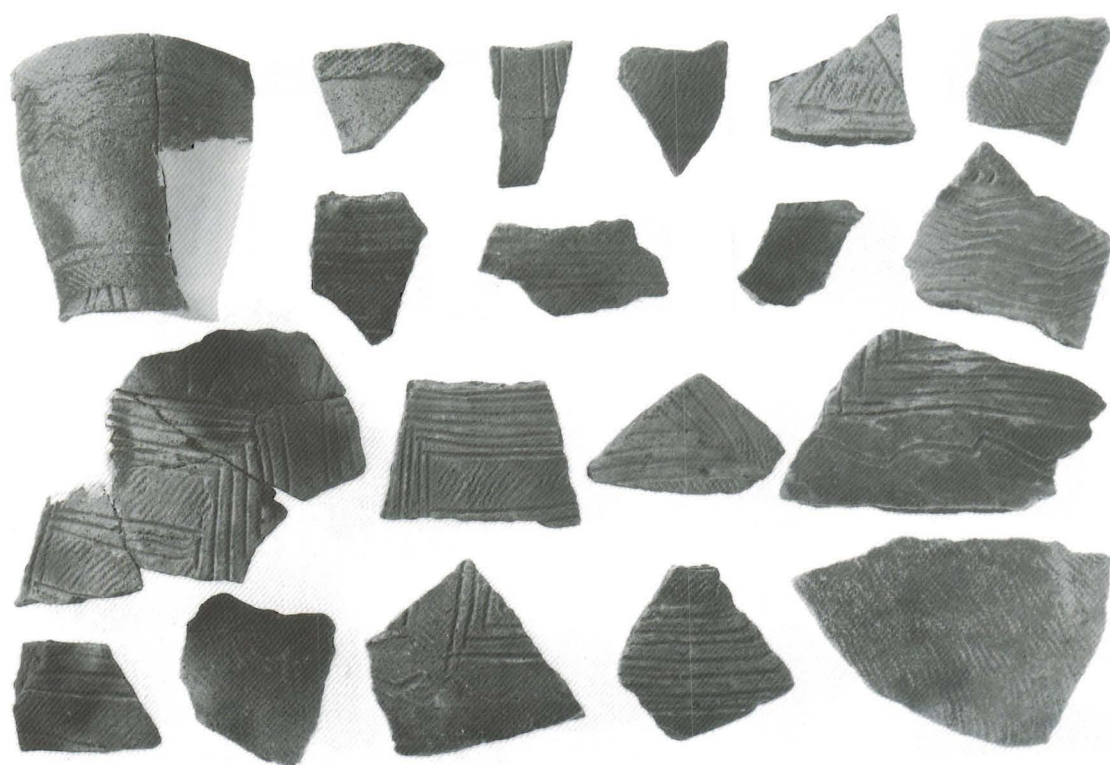
第326号住居跡出土遺物



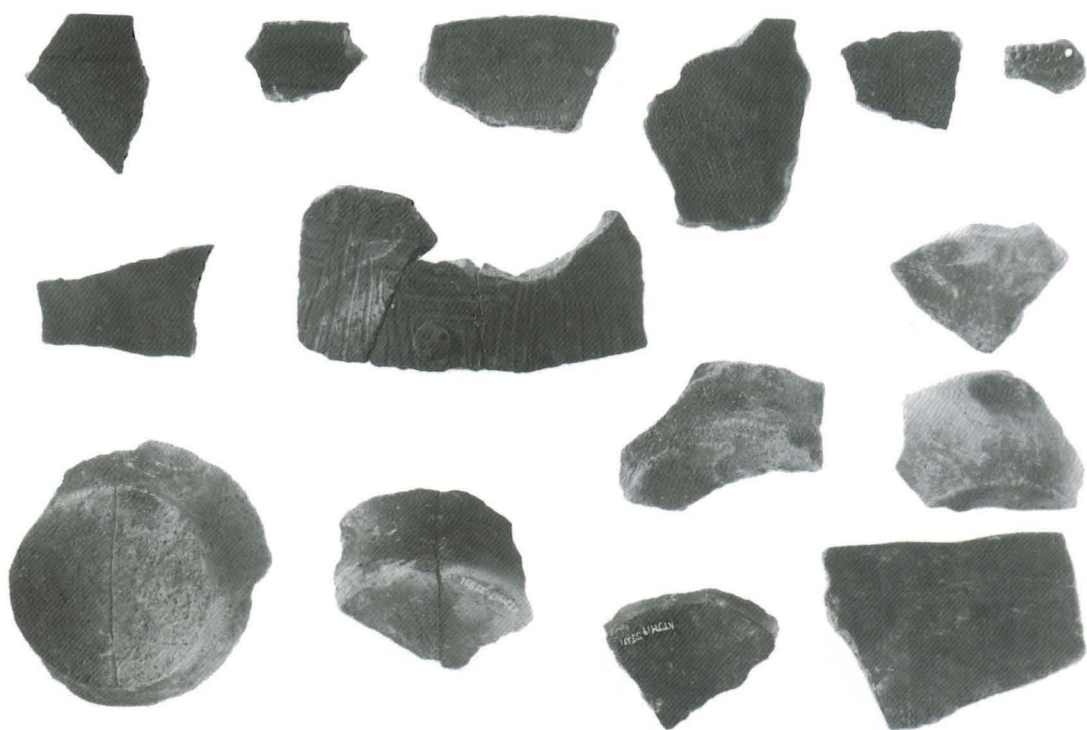
第329号住居跡出土遺物



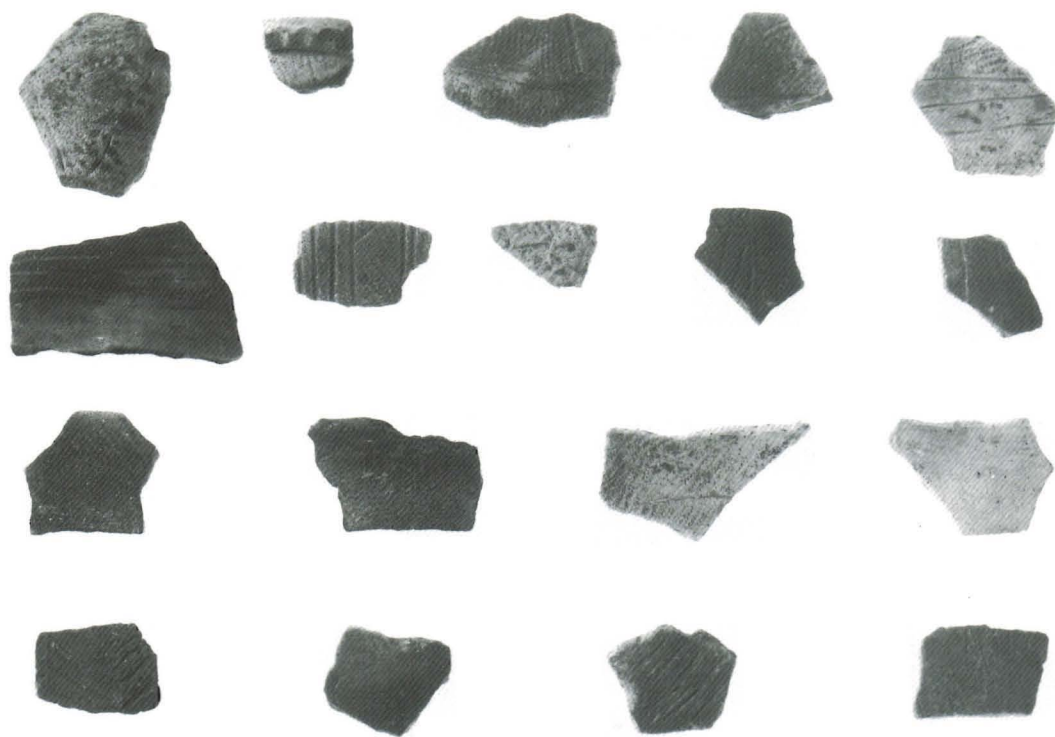
第330号住居跡出土遺物



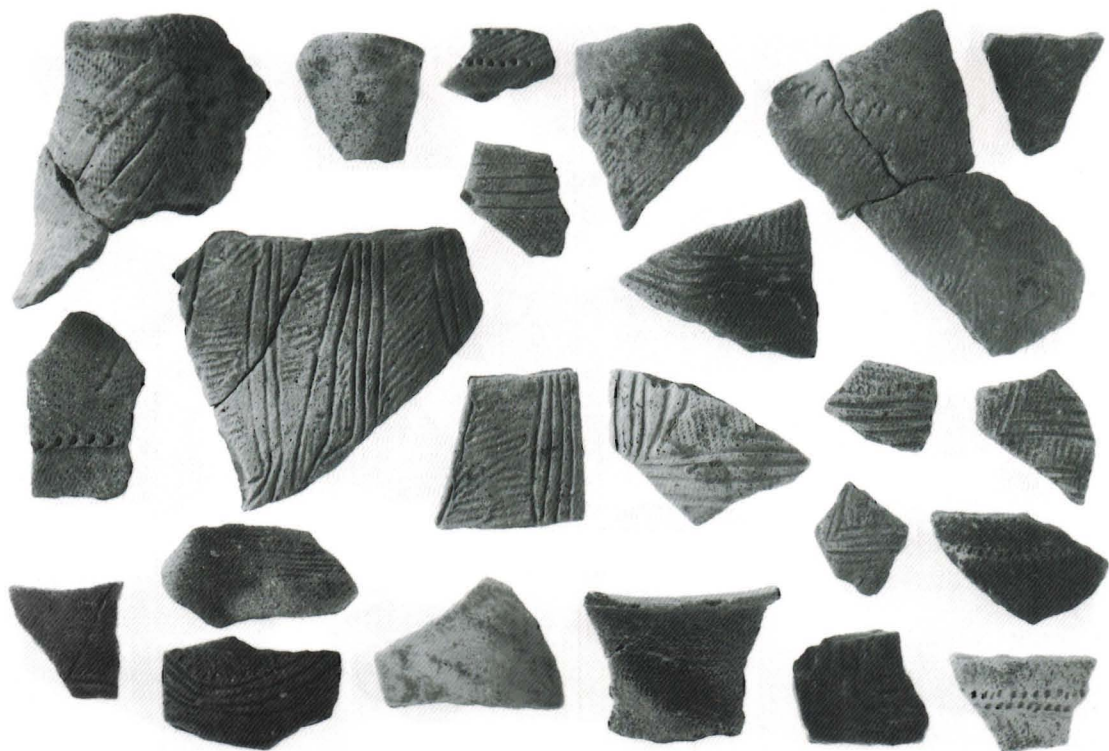
第331号住居跡出土遺物



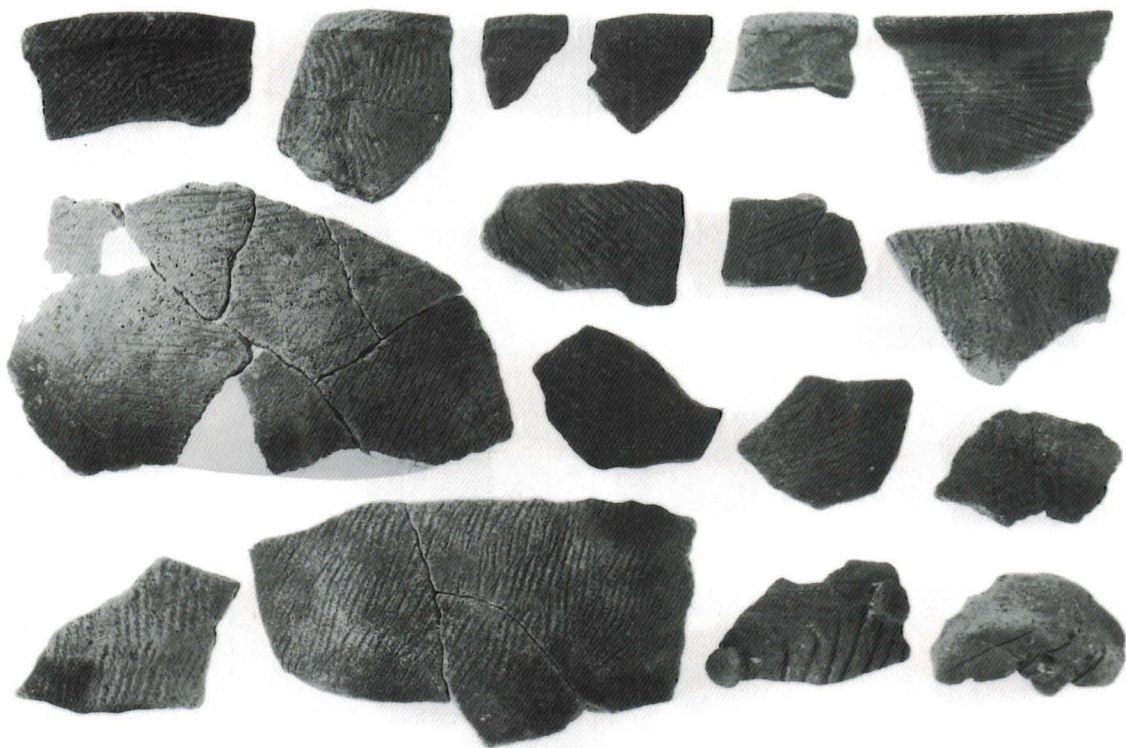
第331・333号住居跡出土遺物



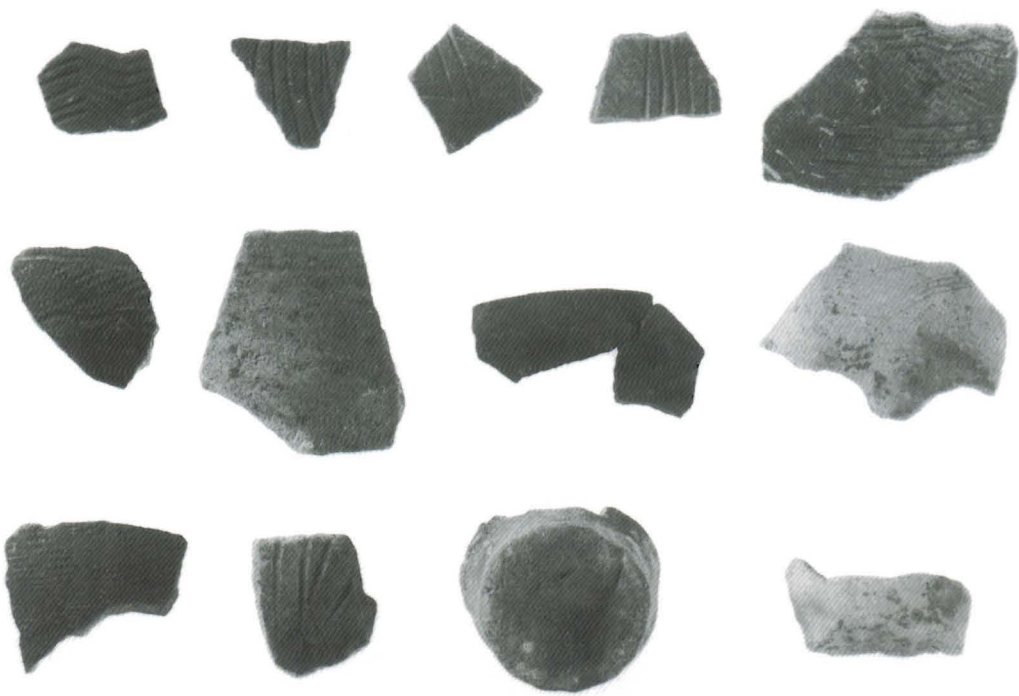
第334号住居跡出土遺物



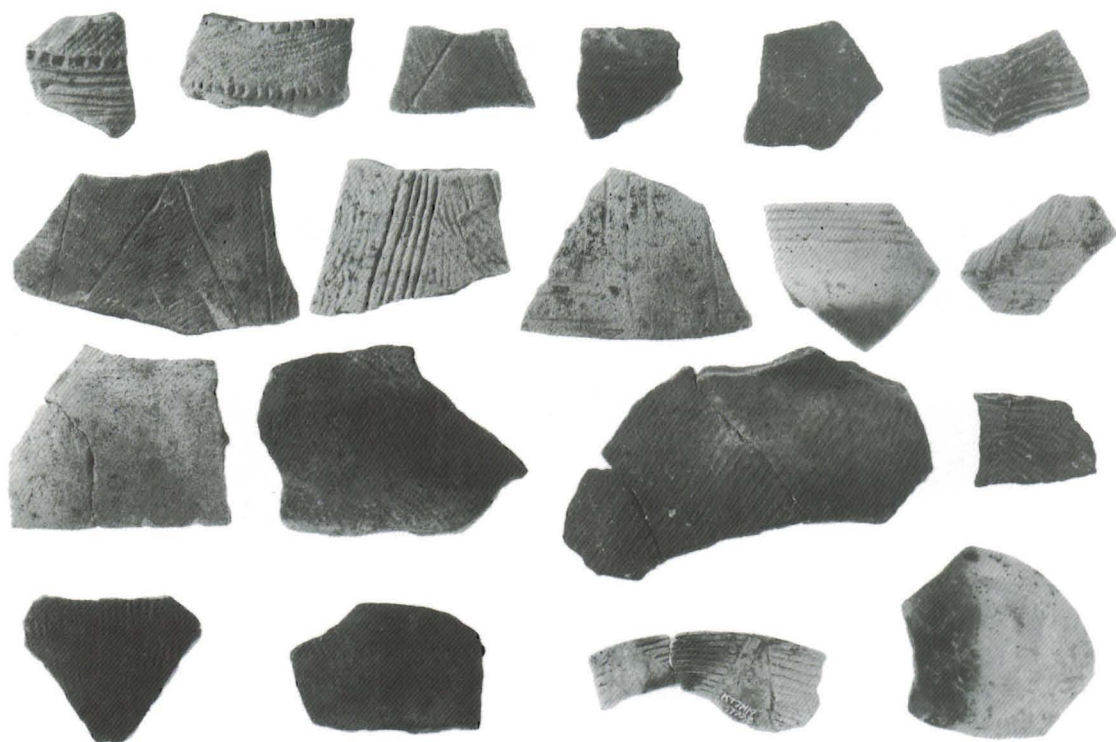
第336号住居跡出土遺物



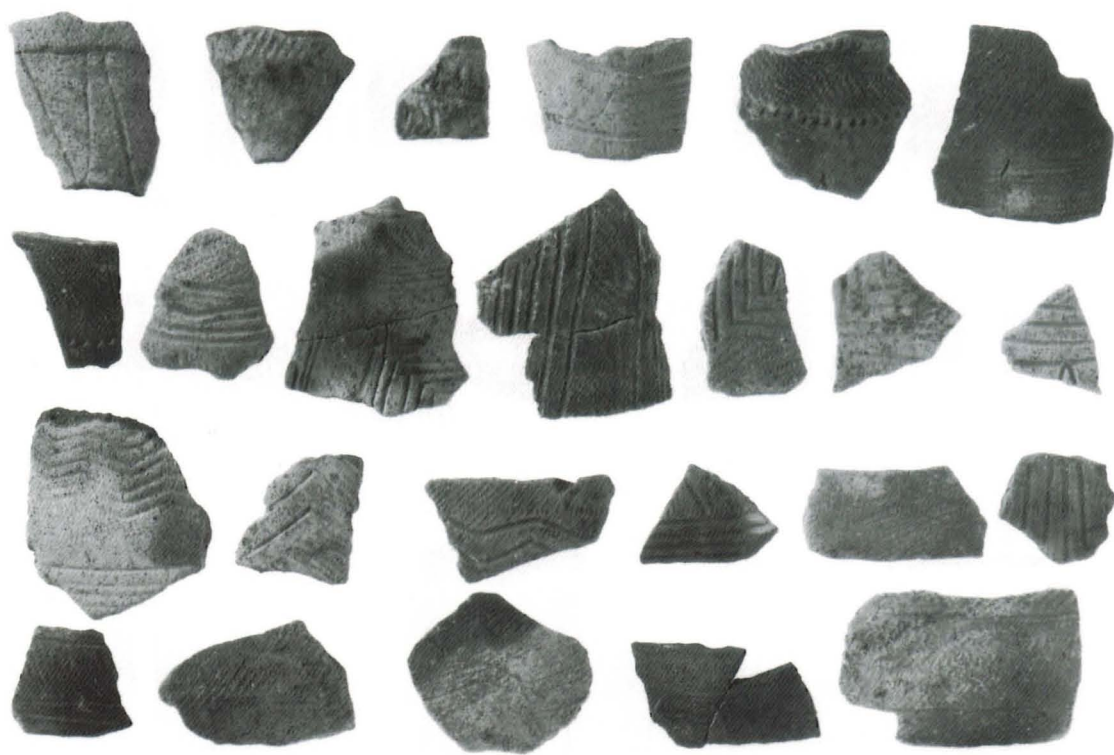
第336号住居跡出土遺物



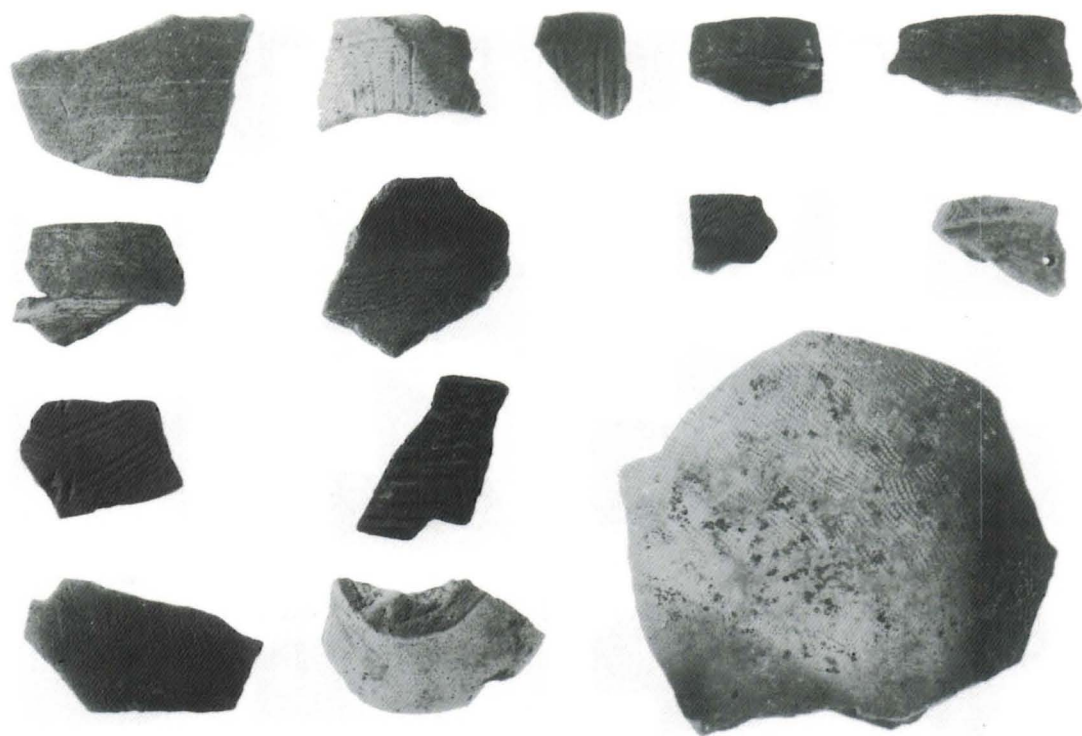
第337号住居跡出土遺物



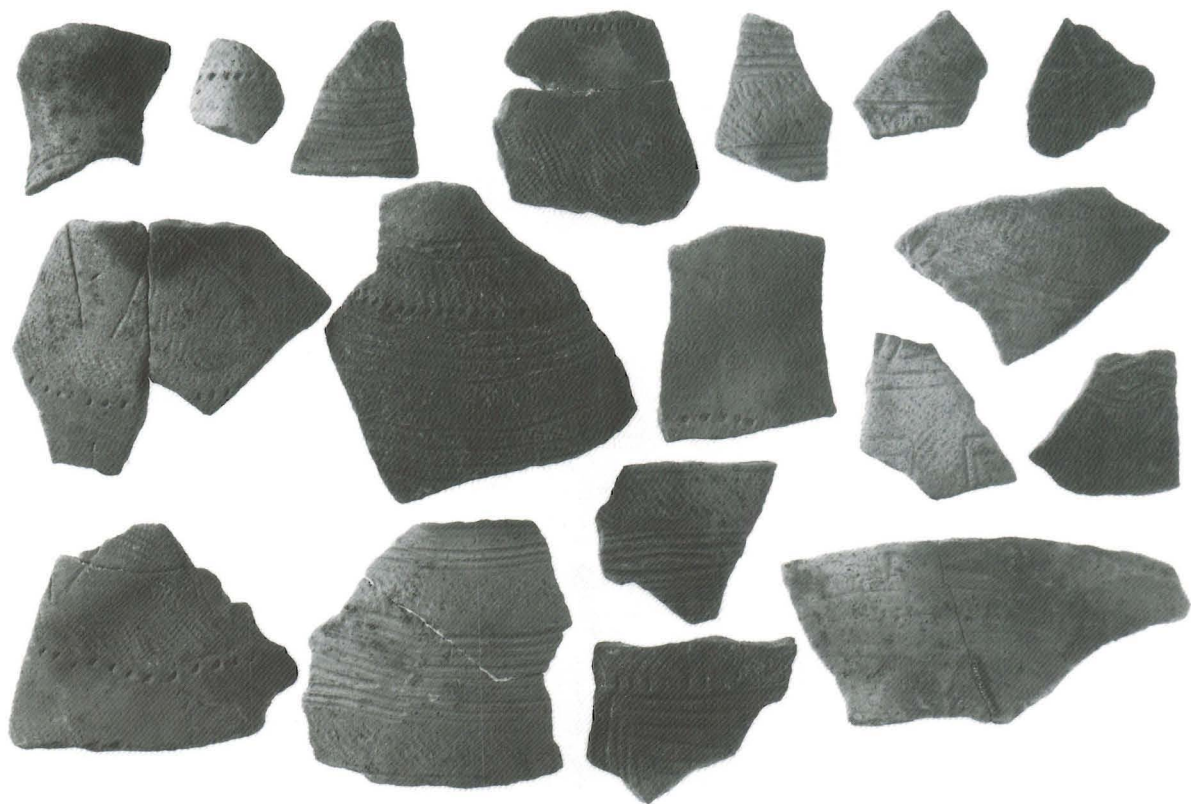
第338号住居跡出土遺物



第339号住居跡出土遺物



第339号住居跡出土遺物



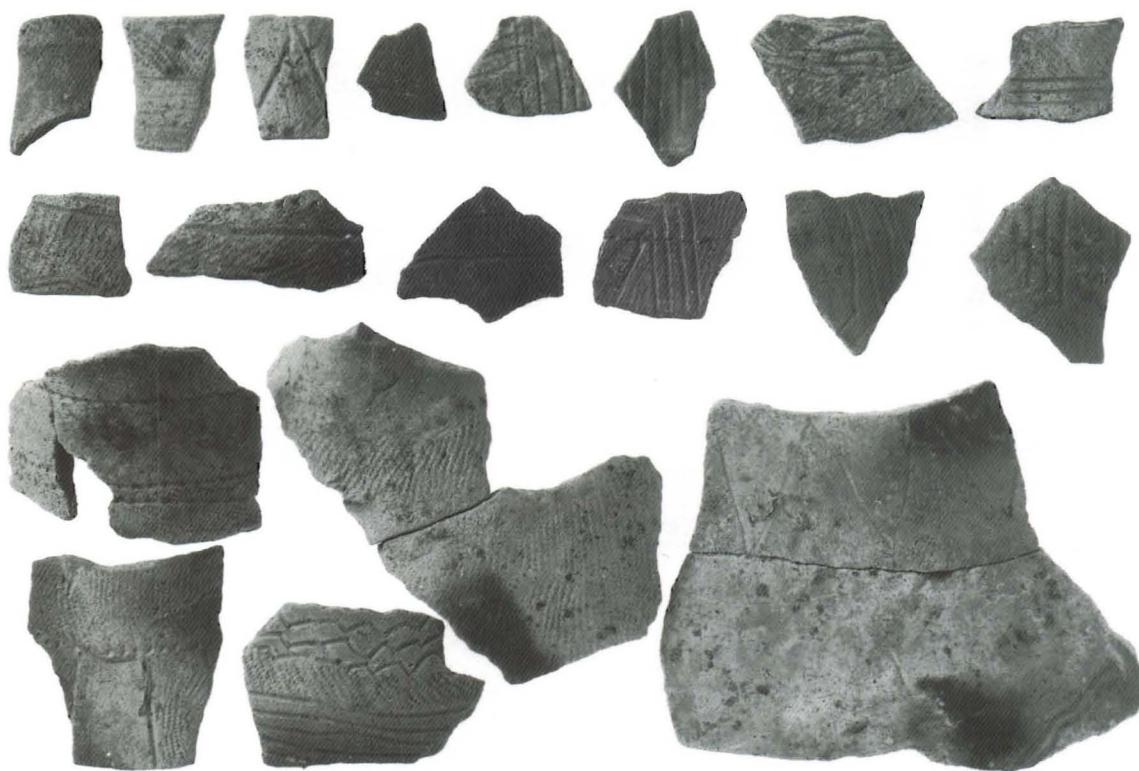
第340号住居跡出土遺物



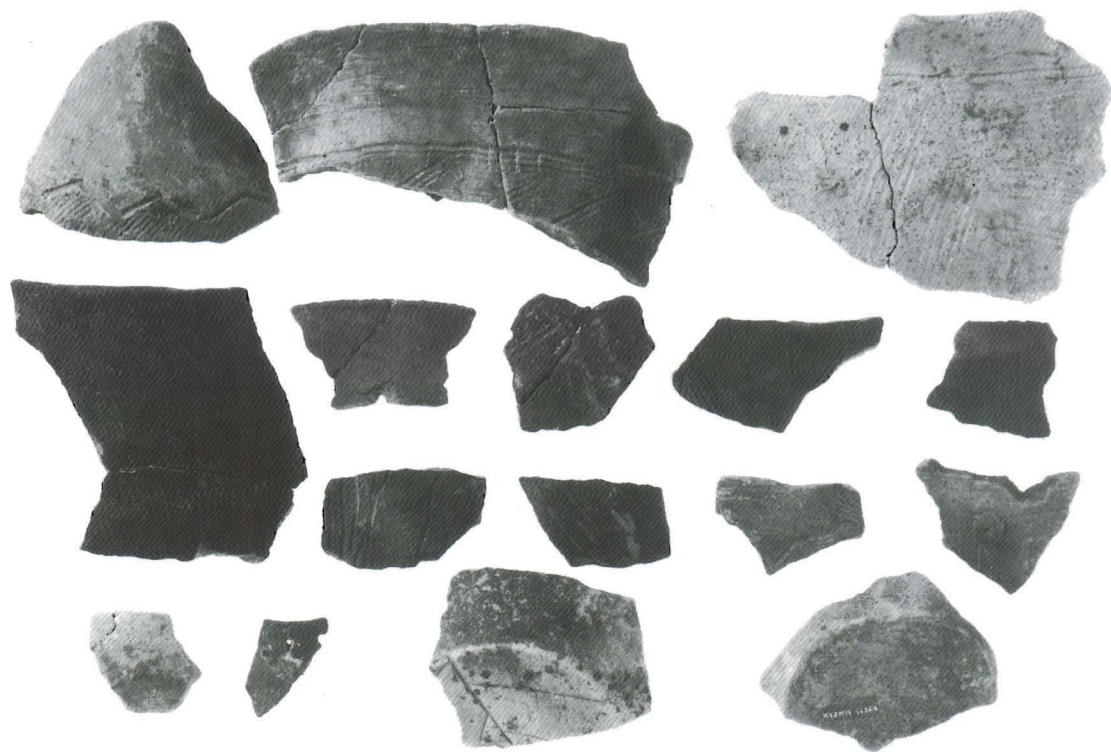
第340号住居跡出土遺物



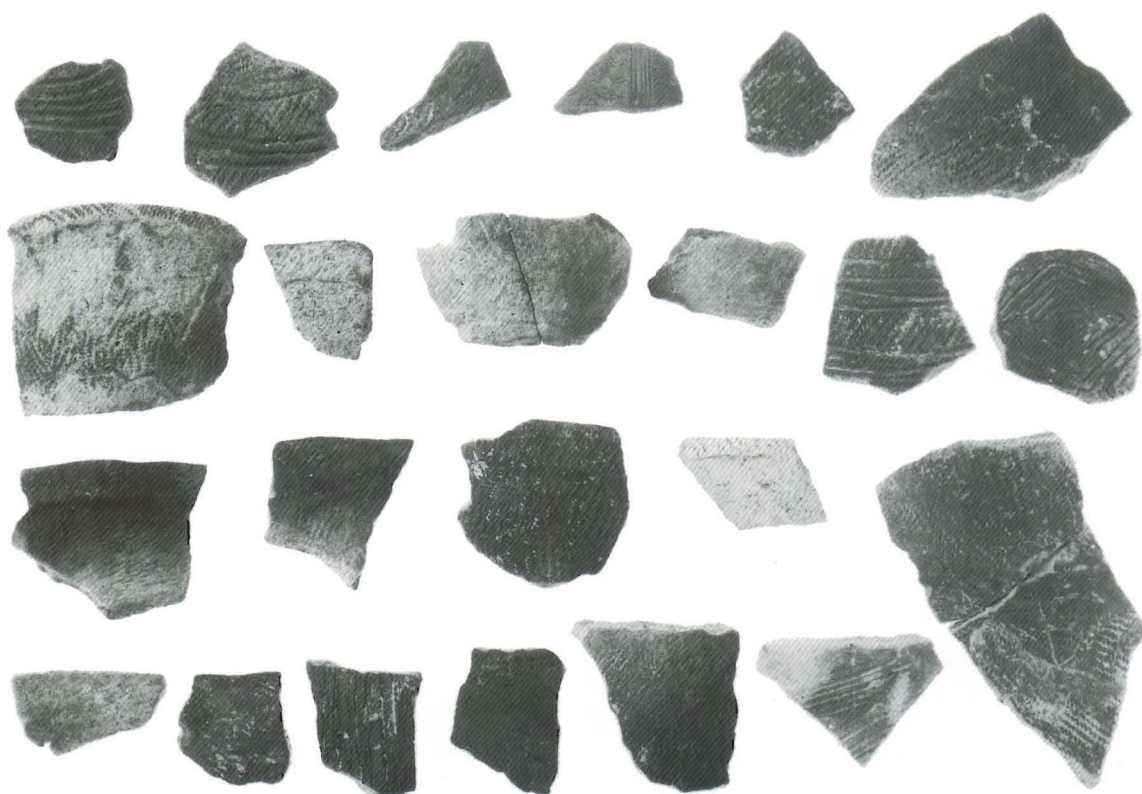
第341号住居跡出土遺物



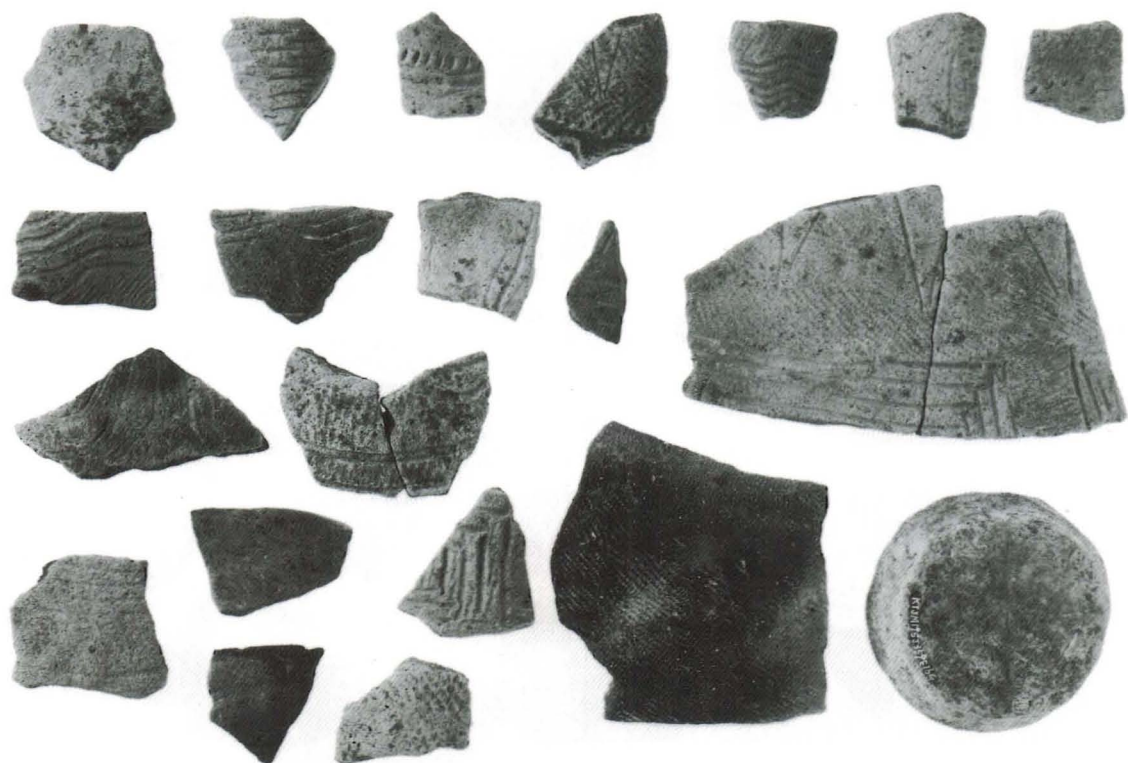
第342号住居跡出土遺物



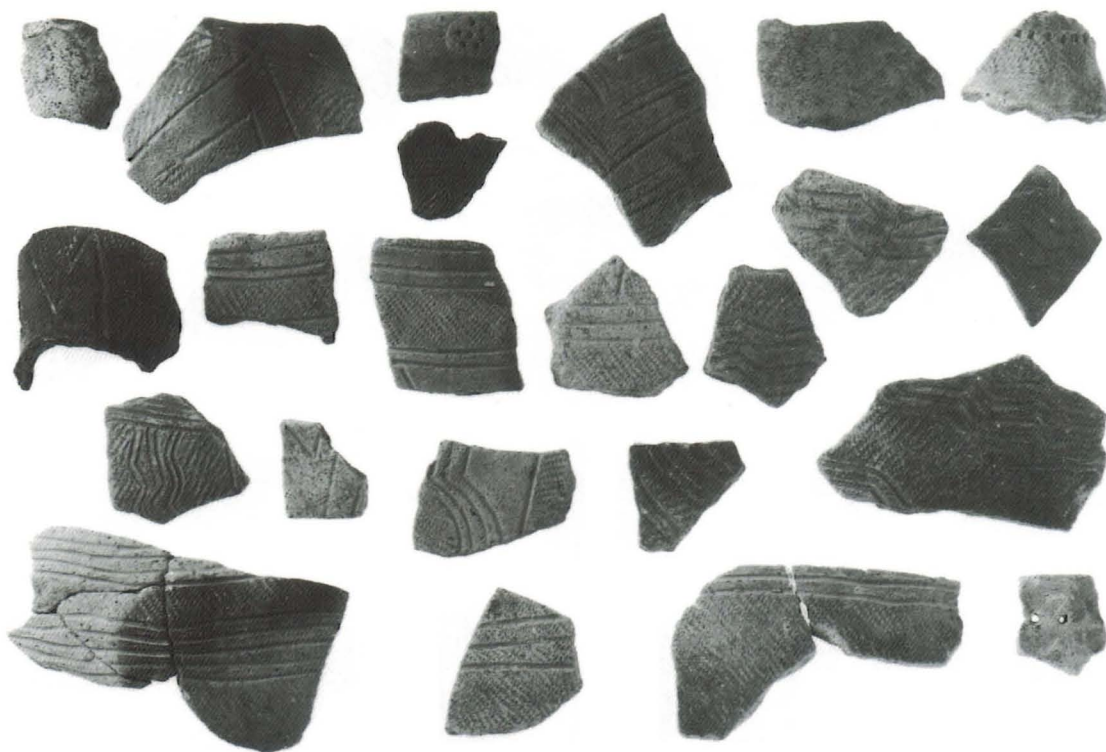
第342号住居跡出土遺物



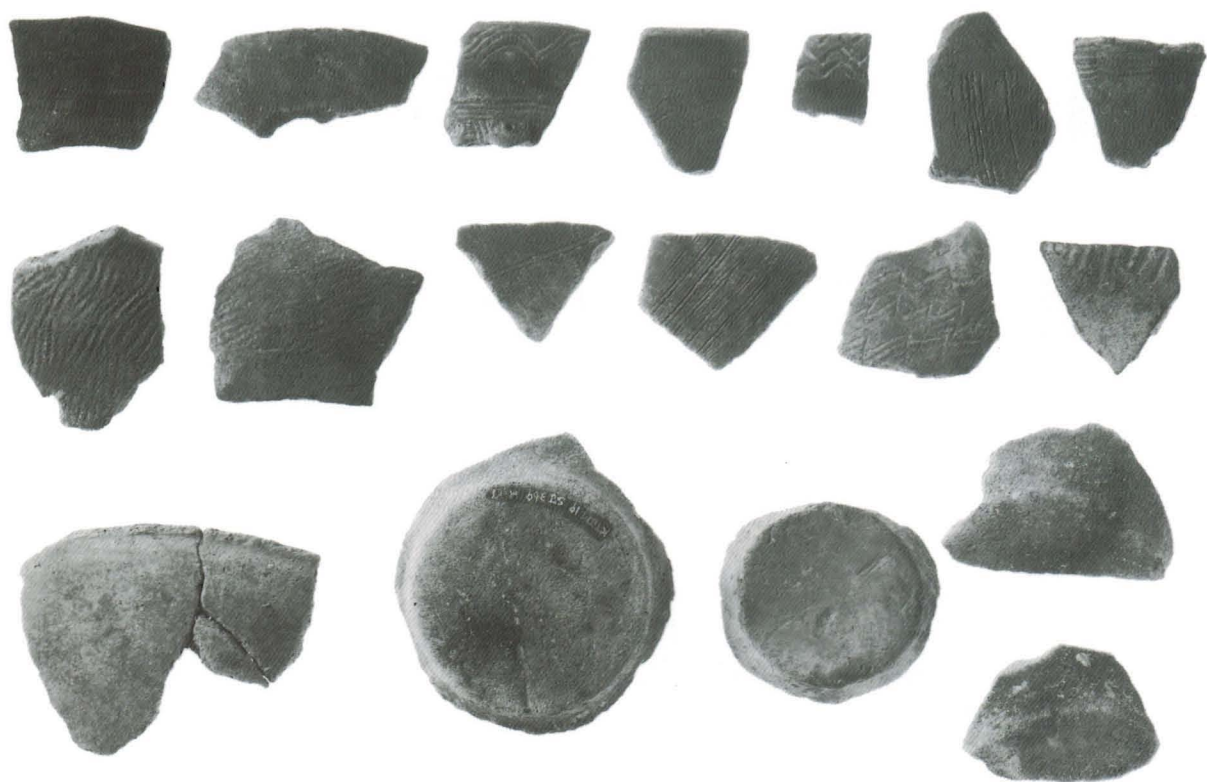
第344・348号住居跡出土遺物



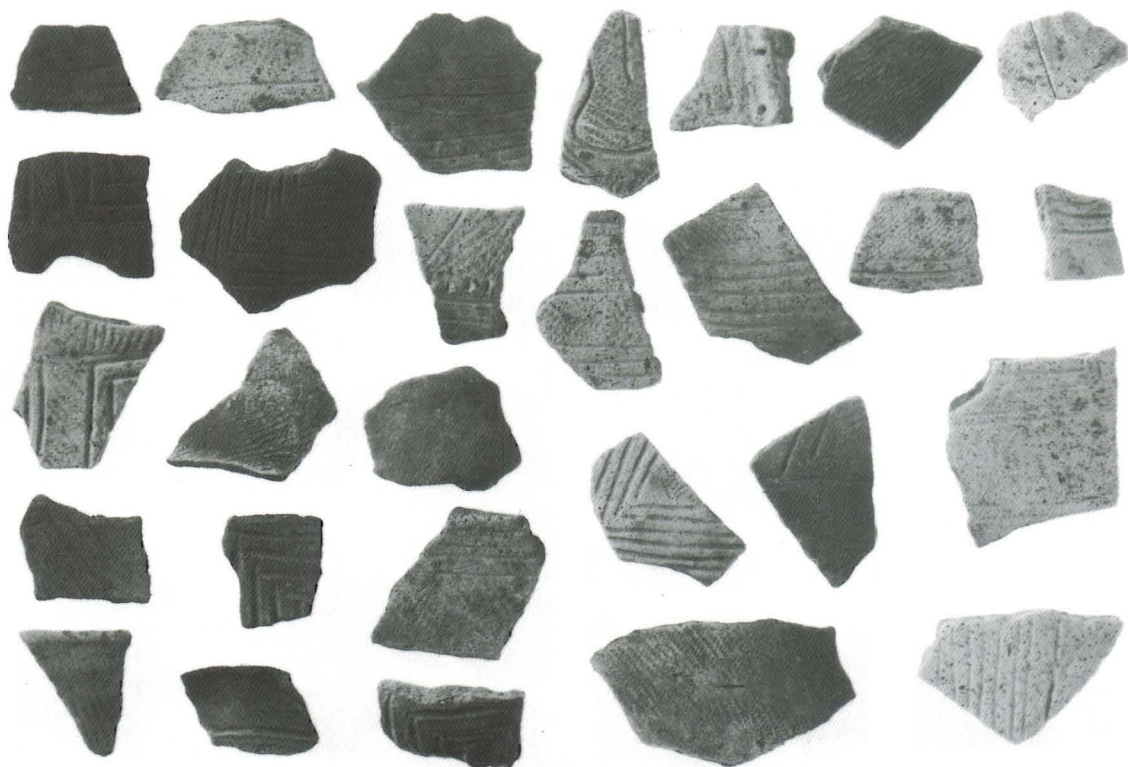
第359号住居跡出土遺物



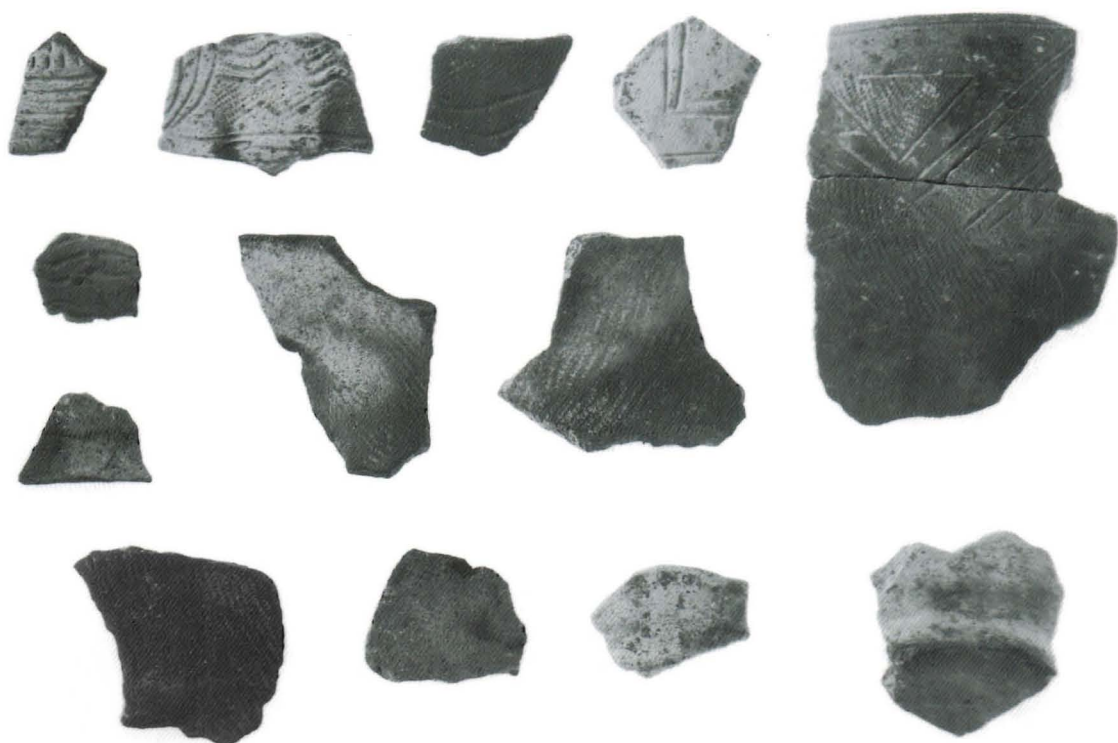
第361・369号住居跡出土遺物



第369号住居跡出土遺物



第408号住居跡出土遺物



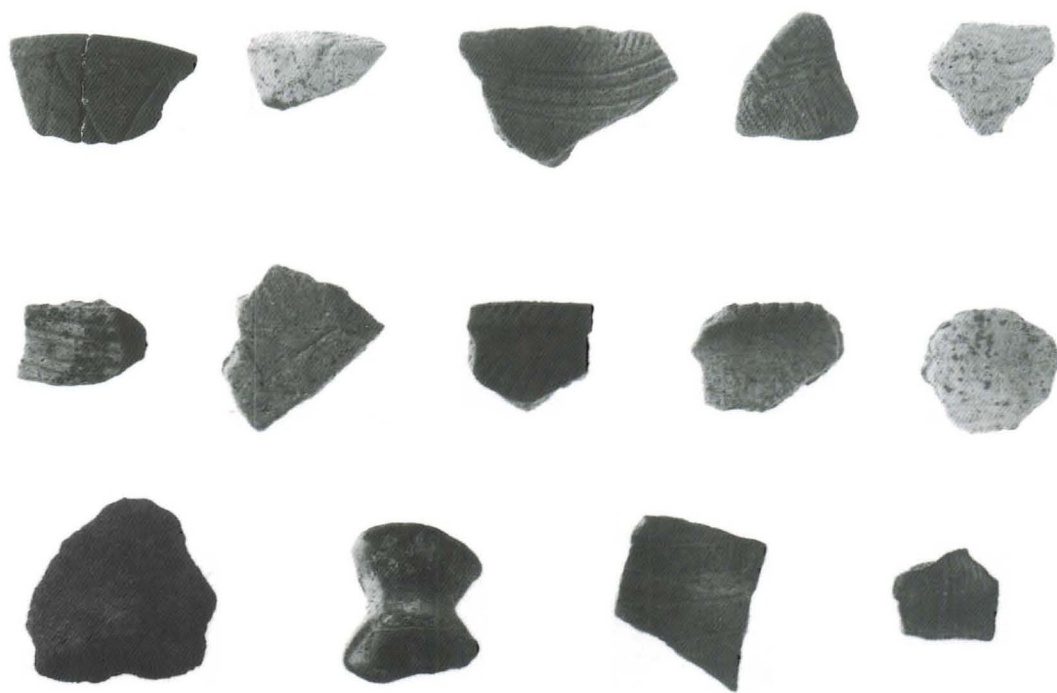
第411号住居跡出土遺物



第412号住居跡出土遺物



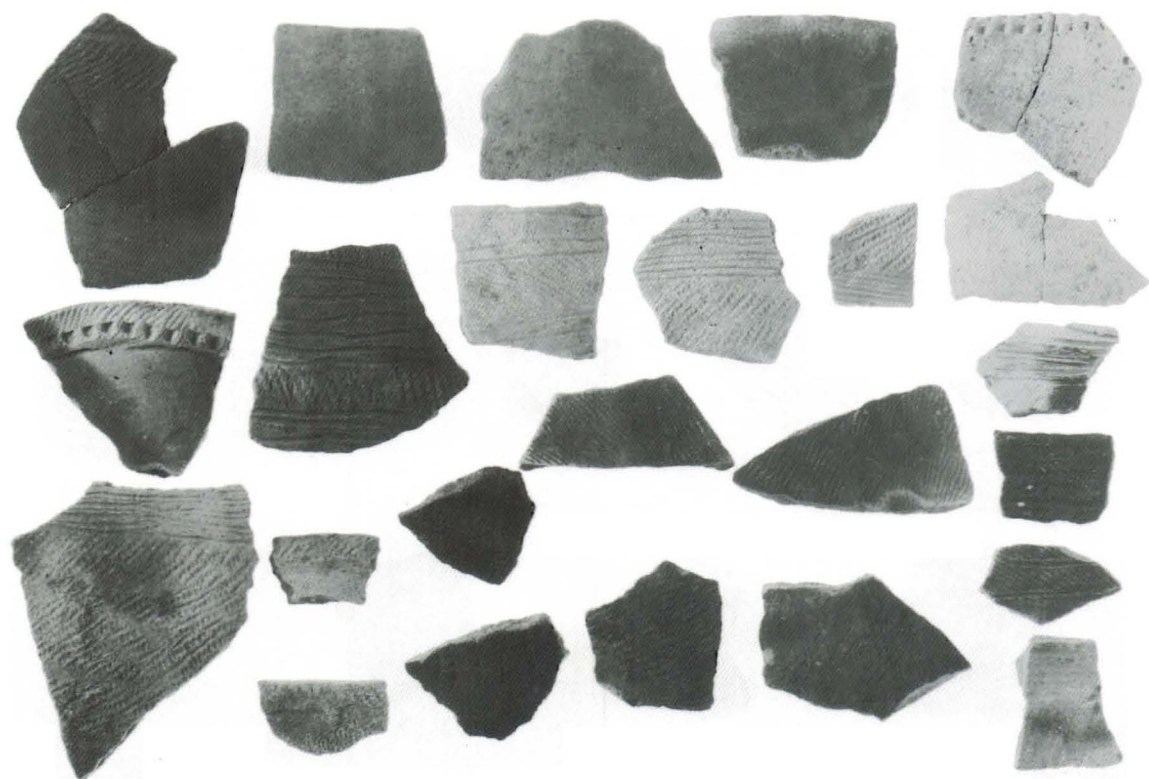
第413号住居跡出土遺物



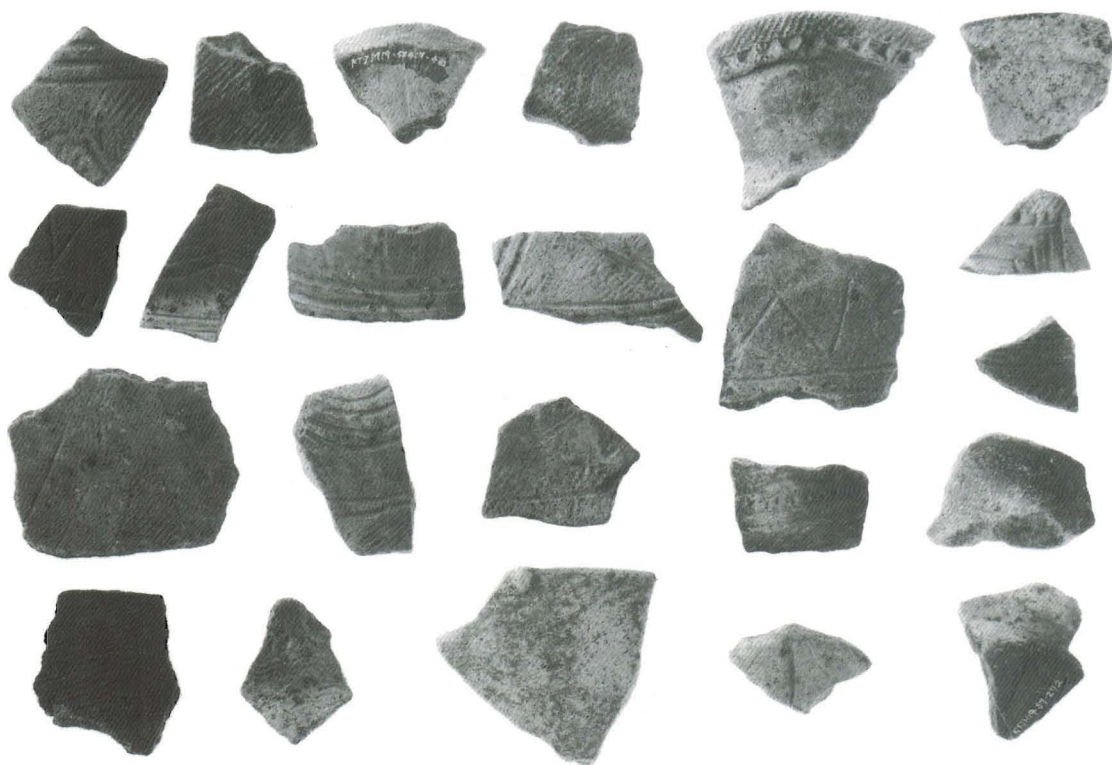
第414・416号住居跡出土遺物



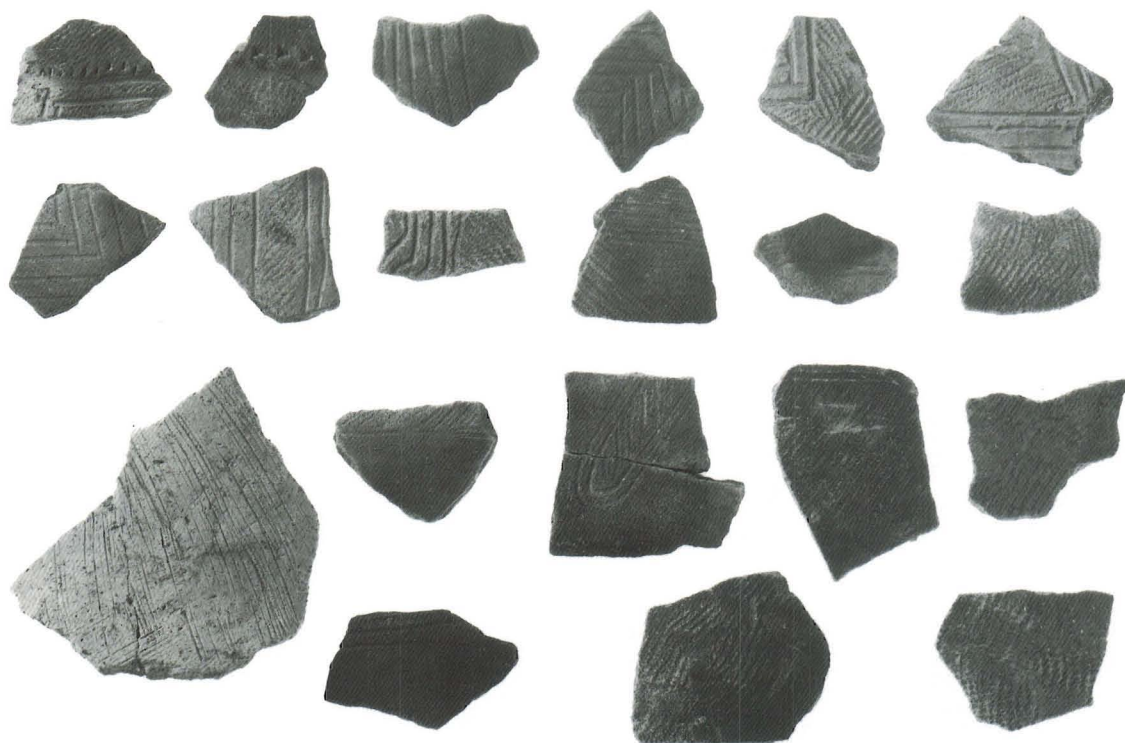
第417号住居跡出土遺物



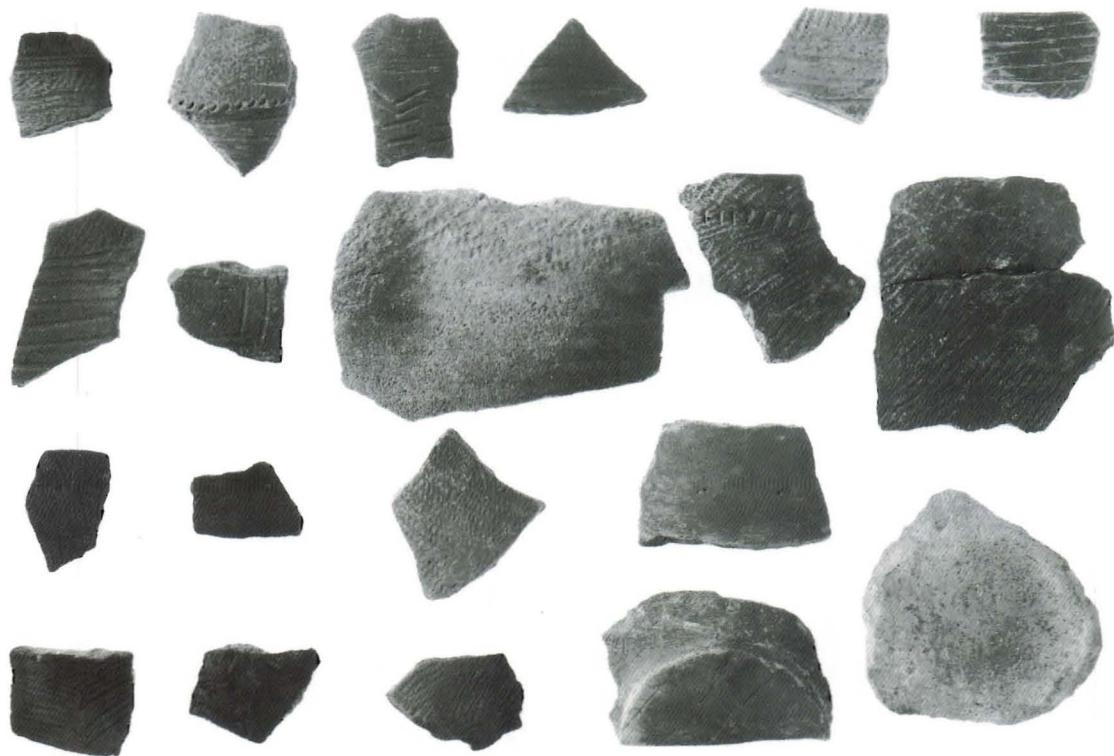
第421・426号住居跡出土遺物



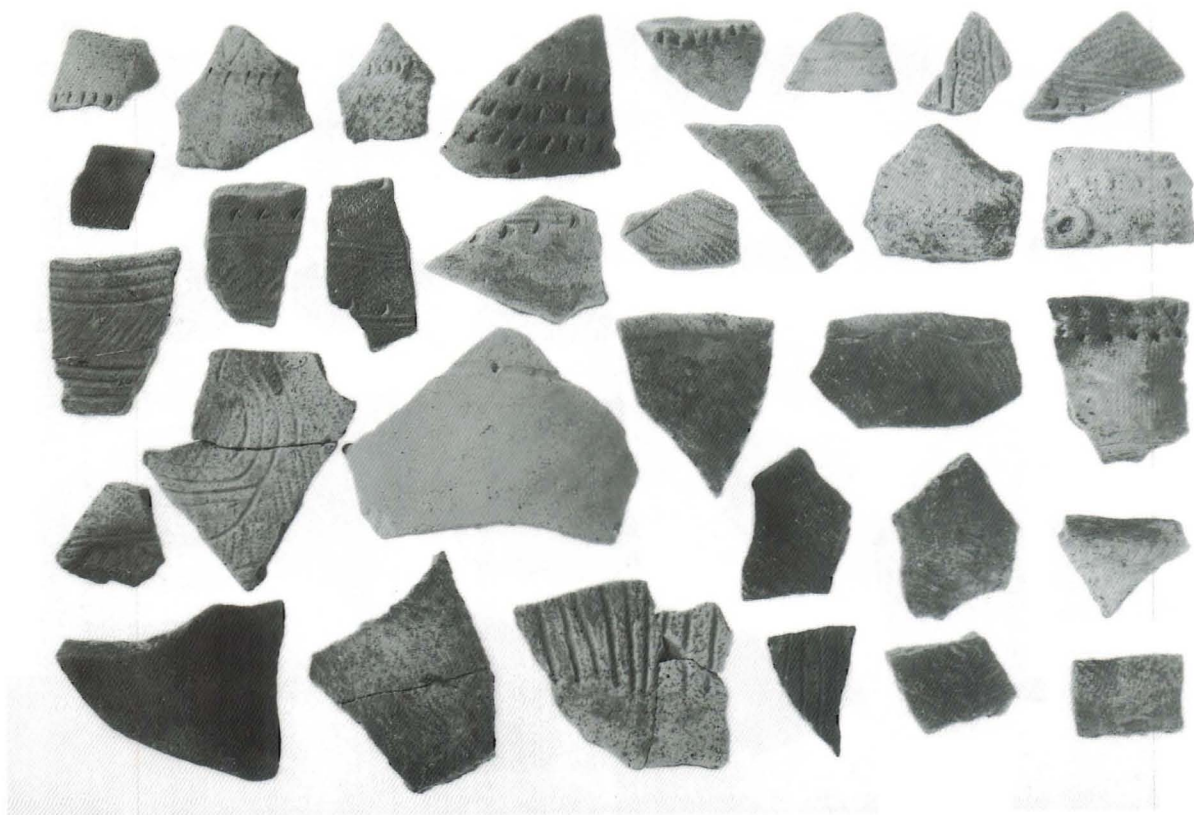
第427·428·430号住居跡出土遺物



第431号住居跡出土遺物



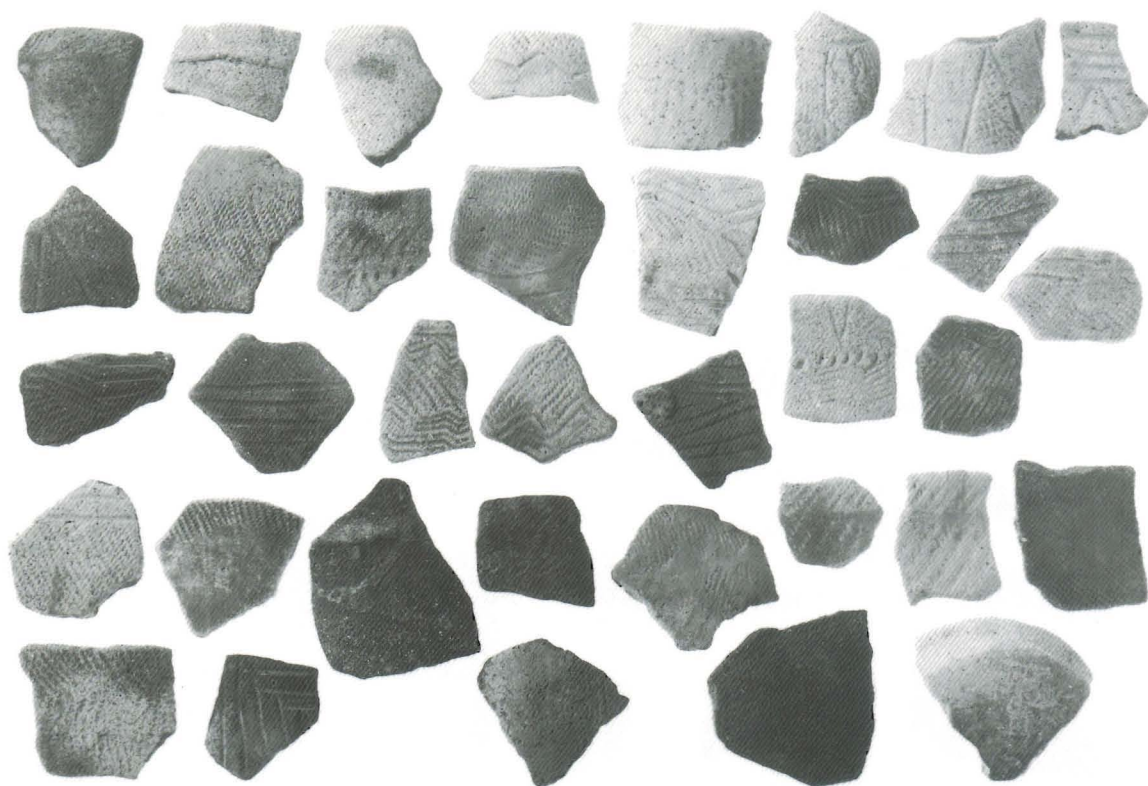
第432号住居跡出土遺物



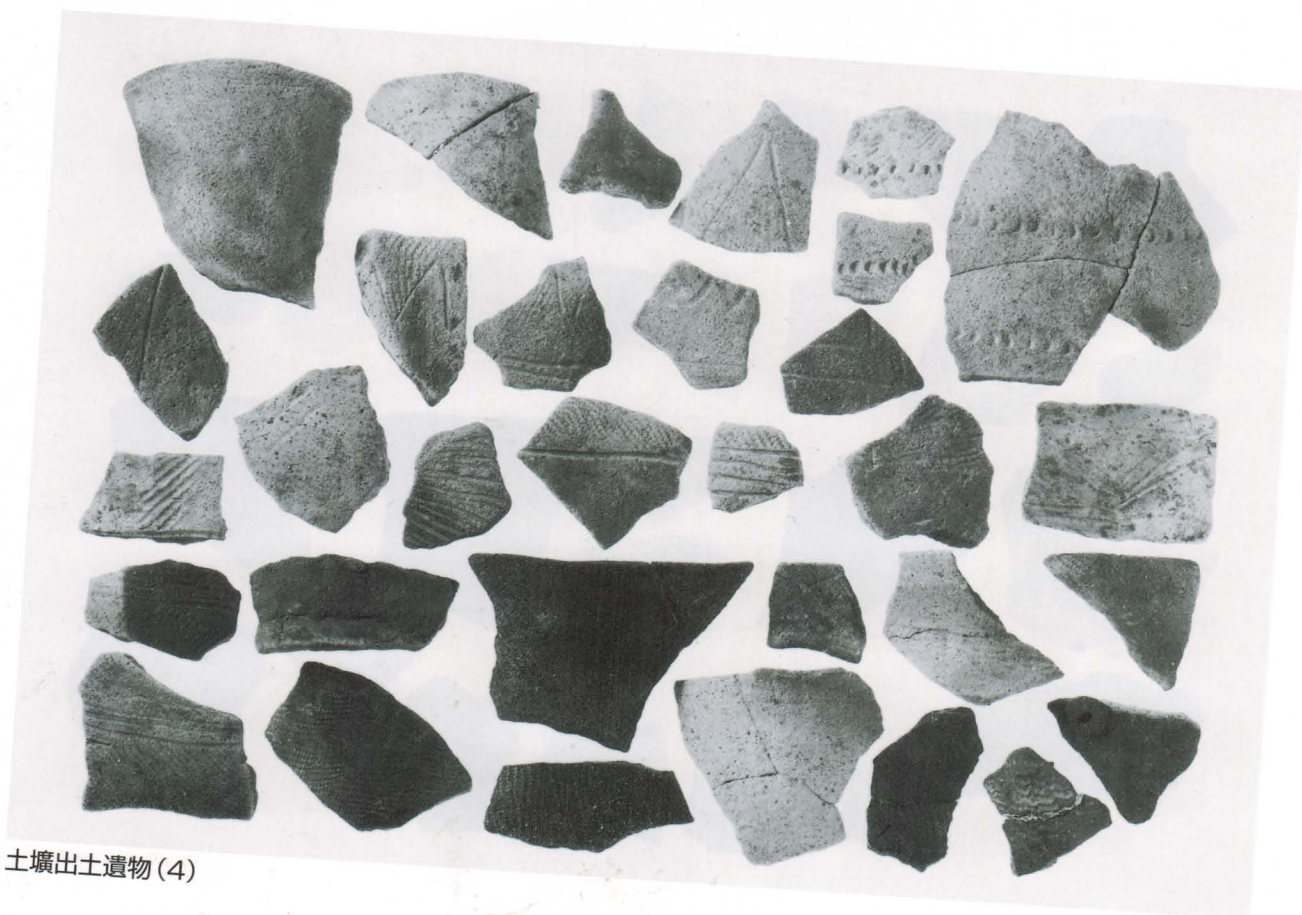
土壙出土遺物(1)



土壤出土遺物(2)



土壤出土遺物(3)



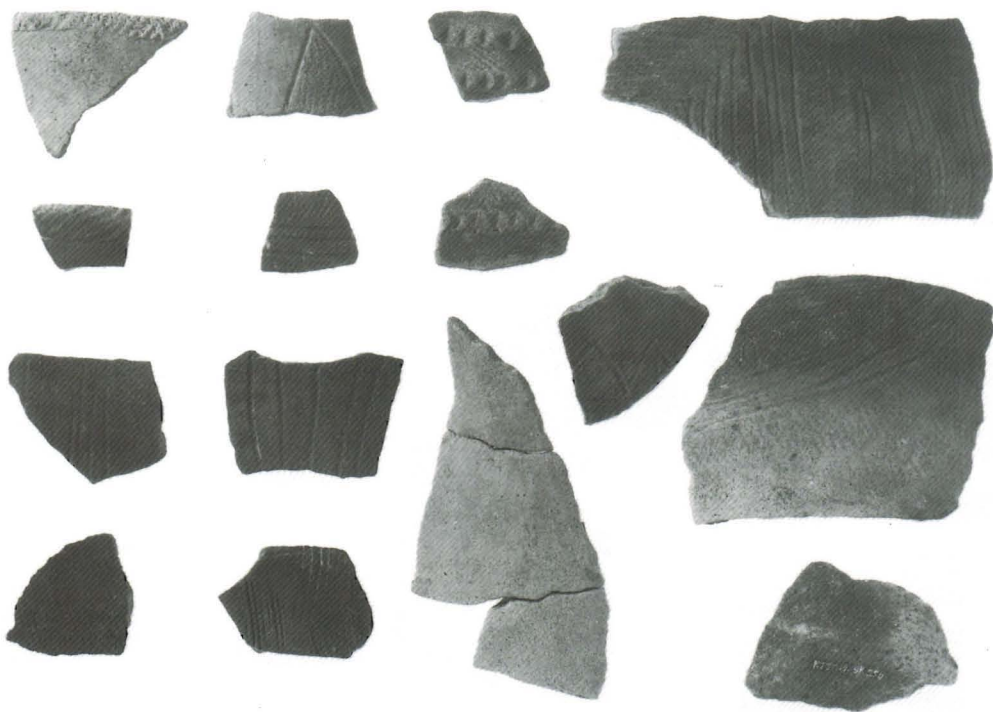
土壤出土遺物(4)



土壤出土遺物(5)



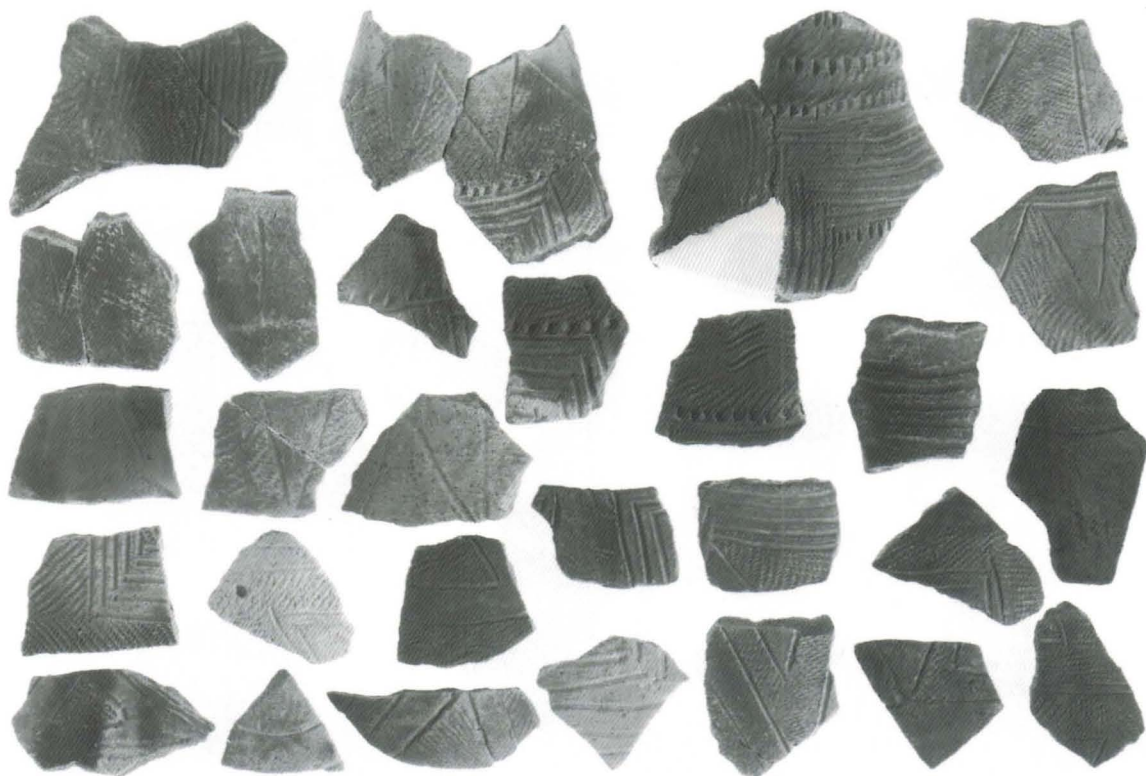
土壤出土遺物(6)



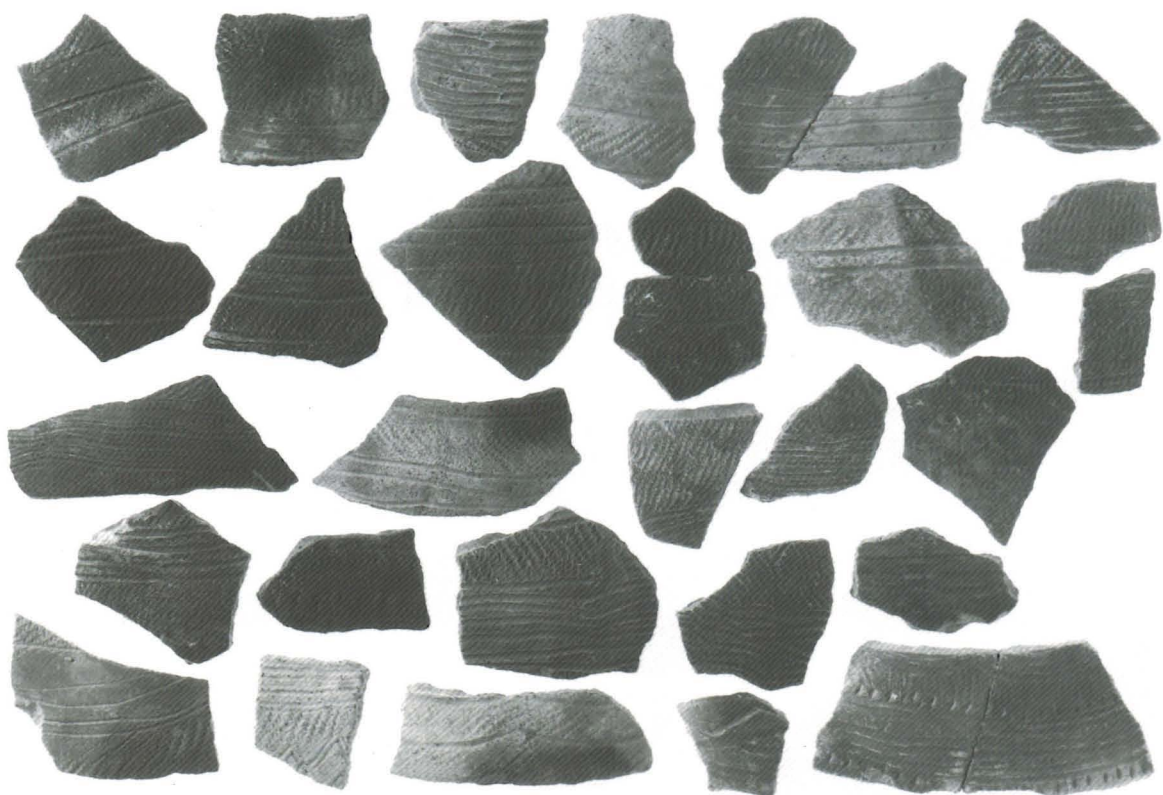
土壤出土遺物(7)



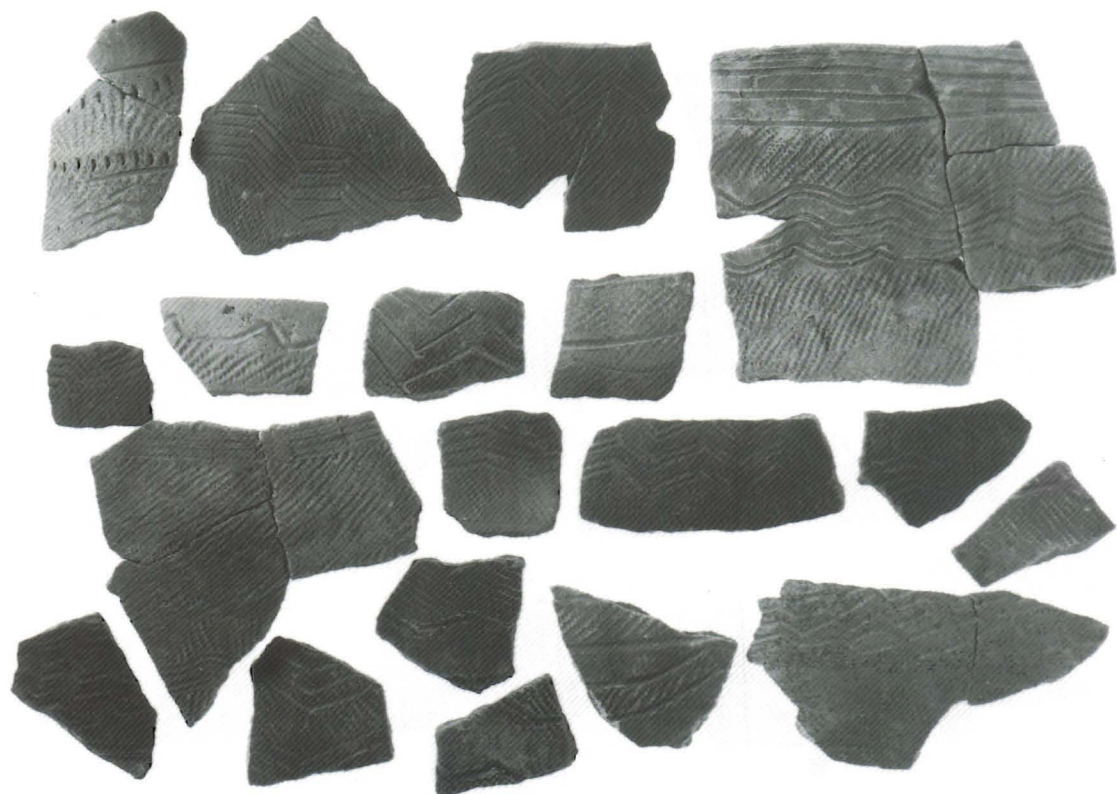
下段・上段堰出土遺物(1)



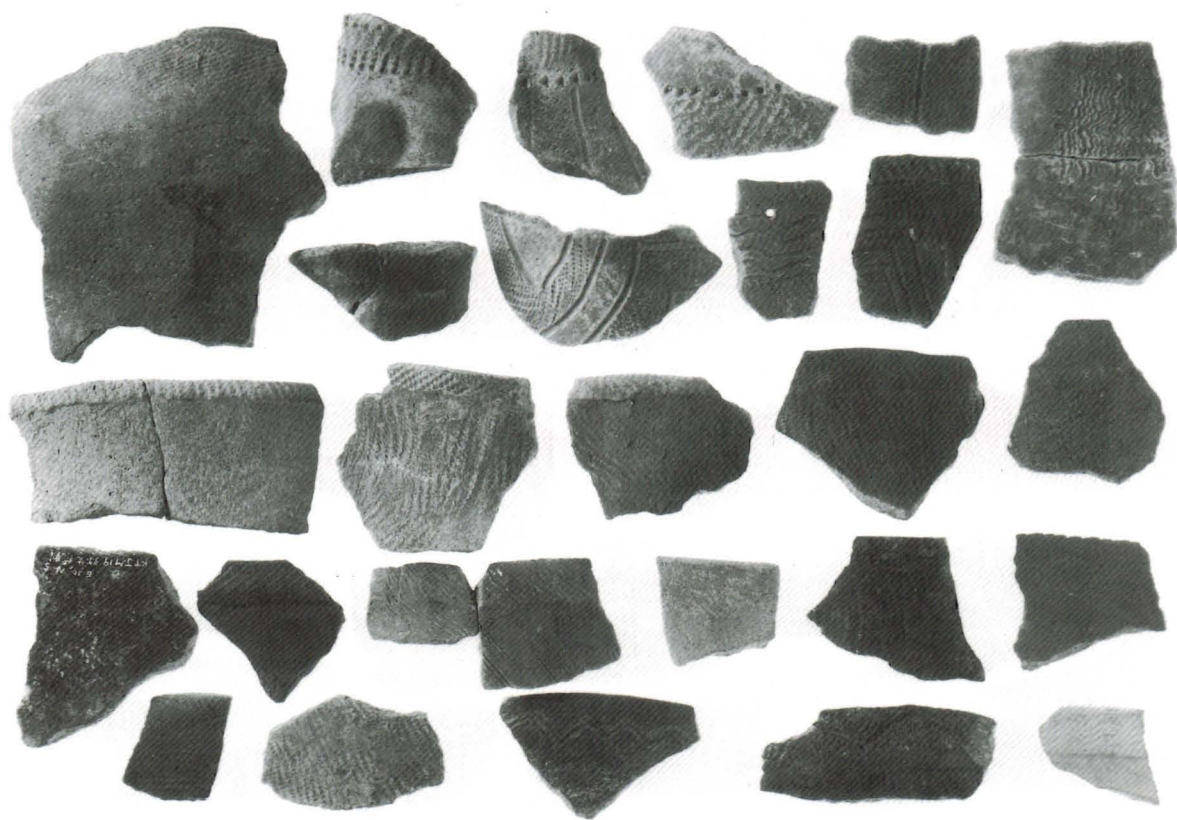
上段堰出土遺物(2)



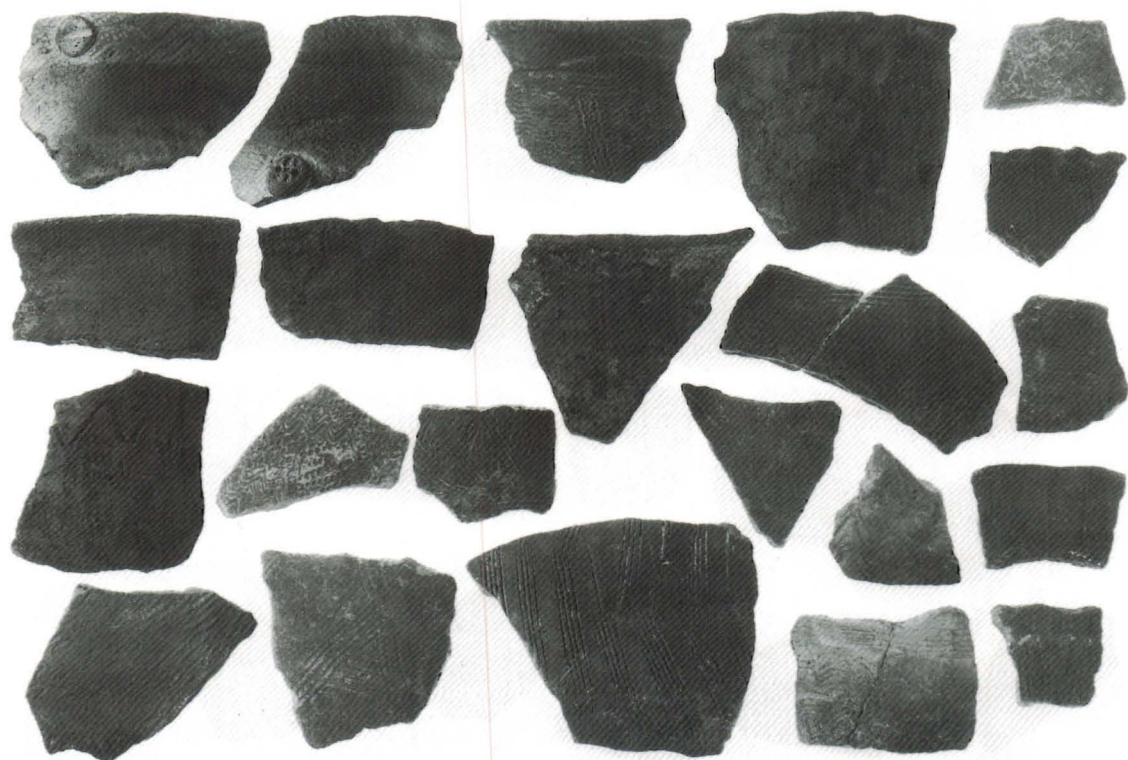
上段堰出土遺物(3)



上段堰出土遺物(4)



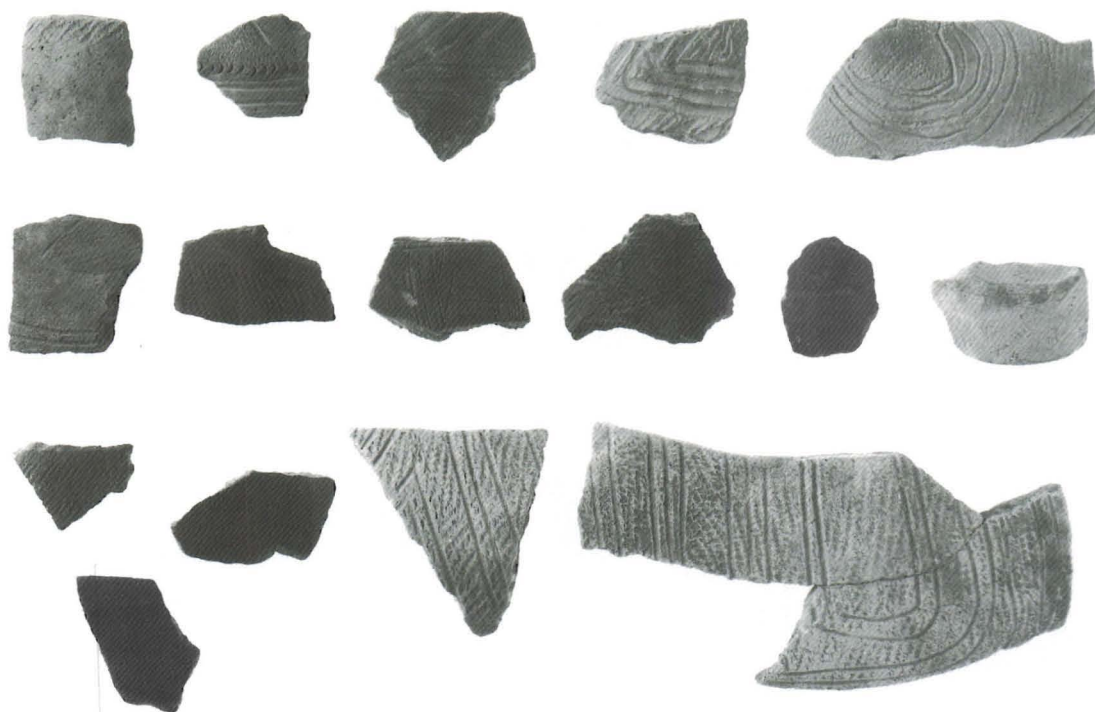
上段堰出土遺物(5)



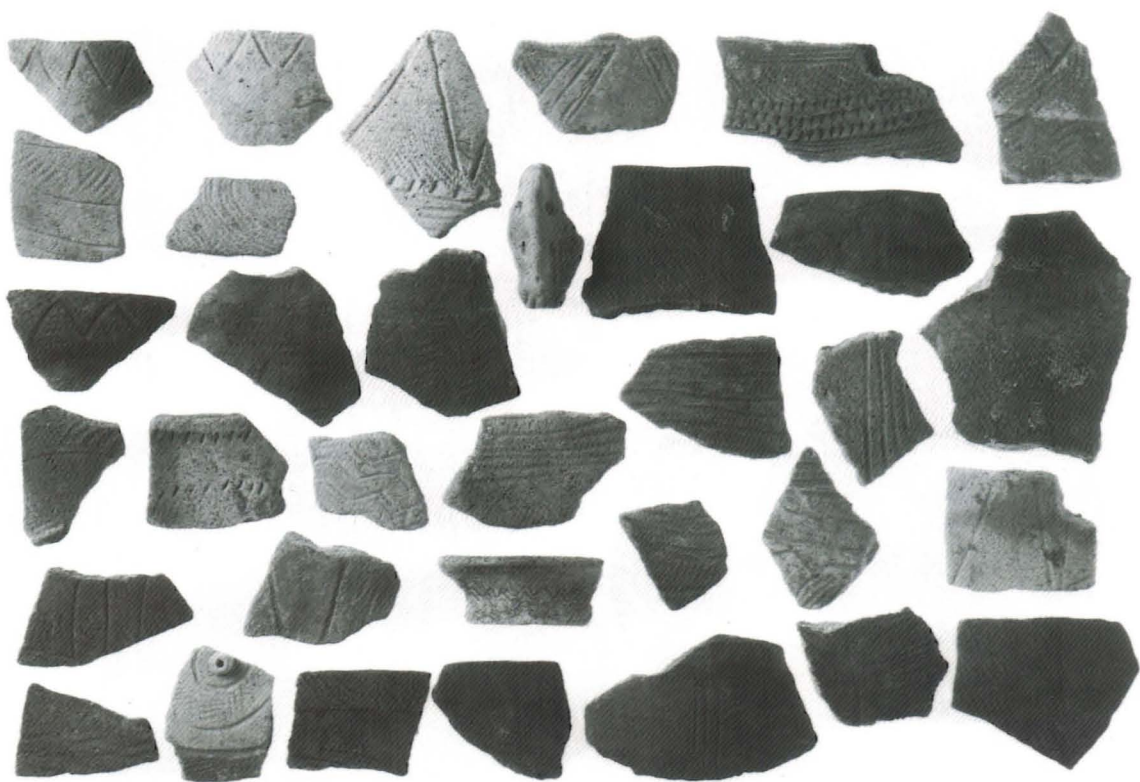
上段堰出土遺物(6)



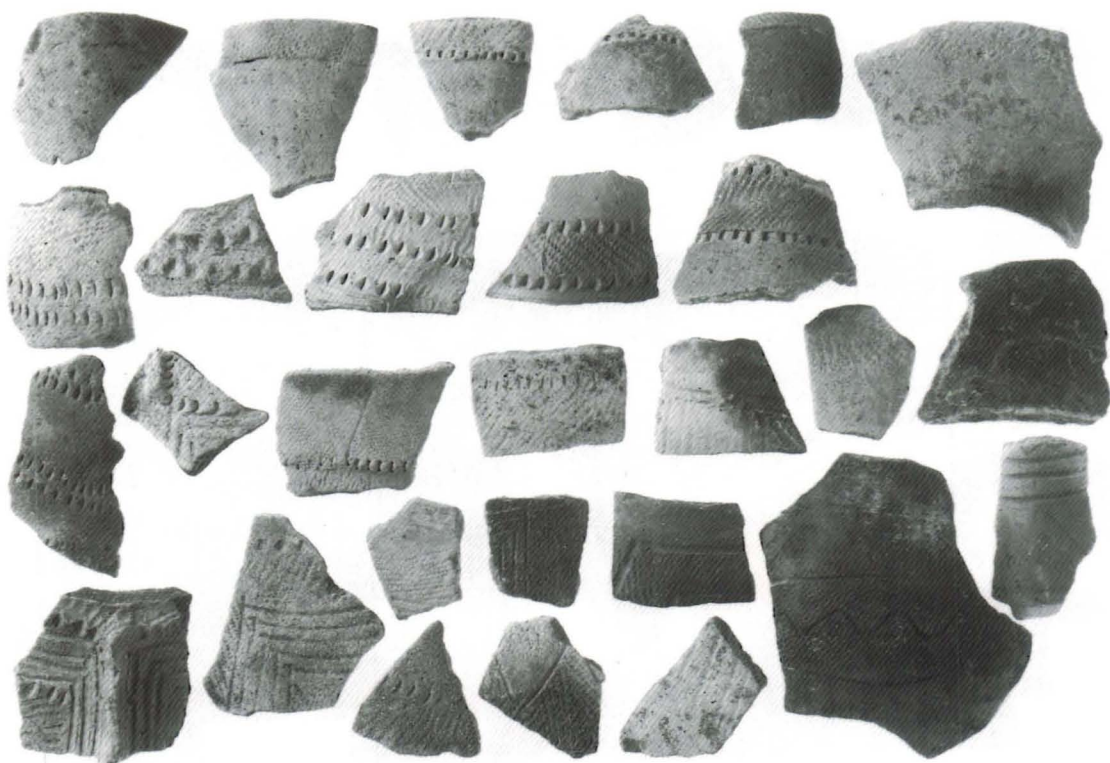
上段堰出土遺物(7)



水路・溝出土遺物



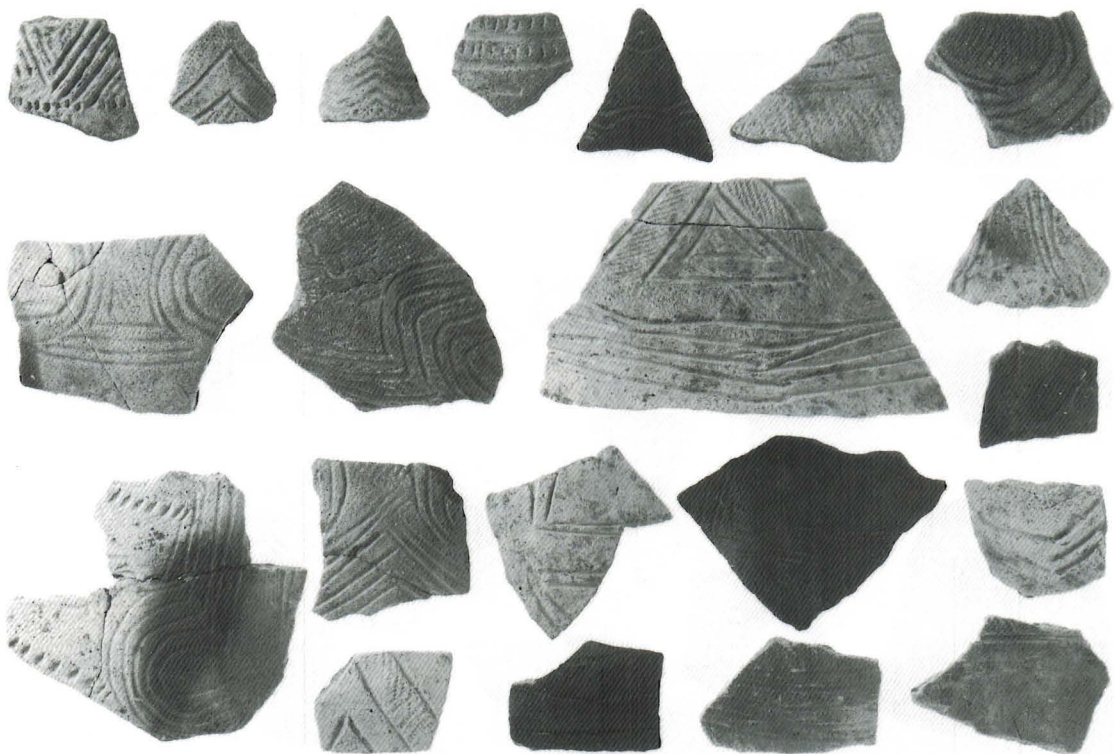
窪地出土遺物



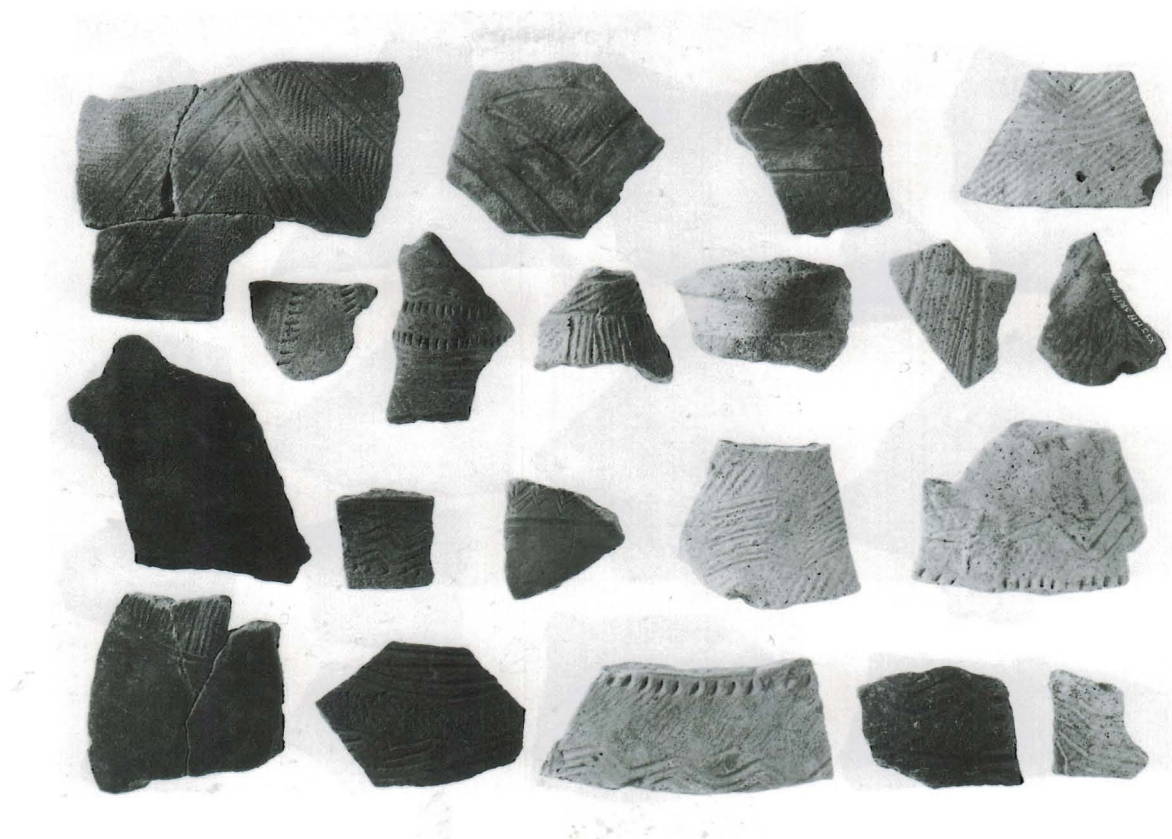
グリッド出土遺物(1)



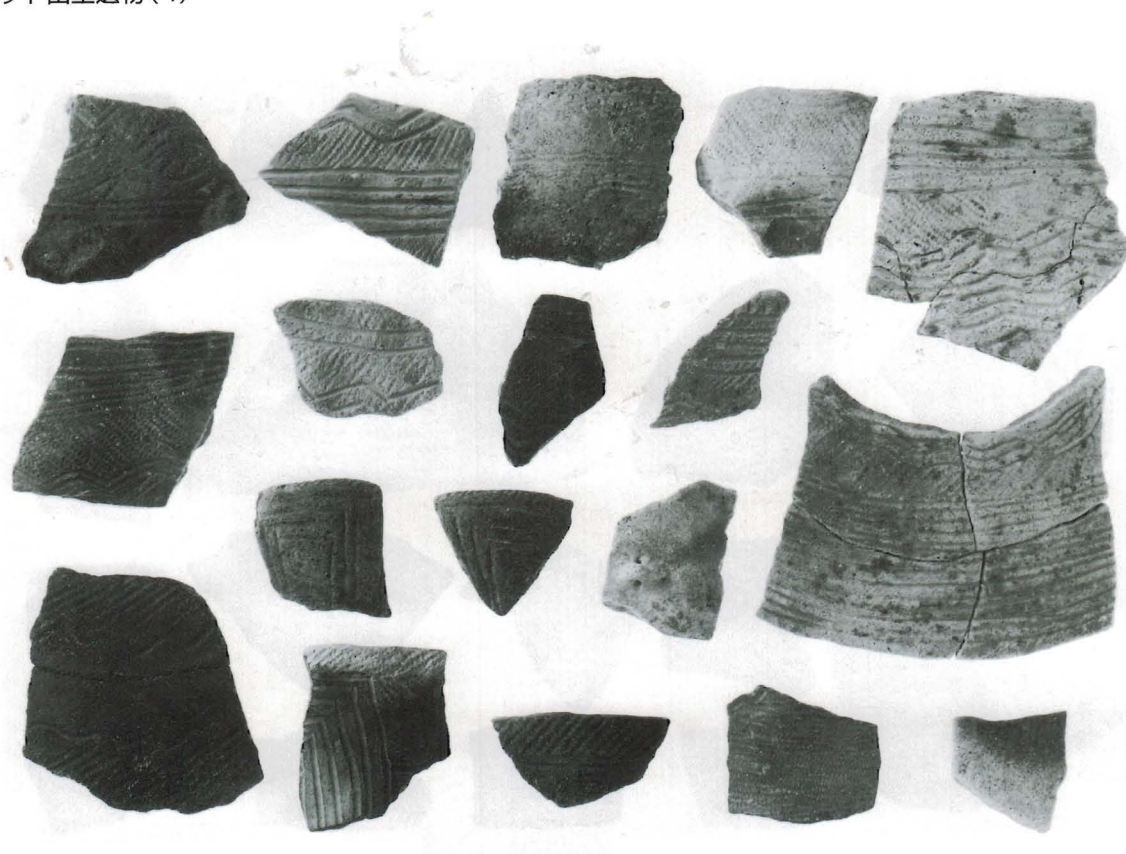
グリッド出土遺物(2)



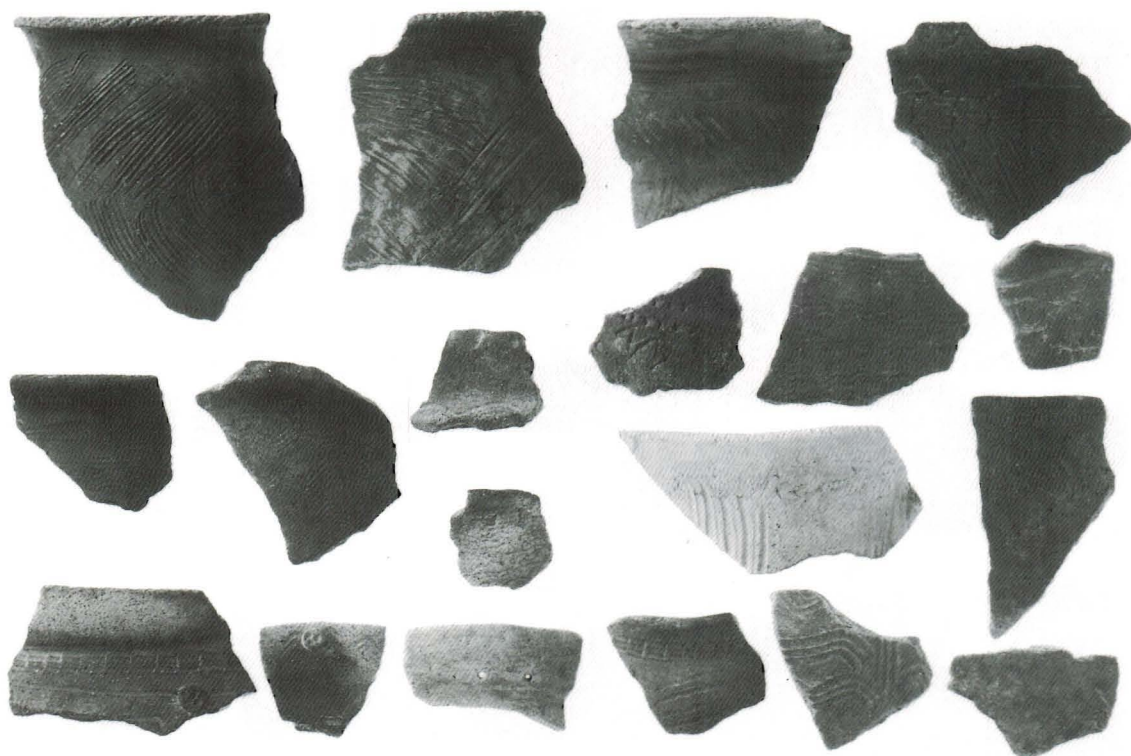
グリッド出土遺物(3)



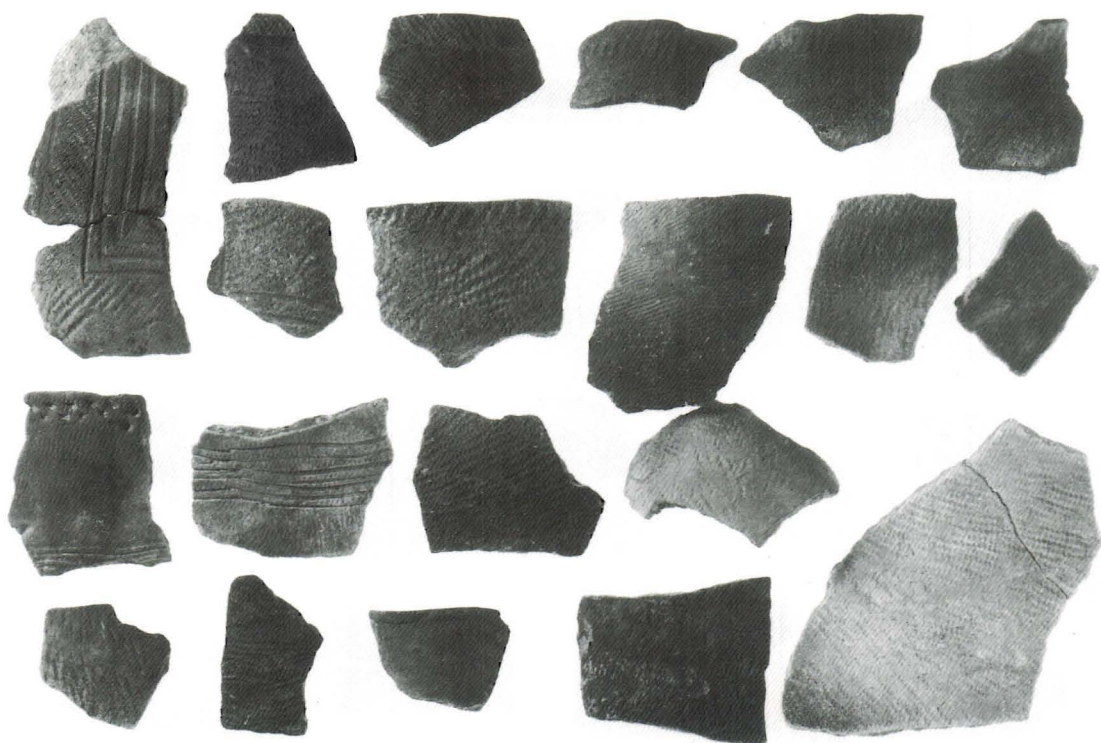
グリッド出土遺物(4)



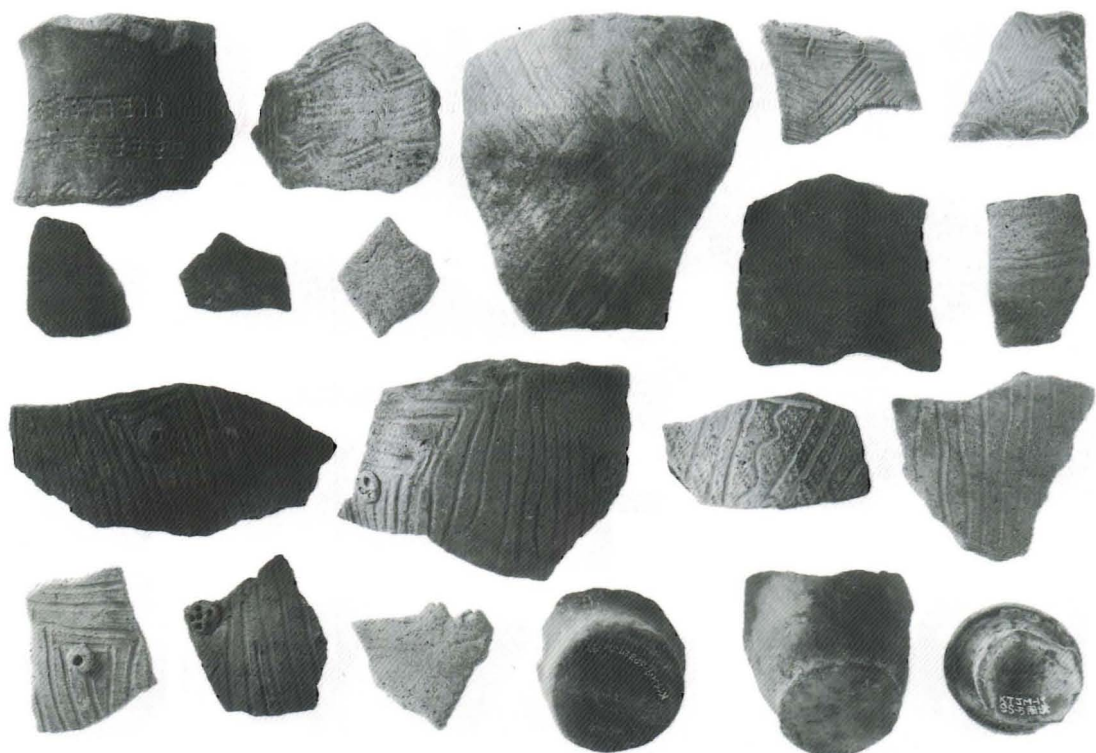
グリッド出土遺物(5)



グリッド出土遺物(6)



グリッド出土遺物(7)



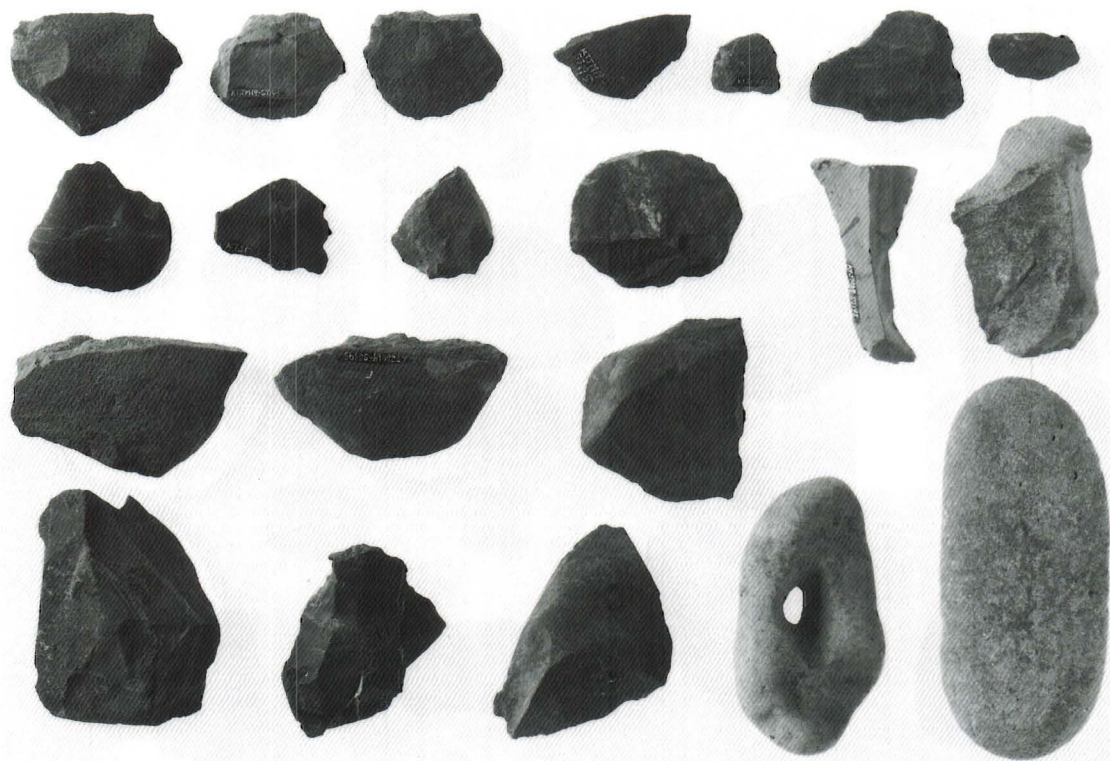
グリッド出土遺物(8)



土製品出土遺物



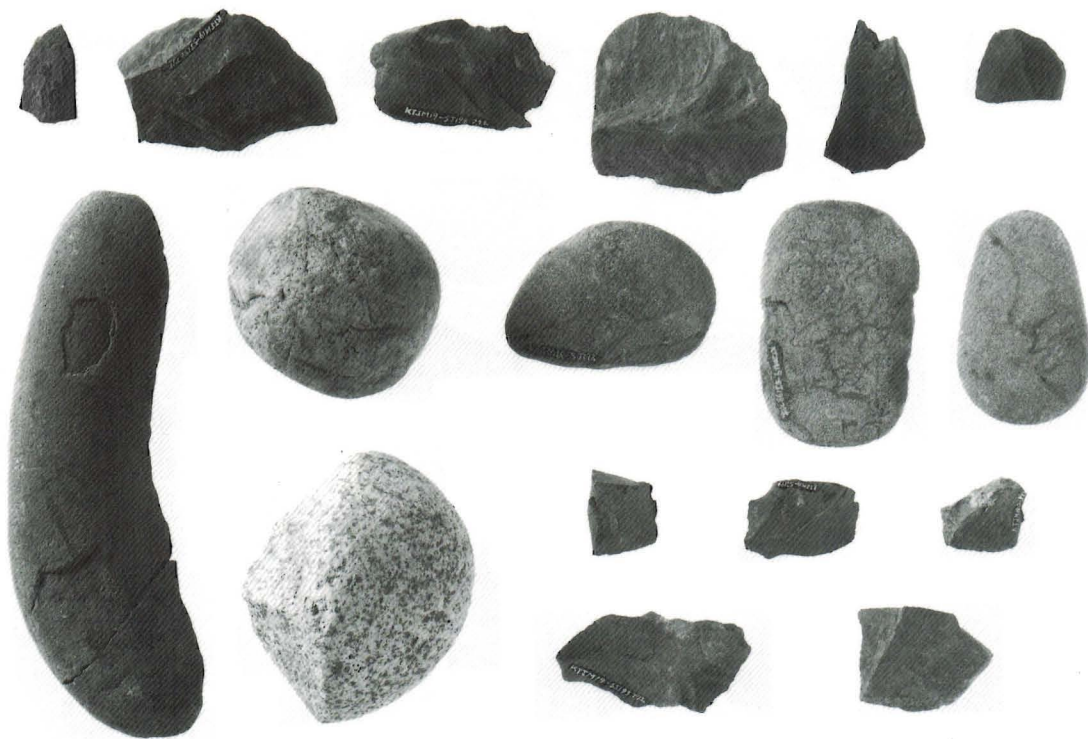
第128·165·173号住居跡出土石器



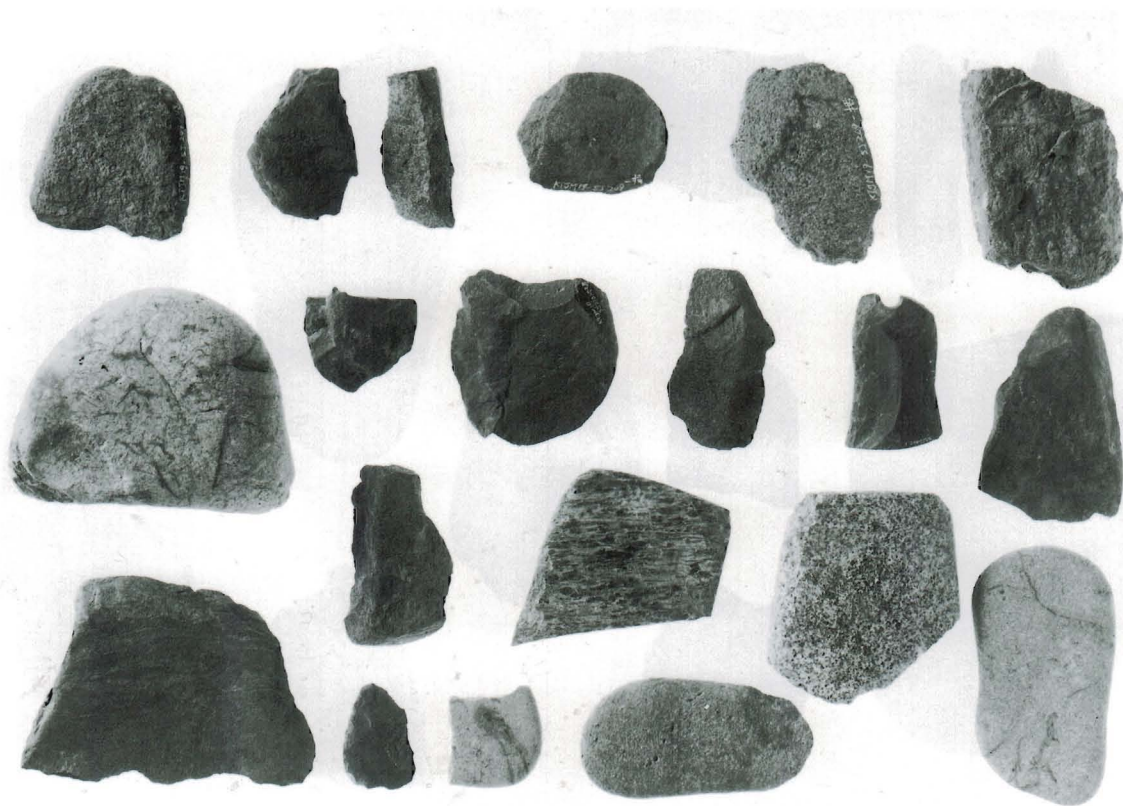
第195号住居跡出土石器



第195号住居跡出土石器



第198・199号住居跡出土石器



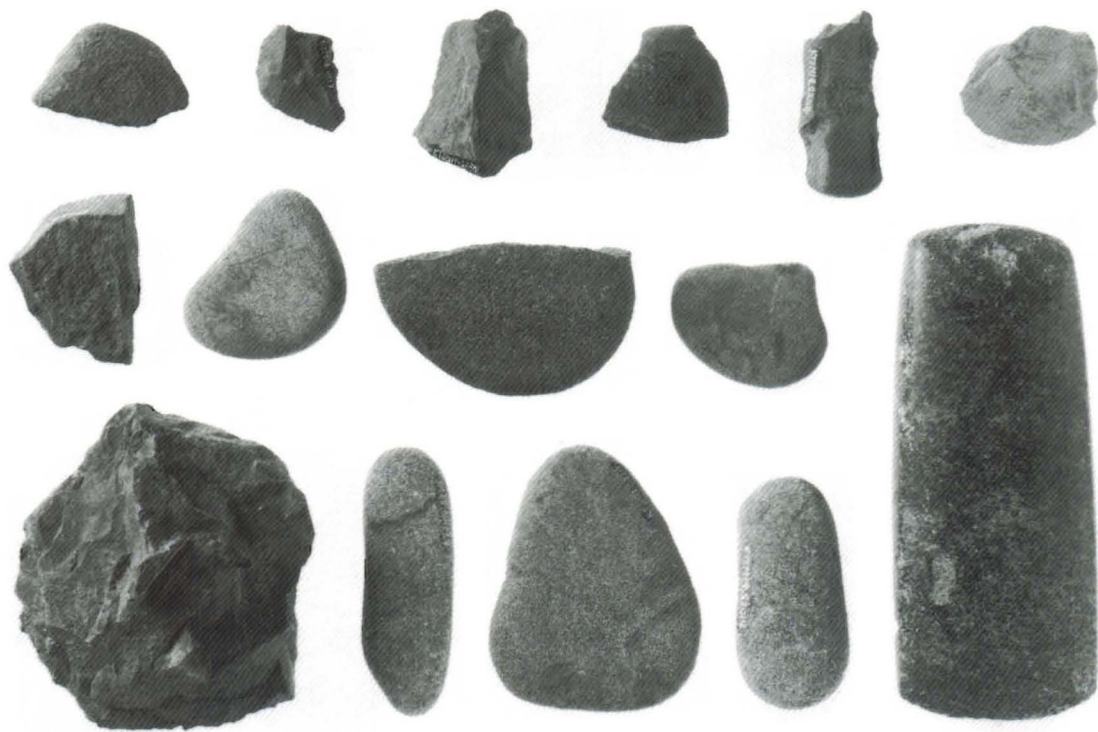
第209・210号住居跡出土石器



第210号住居跡出土石器



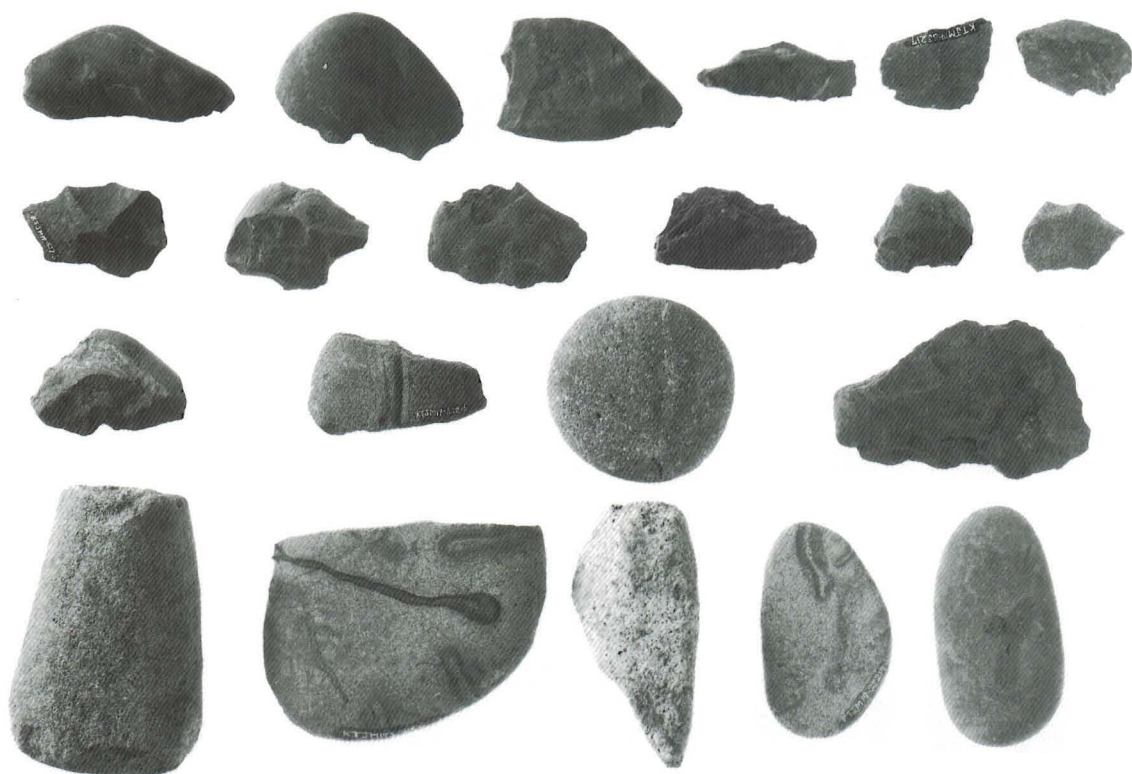
第210号住居跡出土石器



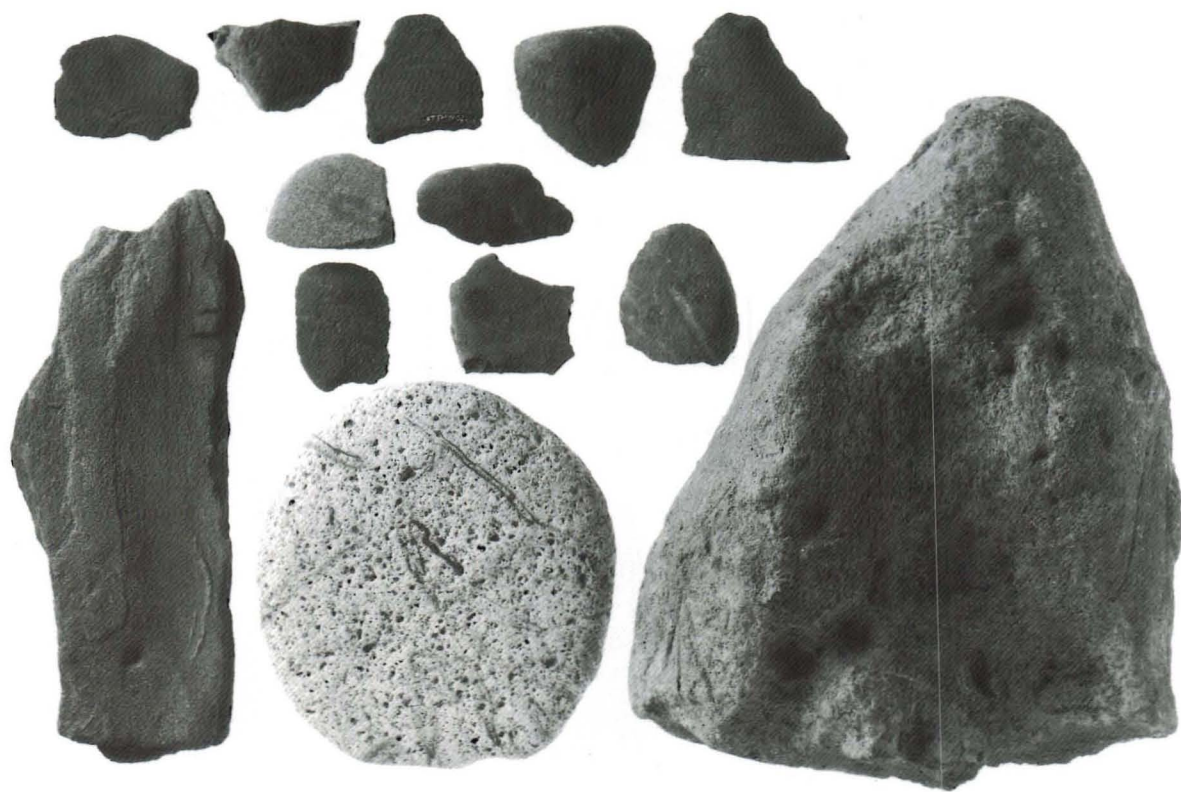
第214号住居跡出土石器



第215号住居跡出土石器



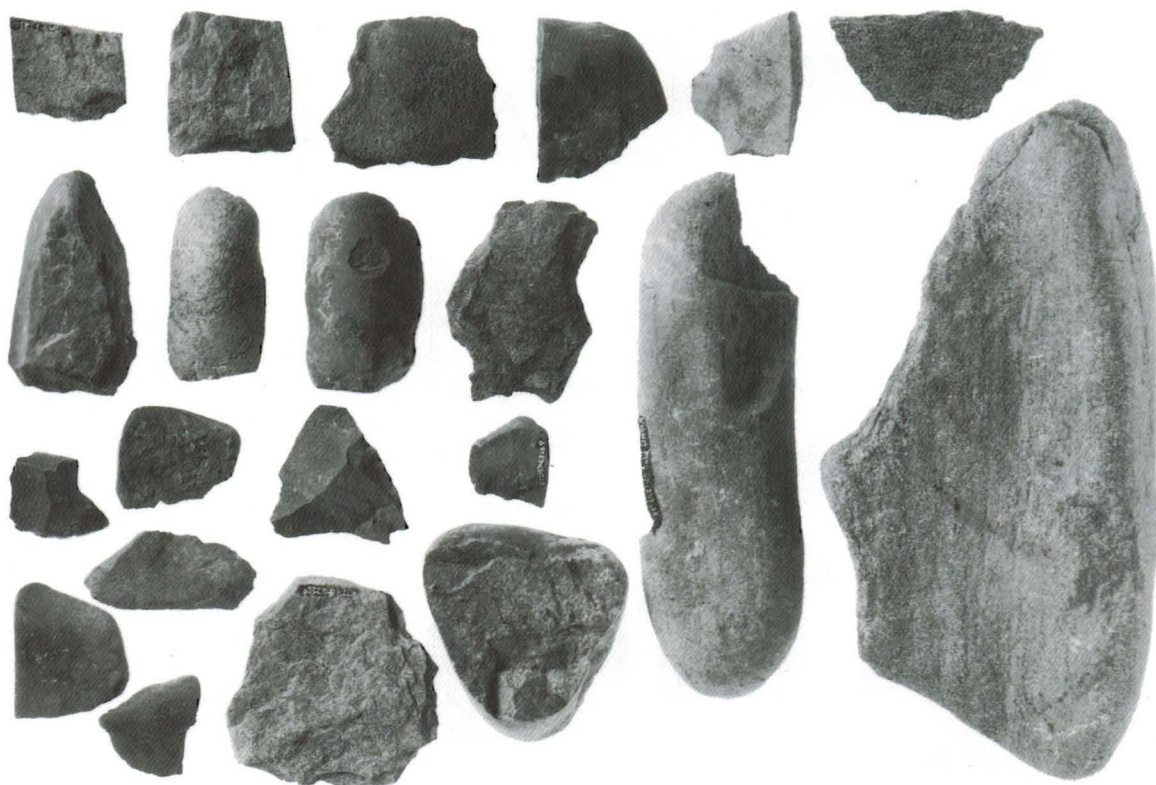
第216・217号住居跡出土石器



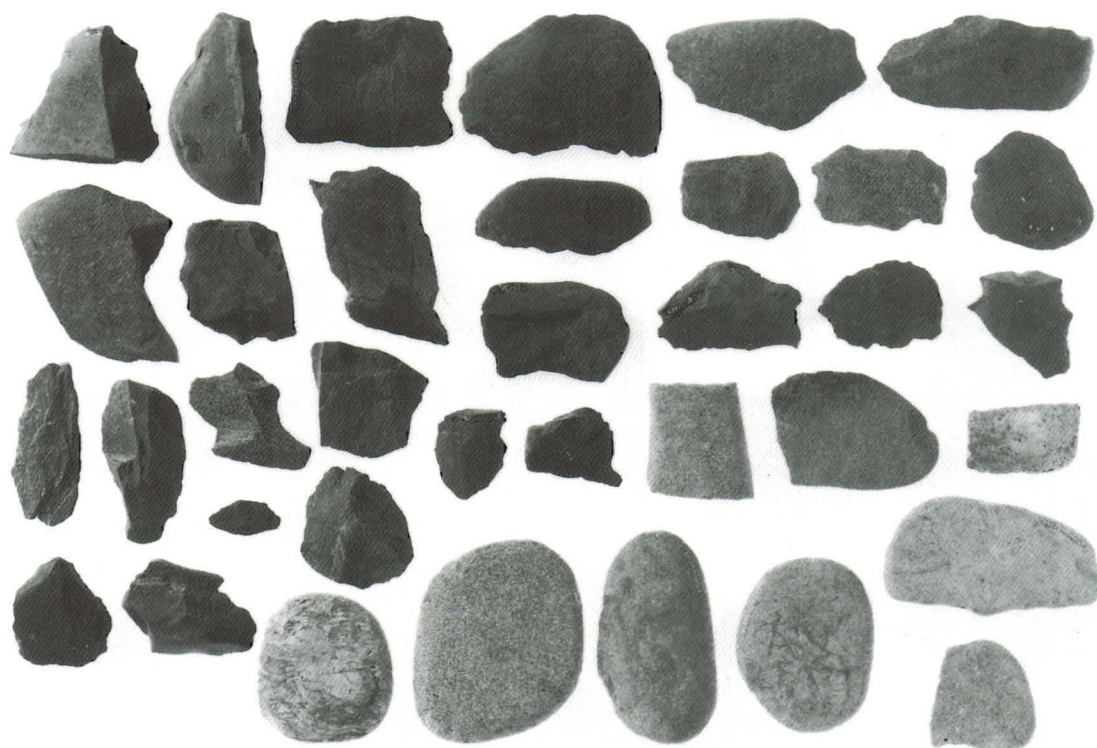
第228号住居跡出土石器



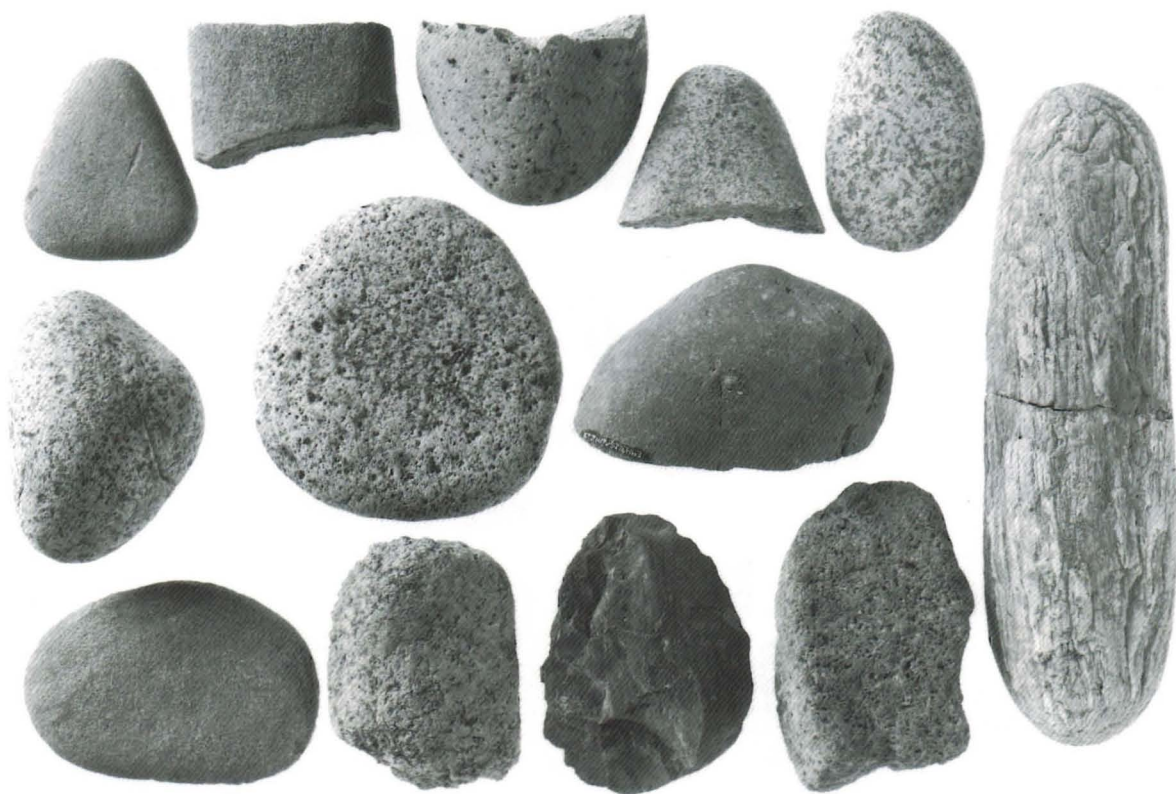
第229・231・234号住居跡出土石器



第259号住居跡出土石器



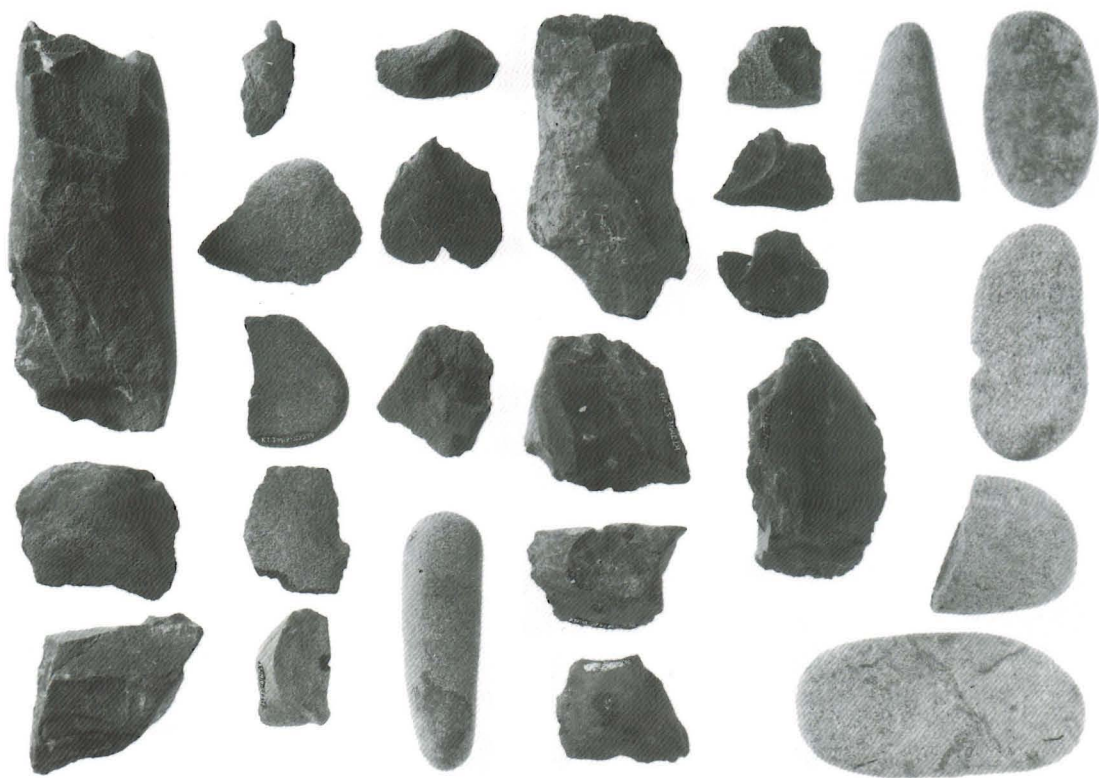
第264号住居跡出土石器



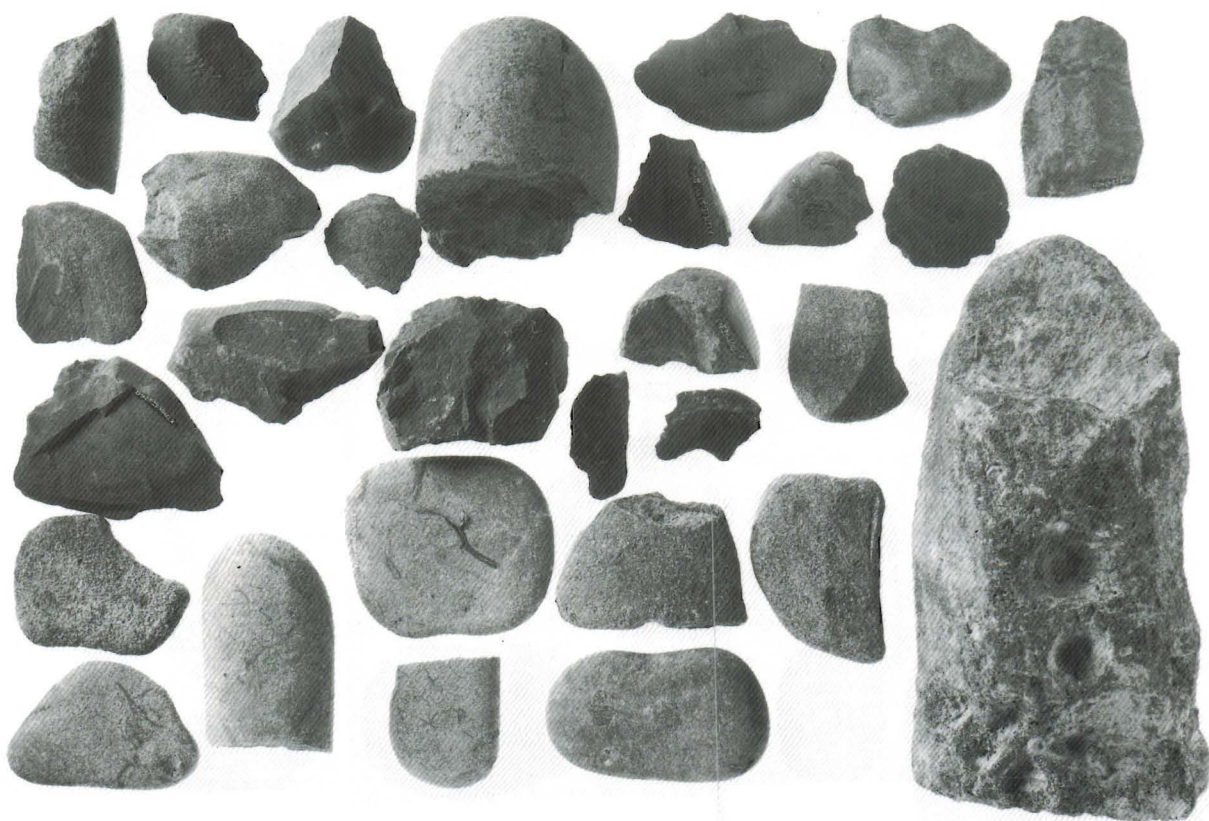
第264号住居跡出土石器



第268・269号住居跡出土石器



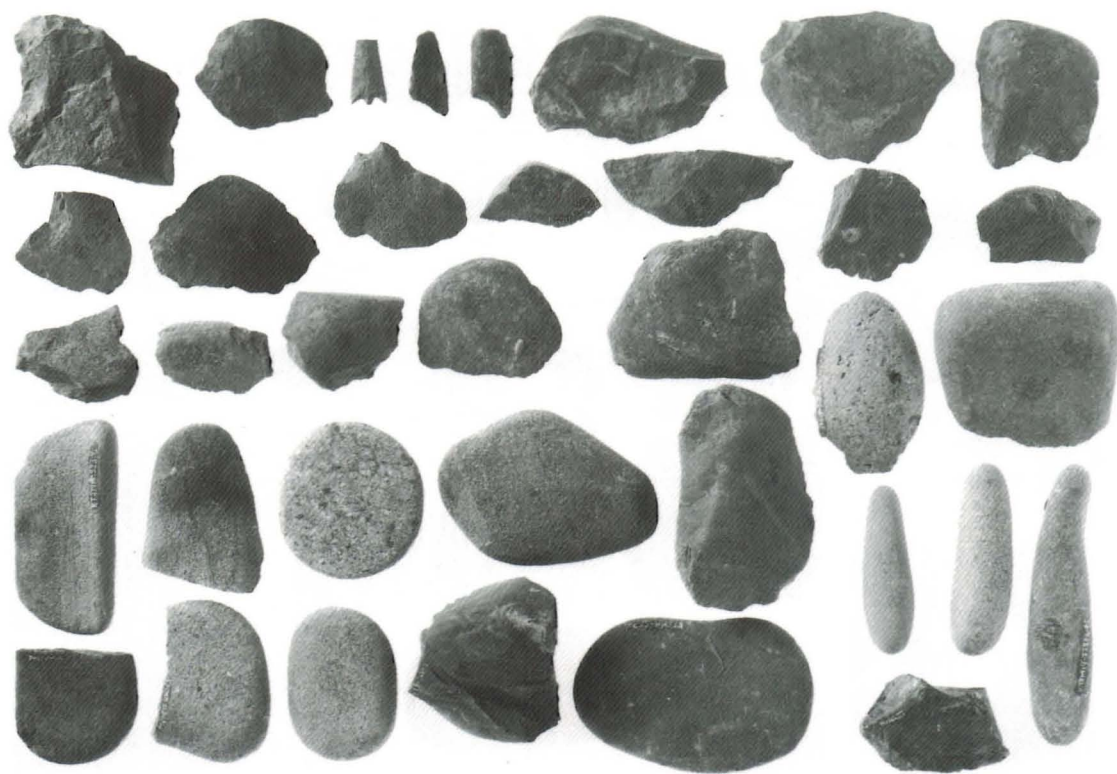
第274·287·293号住居跡出土石器



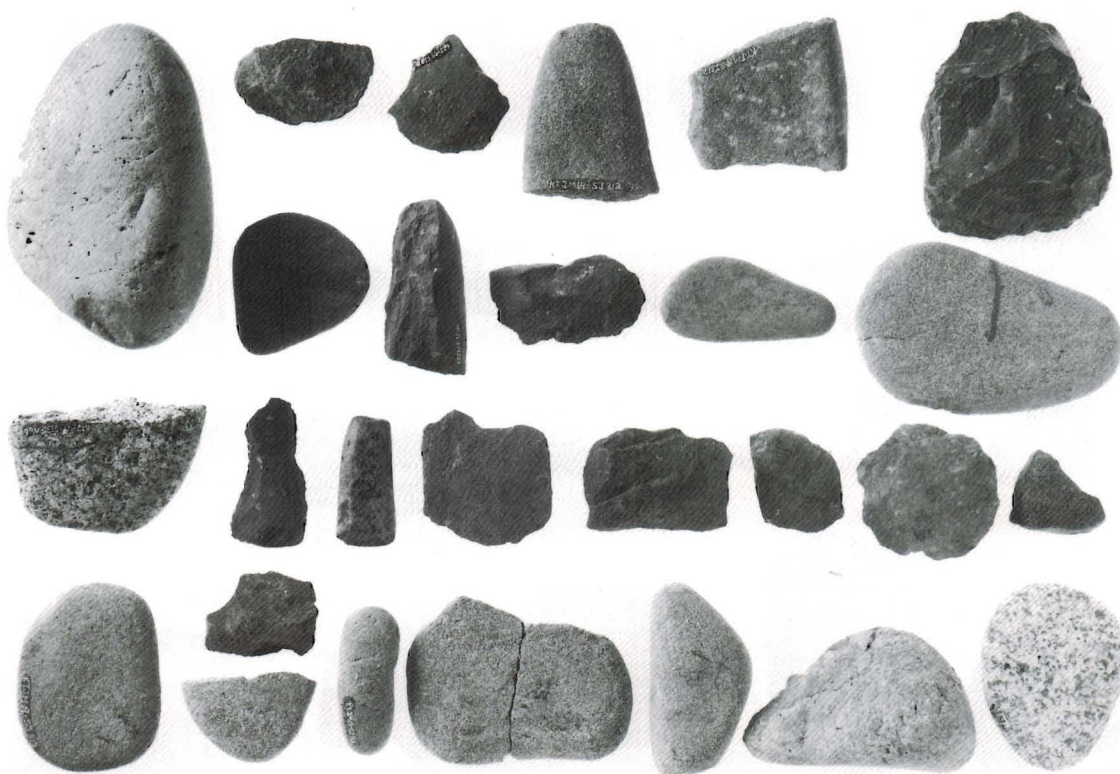
第301·303号住居跡出土石器



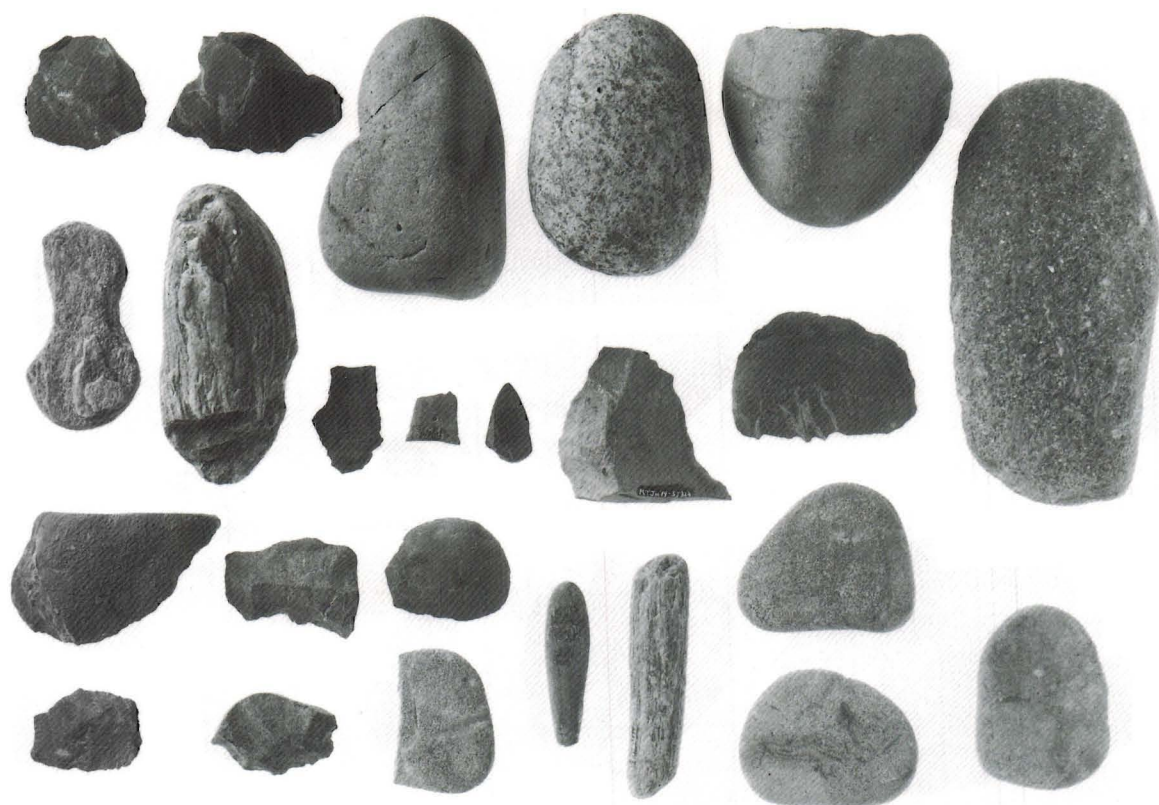
第305号住居跡出土石器



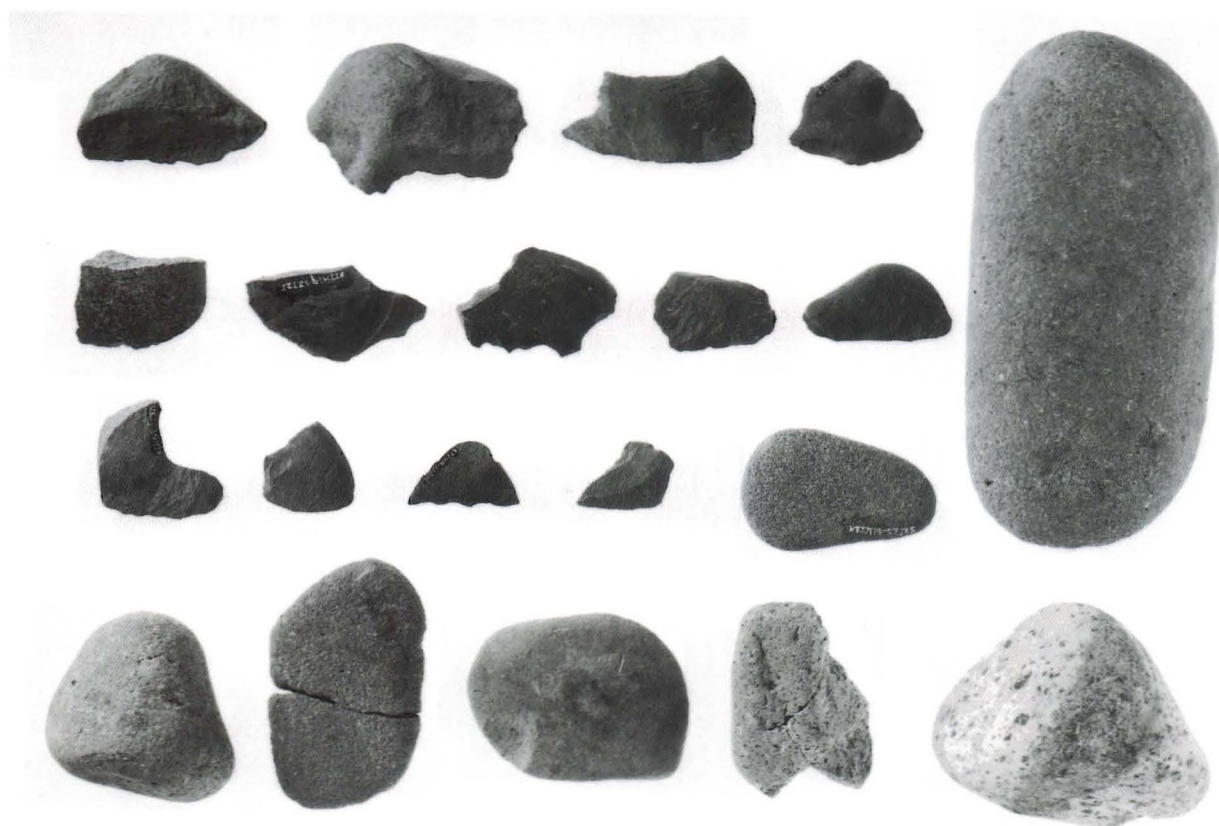
第306号住居跡出土石器



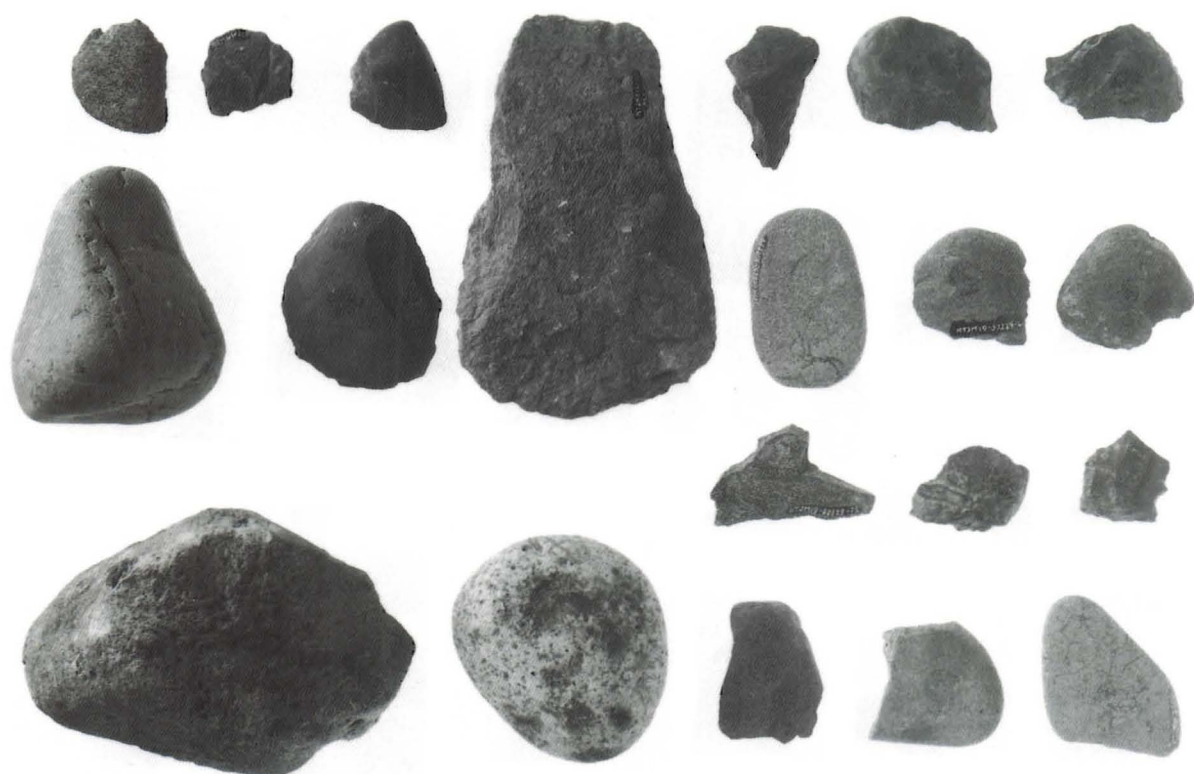
第307·312·316·317·318号住居跡出土石器



第320·323号住居跡出土石器



第324·325号住居跡出土石器



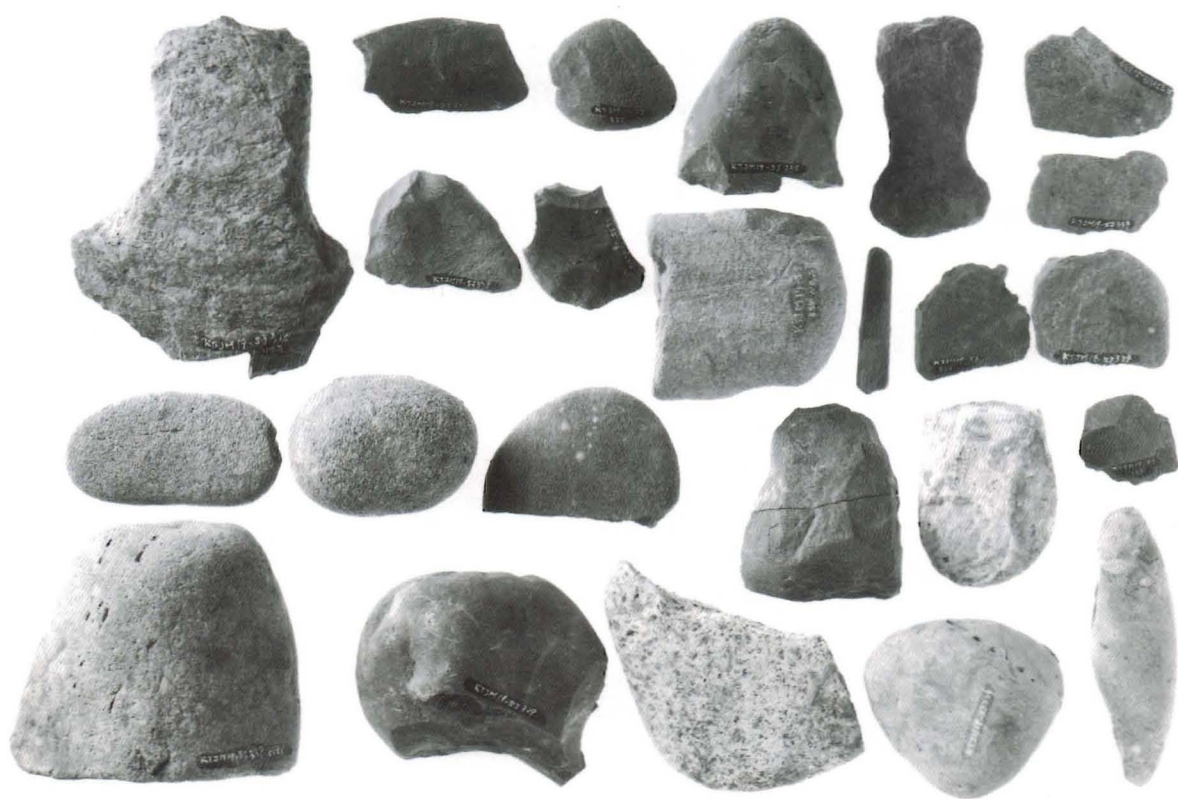
第326·329号住居跡出土石器



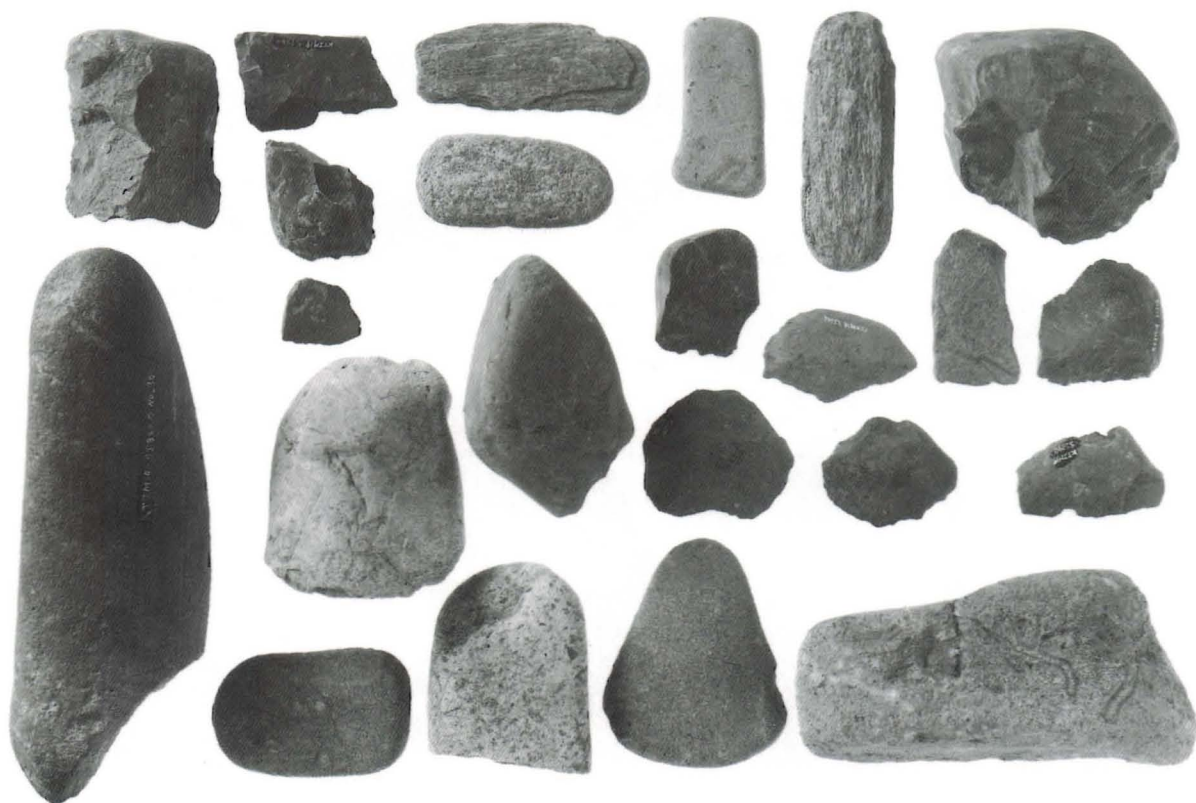
第330·331·333·336号住居跡出土石器



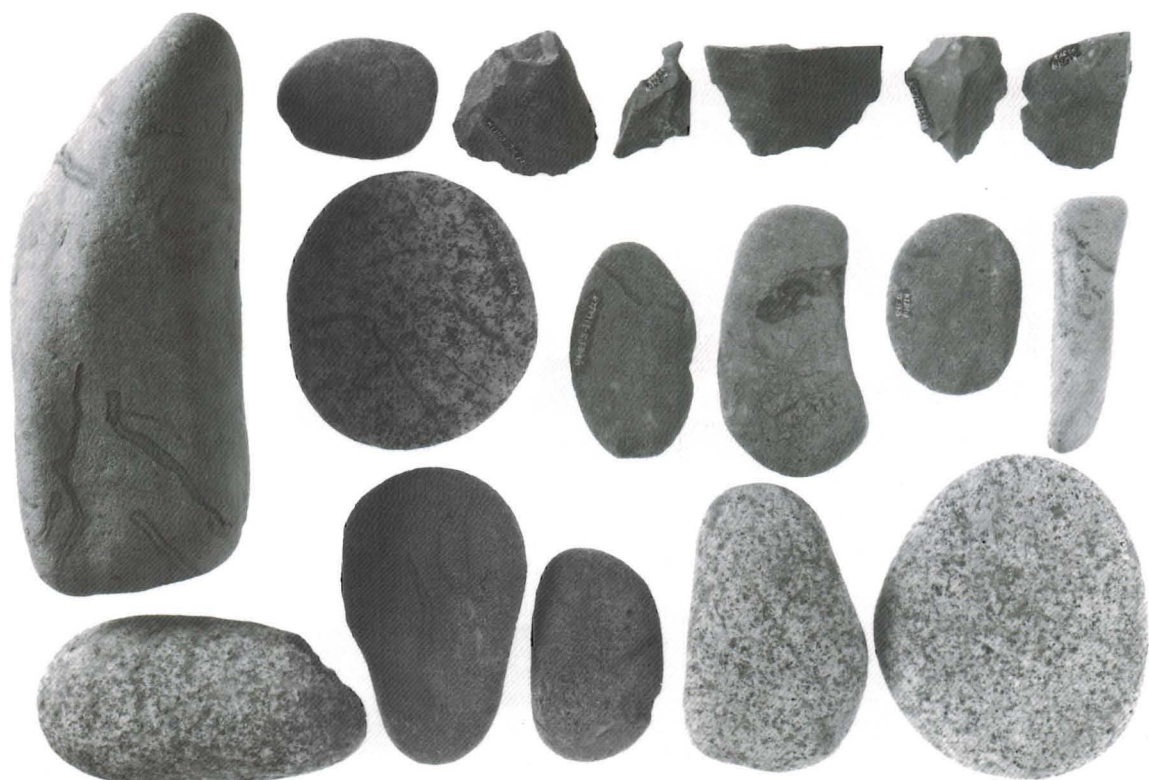
第336·337号住居跡出土石器



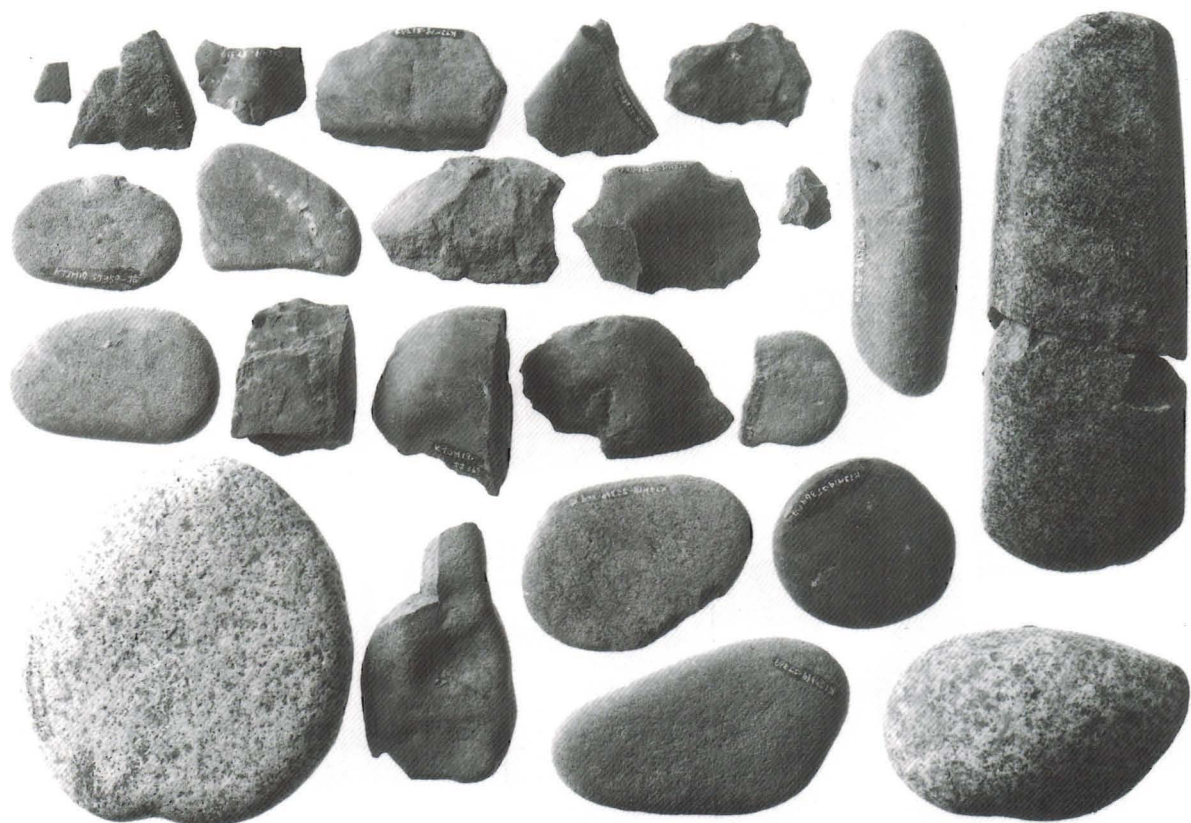
第338·339号住居跡出土石器



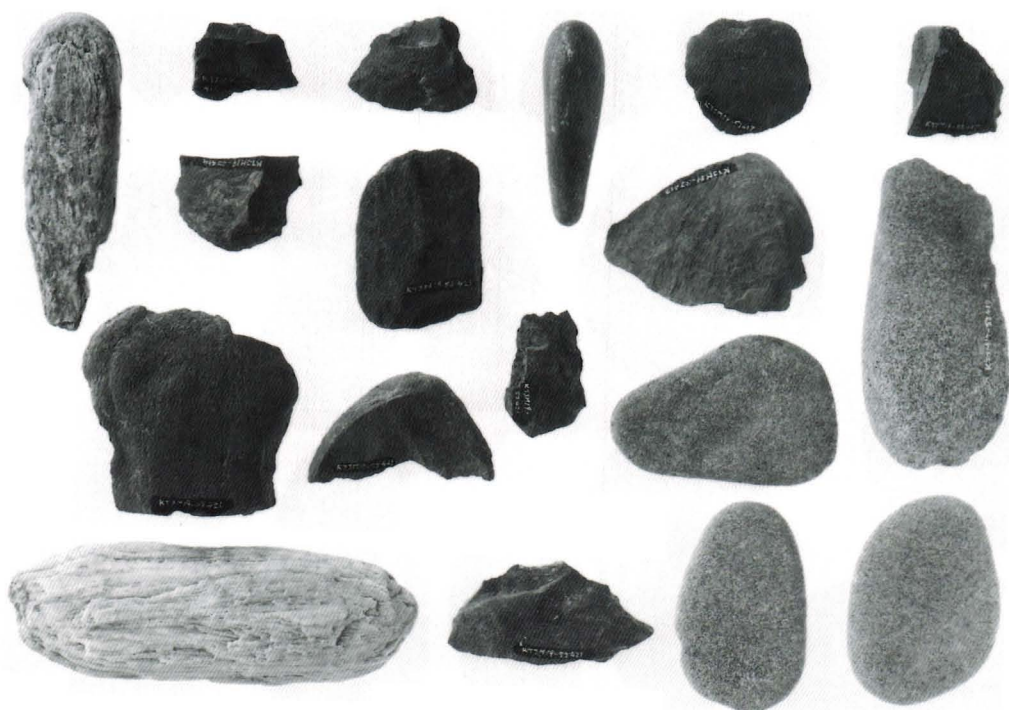
第340·341·342号住居跡出土石器



第342・348号住居跡出土石器



第359・369号住居跡出土石器



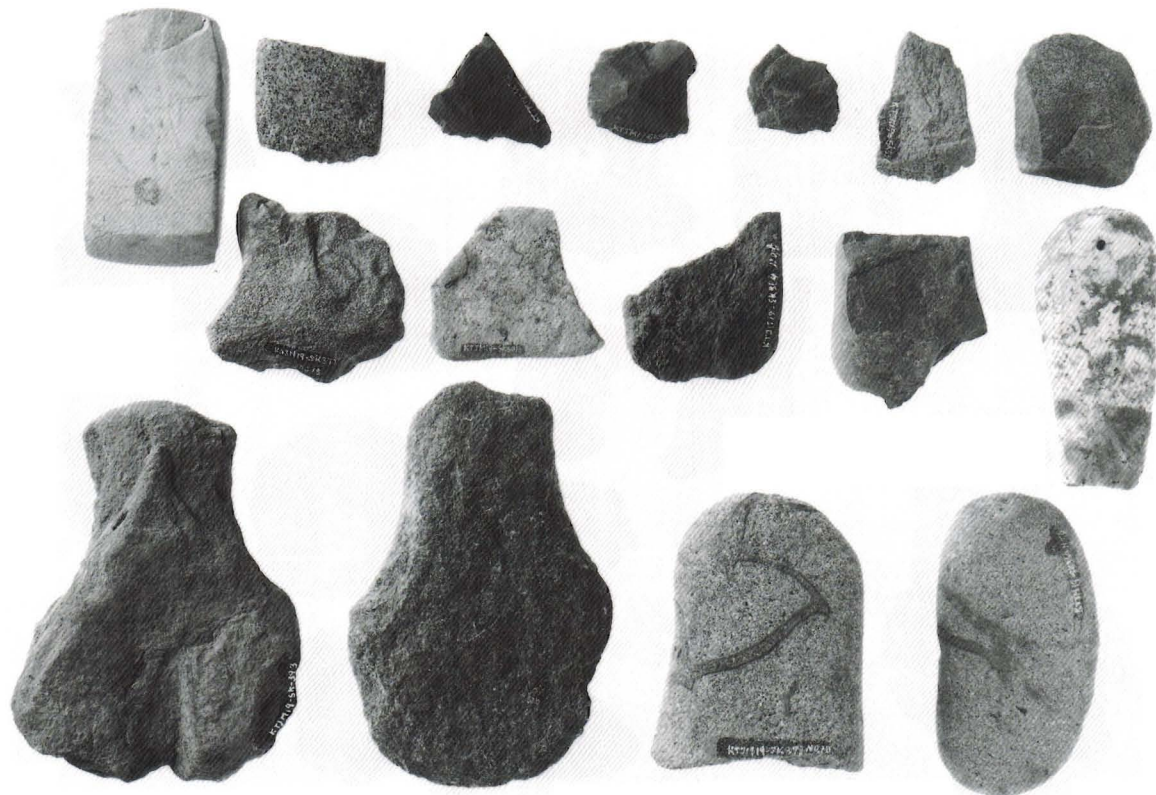
第412・414・417・421号住居跡出土石器



第426・427・428・430号住居跡出土石器



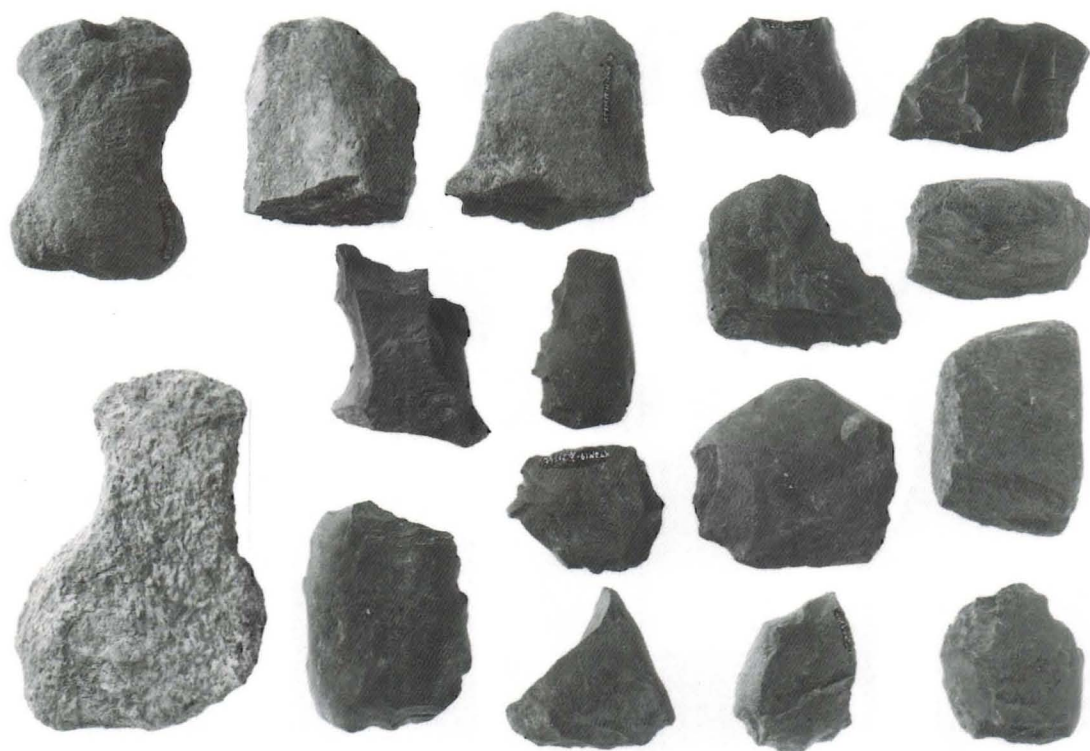
第431号住居跡出土石器



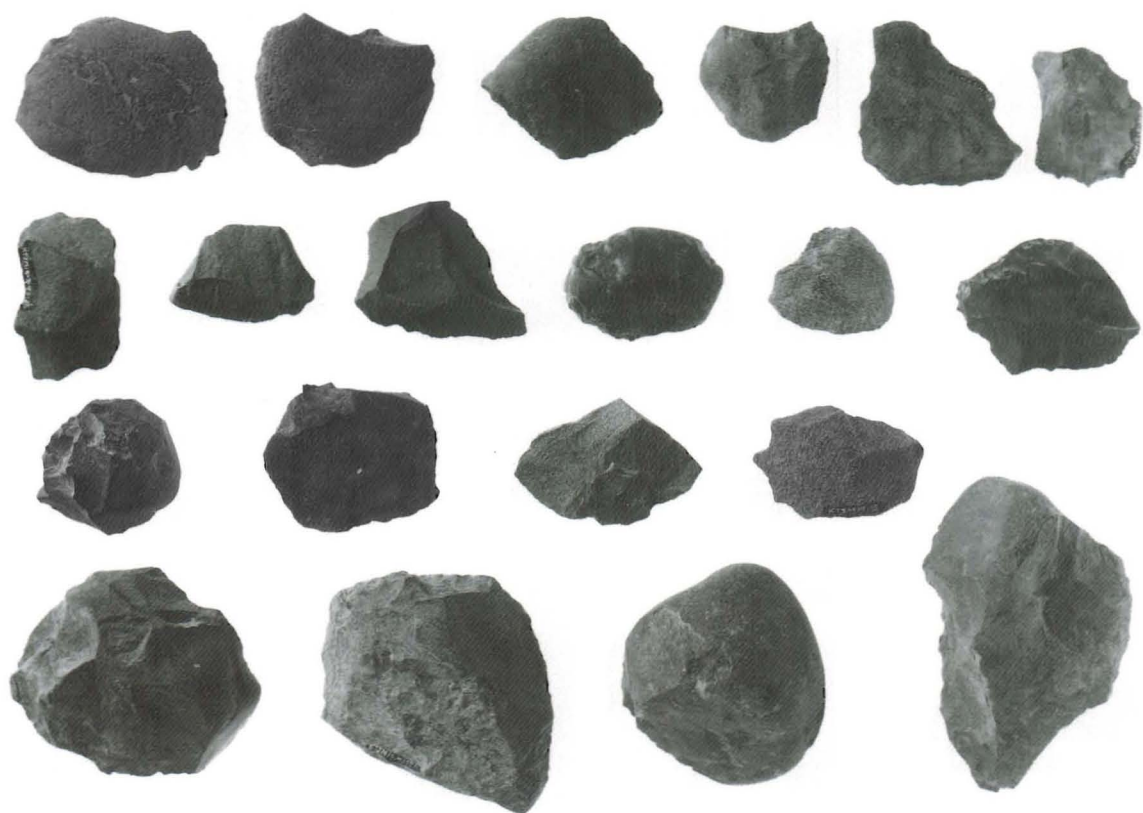
土壙出土石器



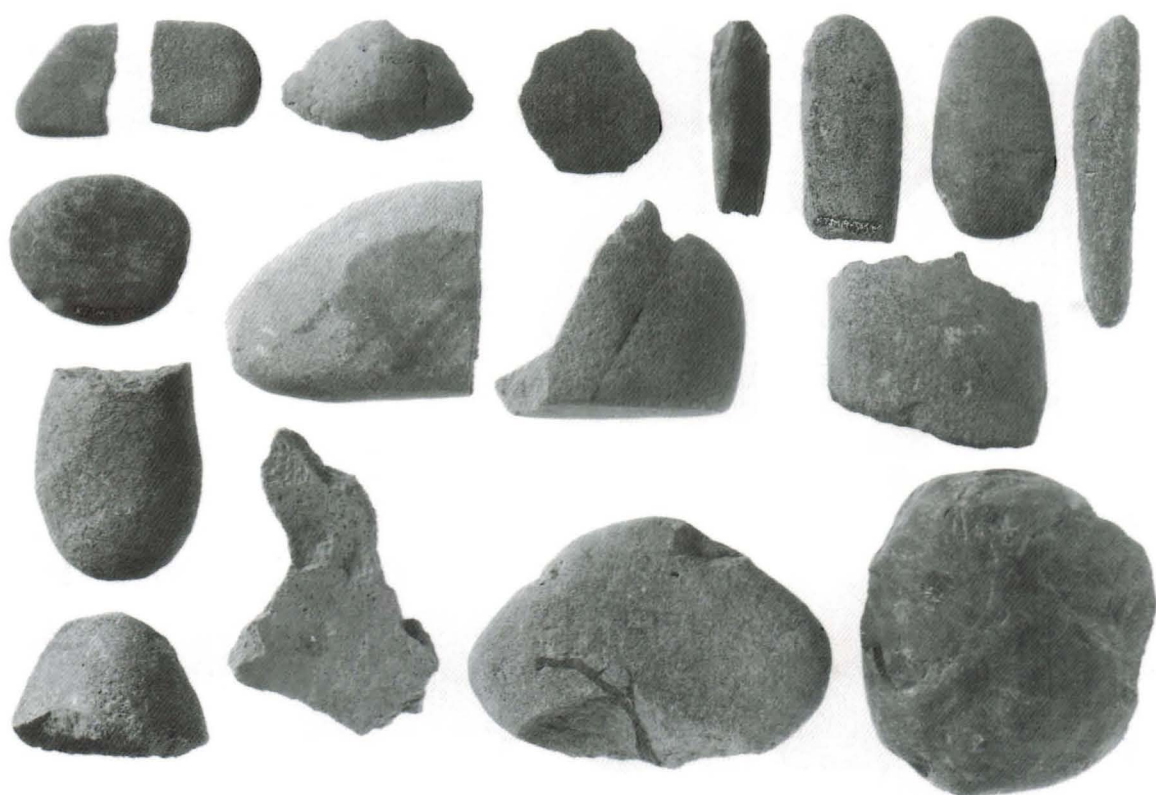
土壙・水路・溝・窪地出土石器



上段壙出土石器(1)



上段堰出土石器 (2)



上段堰出土石器 (3)



上段堰・グリッド出土石器



グリッド出土石器



土壙出土遺物第285図364-6・7

グリッド出土遺物第380図188



土壙出土遺物第285図370-10・368-3

上段壙第327図271



上段堰第327図269(右)



上段堰第327図269(上)



上段堰第327図269(拡大)



上段堰第327図272



上段堰第327図270



第7号溝第370図5



第7号溝第369図4 (拡大)



第7号溝第369図4 (右)



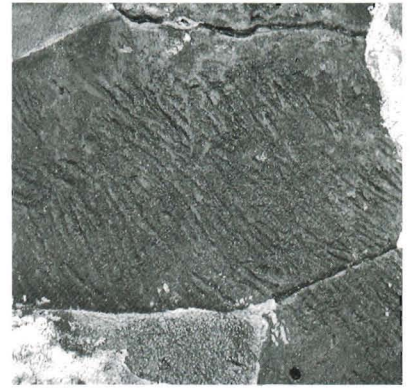
第7号溝第369図4 (左)



第187図6 太さの異なる原体



第200図25 直前段反撚LL{rr}



第315図40 原体直前段反撚RR{ll}



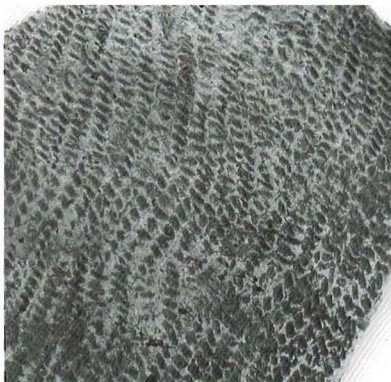
第368図3 原体無節L



第51図3 原体附加条2種RL×L



第68図8 原体無節多条L{rrr}



第68図10 原付前々段多条LR{lll}



第169図28 原体撚糸R



第19図6 原体複節LRI



第128図4 擬縄文



第318図142 原体RL単節



第157図1 擬縄文



第201図27 櫛描文



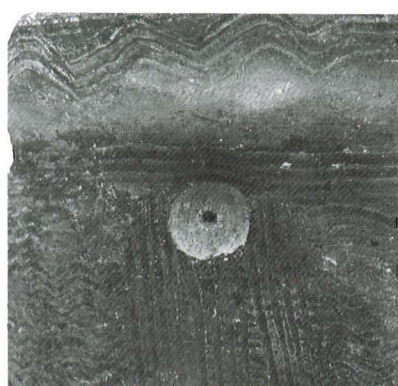
第265図2 櫛描文



第315図43 櫛描文



第377図106 櫛描文



第315図42 櫛描文



第86図1 櫛描文



第378図153 縦羽状文



第378図154 横羽状文



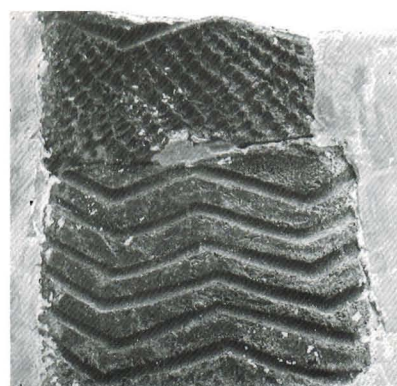
第378図151 斜行文



第374図12 斜格子文



第179図4 多条沈線



第314図28 山形風波状文



第280図30-1 コンパス文



第61図5 鳥足形文



第205図9 貼付文



第313図21 押引き列点文



第255図1 口縁部突起



第64図2 口縁部刻み目



第97図21 交互指頭押捺



第145図8 帯縄文



第212図7 木口状工具



第179図3 ハケ調整



第373図6 列点文



第246図14 短線文



第179図5 口縁部刺突列



第374図17 異系統土器



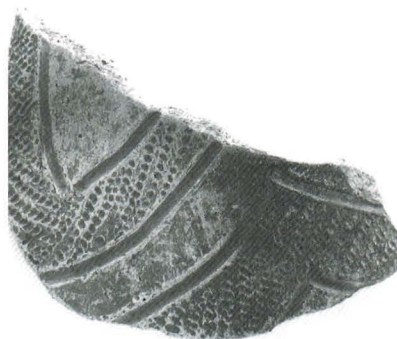
第378図127 異系統土器



第318図147 異系統土器



第319図152 異系統土器



第319図158 異系統土器



第320図193 異系統土器



第61図2 異系統土器



第64図14 異系統土器



第82図29 異系統土器



第86図19 異系統土器



第118図5 異系統土器



第168図21 異系統土器



第169図25 異系統土器



第257図3 異系統土器



第267図17 異系統土器



第280図30-2 異系統土器



第147図2 異系統土器



第319図169 異系統土器



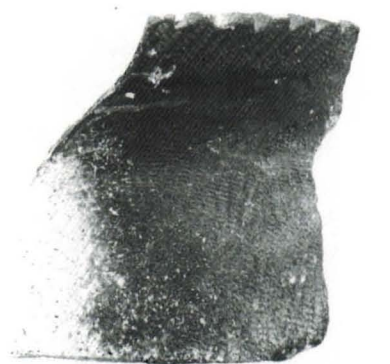
第201図36 異系統土器



第169図23 異系統土器



第377図118 異系統土器



第196図2 異系統土器



第373図8 異系統土器



展開写真第223図6



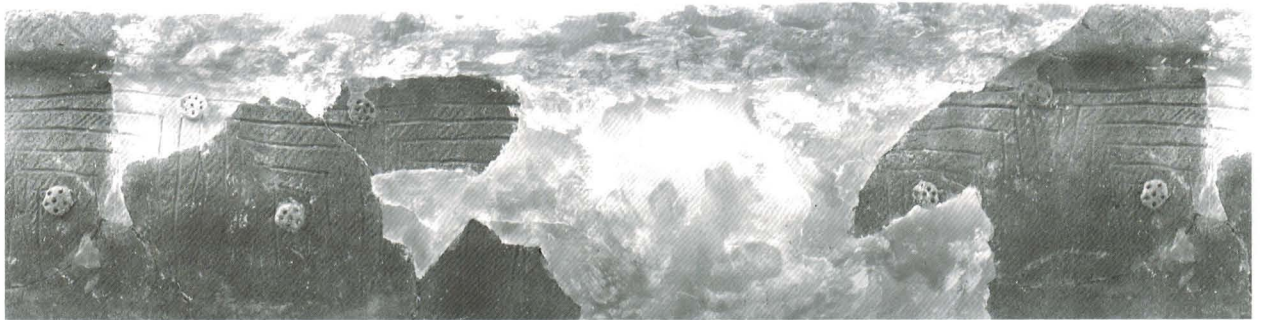
展開写真第51図4



展開写真第294図3



展開写真第187図5



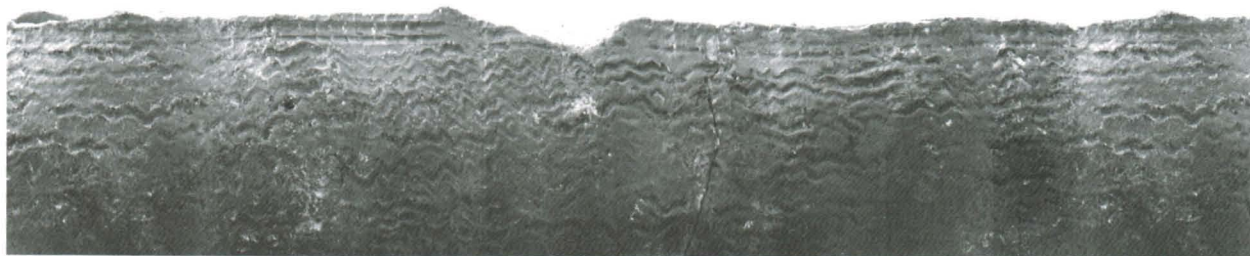
展開写真第72図9



展開写真第179図5



展開写真第311図4



展開写真第315図45



展開写真第267図4



展開写真第187図6



展開写真第291図2



展開写真第265図2



展開写真第172図2



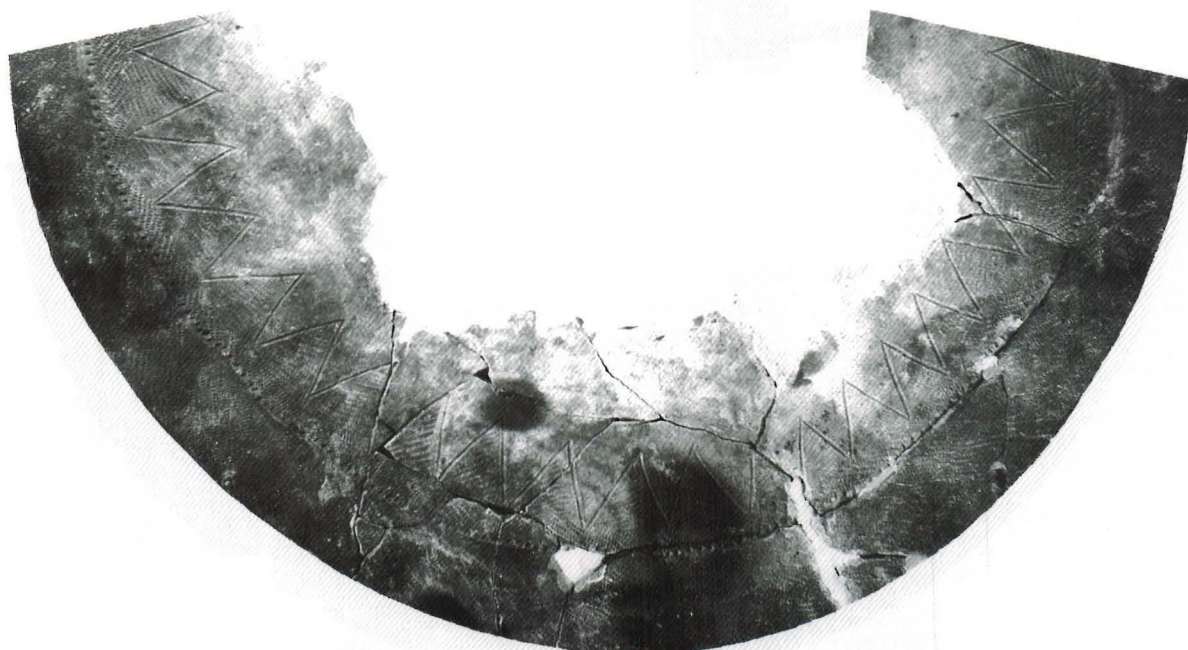
展開写真第61図2



展開写真第33図1



展開写真第150図2



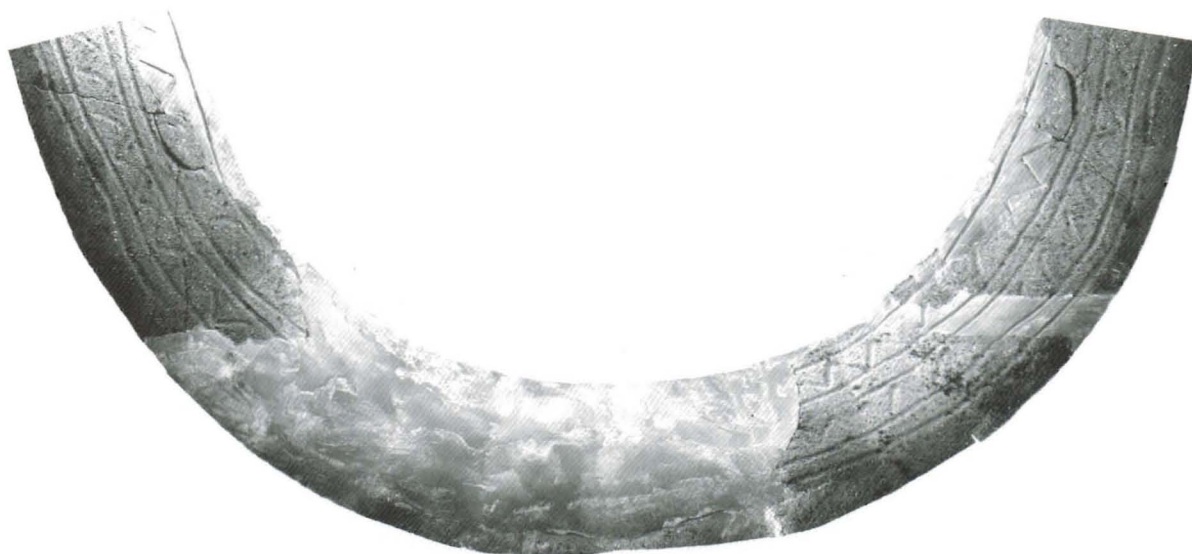
展開写真第222図4



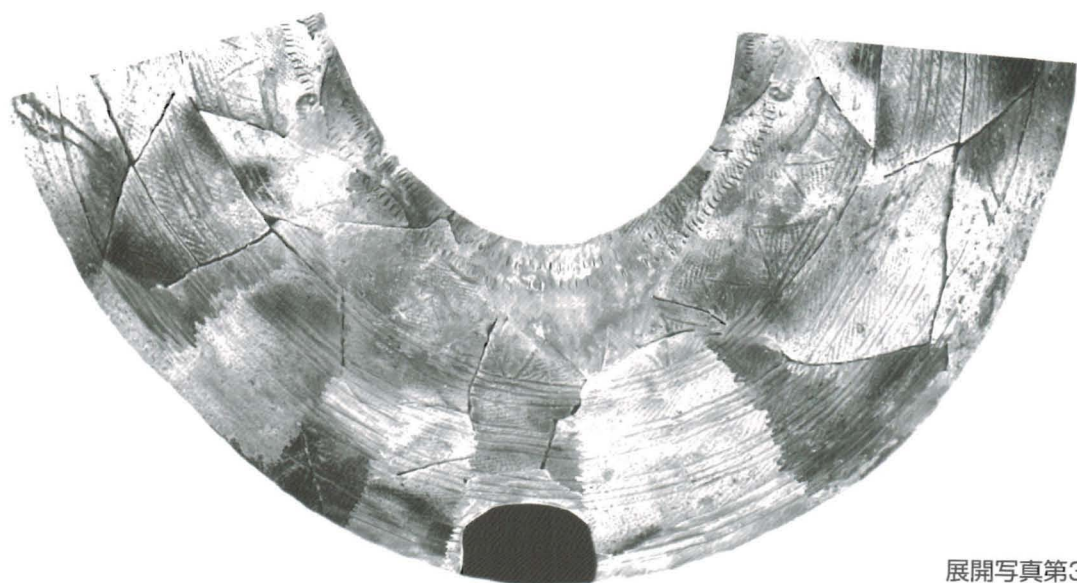
展開写真第313図22



展開写真第172図3



展開写真第150図5



展開写真第306図1



展開写真第312図1



展開写真第199図2

報告書抄録

ふりがな	きたじまいせき							
書名	北島遺跡 VI							
副書名	熊谷スポーツ文化公園建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	II (第2分冊)							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第286集							
編著者名	吉田 稔							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里町大字船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2003(平成15)年3月24日							
しょうしゅういせき 所収遺跡	しょうざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
きたじまいせき 北島遺跡	さいたまけんくまがやし 埼玉県熊谷市 おおあさかみかわかみ 大字上川上 てんじんもりかみ 天神森上317 ばんちほか 番地61他	11202	168	36° 09' 31"	139° 24' 39"	19990408~ 20000324 20000408~ 20001228	10,000	屋内競技場 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
北島遺跡第 19地点	集落跡	弥生時代中期	竪穴住居跡	78軒	弥生式土器	関東地方有数の水利施設・ 水田遺構を伴う集落跡。 屋内土器棺墓を検出。		
			掘立柱建物跡	1棟	土製品			
			土壇	79基	石器			
			溝跡	6条	石製品			
			水路	1条	木製品			
			堰跡	1箇所	骨類			
			河川跡					

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第286集

熊谷市

北島遺跡Ⅵ

(第19地点)

熊谷スポーツ文化公園建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

—Ⅱ—

〈第2分冊〉

平成15年3月1日 印刷

平成15年3月24日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県大里郡大里町船木台4丁目4番地1

電話 0493(39)3955

印刷／株式会社 太陽美術



付図 北島遺跡第19地点全体図